



TITLE:

京都大学卒業者の意識調査 : 京都大学で受けた教育の評価と人生観

AUTHOR(S):

梶田, 勲一; 溝上, 慎一; 浅田, 匡

CITATION:

梶田, 勲一 ...[et al]. 京都大学卒業者の意識調査 : 京都大学で受けた教育の評価と人生観. 京都大学高等教育叢書 1997, 1: 1-272

ISSUE DATE:

1997-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53617>

RIGHT:

京都大学高等教育叢書 1

京都大学卒業者の意識調査

— 京都大学で受けた教育の評価と人生観 —

梶田 叡一 ・ 溝上 慎一 ・ 浅田 匡

平成9年3月

京都大学高等教育教授システム開発センター

はじめに

ここ数年、大学に関する論議が非常に盛んである。しかも、その論議の内容には、極めて現代的な特徴がある。つまり最近の論議は、長い間伝統的に論じられてきた「大学の本質とは何か」といったものではなく、「研究や学問はどうあらねばならないか」といったものでもない。さらにまた、今から25年前の大学紛争期に盛んであったような、「現行の大学制度にはどのような改革が不可欠なのか」といった論議でもない。

最近の論議は、大学における具体的な教育活動についてのものである。もっと言えば、大学生の変質に伴う、また社会の側の大学教育に対する期待の変化に伴う、大学教育のあり方そのものについての論議である。したがって、人目を引く派手さはない。社会の各層の人達が目の色を変えて論議するようなホットなテーマでもない。しかし、現代の大学のあり方に最も直接的に絡み合った、その意味での地道さ着実さを持った、重要な論議であるといってもよい。

大学教育のあり方についての論議とは、例えば、具体的には旧来の教養教育に変わる基礎的な共通教育カリキュラムについての論議であり、新しい時代に求められる専門教育のカリキュラムについての論議である。そして旧来の伝統的な講義・演習・実習といった教育活動のあり方に関する抜本的な改善・改革の提案であり、そうした新しい教育的力量を大学人がどのようにして身につけるかというファカルティ・ディベロップメント（FD）の論議である。

この調査研究は、こうした大学教育の改善・改革に関する論議に資するために実施されたものである。本報告書では、京都大学の卒業者に対して、大学在学中に受けた教育に関する感想や意見を求め、合わせて現在の人生観について尋ねた質問紙調査の結果の概要が整理し、考察されている。

対象者は、文学部、法学部、医学部、工学部を、2年前卒業（93年度／94年3月卒）、12年前卒業（83年度／84年3月卒）、22年前卒業（73年度／74年3月卒）、32年前卒業（63年度／64年3月卒）、42年前卒業（53年度／54年3月卒）の方々である。32年前卒業の「60年安保」世代、22年前卒業の「大学紛争」世代を挟んで、その前後の新制大学スタート段階の卒業生から、最近の大学教育大衆化によって「新新制大学」という言い方がなされる段階の卒業者までがここには含まれる。1996年5月に、総計3800人の方に質問紙が郵送され、約40%の方から回答が得られた。

興味深い結果の一部を挙げてみると、工学部の場合、卒業年次が下がっていくにしたがってコンスタントに在学中の教育全体への満足度も専門教育への満足度も落ちていく（42年前卒業者の90%近くが4年間の教育に満足している状態から2年前卒業者では26%強のみが満足）のに対し、文学部の場合は旧制大学的色彩の色濃い42年前の卒業者の満足度が特別に高いのは別として、その後は卒業年次に関わり無く半数以上が在学中の教育全体にも専門課程での教育にも満足感を持っている。工学部が年を追って学生数を増大させ肥大化してきたという歴史を持つのにに対し、文学部は学生数にも教育のあり方にも昔通りの雰囲気色が濃く維持されている、という違いが反映されているのであろうか。法学部と医学部はこの中間であって、法学部では卒業年次が下がるにしたがって少しずつ満足感が落ちていき、医学部では卒業年次が下がるごとに落ちてきていた満足感が最近においてやや持ち直している。

さらに興味を引かれる点は、京都大学で受けた教育に対する満足度と、京都大学のその学部・学科を卒業したことに対する満足度とが、微妙に食い違っていることである。顕著な例を挙げれば、工学部の2年前卒業者では在学中に受けた教育に対して満足感を表明しているのが26%強であるのに対して、卒業した学部・学科に対して満足感を表明しているのが78%にも達している。総じて、受けた教育に対する満足よりも、京都大学を卒業したということへの満足の方が強く出ている。社会に出てからのラベリング効果があったということであろうか。

人生観に関しては、卒業学部による違いは若干見られるが、大きな相違は卒業年次の違いによるものである。職種や生活スタイルよりも、生きてきた時代と年齢によって人生観が左右されるということであろう。

いずれにせよ、これからの京都大学の教育のあり方を考える上で、さらにはわが国の新しい時代における「新新制大学」のあり方を構想していく上で、この調査研究の報告が役立つ機会があるならば、これに過ぎた幸せはない。

なお、本報告書の内容等についてお気付きの点などあれば、忌憚のない御批判御叱正をお願いしたい。

1997年1月31日

梶田 叡 一

第 1 部

調査の目的・方法・対象

問題と目的

大学評価は、大きく2つの流れからおこなわれているように思われる。一つは、大学あるいは学部が「自己評価・自己点検」という形をもっておこなわれるもの、もう一つは学生の視点からアンケートでなされるものである。本研究は、後者に属する。

学生の視点からおこなわれた「大学評価」の調査も、目的の違いによって様々におこなわれている。例えば東洋大学での調査は、日本人学生と留学生を比較し、文化的背景と大学評価（大学イメージ）、自己評価との関係をみている（杉山・斎藤・石垣，1995）。そこでは、ほとんどすべての要因（例えば大学の校舎や施設などの物質的要因、カリキュラム要因、就職や資格取得などの進路指導要因、教官の特質や学生への態度などの教官要因など）において、留学生の方が日本人学生に比べて大学評価が高いという結果を報告している。それに対して、日本人学生が留学生よりも評価の高かった要因は、サークルや部活、友人や趣味に関するものであったという。同様の報告は、金子・山内・小方（1994）の広島大学の卒業者を対象におこなった調査からもうかがえる。金子らの報告するところによれば、卒業者の過半数が学部時代の授業に不満をもっていたことをふまえつつ、在学中最も充実していたと評価する経験は皮肉にも「体育会やサークル活動、友人関係」であったという。しかも、それは全学部を通じて7割もの者が該当した。単純に一般化はできないが、これらの報告からは、日本の大学生が授業そのものよりもクラブ活動や友人関係を大学に求めているとも受け取れる。

本研究では、「授業」をテーマに卒業生対象の調査をおこなうが、このような調査は、昨年おこなわれた東京大学工学部での卒業生調査にもみられる（東京大学工学部・工学系研究科調査室、1996）。それはキャンパスの再開発、新展開、大学院重点化を念頭に置きながら、来る将来構想を内部の人間だけの独善的な考えに偏らないために調査をおこなったものであり、学部事情に詳しい卒業生の意見を聞いてみるということを主旨としている。それ故に、質問項目も産学の問題、国際性、基礎と専門の関係など非常に具体的である。

京都大学でも、「授業」に関する調査は既にいくつかおこなわれている。例えば、1994年に出された総合人間学部の報告書（京都大学総合人間学部、1994）では、全学共通科目についての調査を実施しており、カンニングやアルバイトとの関係、授業への関心度、授業内容に対する要求などが調べられている。

しかしながら、「授業」そのものや授業満足度を支える要因に焦点をあてた調査は、今まで全くなされてこなかったと言ってよい（但し、授業実施後に、その授業の評価をアンケートする形態は、京都大学ではないが例えば織田（1995）などにみられる）。本研究では、卒業生からみた京都大学の「授業」評価（満足度）に焦点をあてる。そして、各学部固有の問題に踏み込まずに、「授業」そのものを成立させている非常に幅の広い要因（例えば教官の教え方、資料の提示、話し合いがもたれたか等）をもとに検討をおこなう。このような要因は、そのまま「教授法」的な要因とも言い換えることができる。実際には、授業を支える要因というのは、どこで教えるか（学部要因）、何を教えるか（科目）等によってもかなりの特殊性をもつものである。例えば、英語の授業であればヒアリングがあったかどうか、教師の中に外国人のネイティブ・スピーカーがいたか等、各科目における固有な問題は数多くある。しかし、ここでは教授法としての要因に焦点をあてたい。

このような教授法としての要因について検討をおこなうためには、一昨年おこなわれた梶田（1995）の研究（学生の講義・演習等に対する満足度調査）が有効である。そこでは、学生が大学の授業でどのような点を満足しているのか、あるいはどのような点を満足していないのか（授業満足度の規定要因）を具体的にみており、その結果をもとに本調査の方向性が見出せる。梶田の結果をまとめてみると、授業を評価する要因は大きく3つの次元にあるように思われる。

① 授業の活動形態

満足できる授業の理由として上げられたものの中には、「少人数でのきめ細かな指導」や「ディスカッションや質疑応答の機会が多かった」「ビデオやスライドといった機器を上手く使ってくれた」といった、教官が授業の中に設ける広い意味での活動形態が認められた。

② 学生からみた教員の個人要因

授業の準備の程度や学問に対しての熱意、人柄、語り口調や個人的な魅力（おしゃれやユニークさ）、教育者としての自覚が感じられるかどうかなど、授業を支える個人的な要因がかなりあげられていた。授業をおこなうのは人間である教官自身であるから、同じ活動形態をとってもそれを表現するパーソナリティに学生の評価が大きく規定されることは現実であろう。少人数の演習であっても、教官のあり方次第ではつまらなくなる。

③ 学生への伝達的影響

「演習で自分の考えを述べさせられたりすることが社会に出てからの発話技術につながった」「授業を受けた結果、自己理解やアイデンティティ形成が促進された」「健康論などを聞いて実際の日常生活に役立った」「知的世界（学問探究）への目覚めになった」「社会環境や自然などの新たな何かを考えるきっかけになった」「理解力や論理的思考力が養われた」など、授業を通して身についた技能や内的成長、新たな興味関心があげられている。これらは、授業を受けている時に認識されるものもあれば、何年かたってから認識されるものもある。

ところで卒業者の対象学部については、京都帝国大学設立当初から存在する理工科大学、法科大学、医科大学、文科大学を念頭に置き、伝統ある学部として現在の工学部、法学部、医学部、文学部を対象とした（但し、理学部は除いた）。

また対象とする世代は、新制大学へ移行した後から現代に至るまでとした。これは時代の変化を大雑把にでも見てみようという意図による。1970年前後まで振り返るだけでも、京都大学の各時代の様相は随分異なる。つまり、「国家ノ須要に応スル」（帝国大学令、1886年）といった国家への奉仕を標榜に掲げていた戦前のエリート的帝国大学を引きずる戦後間もない時期、1955年頃からはじまったとされる日本社会の高度経済成長による高等教育の大衆化（黒羽、1992）の時期、東大の大学紛争が終わろうという1969年にはじまった紛争の時期、などである。戦後間もない時期は、旧制の高等学校（大学予科）から帝国大学へ進学するシステムのあり様と、新制の“教養”を課程として大学に移行させ専門教育3年を2年に縮め学部4年教育としたシステムのあり様のギャップに大きな不満を抱いたに違いない。それも10年、20年たてば、昔のシステムとしての知識しか持たない学生になり、一般教養課程は当然の存在となる。専門書等が手に入りにくかった昔は、大学の図書館はさぞかし威厳のあったことであろう。今では無数にある教科書（テキスト）も、昔は、理科系であれば洋書をそのまま用いたという。文科系では、先生の講義を受けないことには、学問の風にあたるのが難しかったともいわれる。1960年代半ばからは、若者の質が変わったともいわれる（桜井、1985；野辺地、1983）。大学紛争を機に大学生がおとなしくなったという者もいる（内田、1979）。細かい時期は議論の対象ではないが、現代からみて戦後の学生と比べた際、70年代を期に変わったというのは意見の一致するところであろう。

以上からは、社会や大学のあり様も変わったが、学生も又変わったことを示している。学生が変わったといわれる時期の大学生は、いまや50歳代かそれを迎えようとしており、大学教官であれば大学を引っ張る立場にもある。その意味では、戦前、戦後間もない頃と違い、教官もまた変わったといえる。「授業」そのものに焦点をあてたとき、各時代に京都大学を卒業した者たちが、どう回答するのかを以下みていきたい。

方 法

■ 調査対象者

対象学部 京都帝国大学創設時から存続する4つの学部を対象とした。つまり文科系からは、文学部・法学部、理科系からは医学部・工学部である。

対象学部

- ・文学部…文学部は、「哲学科（哲学、心理学、社会学、宗教学など）」「史学科（地理学、考古学、東洋史学など）」「文学科（国文学、フランス文学、言語学など）」の3つの科から成り立っており、全科を対象とした。
 - ・法学部…特に学科等の編成はなされておらず、全員を対象とした。
 - ・医学部…特に学科等の編成はなされておらず、全員を対象とした。
 - ・工学部…工学部は非常に多くのコース（学科・教室等）から成り立っている。その中から“工業化学系”“機械工学系”“土木・建築系”“電気・電子系”“衛生工学”“物理工学”の6つのコースを対象とした。
- 対象年度** 旧制から新制の移行期である1953年度（1954年3月卒業、以下同様）から10年おきに、1963年度、1973年度、1983年度、1993年度の上記学部・学科卒業者を対象とした^{注1}。

■ 発送および回収について

発送時期 1996（平成8）年5月中頃に調査用紙を発送し、3週間後に御礼をかねた催促葉書を全対象者に送付した。回収期日は特に記載せず、8月31日をもって分析の対象となる回収を打ち切った。

回収率 Table1は、8月31日付で回収された調査用紙の回収率を示している。有効回答数は、文学部37.9%、法学部35.7%、医学部34.5%、工学部45.7%であった。全体では39.9%の回収率であった。

Table 1 回収状況 (人)

対象学部	発 送 数	転居先不明	有効回答数	回 収 率
文学部	735	18	272	37.9%
法学部	1,448	157	462	35.7%
医学部	521	18	174	34.5%
工学部	1,510	191	603	45.7%
学部不明			19	
計	4,214	384	1,530	39.9%

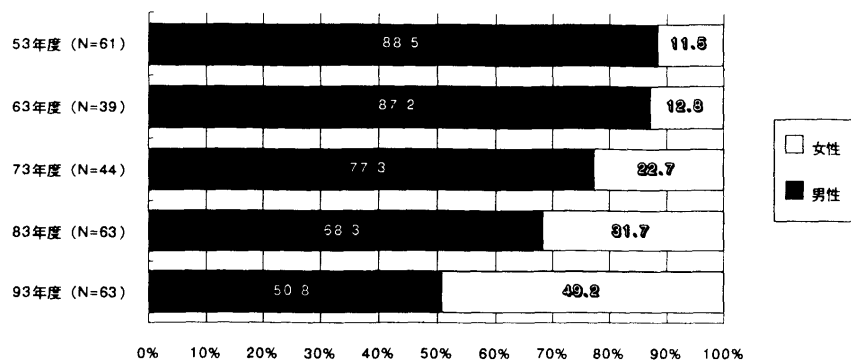
^{注1} 1949年に旧制から新制へ移行したので、1953年度卒業者については旧制卒業者と新制卒業者が混在する。特に医学部は旧制の卒業者である。医学部の53年度卒業者、及び他の学部の旧制53年度卒業者（入学年度、名簿等をふまえ旧制卒業者と判断できる者）は、専門授業における評価のみを扱った。医学部以外の学部の53年度卒業者で、一般教養課程等の新制制度における評価項目は、新制卒業者のみの数字である。

回答者の属性

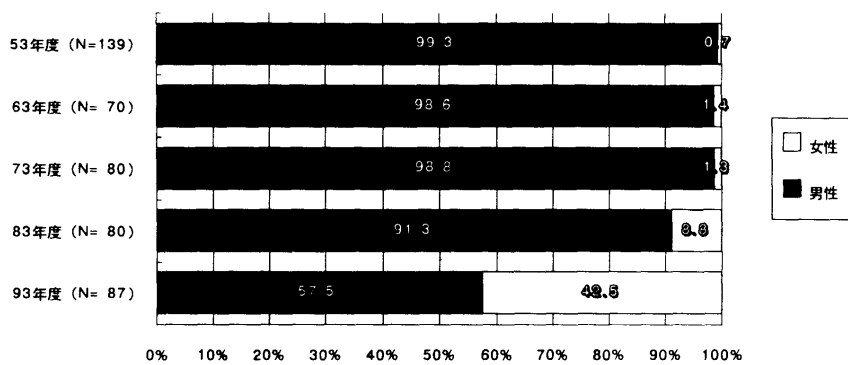
■ 性別 (Figure1 参照)

性別	男・女
----	-----

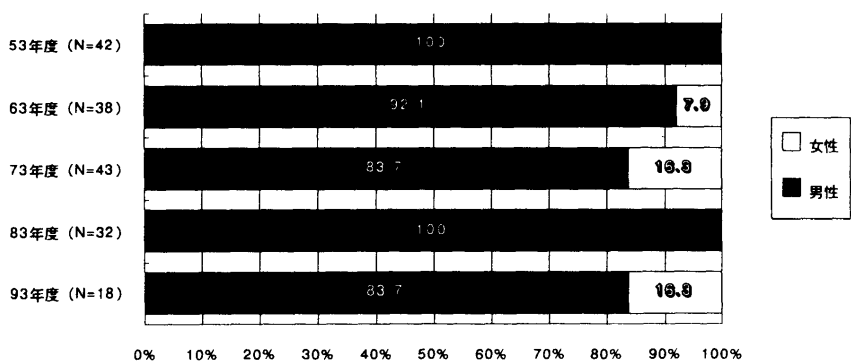
文学部では4学部中女性の比率が最も高く、93年度においてはほぼ半数近く（49.2%）を占めている。法学部では53年度から83年度までのほとんどが男性であり、女性の比率は10%を越えない。しかし、93年度では女性の比率が42.5%もみられる。医学部では、女性の最も多い73年度と93年度にその比率が16.3%みられる程度であり、ほとんどが男性である。工学部では、73年度まで全員が男性である。93年度では女性が若干みられる（5.0 %）が、それでもほとんどは男性である。



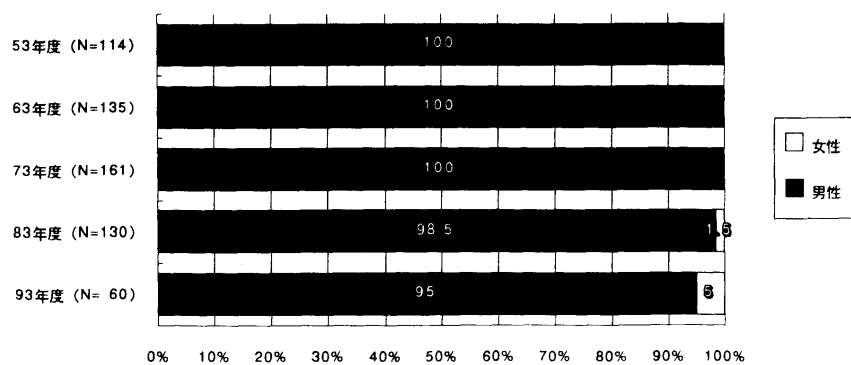
文学部



法学部



医学部



工学部

Figure1 各学部の回答者における男女の比率

■ 社会的身分 (Figure2 参照)

今の身分は 社会人・学生・専業主婦・その他 ()

全体的に53年度卒業者では“その他”が目立っている。文学部で15.0%、法学部で26.6%、工学部で15.8%の者が“その他”に該当する。これは、主に定年退職後の年金生活者である。医学部に“その他”の該当者はみられず、専門職である学部の特徴が反映されているようである。

63年度から83年度にかけては、文学部を除く法学部、医学部、工学部のほとんど全員が“社会人”である。文学部では90%前後の者が“社会人”である。他の学部比べて“社会人”の比率が低い原因は、女性の比率が高いこと、それにともなう“専業主婦”の比率が高いことがあげられる。

93年度は他の年度に比べて“学生”の占める比率が高い。特に文学部では61.9%と最も多く、他の学部でも法学部14.9%、医学部16.7%、工学部20.0%とほぼ15~20%の比率である。“学生”の該当者のほとんどは、大学院進学者である。

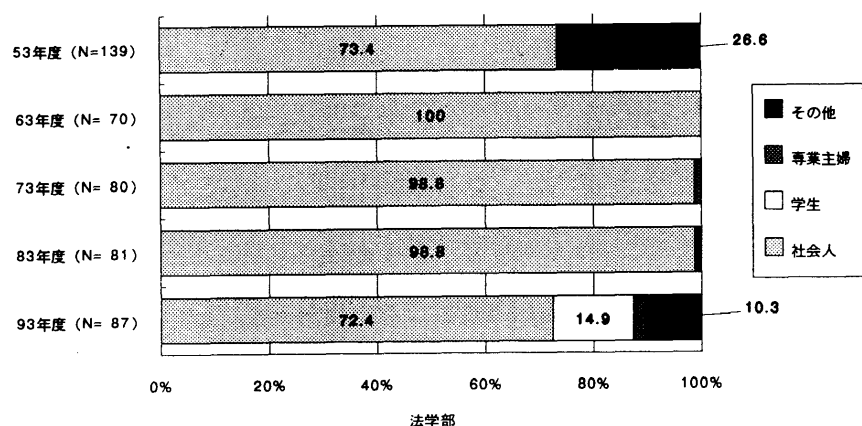
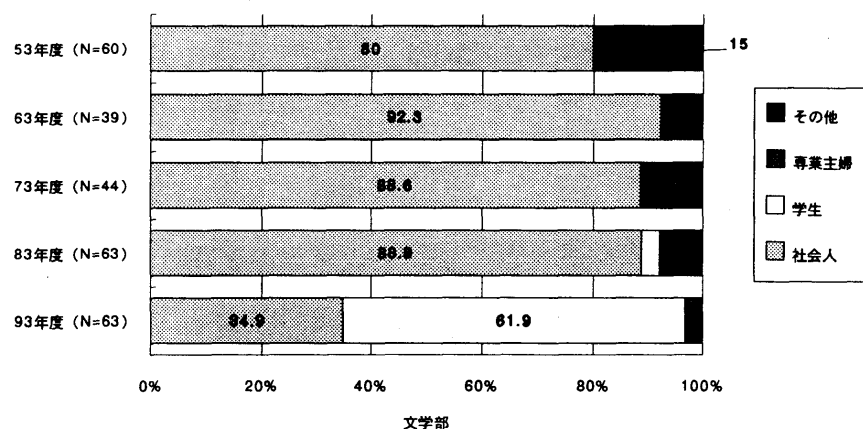


Figure2 各学部の回答者における社会的身分

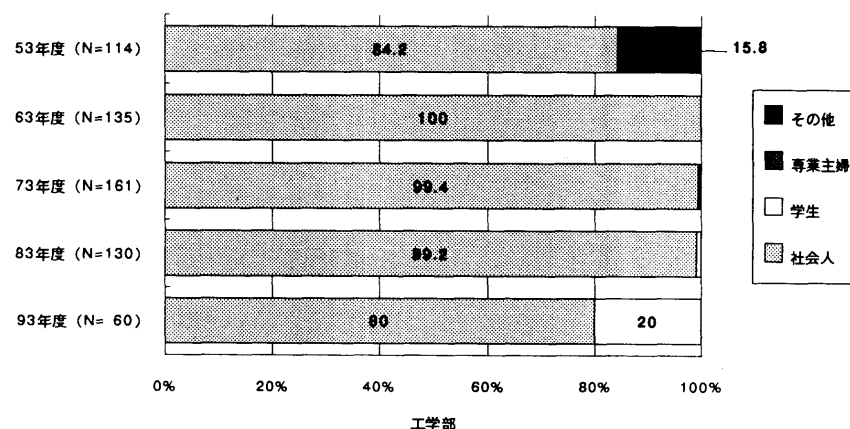
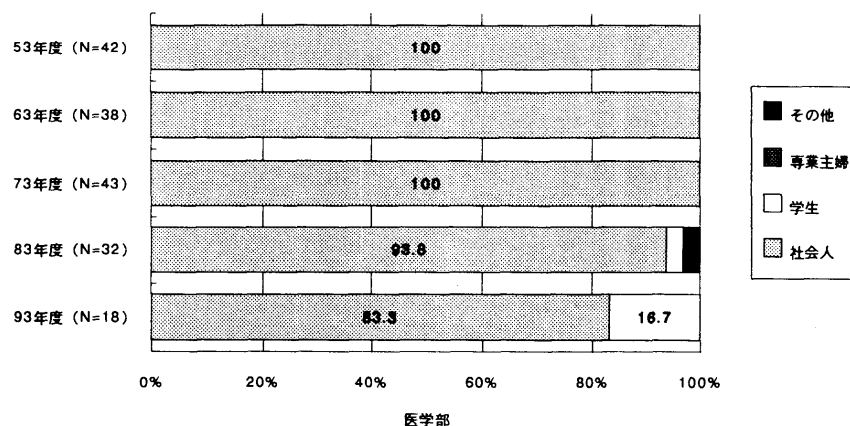


Figure2 各学部の回答者における社会的身分（続き）

■ 社会人業種（Figure3参照）

社会人の人にお尋ねします。その業種は次のどれですか？あてはまるもの全てに○をして下さい。

- | | |
|-----------------------------------|---------------|
| () 農・林・水産業 | → 農林水産業 |
| () 個人経営・自営業（商店主・工場経営など） | → 個人経営 |
| () 管理職の会社員・団体職員（課長以上） | → 会社員（管理職） |
| () 会社員・団体職員（研究開発等の研究職） | → 会社員（研究職） |
| () 会社員・団体職員（営業等の職） | → 会社員（営業等） |
| () 会社員・団体職員（事務職） | → 会社員（事務職） |
| () 上記以外の会社員・団体職員（販売員・運転手・工場勤務など） | → 会社員（上記以外） |
| () 専門職（医師・弁護士・公認会計士など） | → 専門職（医師弁護士等） |
| () 国家公務員 | → 国家公務員 |
| () 地方公務員 | → 地方公務員 |
| () 教師（小・中・高校・専門学校など） | → 教師（小中高等） |
| () 大学・短大教員 | → 大学短大教員 |
| () その他 | → その他 |

文学部では、53年度、63年度の半数近くが“大学短大教員”である（53年度47.9％／63年度58.3％）。“大学短大教員”は73年度においても比率が最も高い（43.6％）が、“教師（小中高等）”も次いで比率が高くなっていく（23.1％）。この傾向は83年度でもほぼ同様である。但し83年度から93年度にかけては、“会社員（事務職）”“会社員（営業等）”の比率が徐々に増し（事務職17.9％／営業等7.1％、計25.0％）、93年では会社員の比率は最も高い（事

務職27.3%/営業等18.2%、計45.5%)。但し、93年度の回答者の61.9%が大学院進学者であることを考えるならば、この傾向は一概には言えない。

法学部では、53年度から73年度まで“会社員（管理職）”が最も多くみられる（53年度55.8%/63年度64.3%/73年度53.2%）。年齢的にもまだ若い83年度では“会社員（管理職）”はやや少なく（11.3%）、“会社員（事務職）”“会社員（営業職）”が多くみられる（事務職27.5%/営業等21.3%、計48.8%）。この傾向は93年度になるとさらに強まる（管理職0.0%、事務職39.7%/営業等16.9%、計56.6%）。法学部卒業者のほとんどの者が会社員であり、専門職（弁護士等）につく者は5～15%前後であるといえる。

医学部では、53年度から93年度まで、90%以上の者（但し63年度のみ84.2%）が“専門職（医師弁護士等）”であった。53年度、63年度には“大学短大教員”も少なからずみられる（53年度14.3%/63年度26.3%）が、会社員等はわずしかみられない。医学部卒業者のほとんどの者が専門職、あるいはそれにともなう公務員や大学短大教員であるといえる。

工学部では、53年度から73年度まで“会社員（管理職）”が最も多くみられる（53年度64.6%/63年度82.2%/73年度63.1%）。年齢的にもまだ若い83年度では“会社員（管理職）”はやや少なく（8.5%）、93年度では全くみられない。代わりに“会社員（研究職）”が多くみられる（83年度51.2%/93年度52.1%）。これより、工学部卒業者のほとんどは、会社員であるといえる。

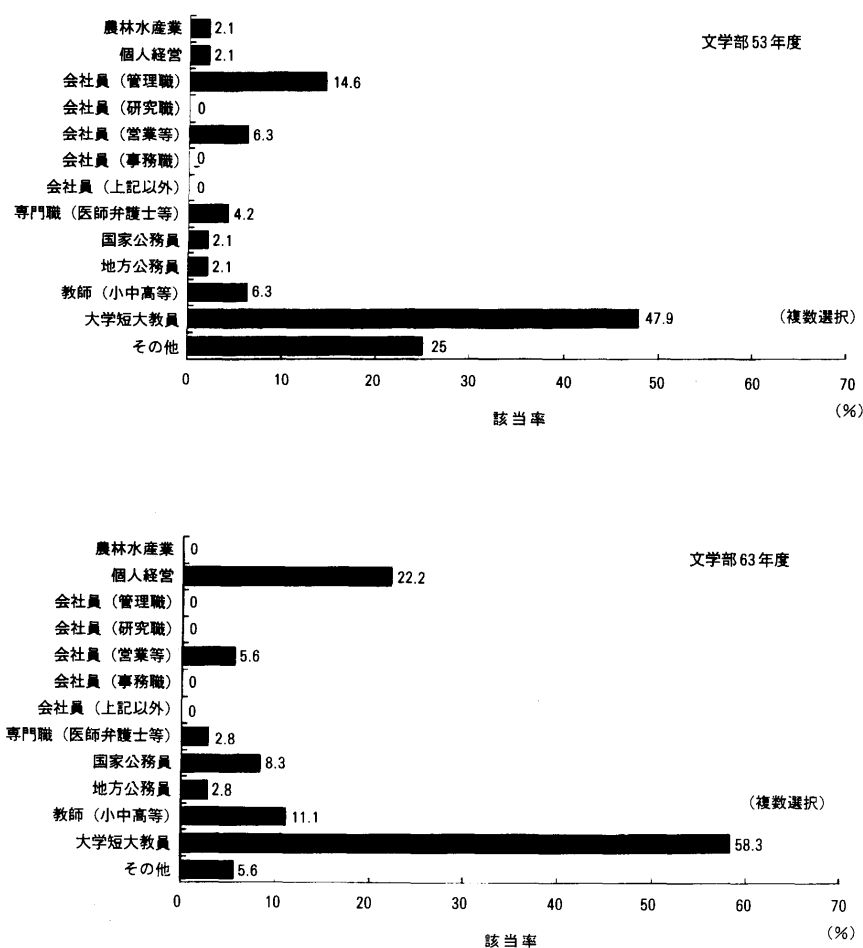


Figure3 各学部回答者における社会人の業種

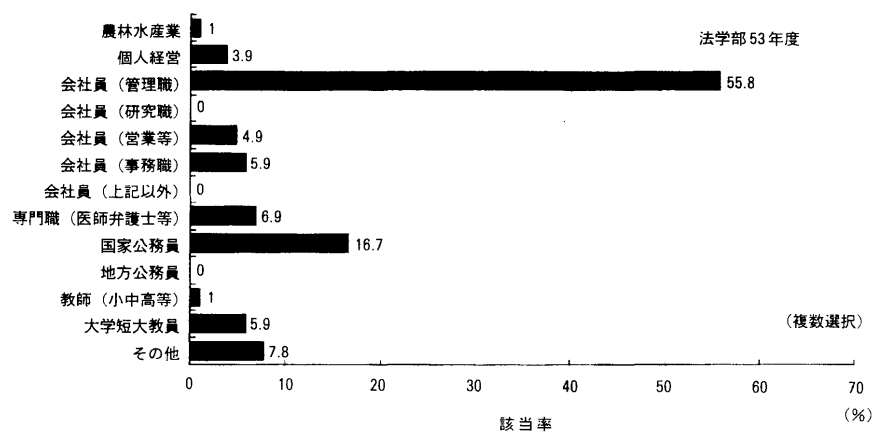
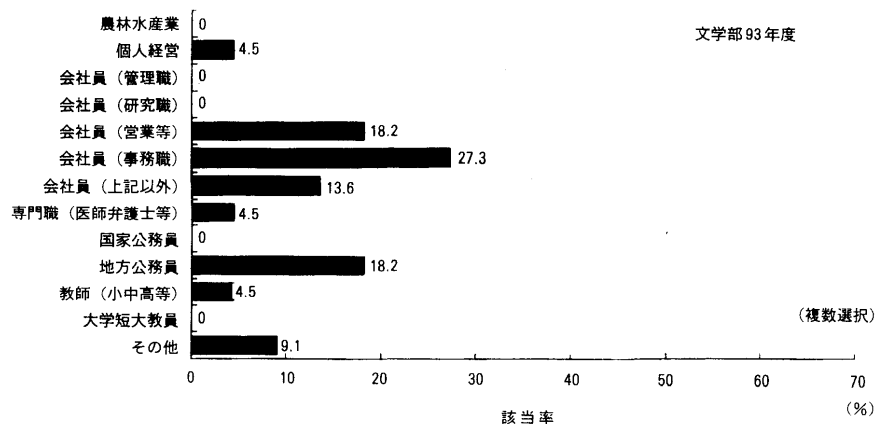
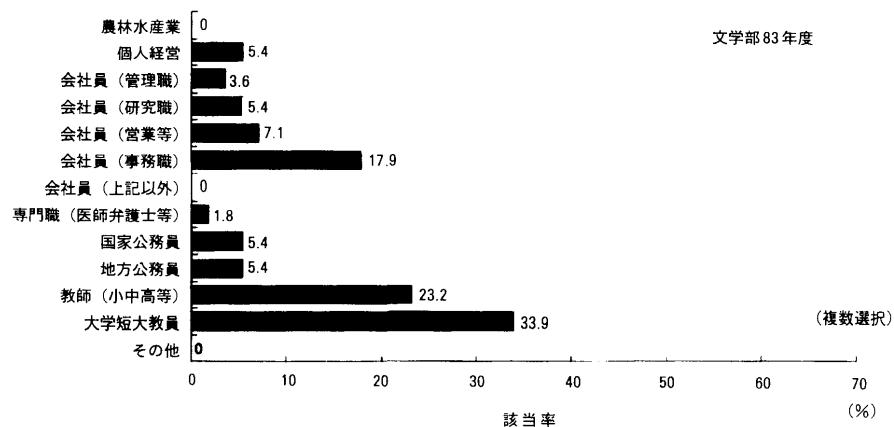
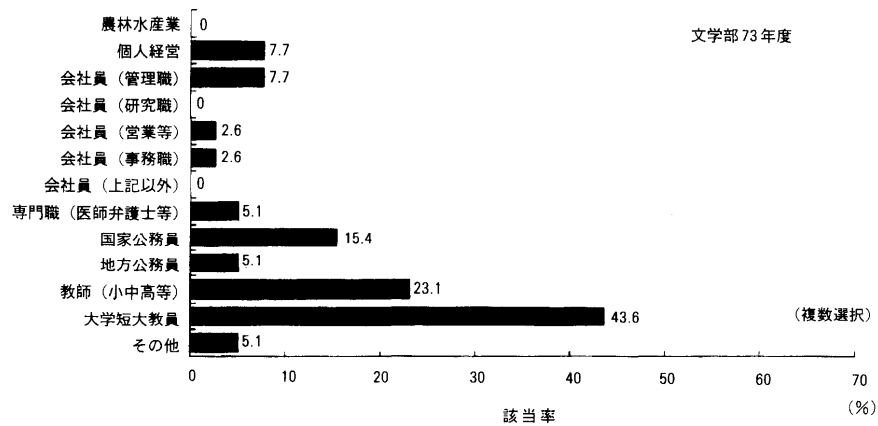


Figure3 各学部回答者における社会人の業種（続き）

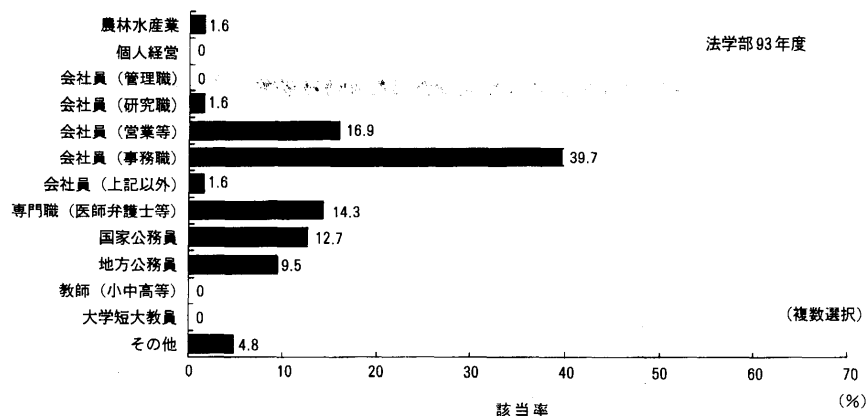
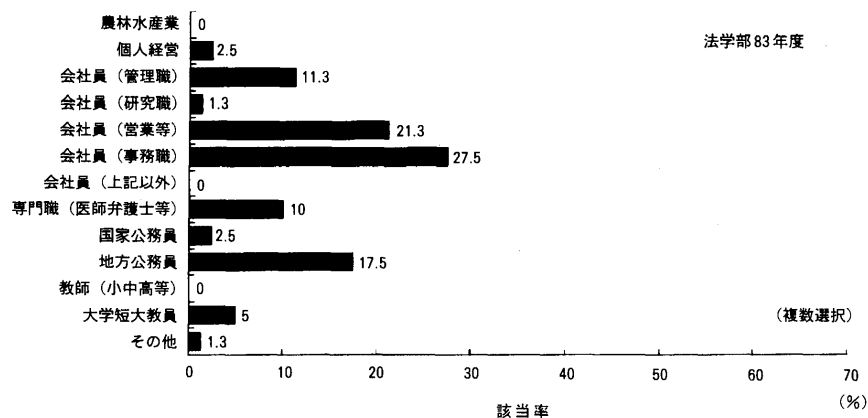
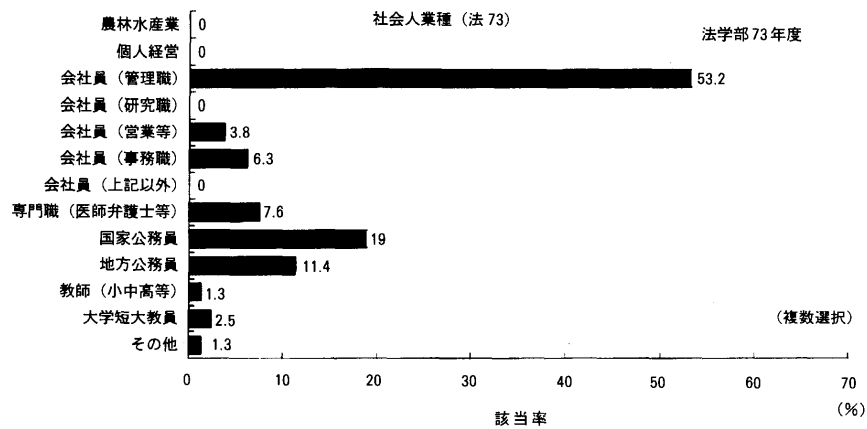
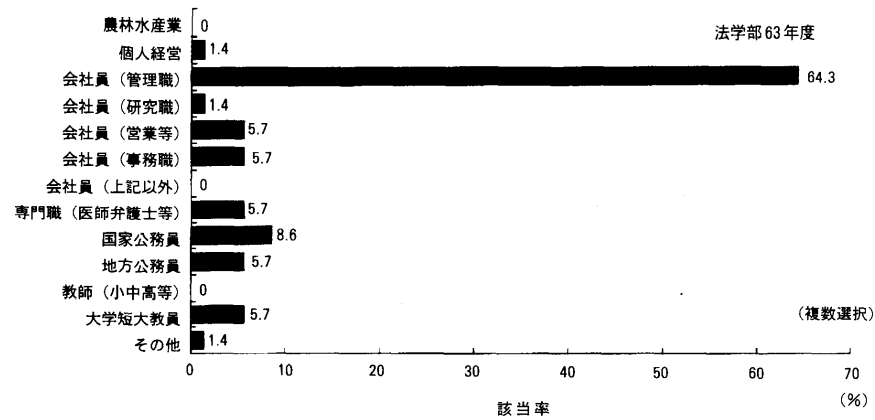


Figure3 各学部の回答者における社会人の業種 (続き)

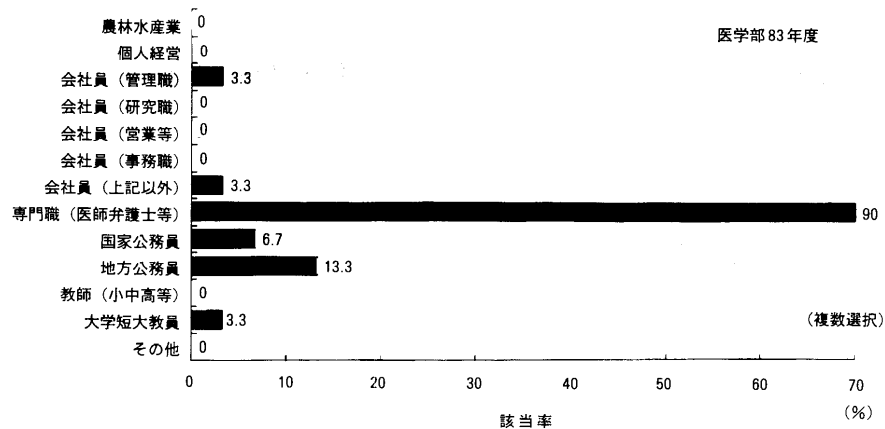
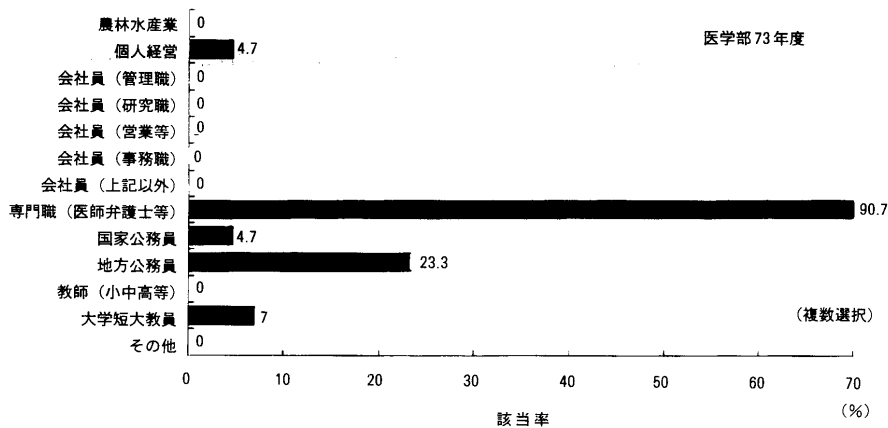
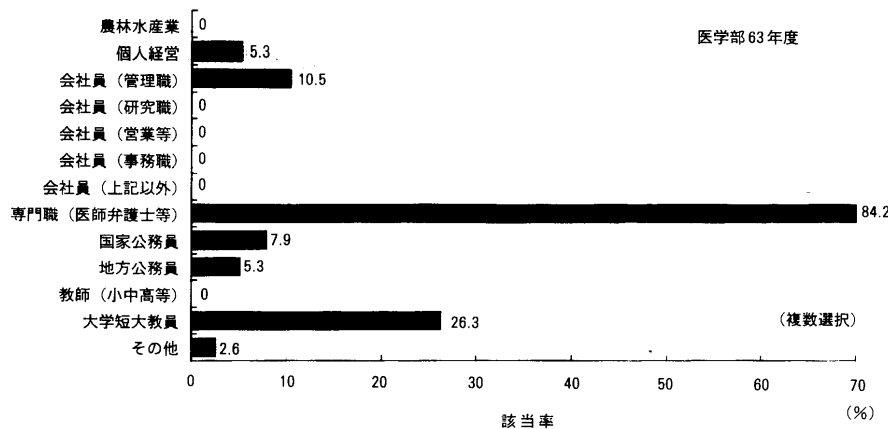
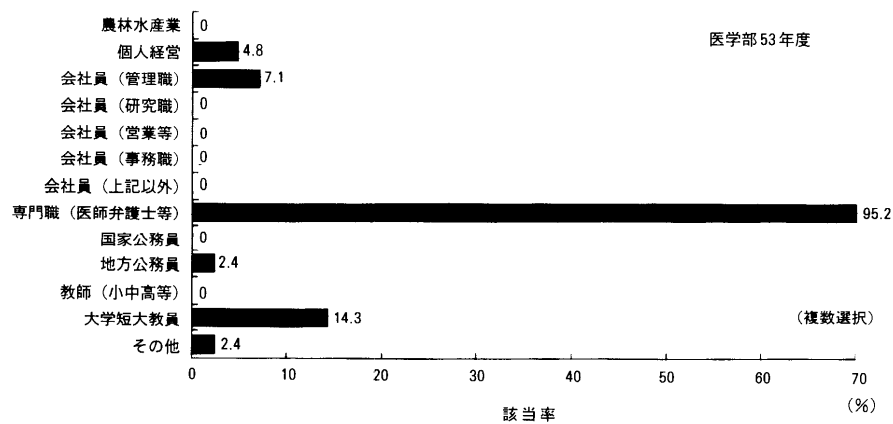


Figure3 各学部回答者における社会人の業種（続き）

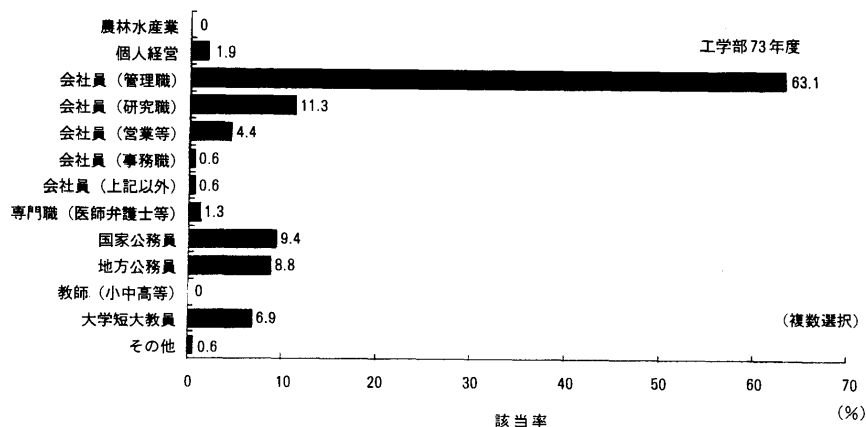
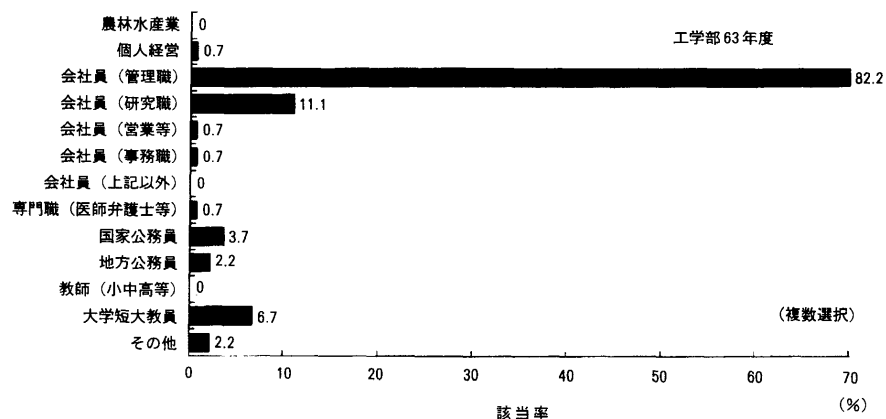
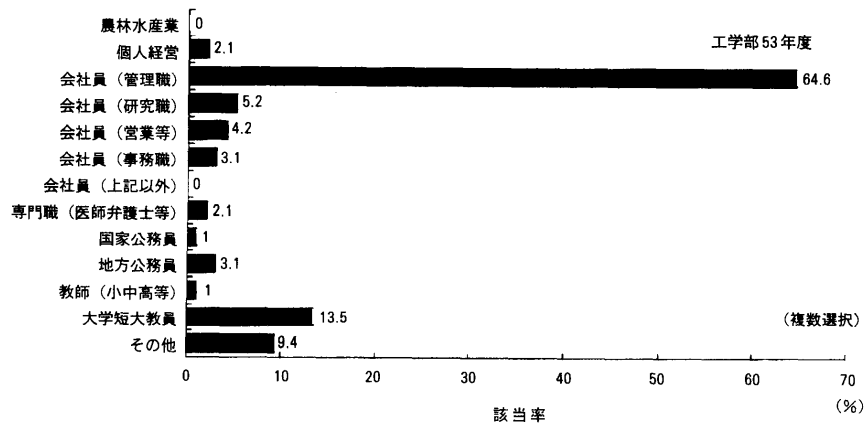
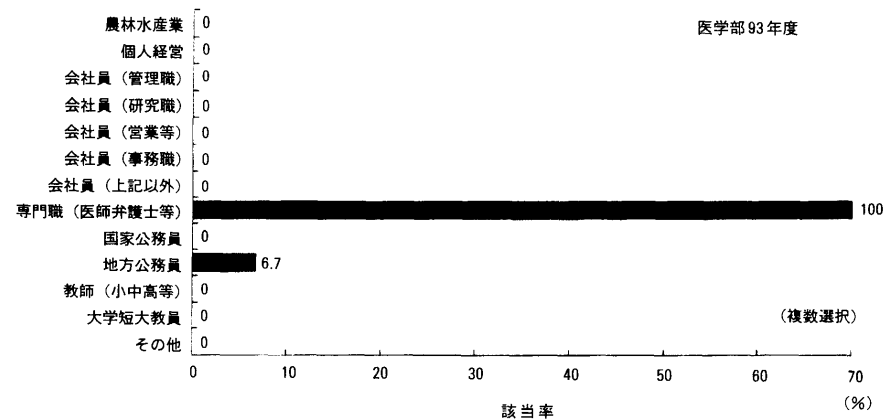


Figure3 各学部の回答者における社会人の業種（続き）

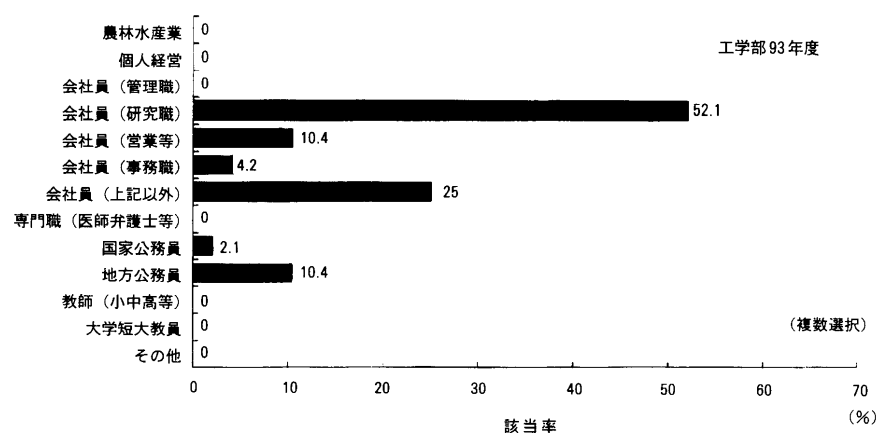
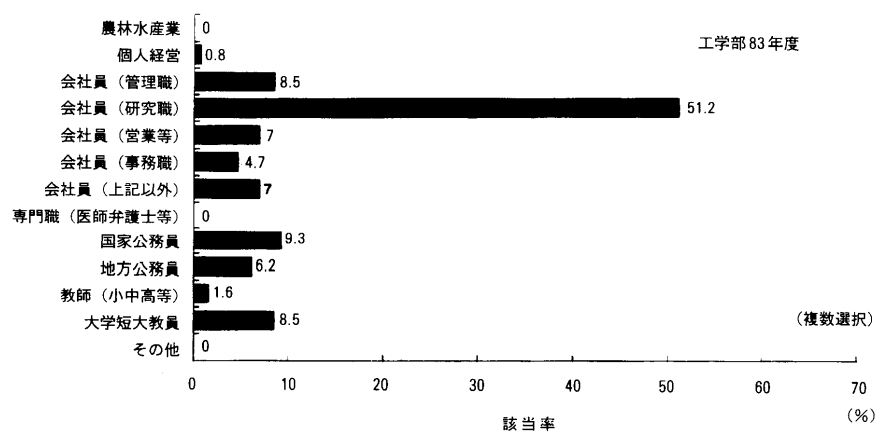


Figure3 各学部 of 回答者における社会人の業種 (続き)

■ 現在の業種・身分と卒業学部・学科等との関連 (Figure4参照)

社会人・学生の人にお尋ねします。あなたの今の業種・身分は、卒業学部・学科等とどのくらい関連のあるものですか？

- () 非常に関連が深い () まあまあ関連がある () 何ともいえない
() ほとんど関連がない () 全く関連がない

以下結果をみるにあたって、“非常に関連が深い” “まあまあ関連がある”を統合し、現在の職業や身分と卒業学部との関連度をあらわす指標とした。

文学部では、“大学短大教員”の多い53年度、63年度では80%前後の者が該当していた（53年度77.3%/63年度83.8%）。文学部は73年度から“教師（小中高等）”や“会社員（事務職・営業職等）”の比率が増してくるので、それにとまって該当率は全体的に低くなっている（73年度64.1%/83年度57.9%）。93年度では該当率が71.1%に増加しているが、93年度の61.9%が大学院在籍者なので単純には言えないようである。

法学部では、多くの者が会社員である。83年度における該当率（57.3%）がやや下がっているのを除けば、ほぼ70%前後の該当率である（53年度69.9%/63年度67.1%/73年度71.5%/93年度67.5%）。

医学部では、53年度から93年度まで90%以上の者が専門職であり、公務員や大学短大教員であってもそれに準ずる職業であった。現在の職業や身分と卒業学部との関連度は100.0%であり、医学部卒業者はすべての者が何らかの関連をもった職業や身分を有しているといえる。

工学部では、ほとんどの者が会社員である。年度による大きな差はなく、全体的に85%前後の該当率である（53年度83.2%/63年度88.7%/73年度86.7%/83年度83.7%/93年度81.7%）。

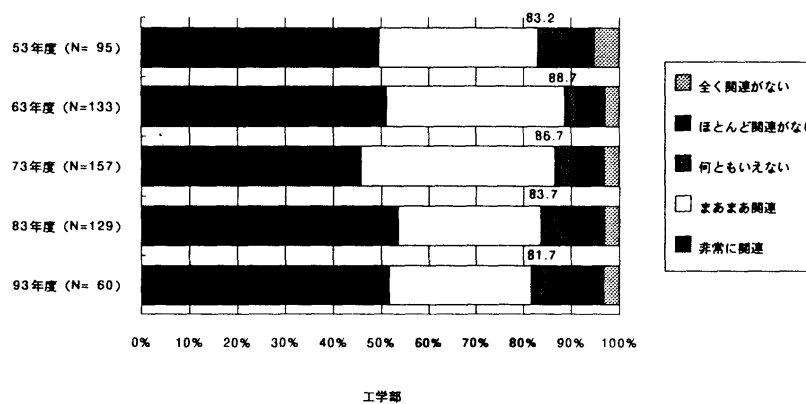
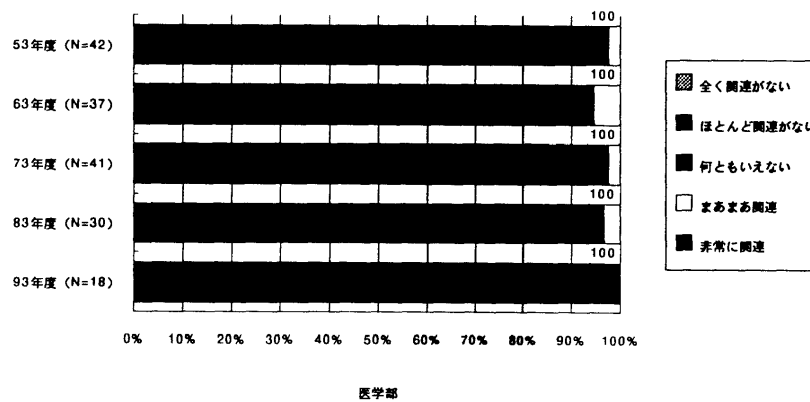
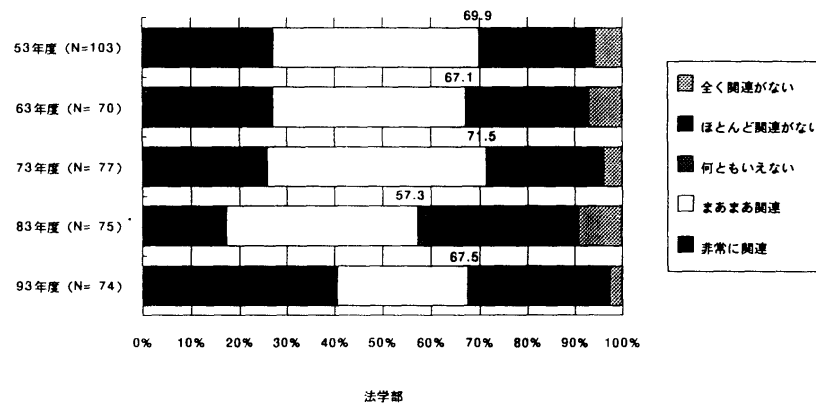
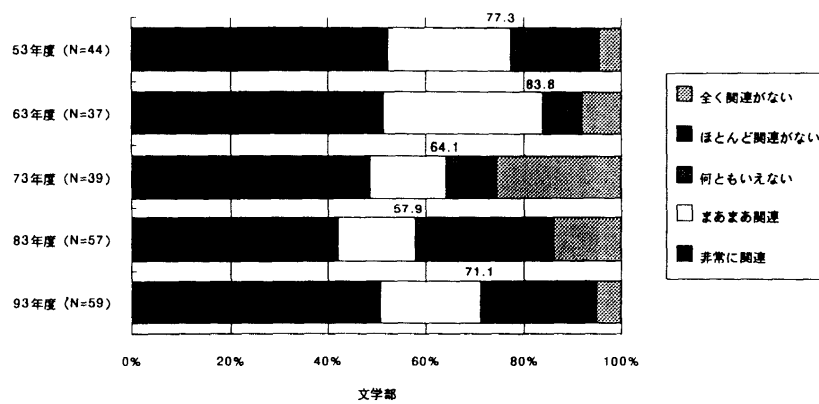


Figure4 各学部の回答者における業種・身分と卒業学部との関連

第 2 部

京都大学卒業者は在学中に受けた教育をどう評価しているか

学部・学科への満足

■ 学部・学科への満足度 (Figure5 参照)

あなたは、卒業した学部・学科にどのくらい満足していますか

- () 非常に満足 () まあまあ満足 () 何ともいえない
() あまり満足していない () 全く満足していない

以下、“非常に満足” “まあまあ満足” の該当率を統合して満足度の指標とし検討をおこなった。

文学部では、大学紛争期の73年度が60.0%と最も満足度が低いが、概ね70～80%の高い満足度を示している（53年度76.6%／63年度69.2%／83年度80.3%／93年度68.3%）。

法学部では、53年度で83.3%と最も高い満足度であるが、時代の推移に対して大きな変化はみられず、70～80%の満足度である（63年度76.8%／73年度74.0%／83年度79.1%／93年度74.7%）。

医学部では、63年度と93年度が最も高い満足度であった（63年度94.7%／93年度94.4%）が、他の時代も80%前後の高い満足度であった（53年度82.9%／73年度83.3%／83年度74.2%）。

工学部では、53年度で92.9%と最も高い満足度であるが、時代の推移に対して大きな変化はみられず、70～90%の満足度である（63年度80.6%／73年度77.0%／83年度87.7%／93年度78.3%）。

全体的に高い満足度を示しており、それは文科系よりも理科系で顕著であった。

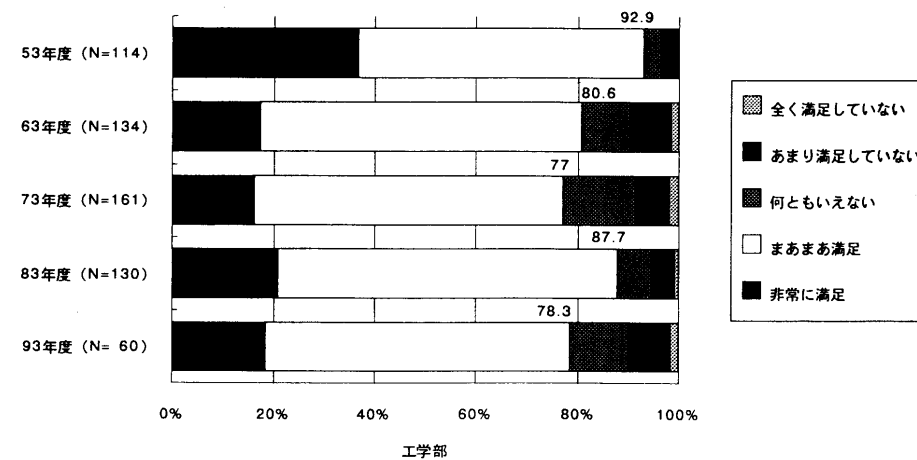
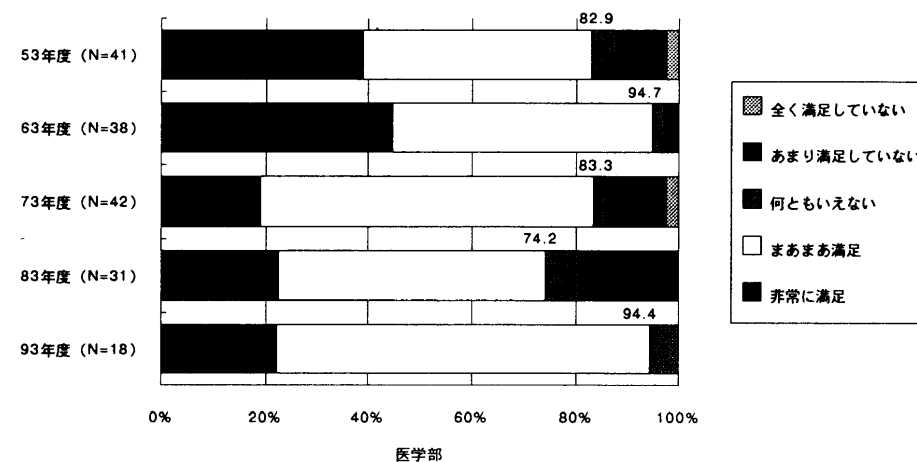
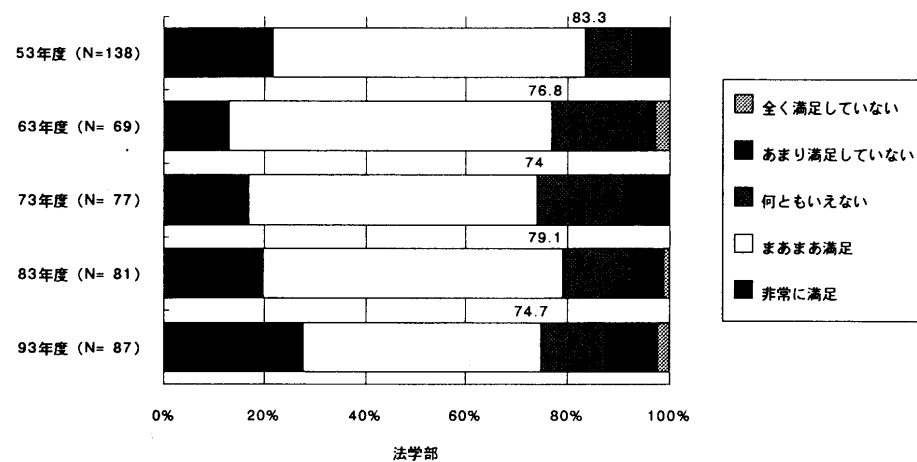
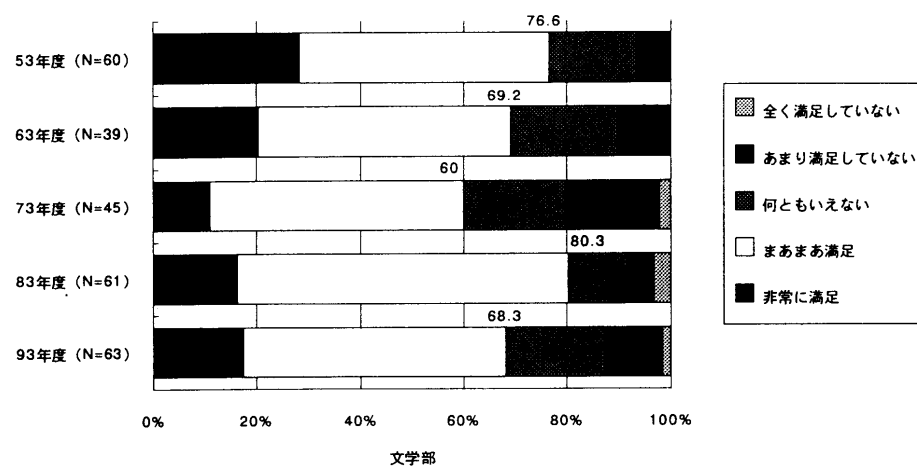


Figure5 学部・学科への満足度

■ 学部・学科への満足度の理由

(学部・学科に対して)、どういう点で満足あるいは不満ですか？

1. 満足の理由 (Table2参照)

以下、20%以上の表出率をとりあげて検討をおこなってみる^{注1}。

文学部では、「優秀な教授陣・授業の質の高さ (21.2%)」「自由な学風 (20.5%)」が多かった。

法学部では、「優秀な教授陣・授業の質の高さ (26.3%)」「将来の職業や生活に役立つ (24.4%)」「学ぶものがいろいろあった (22.1%)」「自由な学風 (21.8%)」が多かった。

医学部では、「将来の職業や生活に役立つ (46.5%)」のみ多かった。

工学部では、「将来の職業や生活に役立つ (34.8%)」「学ぶものがいろいろあった (28.0%)」が多かった。

全体的に、文系では、授業の質や自由な学風に満足の理由を見出していた。医学部、工学部では職業的色彩が強いせいか、「将来の職業や生活に役立つ」がかなり多く見られた。それは法学部でも同様であり、司法職に進まない者であっても「リーガル・マインド」の有効性をあげる者が多く、それが「将来の職業や生活に役立つ」「学ぶものがいろいろあった」の高い表出率につながっているようである。工学部でも、技術革新のめざましい時代の流れにおいて、直接役に立たないまでも工学の専門的基礎知識を学べたのは有り難かったとする記述が多く、それが「学ぶものがいろいろあった」の高い表出率につながっていた。それに比べて、医学部ではこうした質問を受けること自体に疑問を感じたようであり、「医者になるためには医学部に行かなければならなかったから」といった医者という職業専門コースとしての満足さに重きを置いているようであった。

Table2 学部・学科に対する満足の理由

(%)

		文学部	法学部	医学部	工学部
1	優秀な教授陣・授業の質の高さ	21.2	26.3	19.8	8.6
2	研究レベルの高さ	2.6	1.1	2.3	1.5
3	教官との交流・指導	15.4	6.9	4.7	10.5
4	研究室における先輩や友人(指導・交流等)	14.7	19.5	8.1	12.9
5	学ぶものがいろいろあった ・専門的基礎知識・リーガルマインド・思考法など	16.0	22.1	7.0	28.0
6	将来の職業や生活に役立つ	10.3	24.4	46.5	34.8
7	勉強できる雰囲気や環境(設備・図書)の充実	17.3	7.3	1.2	5.8
8	好きな学部・学科で学べた	16.0	5.0	3.5	12.0
9	自由な学風 ・カリキュラムの選択・試験制・出席をとらない ・勉強をする者には十分なものを与え、しない者には強要しない	20.5	21.8	19.8	6.5
10	京大の社会的立場(指導的立場・世間の評価)	1.3	3.4	2.3	1.8
11	卒業後の交流(同窓会など)	1.9	3.1	0.0	9.2
12	卒業後良さがわかった	1.3	2.3	2.3	0.6
	(人数) N =	156	262	86	325

(複数解答)

^{注1} 筆者は今まで多くの自由記述データを扱ってきたが、20%以上の表出率は経験的にかなり多い数字と考えている。ここでは、この20%以上という基準を用いてみた結果と解釈して頂きたい。

2. 不満足の原因 (Table3参照)

以下、20%以上の表出率をとりあげて検討をおこなってみる。

文学部では、「教育者として授業に工夫がない (26.9%)」が多かった。

法学部では、「授業編成・カリキュラム等制度に問題がある (39.0%)」「教育者として授業に工夫がない (32.2%)」が多かった。

医学部では、「教育者として授業に工夫がない (53.6%)」「授業内容に問題がある (42.9%)」「授業編成・カリキュラム等制度に問題がある (21.4%)」が多かった。

工学部では、「授業内容に問題がある (29.6%)」「授業編成・カリキュラム等制度に問題がある (21.1%)」が多かった。

満足の理由としては授業の質があげられることもあったが、それよりも自由な学風とか将来の職業に役立ったとするものが多かった。それに対し不満足の原因は、全体的に授業に関するもの(講義やカリキュラム等)がほとんどであった。法学部ではマスプロ講義が多く大手の私学と変わらない、教官と個人的に接触できるような体制が欲しかったという不満が目立った。医学部や工学部といった理科室では、基礎と実践との絡みが問題にされることが多く、例えば医学部では臨床場面の講義や具体例が少ないとか、工学部では実務の側面がほとんど扱われていなかった等の不満があらわれていた。

Table3 学部・学科に対する不満足の原因

(%)

		文学部	法学部	医学部	工学部
1	教育者として授業に工夫がない	26.9	32.2	53.6	18.3
2	授業内容に問題がある ・魅力がない ・高度すぎて理解できない ・最新の動向を伝えていない ・実務的な内容が含まれていない ・臨床関係が充実していない(医学部)	9.6	16.9	42.9	29.6
3	指導に問題がある ・専門等の指導 ・将来の職業に関するもの ・勉強の仕方など	15.4	5.1	3.6	7.0
4	休講が多い	9.6	0.0	0.0	1.4
5	研究室の雰囲気が悪い ・封建的 ・学生が研究のための兵隊	7.7	0.0	7.1	7.0
6	教官とふれあう機会がなかった	15.4	5.1	3.6	0.0
7	授業編成・カリキュラム等制度に問題がある	13.5	39.0	21.4	21.1
8	設備・図書が不十分	11.5	5.1	0.0	5.6
9	他学部との交流がない	0.0	0.0	3.6	0.0
10	社会人生活に役立たない	7.7	11.9	3.6	18.3
	(人数) N =	52	59	28	71

(複数解答)

授業満足度

《大学4年間（6年間）の授業満足度》

大学4年間を振り返って、全体的に授業（講義・演習など）はどのくらい満足できるものでしたか。

- ☐ 非常に満足 ☐ まあまあ満足 ☐ 何ともいえない
☐ あまり満足していない ☐ 全く満足していない

《一般教養課程の授業満足度》

一般教養課程を振り返って、全体的に授業（講義・演習など）はどのくらい満足できるものでしたか。

- ☐ 非常に満足 ☐ まあまあ満足 ☐ 何ともいえない
☐ あまり満足していない ☐ 全く満足していない

《専門課程の授業満足度》

専門課程を振り返って、全体的に授業（講義・演習など）はどのくらい満足できるものでしたか。

- ☐ 非常に満足 ☐ まあまあ満足 ☐ 何ともいえない
☐ あまり満足していない ☐ 全く満足していない

以下では、“非常に満足” “まあまあ満足” の該当率を統合して満足度の指標とし、検討をおこなった。

■ 大学4年間（6年間）（Figure6 参照）

文学部では、53年度で満足度が最も高い（74.5%）。63年度で満足度はやや下がる（56.4%）が、以降93年度までおよそ55%前後の満足度を保っている（73年度54.5%/83年度52.4%/93年度54.8%）。

法学部でも53年度で満足度が最も高い（74.3%）。63年度で満足度がやや下がる（62.7%）が、以降93年度まで50～60%前後の満足度である（73年度55.8%/83年度61.7%/93年度49.4%）。

医学部では、53年度、63年度で70%以上もの高い満足度を示していた（53年度77.5%/63年度73.7%）。しかし、73年度で満足度は大きく下がり（40.5%）、83年度は28.1%とさらに下がっている。93年度は、また40%近くまで満足度をあげている（38.9%）が、全体的に73年度以降は40%以下の満足度である。

工学部では、53年度で4学部中最も満足度が高い（88.5%）。文学部、法学部同様に、63年度で58.2%と満足度が大きく下がるが、83年度まで50%台を保っている（73年度55.3%/83年度50.7%）。93年度は、満足度がさらに下がり（26.6%）、4学部中その満足度は最も低い。医学部も83年度では28.1%まで満足度が下がったが、93年度では40%近くまで上昇している。それに対して工学部は、時代とともに満足度が下がる一方である。

全体的に、文科系の文学部・法学部は63年度以降過半数の満足度を保っており、時代が変わっても満足度の比率はさほど変わっていない。それに対して、理科系の学部は時代の推移とともに、満足度は大きな変化を見せている。医学部では、73年度以降満足度が大きく下がり、83年度で過去最低を示した。しかし、93年度では低いながらも73年度のラインまで満足度が回復している。工学部では、53年度で4学部中最高の満足度を示しながらも、63年度以降満足度が過半数まで下がる。83年度までは過半数のラインを保っていたが、93年度でさらに満足度は下がり、その値は4学部中最低の値であった。93年度で満足度を上昇させた医学部に対して、工学部はさらに下がりつつある。さらに、最高の満足度から最低の満足度へ下がっていることも工学部の大きな特徴である。

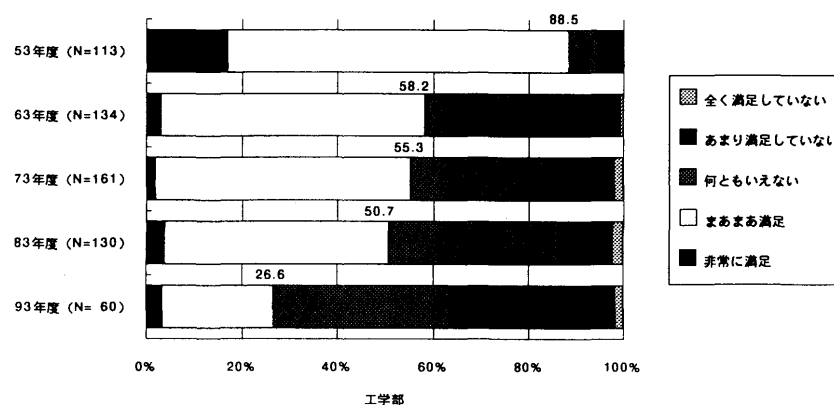
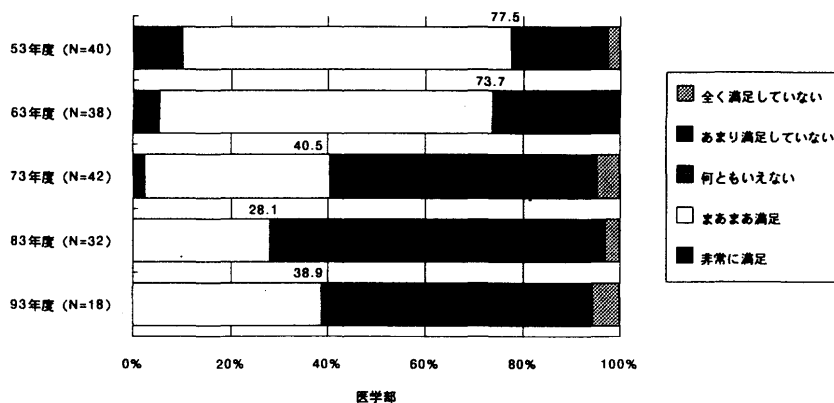
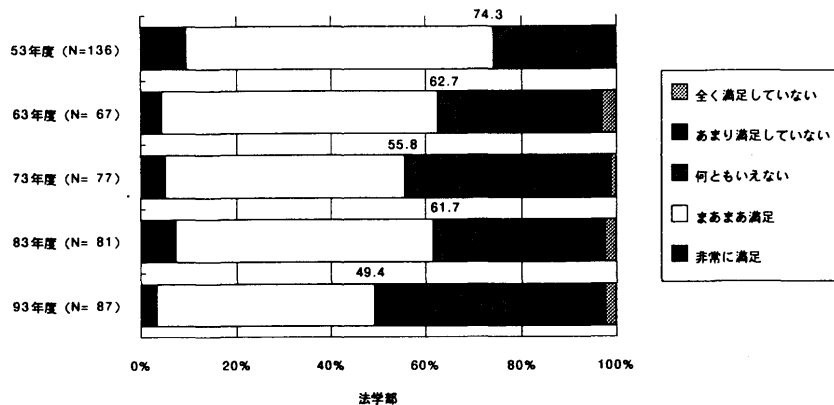
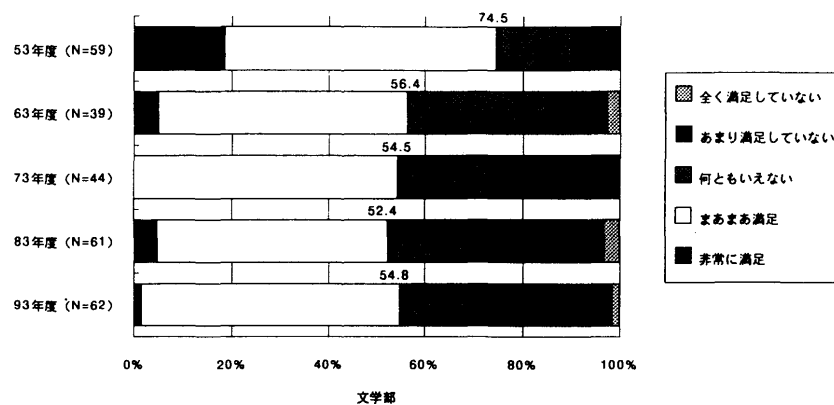


Figure6 大学4年間（6年間）の授業満足度

■ 一般教養課程 (Figure7 参照)

文学部では、53年度で満足度が最も高い(54.4%)が、その値は半数をやや越えた程度である。63年度には満足度が35.9%に下がり、それ以降30%前後の満足度で落ち着いている(73年度31.8%／83年度32.7%／93年度29.0%)。

法学部でも、53年度で満足度が最も高い(54.3%)が、文学部同様に、その値は半数をやや越えた程度である。63年度には満足度が33.8%に下がり、それ以降はやや変動はあるが25～40%の満足度を示している(73年度24.7%／83年度40.5%／93年度29.0%)。

医学部では、53年度卒業生が旧制卒業生なので63年度からみる。時代とともに満足度は下降し(63年度50.0%／73年度40.5%／83年度 28.1%)、93年度では16.7%と過去最低の満足度である。

工学部では、53年度で満足度が65.4%と4学部中最も高い。63年度で満足度は30.6%と大きく下がり、医学部同様時代とともに満足度は下降している(73年度28.5%／83年度 22.3%)。93年度では満足度が15.0%と過去最低の値で、しかも4学部中最も低い満足度である。

全体的に、一般教養課程の満足度は30～40%以下であり、時代とともに下がる傾向にある。その中でも、理科系の医学部・工学部はその傾向がさらに顕著で、93年度には両学部とも約15%まで満足度が下がっている。

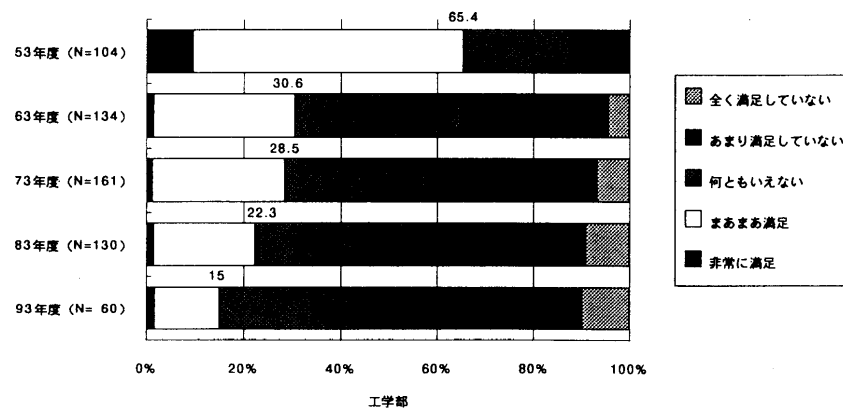
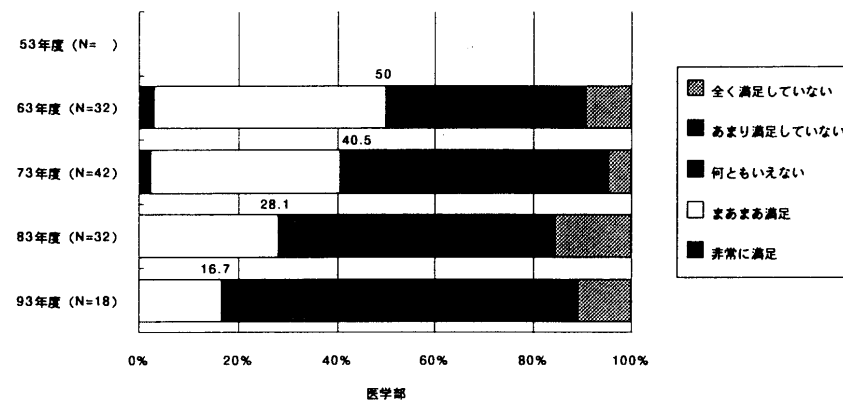
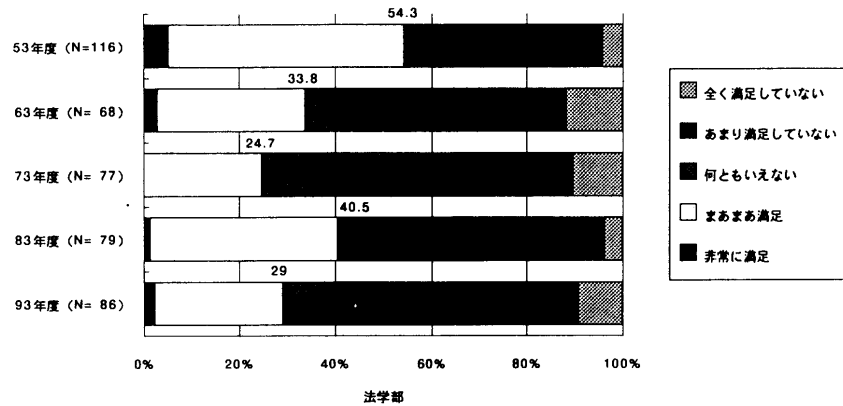
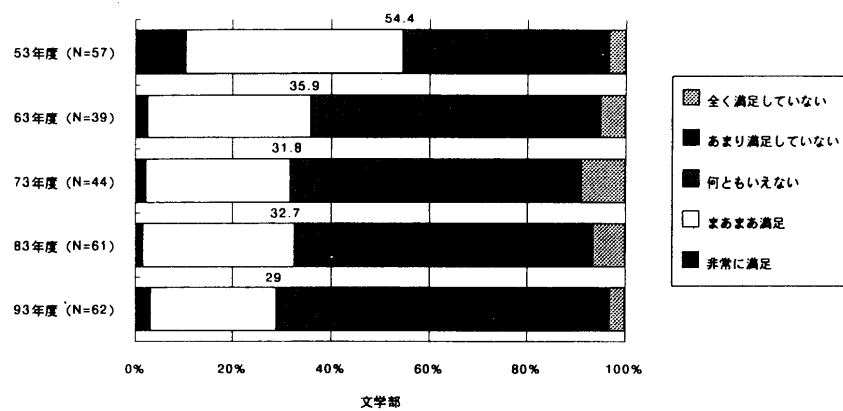


Figure7 一般教養課程の授業満足度

■ 専門課程 (Figure8 参照)

文学部では、53年度で満足度が最も高い(83.3%)。63年度で満足度がやや下がる(64.1%)が、以降93年度まで60%前後の満足度である(73年度56.8%/83年度59.0%/93年度61.3%)。

法学部では、53年度で77.9%と満足度が最も高い。以降93年度まで、満足度はゆっくり低下している(63年度71.0%/73年度62.3%/83年度61.7%/93年度58.6%)。それでも60%前後の満足度を示している。

医学部では、53年度77.5%、63年度86.5%と満足度は最も高い。しかし、73年度で満足度は48.9%まで下がり、さらに83年度には34.4%まで下がっている。しかし、93年度には満足度は上昇しており(55.6%)、満足度はやや回復している。

工学部では、53年度で4学部中満足度が最も高い(89.5%)。63年度から83年度にかけては70%前後の満足度である(63年度70.1%/73年度64.6%/83年度68.5%)が、93年度では53.3%と大きく下がっている。

全体的に、文科系の文学部・法学部は60%前後の満足度を保っており、時代が変わっても満足度の比率はさほど変わっていない。それに対して、医学部は73年度以降満足度が大きく低下し、83年度には4学部中最低の満足度となる。しかし、93年度には過半数まで回復している。工学部は、医学部ほどの大きな変動はないが、63年度から83年度にかけて維持していた70%前後の満足度が、93年度では50%近くまで下がっている。それでも全体的には、医学部の73年度、83年度の満足度をのぞき、過半数を下回ることはなかったといえる。

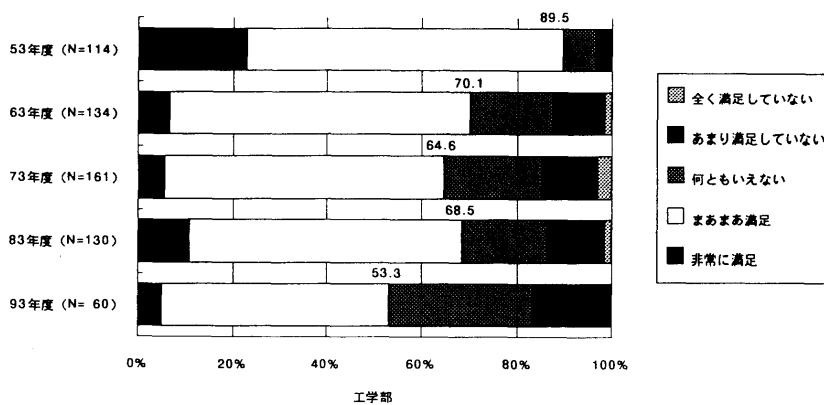
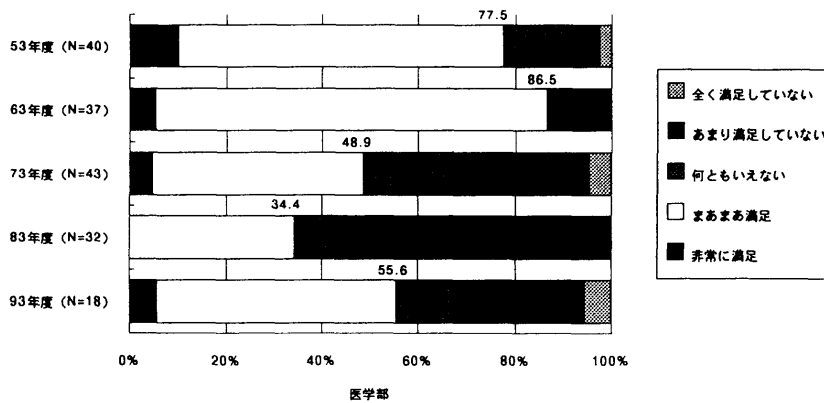
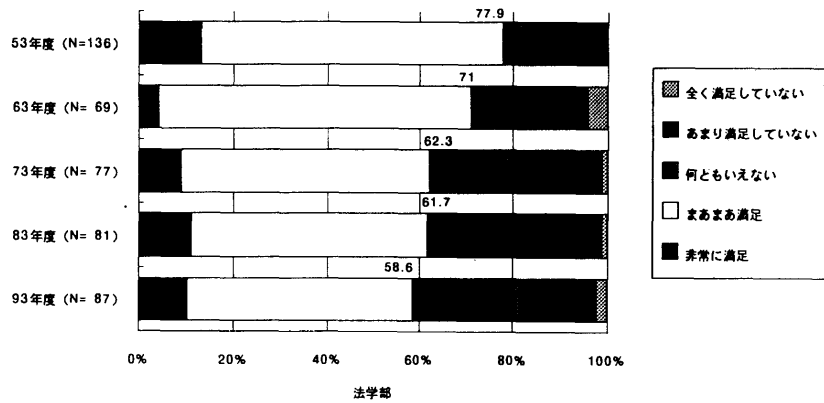
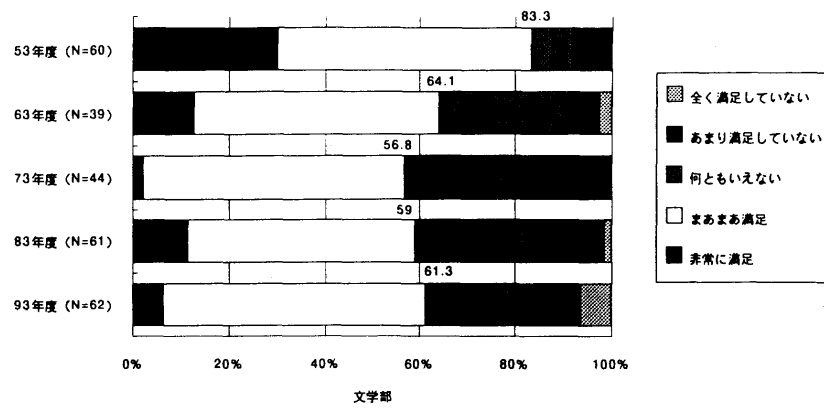


Figure8 専門課程の授業満足度

次のような授業を振り返って、全体的にどのくらい満足できるものでしたか。

《一般教養課程》

- | | |
|--------------------------|----------|
| a. 一般教養課程での“英語”の授業 | → “英語” |
| b. 一般教養課程での“英語”以外の外国語の授業 | → “英語以外” |
| c. 一般教養科目（人文・社会系） | → “人文社会” |
| d. 一般教養科目（“自然”系） | → “自然” |

《専門課程》

- | | |
|---------------------|----------|
| e. 専門科目の講義 | → “専門講義” |
| f. 専門科目の演習 | → “専門演習” |
| g. 専門科目の実験（履修した方のみ） | → “専門実験” |

- | | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 非常に満足 | <input type="checkbox"/> まあまあ満足 | <input type="checkbox"/> 何ともいえない |
| <input type="checkbox"/> あまり満足していない | <input type="checkbox"/> 全く満足していない | |

■ 英語・英語以外・人文社会・自然 （Figure9 ～12参照）

文学部では、73年度で落ち込みがみられるものの、全体的に“英語以外”と“人文社会”で満足度が高く、“英語”と“自然”は満足度が低い。93年度の“英語以外”と“人文社会”は50％前後の満足度であり（“英語以外” 53.3％／“人文社会” 46.7％）、93年度の一般教養課程の満足度が29.0％であることを考えるならば、一般教養課程の満足度の低さは“英語”と“自然”に求められるようである。

法学部もほぼ同様の傾向にあり、全体的に“英語以外”と“人文社会”で満足度が高く、“英語”と“自然”は満足度が低い。93年度の“英語以外”と“人文社会”は40％程度の満足度であり（“英語以外” 42.5％／“人文社会” 40.7％）、93年度の一般教養課程の満足度が29.0％であることを考えるならば、一般教養課程の満足度の低さは“英語”と“自然”に求められるようである。

医学部では、はっきりとした傾向がよみにくいが、93年度では全体的に20～35％の満足度である（“英語” 29.4％／“英語以外” 35.3％／“人文社会” 23.5％／“自然” 23.5％）。一般教養課程全体の満足度は年々下降しているが、コース別ではそれほど目立った上昇も下降もみられない。

工学部では、“英語” “英語以外” “人文社会”と時代の推移とともに大きな変化はみられないが、“自然”の満足度は減少傾向にある。93年度の“自然”の満足度は16.7％と、全学部、全コースの中で最も低い。

全体的に、文学部と法学部では“英語以外”と“人文社会”の満足度は高いが、“英語”と“自然”の満足度は低い。医学部と工学部では、一般教養課程全体における満足度が時代とともに下降していたのに比べ、各コース別ではさほど大きな特徴がみられなかった。但し、工学部の“自然”における満足度の減少傾向は大きなものであった。

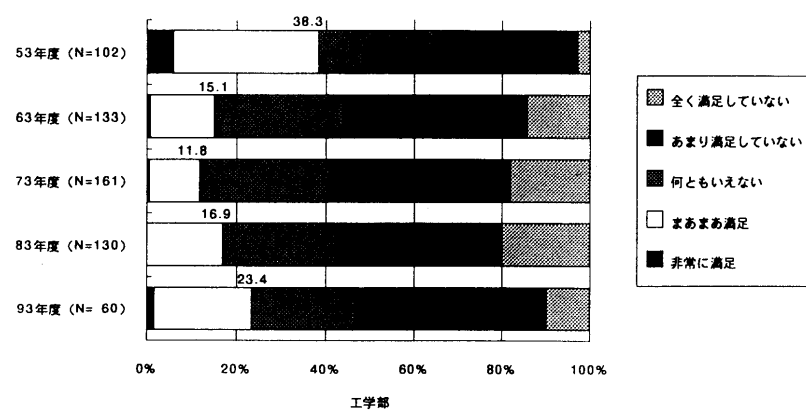
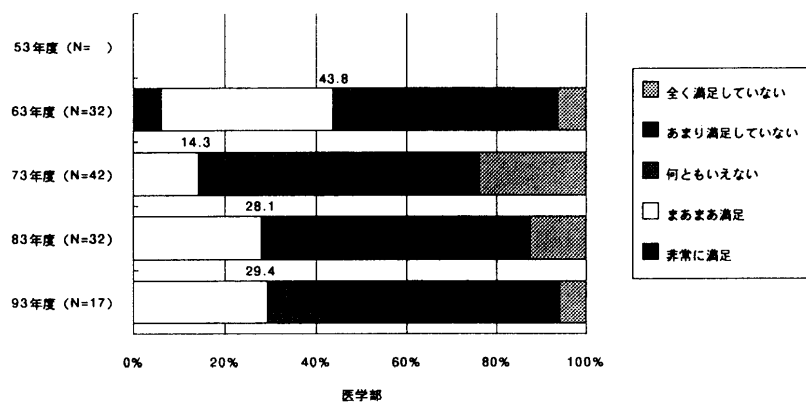
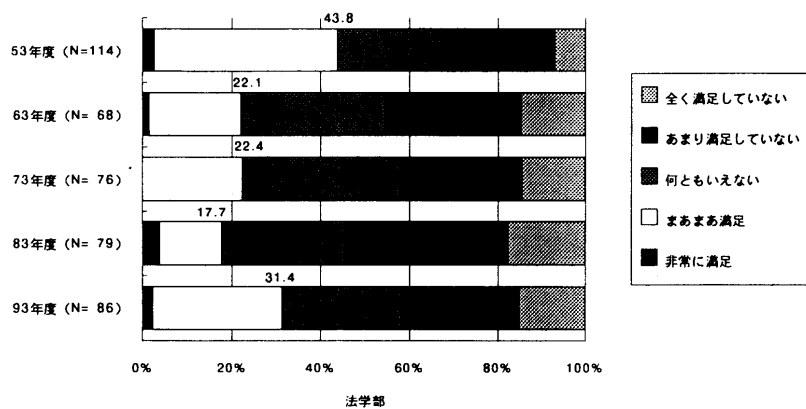
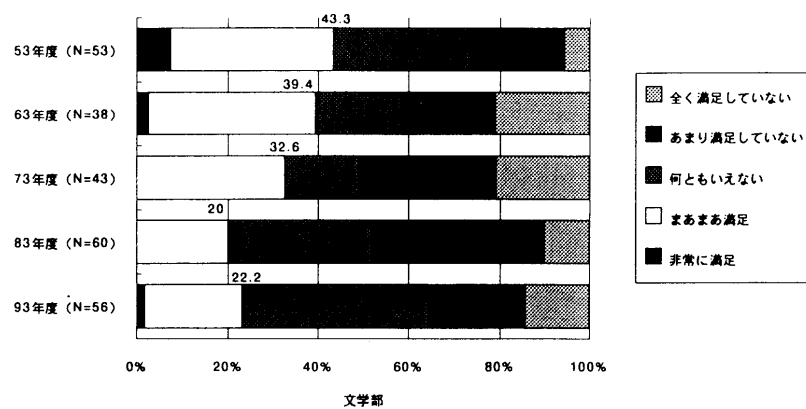


Figure9 英語の授業満足度

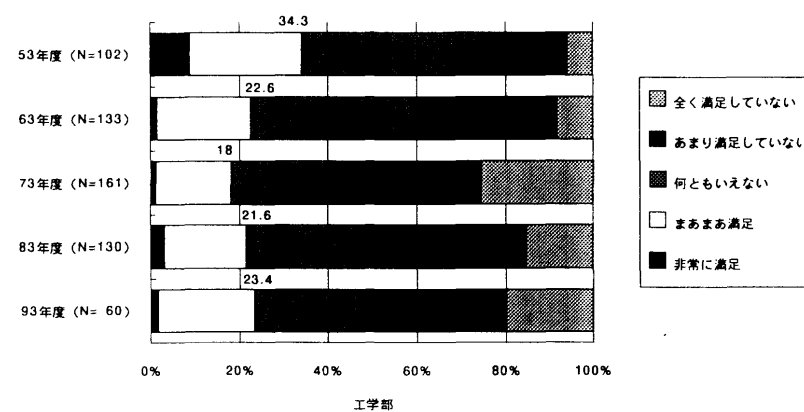
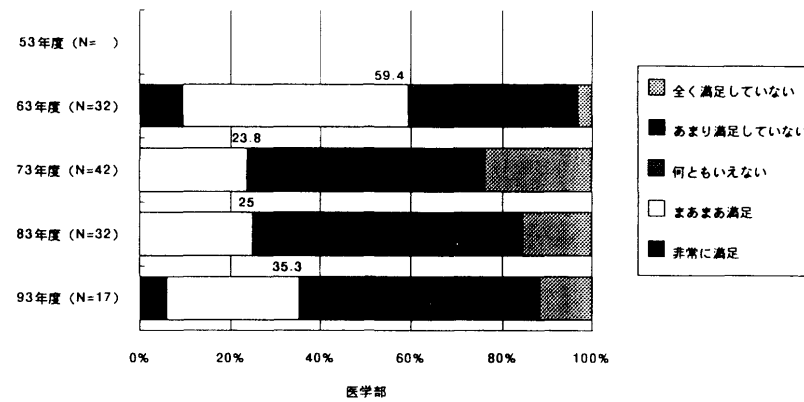
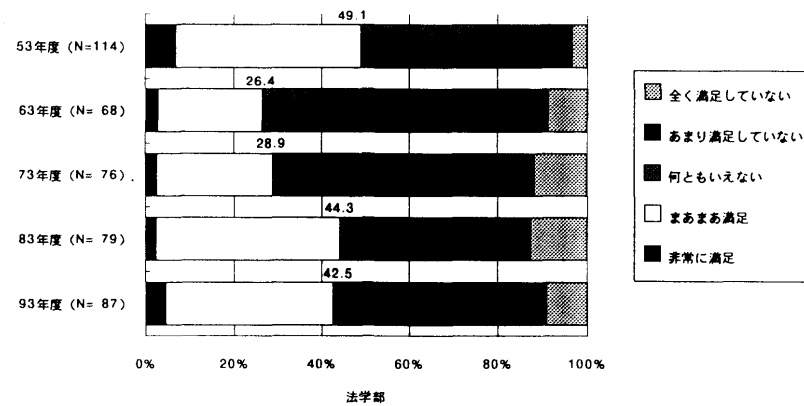
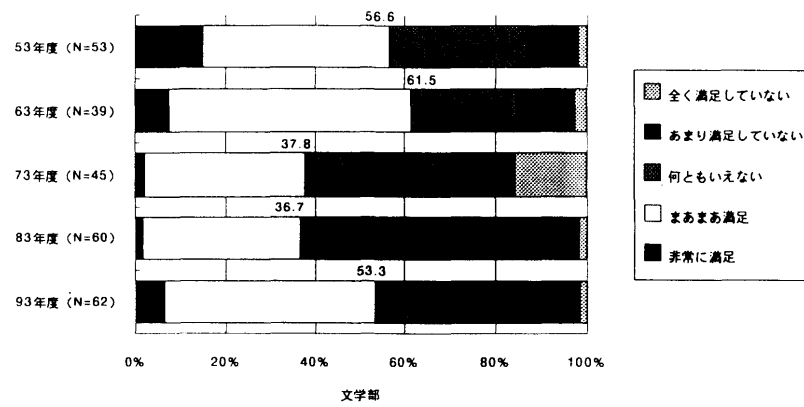


Figure10 英語以外の授業満足度

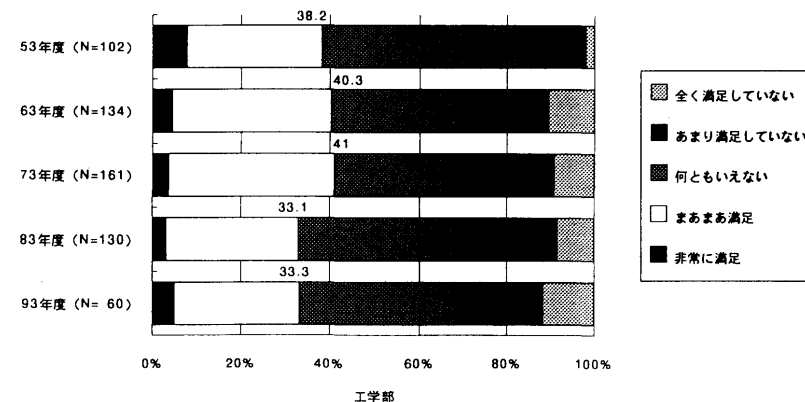
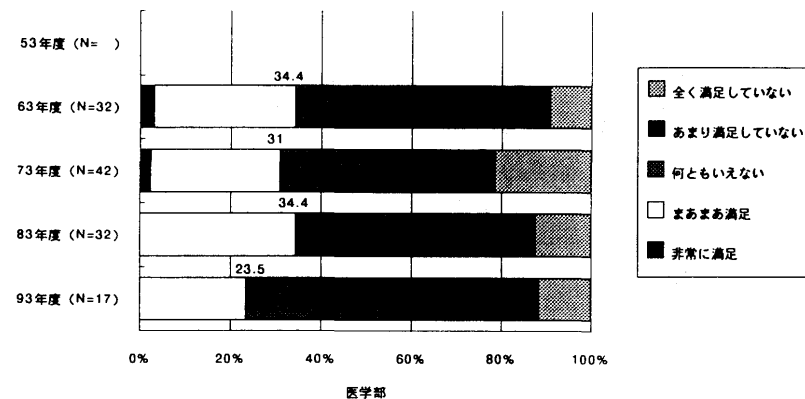
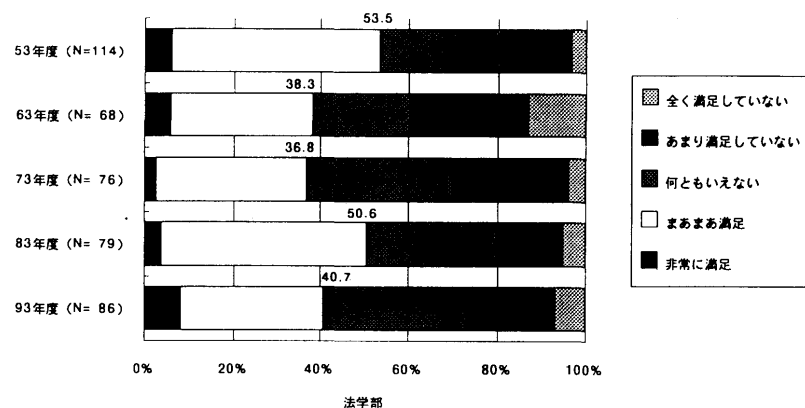
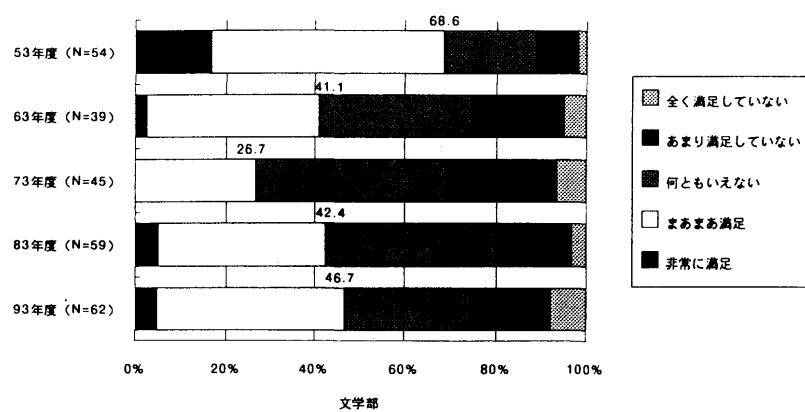


Figure11 人文社会の授業満足度

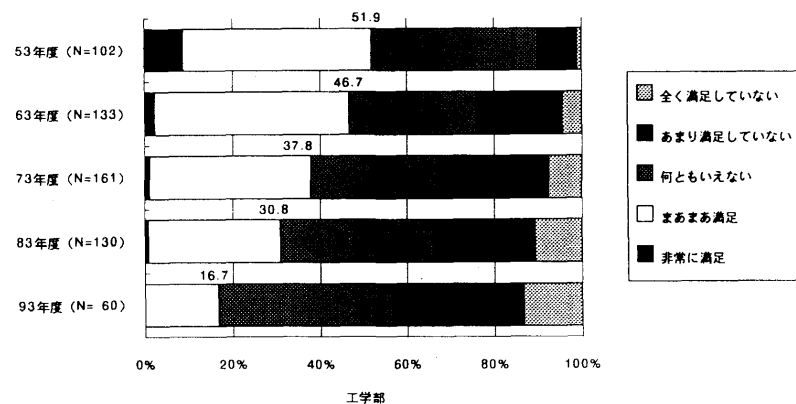
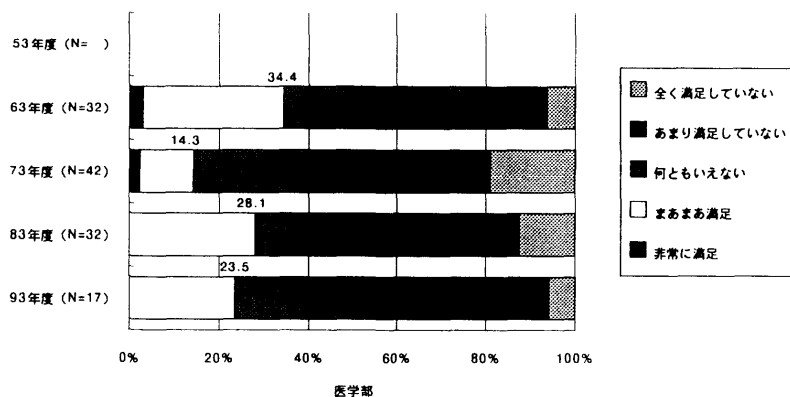
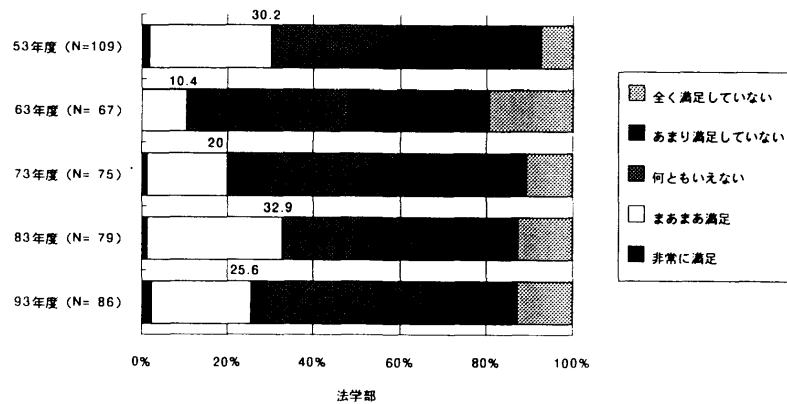
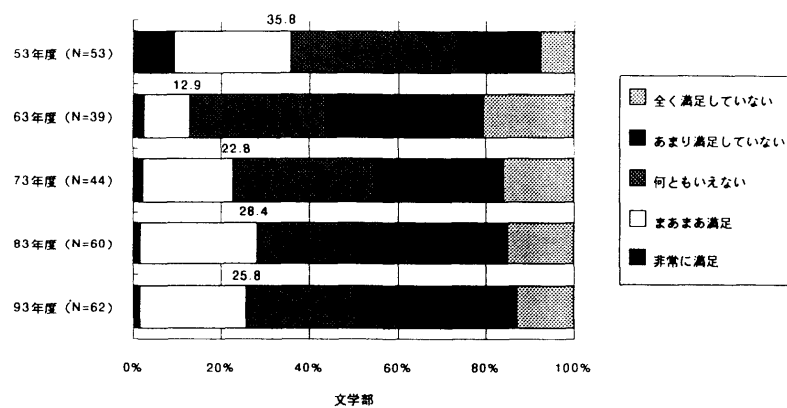


Figure12 自然の授業満足度

■ 専門講義・専門演習・専門実験 (Figure13～15参照)

文学部では、“専門講義” “専門演習” とともに満足度はやや減少傾向にあるが、特に大きな変化はみられない。“専門講義” “専門演習” とともに50～60％程度の満足度である。“専門演習”の方が“専門実験”に比べて満足度はやや高い。

法学部の“専門講義”では、全体的に満足度はゆっくり下降している。53年度～83年度までは、60～70％の満足度である（53年度74.1％／63年度68.1％／73年度61.8％／83年度60.5％）が、93年度では満足度が大きく減少している（49.4％）。逆に、“専門演習”では時代とともに満足度が増加しており、53年度では55.3％であったのが、93年度では75.6％まで満足度が上昇している。このような上昇傾向は、全学部、全コースの中で法学部の“専門演習”だけである。

医学部では、専門課程全体の満足度と同様に、53年度、63年度の70％以上の高い満足度から、73年度以降30～50％程度の満足度まで大きく減少しているが、93年度では83年度に比べて“専門講義” “専門演習” “専門実験” いずれにおいても満足度はやや上昇している（専門講義41.2％／専門演習56.3％／専門実験64.3％）。

工学部では、53年度で“専門講義” “専門演習” “専門実験” のいずれにおいても高い満足度を示している（専門講義87.7％／専門演習80.5％／専門実験73.6％）が、63年度以降は満足度が減少している。それでも、“専門講義” “専門演習” “専門実験” のいずれにおいても50～60％程度の満足度である。

全体的に、全学部ともに53年度を満足度の頂点として減少傾向にある。工学部を除き、“専門講義”より“専門演習”の方が満足度は高く、法学部の“専門演習”においては時代とともに満足度が上昇傾向にあった。

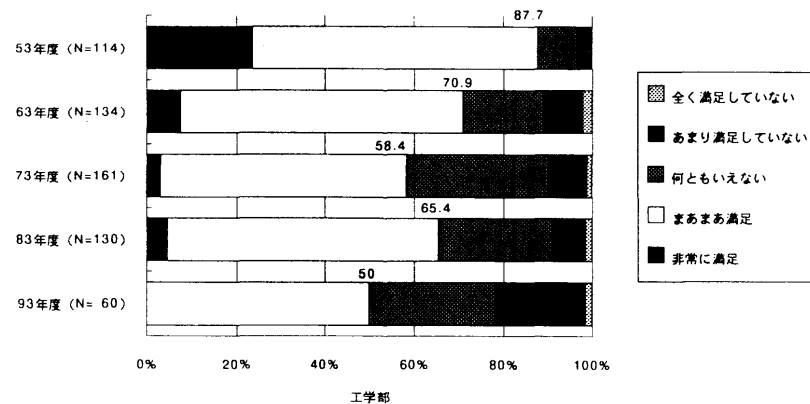
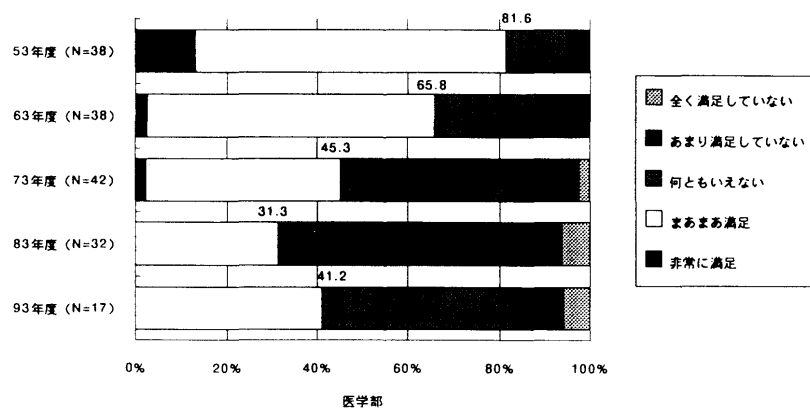
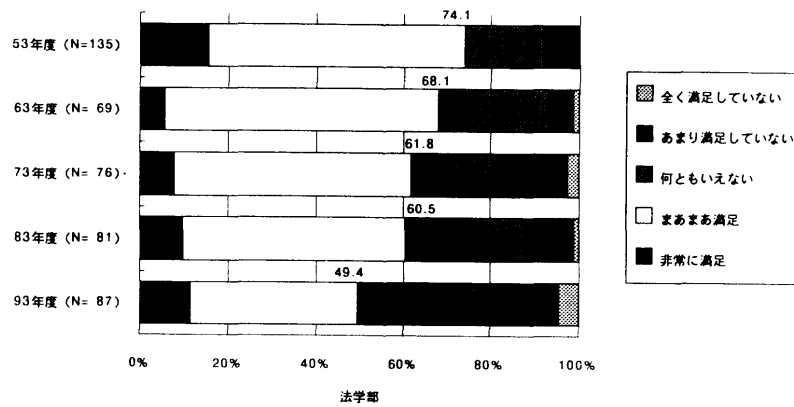
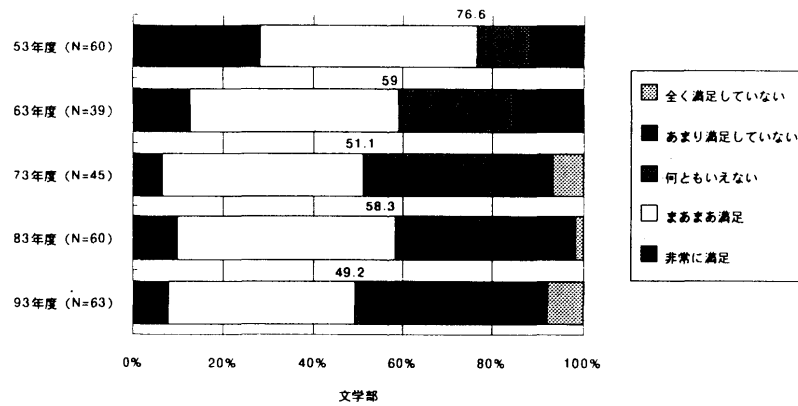


Figure13 専門講義の授業満足度

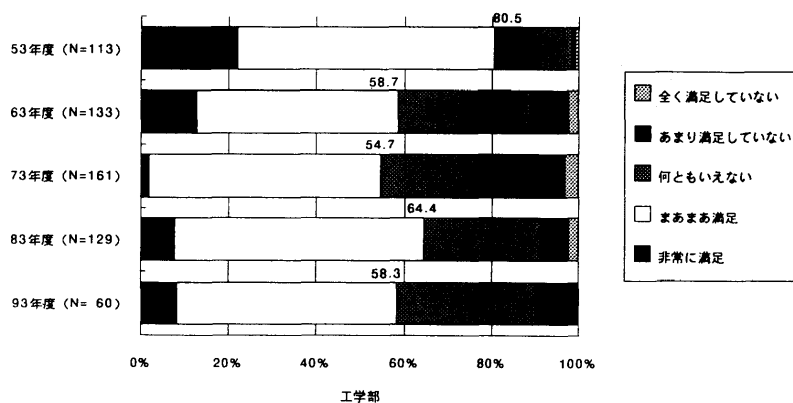
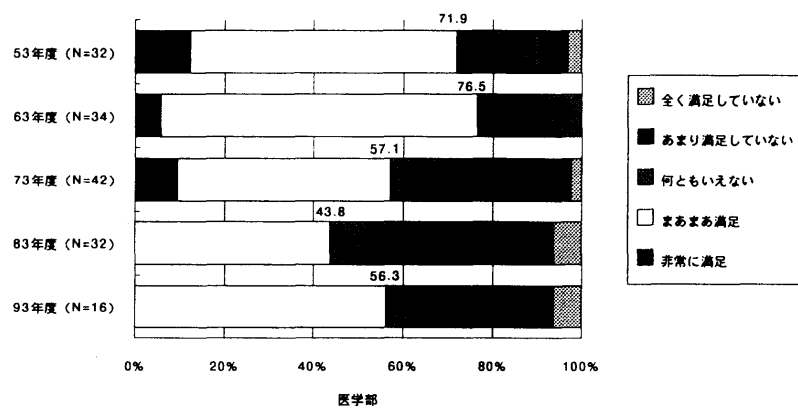
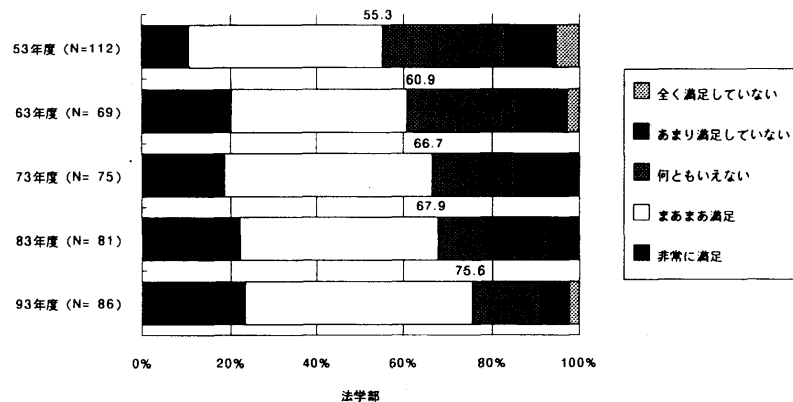
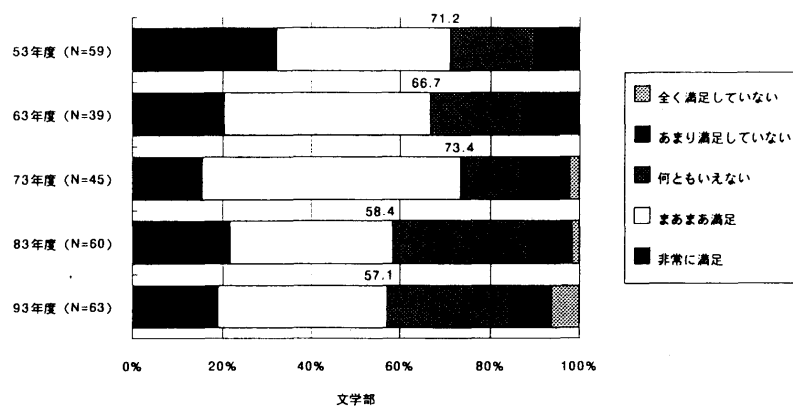


Figure14 専門演習の授業満足度

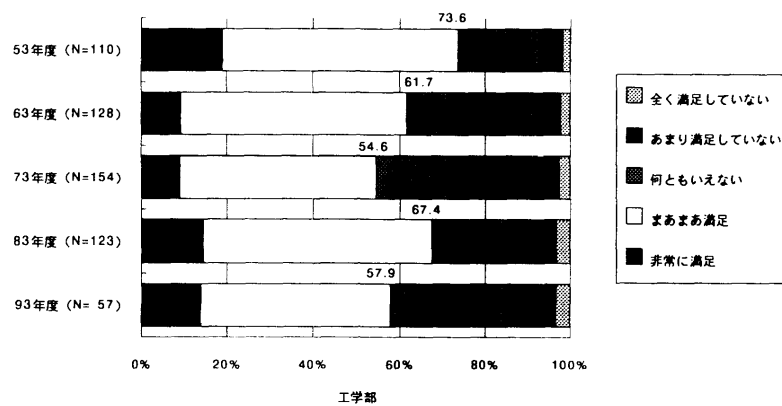
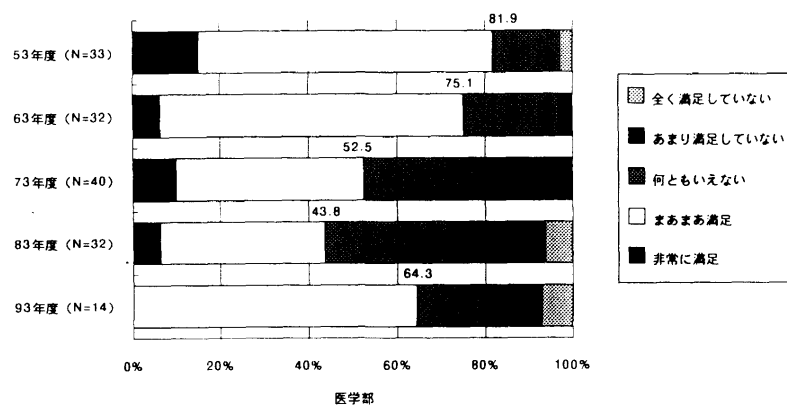


Figure15 専門実験の授業満足度

大学4年間の授業満足度と一般教養課程・専門課程との関連

■ 目 的

大学4年間（6年間）の授業は、大きく一般教養課程と専門課程からなりたっている。さらに一般教養課程には大きく4つのコース（英語・英語以外の外国語、人文社会系・自然系）があり、専門課程にもその授業形態から3つの形態（講義・演習・実験）があげられる。ここでは、これら4つのコース（英語・英語以外の外国語、人文社会系・自然系）と3つの形態（講義・演習・実験）を用いて、一般教養課程・専門課程のうち何が大学4年間（6年間）の授業満足度を規定しているのかを調べる。

■ 方 法

一般教養課程では大きく4つのコース（英語・英語以外の外国語・人文社会系・自然系）について満足度を求め、専門課程では、授業の形態の違いから3つの形態（講義・演習・実験）について満足度を求めた。評価は“非常に満足”～“全く満足していない”までの5件法で求め、“非常に満足”“まあまあ満足”を統合し、満足度の指標とした。

次に、大学4年間（6年間）の授業満足度と一般教養課程・専門課程の授業満足度との関連をみるために、大学4年間（6年間）の授業を満足とした者を抽象し、それらの者が一般教養課程や専門課程の授業をどの程度満足していたかを調べる。戦後（53年度・63年度）と現代（83年度・93年度）それぞれについて検討をおこなう^{注2}。

■ 結果と考察 （Figure16参照）

文学部 戦後で大学4年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”であった（89.4%）。“専門演習”がこれに次ぐ（84.6%）。現代でも大学4年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”（76.9%）、“専門演習”（76.9%）であった。これより戦後・現代ともに、大学4年間の授業満足度を規定していたのは専門課程の講義・演習といえる。

法学部 戦後で大学4年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”（89.4%）であった。“専門演習”がこれに次いだ（68.6%）。現代でも大学4年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”（87.1%）、“専門演習”（78.5%）であった。これより戦後・現代ともに、大学4年間の授業満足度を規定していたのは専門課程の講義・演習といえる。

医学部 戦後で大学6年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”（89.7%）であり、“専門実験”（85.7%）がこれに次いだ。“専門演習”もこれにほぼ同様の比率であった（81.6%）。現代でも大学6年間の満足度を最も規定していたのは、戦後に比べて比率は下がるが、“専門講義”（75.0%）、“専門実験”（75.0%）と戦後と同じ傾向であった。“専門演習”は“専門講義”や“専門実験”に比べてやや低い比率であった（62.5%）。いずれにしても戦後・現代ともに、大学6年間の授業満足度を規定していたのは専門課程の講義や実験、演習といえる。

工学部 戦後で大学4年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”（91.0%）であり、“専門演習”（78.4%）がこれに次いだ。“専門実験”もこれにほぼ同様の比率であった（76.3%）。現代で大学4年間の満足度を最も規定していたのは、“専門講義”（85.4%）であり、“専門実験”（82.5%）がこれに次いだ。“専門演習”もこれにほぼ同様の比率であった（80.2%）。これより戦後・現代ともに、大学4年間の授業満足度を規定していたのは専門課程の講義や実験、演習といえる。

全体的に、戦後、現代、そして学部を問わず、大学4年間（6年間）の授業満足度を規定しているのは、専門課程の授業（講義や実験、演習）であった。

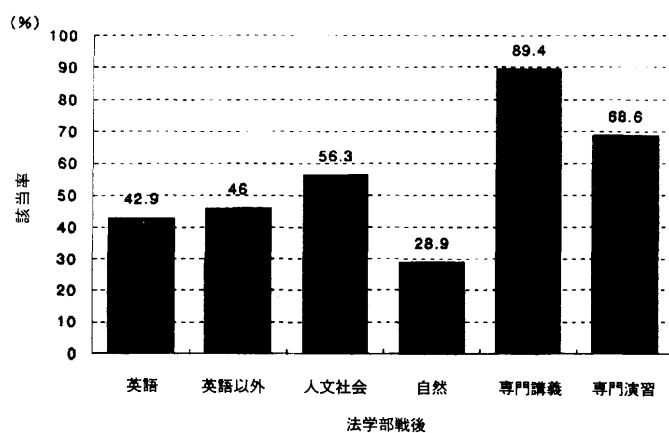
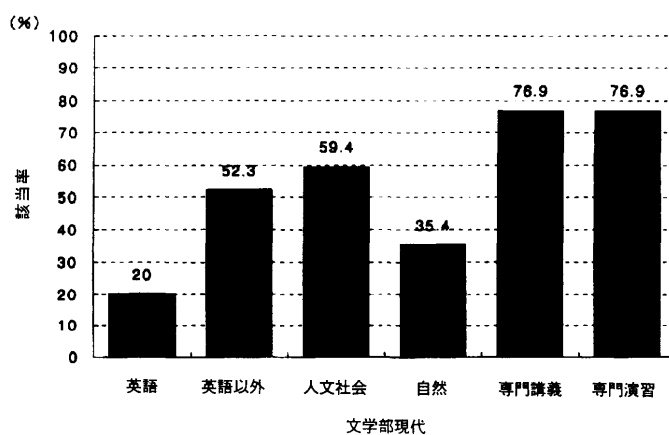
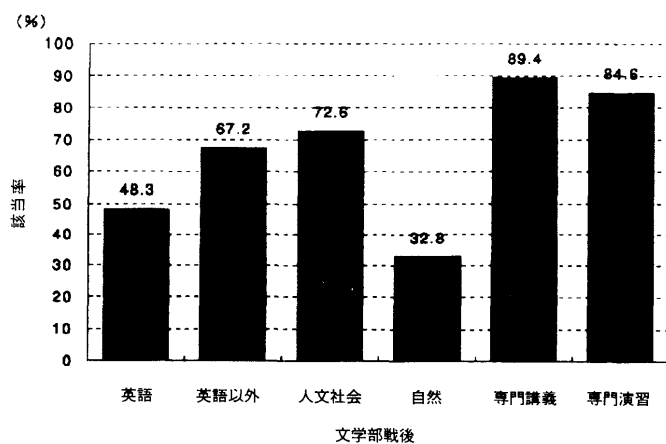


Figure16 4年間の授業と一般教養・専門課程との関連

注2 ここで、73年度の卒業者を除いて分析をおこなったのには、いくつかの理由がある。第一に、戦後から現代を大きくみて学生の質が最も変わったといわれるのは、冒頭でも述べたように70年前後である。第二に、73年度の卒業者の多くは学園紛争期に入学してきており、一般教養は受けられなかった等という記述が多くみられた。それ故に、73年度の卒業者は、かなり特殊な状況におかれていたと考えられる。よって73年度卒業者は戦後、現代の比較をする際には分析対象から除外することとし、以下この視点を同様に用いることとする。

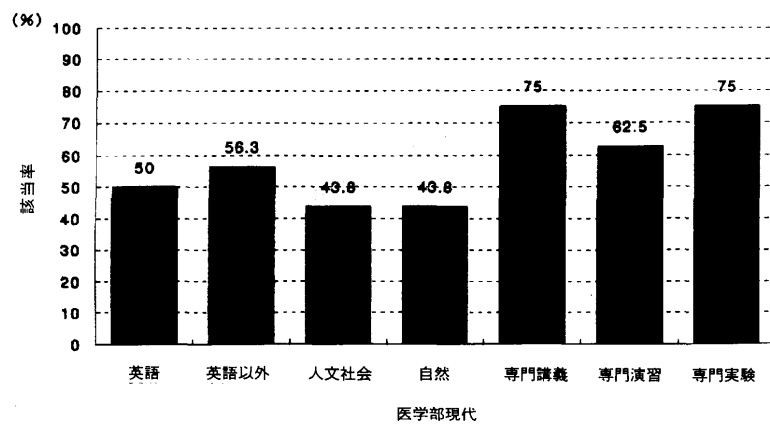
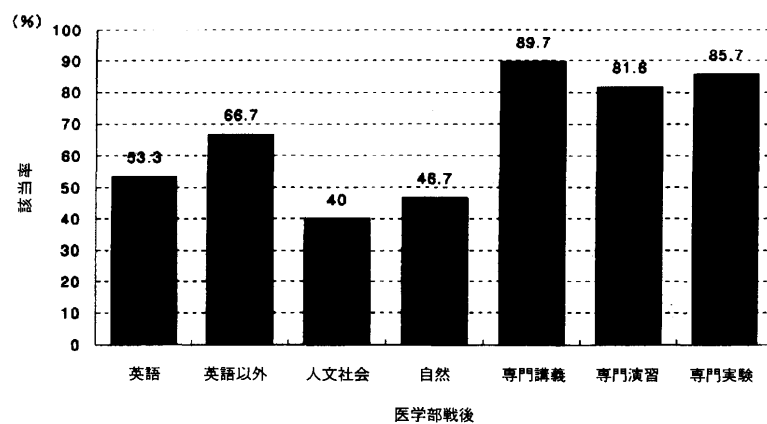
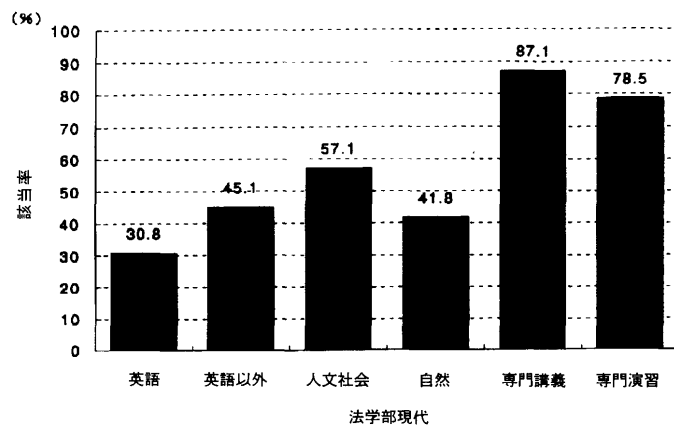


Figure16 4年間の授業と一般教養・専門課程との関連 (続き)

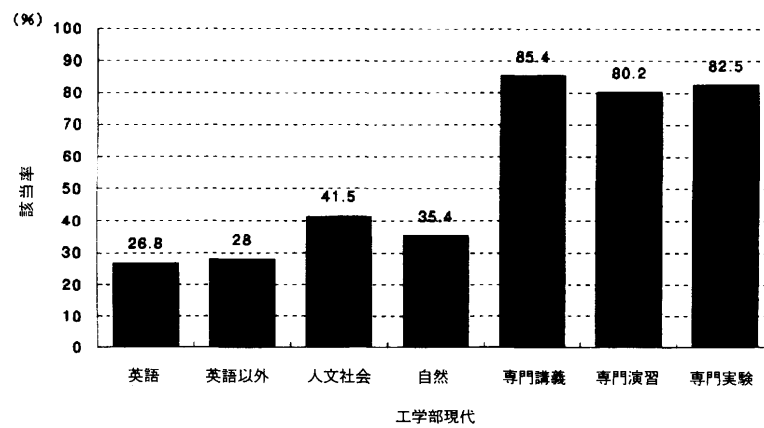
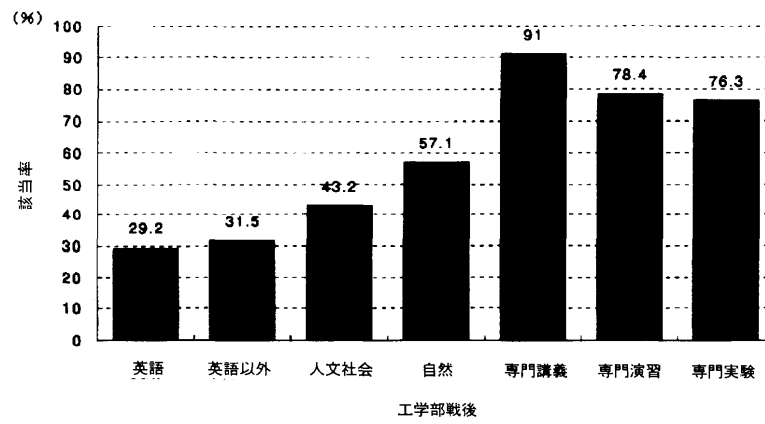


Figure16 4年間の授業と一般教養・専門課程との関連 (続き)

大学4年間の授業満足度と大学生活との関連

あなたの大学時代の生活はどういうものだったでしょうか。次にあげる事柄のそれぞれについて、最もあてはまる番号を（ ）に記入して下さい。

【クラブ参加】

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| () 体育系のクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した | →体育系のクラブに参加 |
| () 文化系のクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した | →文化系のクラブに参加 |
| () 社会的・政治的なクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した | →政治的なクラブに参加 |
| () 宗教的なクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した | →宗教的なクラブに参加 |

【学業活動】

- | | |
|------------------------|--------------|
| () 大学の研究室によくいった | →研究室によく行った |
| () 先生と親しくつきあった | →先生と親しくつきあった |
| () 大学の図書館・図書室によくいった | →図書館によく行った |
| () 将来つこうとする職業を常に考えていた | →将来の職業を考えていた |

【日常生活】

- | | |
|-------------------------|--------------|
| () 自分の趣味の活動にうちこんだ | →趣味の活動にうちこんだ |
| () コンパや酒を飲みにいく機会がよくあった | →コンパの機会が多かった |
| () 遊んでばかりいた | →遊んでばかりだった |
| () アルバイトばかりしていた | →アルバイトばかりだった |

- (5) 非常にあてはまる (4) まあまああてはまる (3) どちらでもない
(2) あまりあてはまらない (1) 全くあてはまらない

■ 目 的

大学4年間（6年間）の授業満足度が、学生の大学生活のあり方とどう関連するか検討する。

■ 方 法

大学生活の項目として、大きく3領域からなる上記12項目を尋ねた。“非常にあてはまる”～“全くあてはまらない”まで5件法で評定を求め、以下分析の際には“非常にあてはまる”“まあまああてはまる”を統合して該当率とした。次に、大学4年間（6年間）の授業満足度では5段階評定のうち、“非常に満足”“まあまあ満足”を満足群、“あまり満足していない”“全く満足していない”を不満群とした。

そして、授業満足度と大学生活との関連をみるために、戦後（53年度・63年度）と現代（83年度・93年度）それぞれについて、満足群・不満群における該当率がどの程度みられるかを求めた。「1. 戦後から現代への変化」「2. 満足群と不満群の差異」という2方向から分析をおこない、30%以上の該当率の差をもって“差がみられる”とした^{注3}。

■ 結果と考察

戦後－現代、満足群－不満群における各項目の該当率をFigure17～28に示し、そして差がみられた項目の該当率をTable4にまとめた。

^{注3} 差については従来から代表的な検定論が用いられてきたが、筆者は差の検定についてはかなりの疑問を呈してしる。ここでは詳しく述べないが、30%の差というのは、筆者の経験してきたところ、検定にかけてもかなりの有意差を示す数字であり、そうでなくともかなりの厳しい判定数字であると考えている。また、以下の調査結果の報告は、筆者のこのような態度（30%の差を基準としたこと）からみられた結果と解釈して頂きたい。

1. 戦後から現代への変化

文学部 戦後と現代で差がみられたのは、不満群の「遊んでばかりだった（戦後0.0％－現代33.3％）」のみで、現代で該当率が高かった。

法学部 戦後と現代で差がみられたのは、不満群の「趣味の活動にうちこんだ（戦後16.7％－現代51.6％）」のみで、現代で該当率が高かった。

医学部 戦後と現代で差がみられたのは、満足群の「趣味の活動にうちこんだ（戦後38.9％－現代75.0％）」「遊んでばかりだった（戦後3.8％－現代43.8％）」の2項目で、いずれも現代で該当率が高かった。

工学部 戦後と現代で差がみられたのは、不満群の「遊んでばかりだった（戦後13.8％－現代47.5％）」のみで、現代で該当率が高かった。

2. 満足群と不満群の差異

文学部 満足群と不満群で差がみられたのは、戦後の「先生と親しくつきあった（満足群42.2－不満群8.3％）」、「研究室によく行った（満足群43.1－不満群8.3％）」の2項目であった。いずれも満足群の方が不満群に比べて該当率が高い。

法学部 満足群と不満群で差はみられなかった。

医学部 満足群と不満群で差はみられなかった。

工学部 満足群と不満群で差がみられたのは、戦後の「先生と親しくつきあった（満足群45.7％－不満群13.8％）」のみで、満足群の方が不満群に比べて該当率が高い。

Table4 大学4年間の授業満足度と大学生活との関連

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【クラブ参加】								
体育系のクラブに参加								
文科系のクラブに参加								
政治的なクラブに参加								
宗教的なクラブに参加								
【学業活動】								
研究室によく行った	43.1 8.3							
先生と親しくつきあった	42.2 8.3			45.7 13.8				
図書館によく行った								
将来の職業を考えていた								
【日常生活】								
趣味の活動にうちこんだ		16.7	38.9			51.6	75.0	
コンパの機会が多かった								
遊んでばかりだった	0.0		3.8	13.8	33.3		43.8	47.5
アルバイトばかりだった								
満足群 (N=)	64	133	52	171	66	89	16	80
不満群 (N=)	12	18	9	28	24	31	19	40

(注1) 上段は満足群の該当率(%)、下段は不満群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

戦後から現代にかけて若干の変化はみられるが、それでも全体的には、大学4年間（6年間）の授業満足度は、種々のクラブ・サークル活動（体育系・文科系等）や日常生活のあり方（趣味やアルバイトなど）に規定されるものではなかった。

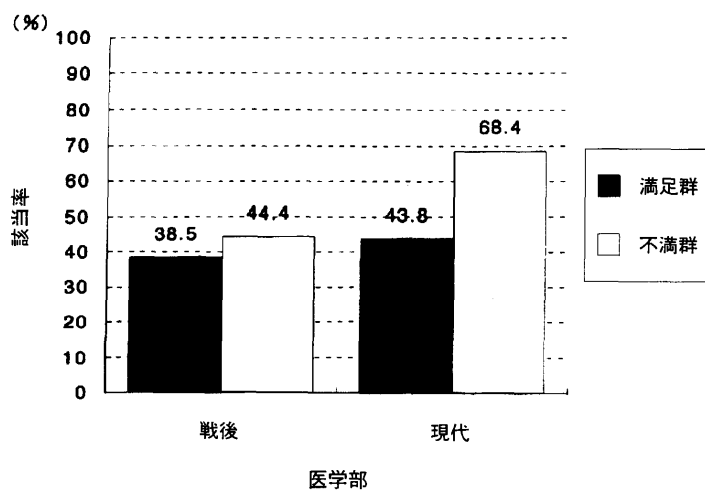
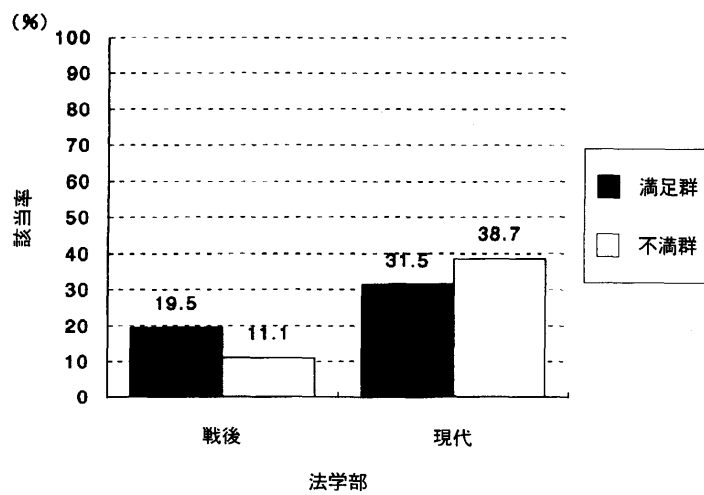
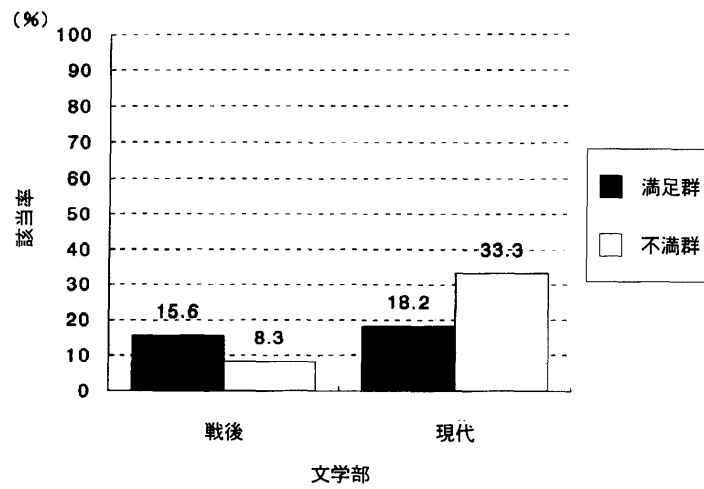


Figure17 体育系のクラブに参加

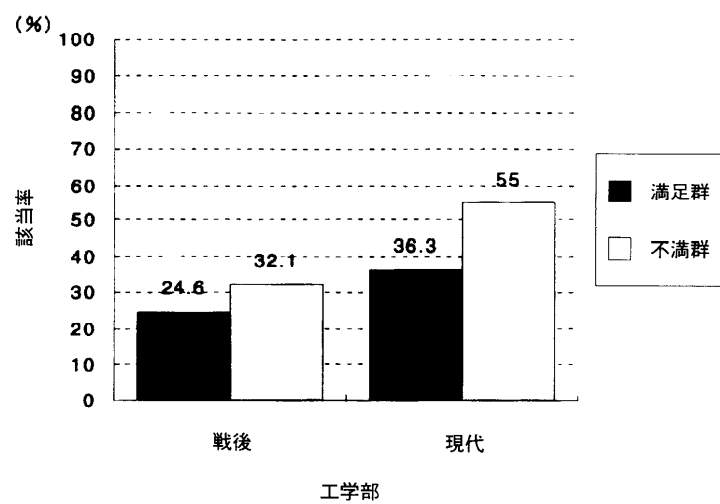


Figure17 体育系のクラブに参加 (続き)

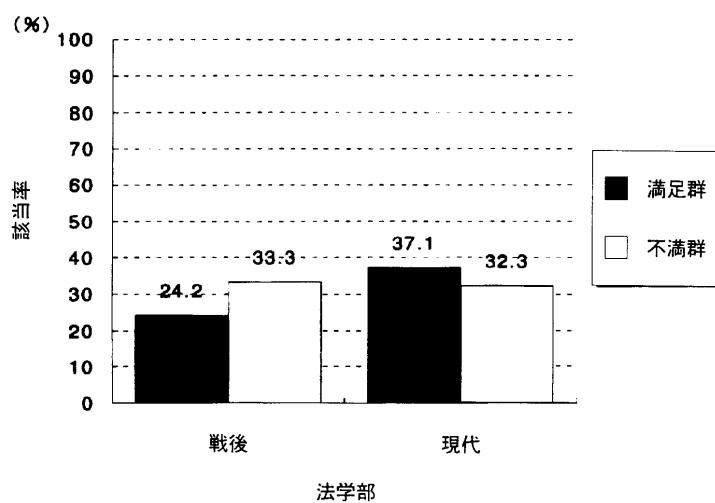
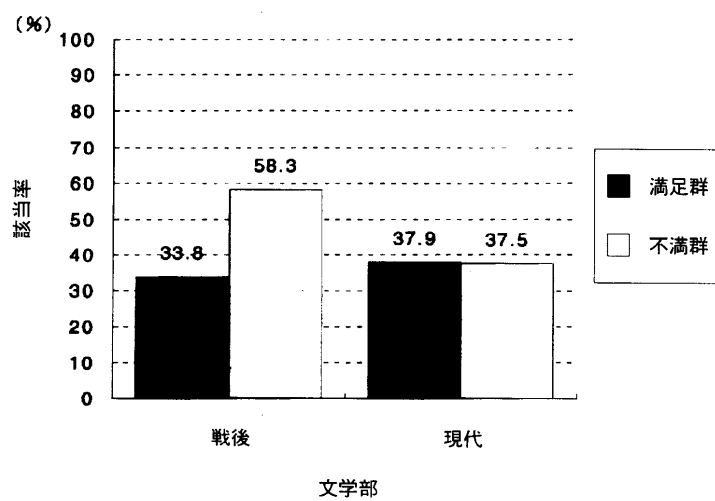


Figure18 文化系のクラブに参加

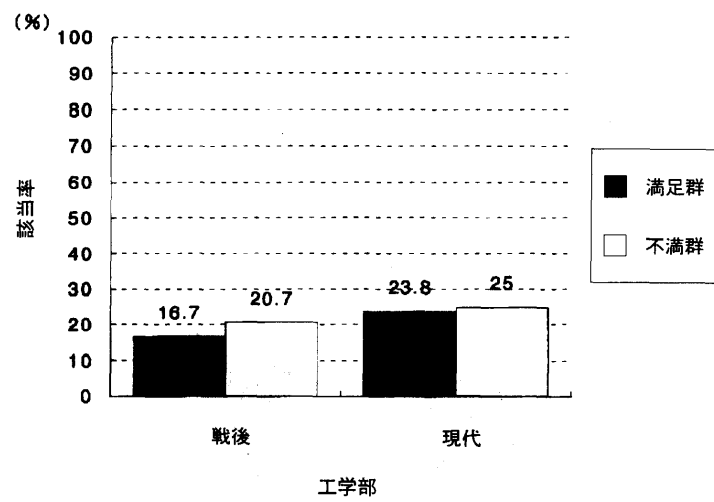
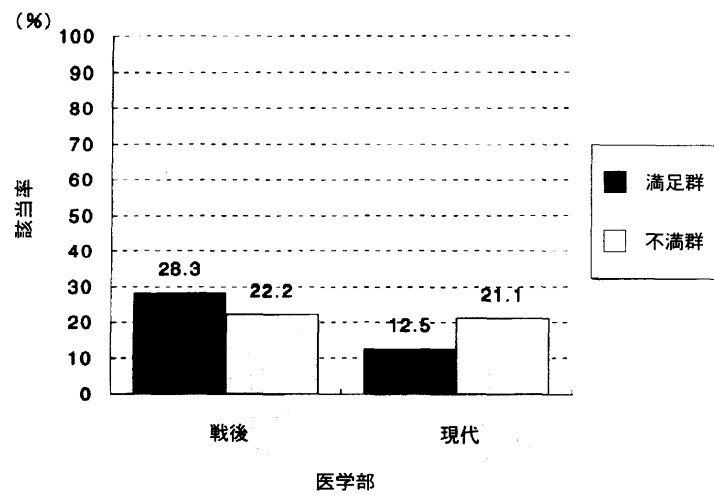


Figure18 文化系のクラブに参加 (続き)

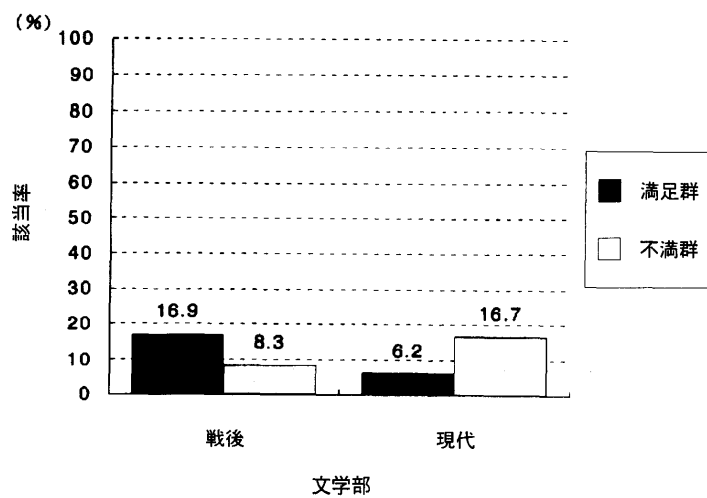


Figure19 政治的なクラブに参加

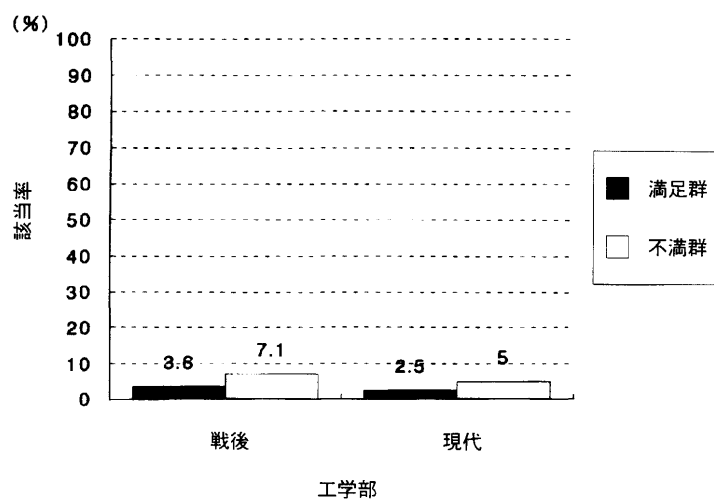
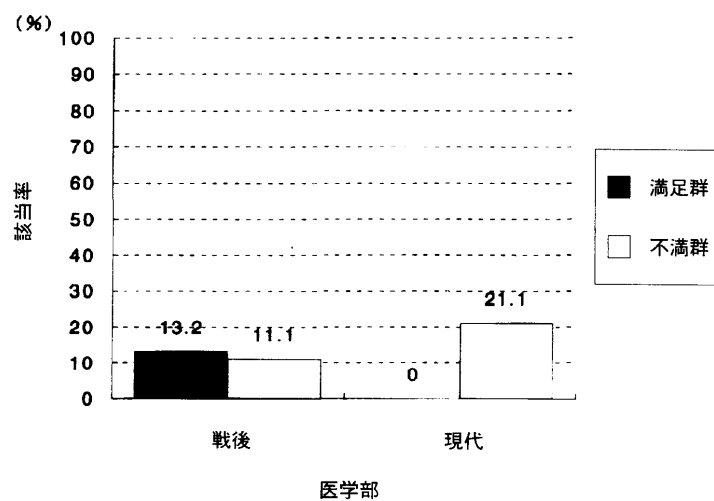
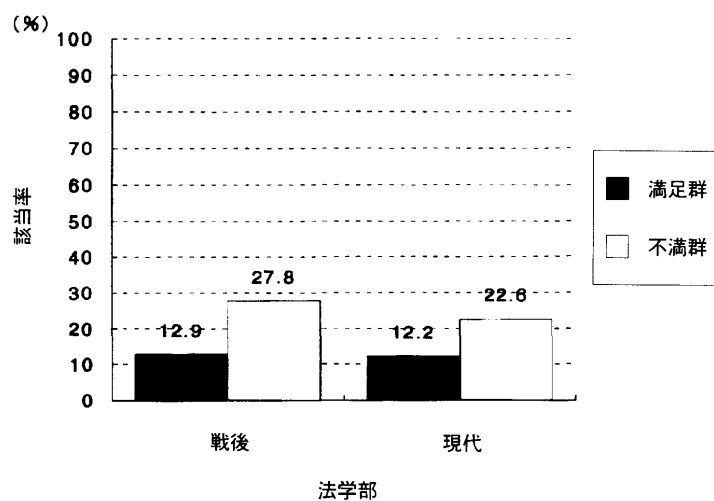


Figure19 政治的なクラブに参加（続き）

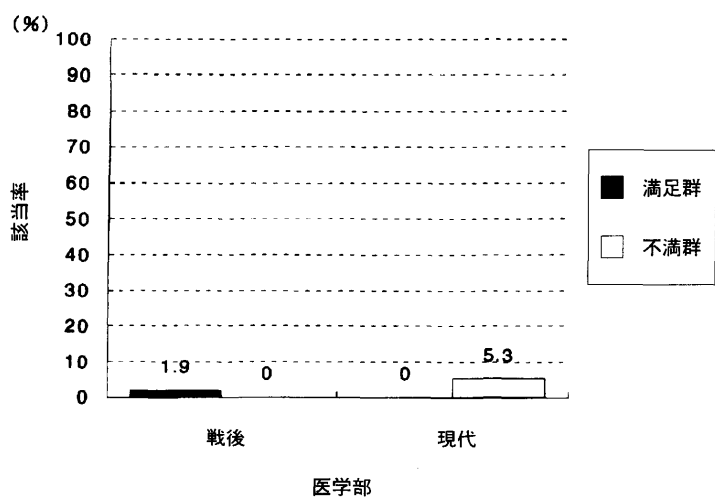
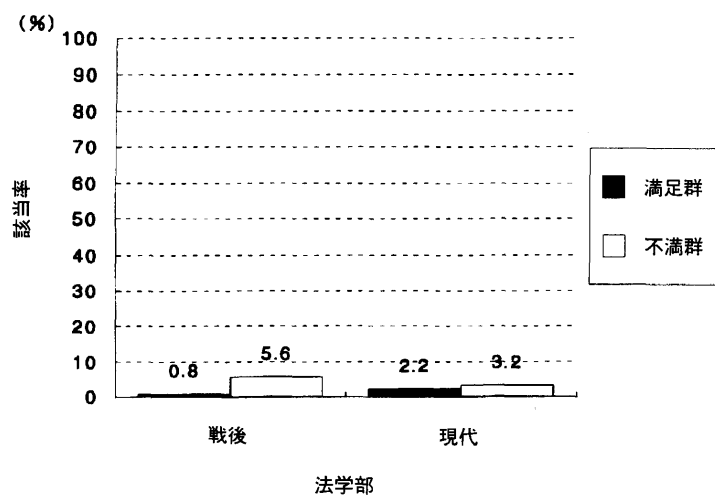
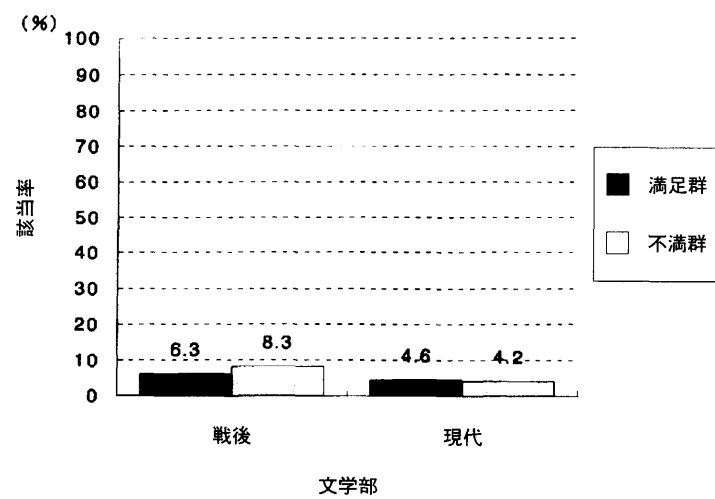


Figure20 宗教的なクラブに参加

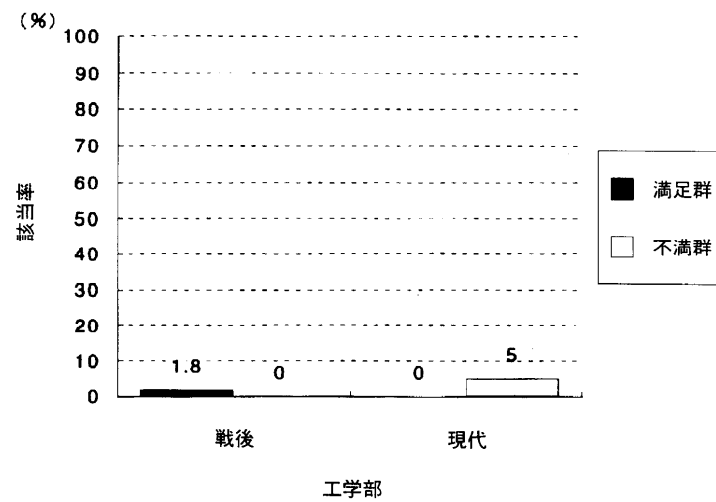


Figure20 宗教的なクラブに参加（続き）

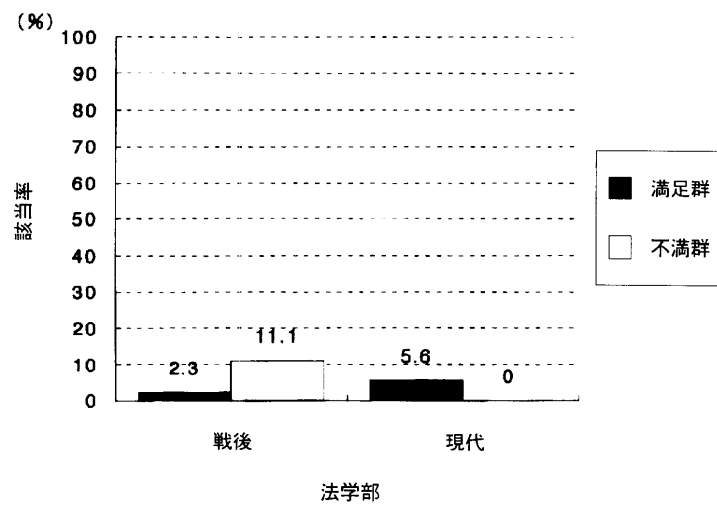
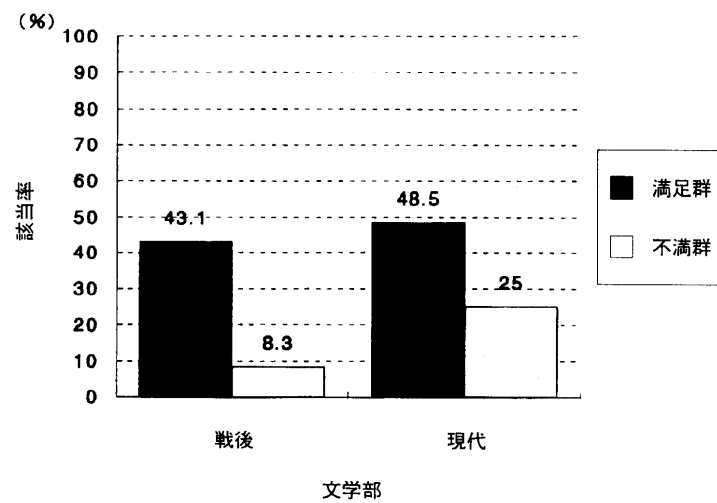


Figure21 研究室によく行った

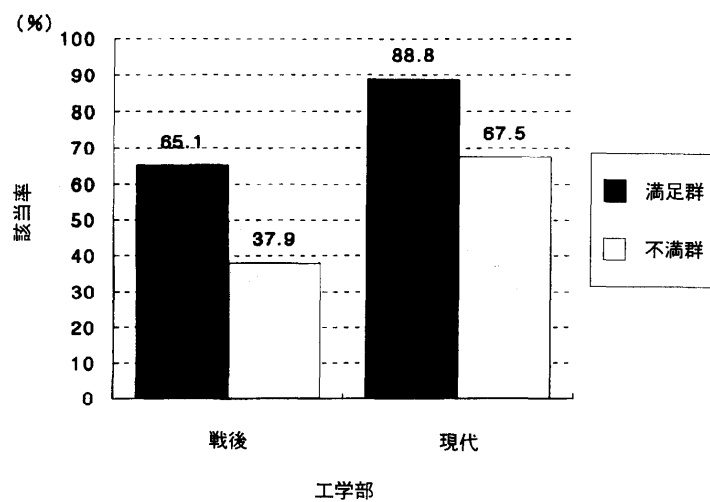
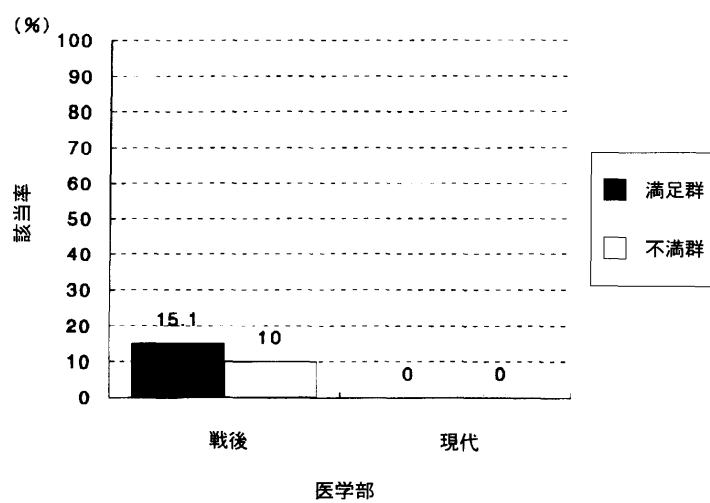


Figure21 研究室によく行った (続き)

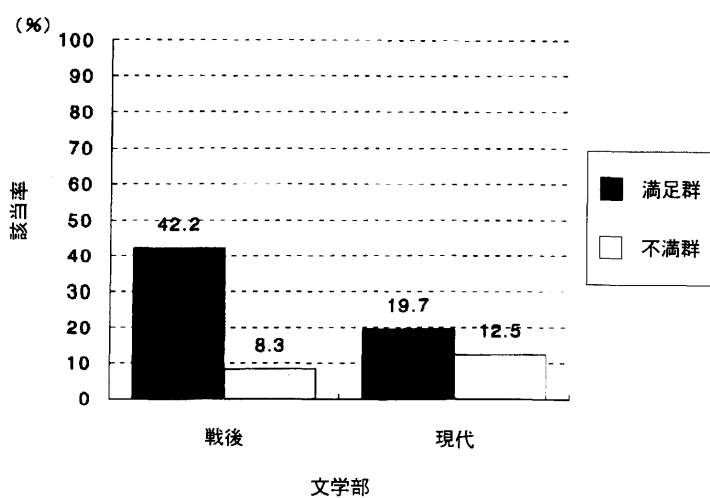


Figure22 先生と親しくつきあった

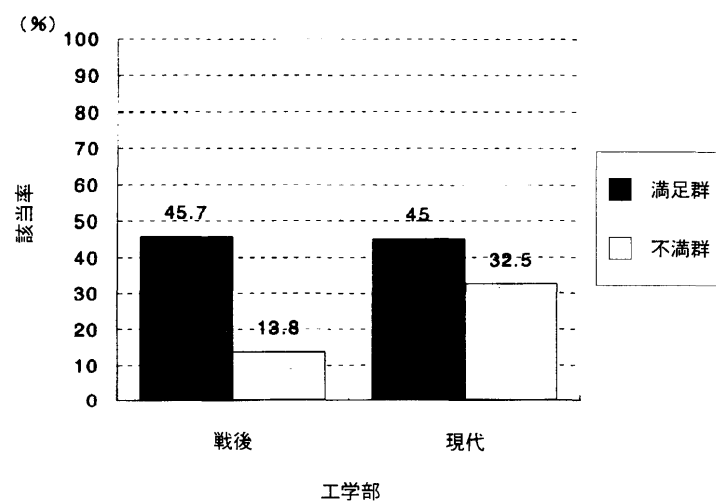
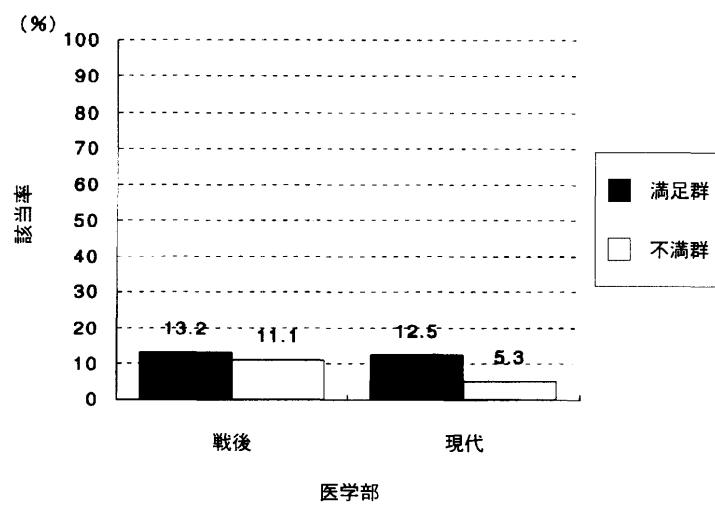
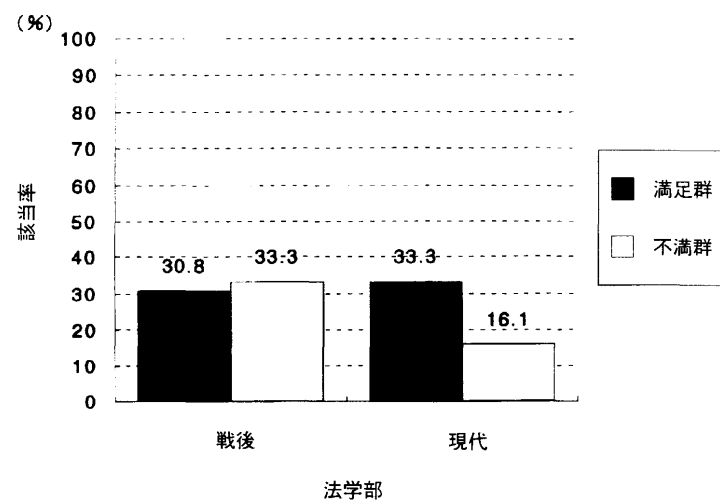


Figure22 先生と親しくつきあった（続き）

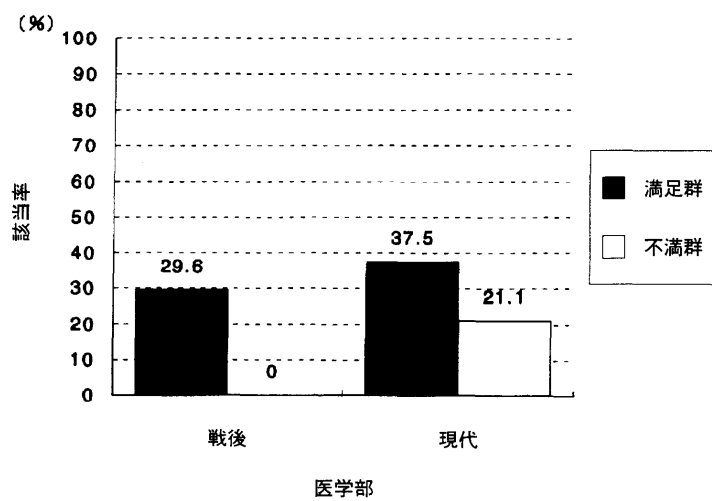
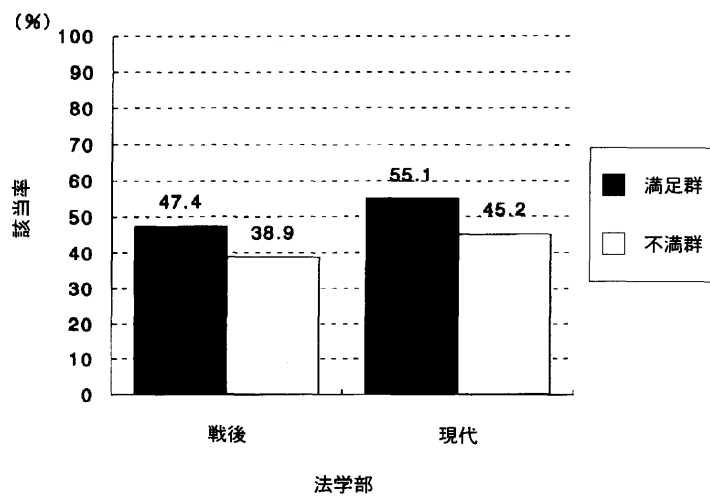
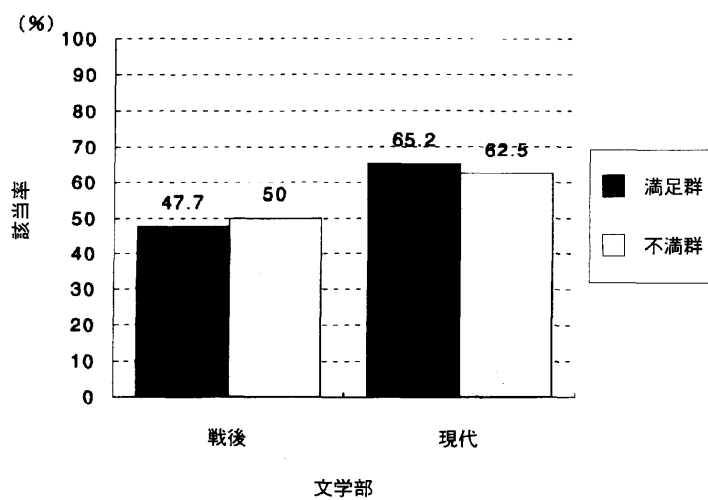


Figure23 図書館によく行った

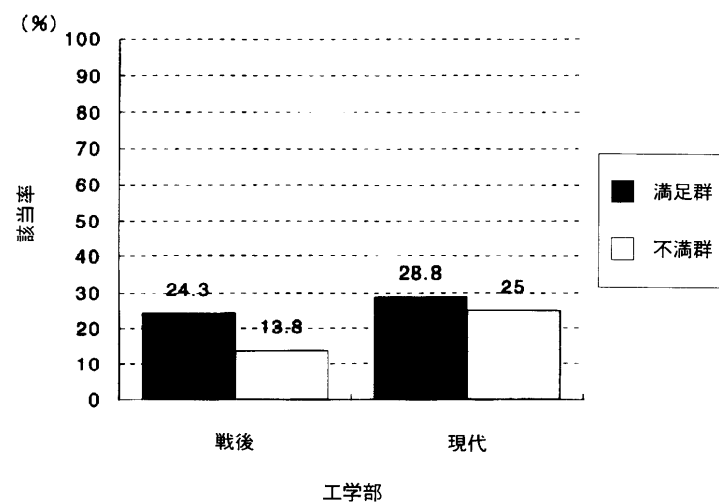


Figure23 図書館によく行った(続き)

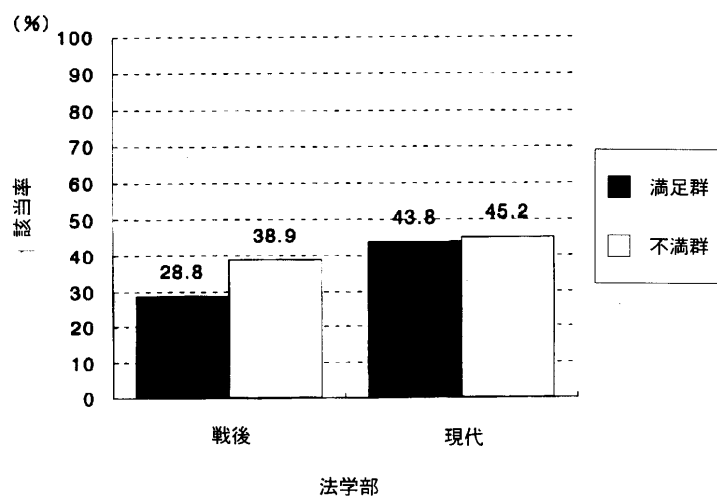
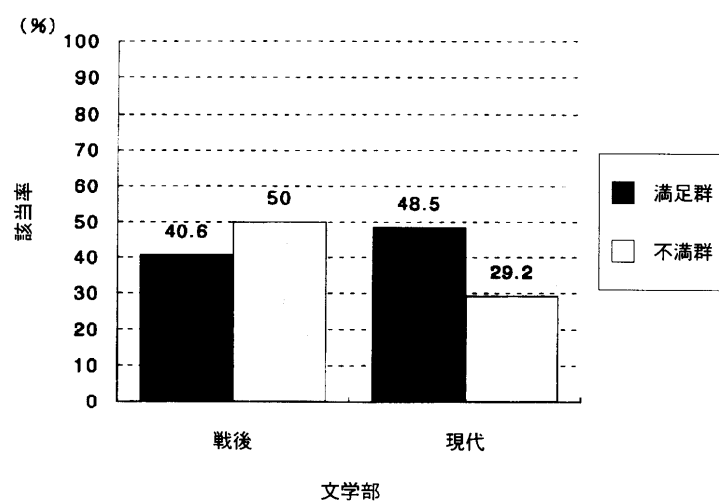


Figure24 将来の職業を考えていた

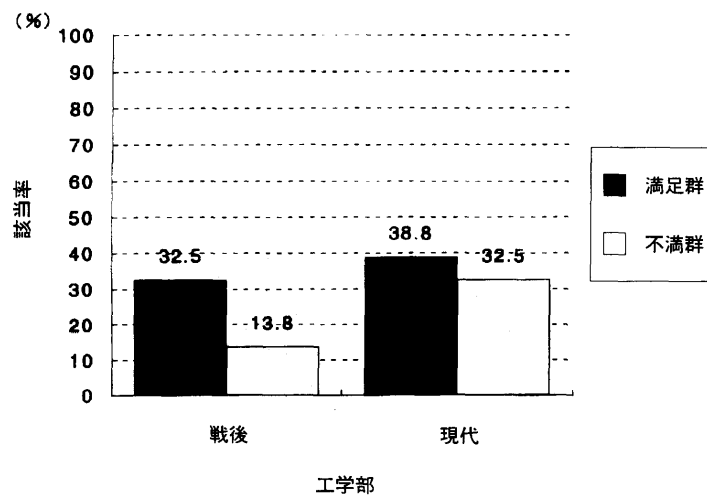
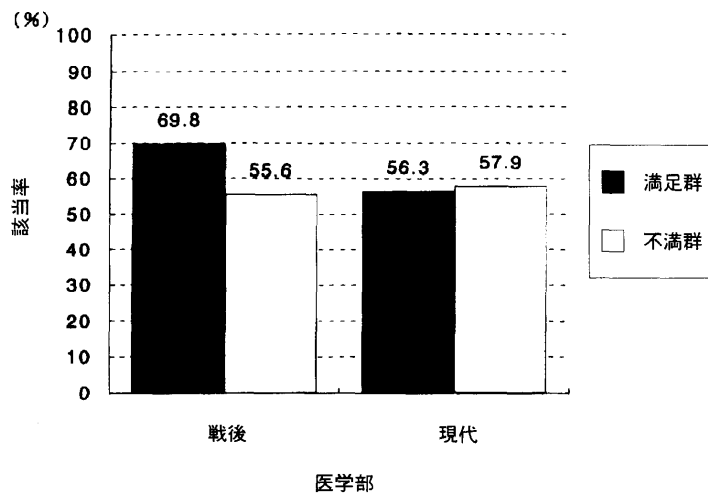


Figure24 将来の職業を考えていた (続き)

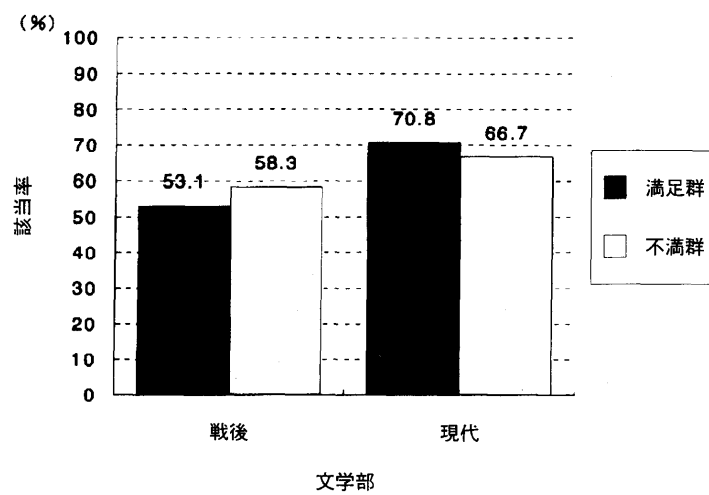


Figure25 趣味の活動にうちこんだ

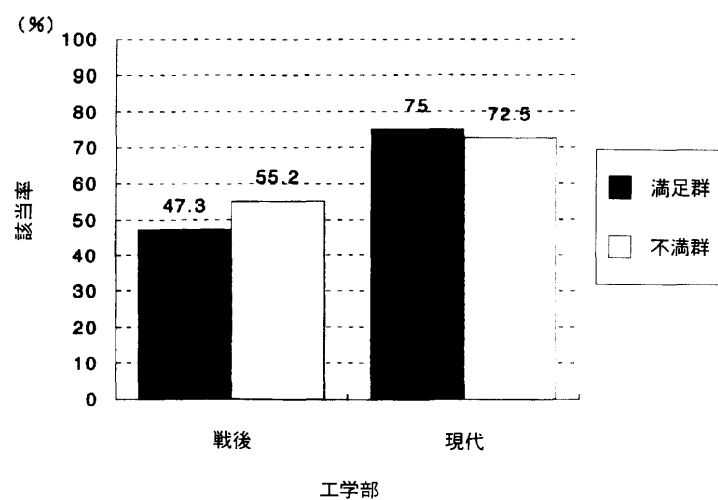
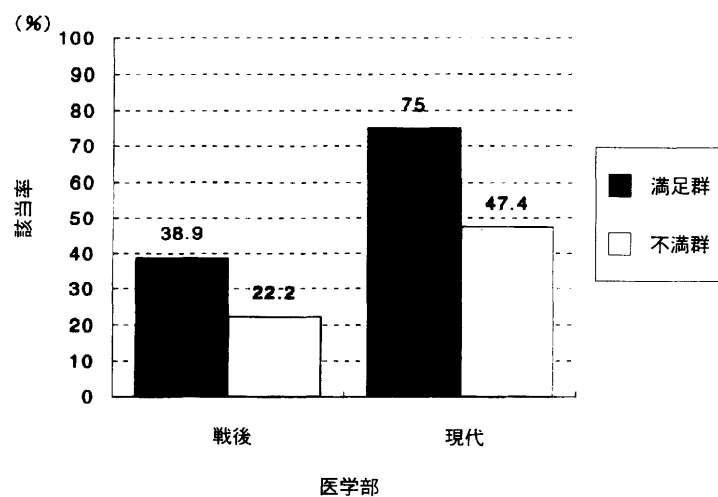
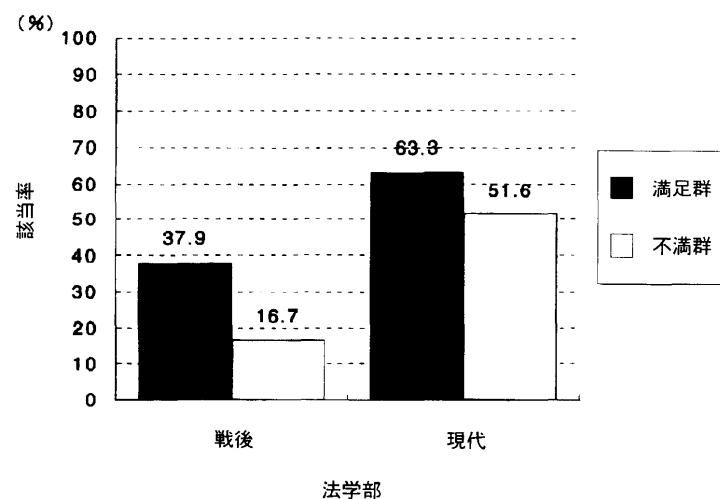


Figure25 趣味の活動にうちこんだ(続き)

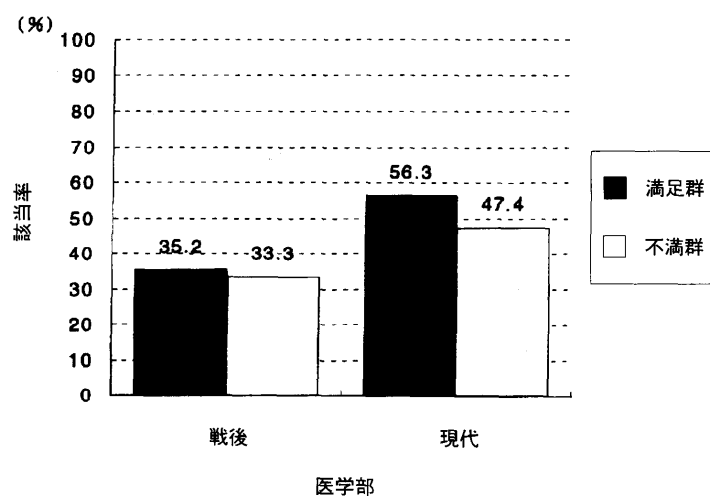
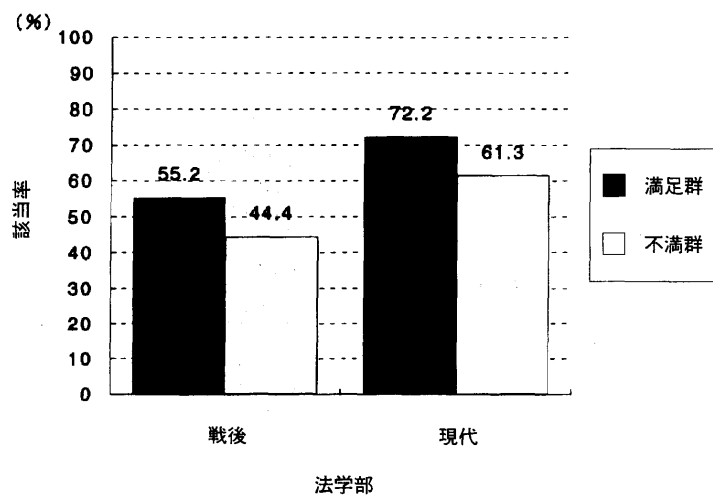
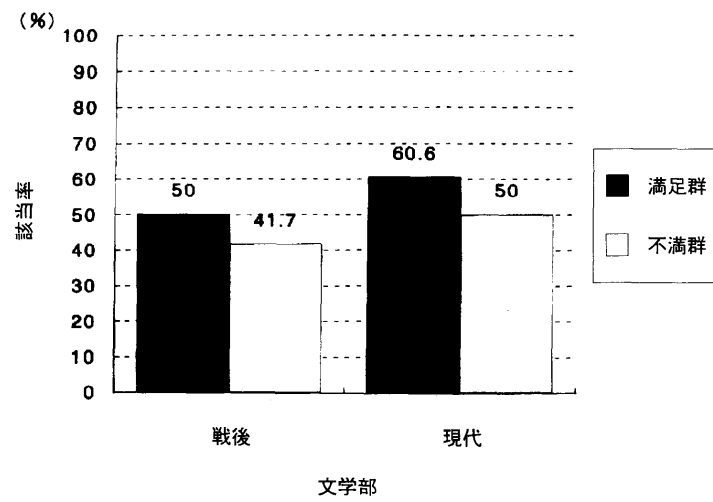


Figure26 コンパの機会が多かった

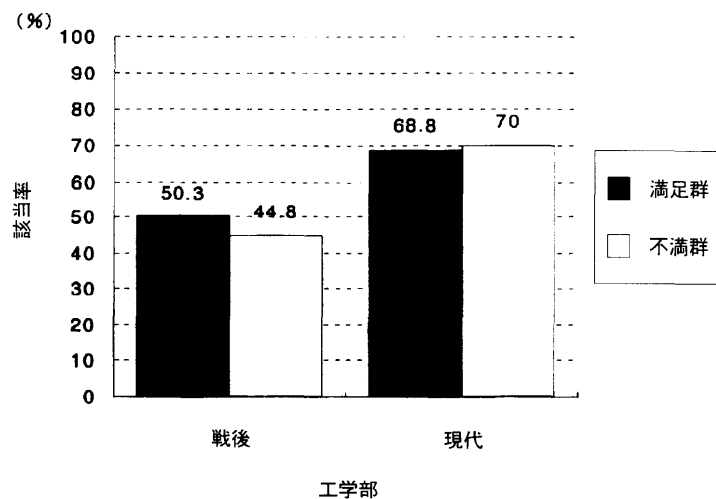


Figure26 コンパの機会が多かった（続き）

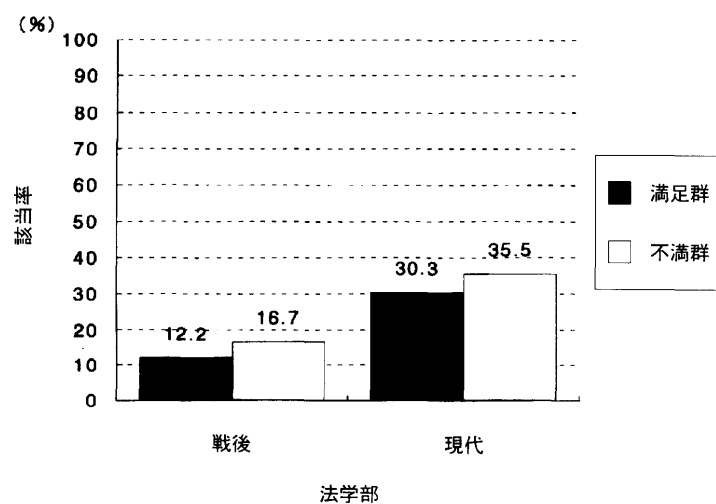
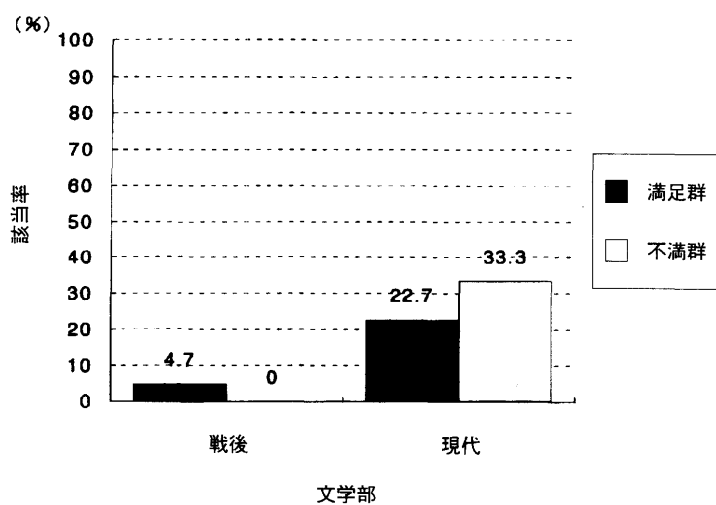


Figure27 遊んでばかりだった

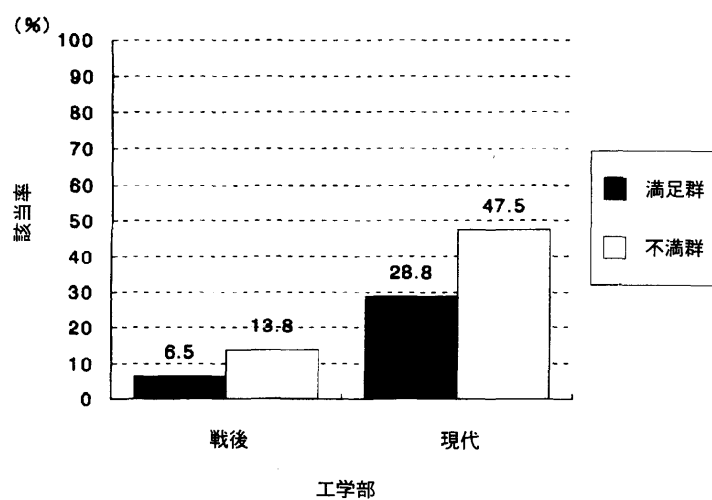
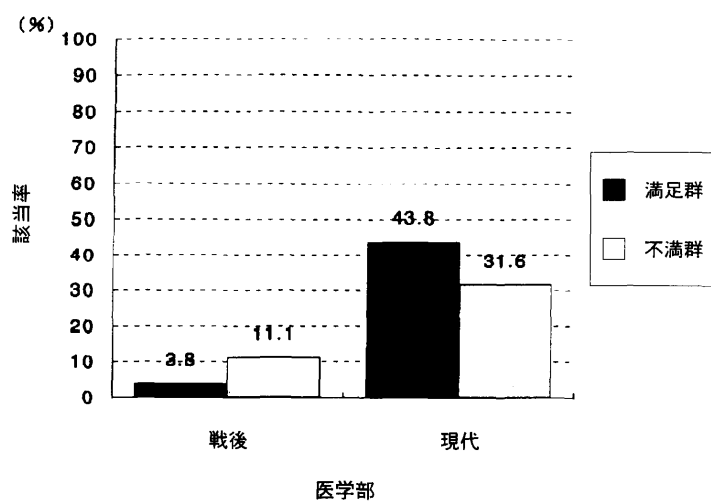


Figure27 遊んでばかりだった (続き)

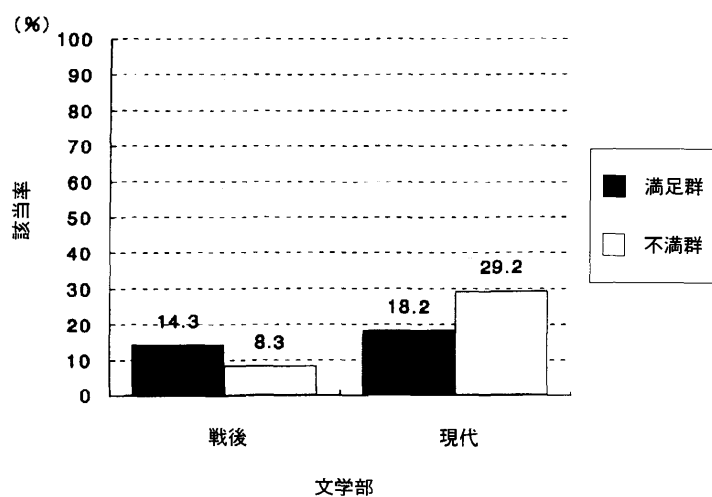


Figure28 アルバイトばかりだった

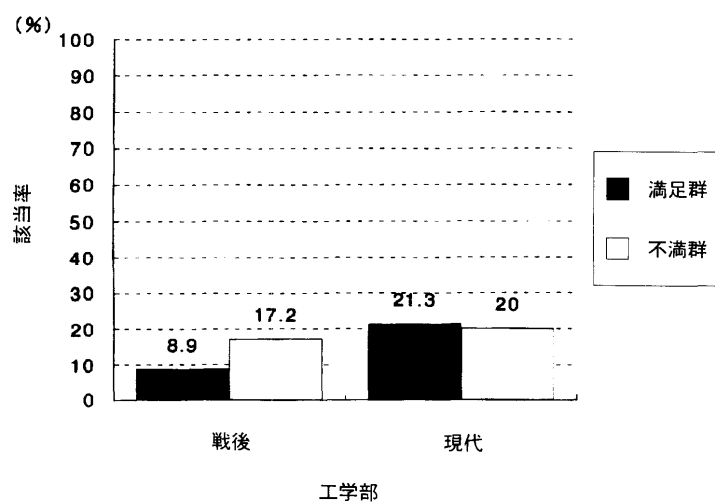
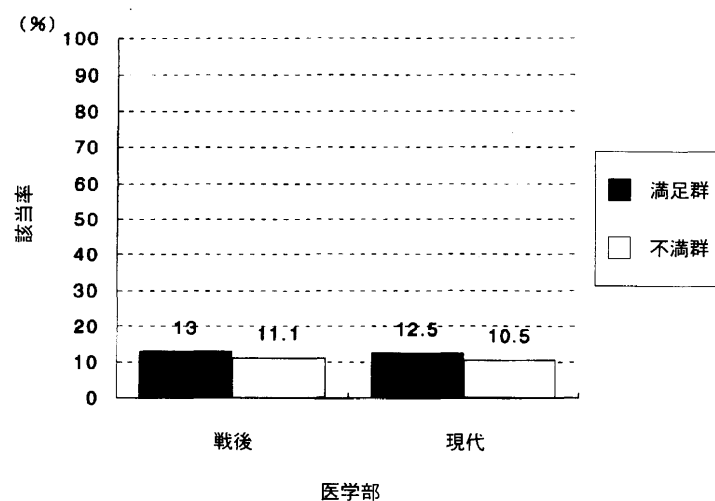
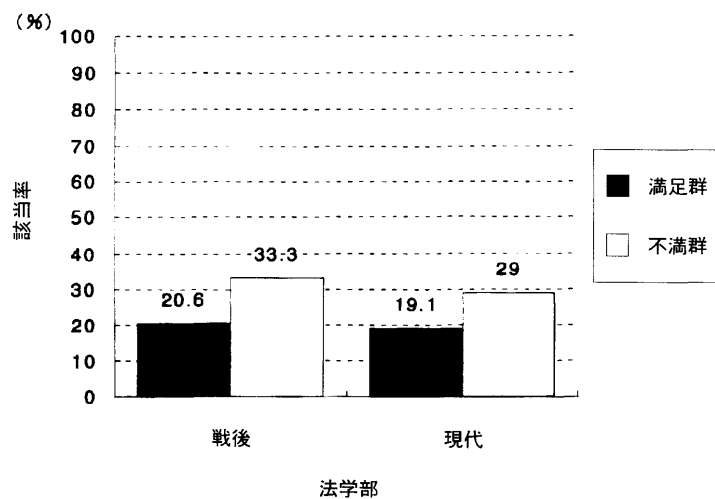


Figure28 アルバイトばかりだった (続き)

一般教養課程・専門課程の授業満足度の構造

■ 目的と方法

一般教養課程の各コース（英語や人文社会等）における授業満足度、あるいは専門課程の講義や演習等における授業満足度が、どのような授業要因によって規定されているのかを調べる。ここでいう授業要因とは、冒頭で述べたように、教授法としての性格をもつものであり、学部や各授業に固有な要因を扱うものではない。

また、冒頭で梶田（1996）による授業要因を3つの領域に分類して紹介したが、ここでは学生の授業行動（出席したか、真剣に受けたか）を含めて、下記の4領域から項目を作成した。

1. 授業行動
2. 授業の活動形態
3. 学生からみた教官の個人要因
4. 学生への伝達的影響

それぞれの領域において、時代の流れ、学部間の違いを検討する。但し、特に＜戦後＞医学部は人数の偏りが著しく、解釈には注意を要する。

■ 結果と考察

【授業行動】

次のような授業を振り返って、あなたは全体的にどのくらい出席しましたか。

→授業によく出席した

《一般教養課程》

- ☐ 一般教養課程での英語の授業
- ☐ 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- ☐ 一般教養科目（人文・社会系）
- ☐ 一般教養科目（自然系）

《専門課程》

- ☐ 専門科目の講義
- ☐ 専門科目の演習
- ☐ 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) よく出席した (3) まあまあ出席した
(2) あまり出席しなかった (1) 全く出席しなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、“よく出席した”“まあまあ出席した”を統合して該当率とした。また、授業満足度と授業要因との関連をみるために、戦後（53年度・63年度）と現代（83年度・93年度）それぞれについて、満足群・不満群における各項目の該当率がどの程度みられるかを求めた。「1. 戦後から現代への変化」「2. 満足群と不満群の差異」「3. 満足群・不満群に関係なくその項目が重要であること」という3方向から分析をおこない、前者2つに関しては30%以上の該当率の差をもって、“差がみられる”とし、3つ目に関しては満足群・不満群ともに70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”とした^{注4}。

^{注4} 差については従来から代表的な検定論が用いられてきたが、筆者は差の検定についてはかなりの疑問を呈している。ここでは詳しく述べないが、30%の差というのは、筆者の経験してきたころ、検定にかけてもかなりの有意差を示す数字であり、そうでなくともかなりの厳しい判定数字であると考えている。また、以下の調査結果の報告は、筆者のこのような態度（30%の差を基準としたこと）からみられた結果と解釈して頂きたい。

英語（Figure29参照）では、＜戦後＞文学部のみで差がみられた（満足群97.4％－不満群57.1％）。重要項目は、＜戦後＞法学部（満足群93.8％－不満群73.8％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群96.6％－不満群82.7％）、＜現代＞文学部（満足群100.0％－不満群71.4％）、＜現代＞法学部（満足群100.0％－不満群83.5％）、＜現代＞工学部（満足群97.1％－不満群81.3％）でみられた。

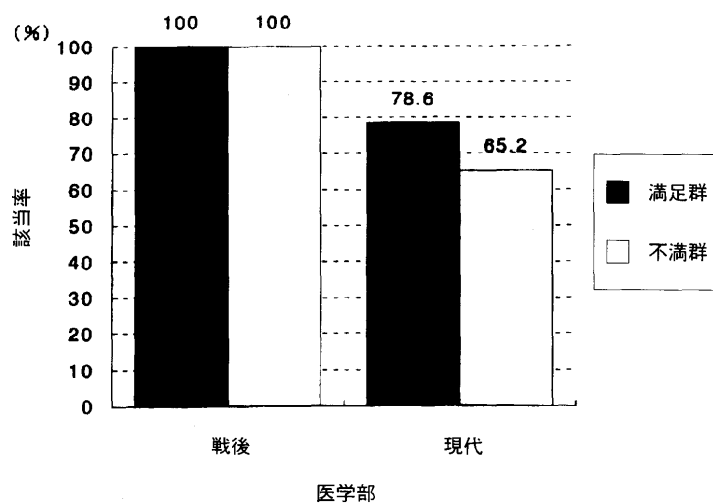
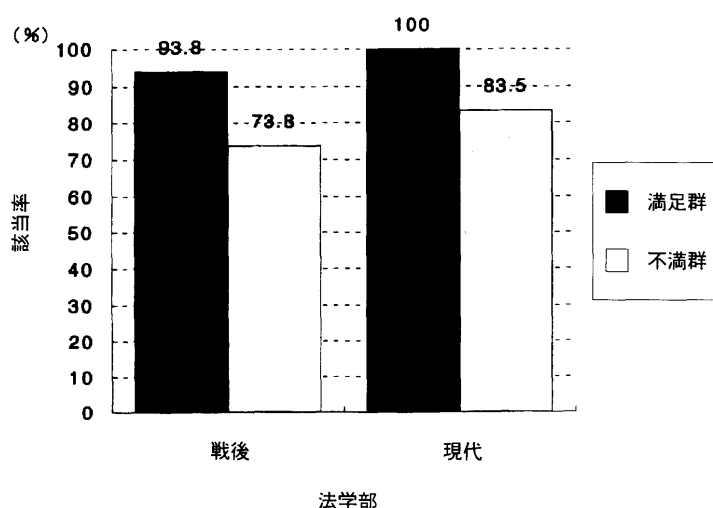
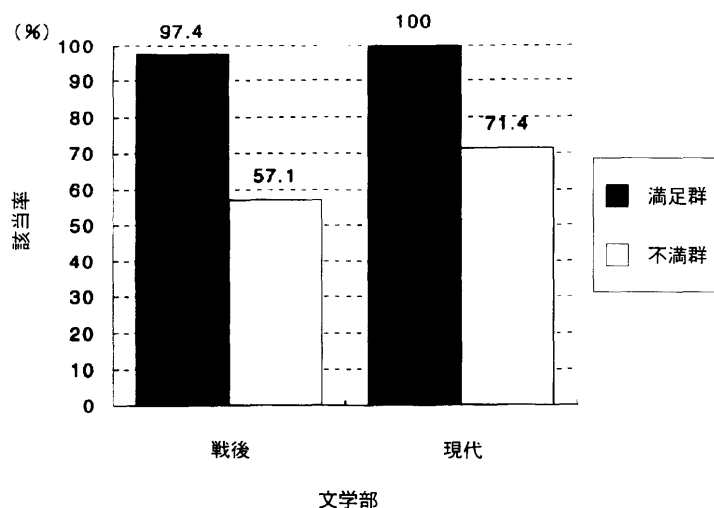


Figure29 授業へよく出席した（英語）

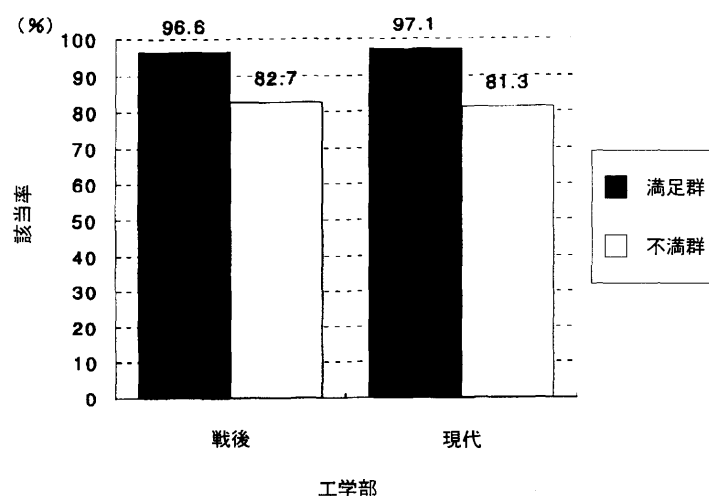


Figure29 授業へよく出席した（英語）（続き）

英語以外では、差は全くみられなかった。重要項目は、戦後、現代を問わず、すべての学部でみられた（＜戦後＞文学部（満足群98.1％－不満群76.9％）、＜戦後＞法学部（満足群93.2％－不満群74.1％）、＜戦後＞医学部（満足群94.7％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.5％－不満群79.0％）、＜現代＞文学部（満足群96.4％－不満群76.5％）、＜現代＞法学部（満足群95.8％－不満群81.1％）、＜現代＞医学部（満足群78.6％－不満群71.4％）、＜現代＞工学部（満足群92.7％－不満群75.3％））。

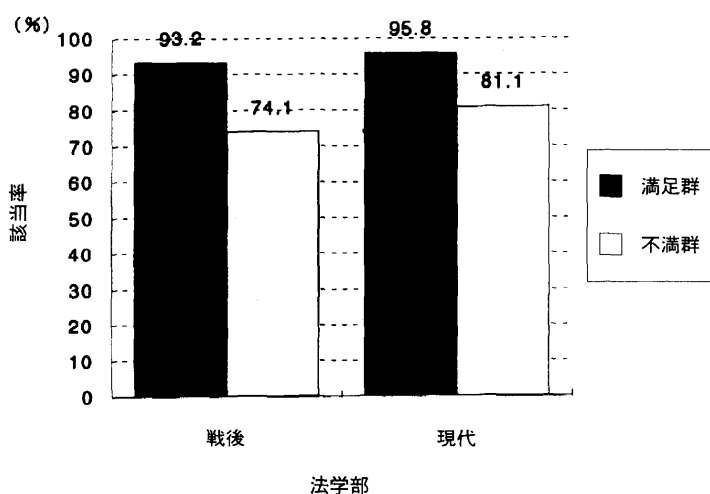
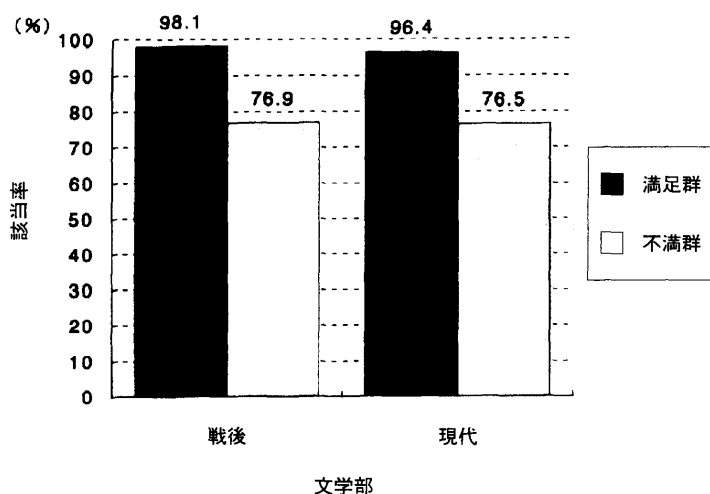


Figure30 授業へよく出席した（英語以外）

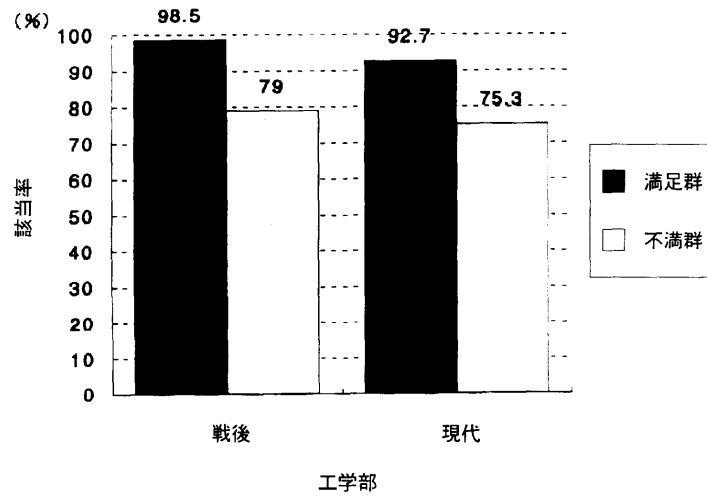
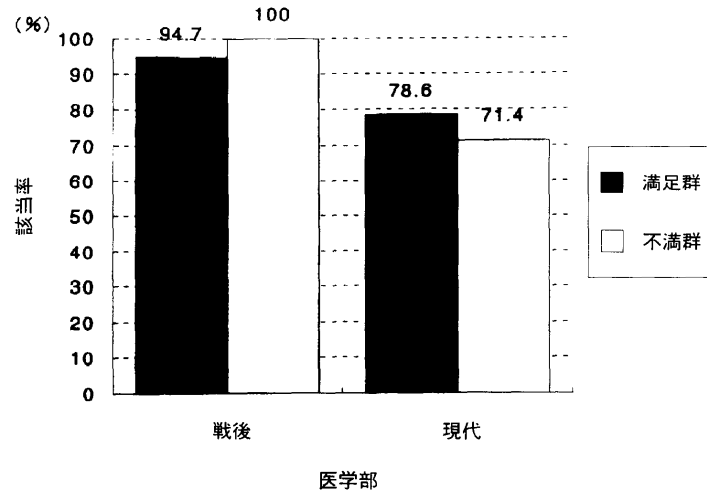


Figure30 授業へよく出席した（英語以外）（続き）

人文社会では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群96.1％－不満群31.3％）、＜戦後＞医学部（満足群72.7％－不満群33.3％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群87.0％－不満群42.9％）、＜現代＞法学部（満足群79.7％－不満群17.9％）、＜現代＞医学部（満足群53.3％－不満群17.6％）、＜現代＞工学部（満足群61.3％－不満群13.1％））。戦後の法学部、工学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し（法学部69.4→17.9％；工学部56.7→13.1％）、差がみられたようである。文学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

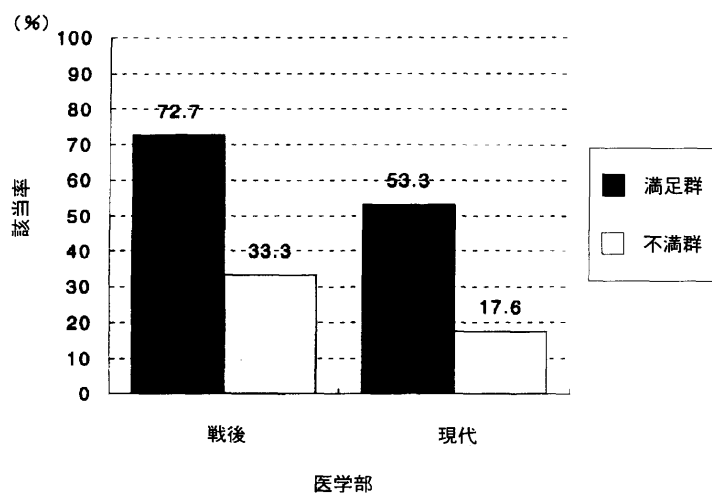
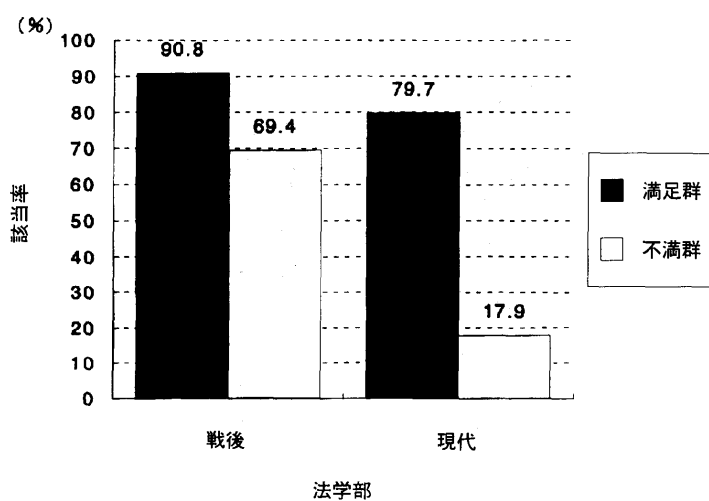
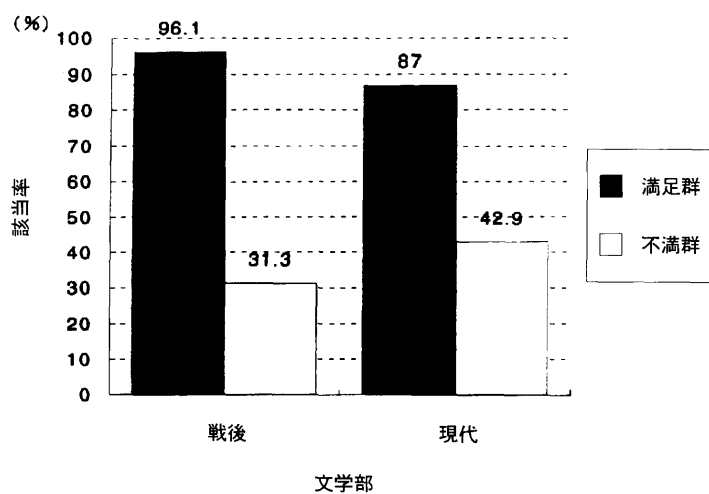


Figure31 授業へよく出席した (人文社会)

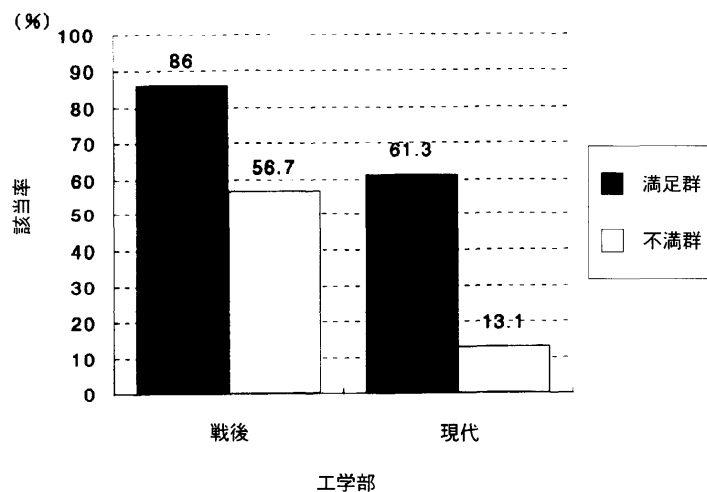


Figure31 授業へよく出席した（人文社会）（続き）

自然では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群95.8％－不満群33.3％）、＜戦後＞法学部（満足群87.2％－不満群55.9％）、＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群50.0％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群78.8％－不満群28.9％）、＜現代＞法学部（満足群76.6％－不満群10.2％）、＜現代＞医学部（満足群69.2％－不満群35.0％）、＜現代＞工学部（満足群70.0％－不満群20.0％））。戦後の工学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し（83.3→20.0％）、差がみられたようである。文学部、法学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞工学部（満足群93.9％－不満群83.3％）でみられた。

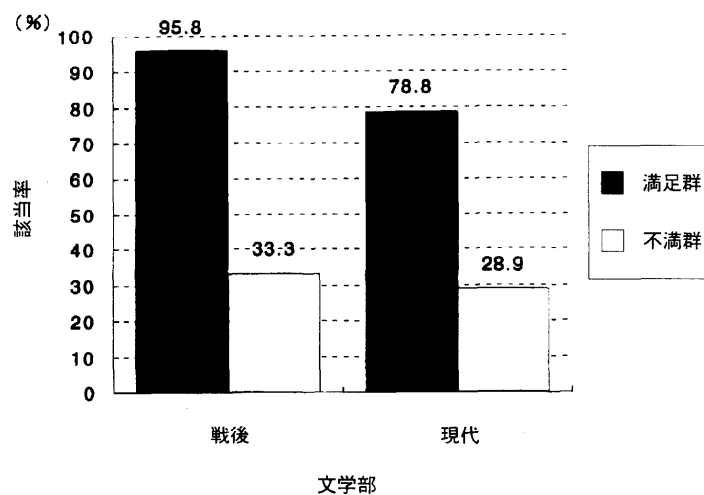


Figure32 授業へよく出席した（自然）

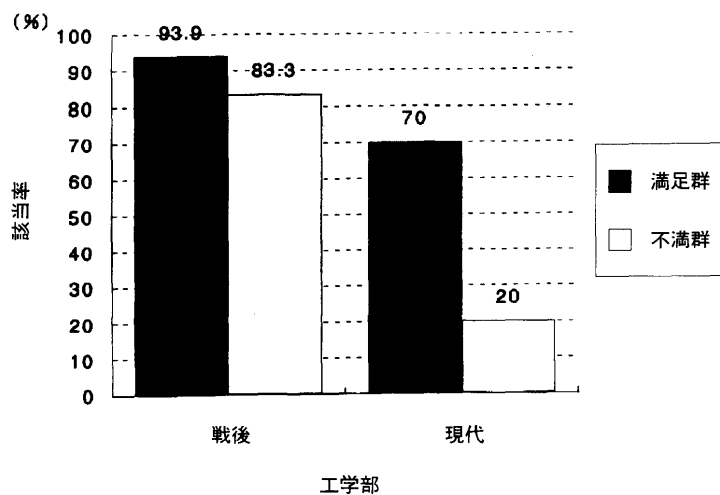
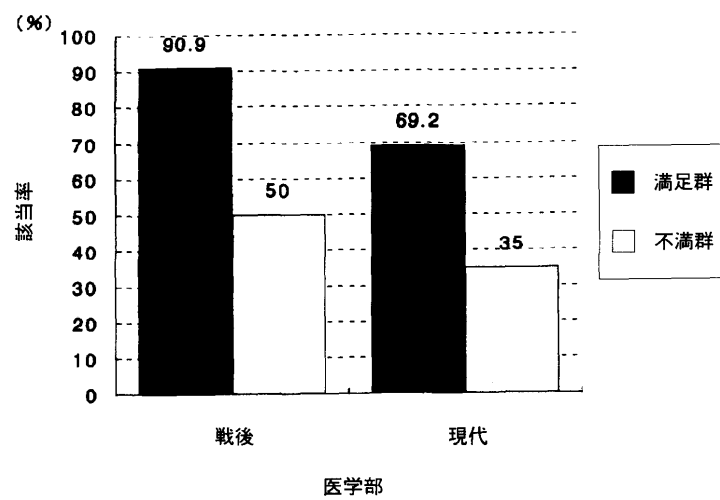
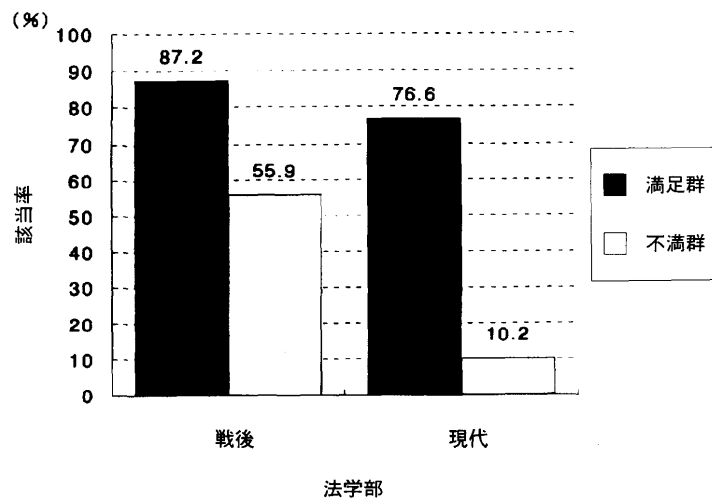


Figure32 授業へよく出席した（自然）（続き）

専門講義では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群97.1％－不満群53.8％）、＜戦後＞法学部（満足群92.5％－不満群56.3％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群95.5％－不満群64.3％）、＜現代＞法学部（満足群85.7％－不満群40.0％）、＜現代＞医学部（満足群70.6％－不満群20.0％）、＜現代＞工学部（満足群93.0％－不満群56.0％））。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し（80.0→20.0％）、差がみられたようである。文学部、法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群80.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.5％－不満群84.2％）でみられた。

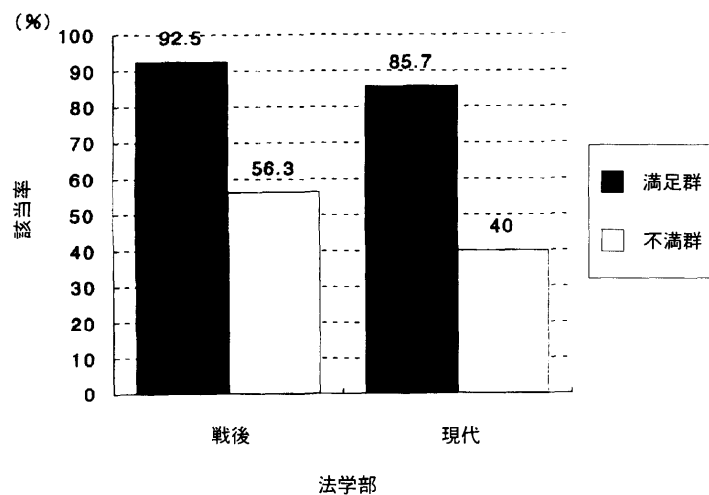
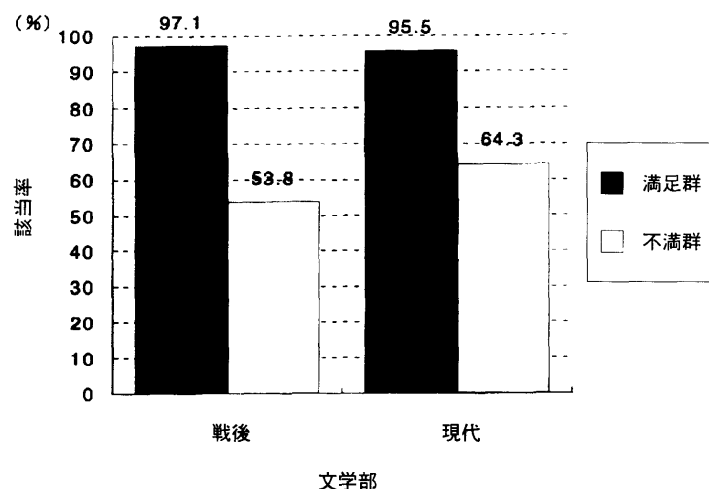


Figure33 授業へよく出席した（専門講義）

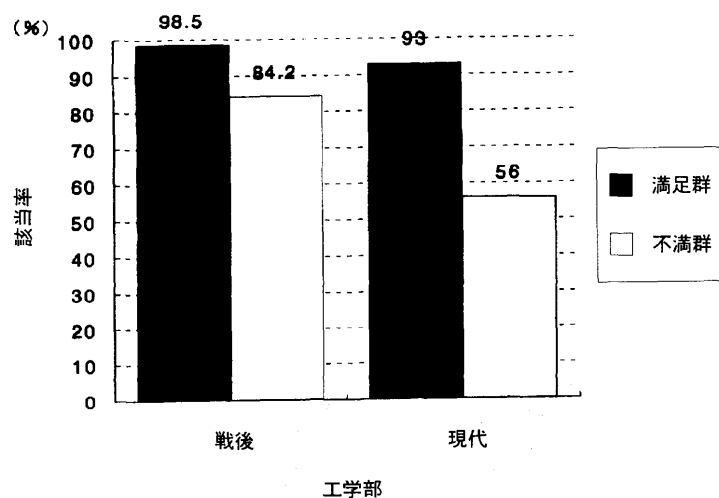
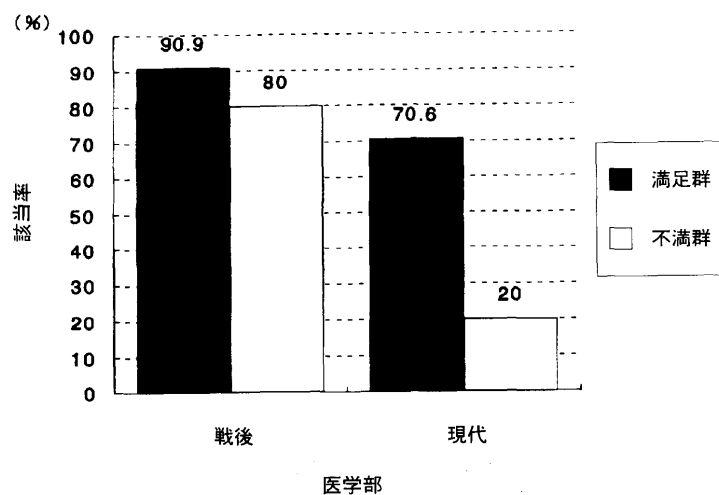


Figure33 授業へよく出席した（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞法学部（満足群91.9％－不満群50.0％）、＜現代＞工学部（満足群99.2％－不満群68.8％）において差がみられた。現代の法学部で差がみられない原因は、現代にかけて不満群の該当率が増加したからである（50.0→85.7％）。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群97.1％－不満群81.8％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.2％－不満群87.5％）、＜現代＞文学部（満足群100.0％－不満群76.5％）、＜現代＞法学部（満足群97.5％－不満群85.7％）、＜現代＞医学部（満足群91.3％－不満群88.9％）でみられた。

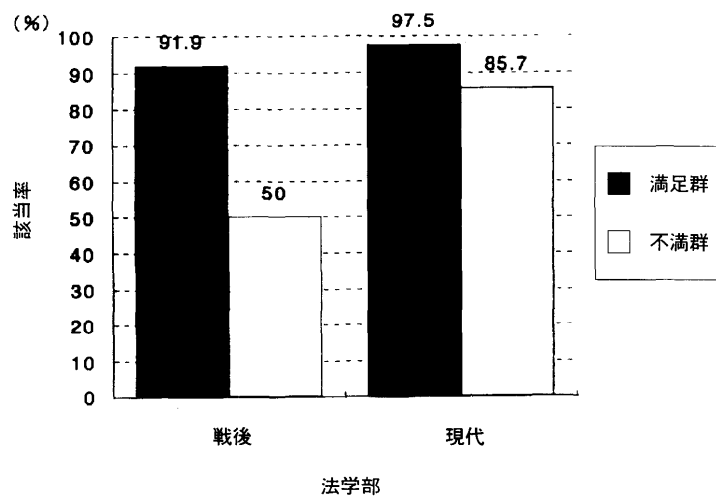
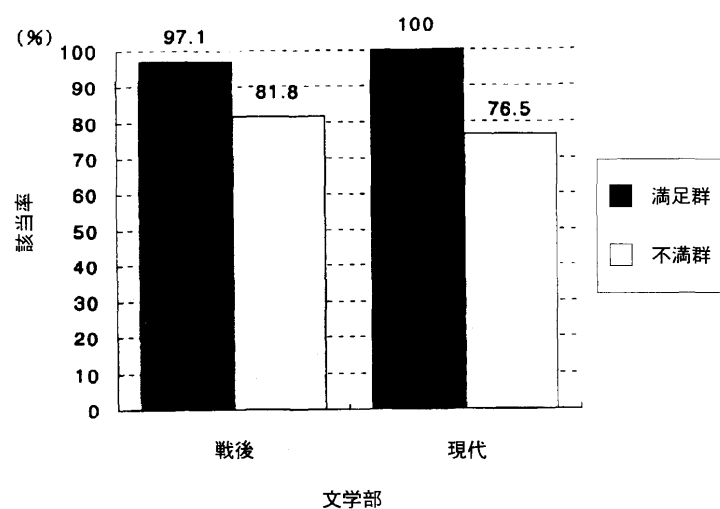


Figure34 授業へよく出席した（専門演習）

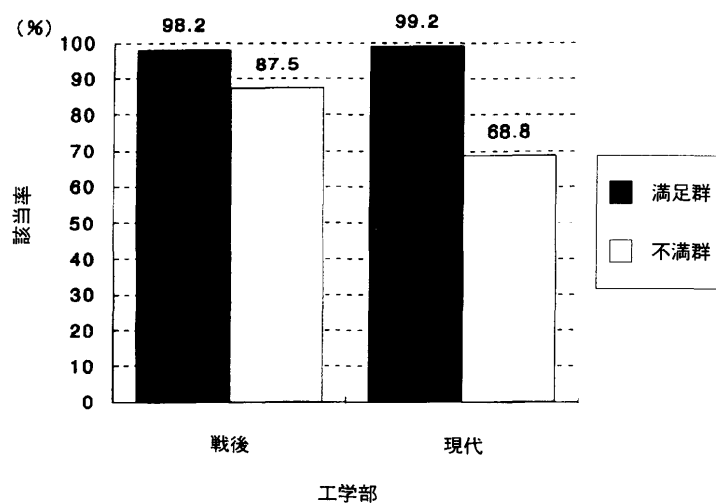
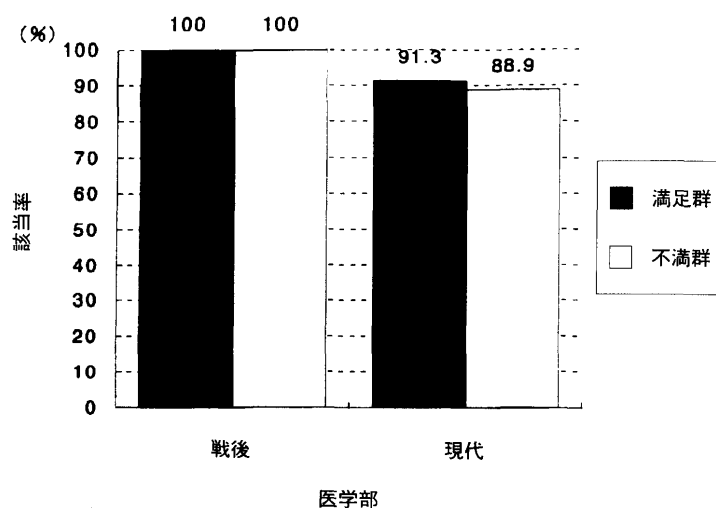


Figure34 授業へよく出席した（専門演習）（続き）

専門実験では、差は全くみられなかった。重要項目は、戦後、現代を問わず、すべての学部でみられた（＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.1％－不満群89.5％）、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群83.3％）、＜現代＞工学部（満足群100.0％－不満群87.5％））。

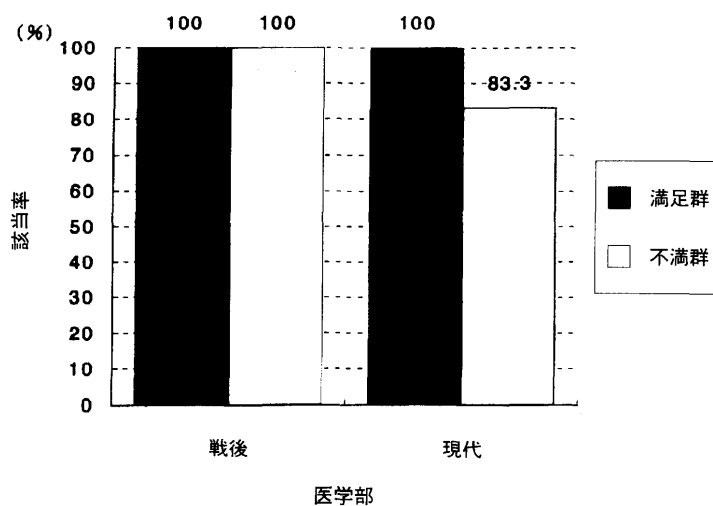


Figure35 授業へよく出席した（専門実験）

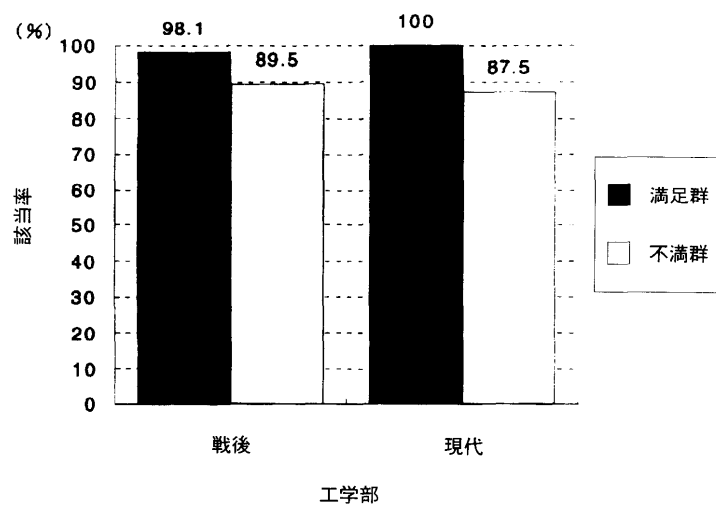


Figure35 授業へよく出席した（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、あなたは全体的にどのくらい真剣に受けていましたか。 →真剣に授業を受けた

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養科目 (人文・社会系)
- () 一般教養科目 (自然系)

《専門課程》

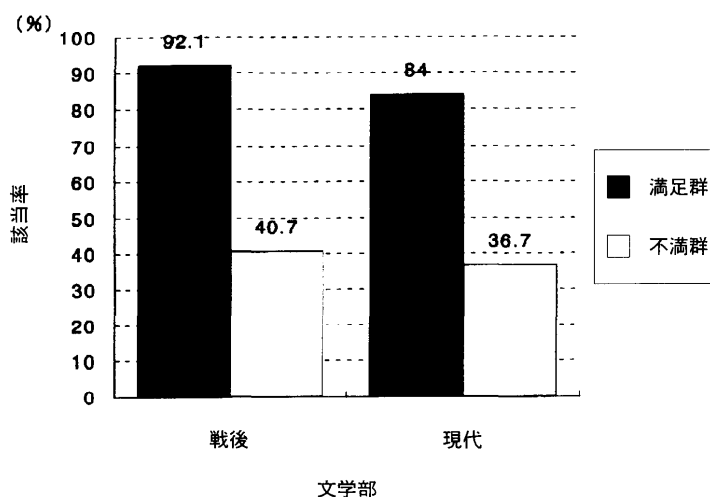
- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験 (履修した方のみ)

- (4) 非常に真剣だった (3) まあまあ真剣だった
- (2) けっこういい加減だった (1) 非常にいい加減だった

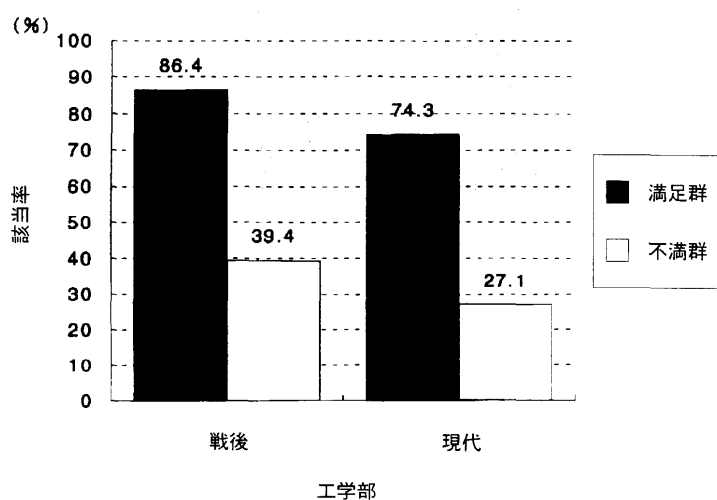
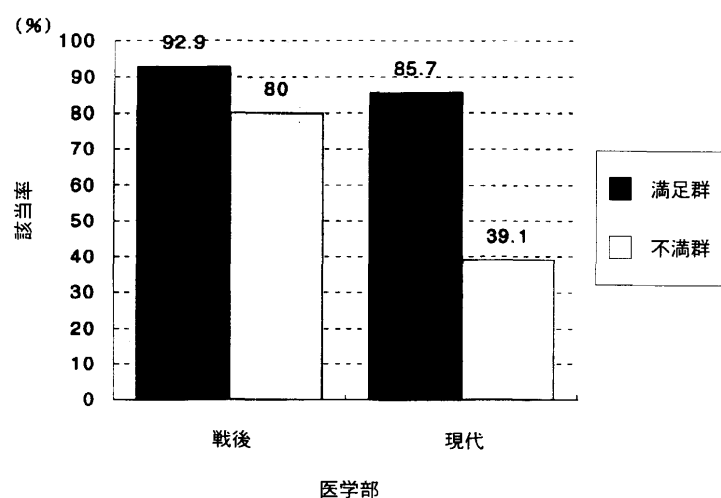
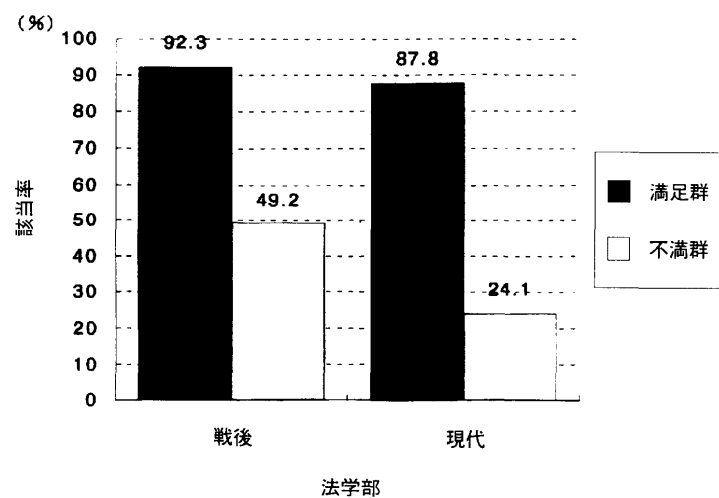
《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、“非常に真剣だった” “まあまあ真剣だった” を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後の<戦後>文学部 (満足群92.1%－不満群40.7%)、<戦後>法学部 (満足群92.3%－不満群49.2%)、<戦後>工学部 (満足群86.4%－不満群39.4%) で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた (<現代>文学部 (満足群84.0%－不満群36.7%)、<現代>法学部 (満足群87.8%－不満群24.1%)、<現代>医学部 (満足群85.7%－不満群39.1%)、<現代>工学部 (満足群74.3%－不満群27.1%))。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し (80.0→39.1%)、差がみられたようである。文学部、法学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、<戦後>医学部 (満足群92.9%－不満群80.0%) でみられた。

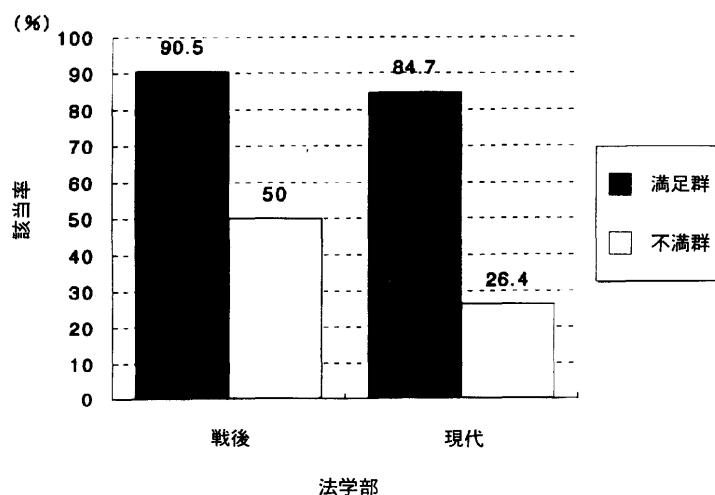
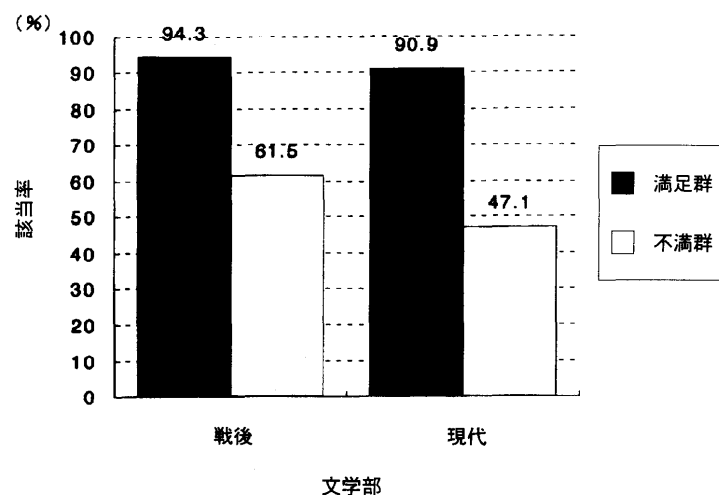


Figur36 真剣に授業を受けた (英語)

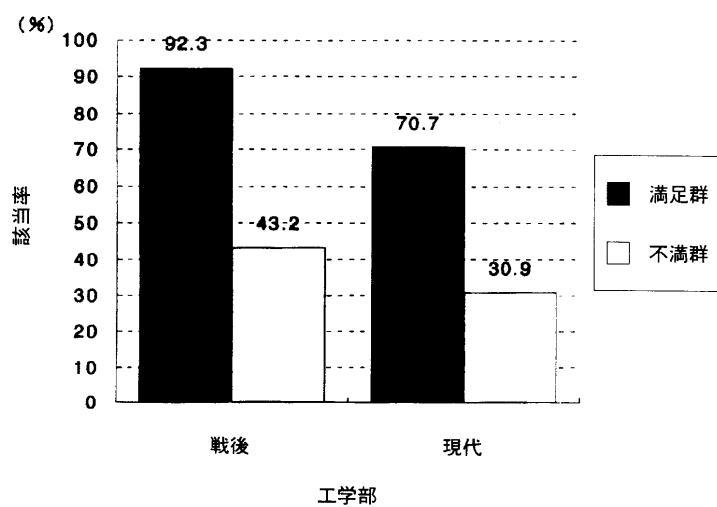
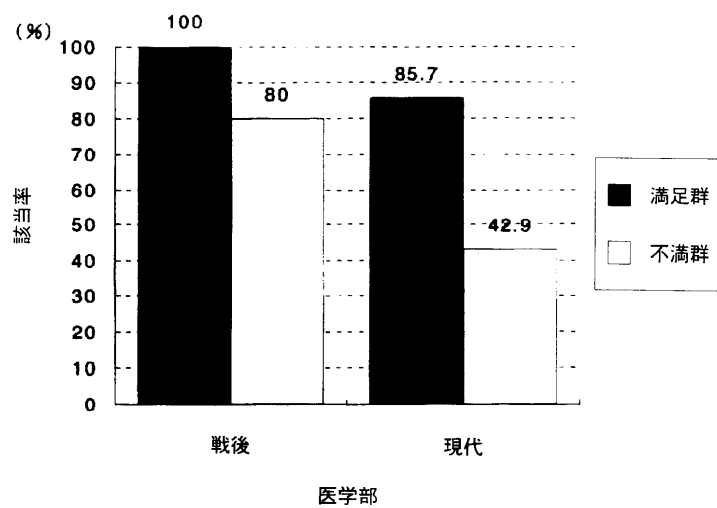


Figur36 真剣に授業を受けた（英語）（続き）

英語以外では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群94.3％－不満群61.5％）、＜戦後＞法学部（満足群90.5％－不満群50.0％）、＜戦後＞工学部（満足群92.3％－不満群43.2％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群90.9％－不満群47.1％）、＜現代＞法学部（満足群84.7％－不満群26.4％）、＜現代＞医学部（満足群85.7％－不満群42.9％）、＜現代＞工学部（満足群70.7％－不満群30.9％））。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し（80.0→42.9％）、差がみられたようである。文学部、法学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群80.0％）でみられた。

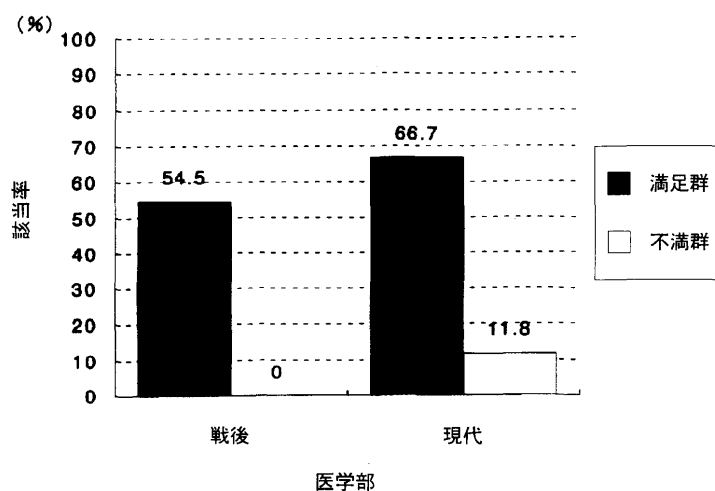
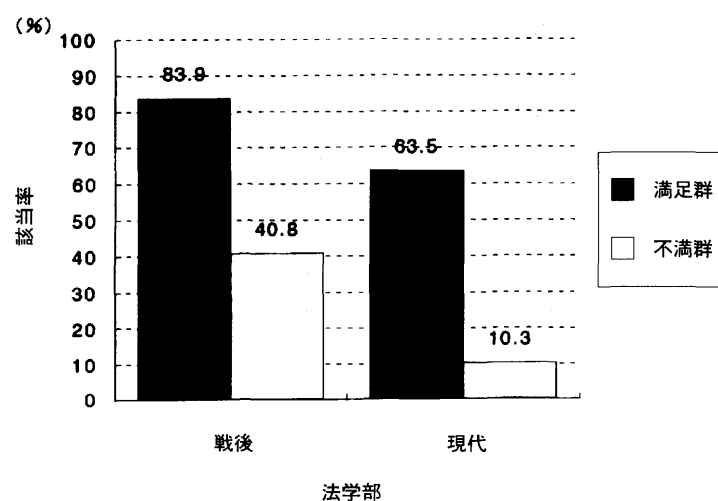
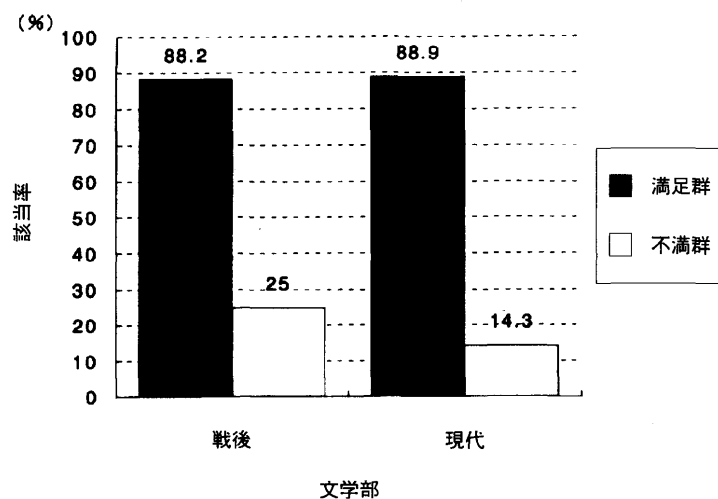


Figur37 真剣に授業を受けた（英語以外）

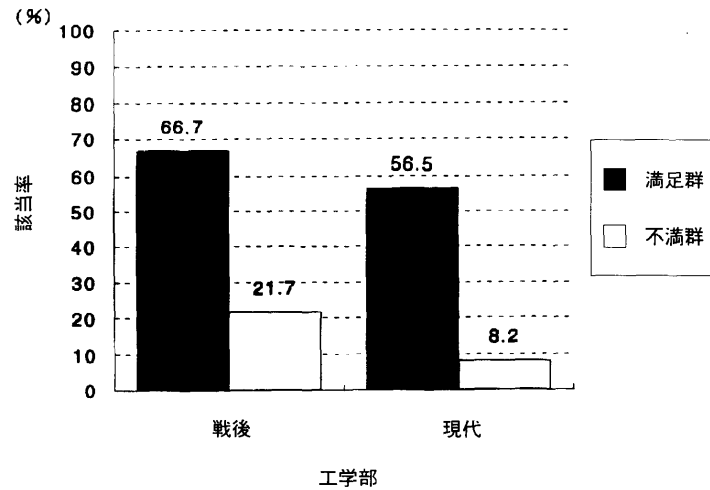


Figur37 真剣に授業を受けた（英語以外）（続き）

人文社会では、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群88.2％－不満群25.0％）、＜戦後＞法学部（満足群83.9％－不満群40.8％）、＜戦後＞医学部（満足群54.5％－不満群0.0％）、＜戦後＞工学部（満足群66.7％－不満群21.7％）、＜現代＞文学部（満足群88.9％－不満群14.3％）、＜現代＞法学部（満足群63.5％－不満群10.3％）、＜現代＞医学部（満足群66.7％－不満群11.8％）、＜現代＞工学部（満足群56.5％－不満群8.2％）。重要項目は、全くみられなかった。

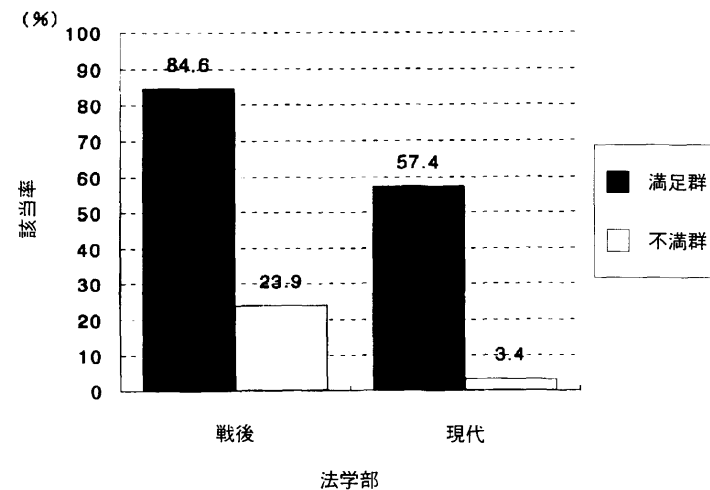
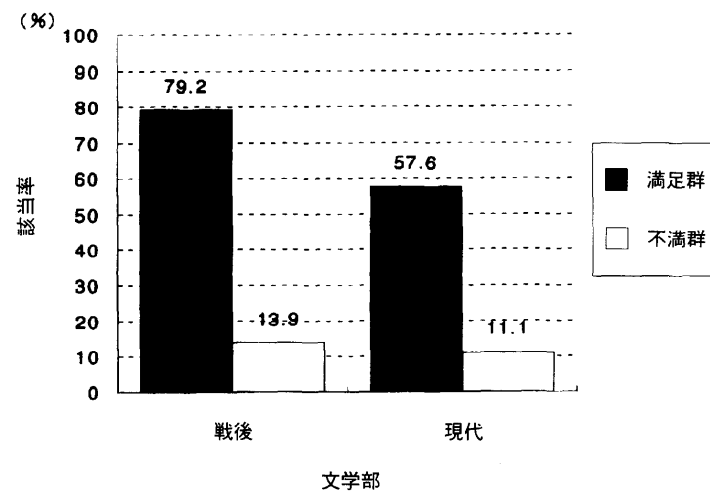


Figur38 真剣に授業を受けた（人文社会）

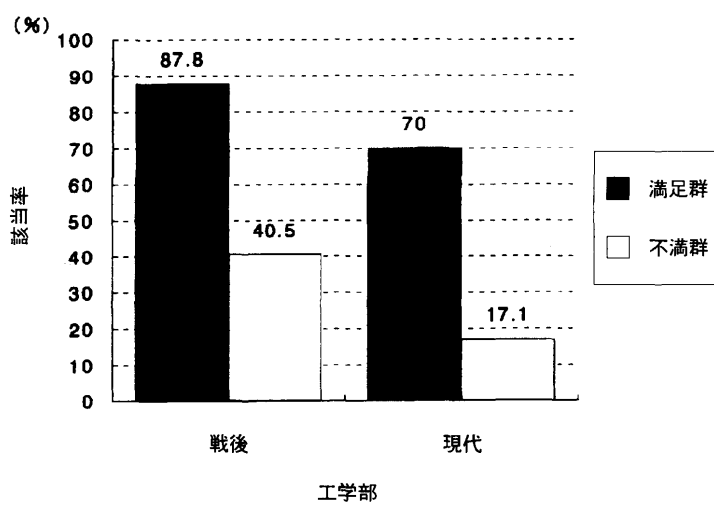
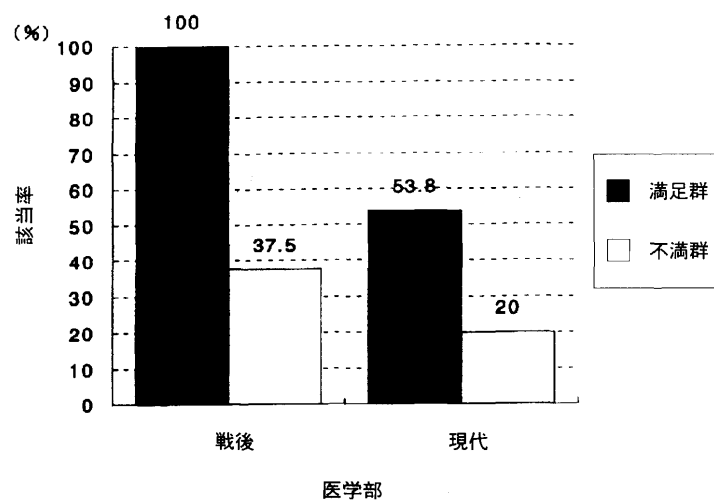


Figur38 真剣に授業を受けた（人文社会）（続き）

自然では、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群79.2％－不満群13.9％）、＜戦後＞法学部（満足群84.6％－不満群23.9％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群37.5％）、＜戦後＞工学部（満足群87.8％－不満群40.5％）、＜現代＞文学部（満足群57.6％－不満群11.1％）、＜現代＞法学部（満足群57.4％－不満群3.4％）、＜現代＞医学部（満足群53.8％－不満群20.0％）、＜現代＞工学部（満足群70.0％－不満群17.1％））重要項目は、全くみられなかった。

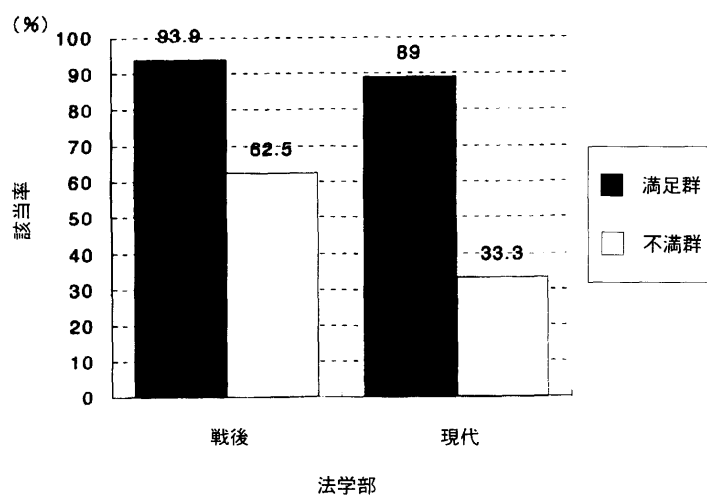
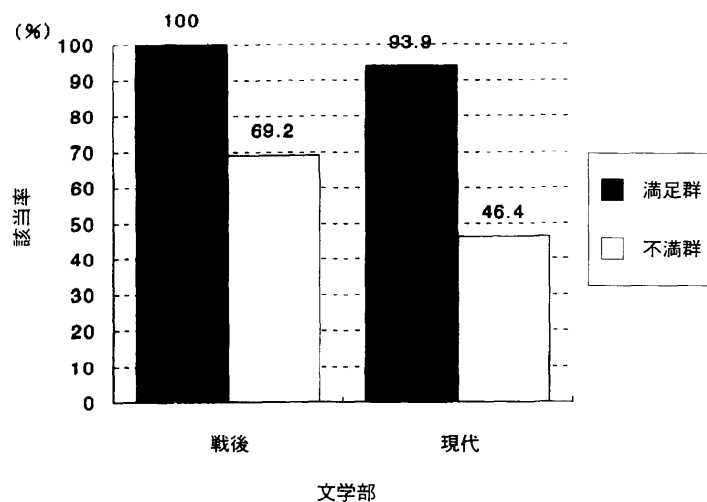


Figur39 真剣に授業を受けた（自然）

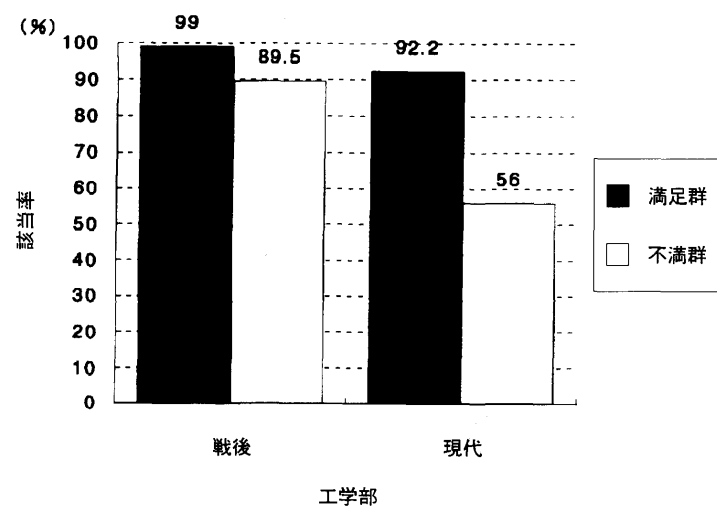
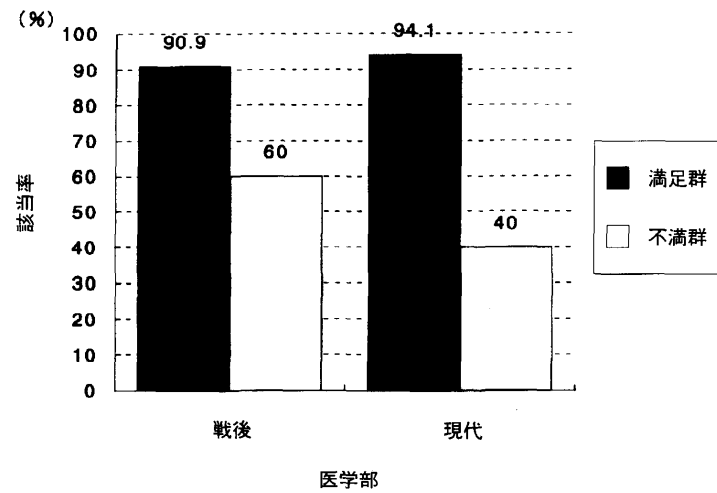


Figur39 真剣に授業を受けた（自然）（続き）

専門講義では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群69.2％）、＜戦後＞法学部（満足群93.9％－不満群62.5％）、＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群60.0％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群93.9％－不満群46.4％）、＜現代＞法学部（満足群89.0％－不満群33.3％）、＜現代＞医学部（満足群94.1％－不満群40.0％）、＜現代＞工学部（満足群92.2％－不満群56.0％））。戦後の工学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し（89.5→56.0％）、差がみられたようである。文学部、法学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞工学部（満足群99.0％－不満群89.5％）でみられた。

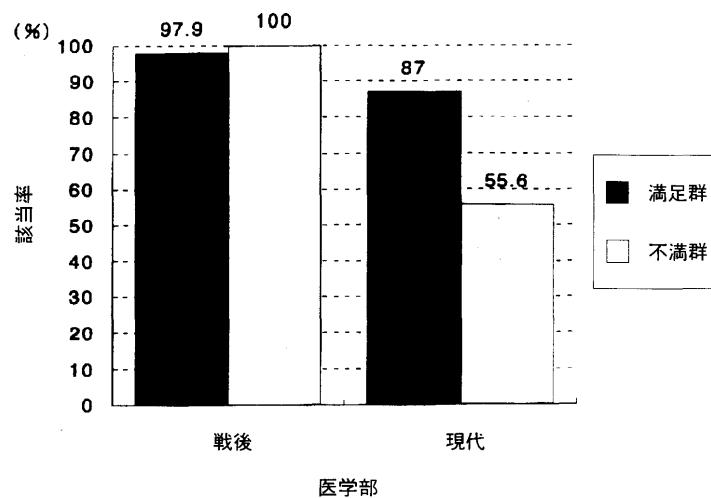
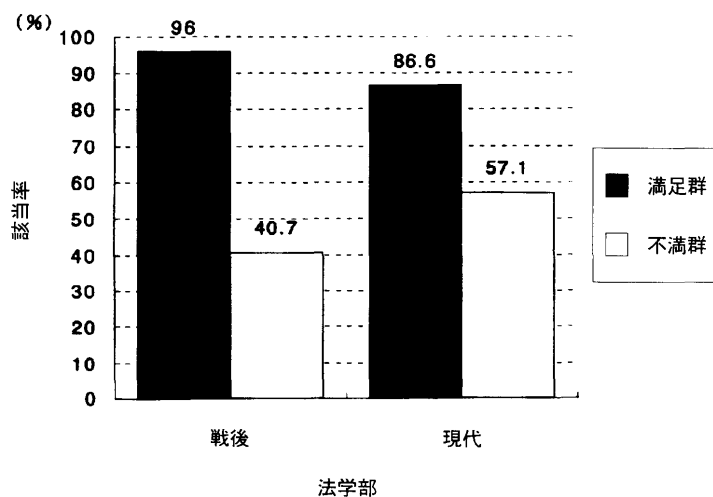
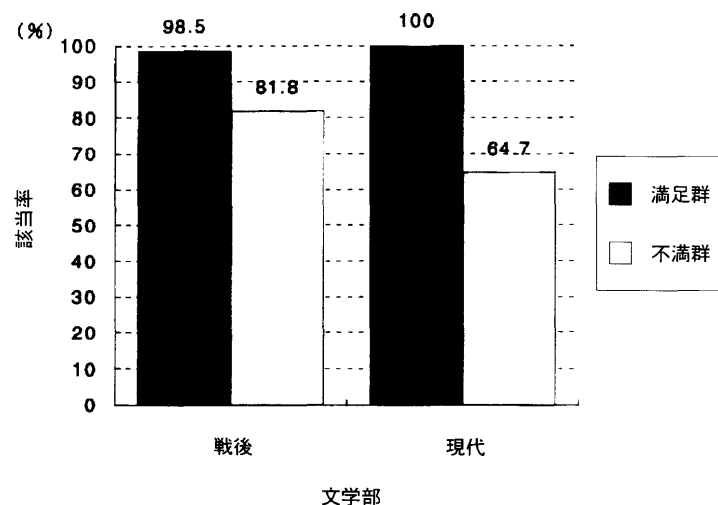


Figur40 真剣に授業を受けた（専門講義）

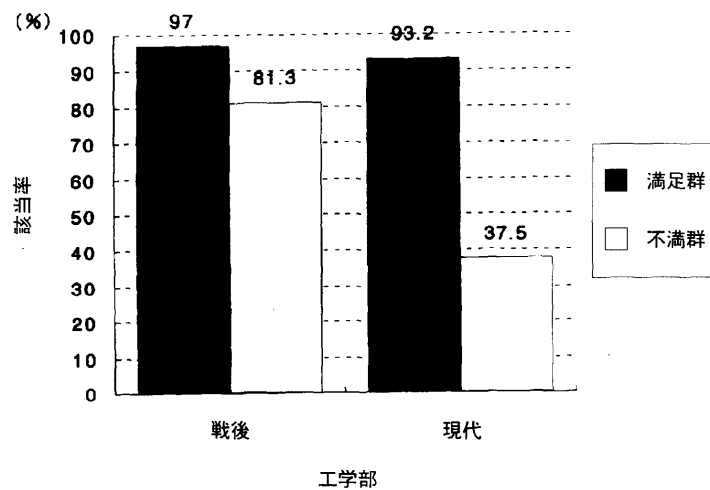


Figur40 真剣に授業を受けた (専門講義) (続き)

専門演習では、＜戦後＞法学部（満足群96.0％－不満群40.7％）、＜現代＞文学部（満足群100.0％－不満群64.7％）、＜現代＞医学部（満足群87.0％－不満群55.6％）、＜現代＞工学部（満足群93.2％－不満群37.5％）において差がみられた。戦後の医学部、工学部で差がみられなかった原因は、不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し差がみられたようである（医学部100.0→55.6％；工学部81.3→37.5％）。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群98.5％－不満群81.8％）、＜戦後＞医学部（満足群97.9％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群97.0％－不満群81.3％）でみられた。

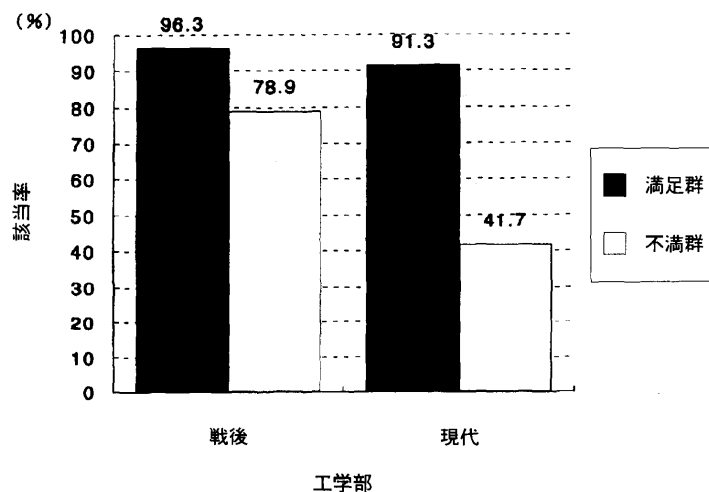
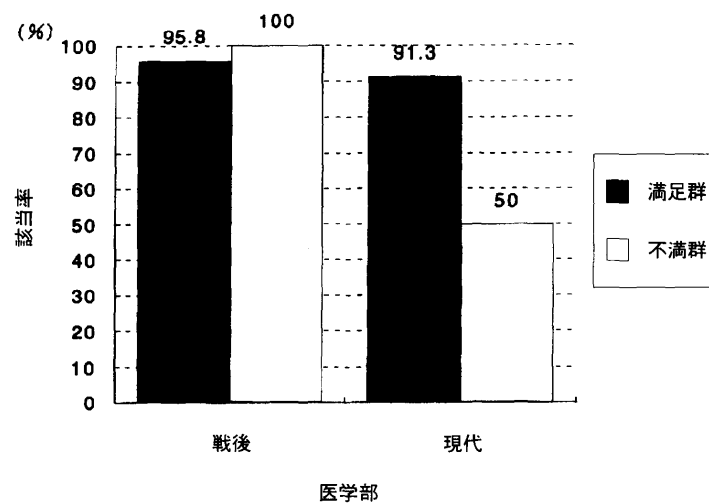


Figur41 真剣に事業を受けた（専門演習）



Figur41 真剣に事業を受けた（専門演習）（続き）

専門実験では、＜現代＞医学部（満足群91.3％－不満群50.0％）、＜現代＞工学部（満足群91.3％－不満群41.7％）において差がみられた。戦後で差がみられなかった原因は、ともに不満群も授業によく出席していたからであるが、現代にかけて不満群の出席率が大幅に減少し（医学部100.0→50.0％；工学部78.9→41.7％）、差がみられたようである。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群95.8％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群96.3％－不満群78.9％）でみられた。



Figur42 真剣に授業を受けた（専門実験）

【授業の活動形態】

次のような授業を振り返って、少人数できめ細かな指導のある授業はありましたか。→少人数できめ細かな指導だった

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養科目（人文・社会系）
- () 一般教養科目（自然系）

《専門課程》

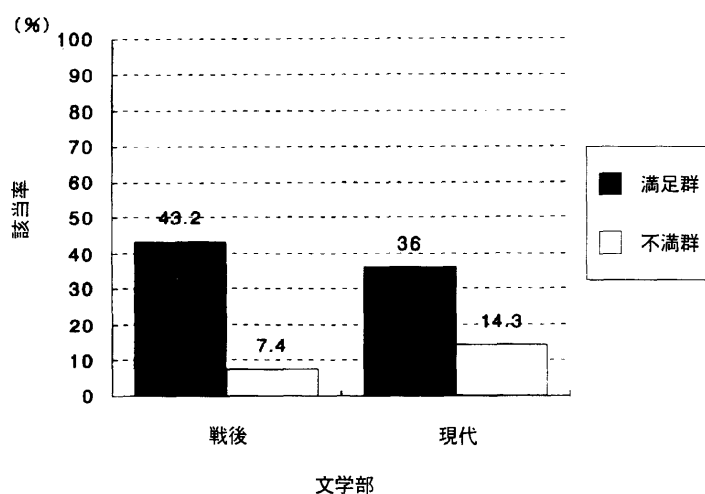
- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった (1) まったくなかった

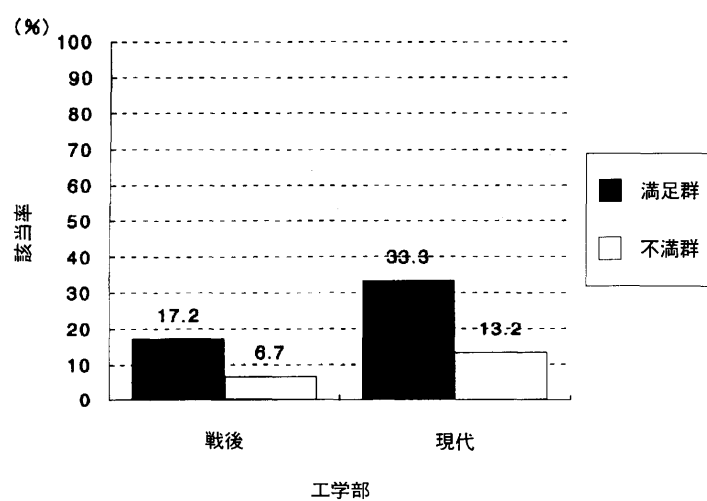
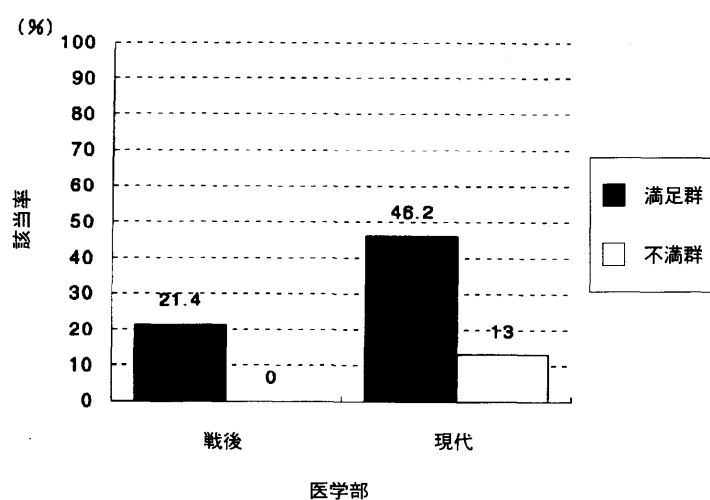
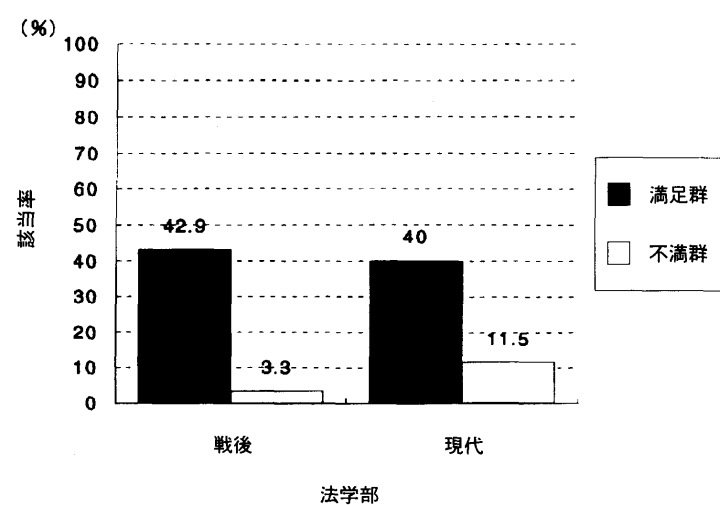
《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、“すべての授業がそうだった” “いくつかあった” “少なくとも1個はあった” を統合して該当率とした。これは、該当する授業が少なければ否というよりも、1つでも該当する授業があったかどうかを問うためである。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、＜戦後＞文学部（満足群43.2%－不満群7.4%）、＜戦後＞法学部（満足群42.9%－不満群3.3%）、＜現代＞医学部（満足群46.2%－不満群13.0%）で差がみられた。重要項目は、全くみられなかった。

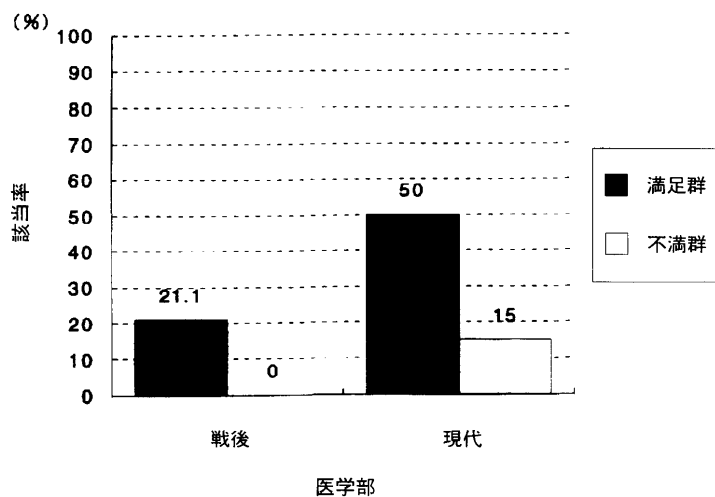
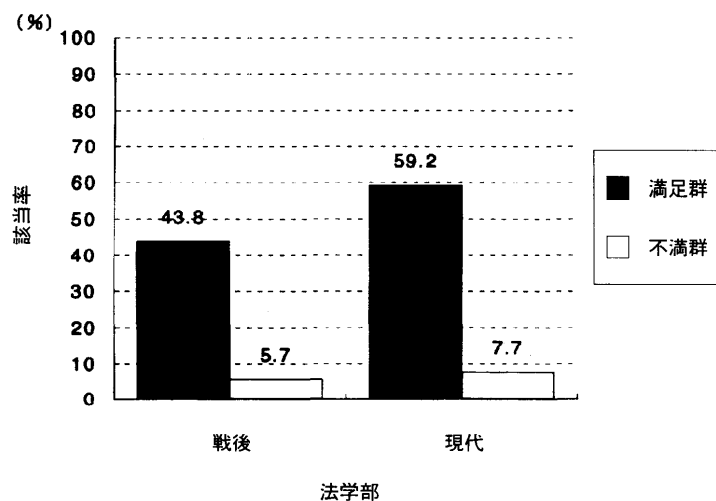
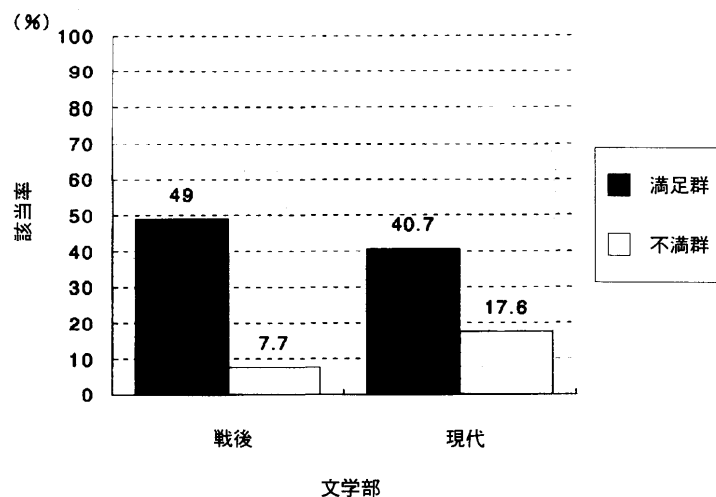


Figur43 少人数できめ細かな指導だった（英語）

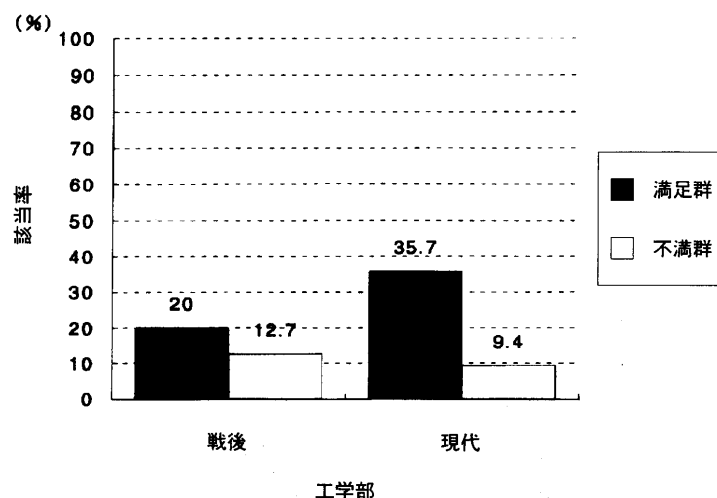


Figur43 少人数でのきめ細かな指導だった（英語）（続き）

英語以外では、＜戦後＞文学部（満足群49.0％－不満群7.7％）、＜戦後＞法学部（満足群43.8％－不満群5.7％）、＜現代＞法学部（満足群59.2％－不満群7.7％）、＜現代＞医学部（満足群50.0％－不満群15.0％）で差がみられた。法学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

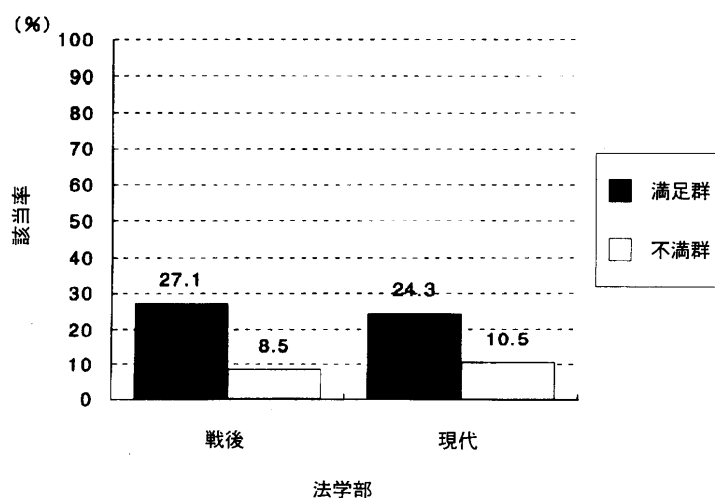
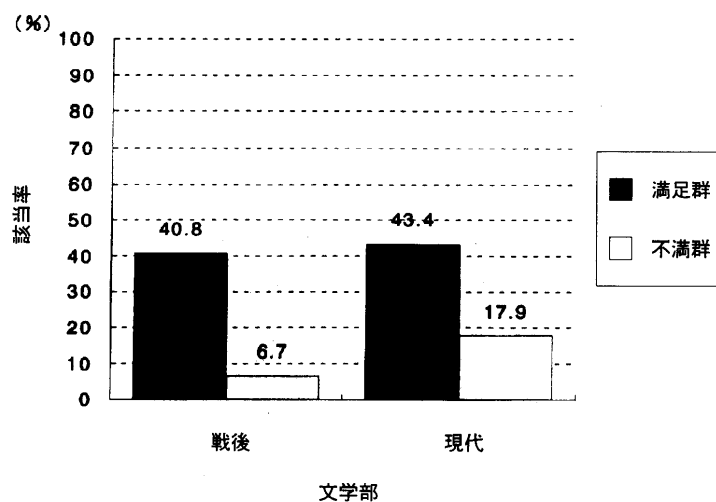


Figur44 少人数でのきめ細かな指導だった（英語以外）

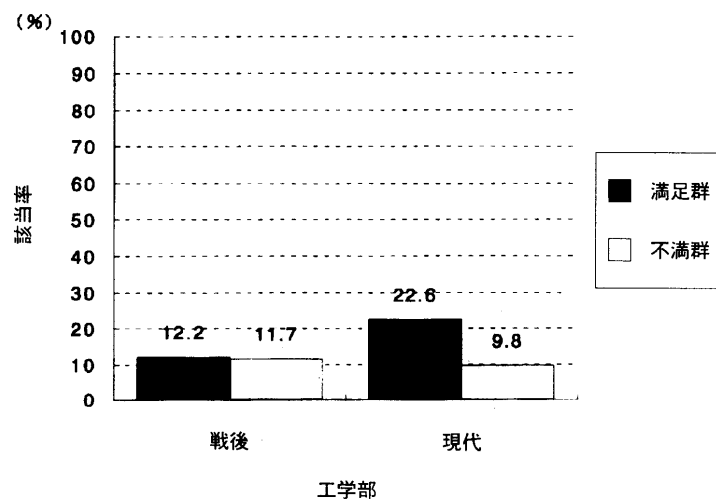
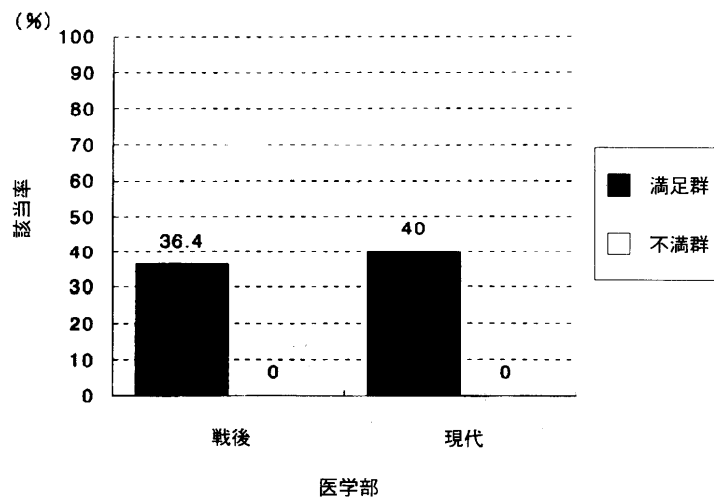


Figur44 少人数でのきめ細かな指導だった（英語以外）（続き）

人文社会では、＜戦後＞文学部（満足群40.8%－不満群6.7%）、＜戦後＞医学部（満足群36.4%－不満群0.0%）、＜現代＞医学部（満足群40.0%－不満群0.0%）で差がみられた。医学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

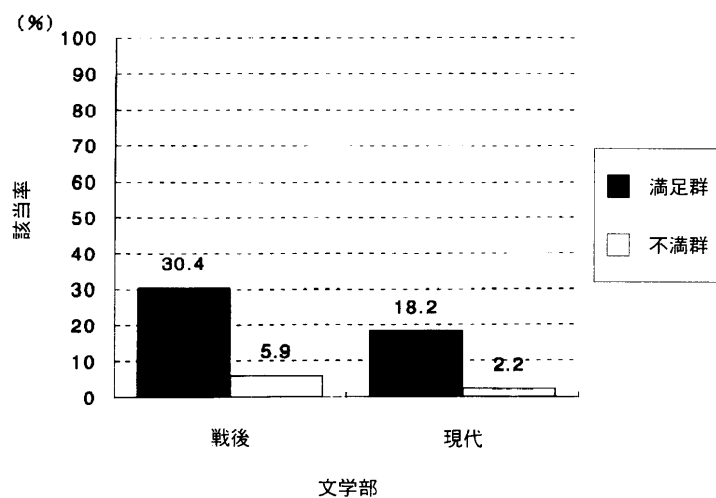


Figur45 少人数でのきめ細かな指導だった（人文社会）

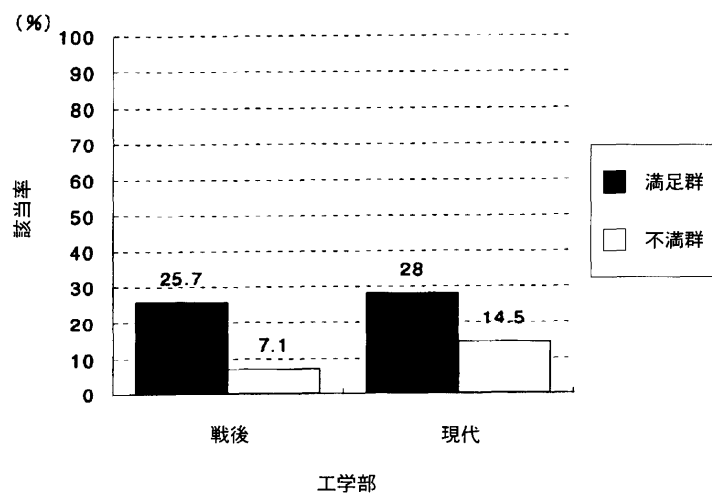
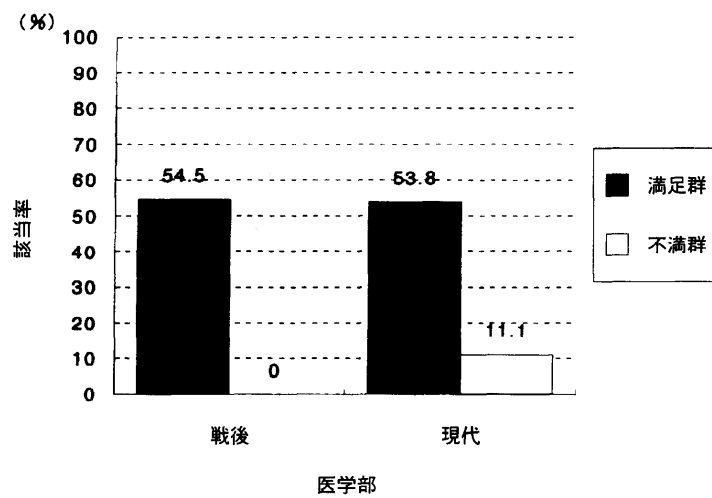
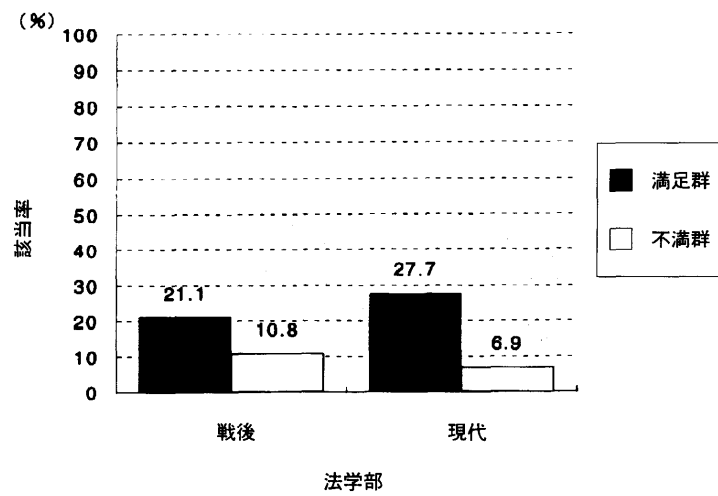


Figur45 少人数でのきめ細かな指導だった (人文社会) (続き)

自然では、＜戦後＞医学部（満足群54.5％－不満群0.0％）、＜現代＞医学部（満足群53.8％－不満群11.1％）で差がみられた。医学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

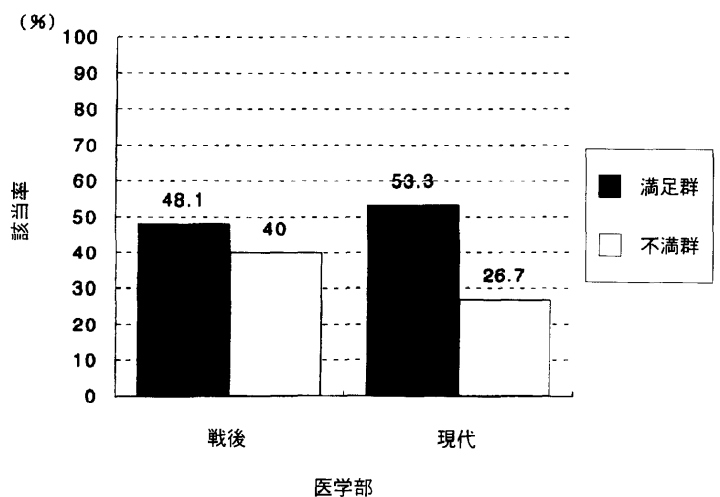
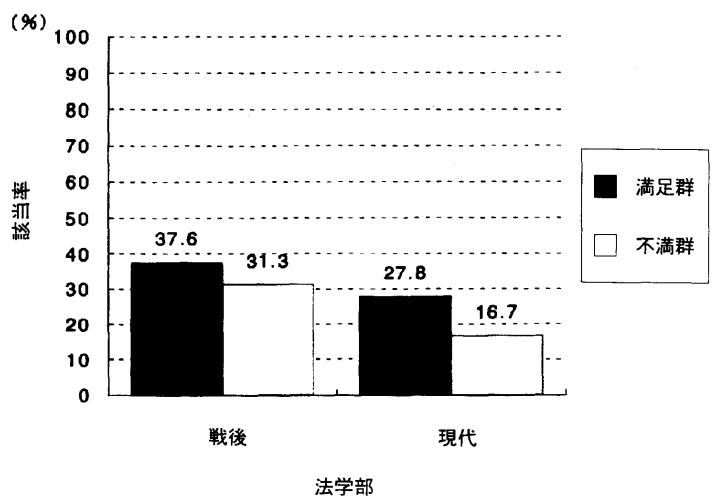
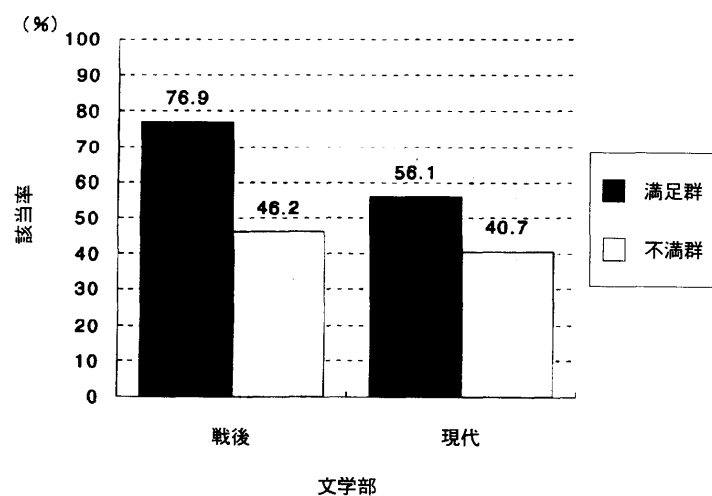


Figur46 少人数でのきめ細かな指導だった (自然)

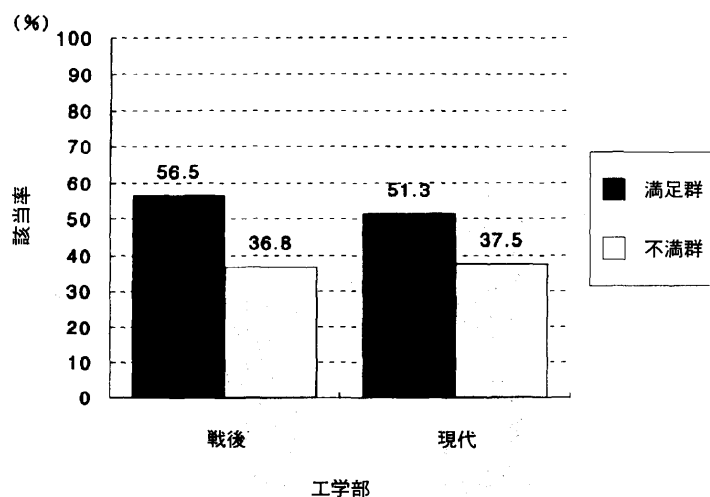


Figur46 少人数でのきめ細かな指導だった（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞文学部（満足群76.9％－不満群46.2％）のみで差がみられた。重要項目は、全くみられなかった。



Figur47 少人数でのきめ細かな指導だった（専門講義）



Figur47 少人数でのきめ細かな指導だった（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞文学部（満足群95.5％－不満群63.6％）、＜戦後＞法学部（満足群93.9％－不満群53.8％）、＜戦後＞工学部（満足群71.6％－不満群37.5％）、＜現代＞法学部（満足群86.4％－不満群50.0％）、＜現代＞工学部（満足群70.3％－不満群25.0％）で差がみられた。法学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

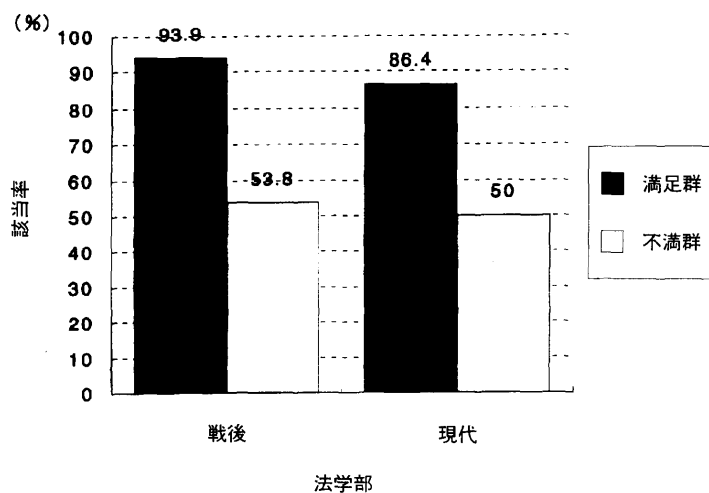
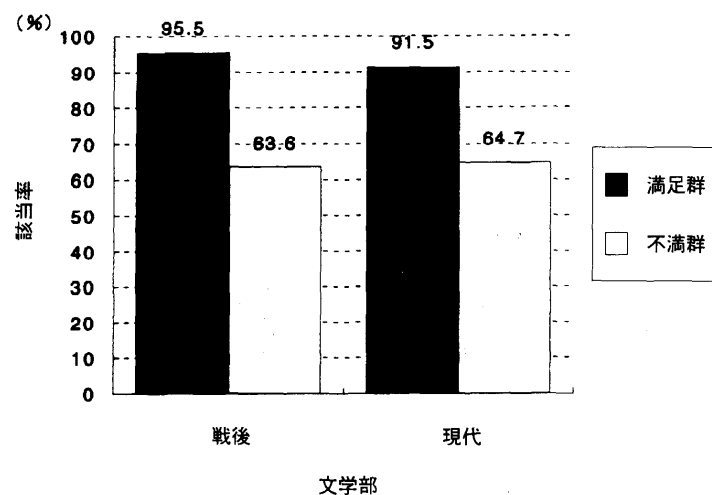


Figure48 少人数でのきめ細かな指導だった（専門演習）

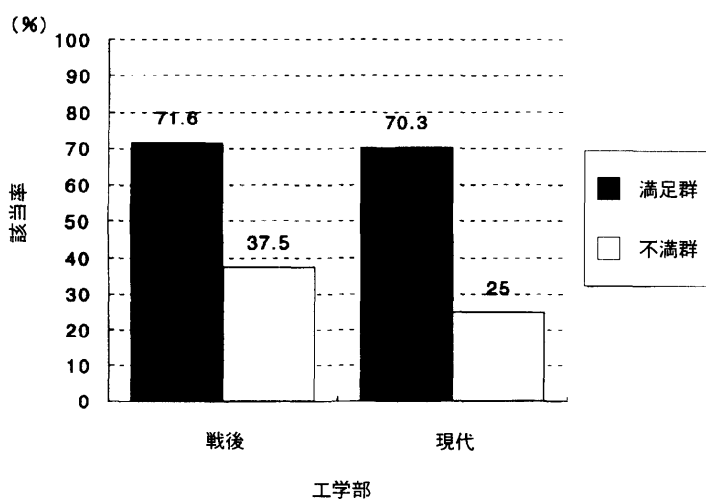
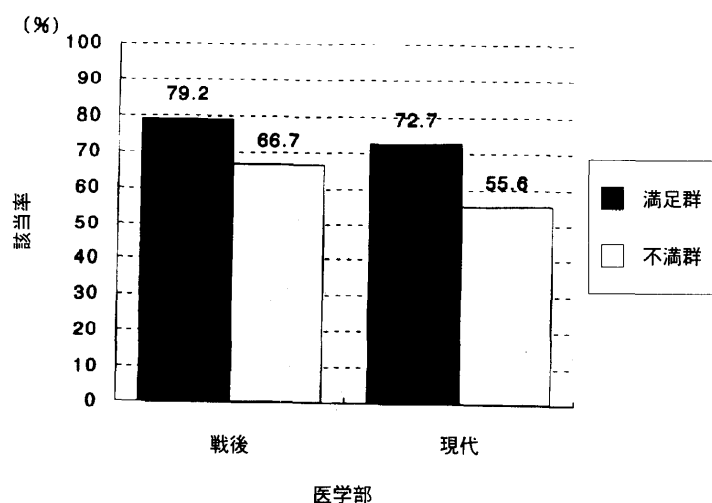


Figure48 少人数でのきめ細かな指導だった（専門演習）（続き）

専門実験では、＜戦後＞工学部（満足群84.9％－不満群26.3％）、＜現代＞医学部（満足群90.5％－不満群16.7％）、＜現代＞工学部（満足群86.2％－不満群52.2％）で差がみられた。工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

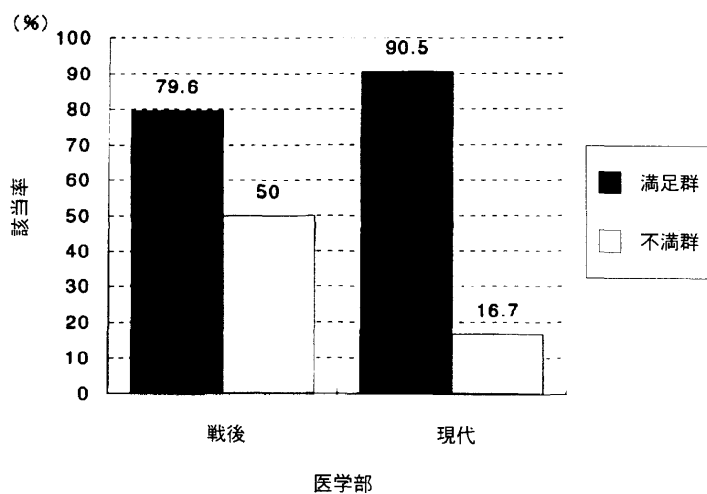


Figure49 少人数でのきめ細かな指導だった（専門実験）

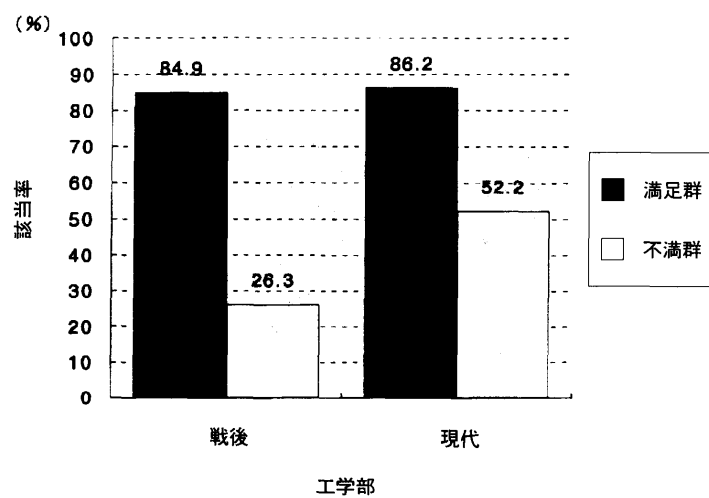


Figure49 少人数でのきめ細かな指導だった（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、話し合いを大事にした授業はありましたか。 →話し合いを大事にした

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養課目（人文・社会系）
- () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では差は全くみられなかった。重要項目も、全くみられなかった。

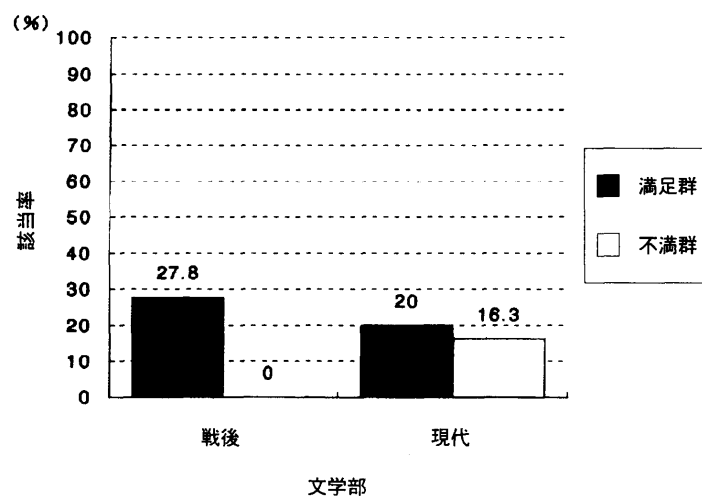


Figure50 話し合いを大事にした（英語）

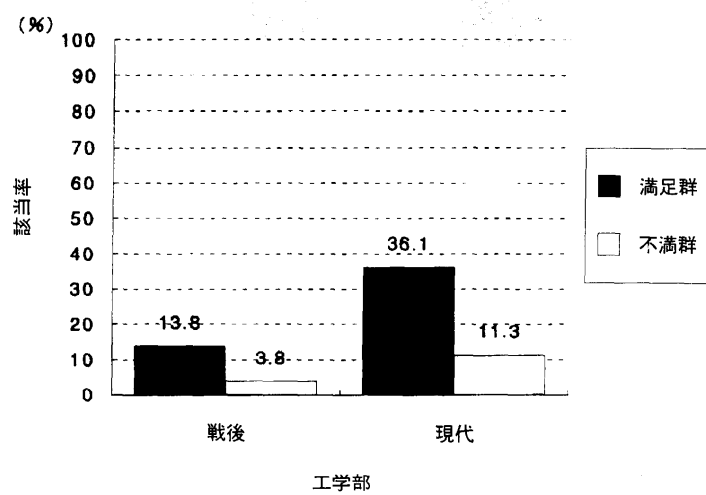
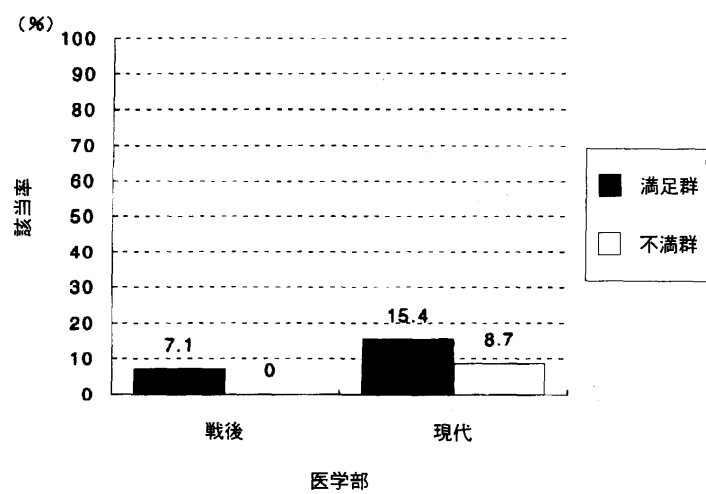
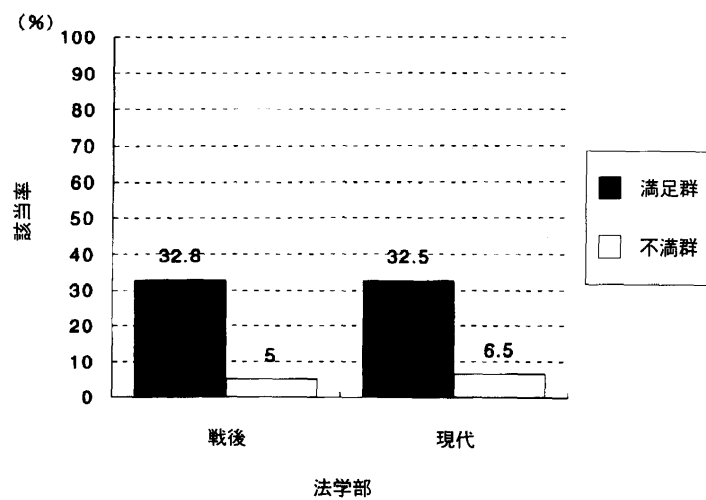


Figure50 話し合いを大事にした（英語）（続き）

英語以外では、＜戦後＞法学部（満足群31.1％－不満群0.0％）、＜現代＞法学部（満足群35.2％－不満群3.9％）で差がみられた。法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

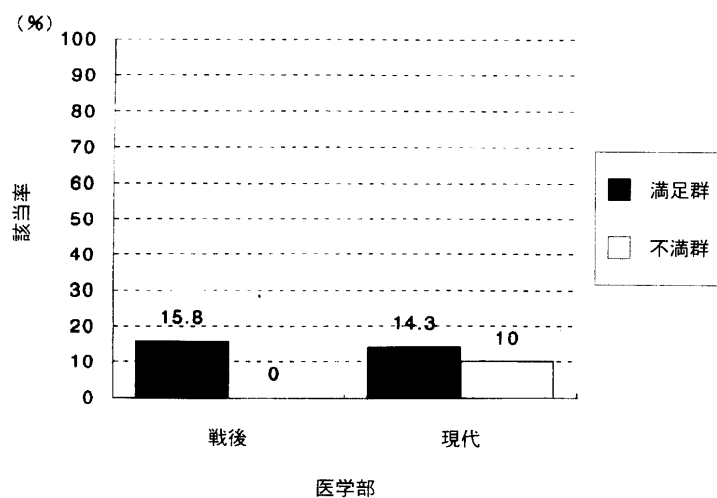
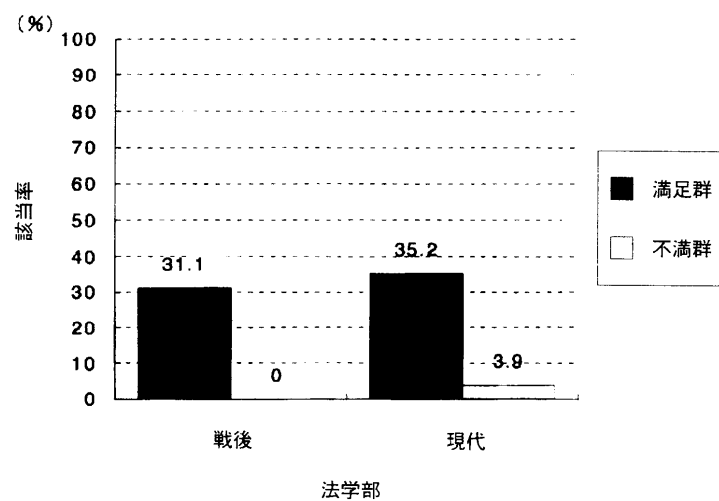
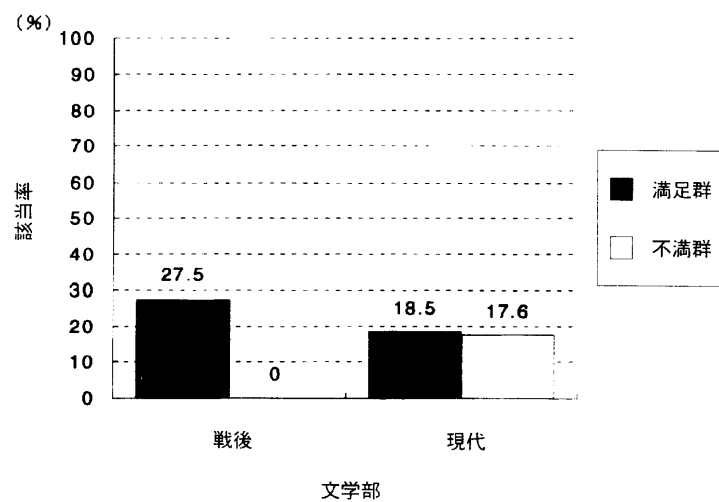


Figure51 話し合いを大事にした（英語以外）

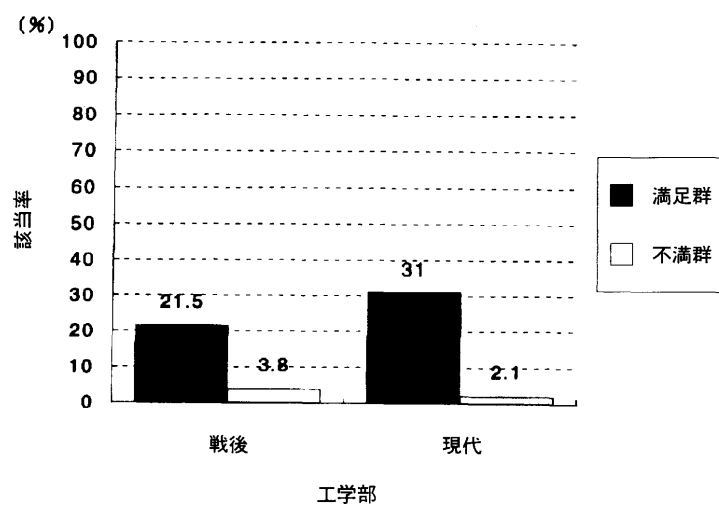


Figure51 話し合いを大事にした（英語以外）（続き）

人文社会では、差は全くみられなかった。重要項目も、全くみられなかった。

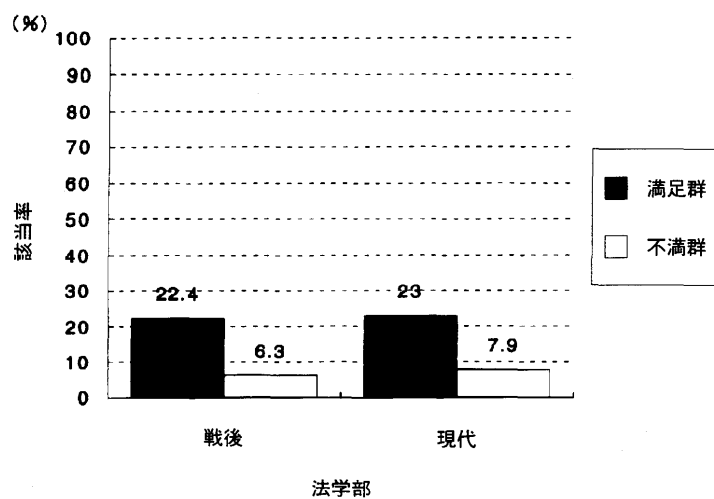
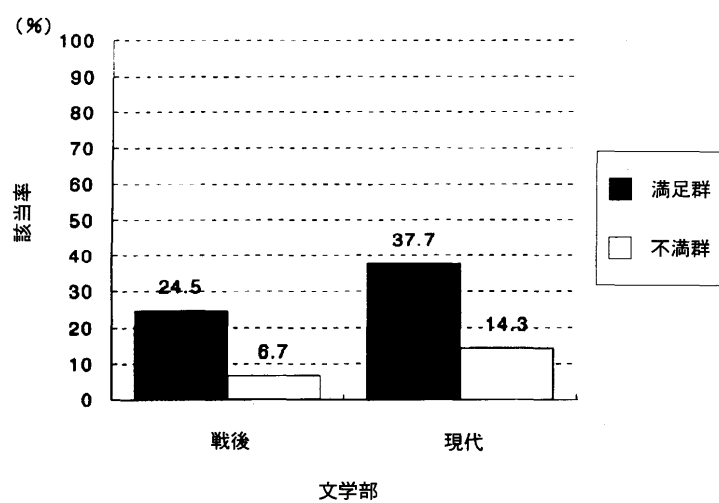


Figure52 話し合いを大事にした（人文社会）

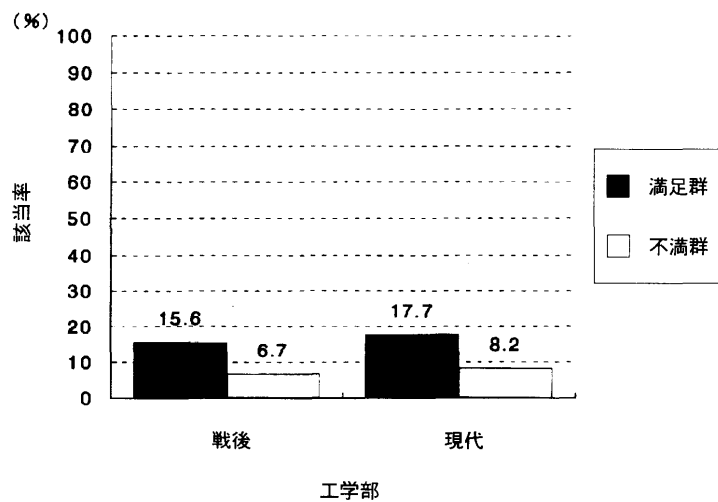
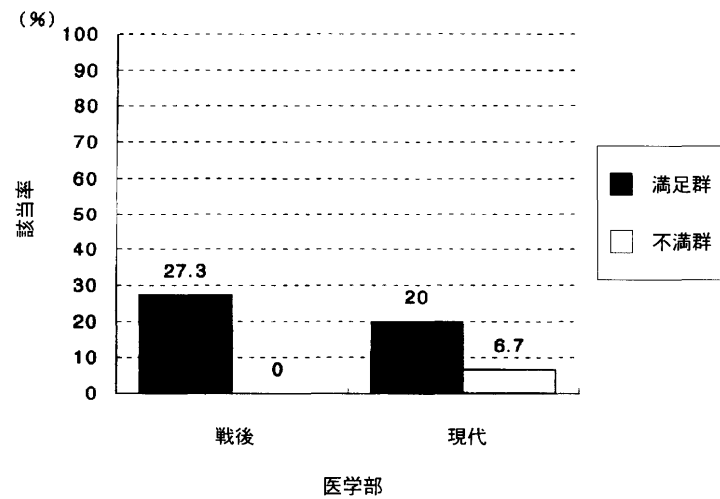


Figure52 話し合いを大事にした（人文社会）（続き）

自然では、差は全くみられなかった。重要項目も、全くみられなかった。

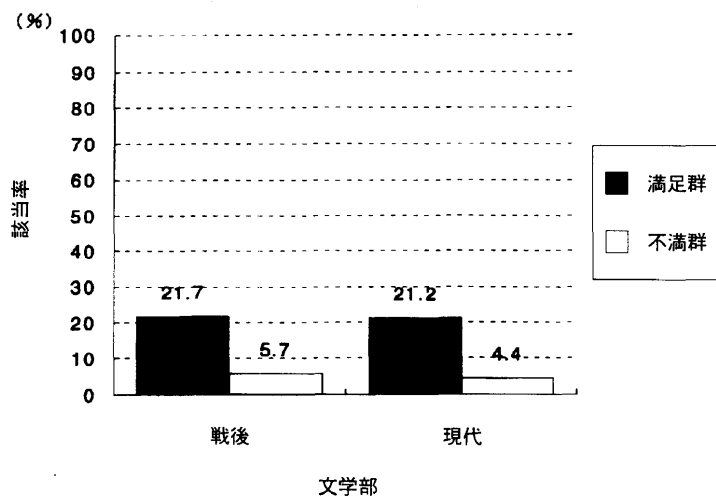


Figure53 話し合いを大事にした（自然）

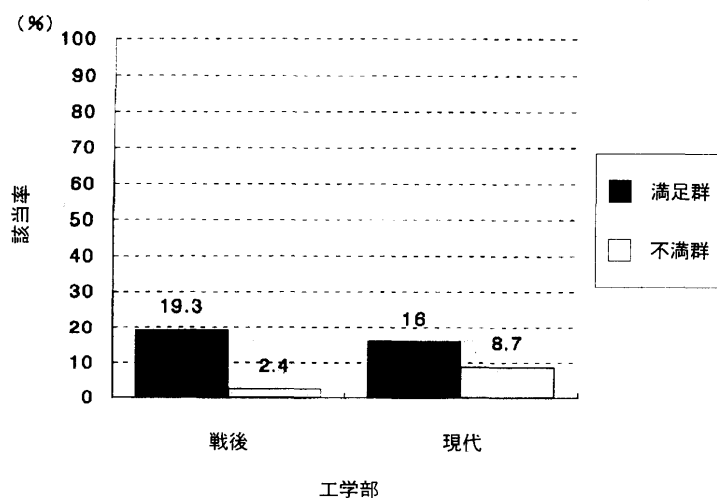
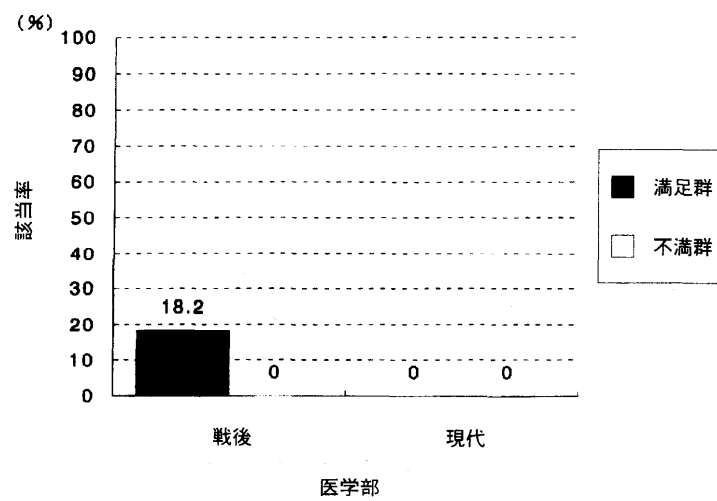
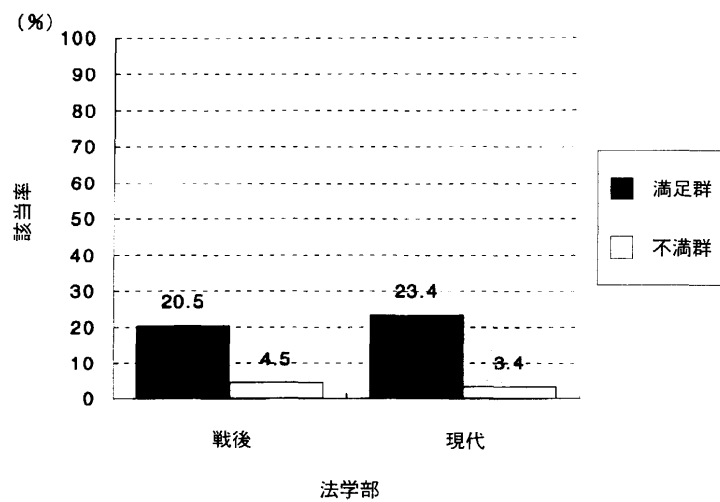


Figure53 話し合いを大事にした（自然）（続き）

専門講義では、＜現代＞医学部（満足群46.7％－不満群13.3％）のみで差がみられた。重要項目は、全くみられなかった。

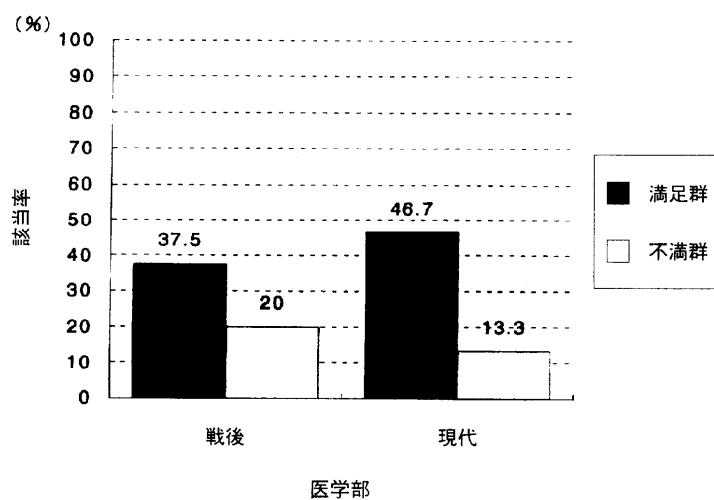
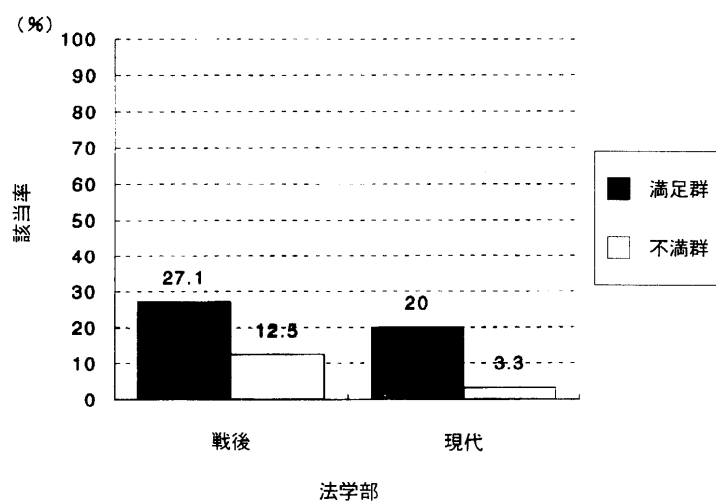
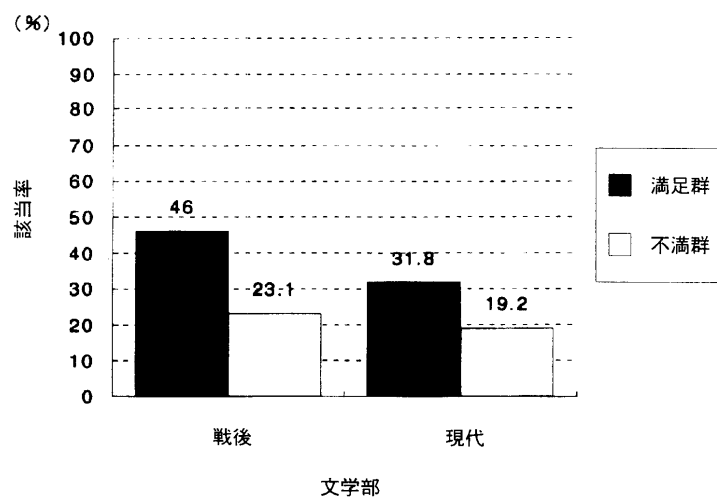


Figure54 話し合いを大事にした（専門講義）

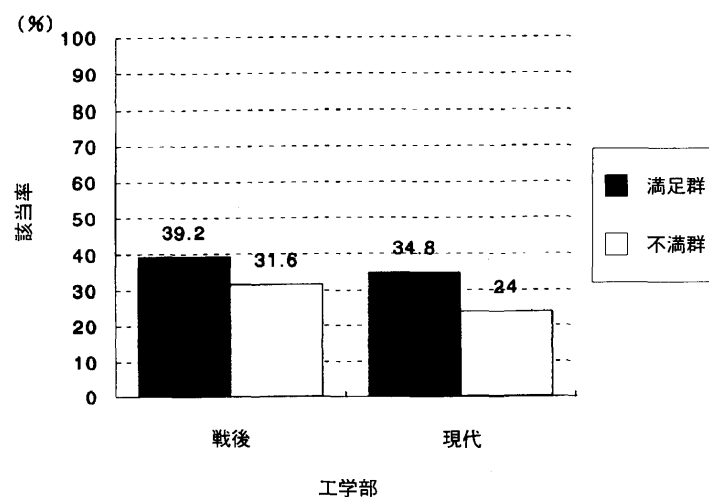


Figure54 話し合いを大事にした（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞文学部（満足群78.1％－不満群36.4％）、＜戦後＞法学部（満足群79.8％－不満群30.8％）、＜戦後＞医学部（満足群61.2％－不満群0.0％）、＜現代＞法学部（満足群87.4％－不満群57.1％）、＜現代＞医学部（満足群59.1％－不満群22.2％）で差がみられた。法学部、医学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

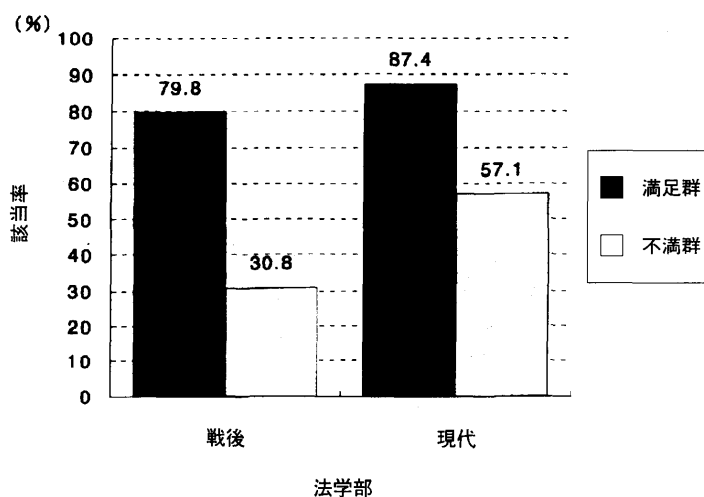
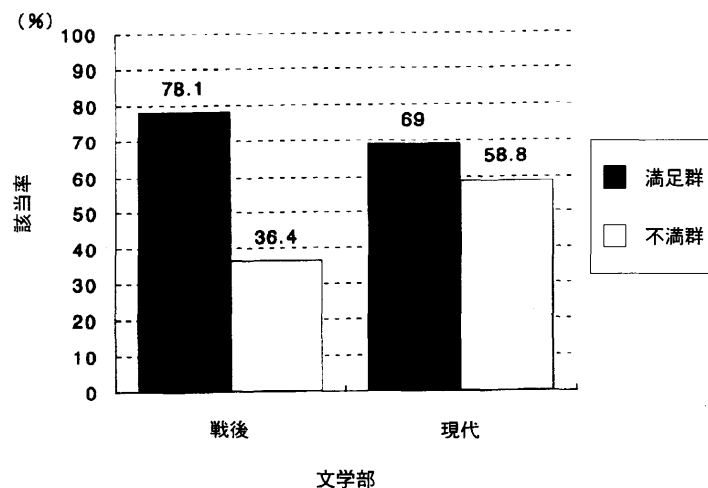


Figure55 話し合いを大事にした（専門演習）

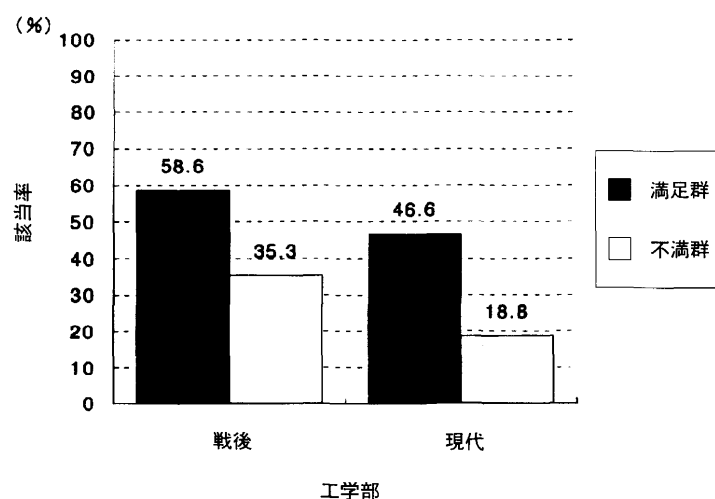
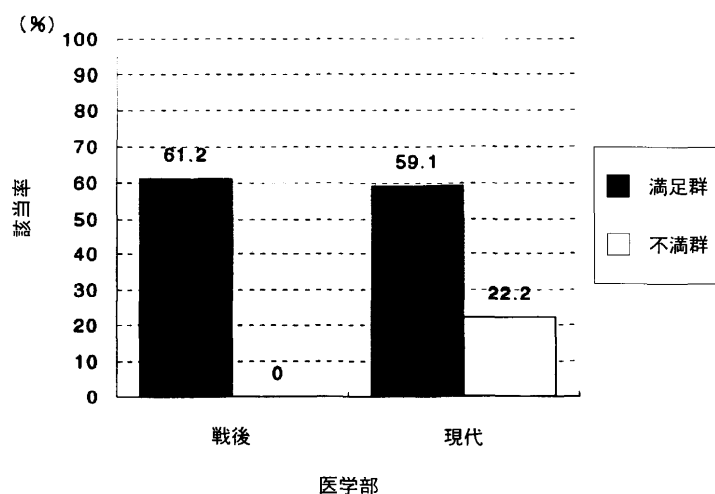


Figure55 話し合いを大事にした（専門演習）（続き）

専門実験では、＜戦後＞工学部（満足群66.7％－不満群10.5％）のみで差がみられた。現代の工学部で差がみられない原因は、不満群の該当率が増加したからである（10.5→43.5％）。重要項目は、全くみられなかった。

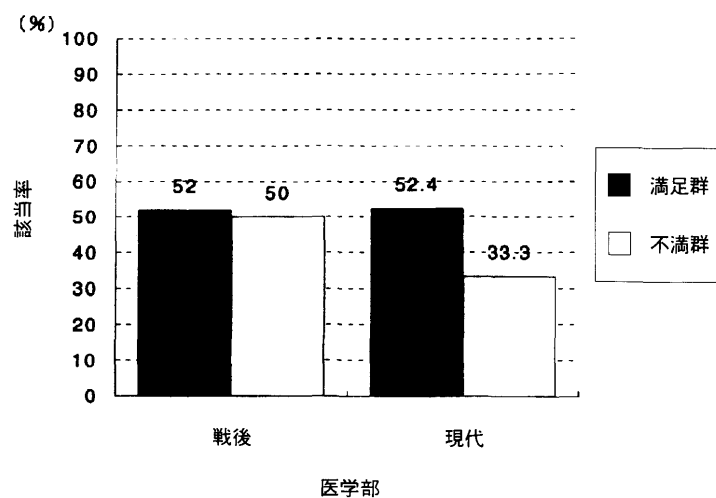


Figure56 話し合いを大事にした（専門実験）

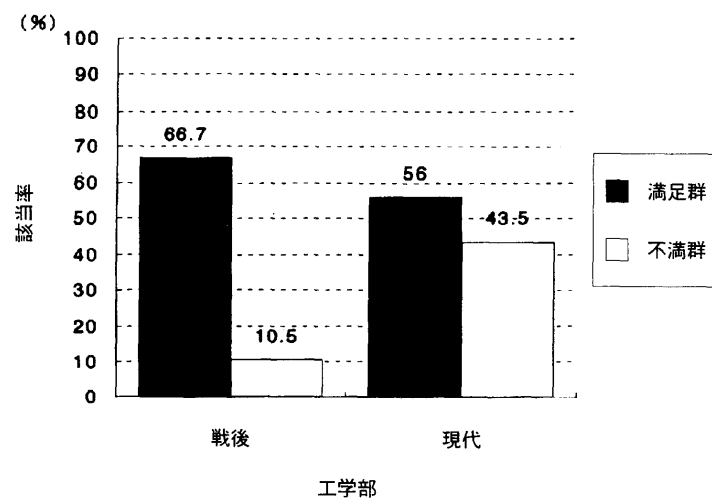


Figure56 話し合いを大事にした（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、レポートにまとめることを大事にした授業はありましたか。

→レポートにまとめることを重視した

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業 () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
() 一般教養課目（人文・社会系）
() 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
() 専門科目の演習
() 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった (3) いくつかあった
(2) 少なくとも1個はあった (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、＜現代＞医学部（満足群46.2%－不満群13.0%）のみで差がみられた。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、満足群の該当率が少なかったからであるが、現代にかけて満足群の該当率が大幅に増加し（7.1→46.2%）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

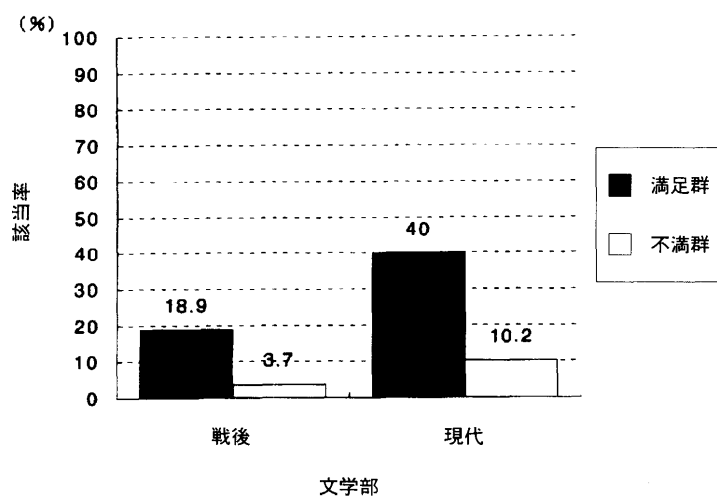


Figure57 レポートにまとめることを重視した（英語）

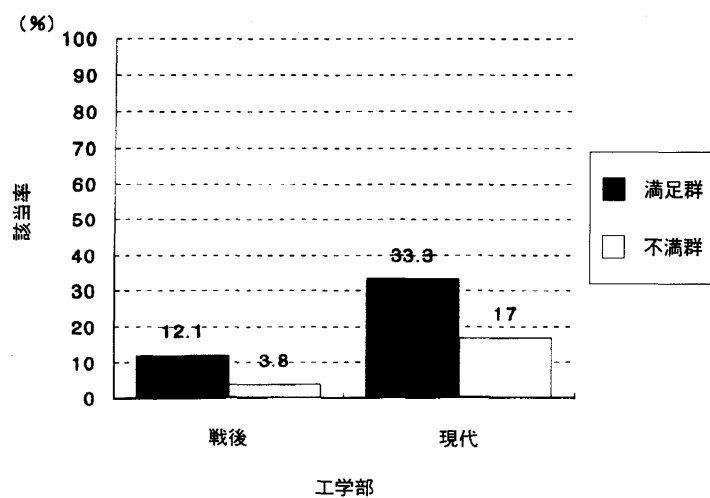
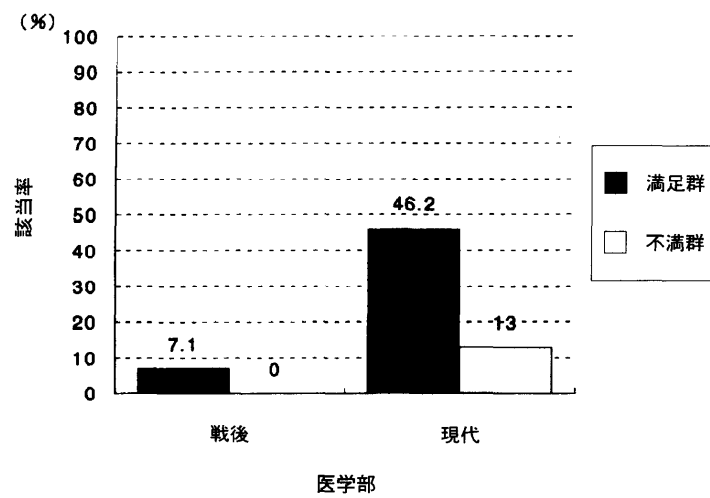
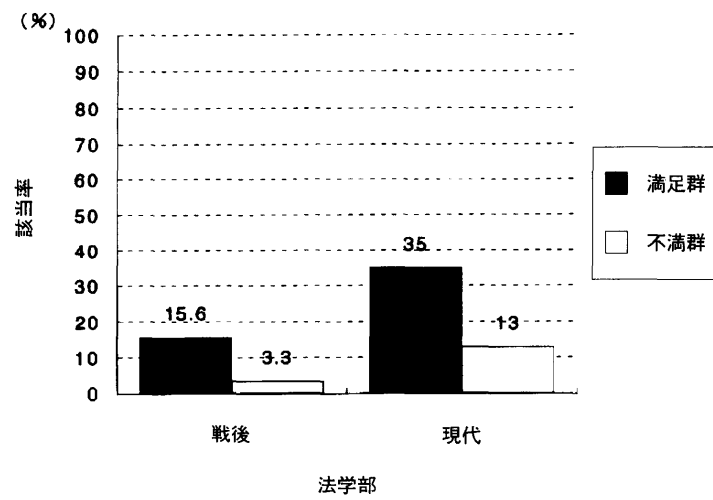


Figure57 レポートにまとめることを重視した（英語）（続き）

英語以外では、差はみられなかった。重要項目も、全くみられなかった。

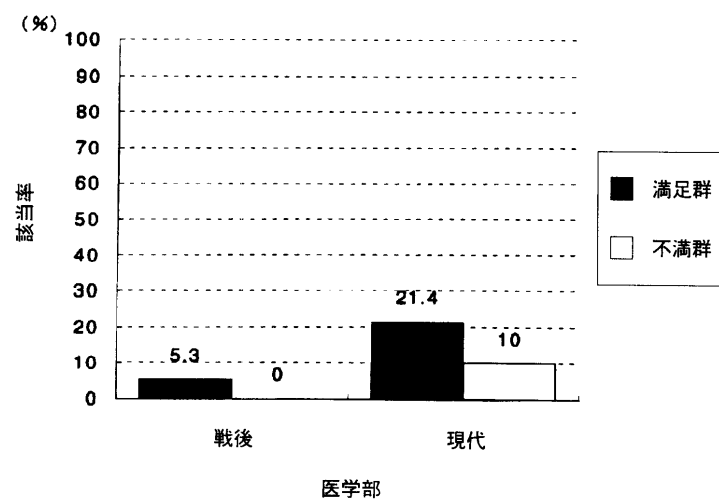
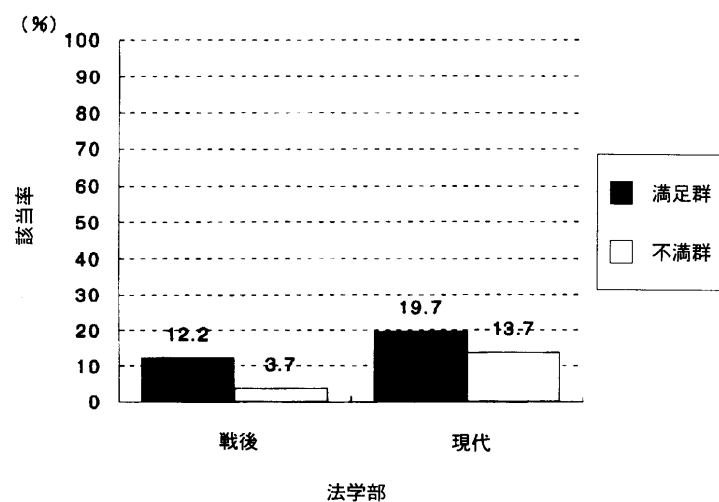
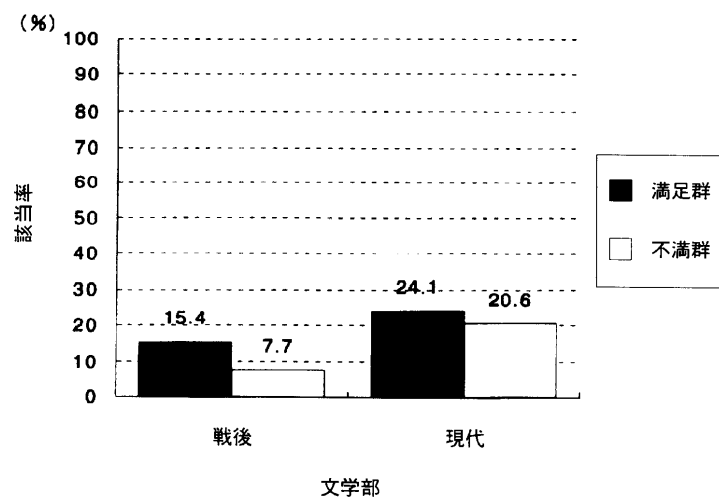


Figure58 レポートにまとめることを重視した（英語以外）

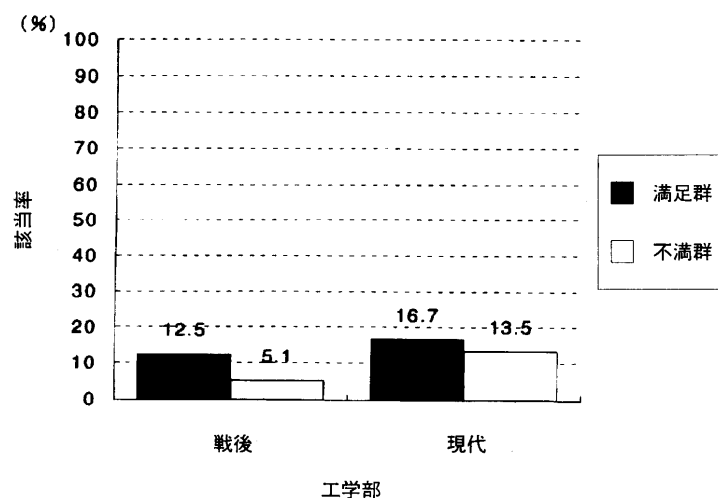


Figure58 レポートにまとめることを重視した（英語以外）（続き）

人文社会では、＜戦後＞文学部（満足群54.0％－不満群20.0％）、＜戦後＞医学部（満足群45.5％－不満群0.0％）、＜現代＞文学部（満足群73.6％－不満群39.3％）で差がみられた。現代の医学部で差がみられない原因は、不満群の該当率が増加したからである（0.0→46.7％）。文学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

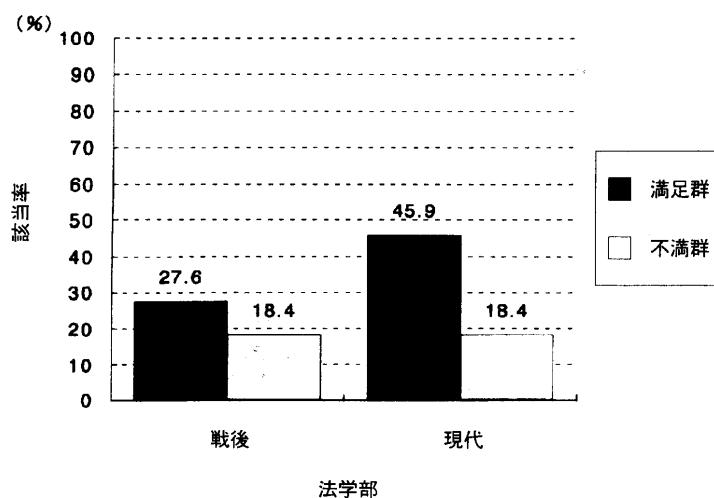
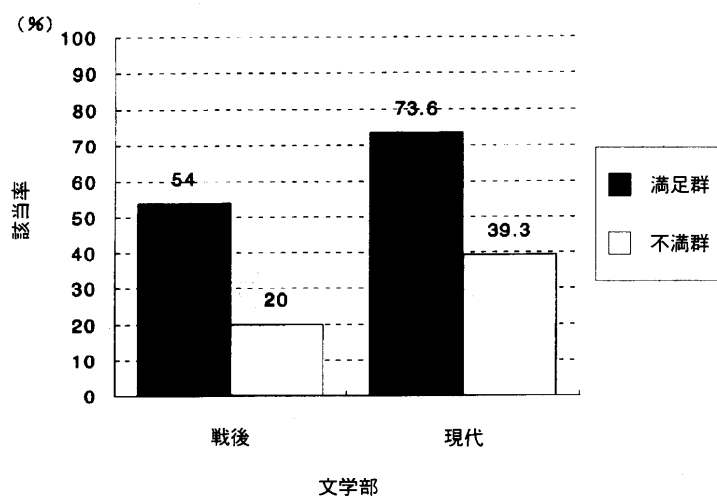


Figure59 レポートにまとめることを重視した（人文社会）

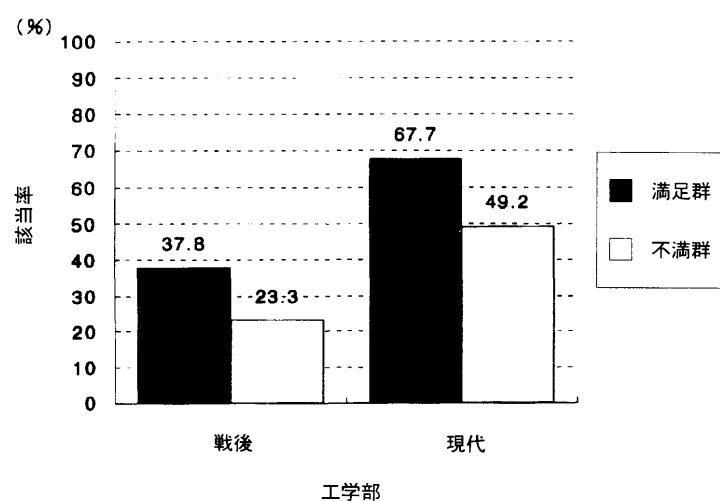
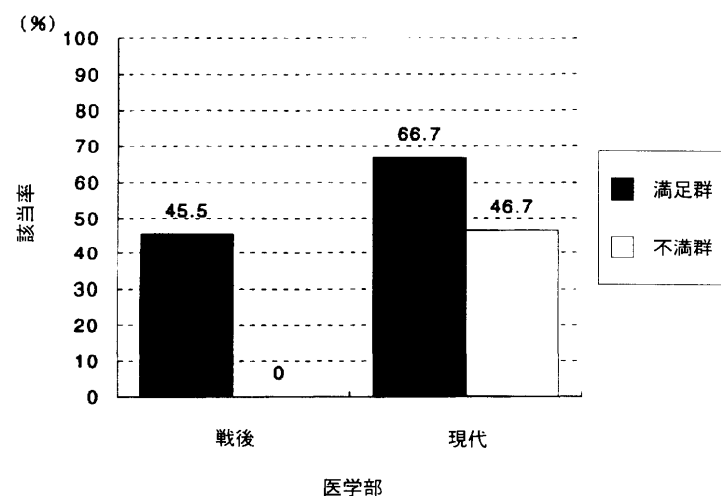


Figure59 レポートにまとめることを重視した（人文社会）（続き）

自然では、＜戦後＞医学部（満足群72.7％－不満群25.0％）のみで差がみられた。現代の医学部で差がみられない原因は、現代にかけて不満群の該当率が増加したからである（25.0→61.1％）。重要項目は、全くみられなかった。

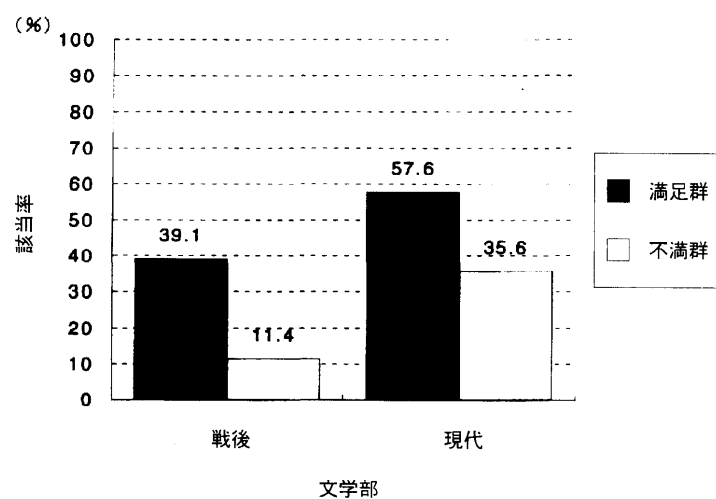


Figure60 レポートにまとめることを重視した（自然）

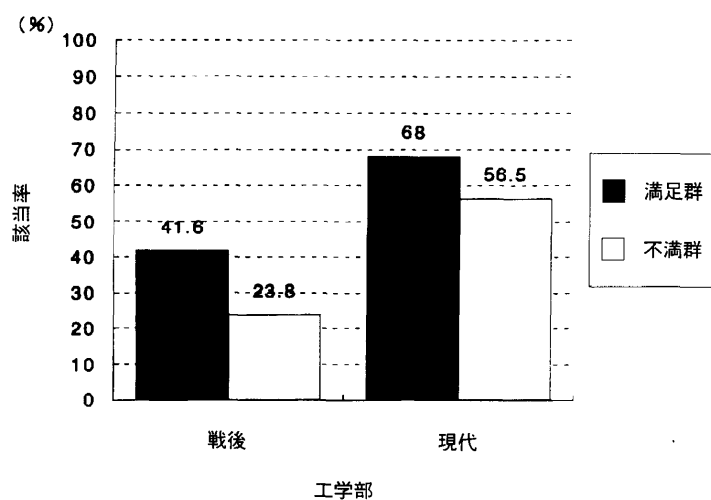
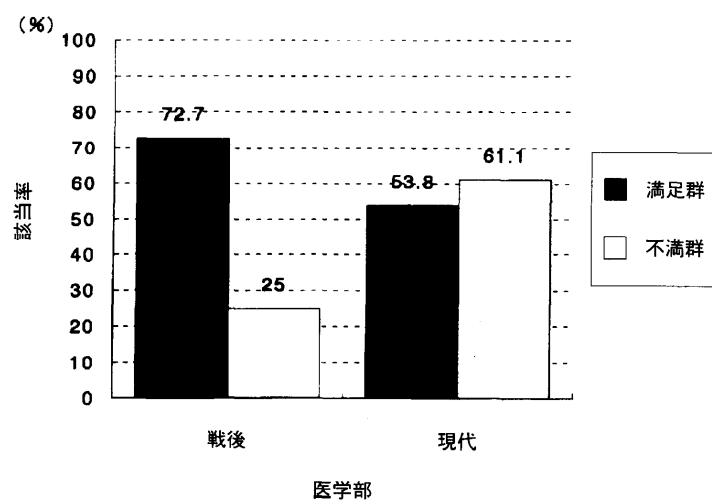
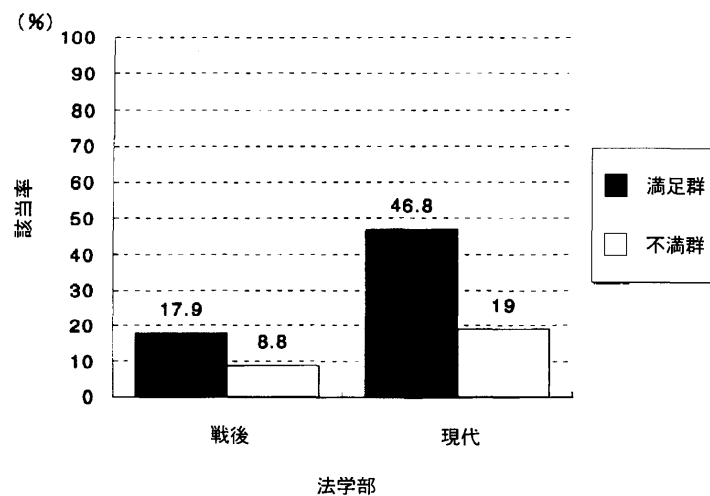


Figure60 レポートにまとめることを重視した（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞文学部（満足群81.8％－不満群46.2％）、＜現代＞医学部（満足群73.3％－不満群26.7％）で差がみられた。重要項目は、＜現代＞文学部（満足群71.2％－不満群74.1％）、＜現代＞工学部（満足群84.3％－不満群84.0％）でみられた。

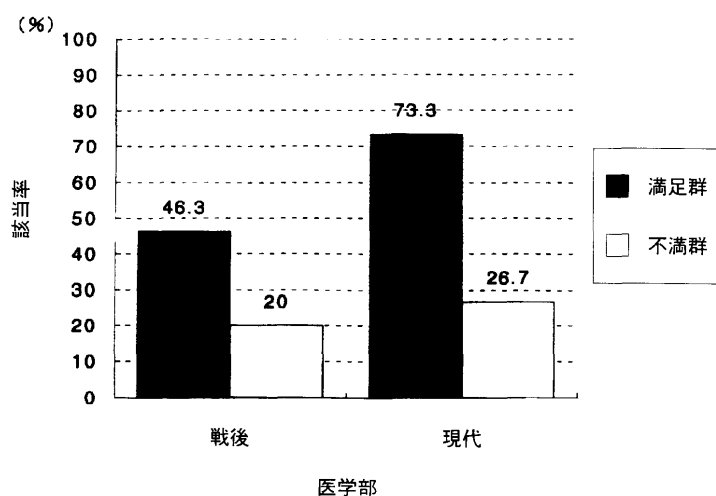
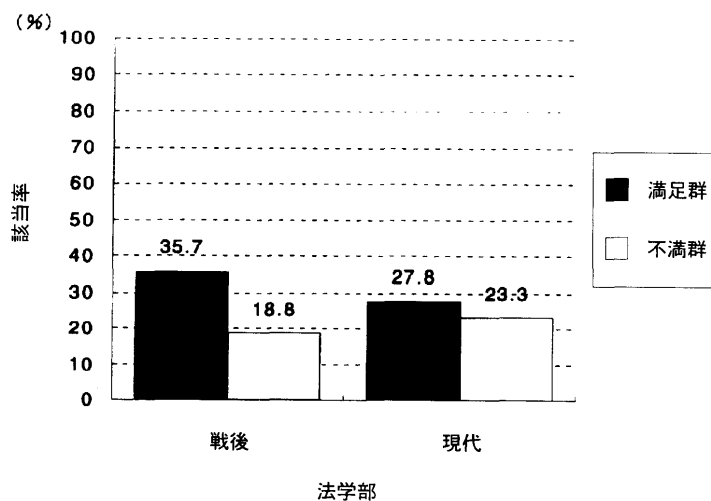
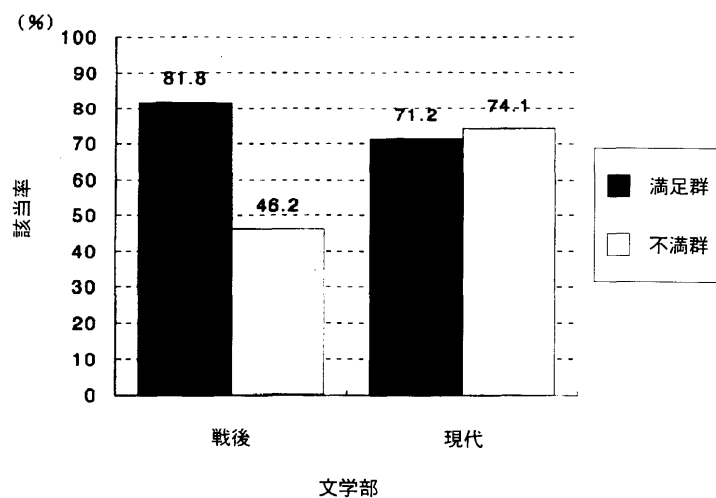


Figure61 レポートにまとめることを重視した（専門講義）

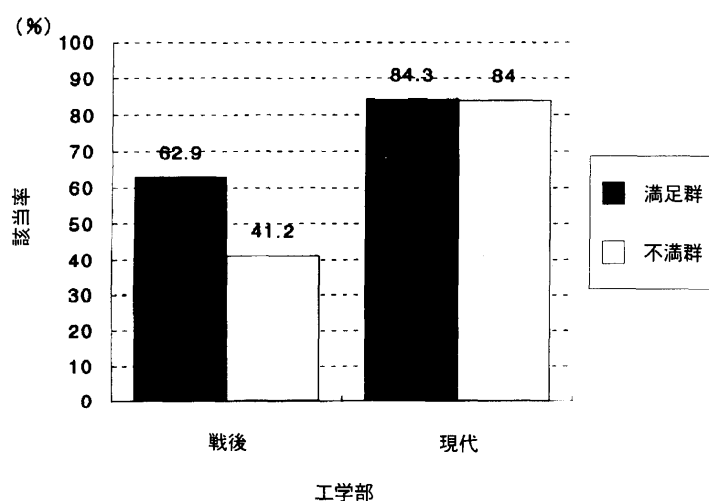


Figure61 レポートにまとめることを重視した（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞法学部（満足群65.0％－不満群34.6％）、＜戦後＞医学部（満足群67.3％－不満群33.3％）、＜現代＞医学部（満足群90.9％－不満群55.6％）で差がみられた。医学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞工学部（満足群86.4％－不満群80.0％）、＜現代＞文学部（満足群77.5％－不満群70.6％）でみられた。

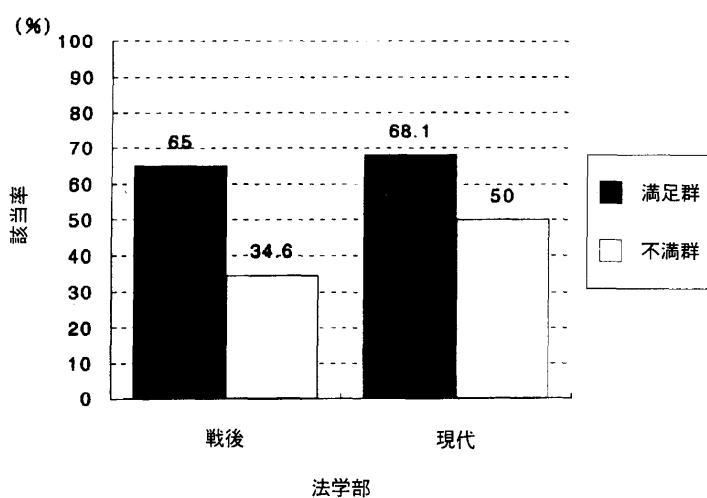
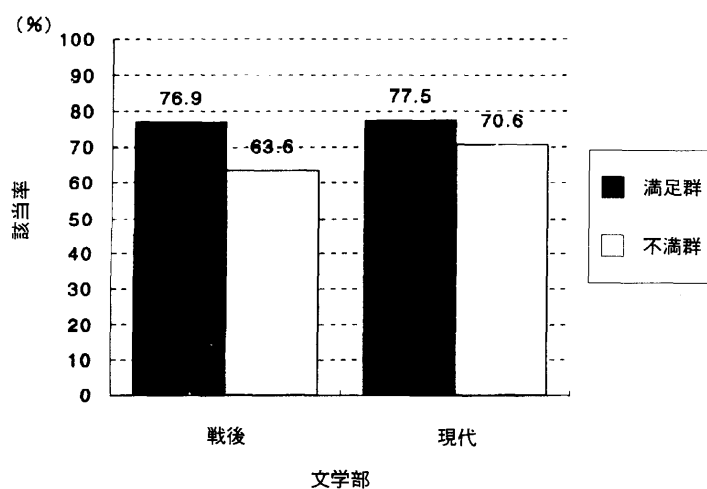


Figure62 レポートにまとめることを重視した（専門演習）

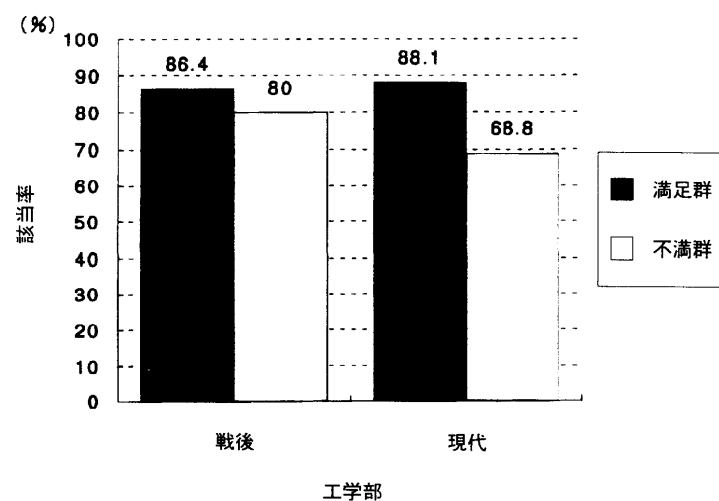
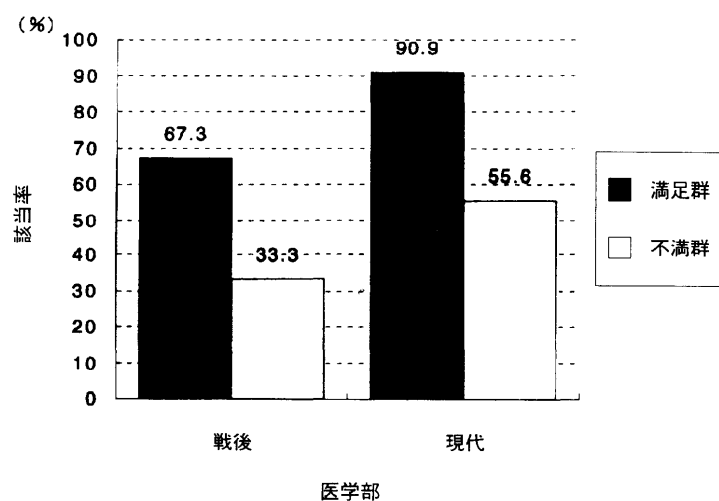


Figure62 レポートにまとめることを重視した（専門演習）（続き）

専門実験では、＜現代＞医学部（満足群95.2％－不満群58.3％）のみで差がみられた。重要項目は、＜現代＞工学部（満足群93.9％－不満群91.3％）でみられた。

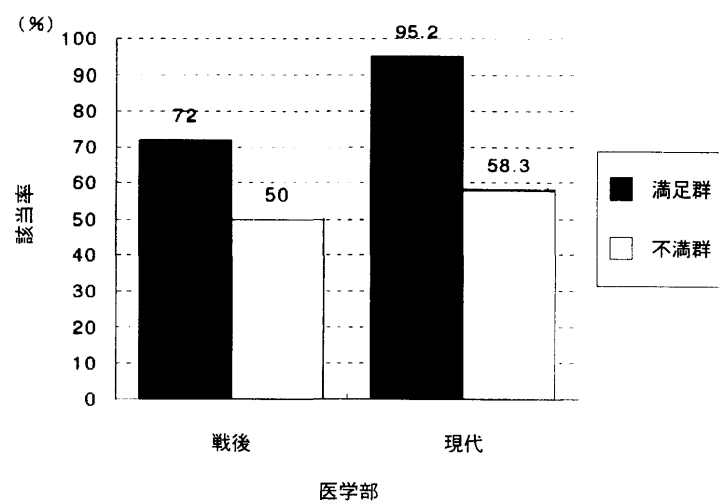


Figure63 レポートにまとめることを重視した（専門実験）

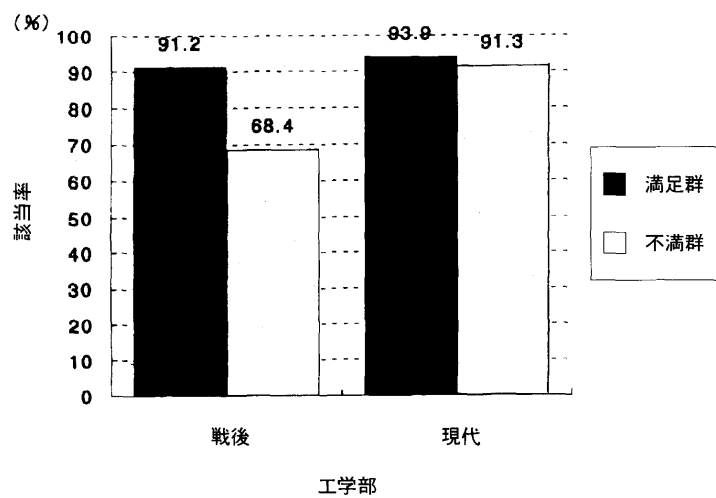


Figure63 レポートにまとめることを重視した（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、ビデオやスライド、図表その他の資料など理解を助ける補助的手段の充実した授業はありましたか。

→資料などの補助的手段が充実していた

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養課目（人文・社会系）
- () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、＜現代＞医学部（満足群50.0%－不満群9.1%）のみで差がみられた。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、満足群の該当率が少なかったからであるが、現代にかけて満足群の該当率が大幅に増加し（0.0→50.0%）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

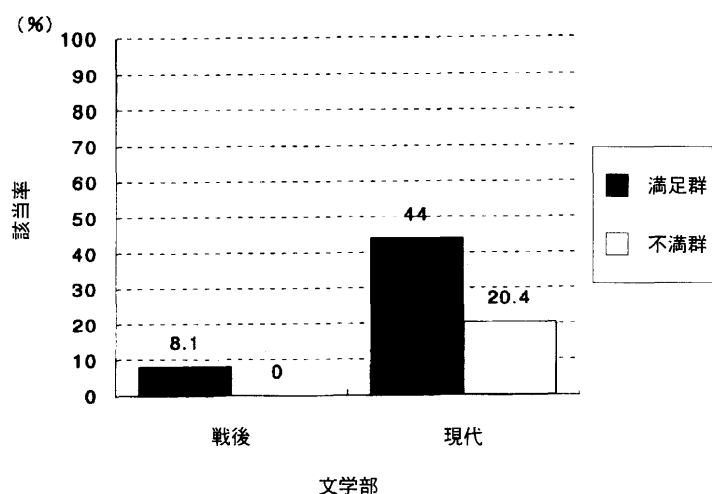


Figure64 資料などの補助的手段が充実していた（英語）

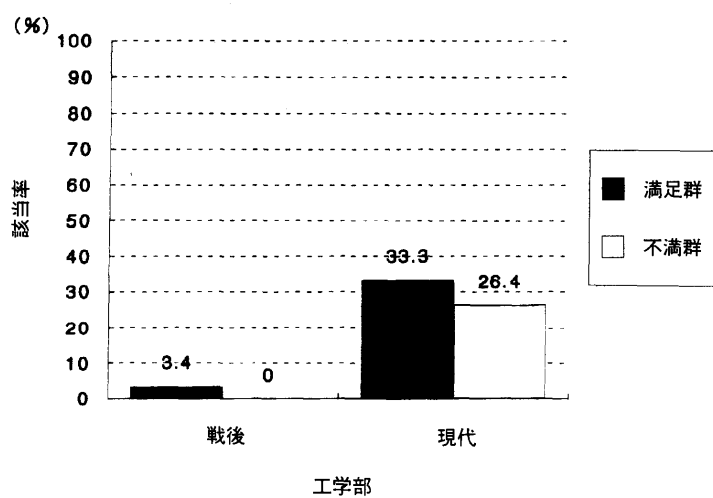
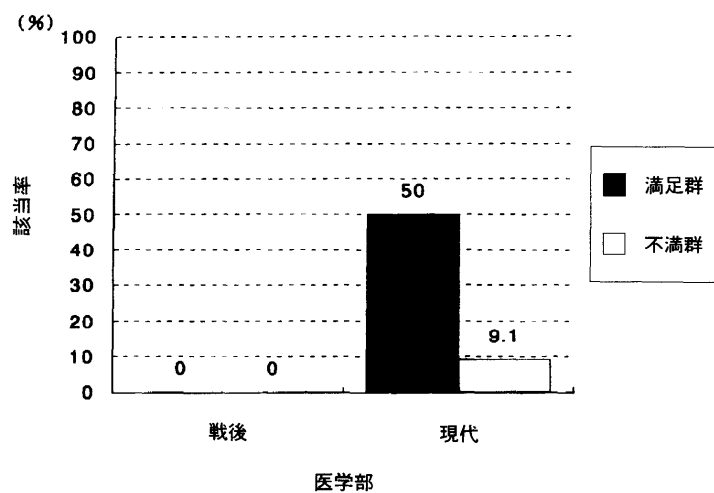
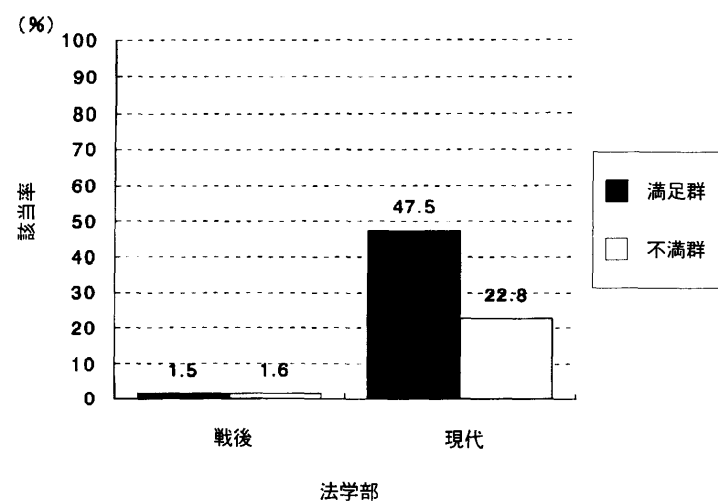


Figure64 資料などの補助的手段が充実していた（英語）（続き）

英語以外では、差はみられなかった。重要項目も、全くみられなかった。

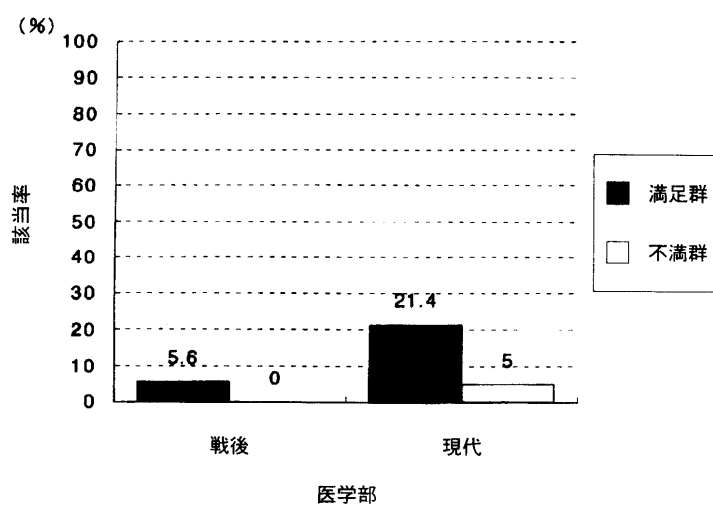
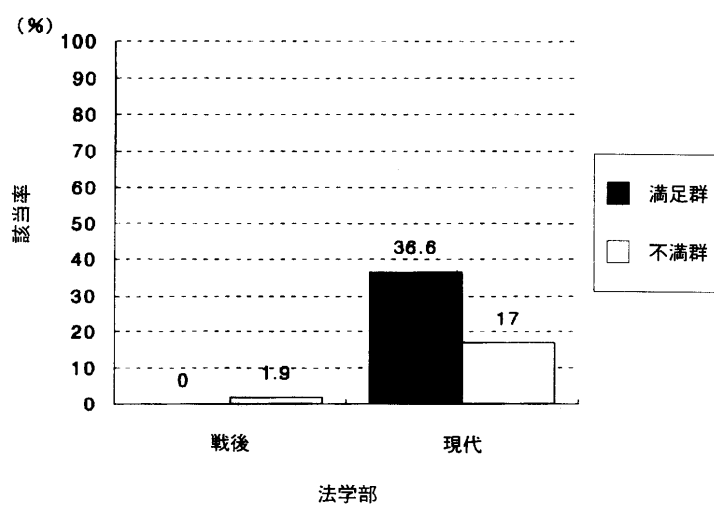
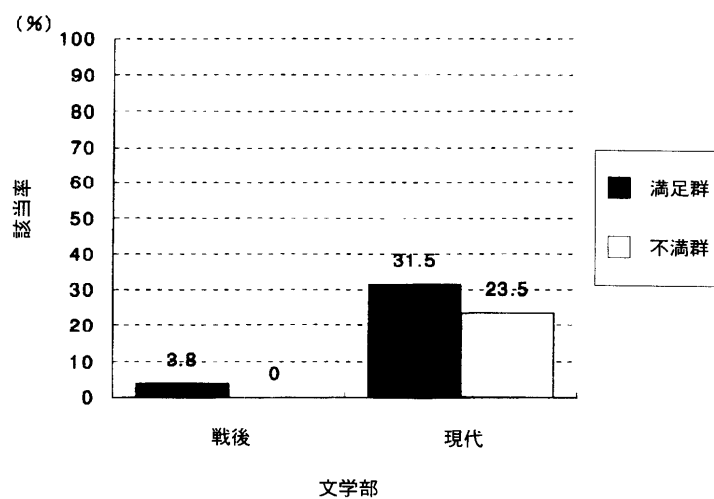


Figure65 資料などの補助的手段が充実していた（英語以外）

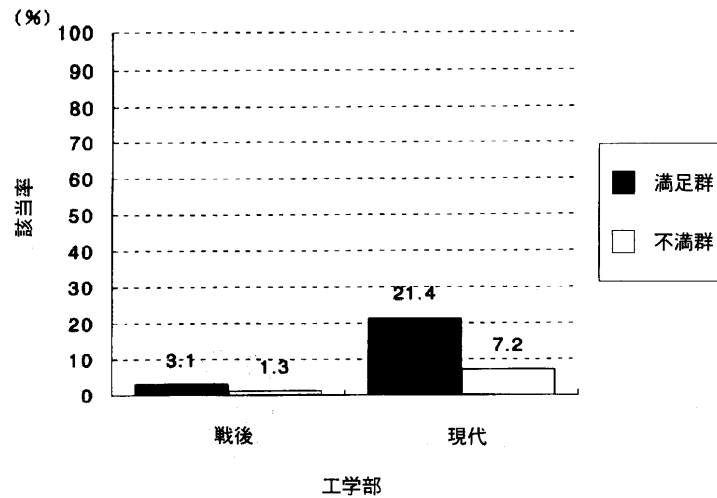


Figure65 資料などの補助的手段が充実していた（英語以外）（続き）

人文社会では、＜現代＞法学部（満足群58.1％－不満群15.4％）、＜現代＞医学部（満足群64.3％－不満群6.3％）、＜現代＞工学部（満足群60.3％－不満群26.2％）で差がみられた。戦後の法学部、医学部、工学部で差がみられなかった原因は、満足群の該当率が少なかったからであるが、現代にかけて満足群の該当率が増加し（法学部5.7→58.1％；医学部10.0→64.3％；工学部18.9→60.3％）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

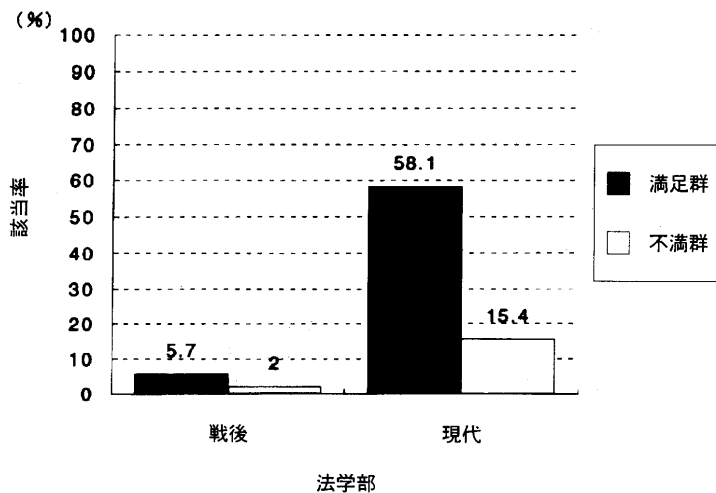
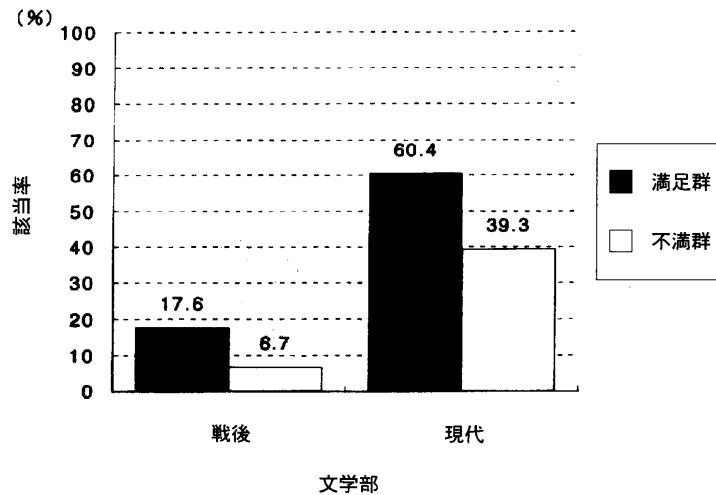


Figure66 資料などの補助的手段が充実していた（人文社会）

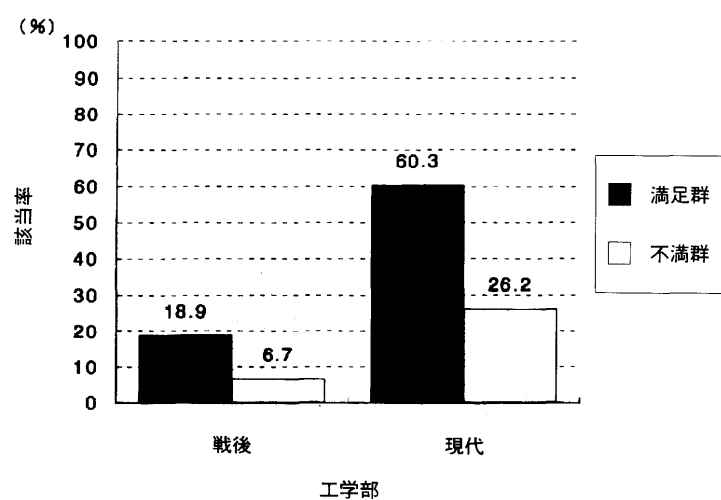
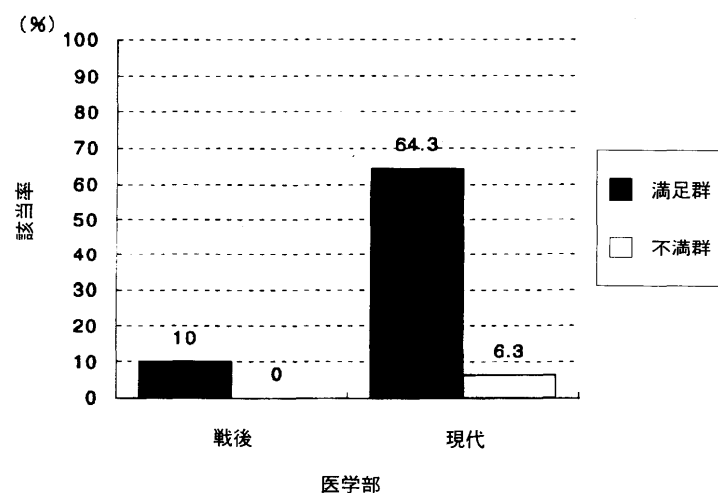


Figure66 資料などの補助的手段が充実していた（人文社会）（続き）

自然では、＜現代＞文学部（満足群60.6％－不満群30.2％）、＜現代＞法学部（満足群61.7％－不満群28.8％）、＜現代＞医学部（満足群75.0％－不満群31.6％）で差がみられた。戦後の文学部、法学部、医学部で差がみられなかった原因は、満足群の該当率が少なかったからであるが、現代にかけて満足群の該当率が大幅に増加し（文学部16.7→60.6％；法学部10.3→61.7％；医学部40.0→75.0％）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

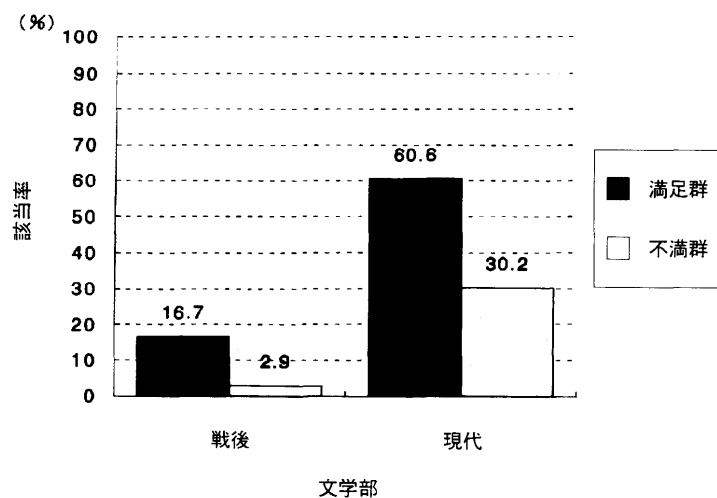


Figure67 資料などの補助的手段が充実していた（自然）

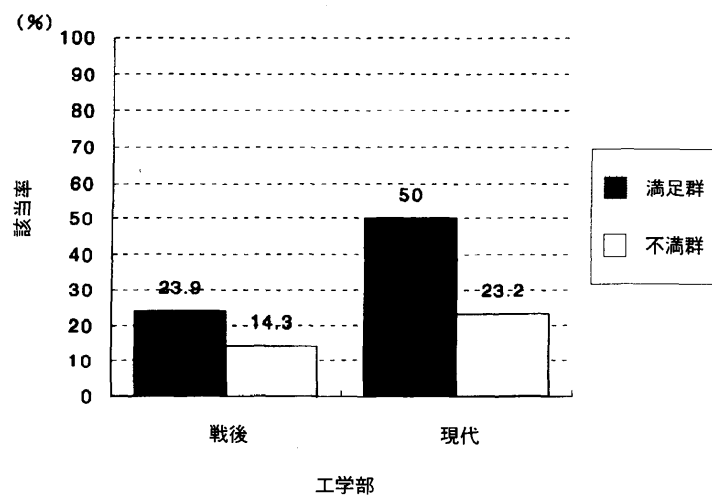
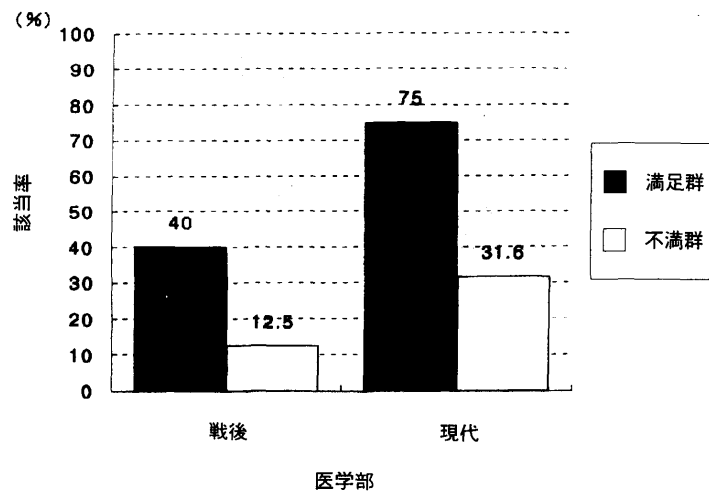
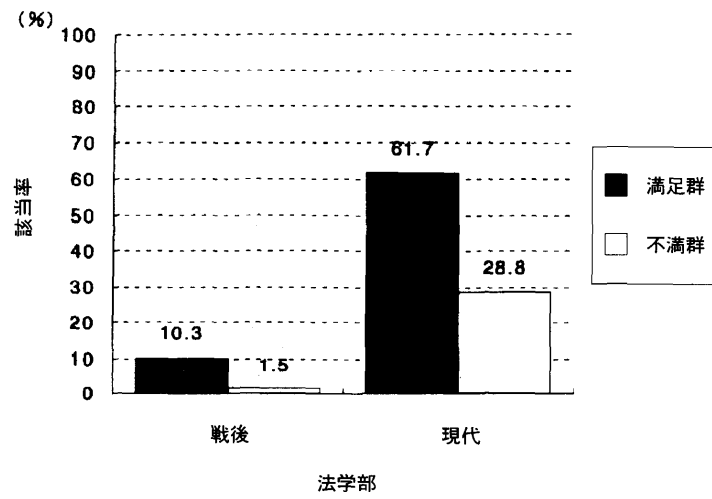


Figure67 資料などの補助的手段が充実していた（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞医学部（満足群80.0％－不満群40.0％）のみで差がみられた。現代の医学部で差がみられない原因は、不満群の該当率が増加したからである（40.0→71.4％）。重要項目は、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群71.4％）でみられた。

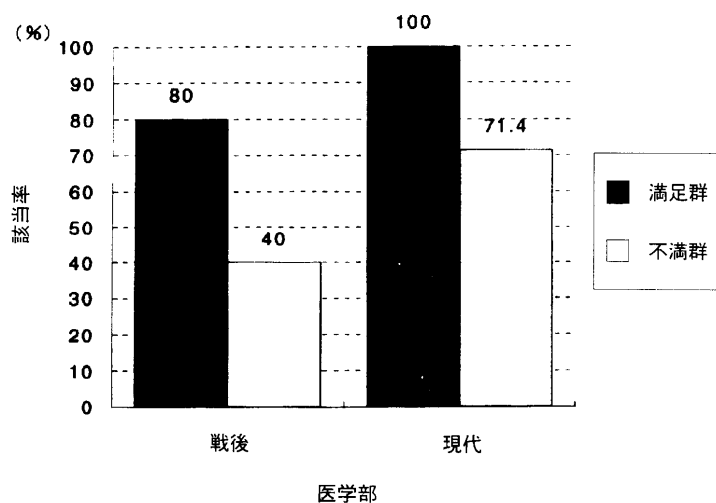
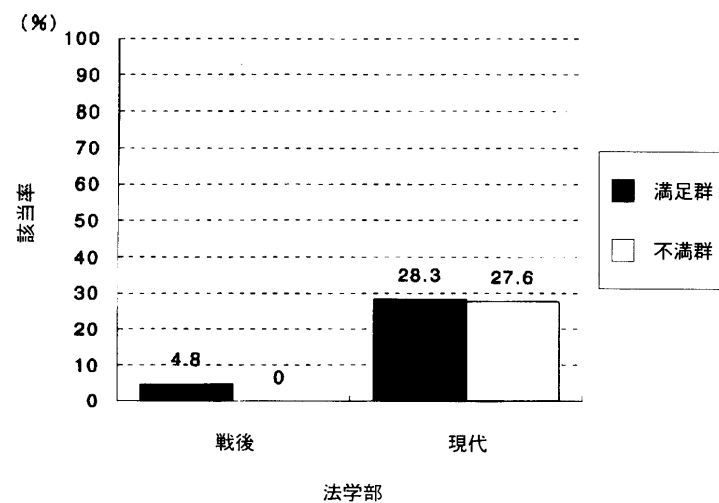
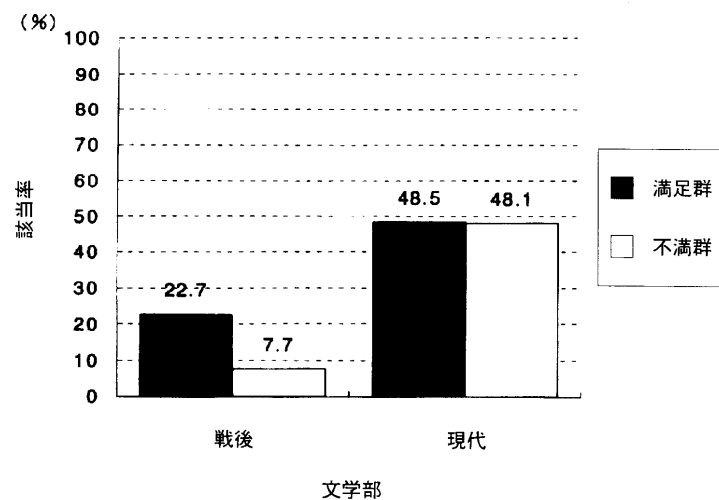


Figure68 資料などの補助的手段が充実していた（専門講義）

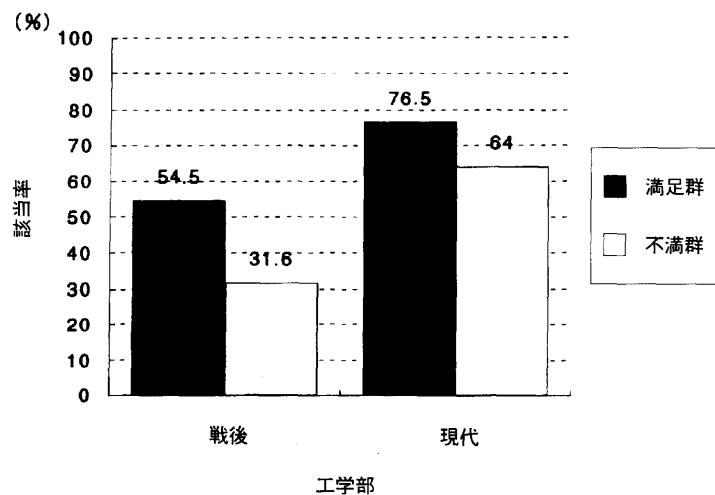


Figure68 資料などの補助的手段が充実していた（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞医学部（満足群70.2％－不満群0.0％）、＜現代＞医学部（満足群95.7％－不満群50.0％）、＜現代＞工学部（満足群66.7％－不満群25.0％）で差がみられた。医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

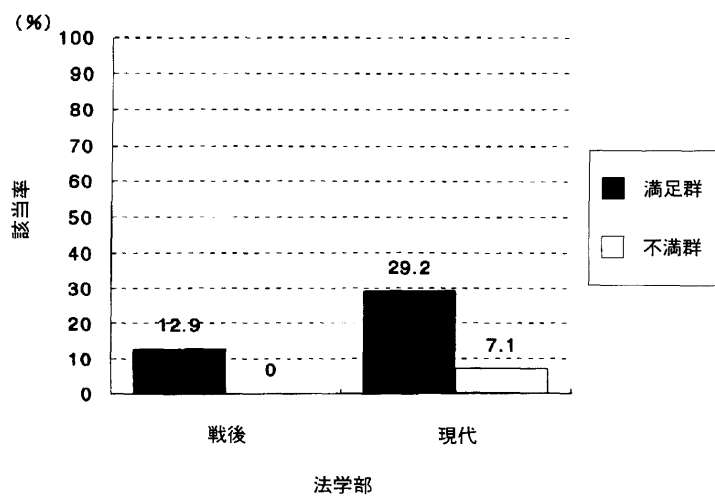
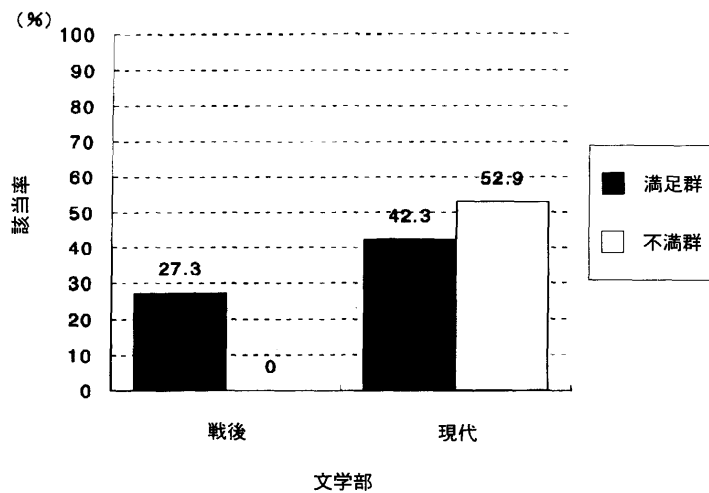


Figure69 資料などの補助的手段が充実していた（専門演習）

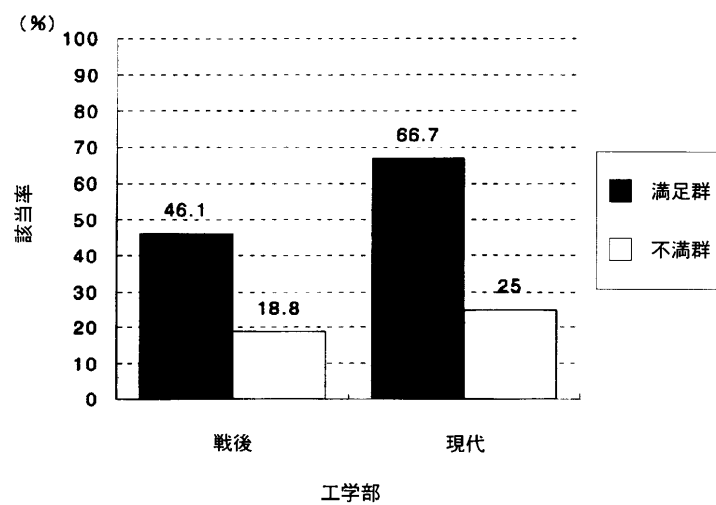
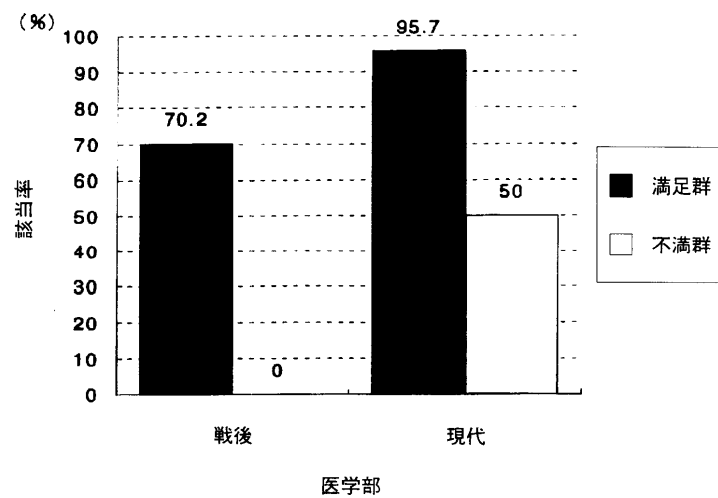


Figure69 資料などの補助的手段が充実していた（専門演習）（続き）

専門実験では、＜戦後＞医学部（満足群61.7％－不満群0.0％）、＜戦後＞工学部（満足群47.8％－不満群10.5％）、＜現代＞工学部（満足群68.7％－不満群37.5％）で差がみられた。現代の医学部で差がみられない原因は、不満群の該当率が増加したからである（0.0→63.6％）。工学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

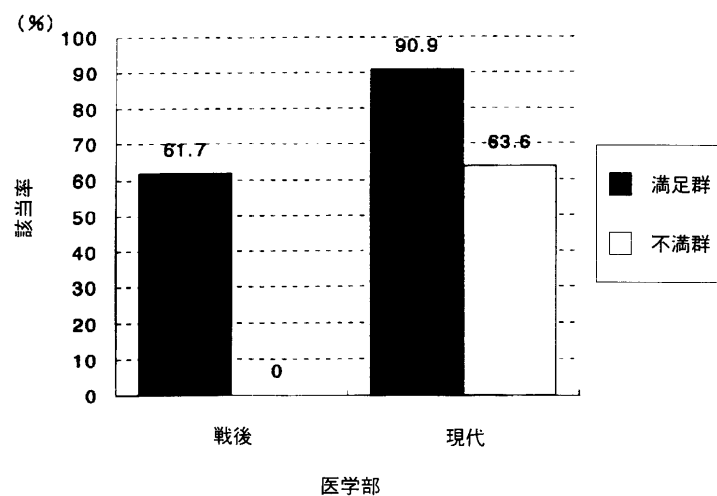


Figure70 資料などの補助的手段が充実していた（専門実験）

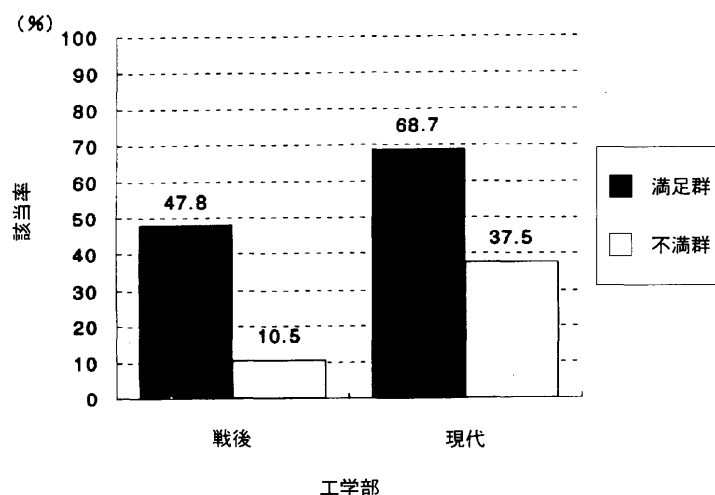


Figure70 資料などの補助的手段が充実していた（専門実験）（続き）

【学生からみた教官の個人要因】

次のような授業を振り返って、教官の熱意が伝わってくるような授業はありましたか。

→教官の熱意が伝わった

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業 () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
 () 一般教養課目（人文・社会系）
 () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
 () 専門科目の演習
 () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった (3) いくつかあった
 (2) 少なくとも1個はあった (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後、現代を問わず、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群86.5%－不満群11.1%）、＜戦後＞法学部（満足群95.2%－不満群38.3%）、＜戦後＞医学部（満足群92.9%－不満群20.0%）、＜戦後＞工学部（満足群87.7%－不満群40.6%）、＜現代＞文学部（満足群95.8%－不満群53.1%）、＜現代＞法学部（満足群90.2%－不満群40.3%）、＜現代＞医学部（満足群100.0%－不満群21.7%）、＜現代＞工学部（満足群83.3%－不満群46.2%））。重要項目は、全くみられなかった。

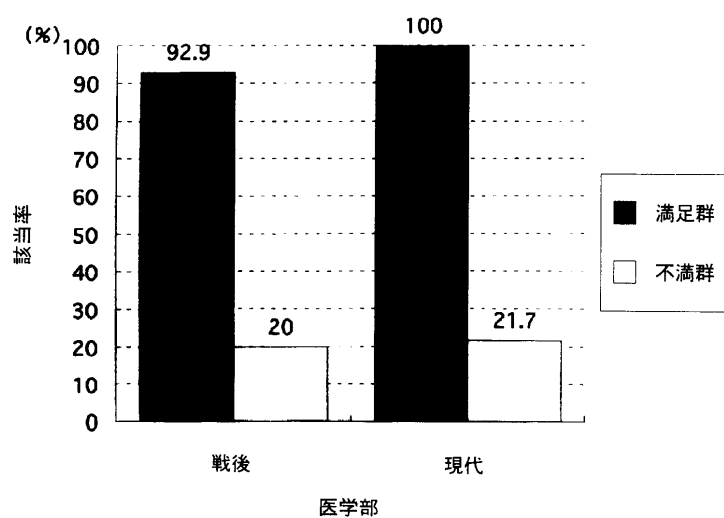
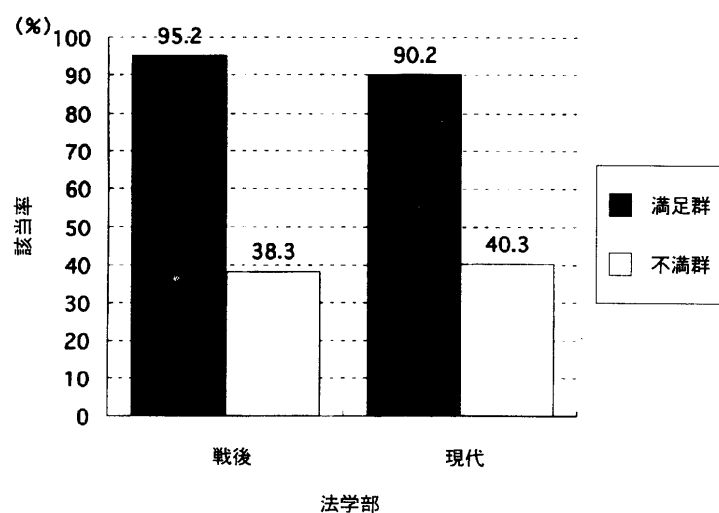
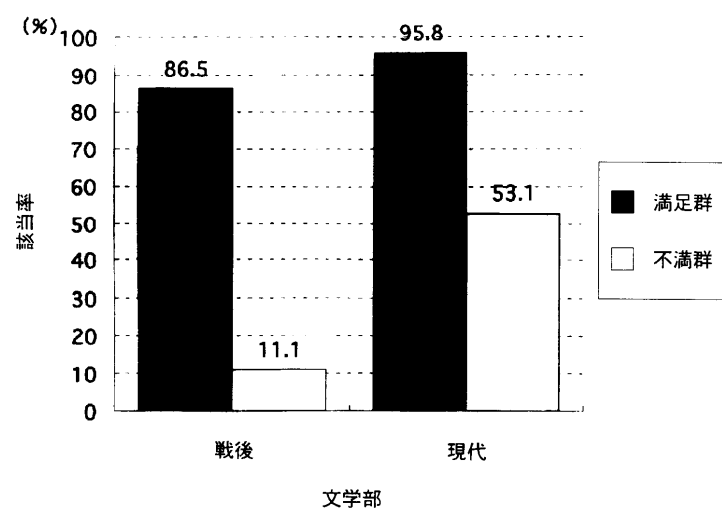


Figure71 教官の熱意が伝わった（英語）

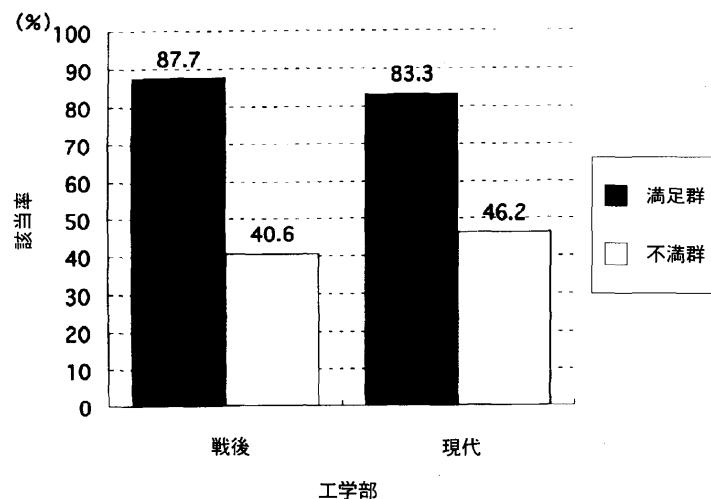


Figure71 教官の熱意が伝わった（英語）（続き）

英語以外では、戦後のすべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群92.5％－不満群46.2％）、＜戦後＞法学部（満足群94.4％－不満群41.5％）、＜戦後＞医学部（満足群94.7％－不満群60.0％）、＜戦後＞工学部（満足群89.1％－不満群48.1％））。現代では、＜現代＞法学部（満足群91.5％－不満群51.9％）、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群40.0％）、＜現代＞工学部（満足群85.7％－不満群49.0％）で差がみられた。法学部、医学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜現代＞文学部（満足群94.4％－不満群70.6％）でみられた。

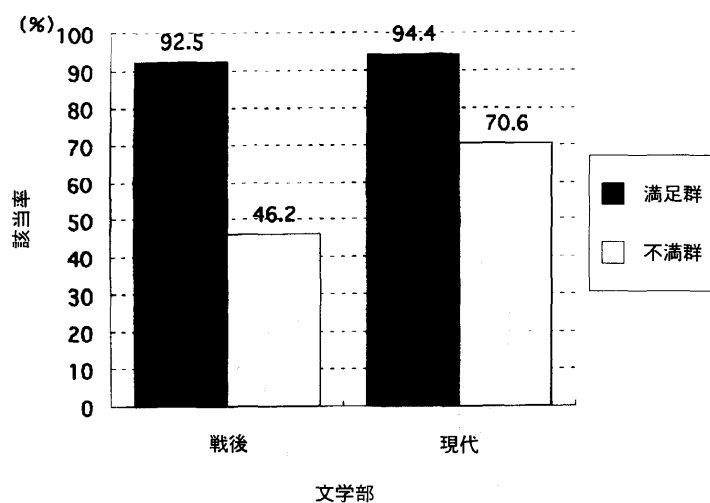


Figure72 教官の熱意が伝わった（英語以外）

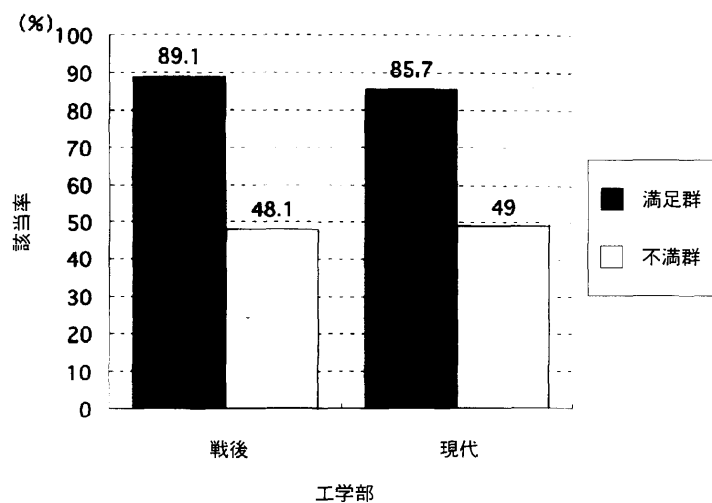
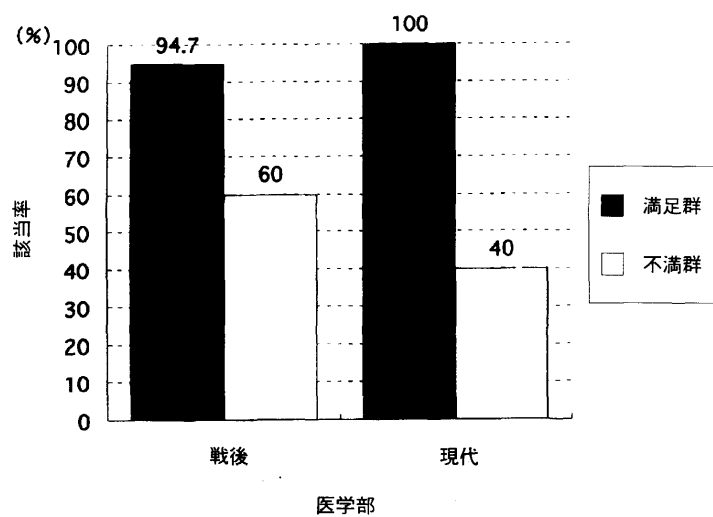
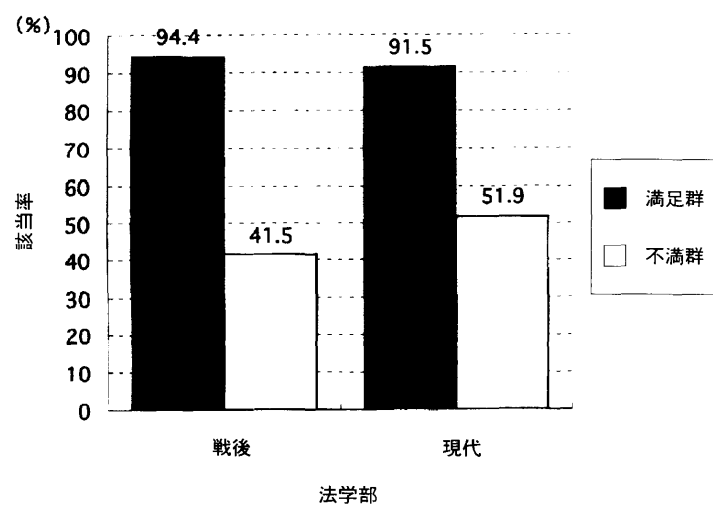


Figure72 教官の熱意が伝わった（英語以外）（続き）

人文社会では、戦後の＜戦後＞法学部（満足群97.7％－不満群56.3％）、＜戦後＞医学部（満足群81.8％－不満群33.3％）、＜戦後＞工学部（満足群93.3％－不満群51.7％）で差がみられた。現代では、すべての学部で差がみられた（＜現代＞文学部（満足群98.1％－不満群51.9％）、＜現代＞法学部（満足群94.7％－不満群57.9％）、＜現代＞医学部（満足群93.3％－不満群53.3％）、＜現代＞工学部（満足群96.8％－不満群55.7％））。法学部、医学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群73.3％）でみられた。

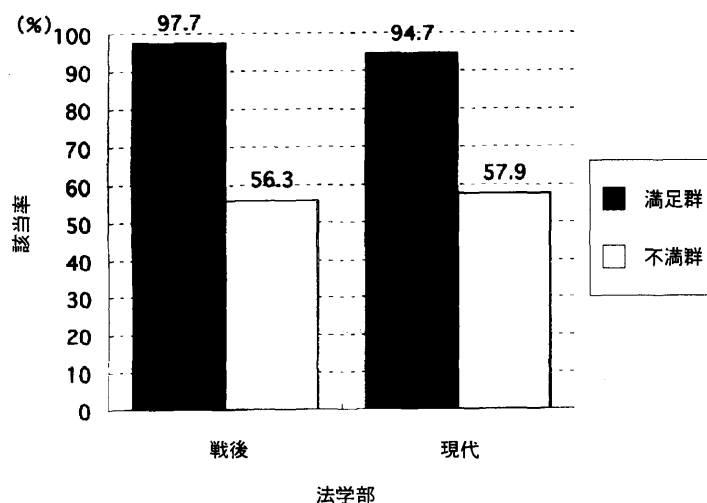
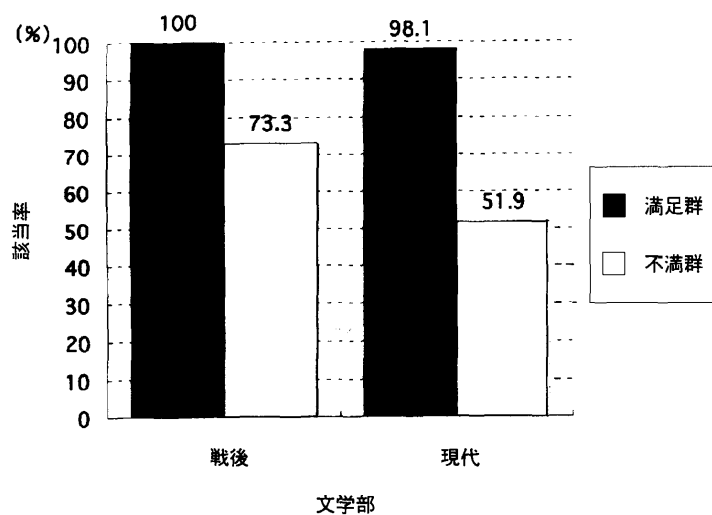


Figure73 教官の熱意が伝わった（人文社会）

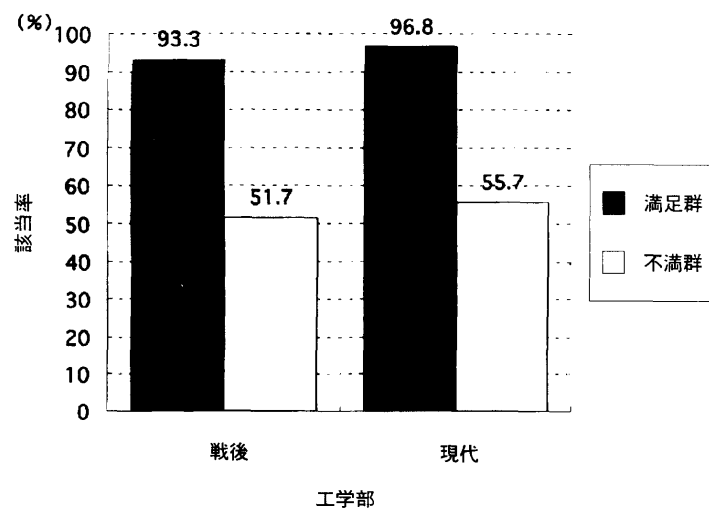
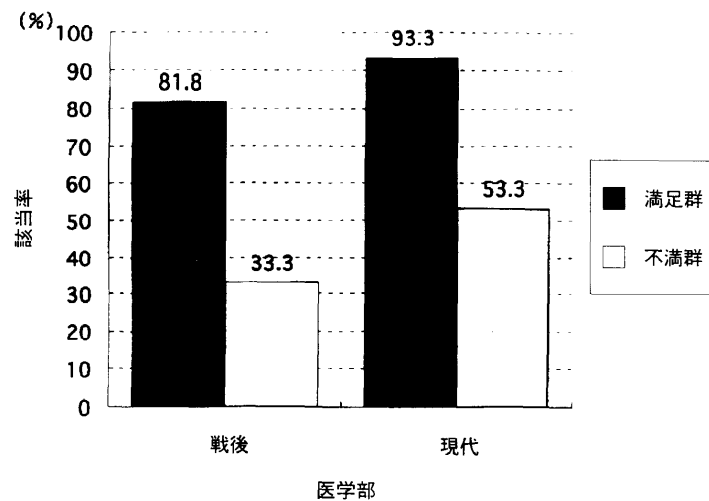


Figure73 教官の熱意が伝わった（人文社会）（続き）

自然では、戦後のすべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群87.5％－不満群48.6％）、＜戦後＞法学部（満足群100.0％－不満群52.3％）、＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群50.0％）、＜戦後＞工学部（満足群94.7％－不満群56.1％））。現代では、＜現代＞文学部（満足群93.9％－不満群45.5％）、＜現代＞法学部（満足群93.8％－不満群56.9％）、＜現代＞医学部（満足群92.3％－不満群50.0％）で差がみられた。文学部、法学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

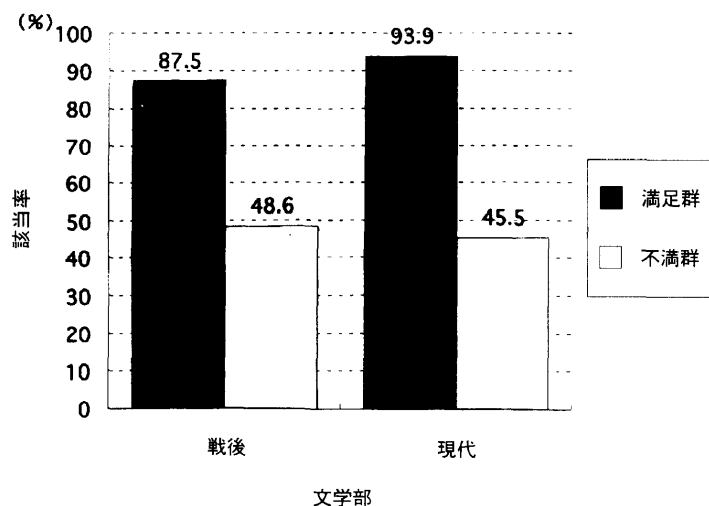


Figure74 教官の熱意が伝わった（自然）

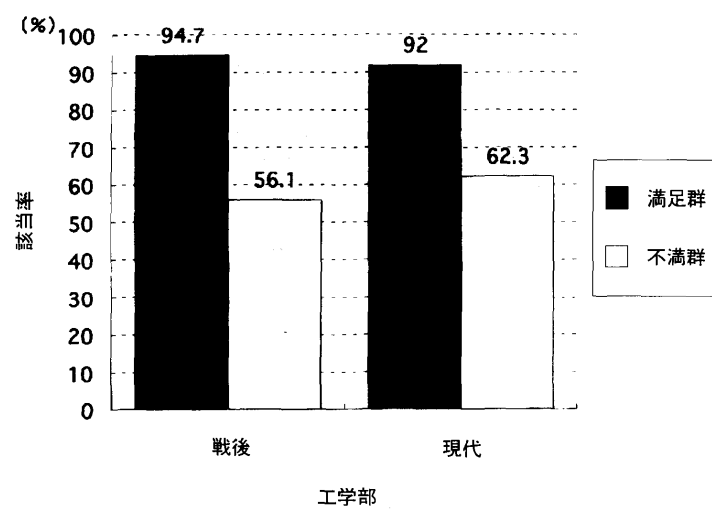
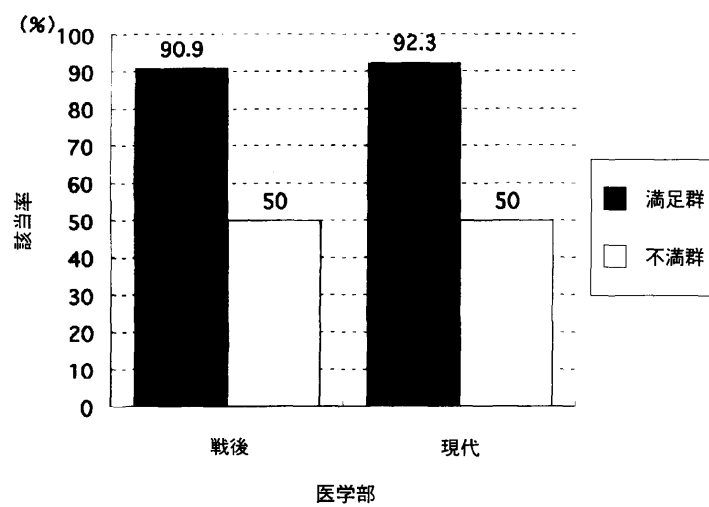
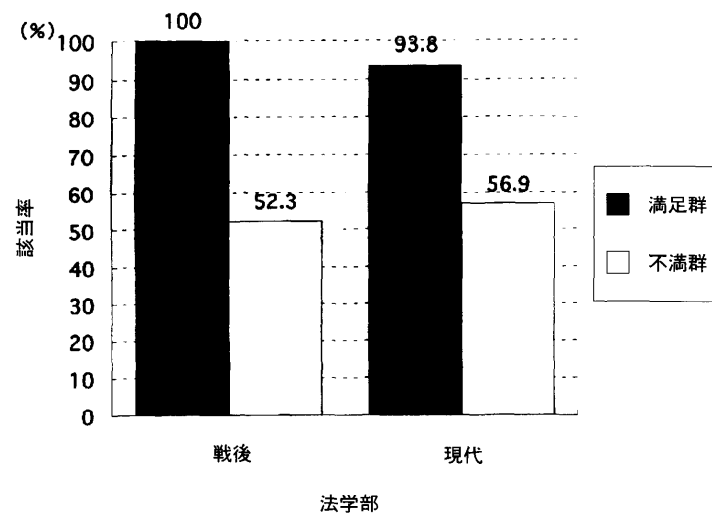


Figure74 教官の熱意が伝わった（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群69.2％）のみで差がみられた。重要項目は、戦後の＜戦後＞法学部（満足群100.0％－不満群87.5％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.4％－不満群77.8％）でみられた。現代では、すべての学部でみられた（＜現代＞文学部（満足群98.5％－不満群70.4％）、＜現代＞法学部（満足群100.0％－不満群86.7％）、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群73.3％）、＜現代＞工学部（満足群97.4％－不満群76.0％））。

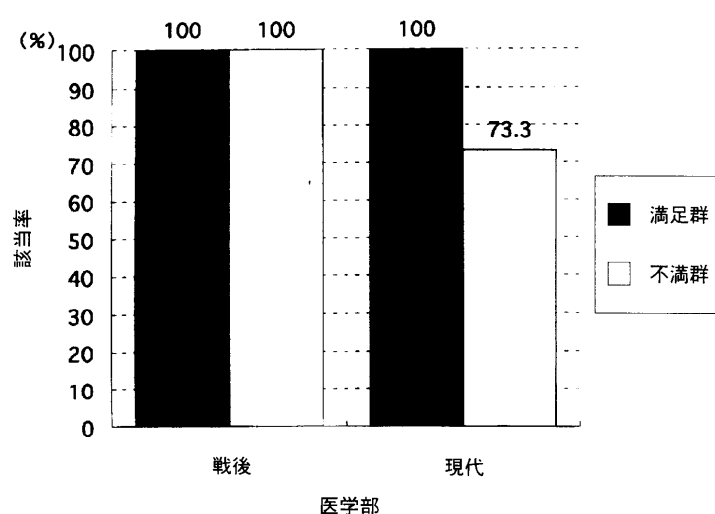
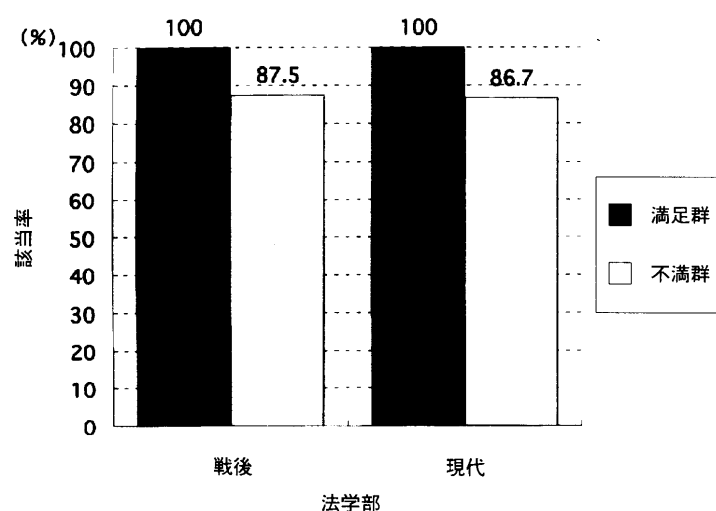
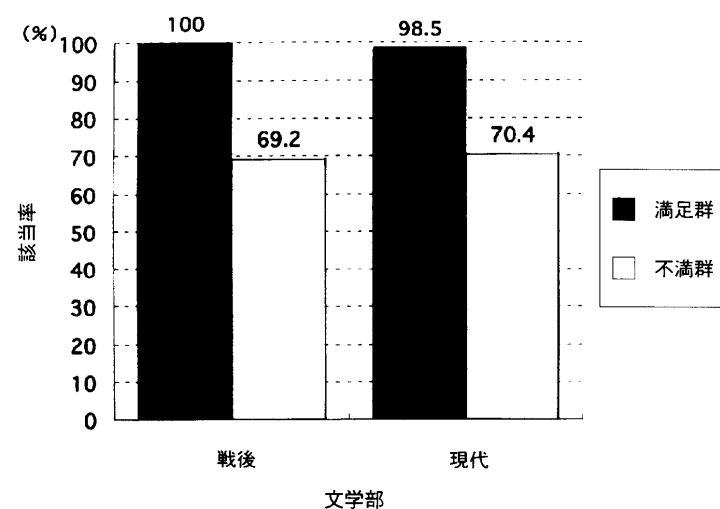


Figure75 教官の熱意が伝わった（専門講義）

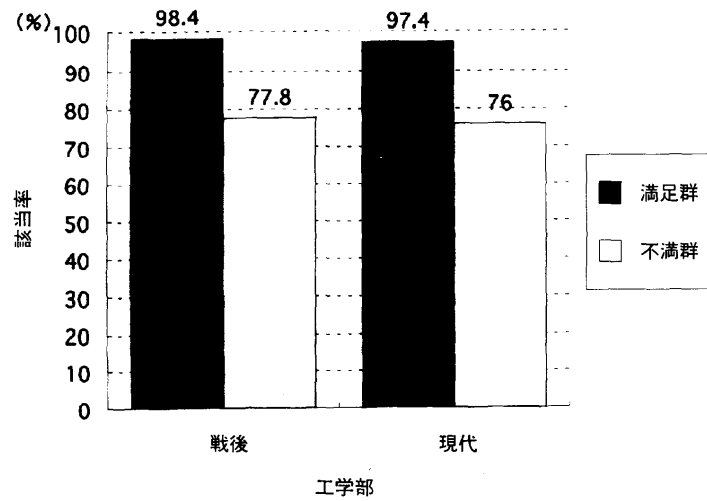


Figure75 教官の熱意が伝わった（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞文学部（満足群95.5％－不満群63.6％）、＜戦後＞工学部（満足群95.2％－不満群62.5％）、＜現代＞医学部（満足群95.5％－不満群55.6％）、＜現代＞工学部（満足群91.5％－不満群50.0％）で差がみられた。工学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞法学部（満足群99.0％－不満群72.0％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜現代＞文学部（満足群98.6％－不満群76.5％）でみられた。

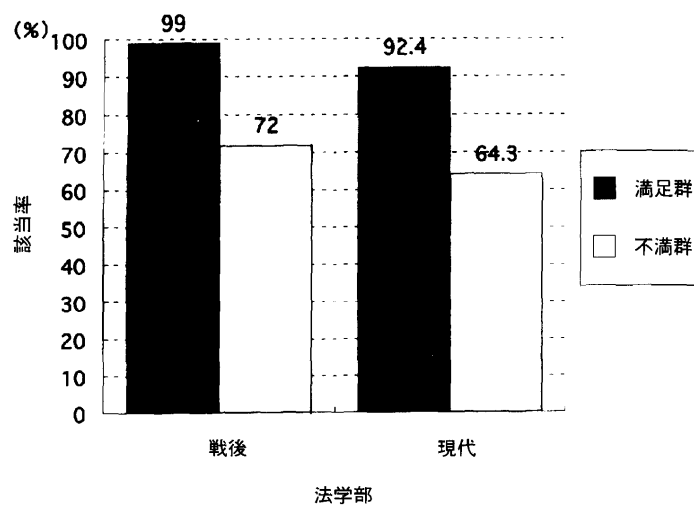
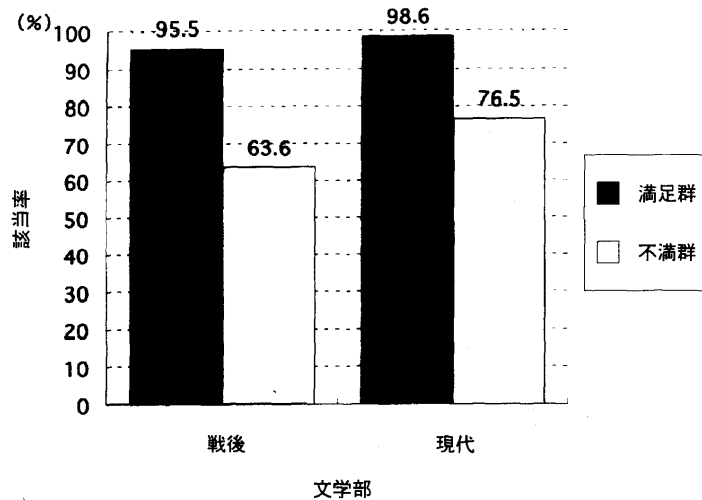


Figure76 教官の熱意が伝わった（専門演習）

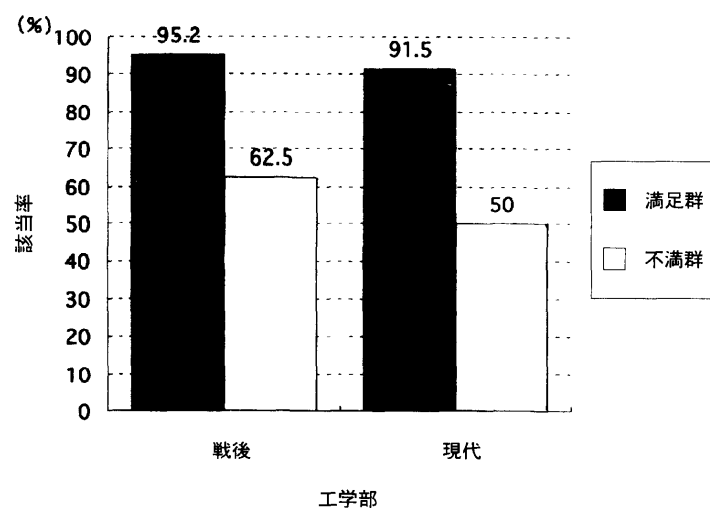
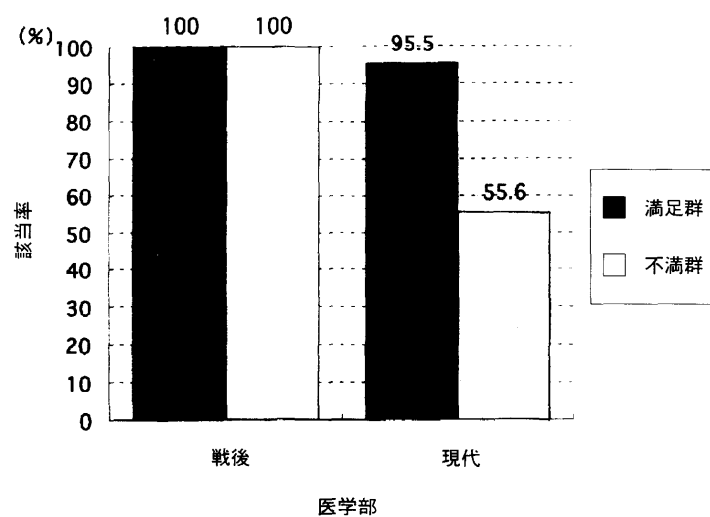


Figure76 教官の熱意が伝わった（専門演習）（続き）

専門実験では、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞医学部（満足群98.0％－不満群50.0％）、＜戦後＞工学部（満足群90.4％－不満群52.6％）、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群41.7％）、＜現代＞工学部（満足群89.7％－不満群52.2％））。重要項目は、全くみられなかった。

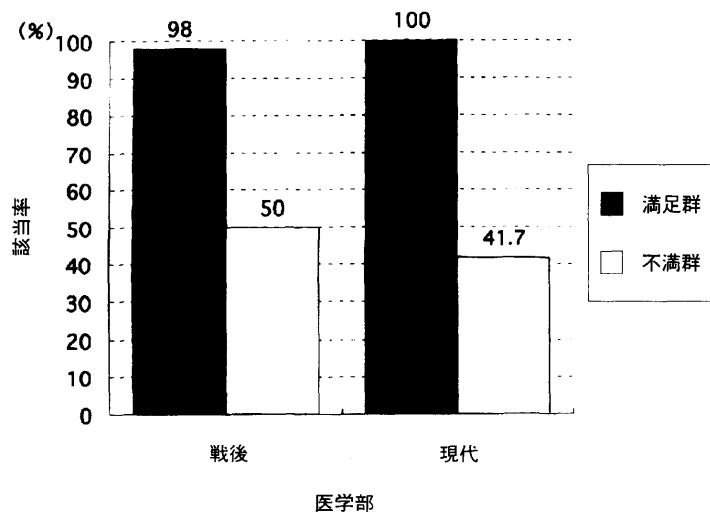


Figure77 教官の熱意が伝わった（専門実験）

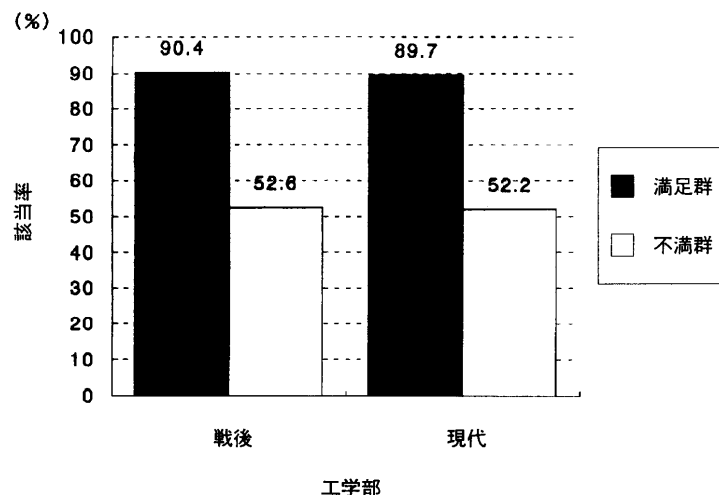


Figure77 教官の熱意が伝わった（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、教官の学問に対する態度や人柄にひかれるような授業はありましたか。

→教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業 () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
 () 一般教養課目（人文・社会系）
 () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
 () 専門科目の演習
 () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった (3) いくつかあった
 (2) 少なくとも1個はあった (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群81.1%－不満群11.1%）、＜戦後＞法学部（満足群90.2%－不満群32.8%）、＜戦後＞工学部（満足群77.6%－不満群32.7%）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群84.0%－不満群46.9%）、＜現代＞法学部（満足群85.4%－不満群25.6%）、＜現代＞医学部（満足群84.6%－不満群13.0%）、＜現代＞工学部（満足群83.3%－不満群34.0%））。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、不満群の該当率が高かったからであるが、現代にかけて不満群の該当率が減少し（60.0→13.0%）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

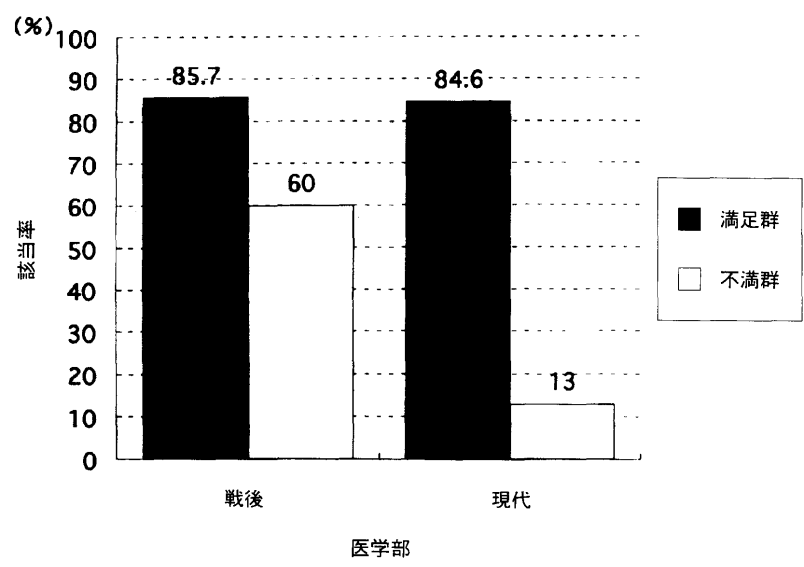
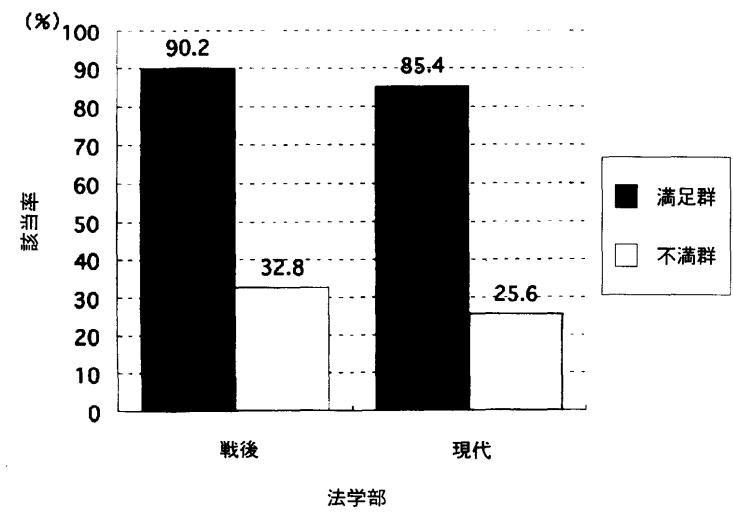
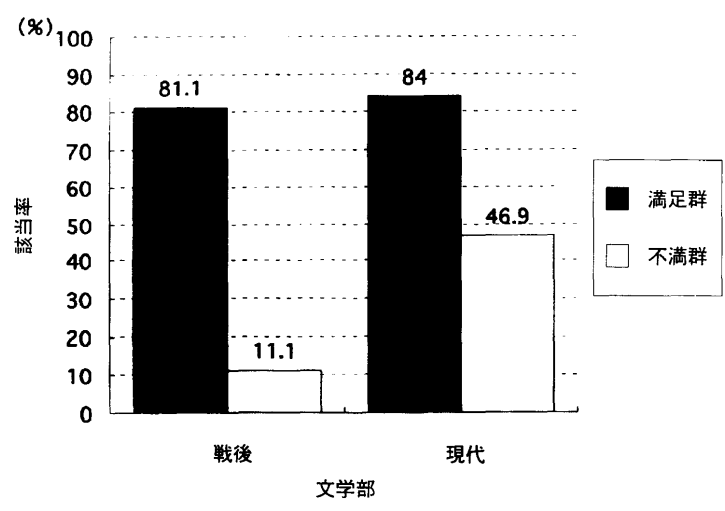


Figure78 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた (英語)

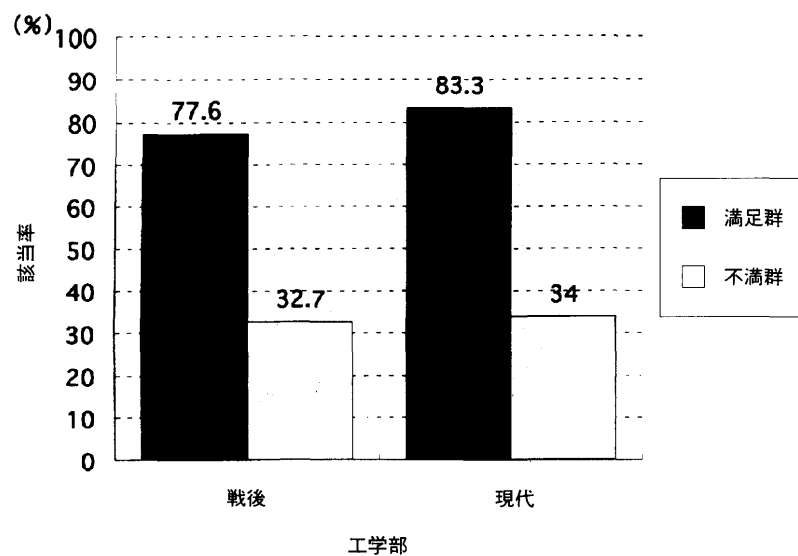


Figure78 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（英語）（続き）

英語以外では、戦後、現代を問わず、全ての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群96.2％－不満群53.8％）、＜戦後＞法学部（満足群93.1％－不満群47.2％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群60.0％）、＜戦後＞工学部（満足群85.9％－不満群42.9％）、＜現代＞文学部（満足群85.2％－不満群44.1％）、＜現代＞法学部（満足群83.1％－不満群32.7％）、＜現代＞医学部（満足群78.6％－不満群20.0％）、＜現代＞工学部（満足群81.0％－不満群34.4％））。重要項目は、全くみられなかった。

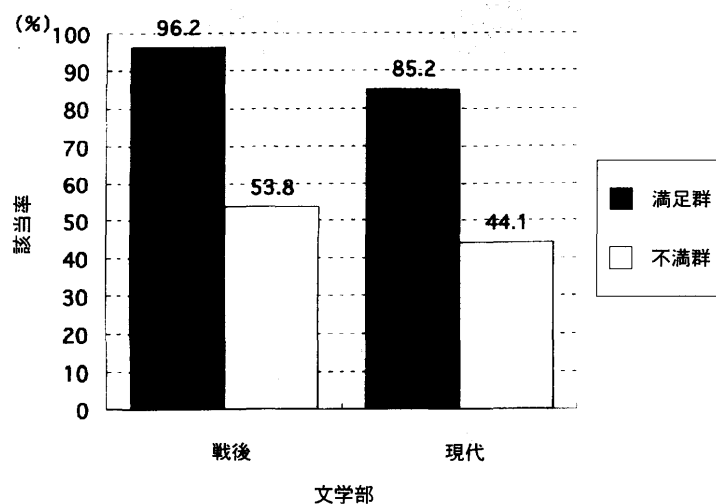


Figure79 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（英語以外）

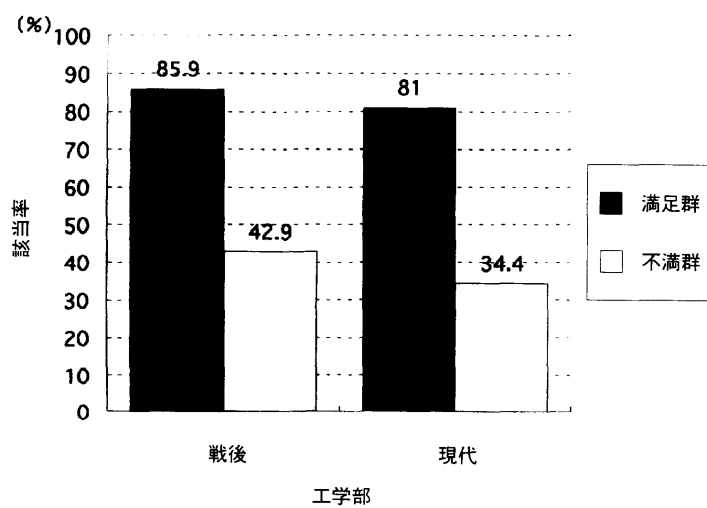
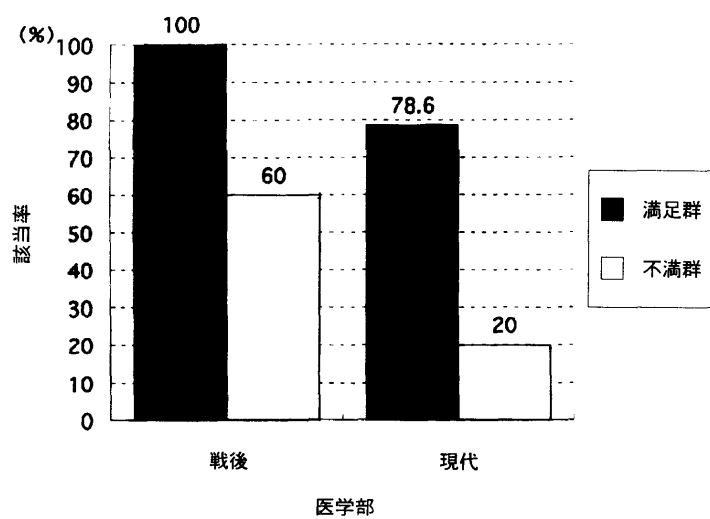
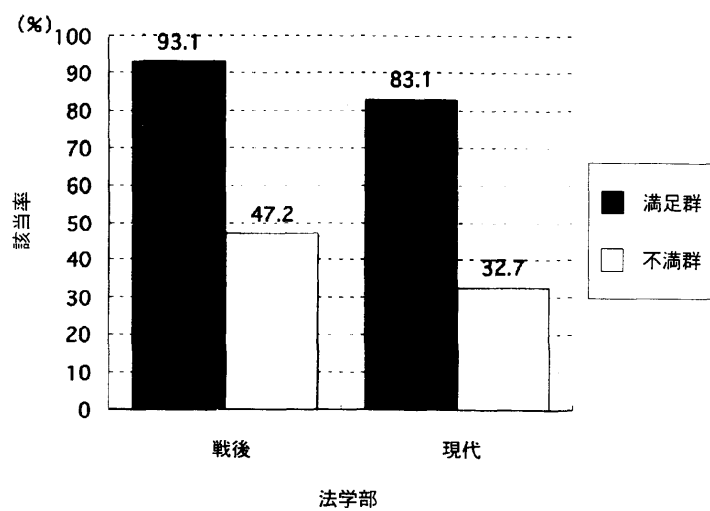


Figure79 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（英語以外）（続き）

人文社会では、＜戦後＞法学部（満足群93.0％－不満群62.5％）、＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群33.3％）、＜現代＞文学部（満足群92.5％－不満群53.6％）、＜現代＞法学部（満足群93.2％－不満群60.5％）、＜現代＞工学部（満足群93.5％－不満群54.1％）で差がみられた。法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群73.3％）でみられた。

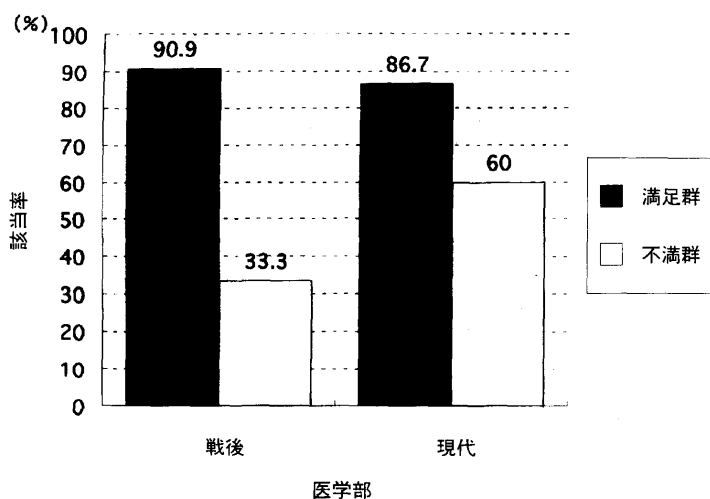
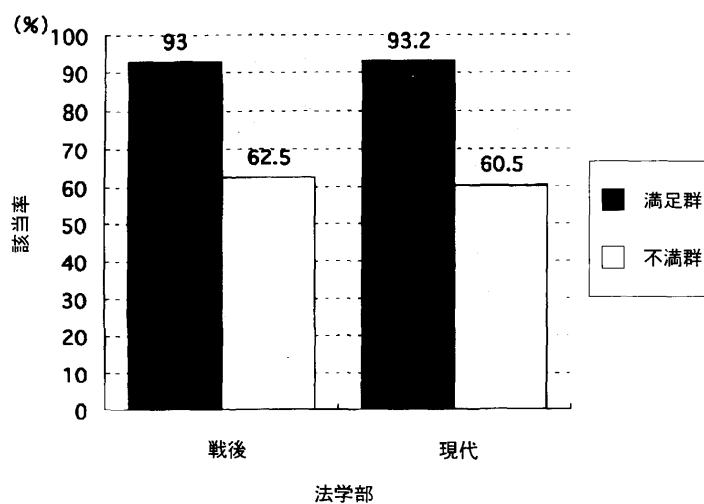
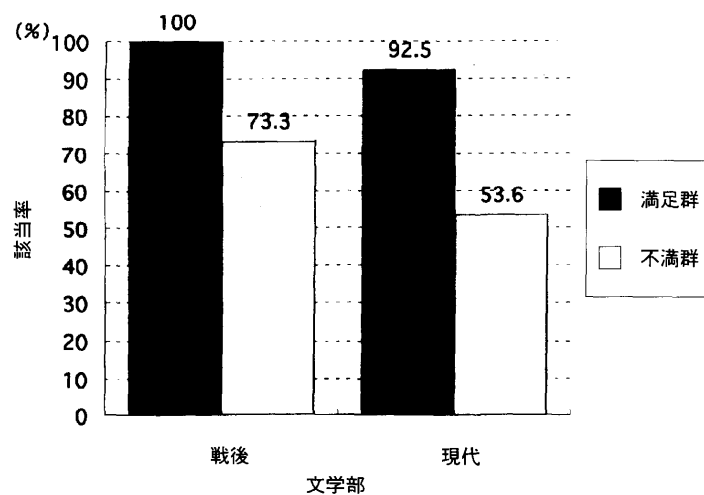


Figure80 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（人文社会）

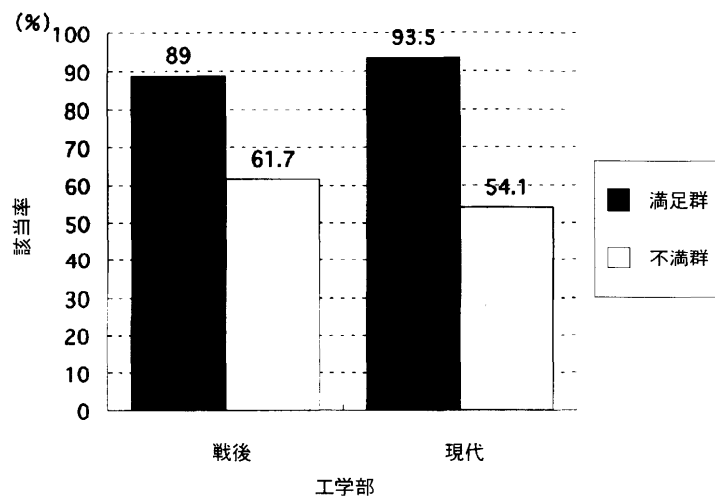


Figure80 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（人文社会）（続き）

自然では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群95.8％－不満群51.4％）、＜戦後＞法学部（満足群91.9％－不満群56.9％）、＜戦後＞工学部（満足群87.6％－不満群46.3％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群87.9％－不満群40.0％）、＜現代＞法学部（満足群89.6％－不満群46.6％）、＜現代＞医学部（満足群92.3％－不満群44.4％）、＜現代＞工学部（満足群84.0％－不満群53.6％））。重要項目は、全くみられなかった。

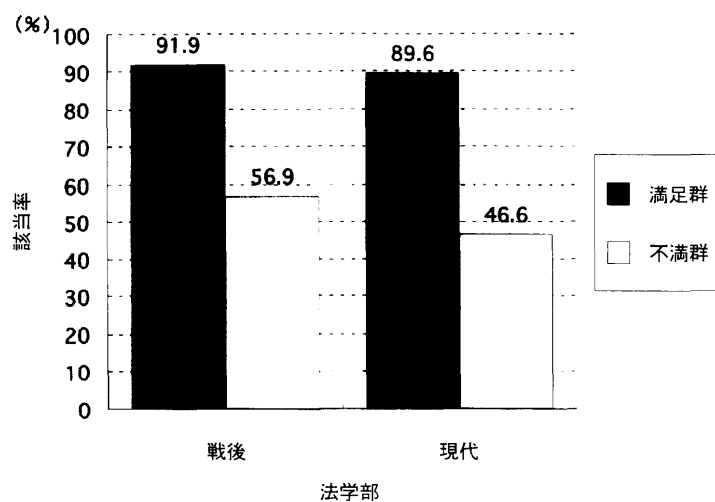
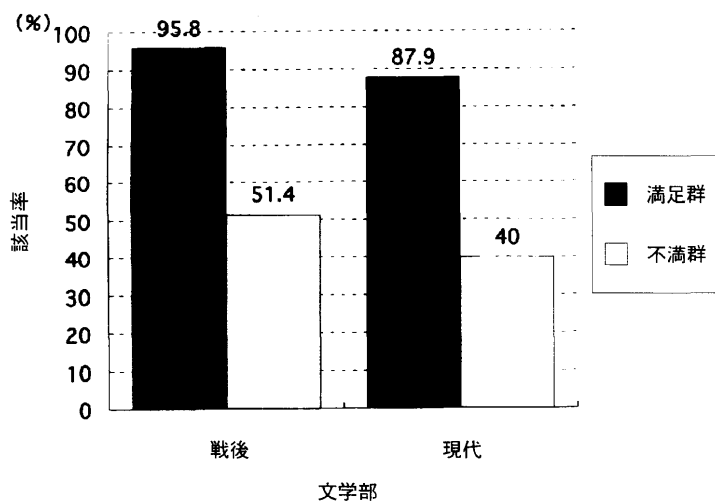


Figure81 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（自然）

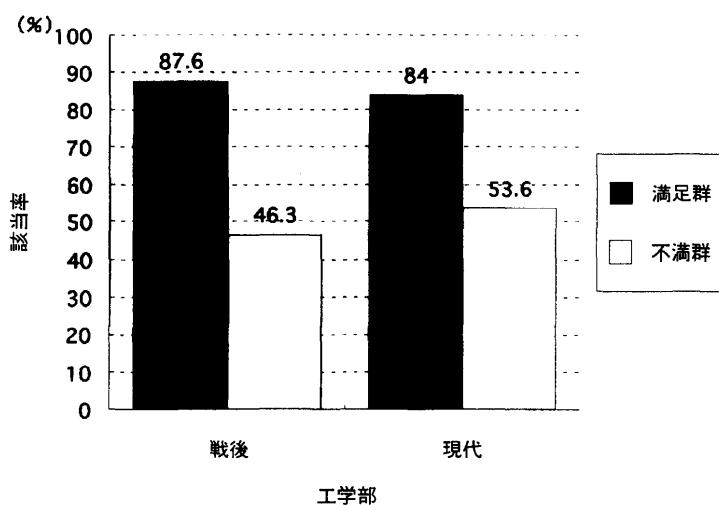
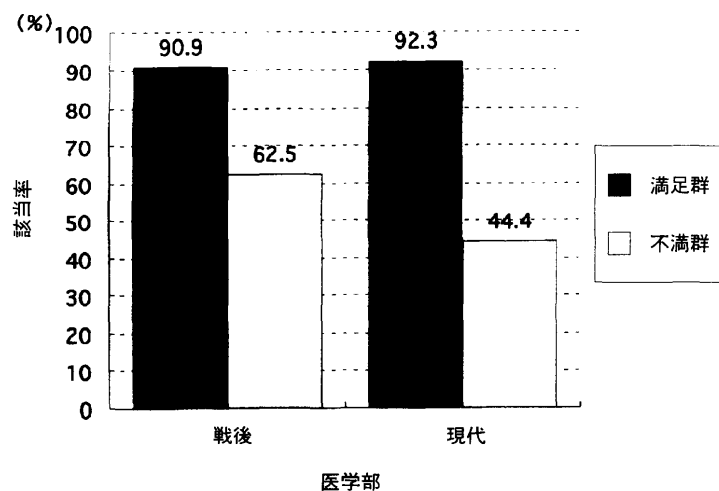


Figure81 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた (自然) (続き)

専門講義では、＜現代＞文学部（満足群95.5％－不満群59.3％）、＜現代＞医学部（満足群86.7％－不満群53.3％）で差がみられた。戦後の医学部で差がみられなかったのは、不満群の該当率がやや高かったからであるが、現代にかけて不満群の該当率が減少し（100.0→53.3％）、差がみられたようである。重要項目は、戦後のすべての学部でみられた（＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群76.9％）、＜戦後＞法学部（満足群98.6％－不満群87.5％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群97.4％－不満群83.3％））。現代では、＜現代＞法学部（満足群98.9％－不満群86.7％）、＜現代＞工学部（満足群92.2％－不満群72.0％）でみられた。

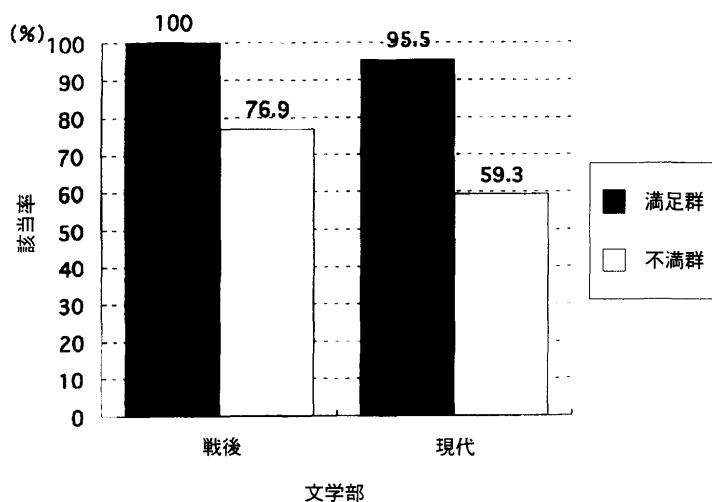


Figure82 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた (専門講義)

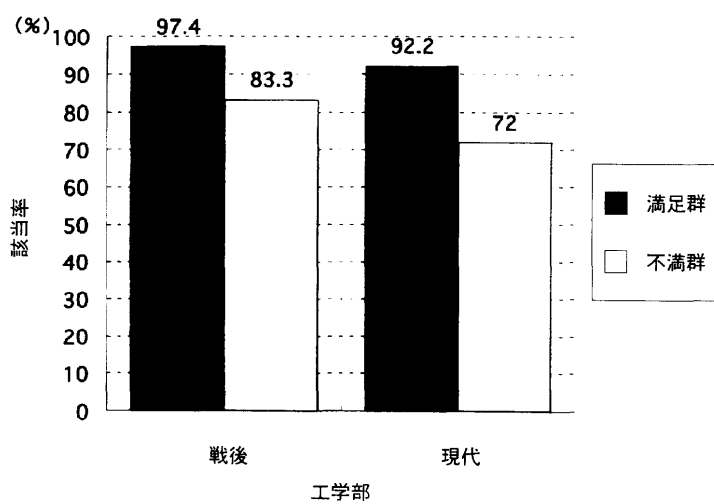
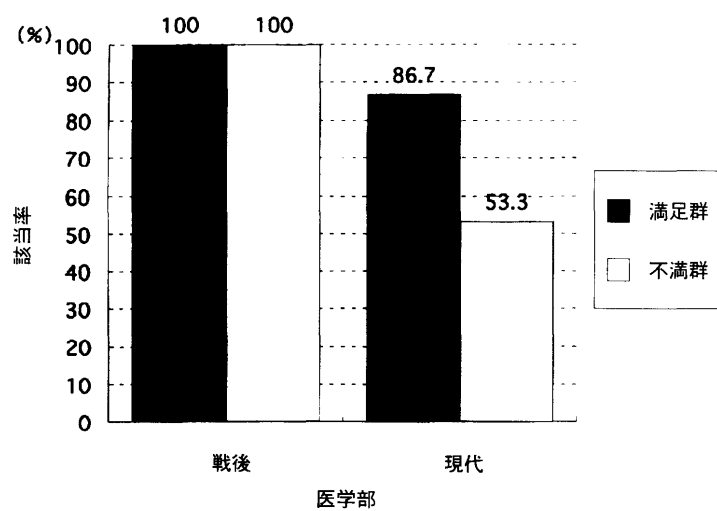
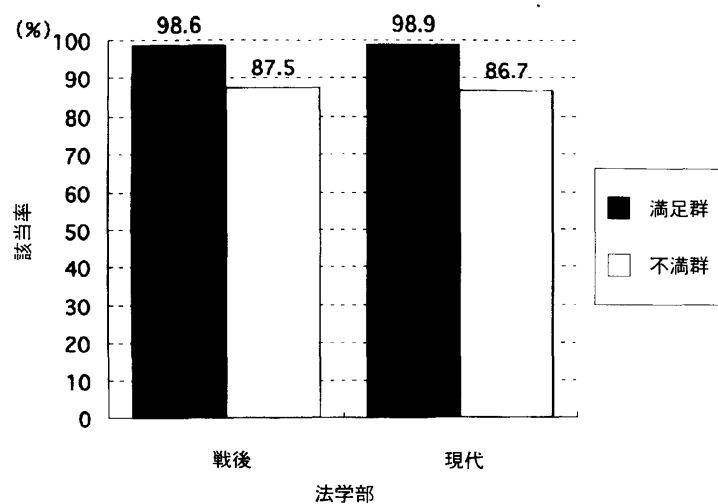


Figure82 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞文学部（満足群98.5％－不満群63.6％）、＜戦後＞工学部（満足群92.3％－不満群56.3％）、＜現代＞医学部（満足群86.4％－不満群55.6％）で差がみられた。戦後の医学部で差がみられなかったのは、不満群の該当率が高かったからであるが、現代にかけて該当率が減少し（100.0→55.6％）、差がみられたようである。重要項目は、＜戦後＞法学部（満足群95.9％－不満群73.1％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜現代＞工学部（満足群86.4％－不満群75.0％）でみられた。

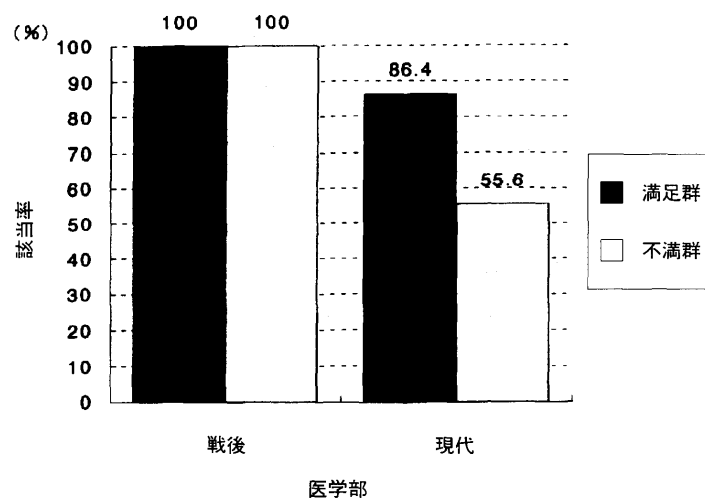
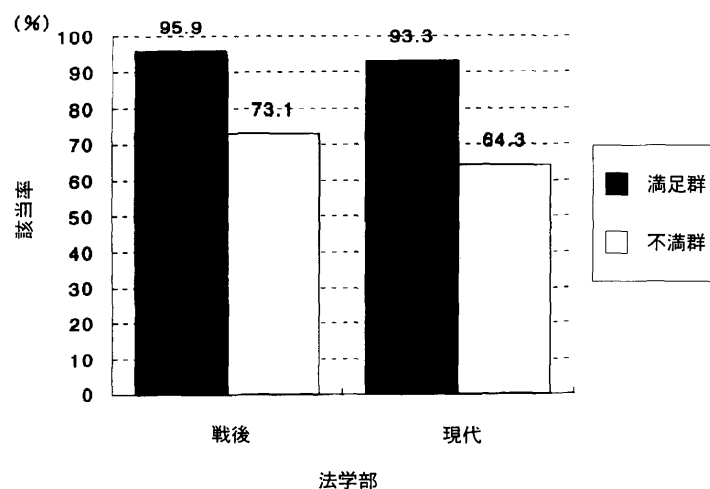
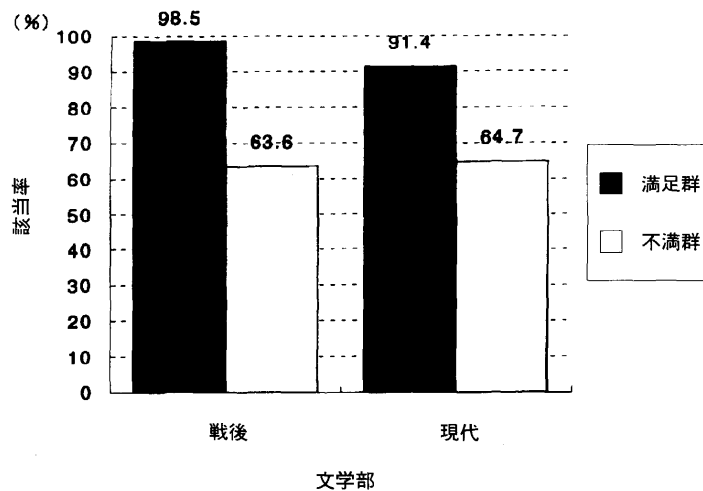


Figure83 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（専門演習）

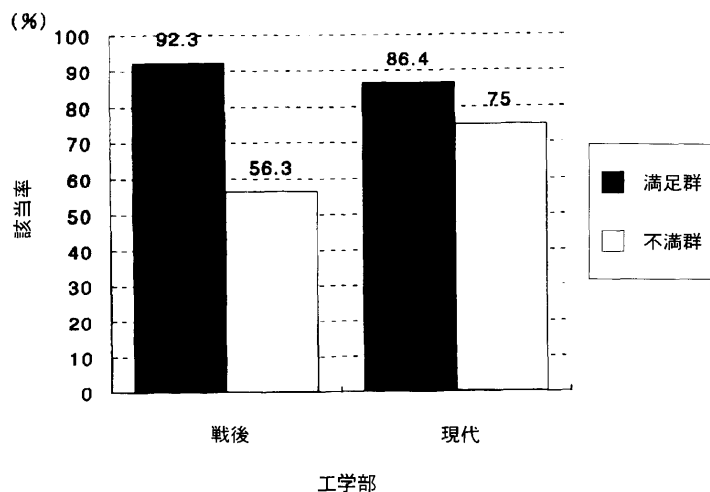


Figure83 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（専門演習）（続き）

専門実験では、＜戦後＞工学部（満足群89.2%－不満群42.1%）、＜現代＞医学部（満足群85.7%－不満群50.0%）、＜現代＞工学部（満足群82.8%－不満群43.5%）で差がみられた。工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群98.0%－不満群100.0%）でみられた。

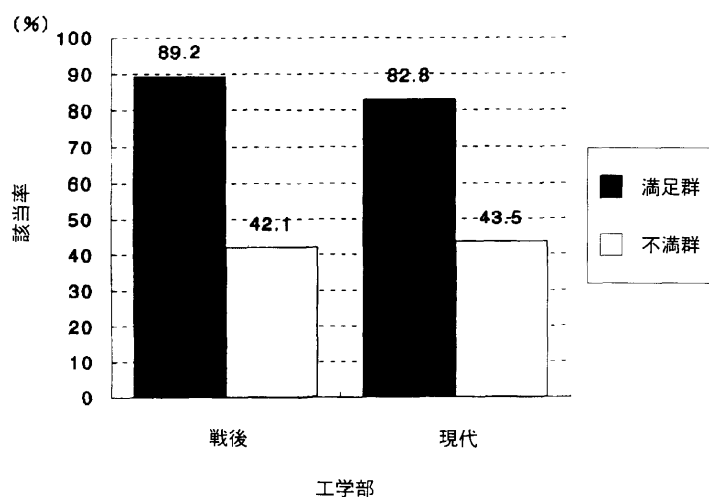
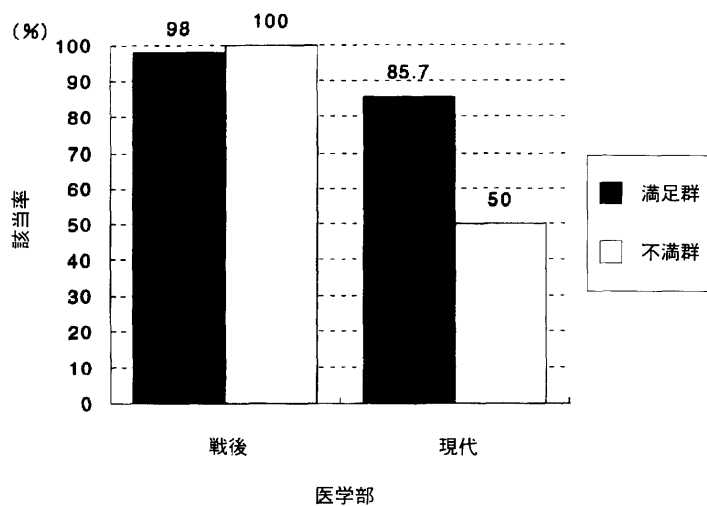


Figure84 教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた（専門実験）

次のような授業を振り返って、教育者としての自覚をもってほしいと思われる教官の授業はありましたか。

→教育者として自覚をもってほしい

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養課目（人文・社会系）
- () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、＜戦後＞法学部（満足群30.6%－不満群64.4%）、＜現代＞法学部（満足群20.0%－不満群61.8%）、＜現代＞医学部（満足群28.6%－不満群63.6%）で差がみられた。法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

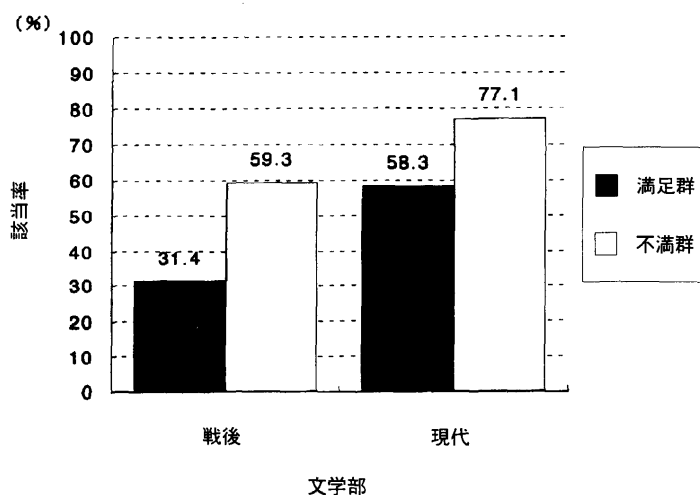


Figure85 教育者として自覚をもってほしい（英語）

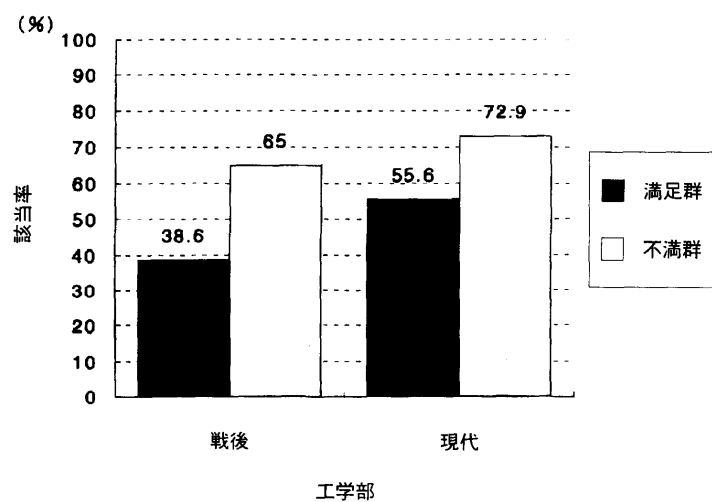
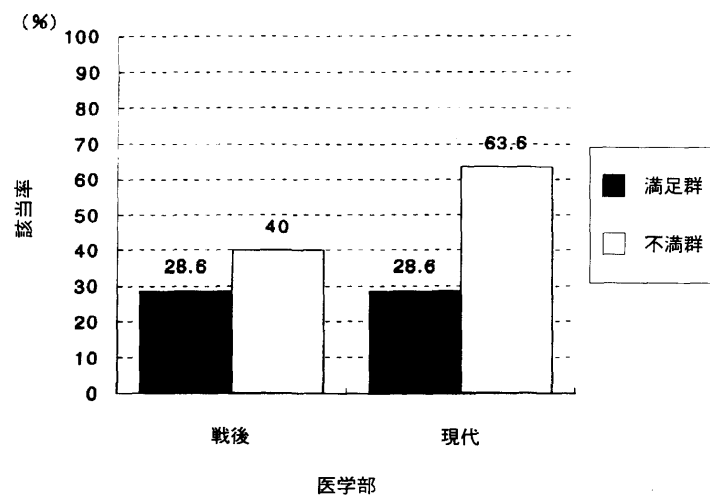
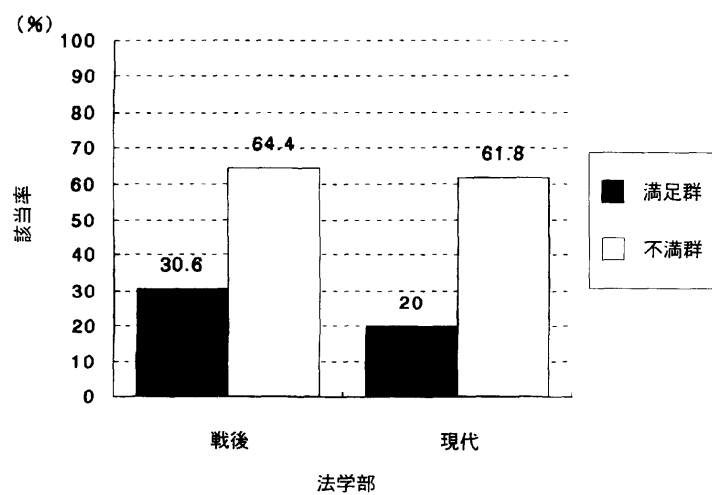


Figure85 教育者として自覚をもってほしい（英語）（続き）

英語以外では、現代のすべての学部で差がみられた（文学部（満足群42.6%－不満群72.7%）、法学部（満足群19.7%－不満群58.8%）、医学部（満足群14.3%－不満群70.0%）、工学部（満足群35.7%－不満群70.1%））。重要項目は、全くみられなかった。

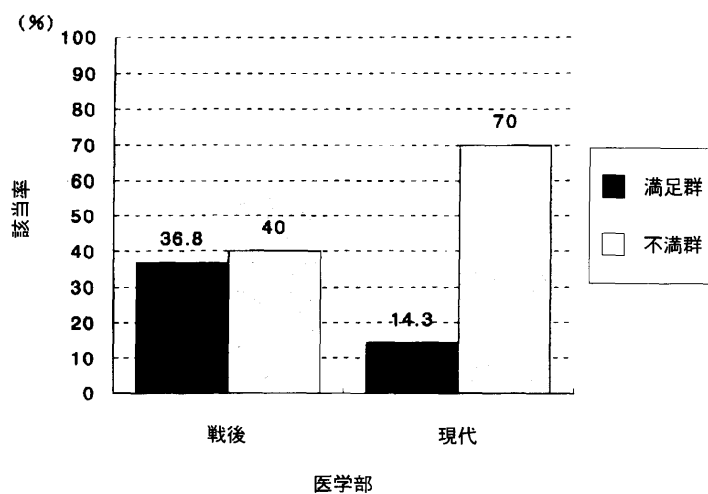
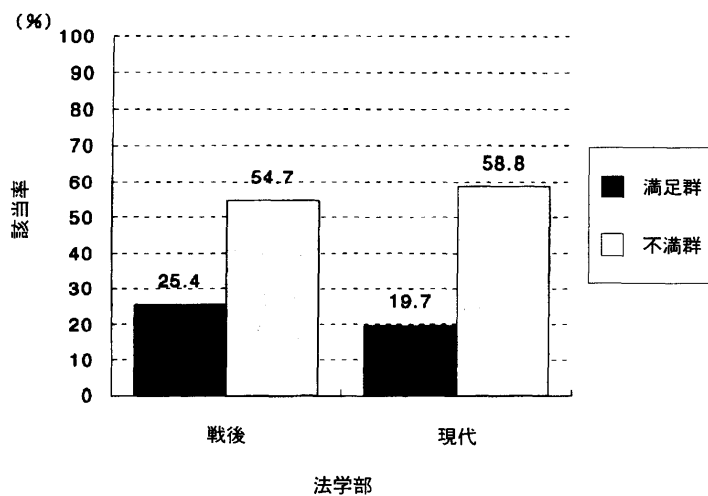
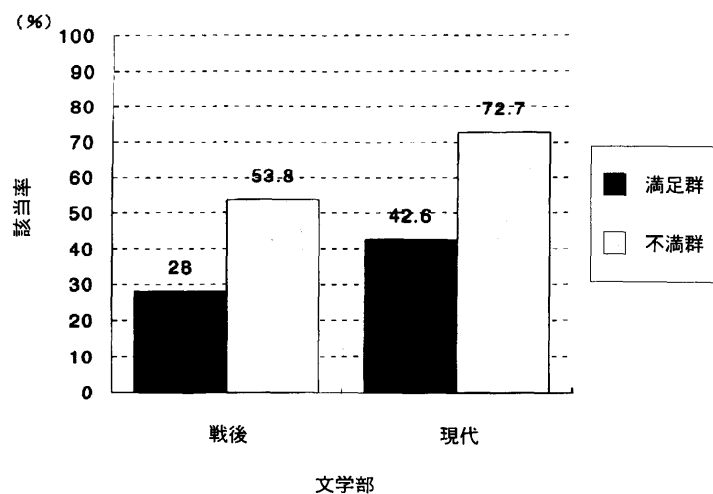


Figure86 教育者として自覚をもってほしい（英語以外）

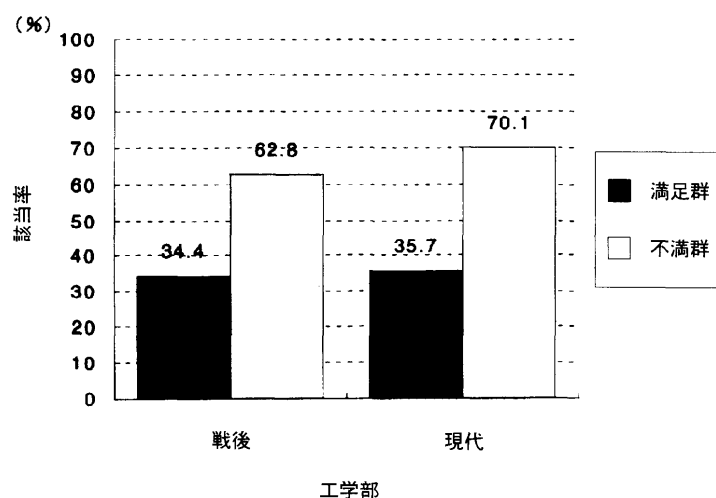


Figure86 教育者として自覚をもってほしい（英語以外）（続き）

人文社会では、＜戦後＞法学部（満足群39.5％－不満群73.9％）、＜戦後＞医学部（満足群27.3％－不満群66.7％）、＜現代＞医学部（満足群35.7％－不満群87.5％）で差がみられた。医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

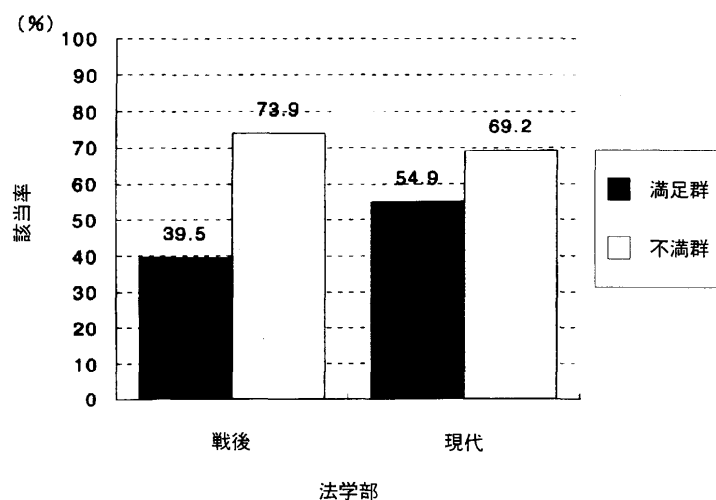
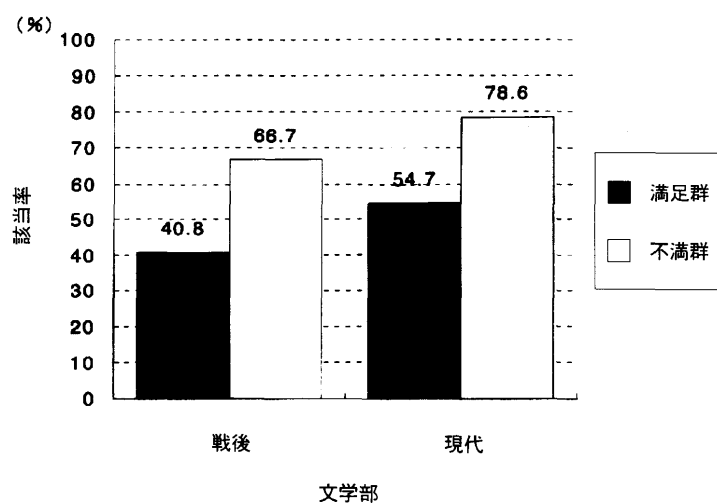


Figure87 教育者として自覚をもってほしい（人文社会）

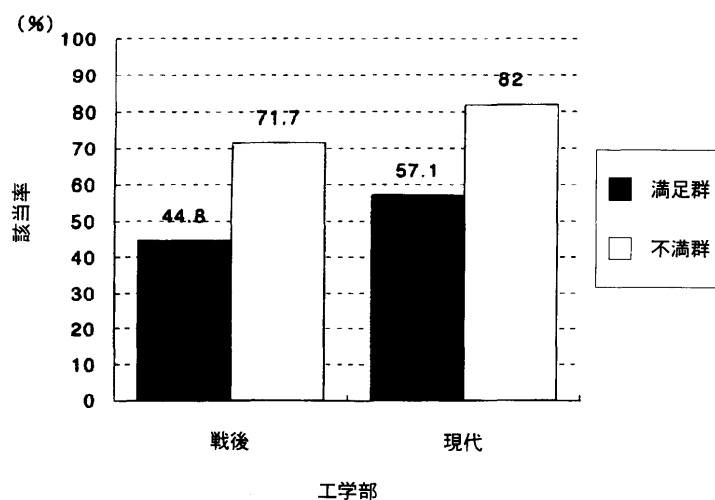
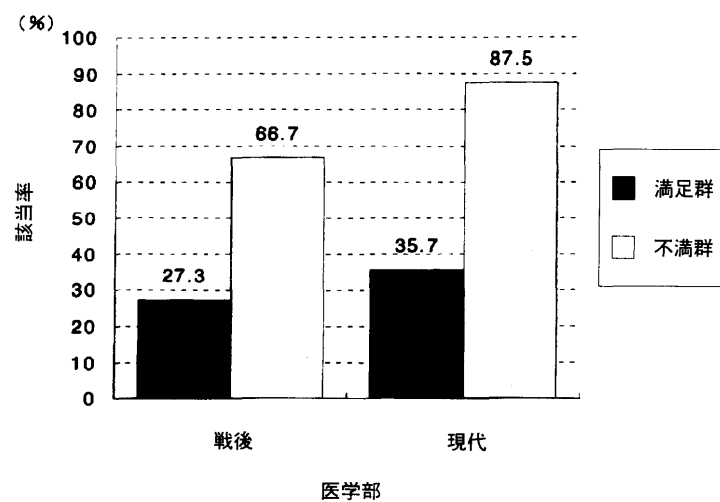


Figure87 教育者として自覚をもってほしい (人文社会) (続き)

自然では、＜戦後＞工学部（満足群36.6％－不満群73.8％）、＜現代＞文学部（満足群42.4％－不満群74.4％）、＜現代＞医学部（満足群33.3％－不満群84.2％）で差がみられた。戦後の医学部で差がみられなかった原因は、不満群の該当率が少なかったからであり、現代にかけて不満群の該当率が増加し（37.5→84.2％）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

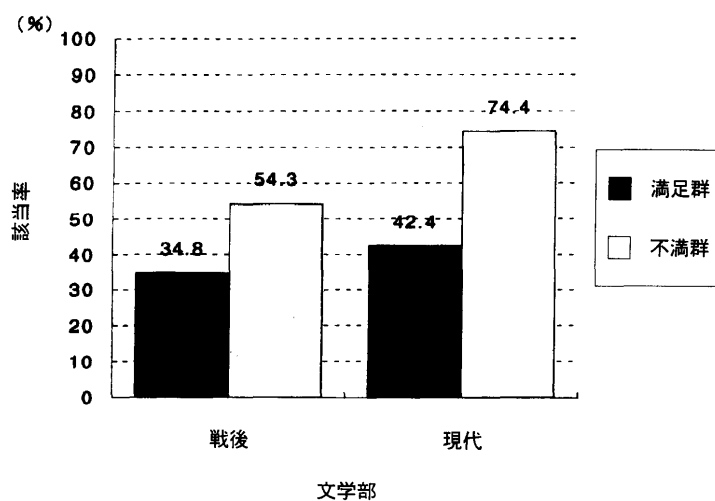


Figure88 教育者として自覚をもってほしい (自然)

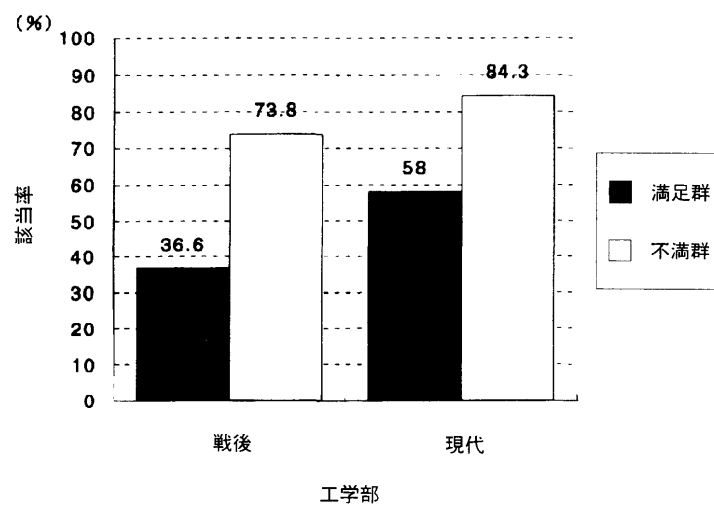
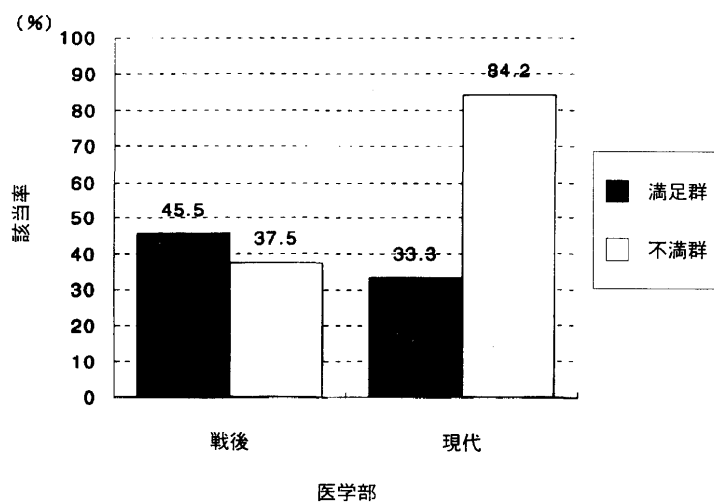
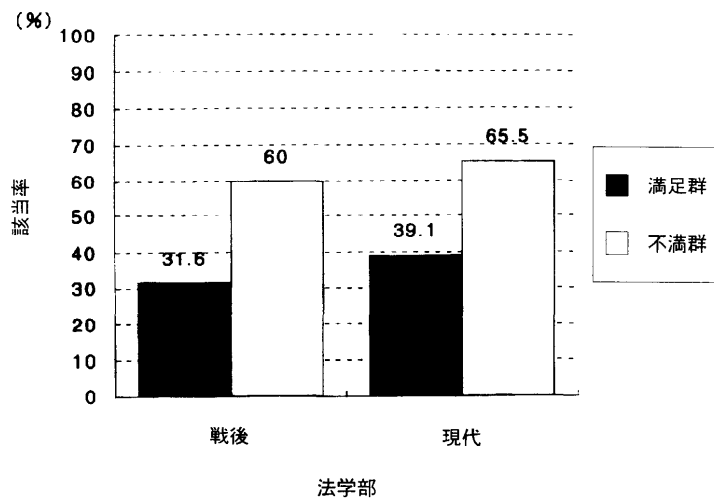


Figure88 教育者として自覚をもってほしい（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞文学部（満足群21.9％－不満群53.8％）、＜戦後＞工学部（満足群40.5％－不満群72.2％）、＜現代＞法学部（満足群37.5％－不満群75.9％）で差がみられた。重要項目は、全くみられなかった。

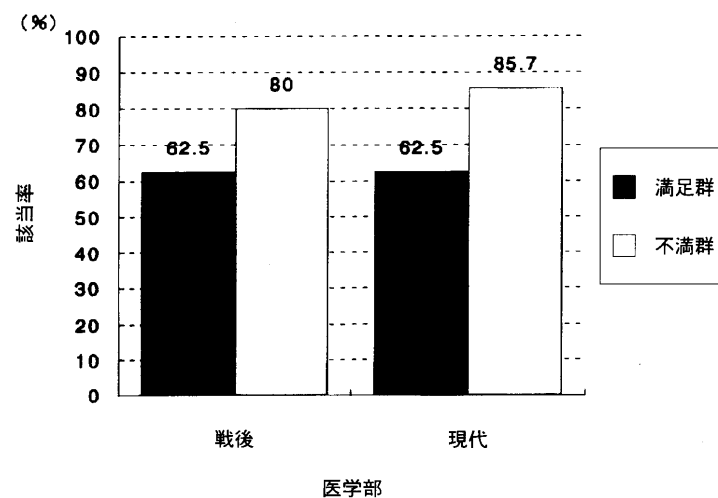
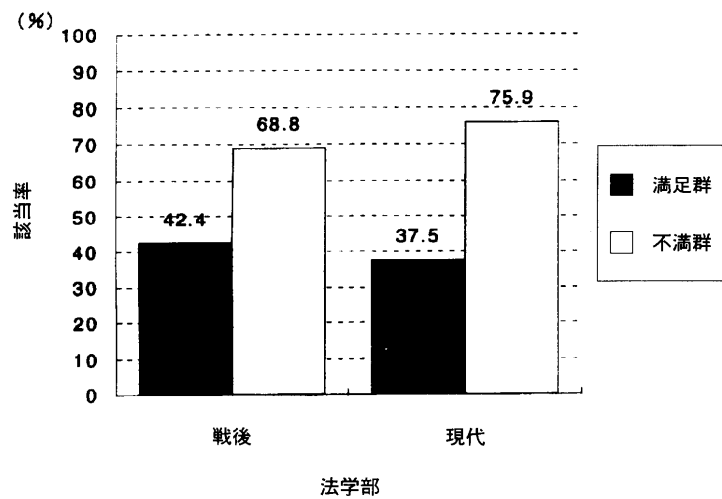
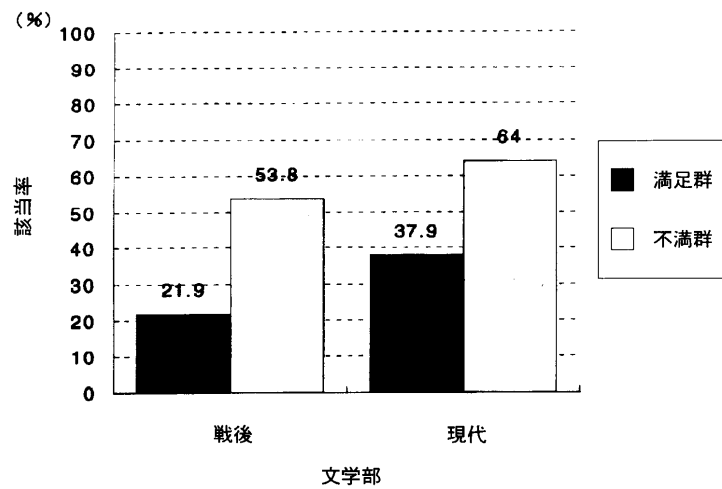


Figure89 教育者として自覚をもってほしい（専門講義）

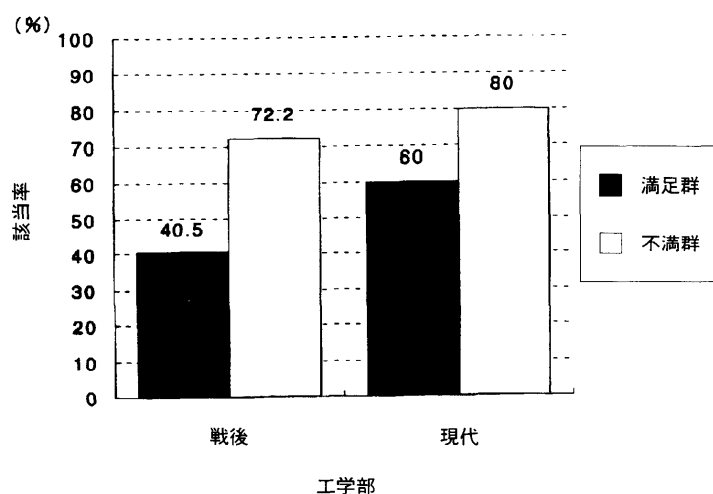


Figure89 教育者として自覚をもってほしい（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞医学部（満足群54.2％－不満群100.0％）、＜現代＞文学部（満足群20.0％－不満群68.8％）、＜現代＞工学部（満足群44.1％－不満群75.0％）で差がみられた。重要項目は、全くみられなかった。

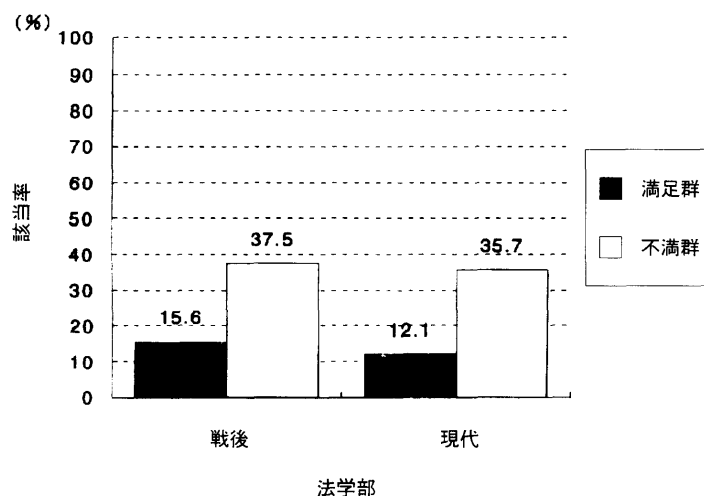
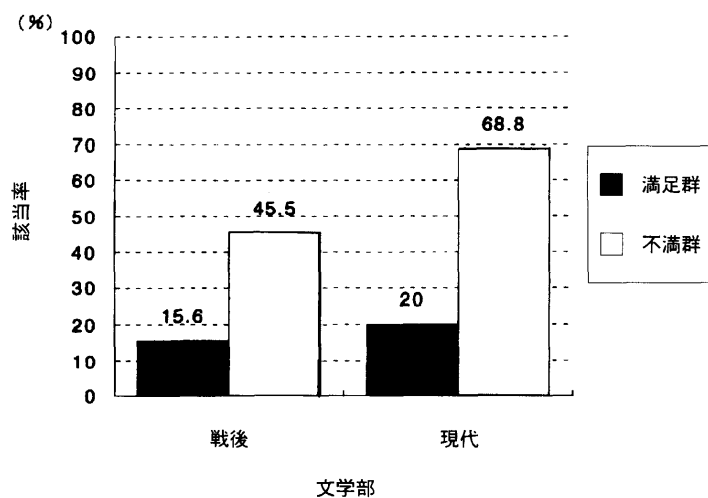


Figure90 教育者として自覚をもってほしい（専門演習）

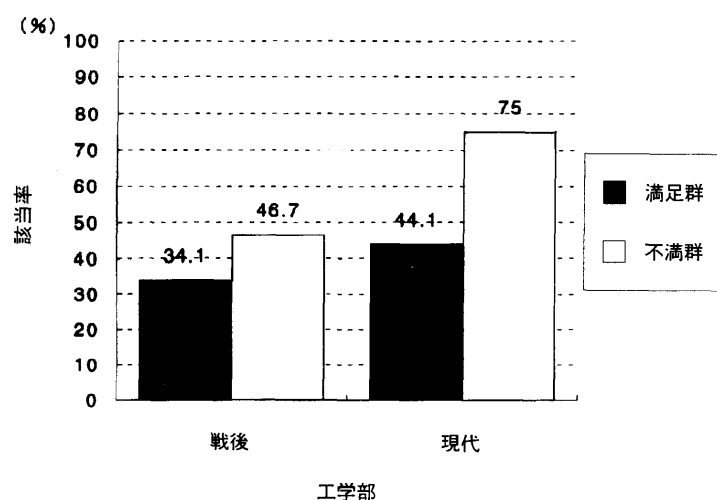
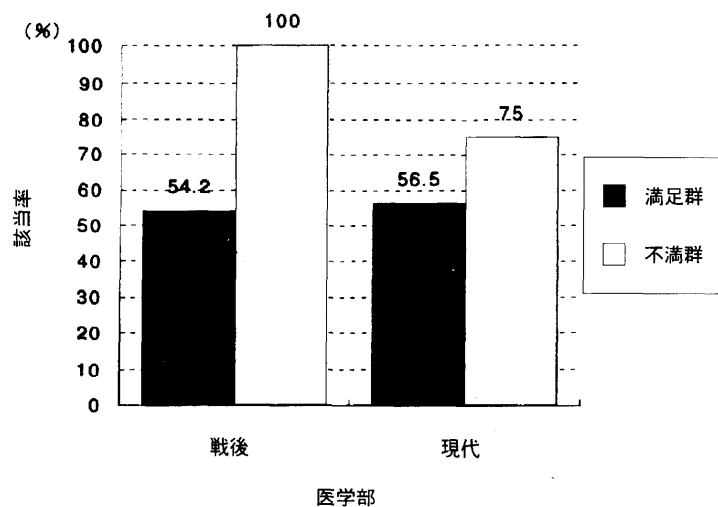


Figure90 教育者として自覚をもってほしい (専門演習) (続き)

専門実験では、＜戦後＞医学部（満足群49.0％－不満群100.0％）、＜現代＞工学部（満足群36.2％－不満群66.7％）で差がみられた。戦後の工学部で差がみられなかった原因は、不満群の該当率が低かったからであるが、現代にかけて不満群の該当率が増加し（31.6→66.7％）、差がみられたようである。重要項目は、全くみられなかった。

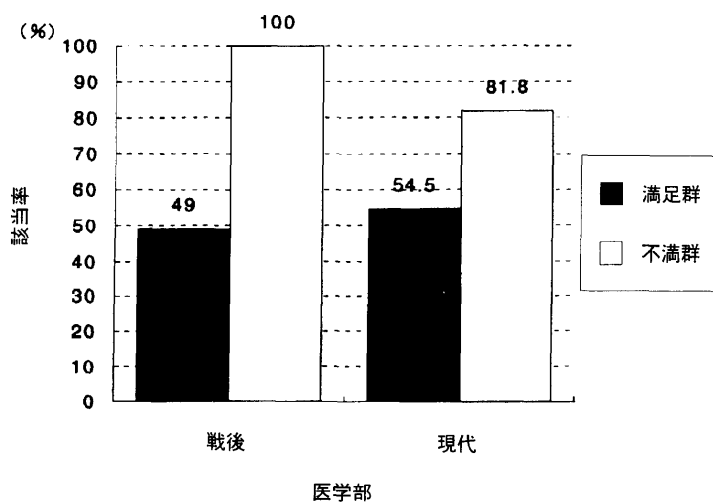


Figure91 教育者として自覚をもってほしい (専門実験)

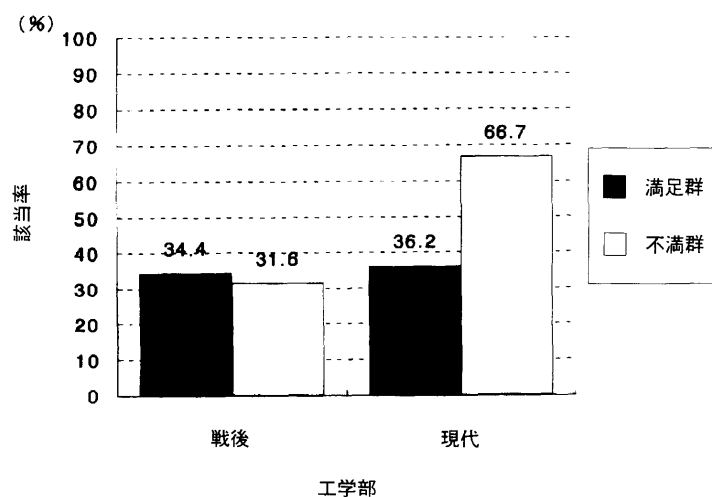


Figure91 教育者として自覚をもってほしい（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、もう少し工夫して講義をしてほしいと思う授業はありましたか。

→講義を工夫して欲しい

《一般教養課程》

- ☐ 一般教養課程での英語の授業
- ☐ 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- ☐ 一般教養課目（人文・社会系）
- ☐ 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- ☐ 専門科目の講義
- ☐ 専門科目の演習
- ☐ 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、＜戦後＞医学部（満足群64.3%－不満群100.0%）、＜戦後＞工学部（満足群62.1%－不満群93.3%）で差がみられた。重要項目は、現代におけるすべての学部でみられた（＜現代＞文学部（満足群87.5%－不満群93.8%）、＜現代＞法学部（満足群71.8%－不満群94.8%）、＜現代＞医学部（満足群85.7%－不満群100.0%）、＜現代＞工学部（満足群77.8%－不満群89.7%））

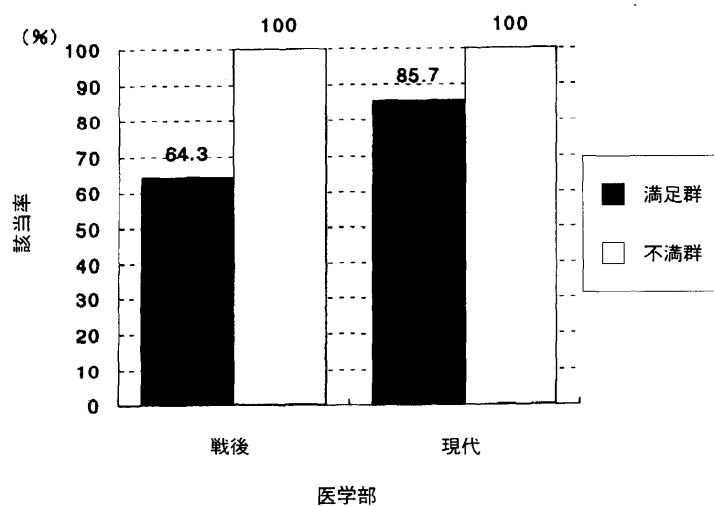
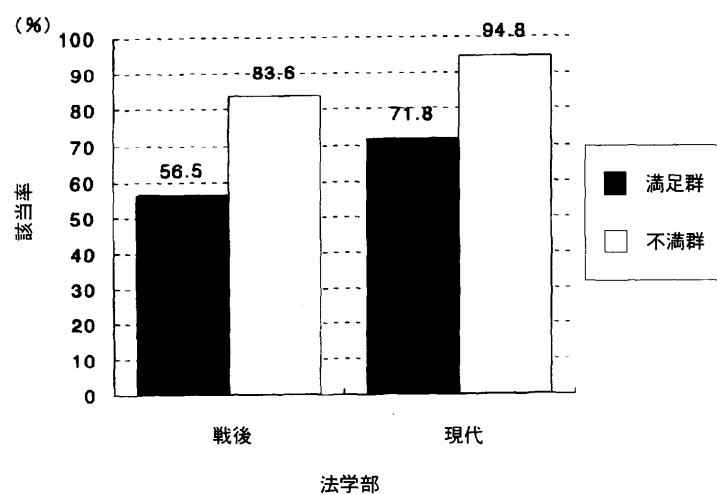
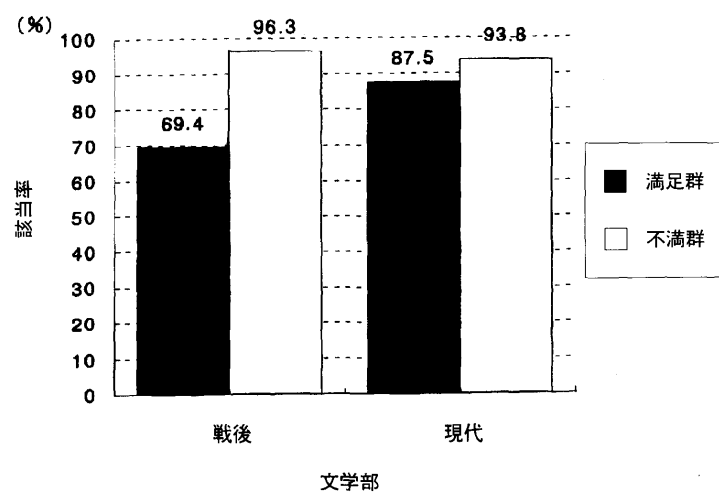


Figure92 講義を工夫して欲しい (英語)

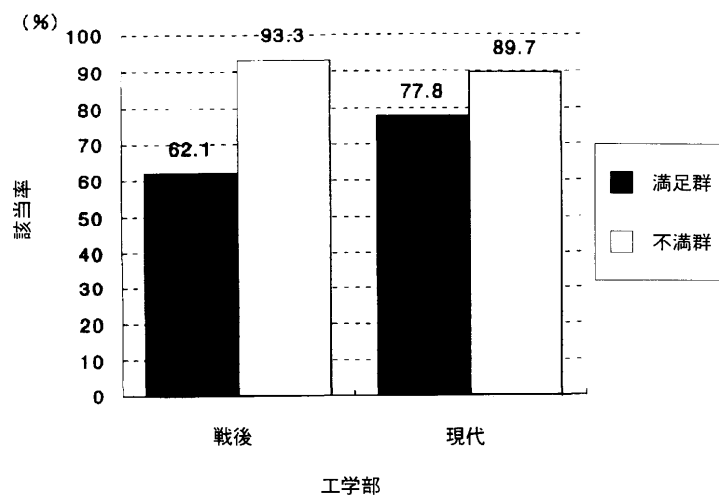


Figure92 講義を工夫して欲しい (英語) (続き)

英語以外では、＜戦後＞文学部 (満足群60.8％－不満群100.0％)、＜現代＞法学部 (満足群64.3％－不満群98.1％) で差がみられた。重要項目は、＜戦後＞医学部 (満足群73.7％－不満群100.0％)、＜現代＞文学部 (満足群75.9％－不満群93.9％)、＜現代＞医学部 (満足群78.6％－不満群90.0％)、＜現代＞工学部 (満足群73.2％－不満群90.7％) でみられた。

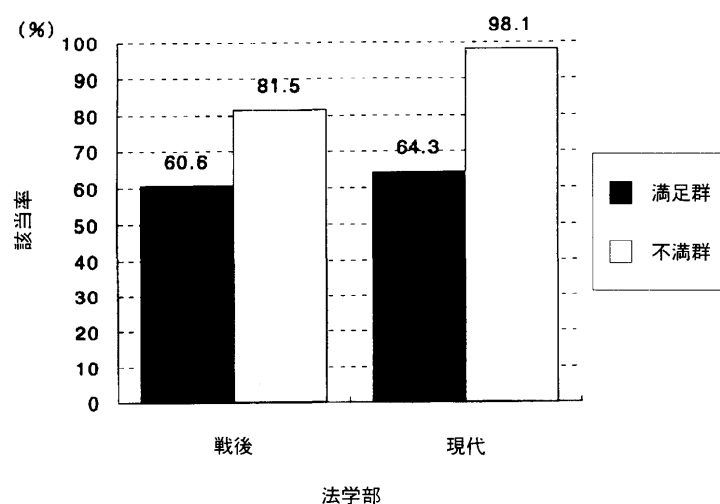
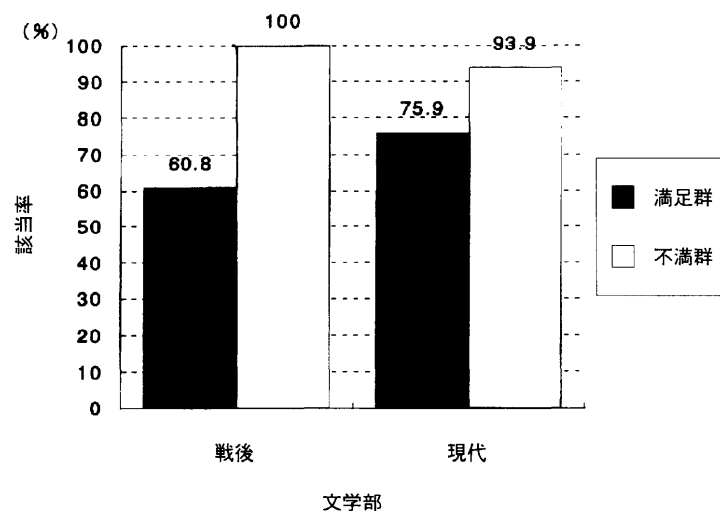


Figure93 講義を工夫して欲しい (英語以外)

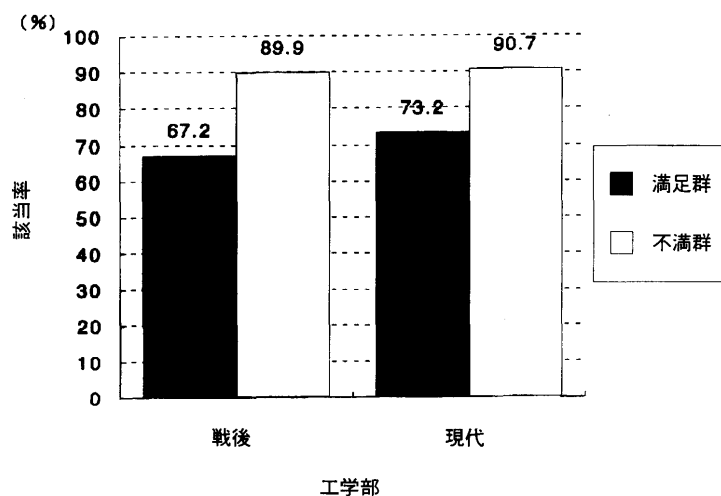
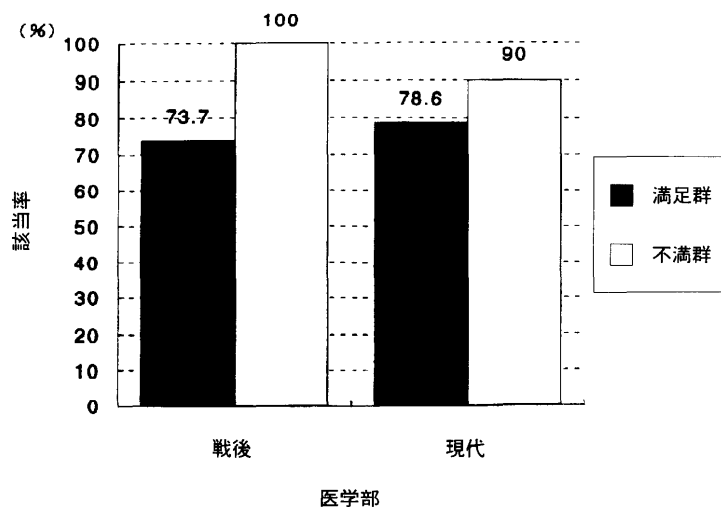


Figure93 講義を工夫して欲しい（英語以外）（続き）

人文社会では、差が全くみられなかった。重要項目は、戦後の＜戦後＞医学部（満足群81.8％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群78.7％－不満群93.2％）でみられた。現代では、すべての学部においてみられた（＜現代＞文学部（満足群86.8％－不満群89.3％）、＜現代＞法学部（満足群86.3％－不満群92.3％）、＜現代＞医学部（満足群78.6％－不満群100.0％）、＜現代＞工学部（満足群77.8％－不満群90.2％））。

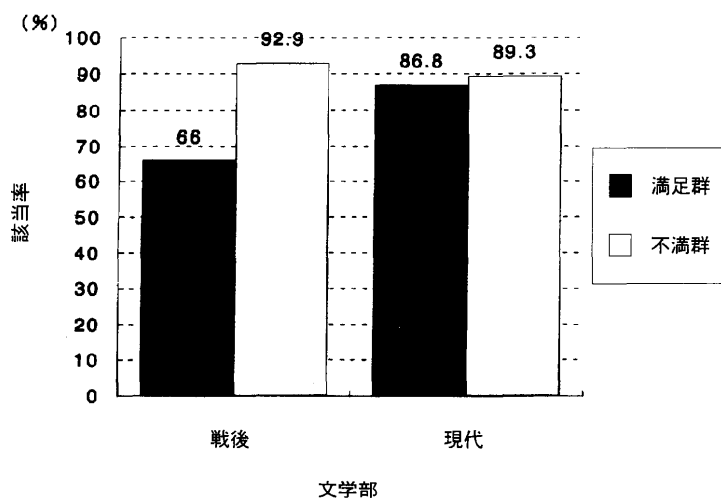


Figure94 講義を工夫して欲しい（人文社会）

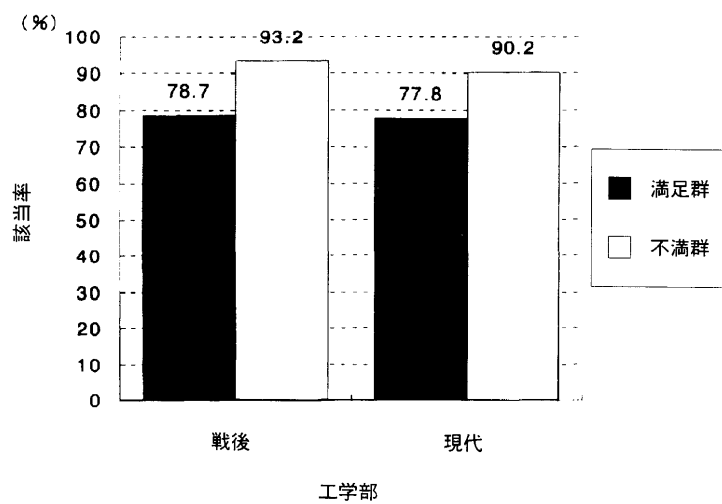
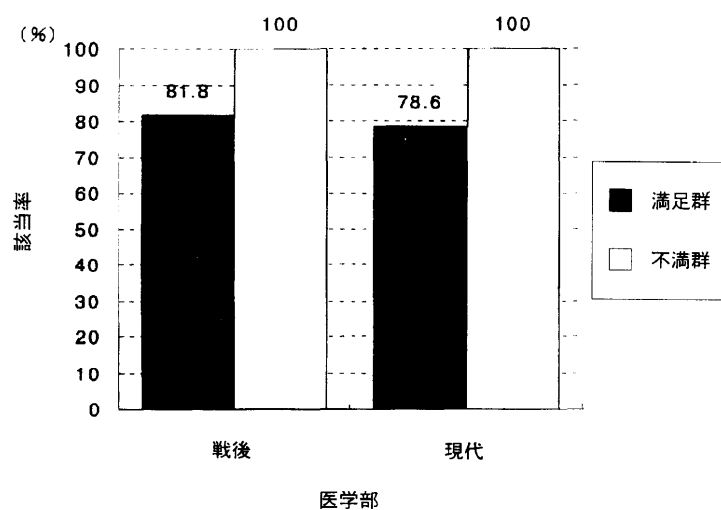
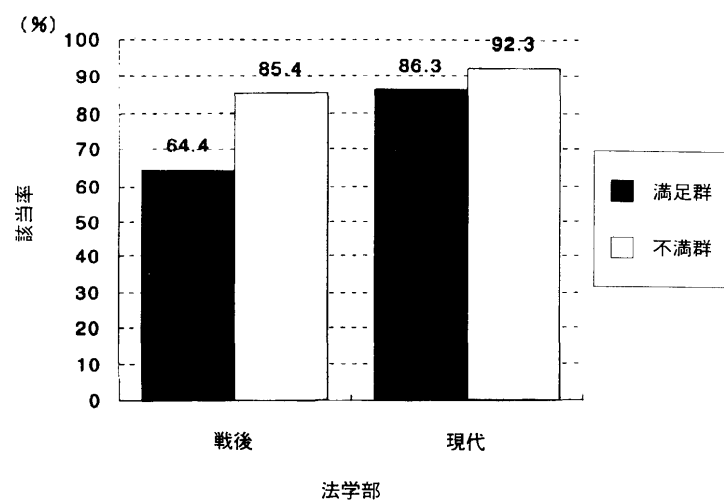


Figure94 講義を工夫して欲しい（人文社会）（続き）

自然では、＜戦後＞文学部（満足群60.9％－不満群91.2％）で差がみられた。重要項目では、戦後の＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群77.0％－不満群95.2％）でみられた。現代では、すべての学部においてみられた（＜現代＞文学部（満足群75.8％－不満群88.6％）、＜現代＞法学部（満足群73.9％－不満群91.4％）、＜現代＞医学部（満足群83.3％－不満群100.0％）、＜現代＞工学部（満足群84.0％－不満群92.9％））。

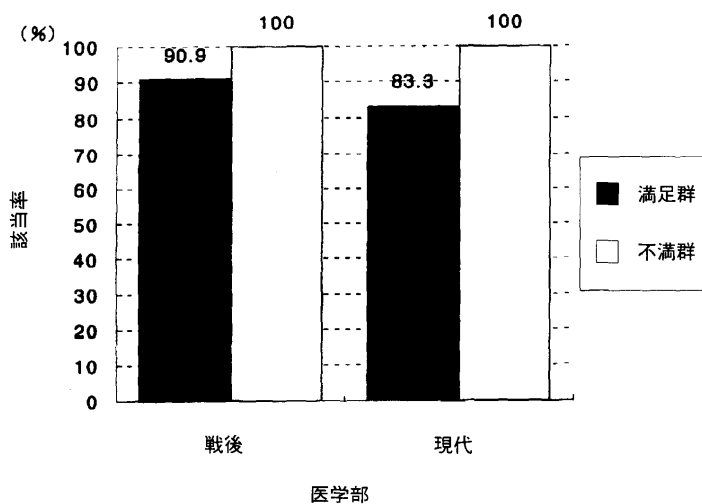
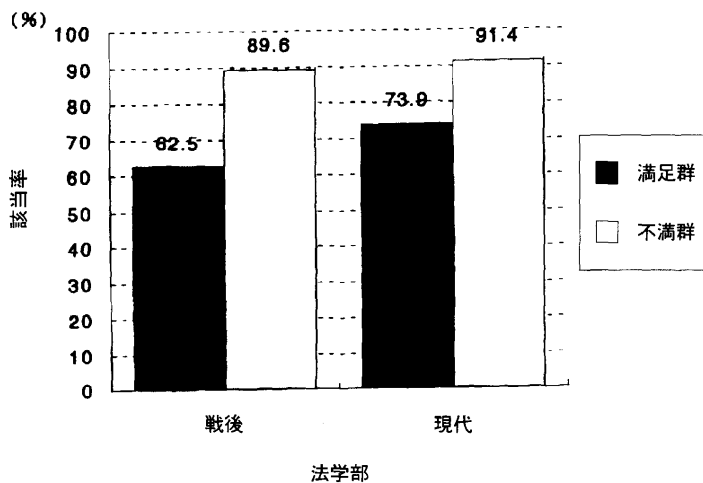
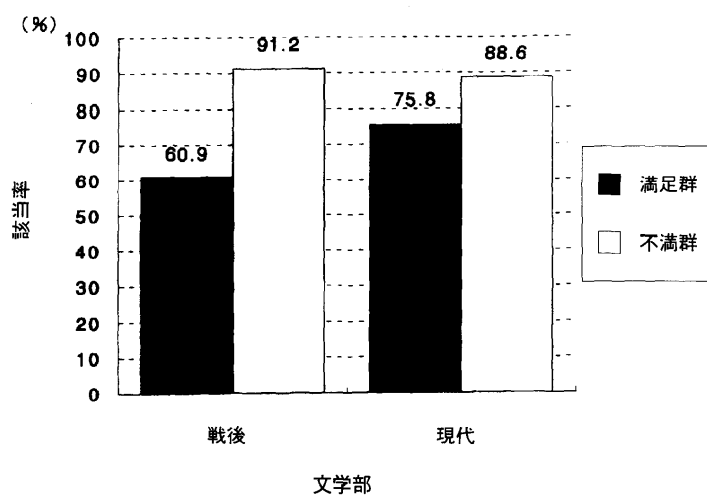


Figure95 講義を工夫して欲しい（自然）

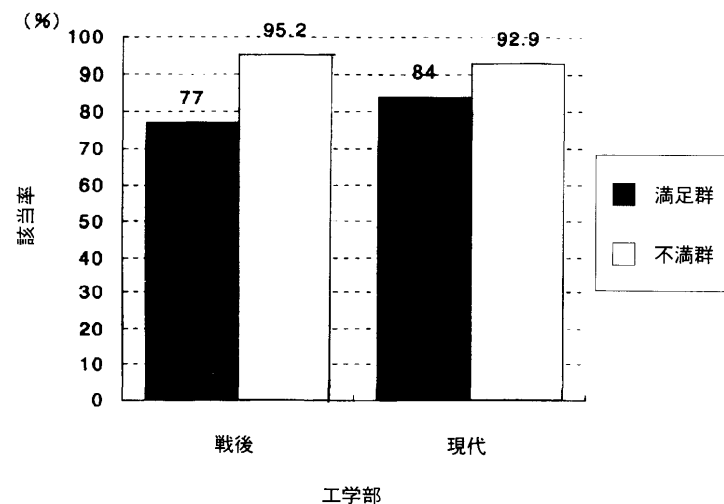


Figure95 講義を工夫して欲しい（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞文学部（満足群50.8％－不満群100.0％）で差がみられた。重要項目では、戦後の＜戦後＞法学部（満足群70.3％－不満群87.5％）、＜戦後＞医学部（満足群83.9％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群76.4％－不満群94.7％）でみられた。現代では、すべての学部においてみられた（＜現代＞文学部（満足群75.8％－不満群88.5％）、＜現代＞法学部（満足群80.9％－不満群96.7％）、＜現代＞医学部（満足群87.5％－不満群100.0％）、＜現代＞工学部（満足群90.4％－不満群88.0％））。

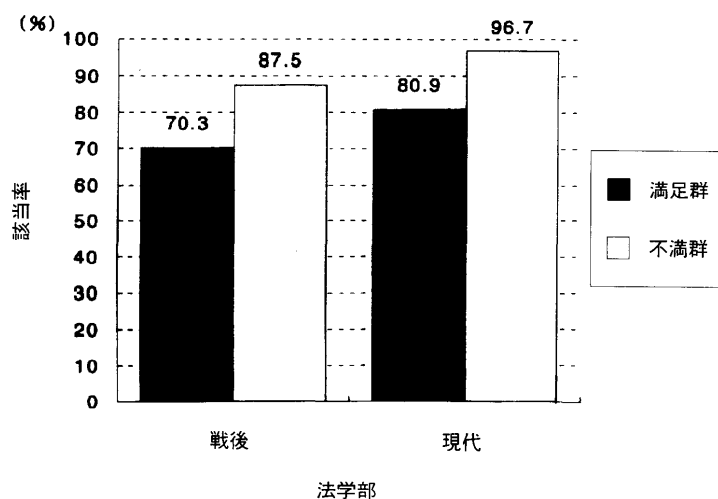
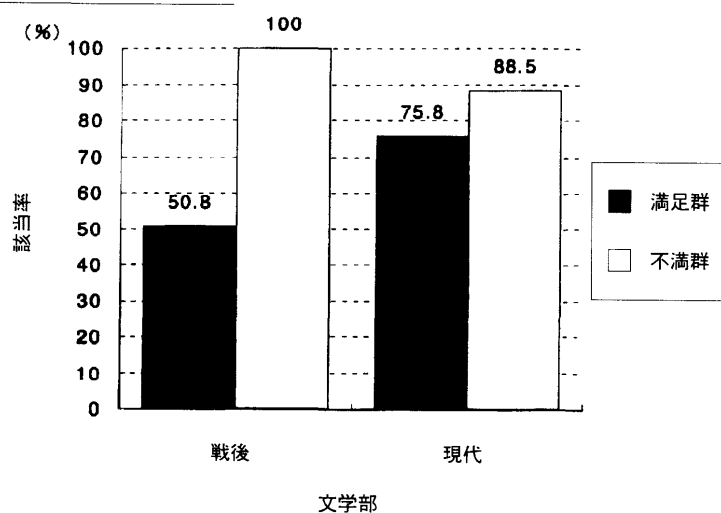


Figure96 講義を工夫して欲しい（専門講義）

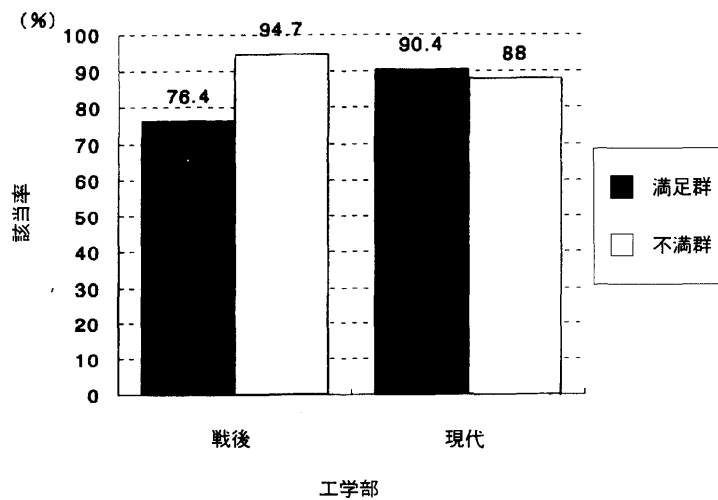
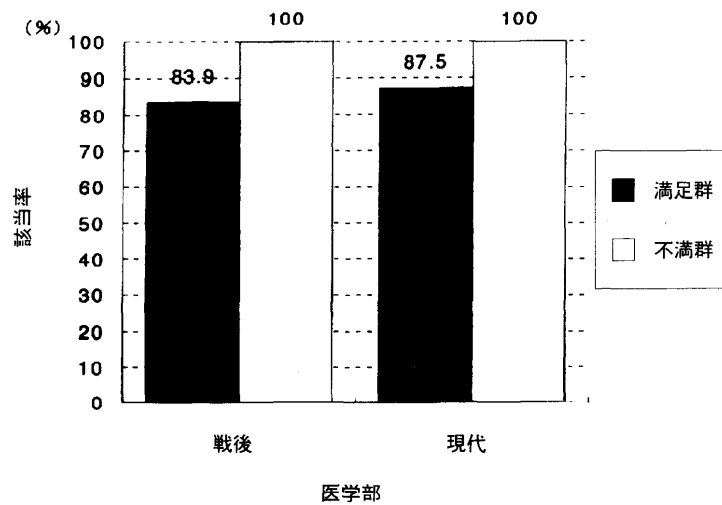


Figure96 講義を工夫して欲しい（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞文学部（満足群44.6％－不満群100.0％）、＜戦後＞法学部（満足群34.7％－不満群68.0％）、＜現代＞文学部（満足群58.0％－不満群93.8％）で差がみられた。文学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群83.3％－不満群100.0％）、＜現代＞医学部（満足群91.3％－不満群87.5％）、＜現代＞工学部（満足群76.3％－不満群93.8％）でみられた。

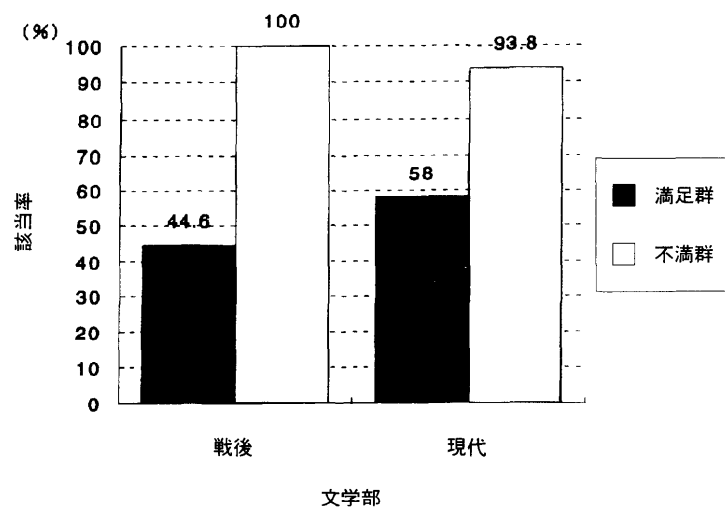


Figure97 講義を工夫して欲しい（専門演習）

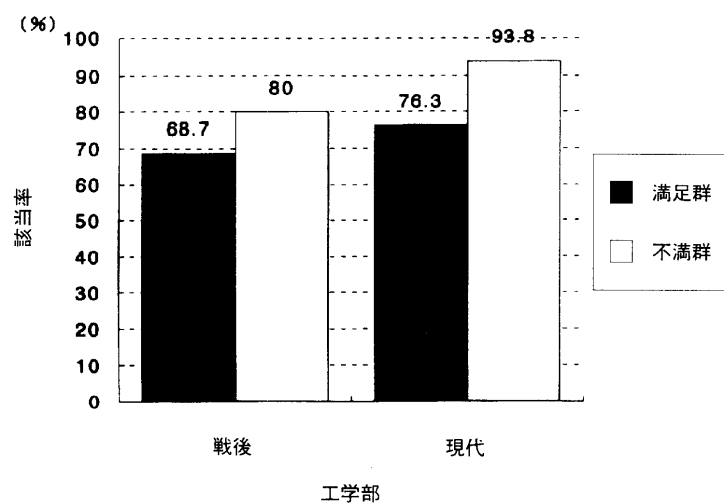
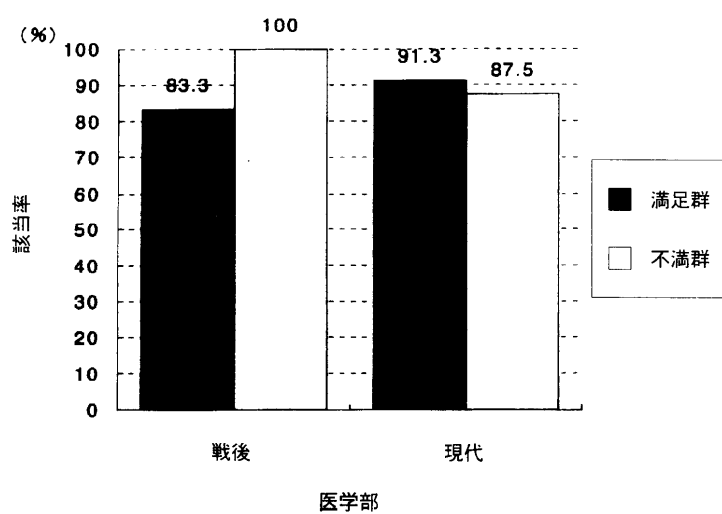
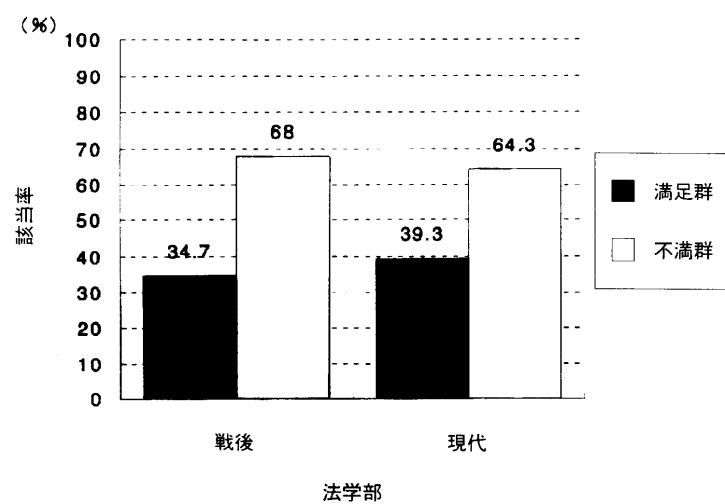


Figure97 講義を工夫して欲しい(専門演習)(続き)

専門実験では、差が全くみられなかった。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群79.6％－不満群100.0％）、＜現代＞医学部（満足群81.8％－不満群100.0％）でみられた。

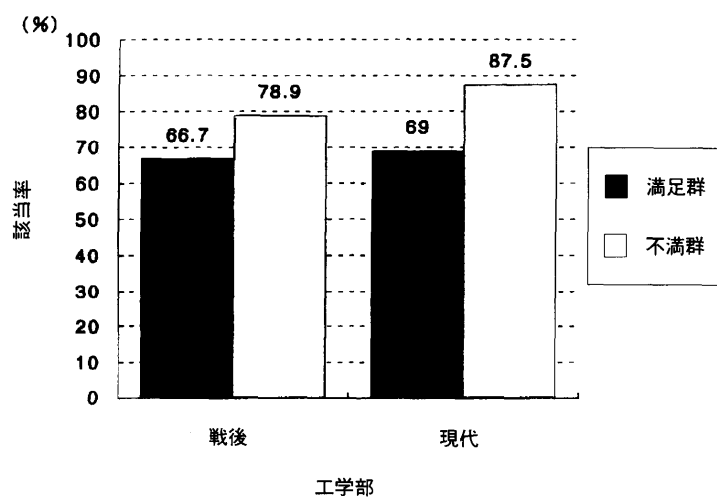
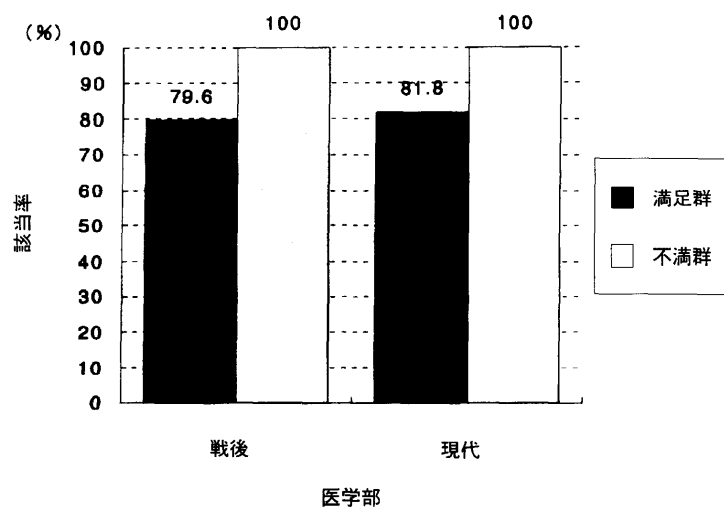


Figure98 講義を工夫して欲しい（専門実験）

【学生への伝達影響】

次のような授業を振り返って、自分の興味や知的関心にあう授業はありましたか。

→興味や関心にあう

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養課目（人文・社会系）
- () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後、現代を問わず、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群94.7%－不満群37.0%）、＜戦後＞法学部（満足群93.7%－不満群34.4%）、＜戦後＞医学部（満足群92.9%－不満群60.0%）、＜戦後＞工学部（満足群100.0%－不満群40.8%）、＜現代＞文学部（満足群96.0%－不満群51.0%）、＜現代＞法学部（満足群92.7%－不満群32.9%）、＜現代＞医学部（満足群92.9%－不満群34.8%）、＜現代＞工学部（満足群97.1%－不満群42.1%））。重要項目は、全くみられなかった。

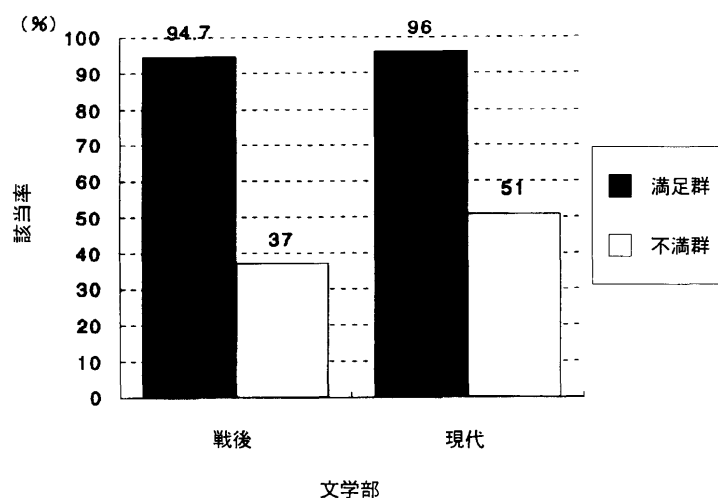


Figure99 興味や関心にあう（英語）

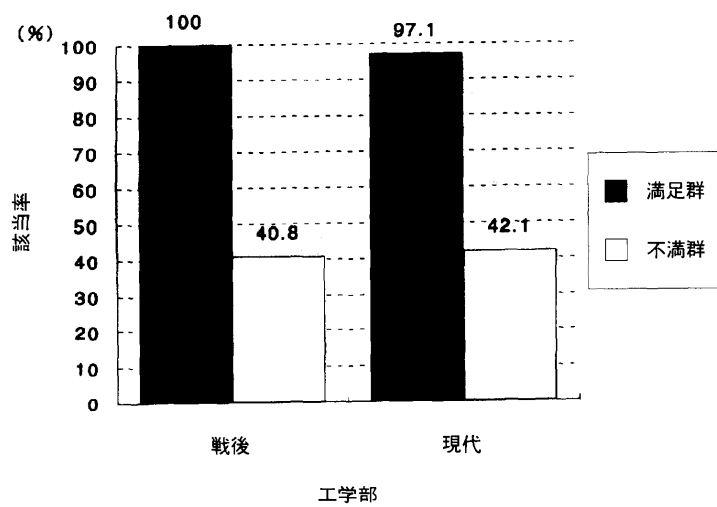
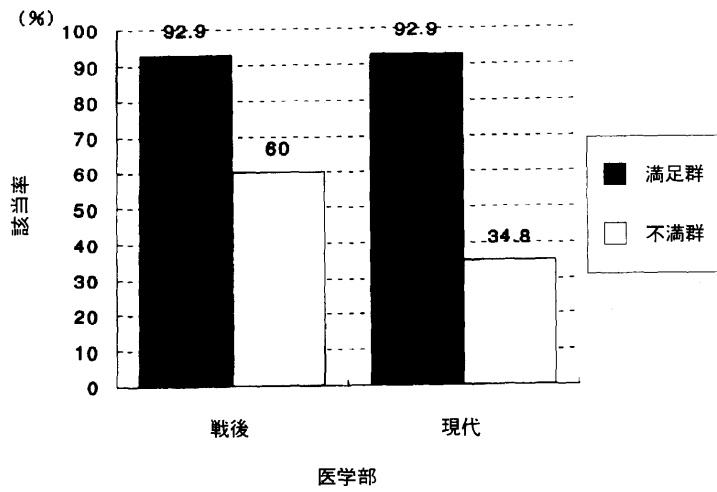
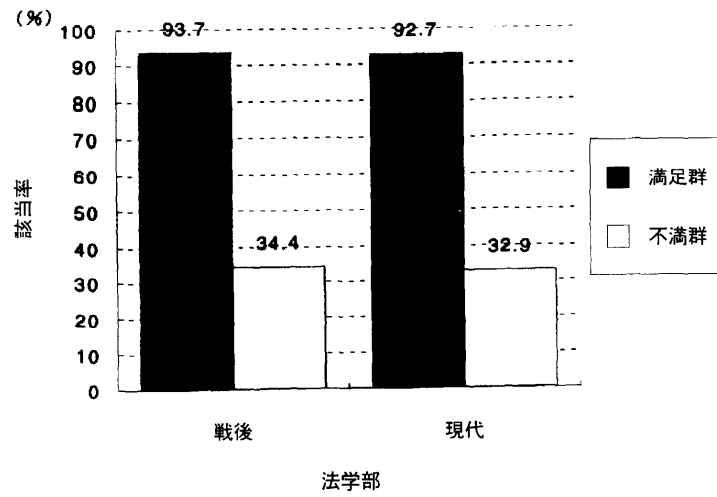


Figure99 興味や関心にあう (英語) (続き)

英語以外では、戦後の＜戦後＞法学部（満足群98.6％－不満群38.9％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群60.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.5％－不満群53.8％）で差がみられた。現代ではすべての学部において差がみられた＜現代＞文学部（満足群94.4％－不満群58.8％）、＜現代＞法学部（満足群87.5％－不満群26.4％）、＜現代＞医学部（満足群78.6％－不満群42.9％）、＜現代＞工学部（満足群78.0％－不満群28.9％）。法学部、医学部、工学部では、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群98.1％－不満群76.9％）でみられた。

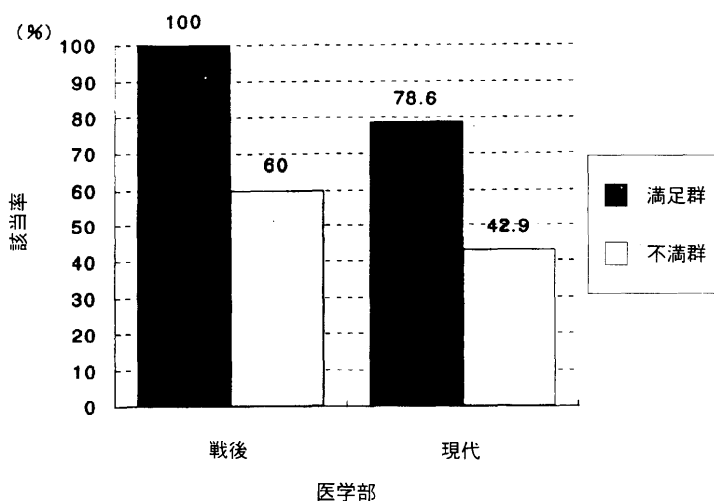
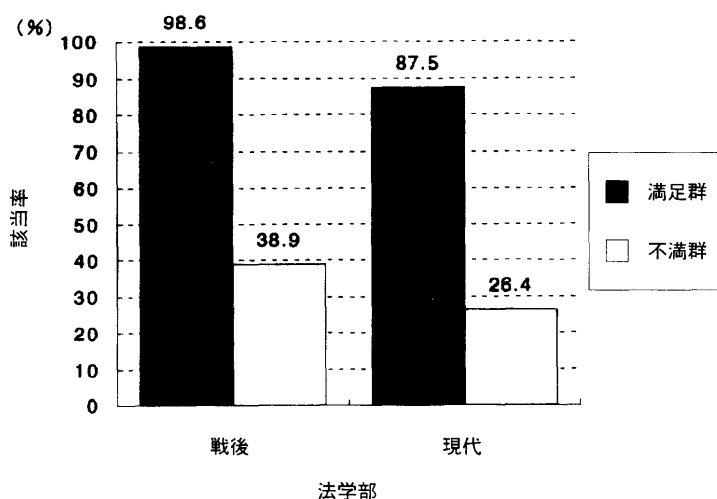
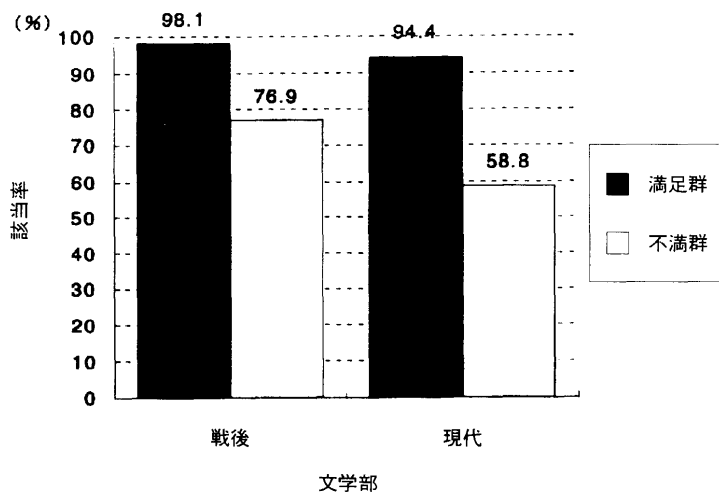


Figure100 興味や関心にあう（英語以外）

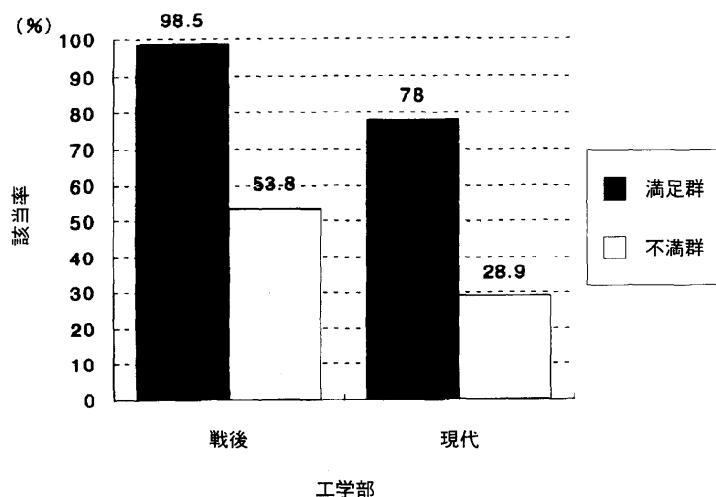


Figure100 興味や関心にあう (英語以外) (続き)

人文社会では、＜戦後＞法学部（満足群98.8％－不満群66.7％）、＜戦後＞工学部（満足群97.8％－不満群61.7％）、＜現代＞医学部（満足群93.3％－不満群56.3％）、＜現代＞工学部（満足群98.4％－不満群63.9％）で差がみられた。工学部では、戦後から現代にかけて同じ構造である、重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群75.0％）、＜現代＞文学部（満足群98.1％－不満群78.6％）、＜現代＞法学部（満足群97.3％－不満群74.4％）でみられた。

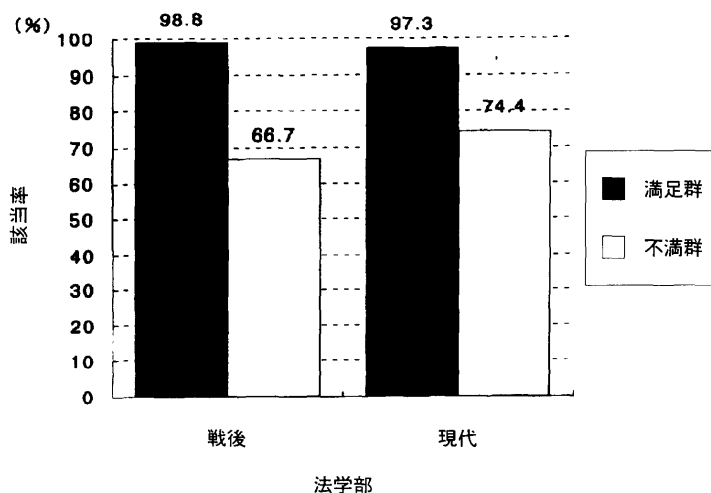
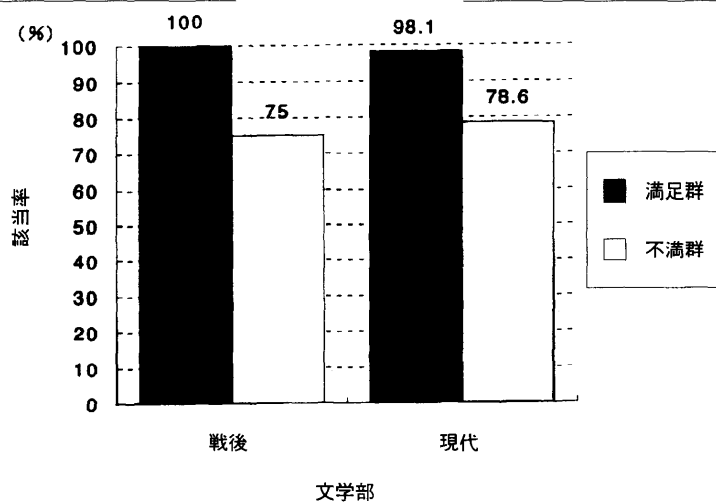


Figure101 興味や関心にあう (人文社会)

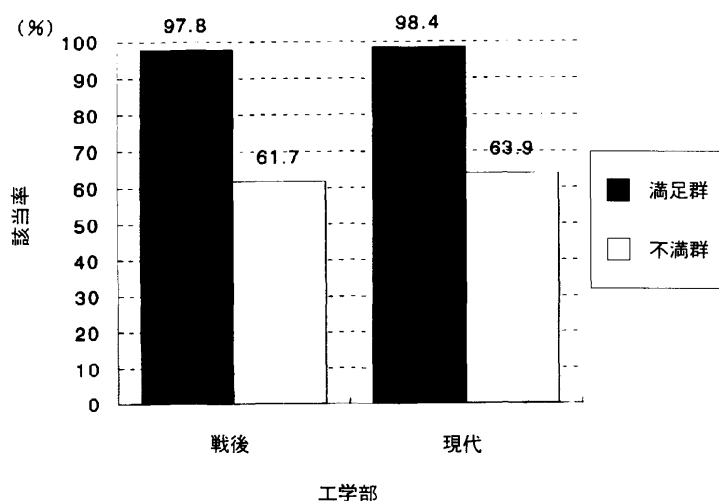
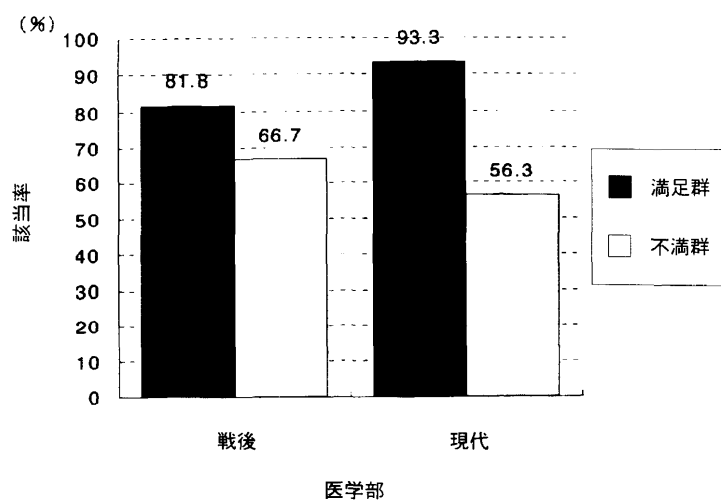


Figure101 興味や関心にあう (人文社会) (続き)

自然では、戦後の＜戦後＞文学部（満足群95.8％－不満群52.8％）、＜戦後＞法学部（満足群100.0％－不満群43.9％）で差がみられた。現代では、すべての学部において差がみられた（＜現代＞文学部（満足群100.0％－不満群42.2％）、＜現代＞法学部（満足群93.6％－不満群49.2％）、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群63.2％）、＜現代＞工学部（満足群100.0％－不満群55.7％））。文学部、法学部では、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群75.0％）、＜戦後＞工学部（満足群99.1％－不満群76.2％）でみられた。

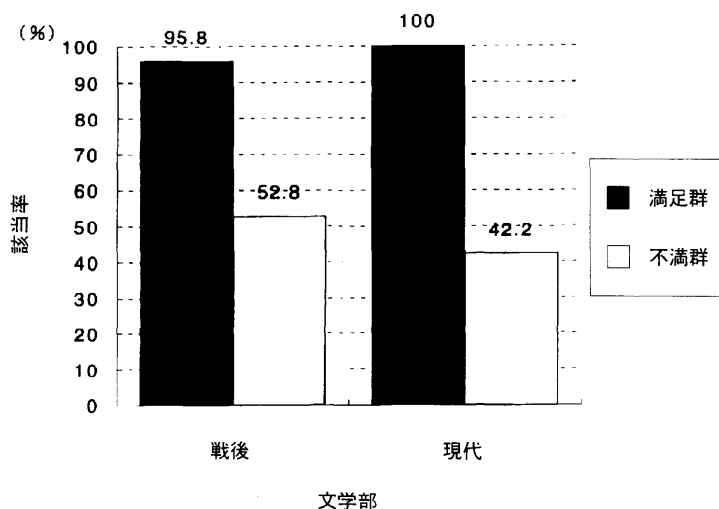


Figure102 興味や関心にあう (自然)

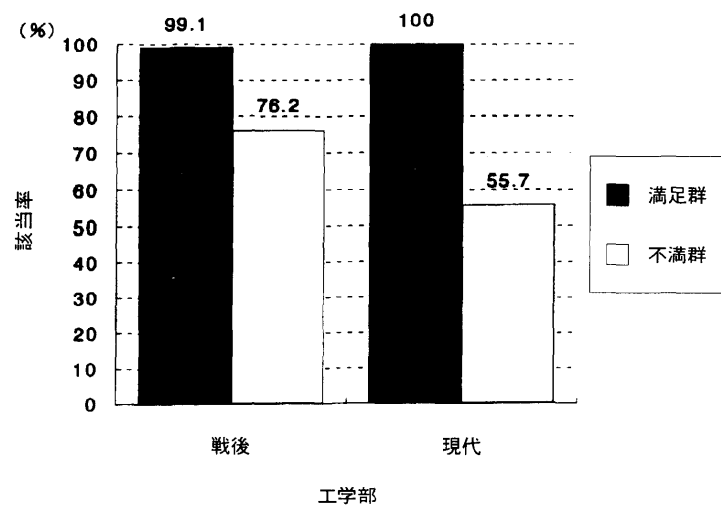
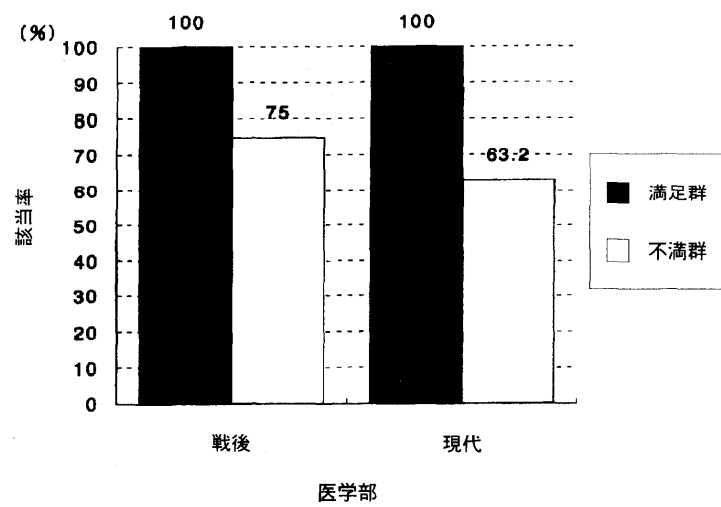
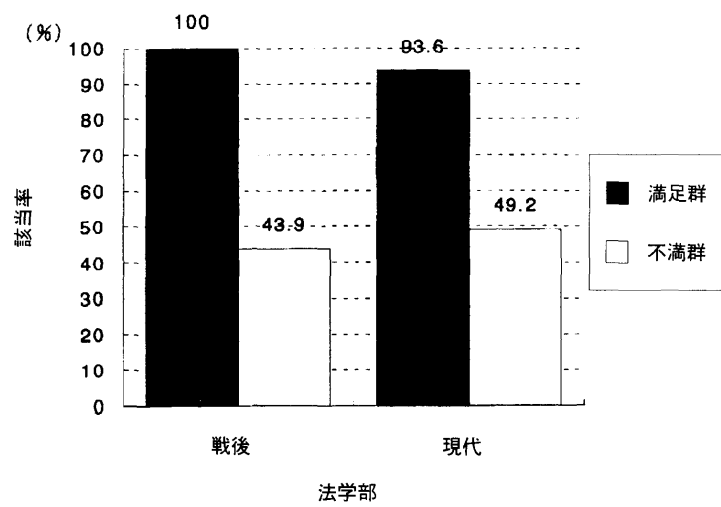


Figure102 興味や関心にあう（自然）（続き）

専門講義では、差が全くみられなかった。重要項目は、戦後、現代を問わず、すべての学部でみられた。（＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群76.9％）、＜戦後＞法学部（満足群100.0％－不満群87.5％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群100.0％－不満群84.2％）、＜現代＞文学部（満足群100.0％－不満群81.5％）、＜現代＞法学部（満足群100.0％－不満群93.3％）、＜現代＞医学部（満足群93.8％－不満群73.3％）、＜現代＞工学部（満足群98.2％－不満群76.0％））。

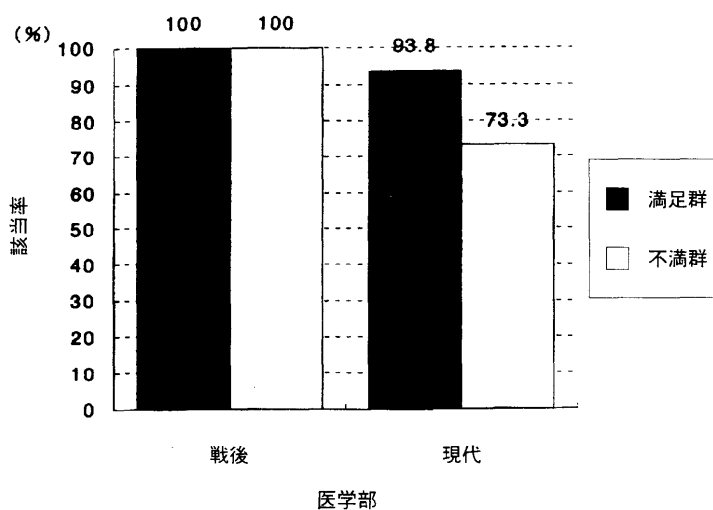
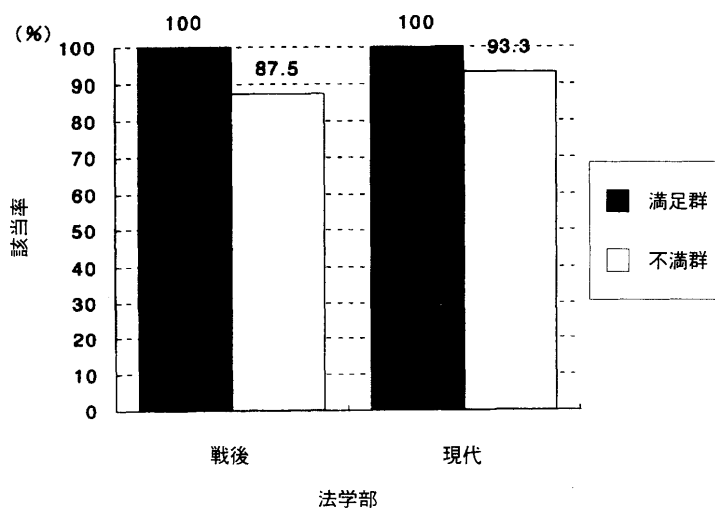
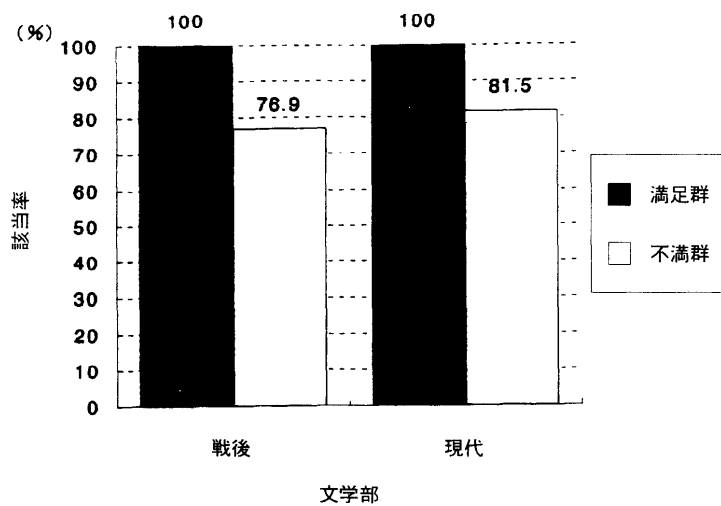


Figure103 興味や関心にあう（専門講義）

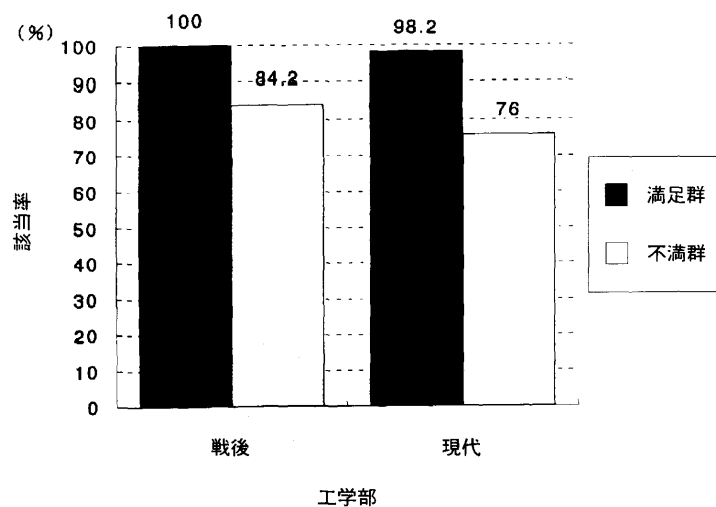


Figure103 興味や関心にあう（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞法学部（満足群100.0％－不満群61.5％）、＜戦後＞工学部（満足群98.8％－不満群68.8％）、＜現代＞法学部（満足群96.6％－不満群64.3％）、＜現代＞工学部（満足群96.6％－不満群43.8％）で差がみられた。法学部、工学部では、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群98.5％－不満群72.7％）、＜戦後＞医学部（満足群97.9％－不満群100.0％）、＜現代＞文学部（満足群98.6％－不満群88.2％）、＜現代＞医学部（満足群95.7％－不満群77.8％）でみられた

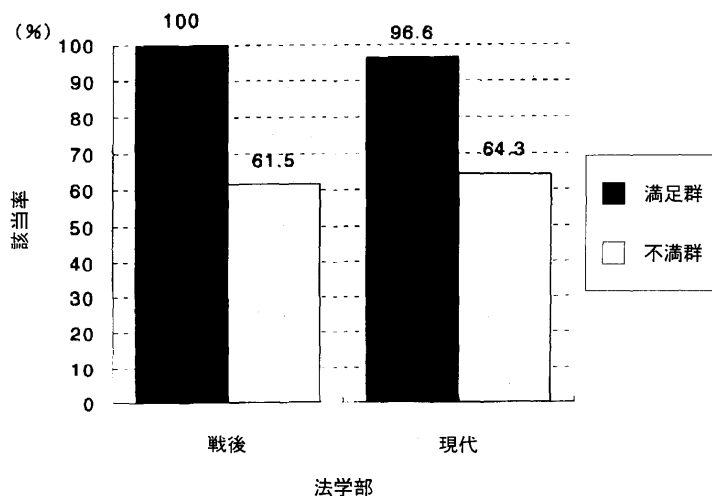
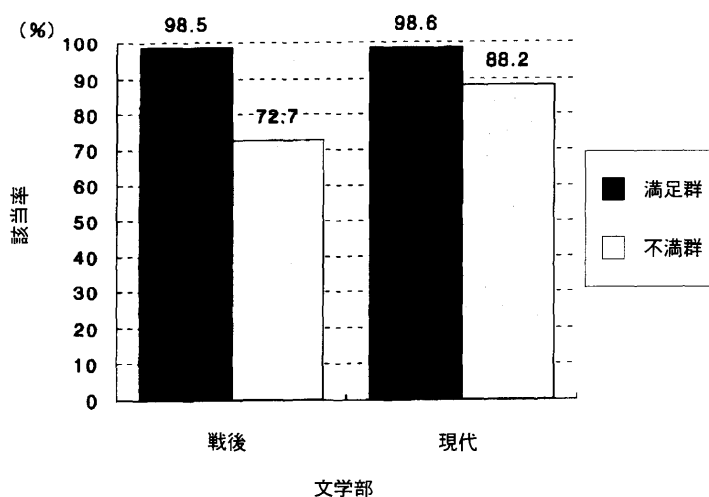


Figure104 興味や関心にあう（専門演習）

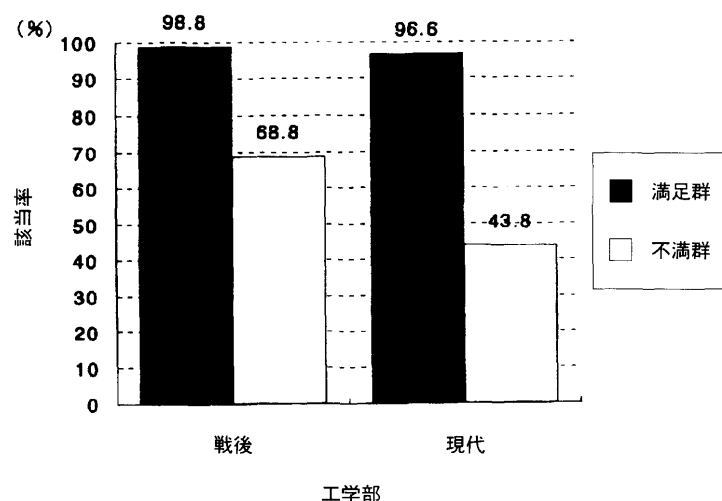
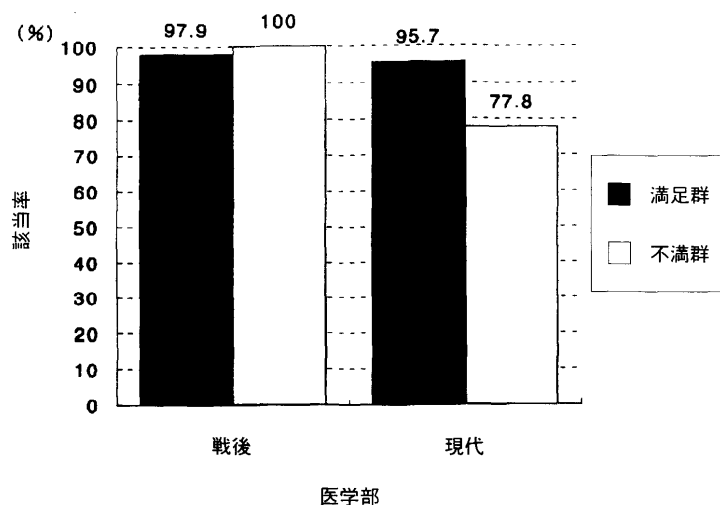


Figure104 興味や関心にあう（専門演習）（続き）

専門実験では、現代のすべての学部において差がみられた（＜現代＞医学部（満足群95.5％－不満群58.3％）、＜現代＞工学部（満足群96.5％－不満群37.5％））。戦後の医学部、工学部で差がみられなかった原因は、不満群の該当率が高かったからであり、現代にかけて不満群の該当率が減少し（医学部100.0→58.3％；工学部68.4→37.5％）、差がみられたようである。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群97.9％－不満群100.0％）のみでみられた。

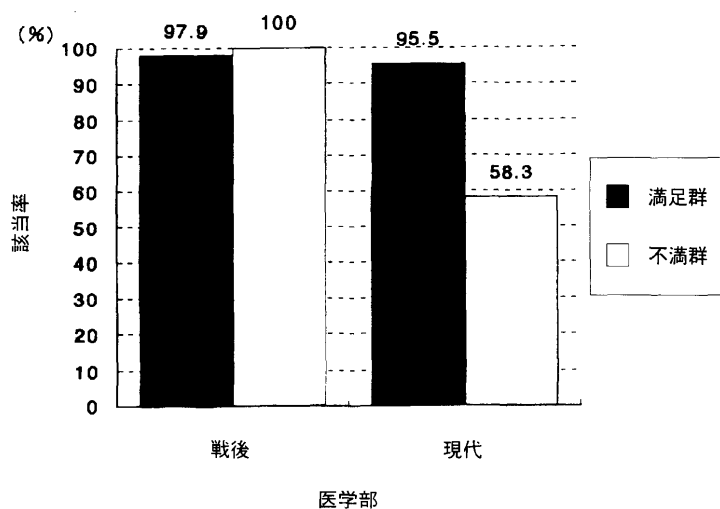


Figure105 興味や関心にあう（専門実験）

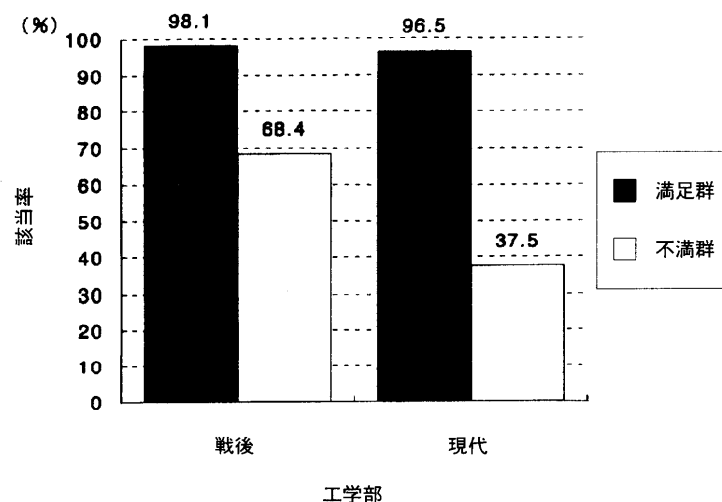


Figure105 興味や関心にあう（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、自分の将来に役立つと思える授業はありましたか。

→将来に役立つ

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養科目（人文・社会系）
- () 一般教養科目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後、現代を問わず、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群86.1%－不満群46.2%）、＜戦後＞法学部（満足群90.3%－不満群36.1%）、＜戦後＞医学部（満足群100.0%－不満群60.0%）、＜戦後＞工学部（満足群96.6%－不満群44.7%）、＜現代＞文学部（満足群91.3%－不満群38.8%）、＜現代＞法学部（満足群82.9%－不満群23.1%）、＜現代＞医学部（満足群85.7%－不満群21.7%）、＜現代＞工学部（満足群85.7%－不満群45.8%））。重要項目は、全くみられなかった。

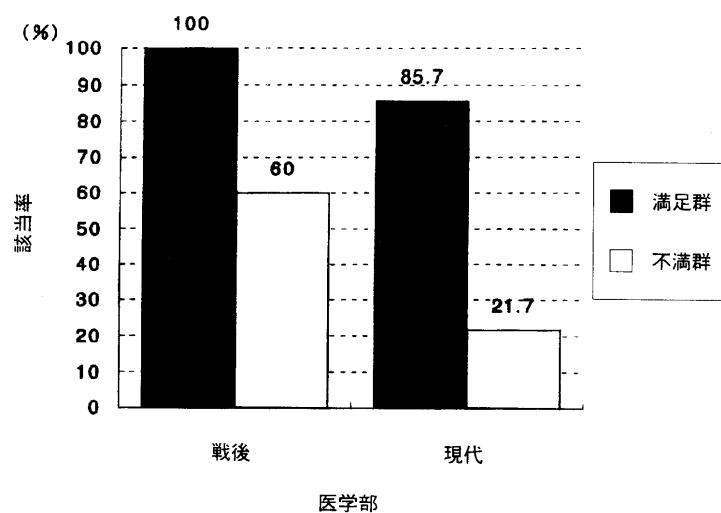
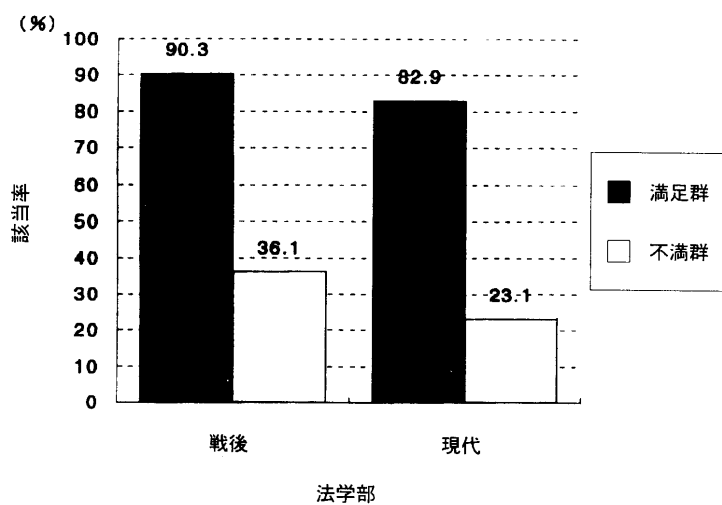
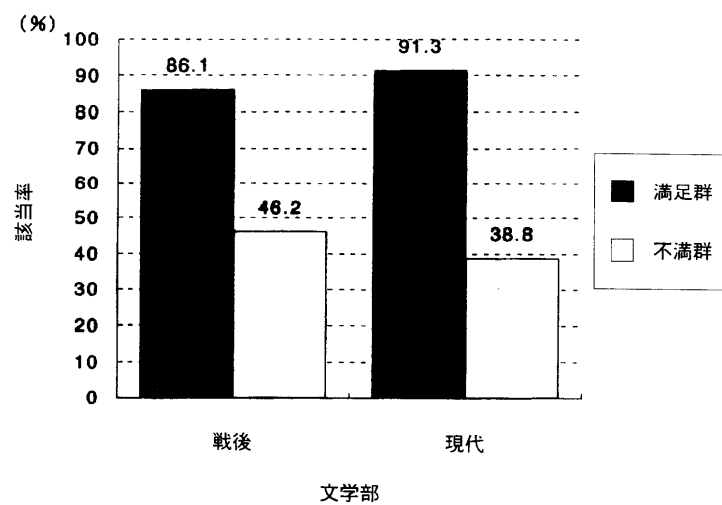


Figure106 将来役に立つ (英語)

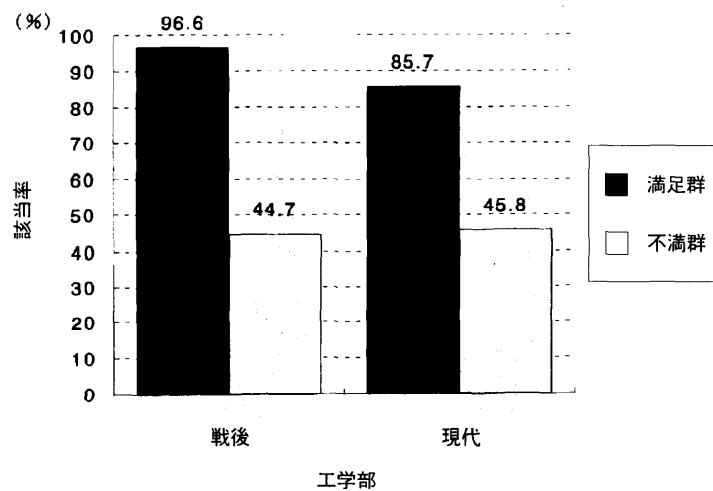


Figure106 将来役に立つ（英語）（続き）

英語以外では、戦後、現代を問わず、文学部を除くすべての学部において差がみられた（＜戦後＞法学部（満足群91.7％－不満群29.6％）、＜戦後＞医学部（満足群94.7％－不満群60.0％）、＜戦後＞工学部（満足群93.8％－不満群53.8％）、＜現代＞法学部（満足群73.2％－不満群26.4％）、＜現代＞医学部（満足群85.7％－不満群28.6％）、＜現代＞工学部（満足群70.7％－不満群24.7％））。重要項目は、全くみられなかった。

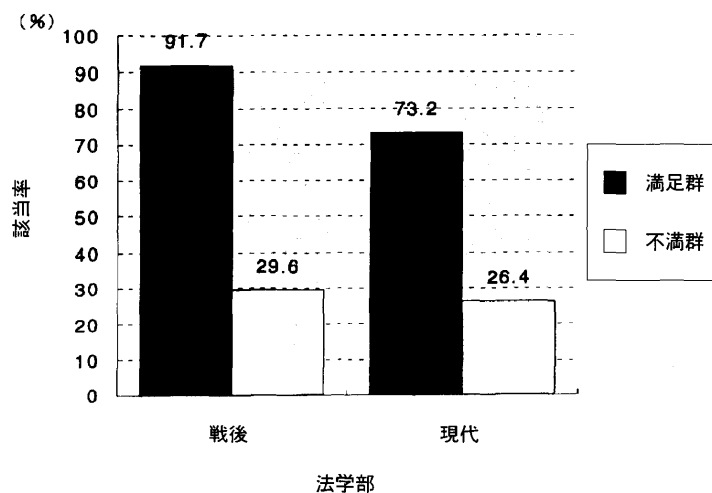
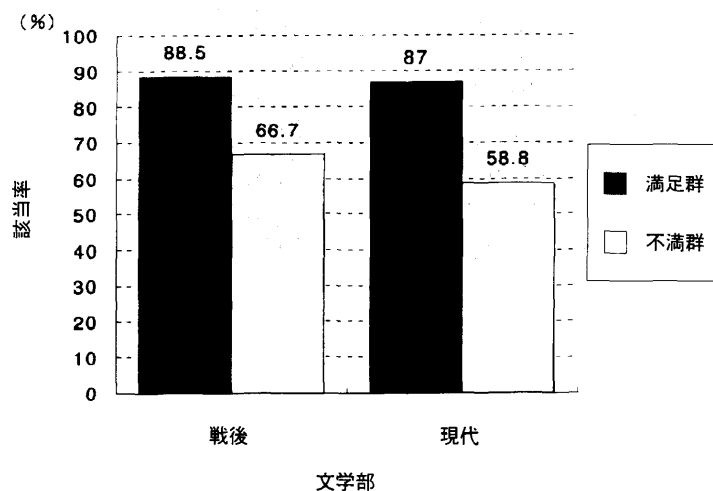


Figure107 将来役に立つ（英語以外）

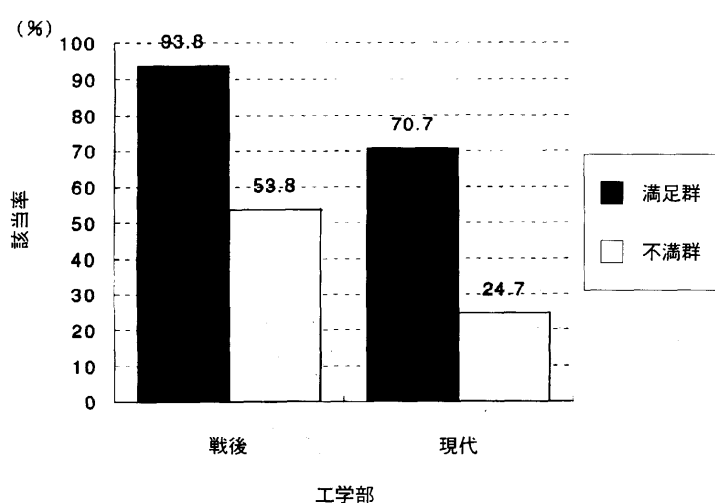
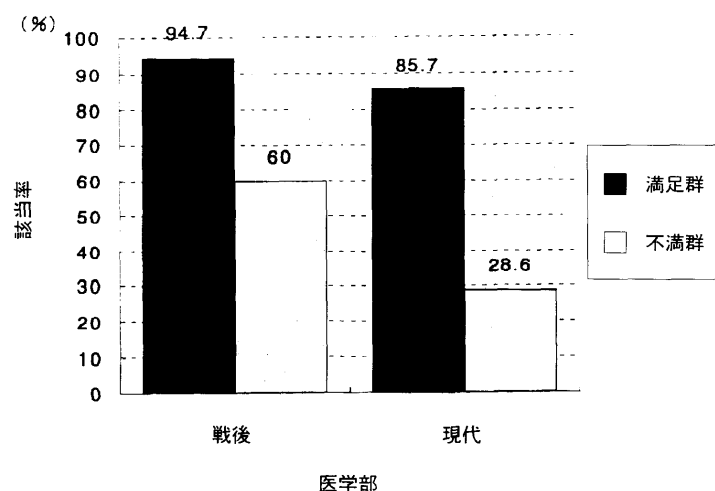


Figure107 将来役に立つ (英語以外) (続き)

人文社会では、＜戦後＞法学部（満足群98.8％－不満群53.2％）、＜戦後＞医学部（満足群72.7％－不満群33.3％）、＜戦後＞工学部（満足群96.7％－不満群50.0％）、＜現代＞文学部（満足群92.5％－不満群59.3％）、＜現代＞医学部（満足群60.0％－不満群25.0％）、＜現代＞工学部（満足群90.3％－不満群45.9％）で差がみられた。医学部、工学部は戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

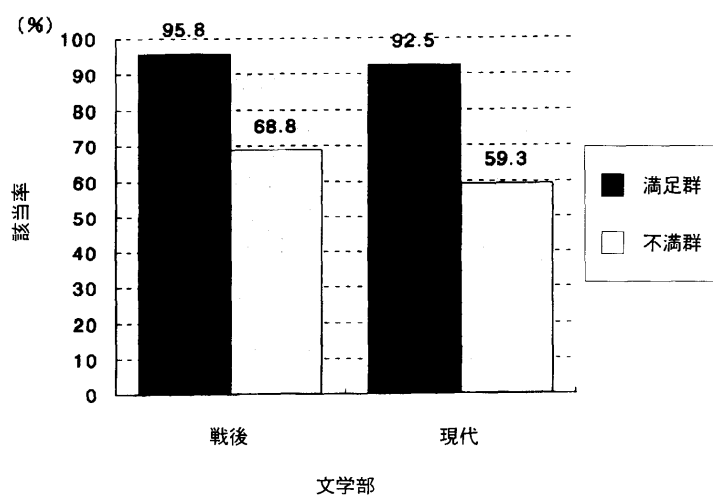


Figure108 将来役に立つ (人文社会)

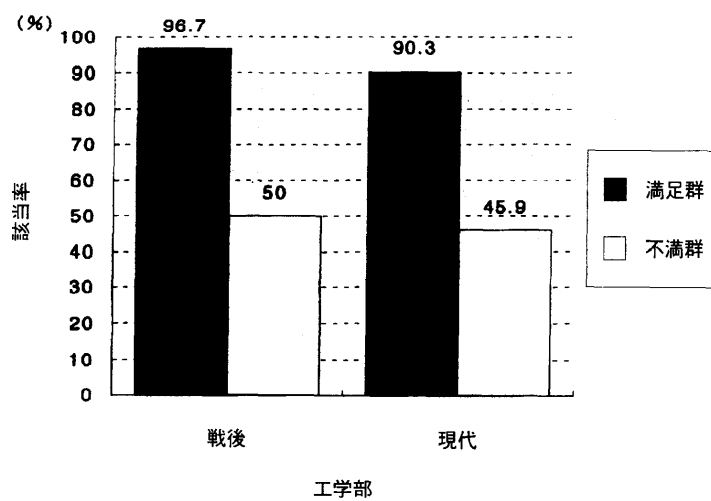
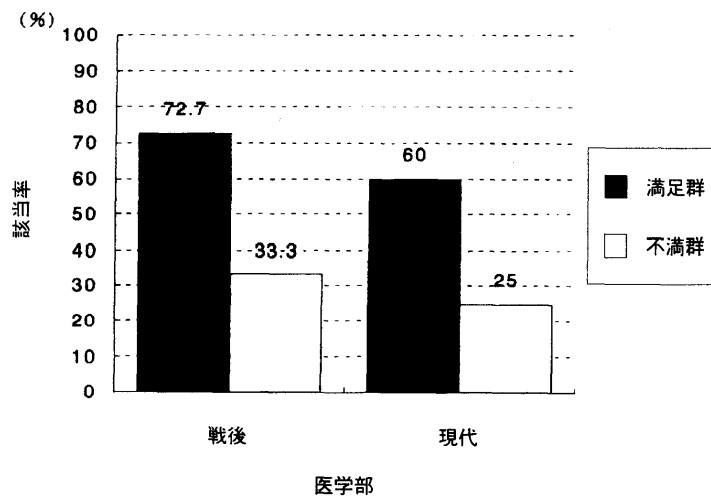
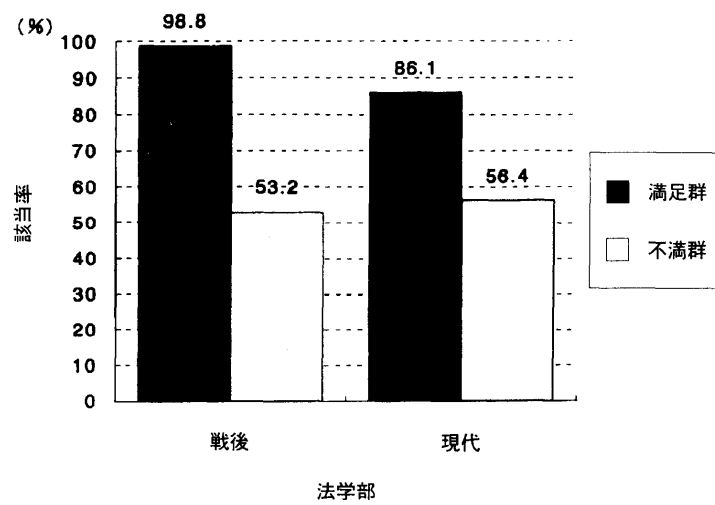


Figure108 将来役に立つ（人文社会）（続き）

自然では、＜戦後＞文学部（満足群85.7％－不満群47.2％）、＜戦後＞法学部（満足群97.4％－不満群30.8％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群62.5％）、＜現代＞文学部（満足群81.8％－不満群20.5％）、＜現代＞法学部（満足群66.7％－不満群23.7％）、＜現代＞工学部（満足群96.0％－不満群62.9％）で差がみられた。現代の医学部で差がみられない原因は、現代にかけて満足群の該当率が減少したからである（100.0→69.2％）。文学部、法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞工学部（満足群98.2％－不満群78.6％）のみでみられた。

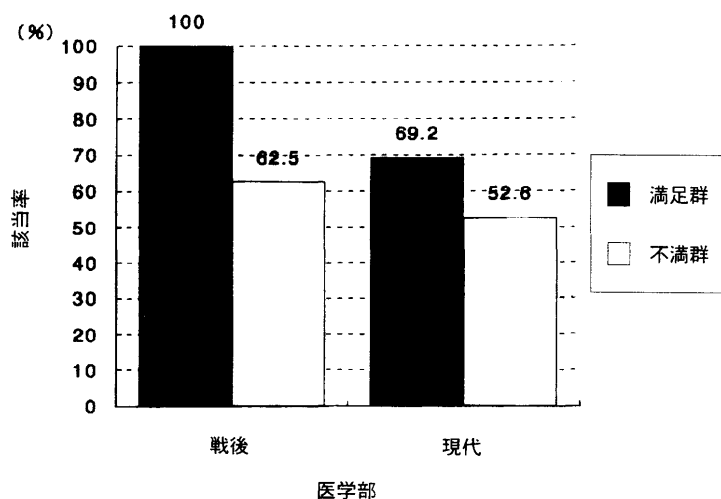
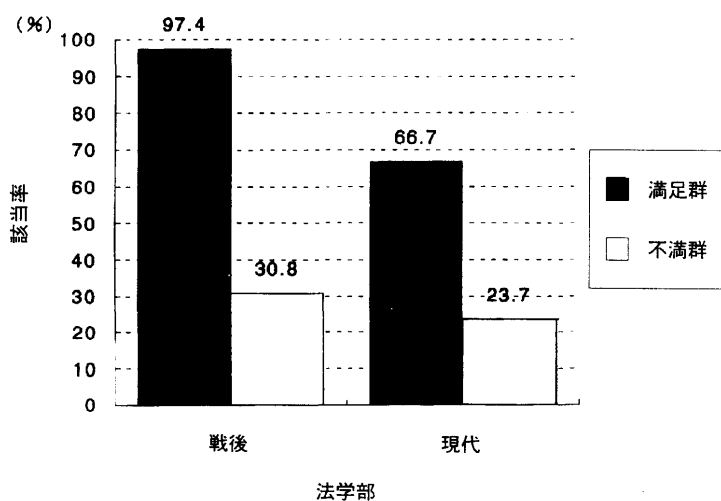
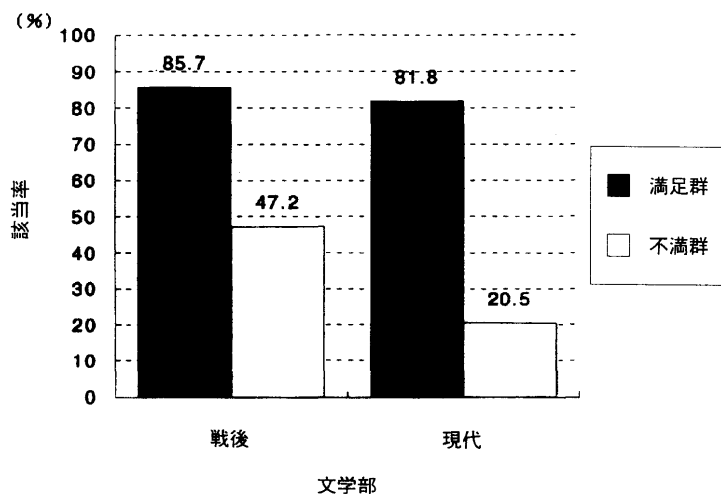


Figure109 将来役に立つ（自然）

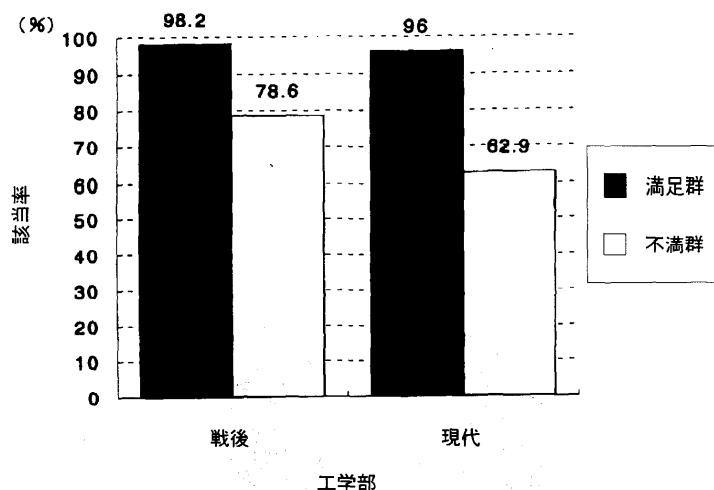


Figure109 将来役に立つ（自然）（続き）

専門講義では、戦後、現代の文学部においてのみ差がみられた。（＜戦後＞文学部（満足群95.2％－不満群38.5％）、＜現代＞文学部（満足群96.9％－不満群61.5％）。重要項目は、＜戦後＞法学部（満足群99.3％－不満群87.5％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群100.0％－不満群89.5％）、＜現代＞法学部（満足群95.6％－不満群90.0％）、＜現代＞医学部（満足群100.0％－不満群73.3％）、＜現代＞工学部（満足群96.5％－不満群84.0％）でみられた。

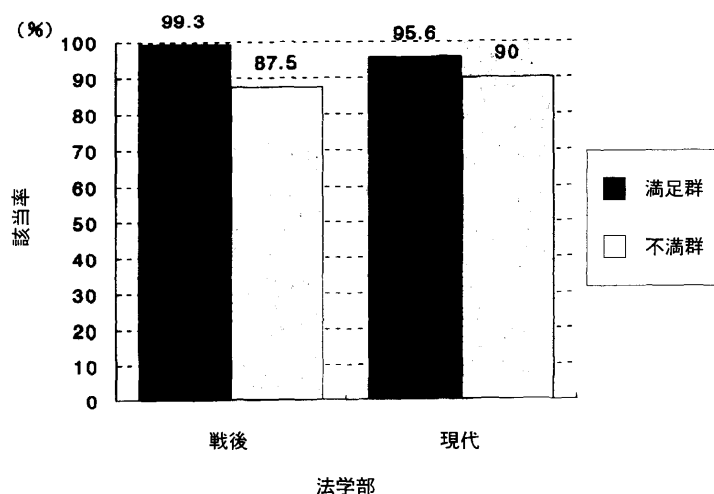
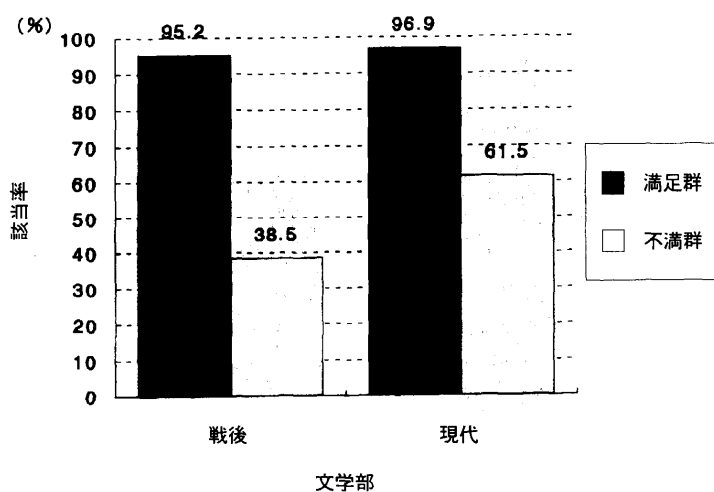


Figure110 将来役に立つ（専門講義）

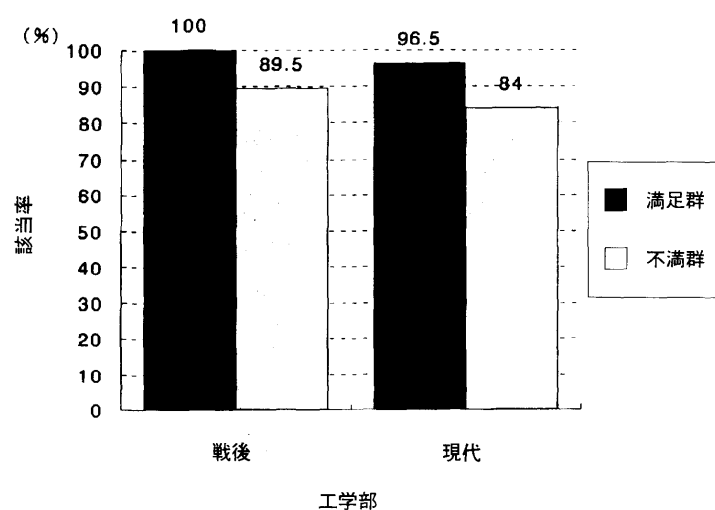
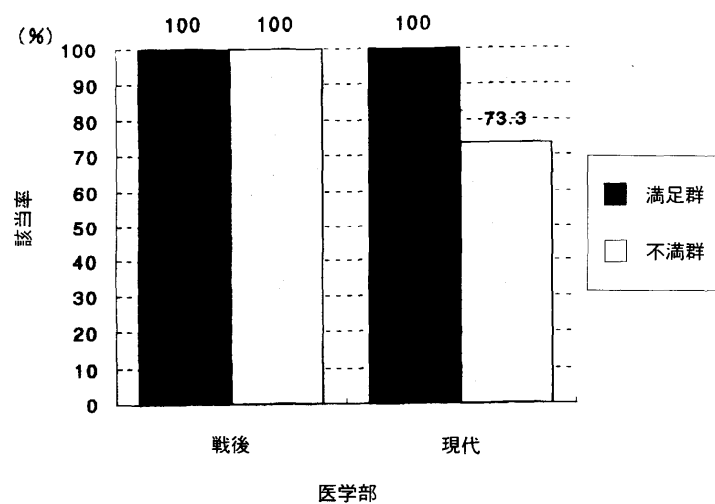


Figure110 将来役に立つ（専門講義）（続き）

専門演習では、戦後、現代の法学部においてのみ差がみられた（＜戦後＞法学部（満足群97.9％－不満群55.6％）、＜現代＞法学部（満足群92.4％－不満群61.5％））。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群99.4％－不満群81.3％）、＜現代＞工学部（満足群96.6％－不満群75.0％）でみられた。

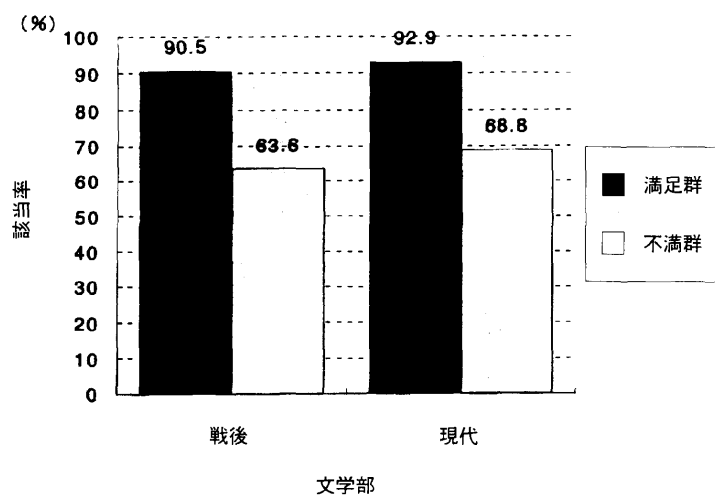


Figure111 将来役に立つ（専門演習）

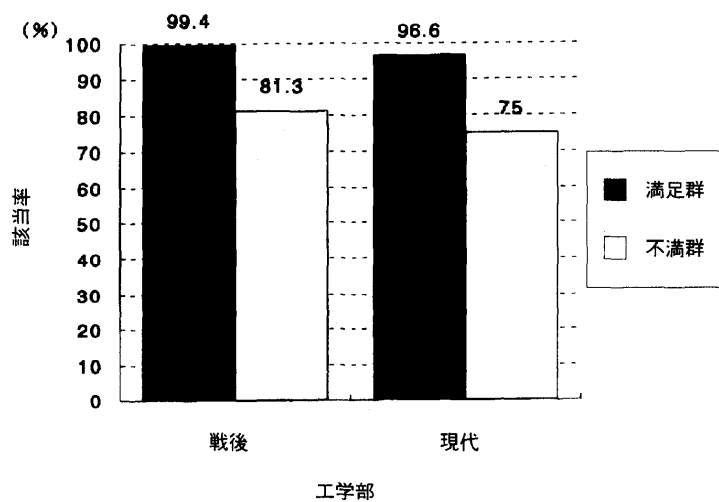
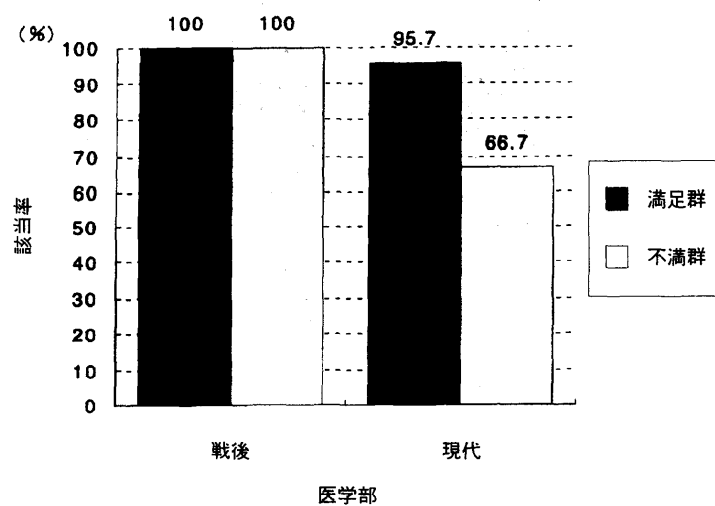
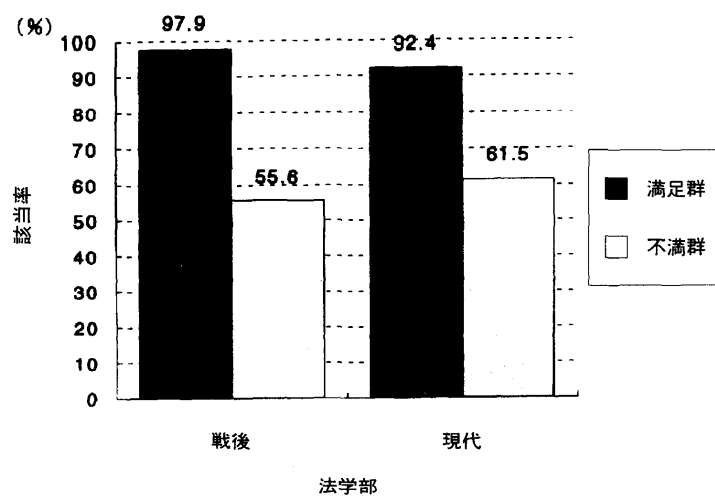


Figure111 将来役に立つ（専門演習）（続き）

専門実験では、＜現代＞工学部（満足群96.5％－不満群54.2％）においてのみ差がみられた。重要項目は、＜戦後＞医学部（満足群97.9％－不満群100.0％）、＜戦後＞工学部（満足群98.7％－不満群78.9％）でみられた。

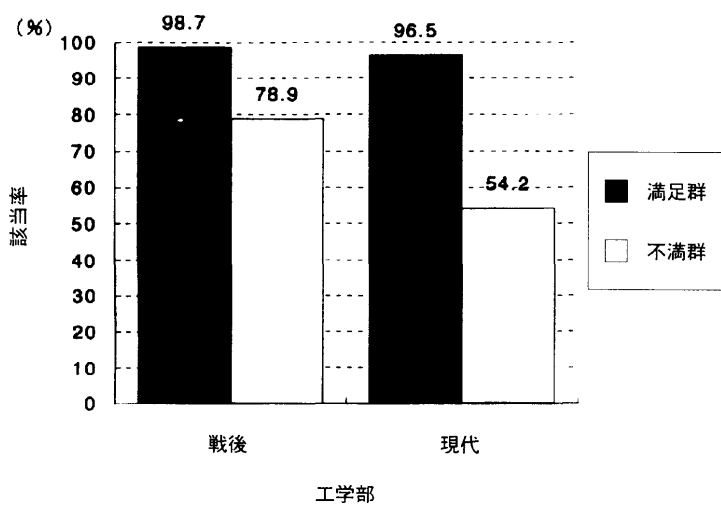
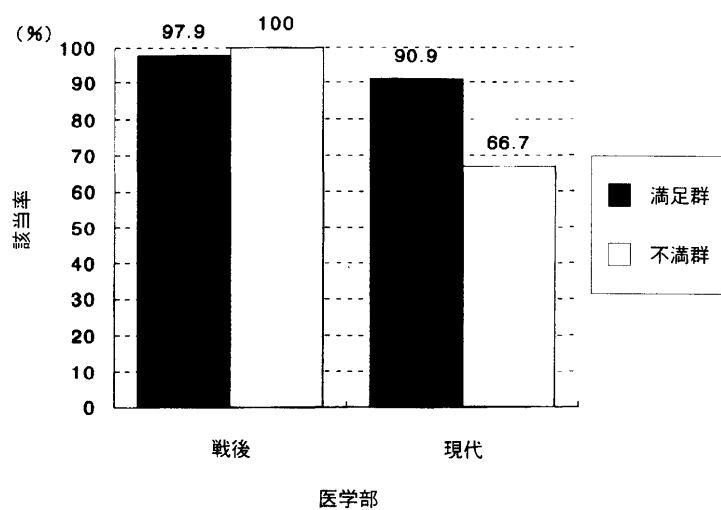


Figure112 将来に役に立つ（専門実験）

次のような授業を振り返って、授業を受けた結果、自分のあり方を振り返ったり考えるきっかけになったりした授業はありましたか。
→自分のあり方を振り返るきっかけになった

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業
- () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () 一般教養課目（人文・社会系）
- () 一般教養課目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
- () 専門科目の演習
- () 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった
- (3) いくつかあった
- (2) 少なくとも1個はあった
- (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率を持つことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後ですべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群72.2%－不満群11.1%）、＜戦後＞法学部（満足群77.4%－不満群16.9%）、＜戦後＞医学部（満足群78.6%－不満群0.0%）、＜戦後＞工学部（満足群61.0%－不満群24.3%）。現代では、＜現代＞文学部（満足群66.7%－不満群12.2%）、＜現代＞医学部（満足群42.9%－不満群8.7%）で差がみられた。文学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

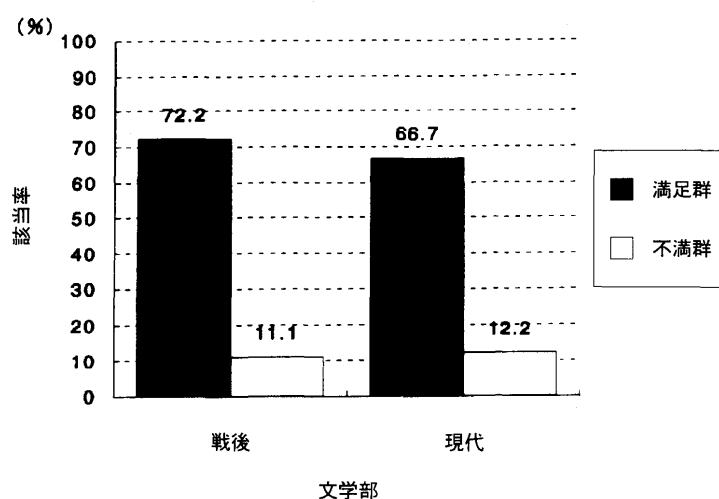


Figure113 自分のあり方を振り返るきっかけになった（英語）

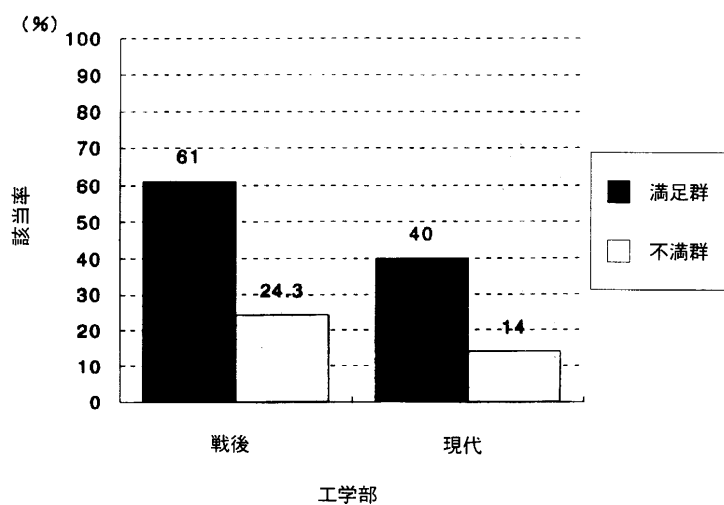
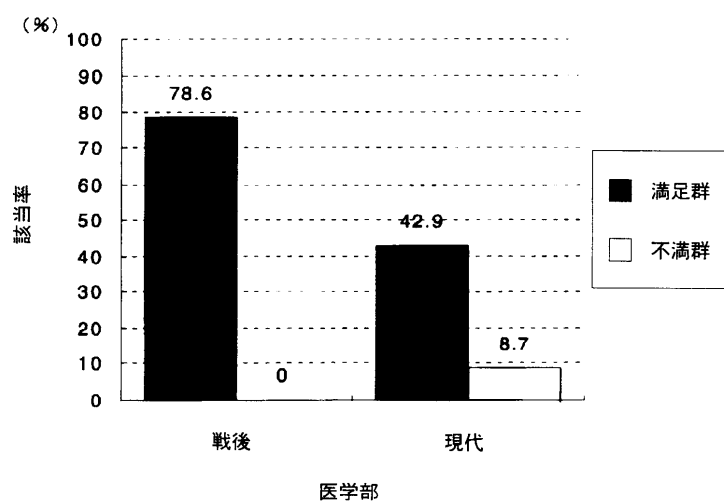
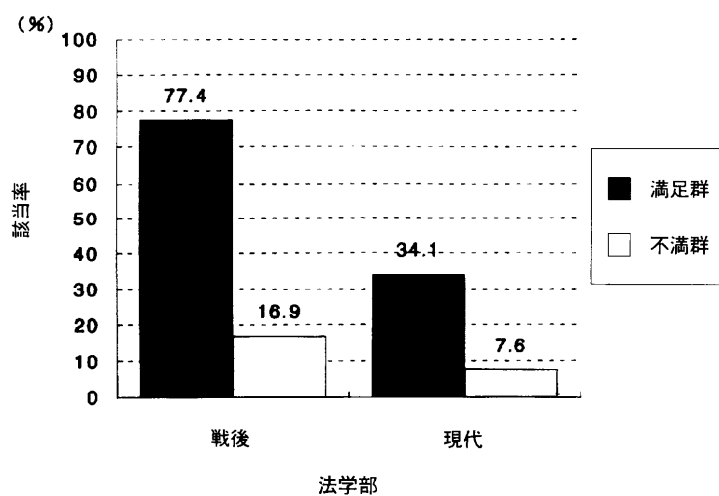


Figure113 自分のあり方を振り返るきっかけになった（英語）（続き）

英語以外では、＜戦後＞法学部（満足群77.8％－不満群17.3％）、＜戦後＞医学部（満足群78.9％－不満群40.0％）、＜戦後＞工学部（満足群61.5％－不満群31.3％）、＜現代＞法学部（満足群45.8％－不満群15.1％）で差がみられた。現代の医学部で差がみられないのは、現代にかけて満足群の該当率が減少したからである（78.9→42.9）。法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

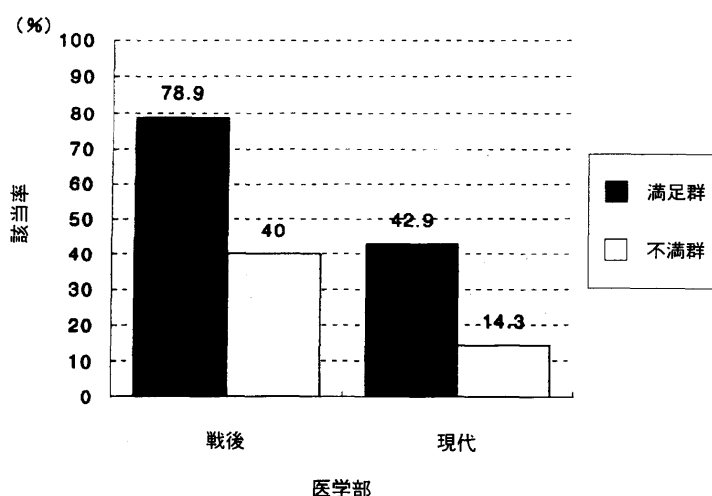
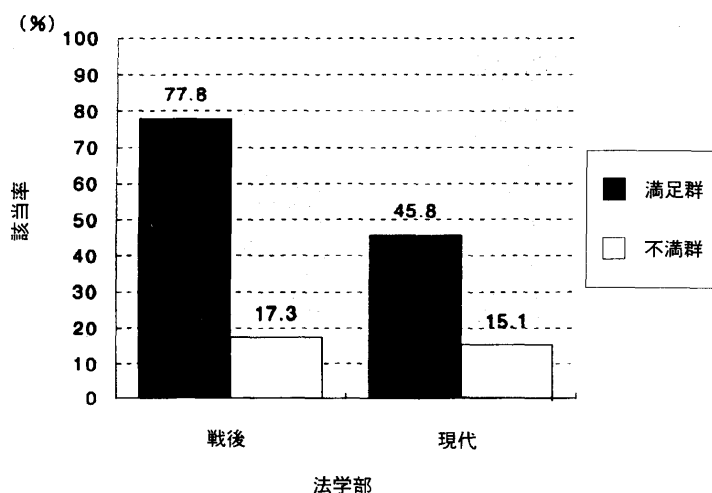
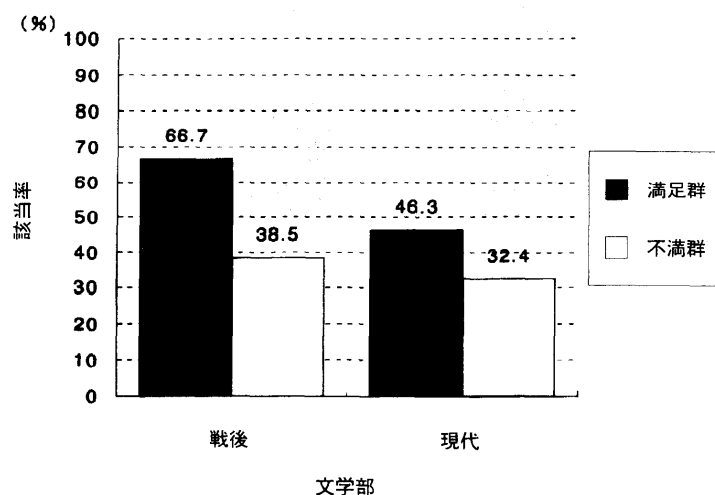


Figure114 自分のあり方を振り返るきっかけになった（英語以外）

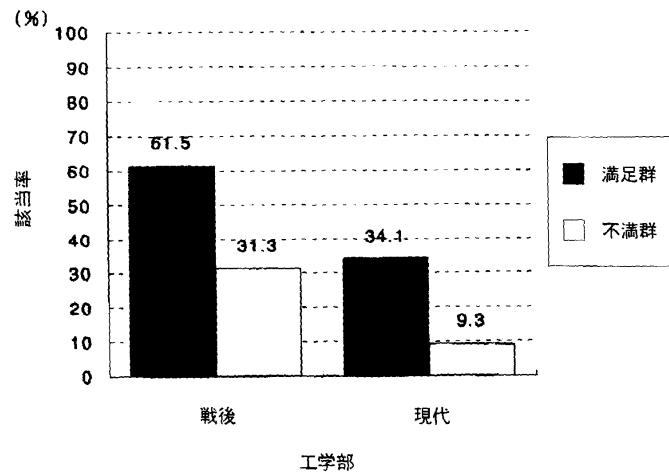


Figure114 自分のあり方を振り返るきっかけになった (英語以外) (続き)

人文社会では、戦後、現代を問わず、すべての学部において差がみられた (<戦後>文学部 (満足群92.0% - 不満群60.0%)、<戦後>法学部 (満足群89.2% - 不満群39.6%)、<戦後>医学部 (満足群81.8% - 不満群33.3%)、<戦後>工学部 (満足群82.6% - 不満群43.3%)、<現代>文学部 (満足群86.8% - 不満群42.9%)、<現代>法学部 (満足群81.1% - 不満群25.6%)、<現代>医学部 (満足群53.3% - 不満群18.8%)、<現代>工学部 (満足群79.0% - 不満群24.6%))。重要項目は、全くみられなかった。

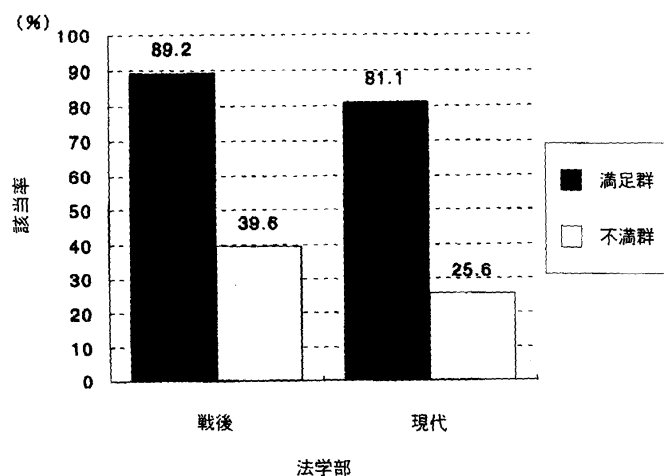
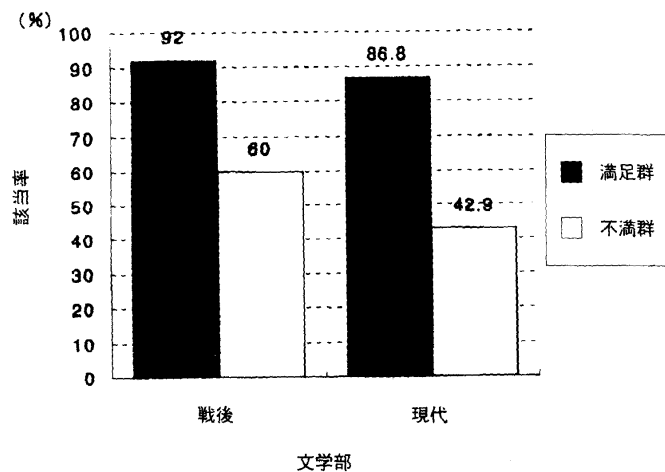


Figure115 自分のあり方を振り返るきっかけになった (人文社会)

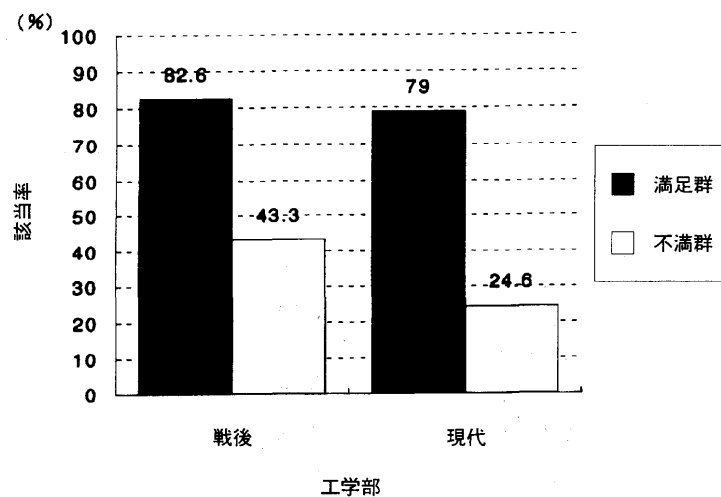
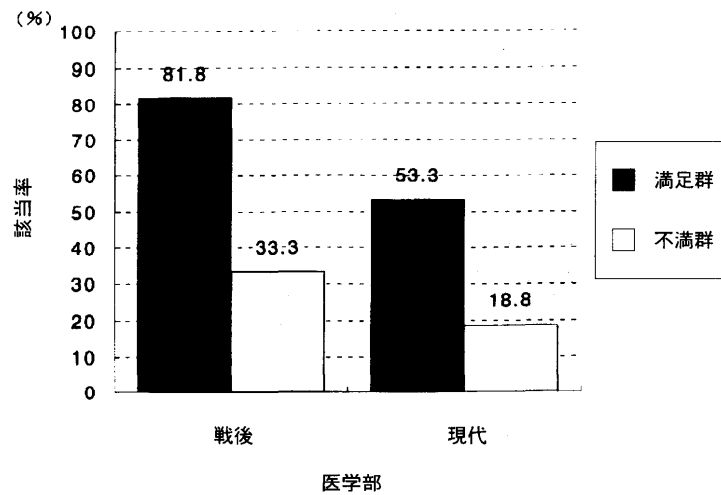


Figure115 自分のあり方を振り返るきっかけになった (人文社会) (続き)

自然では、＜戦後＞文学部（満足群73.9％－不満群34.3％）、＜戦後＞法学部（満足群83.8％－不満群25.8％）、＜戦後＞医学部（満足群90.9％－不満群37.5％）、＜現代＞文学部（満足群60.6％－不満群13.3％）、＜現代＞医学部（満足群46.2％－不満群0.0％）、＜現代＞工学部（満足群54.0％－不満群22.9％）で差がみられた。現代の法学部で差がみられないのは、現代にかけて満足群の該当率が減少したからである（83.8→42.6％）。文学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

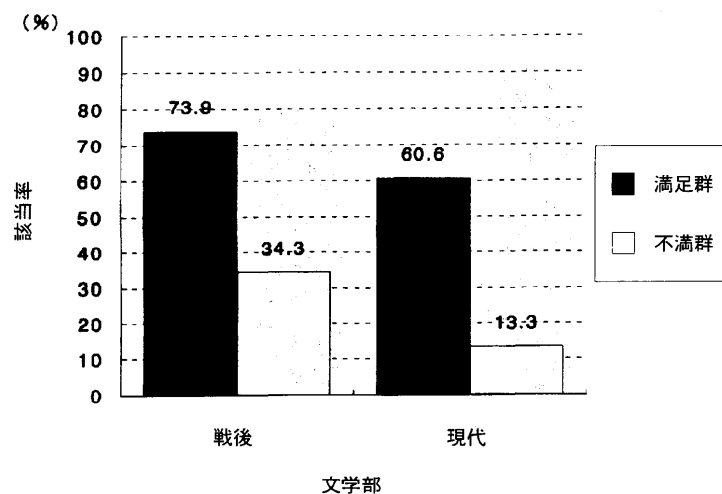


Figure116 自分のあり方を振り返るきっかけになった (自然)

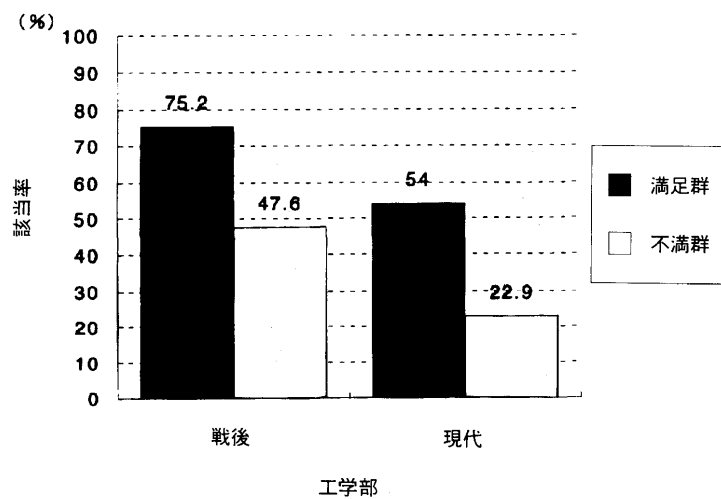
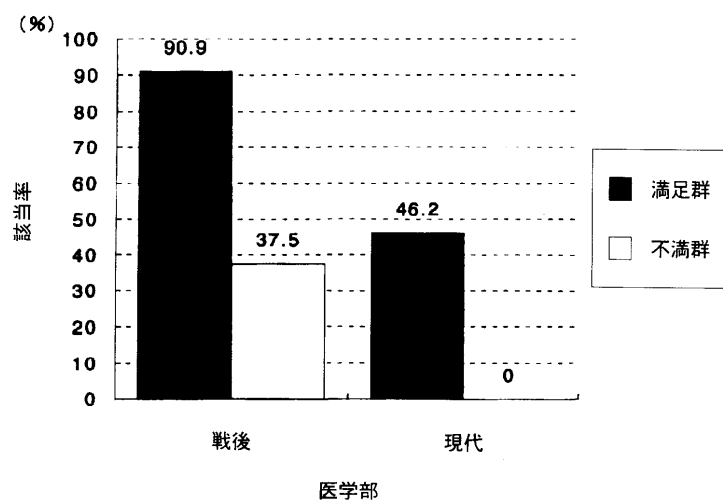
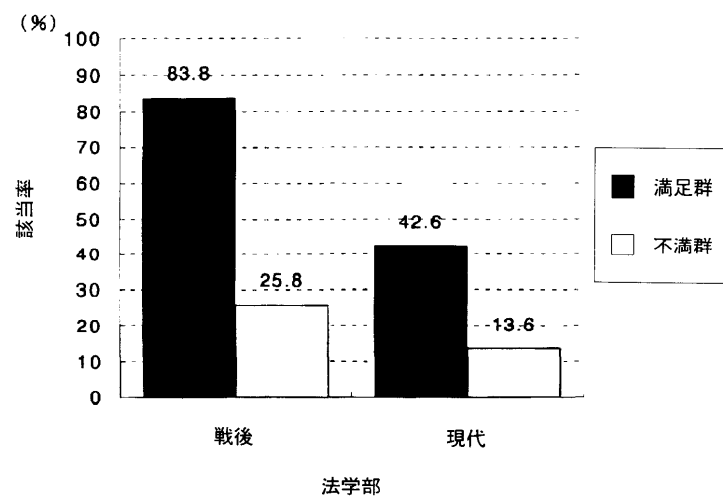


Figure116 自分のあり方を振り返るきっかけになった（自然）（続き）

専門講義では、戦後、現代を問わず、文学部と医学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群86.2％－不満群53.8％）、＜戦後＞医学部（満足群83.6％－不満群40.0％）、＜現代＞文学部（満足群83.3％－不満群42.3％）、＜現代＞医学部（満足群62.5％－不満群26.7％））。重要項目は、＜戦後＞法学部（満足群91.5％－不満群81.3％）でのみみられた。

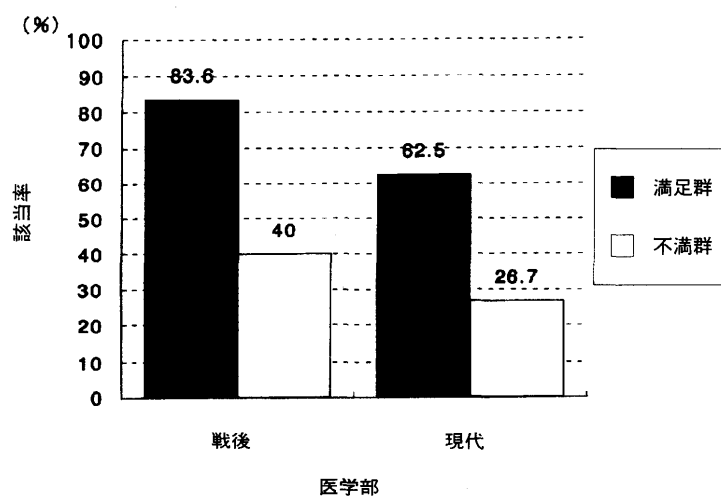
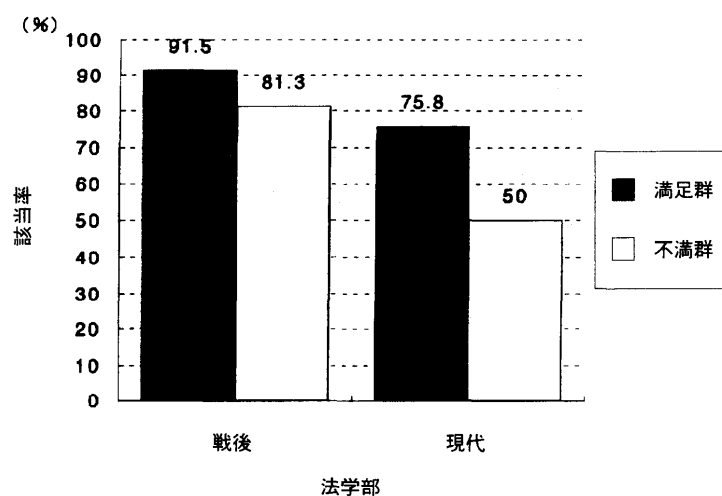
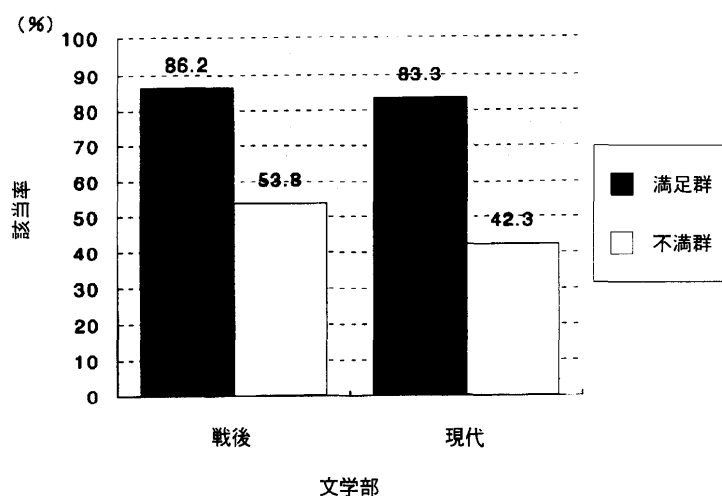


Figure117 自分のあり方を振り返るきっかけになった（専門講義）

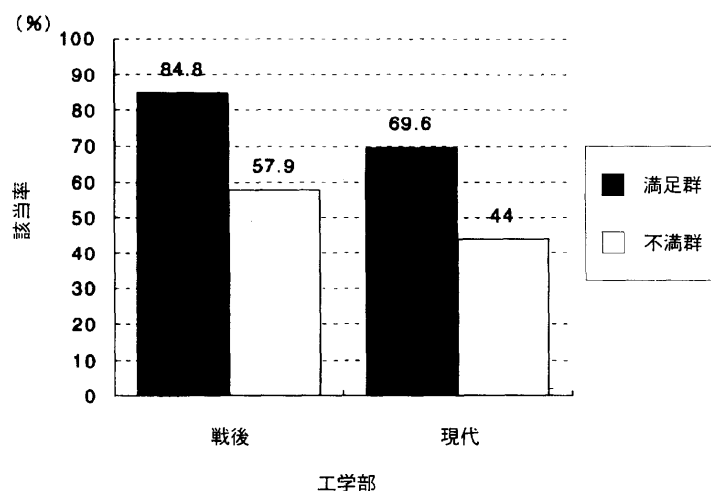


Figure117 自分のあり方を振り返るきっかけになった（専門講義）（続き）

専門演習では、＜戦後＞文学部（満足群84.6％－不満群54.5％）、＜戦後＞法学部（満足群91.6％－不満群55.6％）、＜現代＞法学部（満足群72.3％－不満群28.6％）、＜現代＞医学部（満足群56.5％－不満群11.1％）、＜現代＞工学部（満足群63.6％－不満群25.0％）で差がみられた。戦後の医学部、工学部で差がみられなかった原因は、不満群の該当率が高かったからであり、現代にかけて不満群の該当率が減少し（医学部66.7→11.1％；工学部56.3→25.0％）、差がみられたようである。法学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

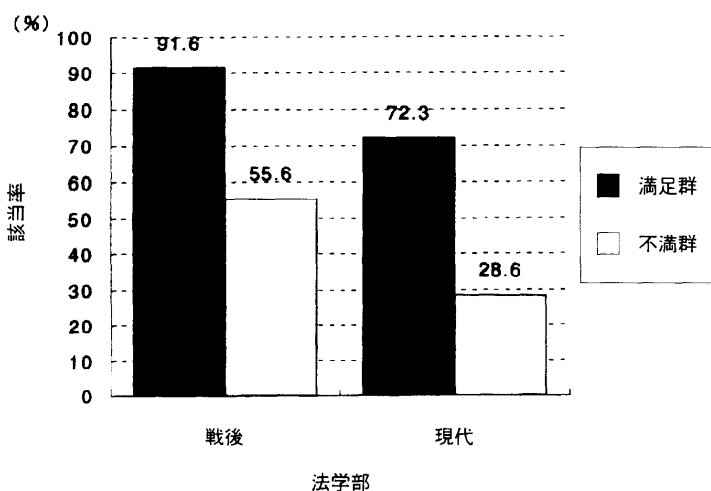
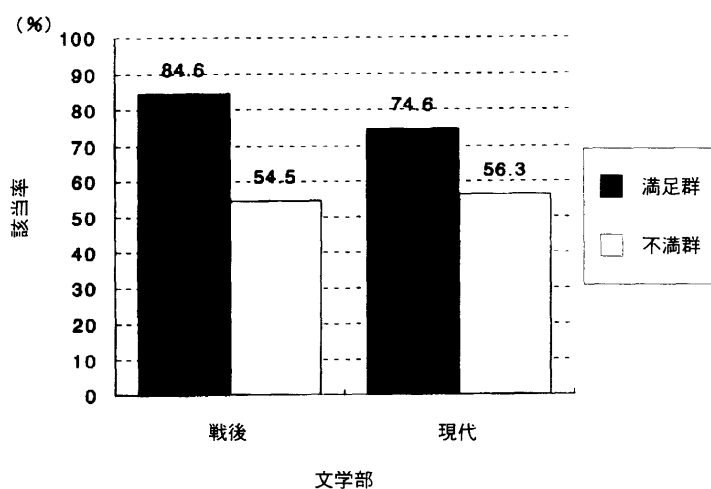


Figure118 自分のあり方を振り返るきっかけになった（専門演習）

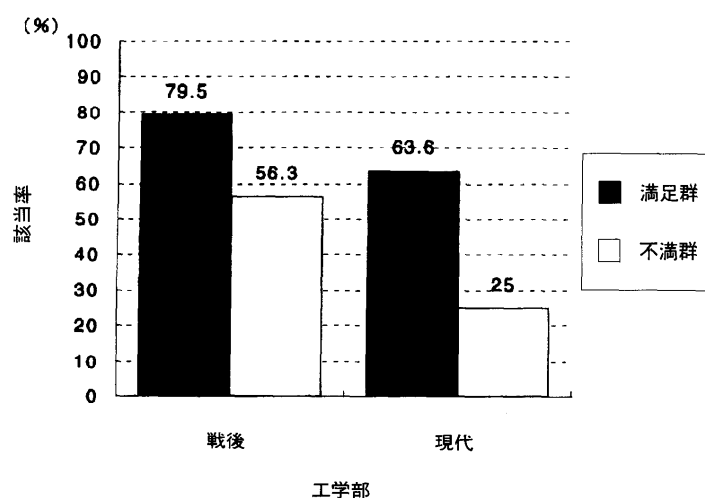
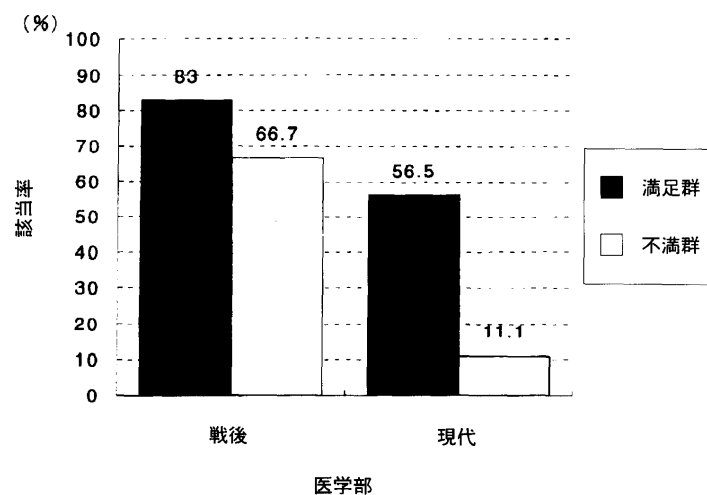


Figure118 自分のあり方を振り返るきっかけになった (専門演習) (続き)

専門実験では、＜戦後＞医学部（満足群83.3％－不満群0.0％）、＜戦後＞工学部（満足群75.9％－不満群33.3％）、＜現代＞医学部（満足群50.0％－不満群8.3％）で差がみられた。医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

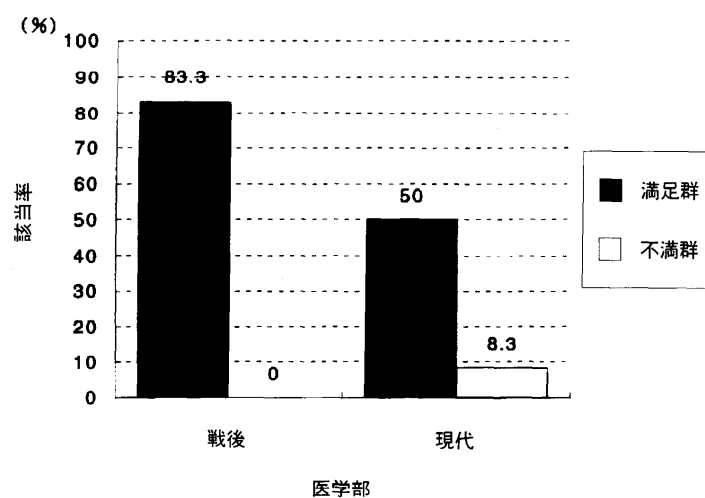


Figure119 自分のあり方を振り返るきっかけになった (専門実験)

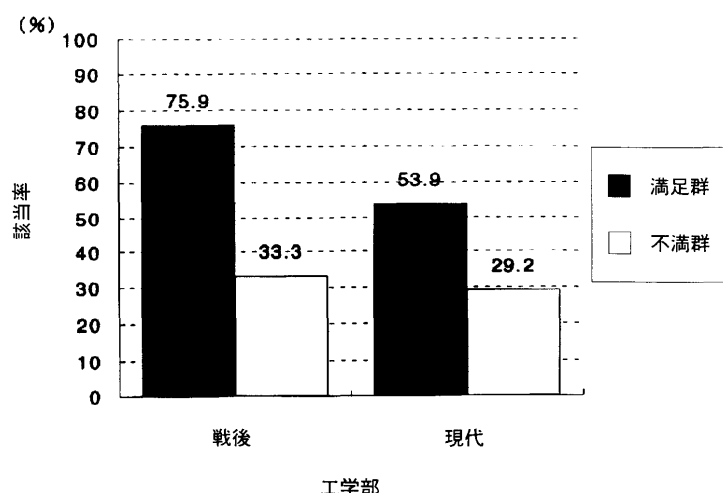


Figure119 自分のあり方を振り返るきっかけになった（専門実験）（続き）

次のような授業を振り返って、学問や研究の世界のおもしろさに触れたと思えるような授業はありましたか。
→研究のおもしろさにふれた

《一般教養課程》

- () 一般教養課程での英語の授業 () 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
() 一般教養科目（人文・社会系）
() 一般教養科目（自然系）

《専門課程》

- () 専門科目の講義
() 専門科目の演習
() 専門科目の実験（履修した方のみ）

- (4) すべての授業がそうだった (3) いくつかあった
(2) 少なくとも1個はあった (1) まったくなかった

《結果と考察》

検討をおこなうにあたって、前述通り“すべての授業がそうだった”“いくつかあった”“少なくとも1個はあった”を統合して該当率とした。また30%以上の該当率をもって“差がみられる”とし、70%以上の該当率をもつことによって“重要項目”としたことは前述した通りである。

英語では、戦後のすべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群73.0%－不満群7.4%）、＜戦後＞法学部（満足群75.4%－不満群25.0%）、＜戦後＞医学部（満足群71.4%－不満群0.0%）、＜戦後＞工学部（満足群63.8%－不満群23.5%））。現代では、＜現代＞文学部（満足群72.0%－不満群24.5%）、＜現代＞法学部（満足群67.5%－不満群15.4%）、＜現代＞医学部（満足群61.5%－不満群0.0%）で差がみられた。文学部、法学部、医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

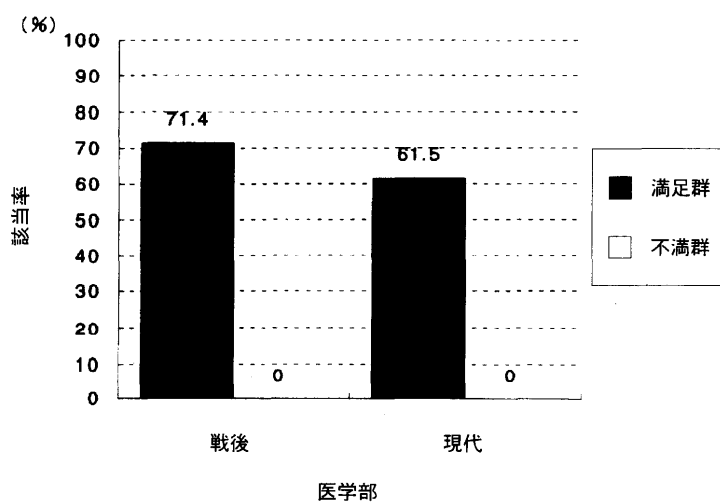
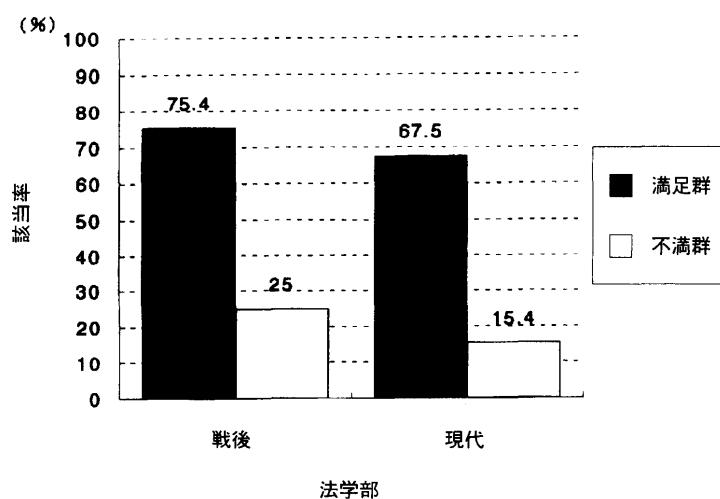
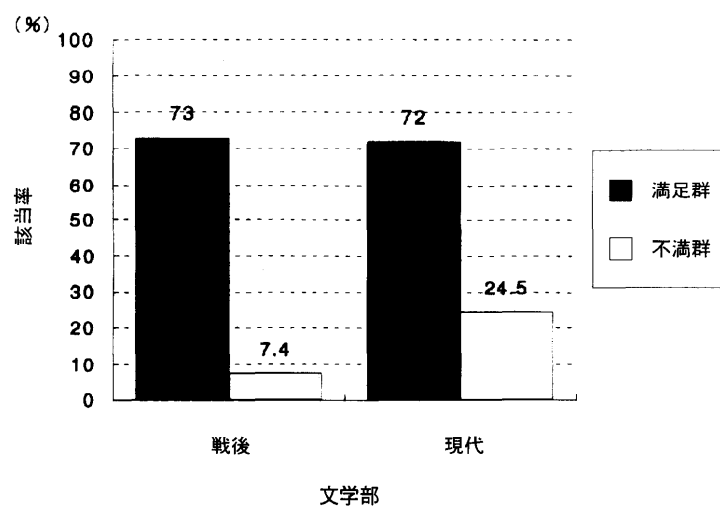


Figure120 研究のおもしろさにふれた (英語)

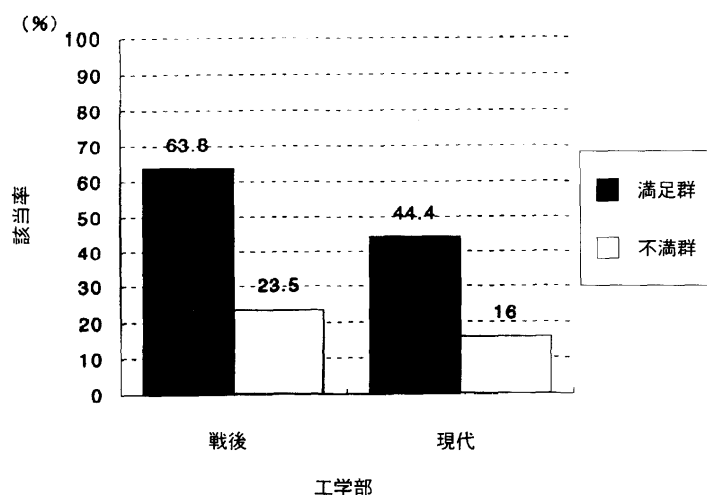


Figure120 研究のおもしろさにふれた (英語) (続き)

英語以外では、文学部を除いて、戦後、現代を問わずすべての学部において差がみられた（＜戦後＞法学部（満足群83.3％－不満群24.5％）、＜戦後＞医学部（満足群63.2％－不満群20.0％）、＜戦後＞工学部（満足群61.5％－不満群27.3％）、＜現代＞法学部（満足群62.0％－不満群13.5％）、＜現代＞医学部（満足群71.4％－不満群20.0％）、＜現代＞工学部（満足群52.4％－不満群13.5％））。法学部、医学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、全くみられなかった。

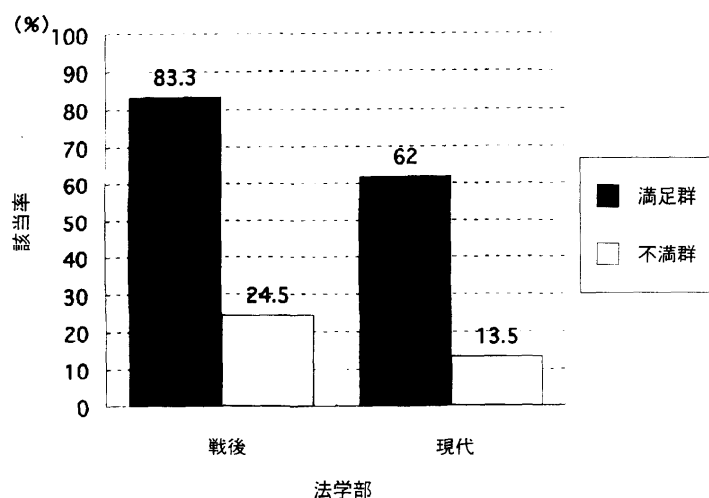
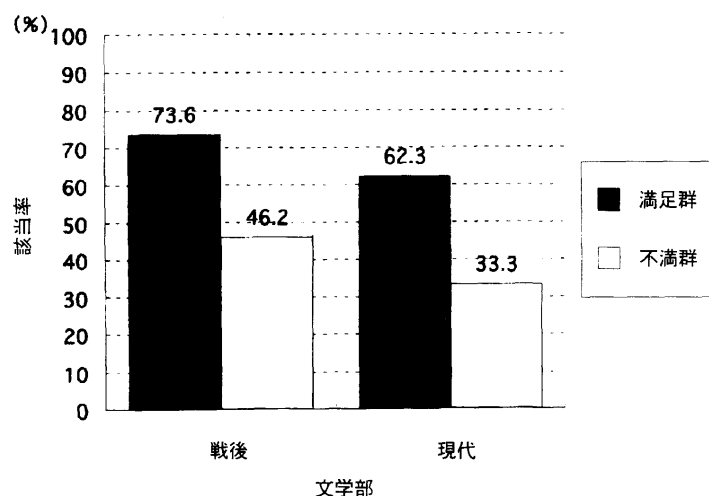


Figure121 研究のおもしろさにふれた (英語以外)

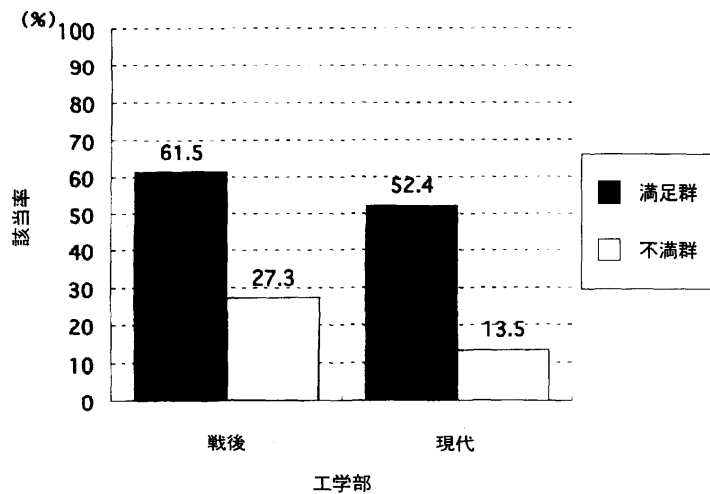
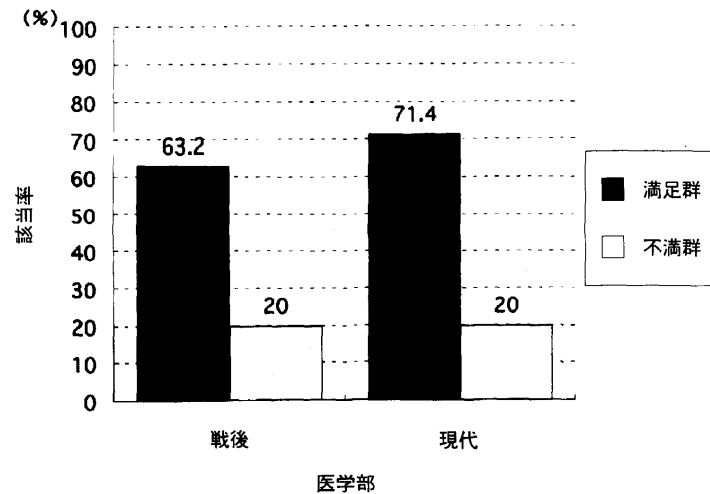


Figure121 研究のおもしろさにふれた（英語以外）（続き）

人文社会では、戦後で文学部を除くすべての学部で差がみられた（＜戦後＞法学部（満足群94.2％－不満群48.9％）、＜戦後＞医学部（満足群63.6％－不満群33.3％）、＜戦後＞工学部（満足群84.6％－不満群48.3％））。現代では、すべての学部で差がみられた（＜現代＞文学部（満足群98.1％－不満群57.1％）、＜現代＞法学部（満足群95.9％－不満群50.0％）、＜現代＞医学部（満足群86.7％－不満群26.7％）、＜現代＞工学部（満足群91.9％－不満群39.3％））。法学部、医学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞文学部（満足群92.3％－不満群73.3％）でみられた。

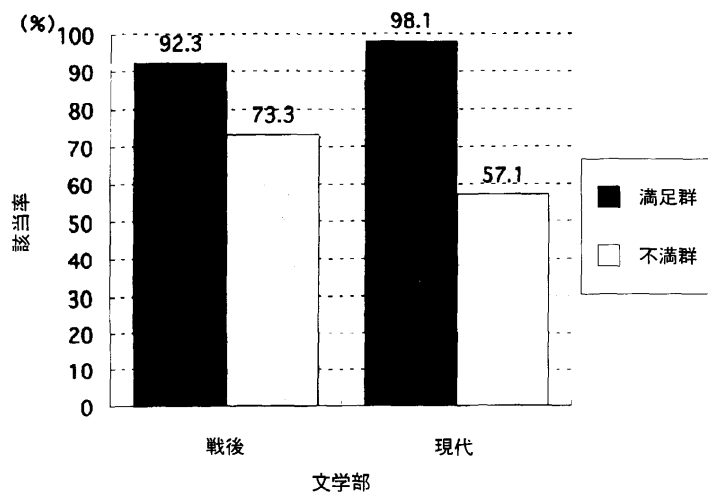


Figure122 研究のおもしろさにふれた（人文社会）

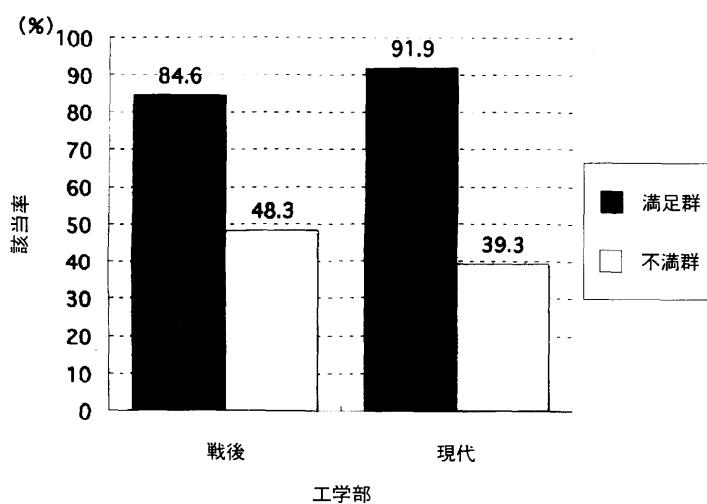
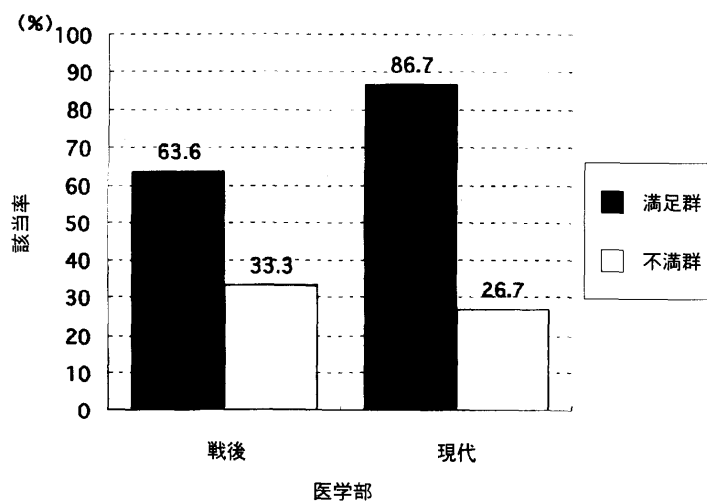
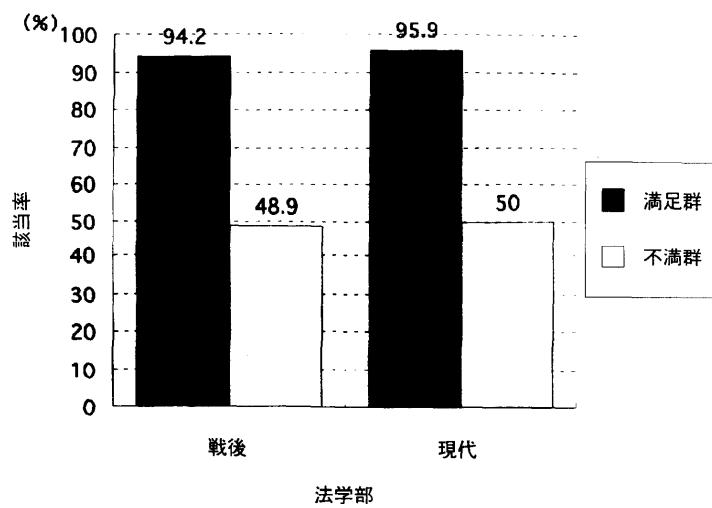


Figure122 研究のおもしろさにふれた（人文社会）（続き）

自然では、戦後、現代を問わず、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群79.2％－不満群48.6％）、＜戦後＞法学部（満足群89.7％－不満群33.8％）、＜戦後＞医学部（満足群81.8％－不満群37.5％）、＜戦後＞工学部（満足群87.6％－不満群45.2％）、＜現代＞文学部（満足群93.9％－不満群31.1％）、＜現代＞法学部（満足群93.6％－不満群27.6％）、＜現代＞医学部（満足群92.3％－不満群38.9％）、＜現代＞工学部（満足群82.0％－不満群34.8％））。重要項目は、全くみられなかった。

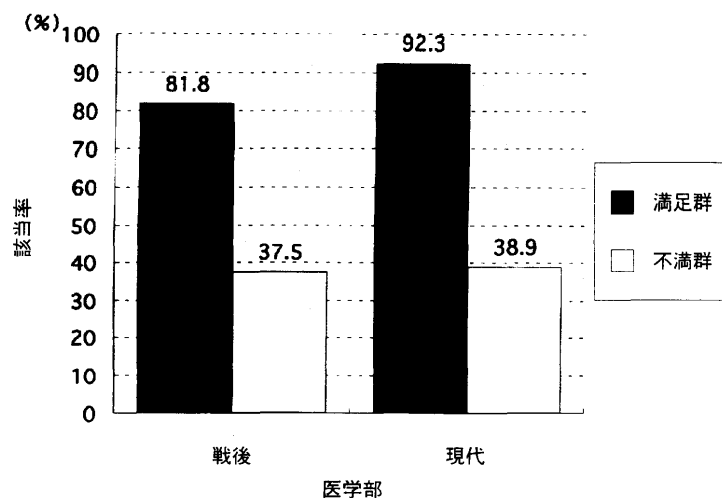
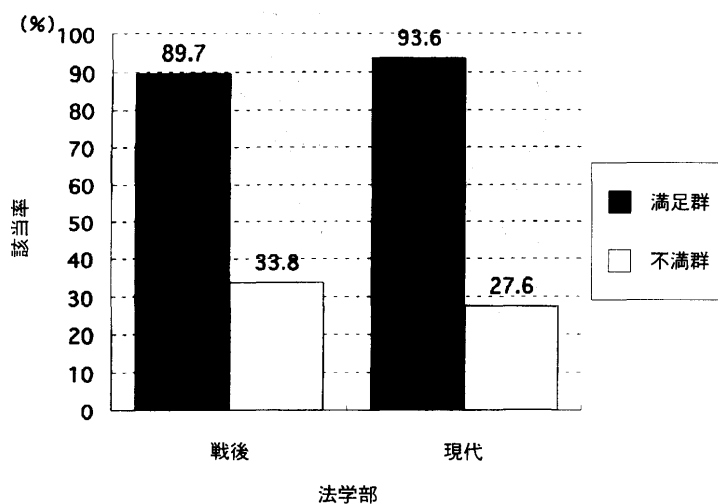
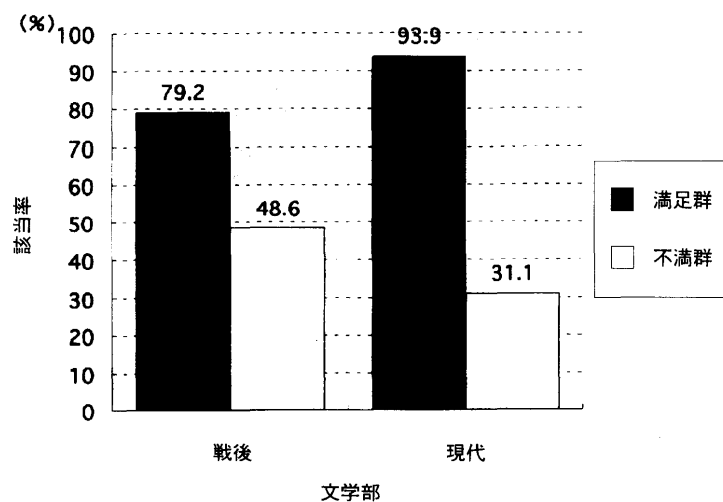


Figure123 研究のおもしろさにふれた（自然）

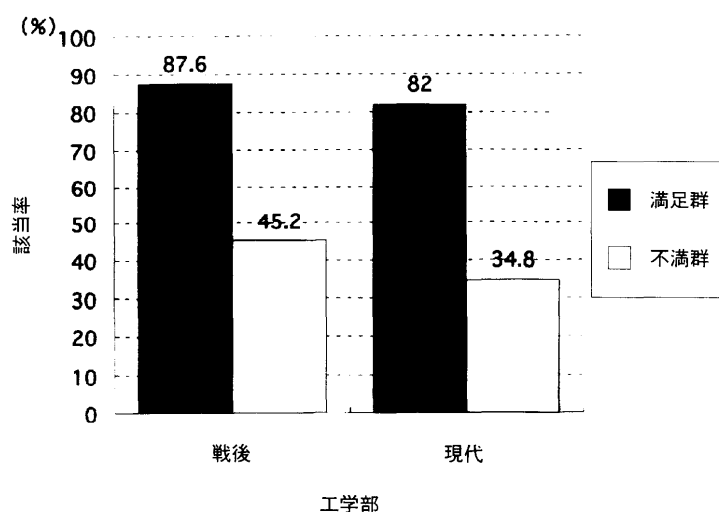


Figure123 研究のおもしろさにふれた（自然）（続き）

専門講義では、＜戦後＞文学部（満足群100.0％－不満群46.2％）、＜戦後＞医学部（満足群100.0％－不満群60.0％）、＜戦後＞工学部（満足群96.4％－不満群63.2％）、＜現代＞法学部（満足群98.9％－不満群66.7％）、＜現代＞医学部（満足群86.7％－不満群53.3％）で差がみられた。現代の文学部で差がみられない原因は、現代にかけて不満群の該当率が増加したからである（46.2→77.8％）。医学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜戦後＞法学部（満足群98.6％－不満群81.3％）、＜現代＞文学部（満足群95.4％－不満群77.8％）、＜現代＞工学部（満足群94.8％－不満群72.0％）でみられた。

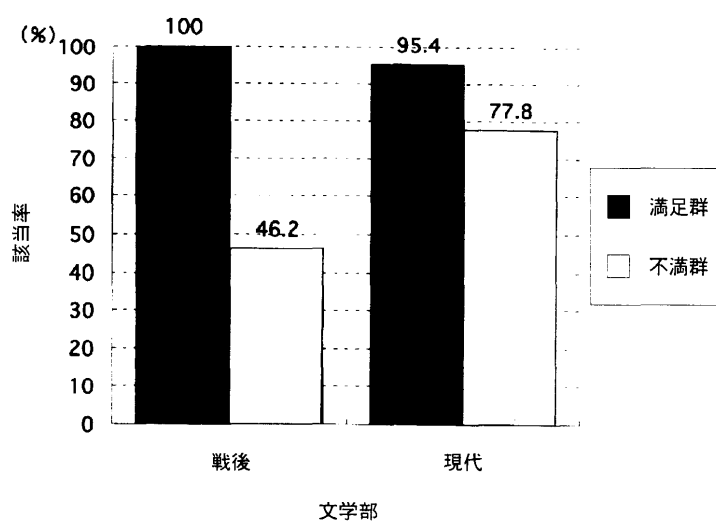


Figure124 研究のおもしろさにふれた（専門講義）

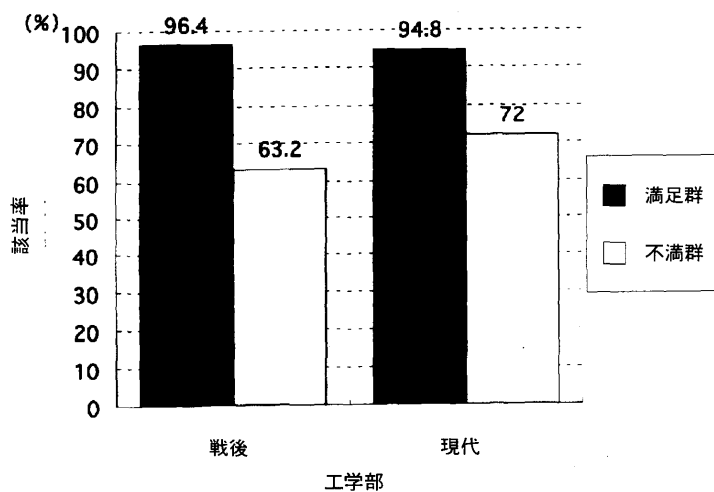
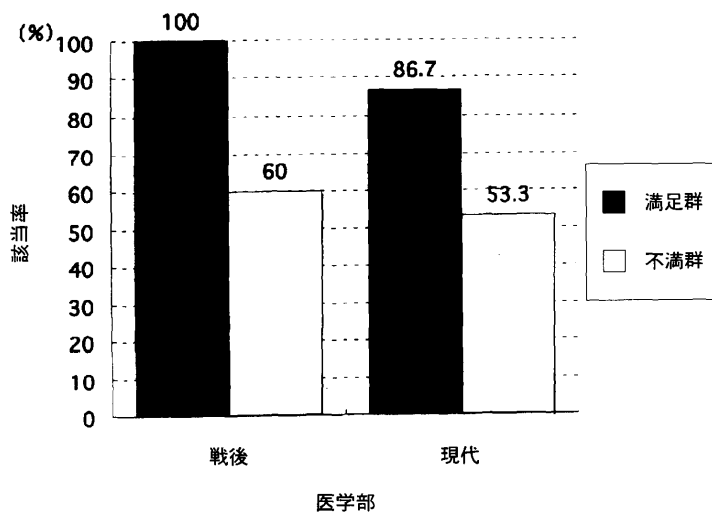
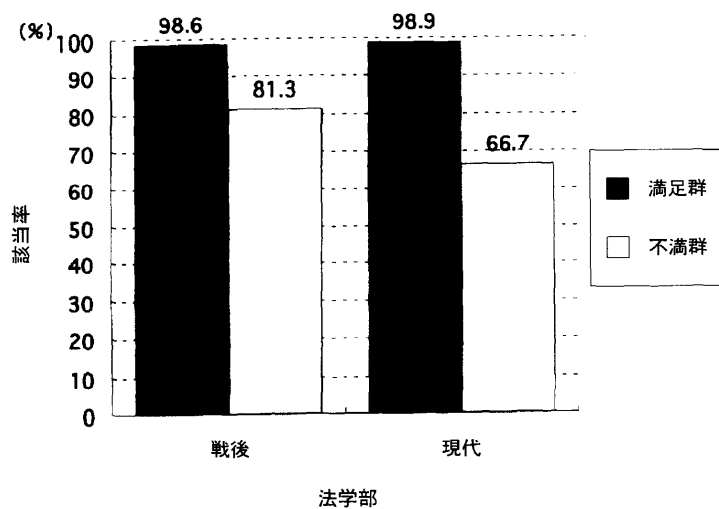


Figure124 研究のおもしろさにふれた(専門講義)(続き)

専門演習では、戦後のすべての学部において差がみられた（＜戦後＞文学部（満足群95.5％－不満群54.5％）、＜戦後＞法学部（満足群95.8％－不満群52.0％）、＜戦後＞医学部（満足群97.9％－不満群66.7％）、＜戦後＞工学部（満足群91.1％－不満群50.0％））。現代では、＜現代＞医学部（満足群90.9％－不満群33.3％）、＜現代＞工学部（満足群92.4％－不満群37.5％）で差がみられた。医学部、工学部は、戦後から現代にかけて同じ構造である。重要項目は、＜現代＞文学部（満足群94.3％－不満群70.6％）のみでみられた。

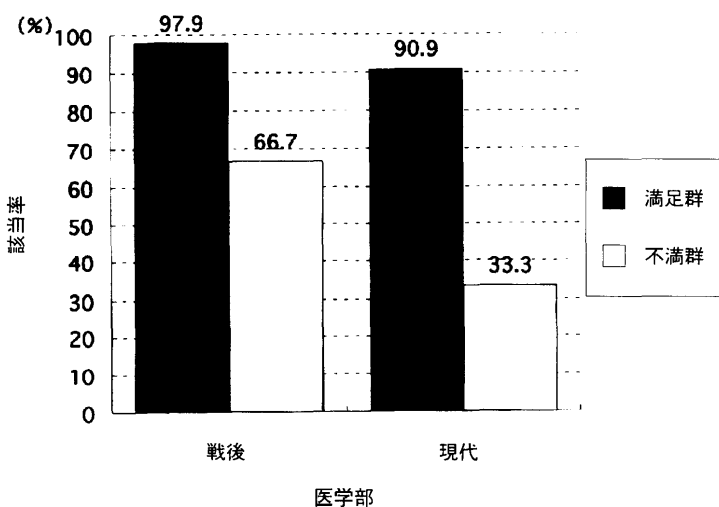
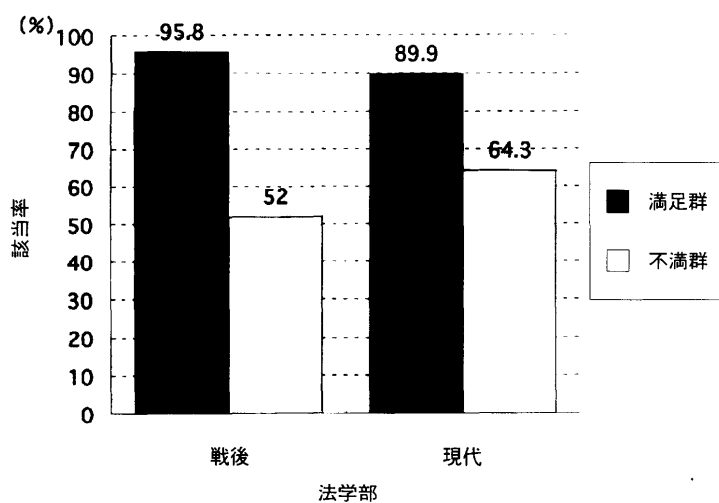
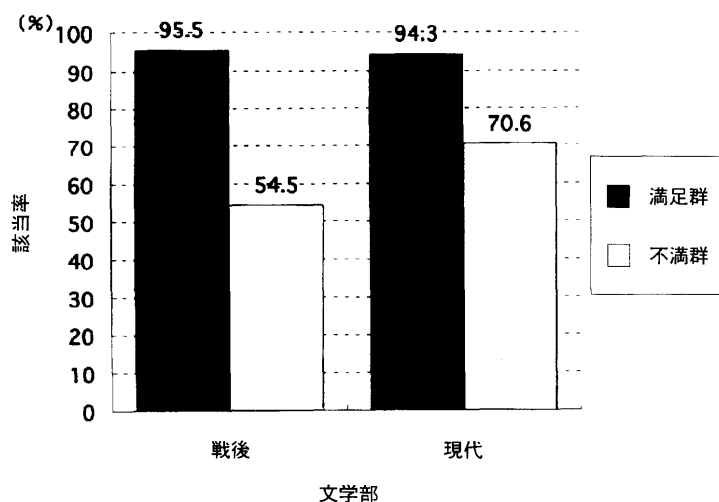


Figure125 研究のおもしろさにふれた（専門演習）

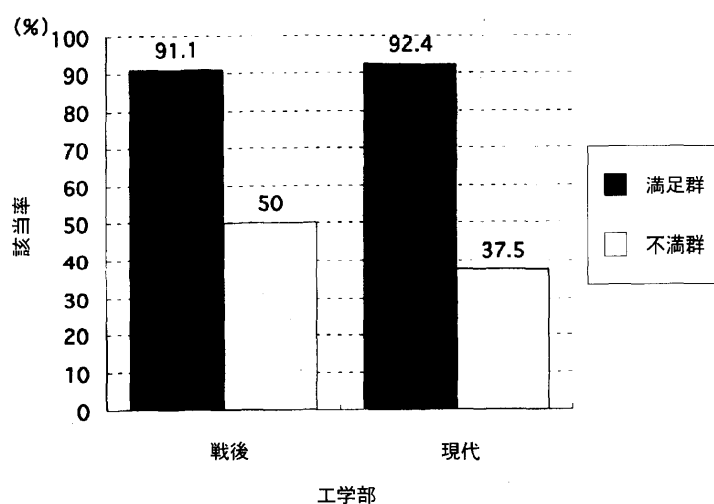


Figure125 研究のおもしろさにふれた（専門演習）（続き）

専門実験では、戦後、現代を問わず、すべての学部において差がみられた（＜戦後＞医学部（満足群95.9％－不満群50.0％）、＜戦後＞工学部（満足群92.4％－不満群36.8％）、＜現代＞医学部（満足群95.2％－不満群25.0％）、＜現代＞工学部（満足群92.2％－不満群43.5％））。重要項目は、全くみられなかった。

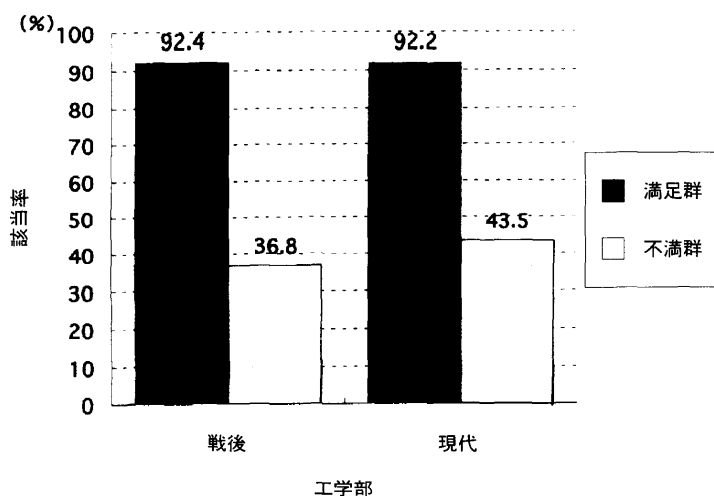
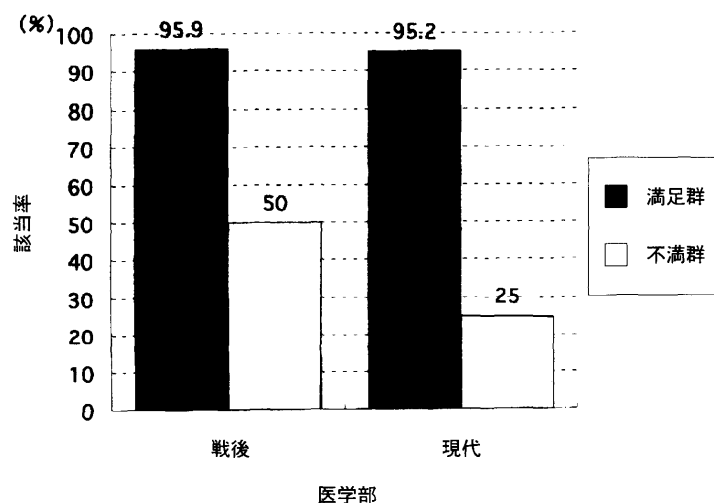


Figure126 研究のおもしろさにふれた（専門実験）

Table5 英語における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した	97.4 57.1		100.0				65.2	
真剣に授業を受けた	92.1 40.7	92.3 49.2	80.0	86.4 39.4	84.0 36.7	87.8 24.1	85.7 39.1	74.3 27.1
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった	43.2 7.4	42.9 3.3					46.2 13.0	
話合いを大事にした								
レポートにまとめることを重視した			7.1				46.2 13.0	
資料などの補助的手段が充実していた	3.1	1.5	0.0		44.0	47.5	50.0 9.1	
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった	86.5 11.1	95.2 38.3	92.9 20.0	87.7 40.6	95.8 53.1	90.2 40.3	100.0 21.7	83.3 46.2
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた	81.1 11.1	90.2 32.8	60.0	77.6 32.7	84.0 46.9	85.4 25.6	84.6 13.0	83.3 34.0
教育者として自覚をもってほしい		30.6 64.4				20.0 61.8	28.6 63.6	
講義を工夫して欲しい			64.3 100.0	62.1 93.3				
【学生への伝達的影響】								
興味や関心にあう	94.7 37.0	93.7 34.4	92.9 60.0	100.0 40.8	96.0 51.0	92.7 32.9	92.9 34.8	97.1 42.1
将来に役立つ	86.1 46.2	90.3 36.1	100.0 60.0	96.6 44.7	91.3 38.3	82.9 23.1	85.7 21.7	85.7 45.8
自分のあり方を振り返るきっかけになった	72.2 11.1	77.4 16.9	73.6 0.0	61.0 24.3	66.7 12.2	34.1	42.9 8.7	
研究のおもしろさにふれた	73.0 7.4	75.4 25.0	71.4 0.0	63.8 23.5	72.0 24.5	67.5 15.4	61.5 0.0	
満 足 群 (N=)	38	65	14	59	25	41	14	35
不満足群 (N=)	27	61	5	104	49	79	23	107

(注1) 上段は満足群の該当率(%), 下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

Table6 英語以外における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した								
真剣に授業を受けた	94.3 61.5	90.5 50.0	80.0 43.2	92.3 43.2	90.9 47.1	84.7 26.4	85.7 42.9	70.7 30.9
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった	49.0 7.7	43.8 5.7				59.2 7.7	50.0 15.0	
話し合いを大事にした		31.1 0.0				35.2 3.9		
レポートにまとめることを重視した								
資料などの補助的手段が充実していた		0.0				36.6		
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった	92.5 46.2	94.4 41.5	94.7 60.0	89.1 48.1		91.5 51.9	100.0 40.0	85.7 49.0
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた	96.2 53.8	93.1 47.2	100.0 60.0	85.9 42.9	85.2 44.1	83.1 32.7	78.6 20.0	81.0 34.4
教育者として自覚をもってほしい			40.0		42.6 72.7	19.7 58.8	14.3 70.0	35.7 70.1
講義を工夫して欲しい	60.8 100.0					64.3 98.1		
【学生への伝達的影響】								
興味や関心にあう		98.6 38.9	100.0 60.0	98.5 53.8	94.4 58.8	87.5 26.4	78.6 42.9	78.0 28.9
将来に役立つ		91.7 29.6	94.7 60.0	93.8 53.8		73.2 26.4	85.7 28.6	70.7 24.7
自分のあり方を振り返るきっかけになった		77.3 17.3	78.9 40.0	61.5 31.3		45.3 15.1	42.9	
研究のおもしろさにふれた		83.3 24.	63.2 20.0	61.5 27.3		62.0 13.5	71.4 20.0	52.4 13.5
満 足 群 (N=)	53	74	19	65	55	72	14	41
不満足群 (N=)	13	54	5	81	34	53	21	97

(注1) 上段は満足群の該当率(%), 下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

Table7 人文社会における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した	96.1 31.3	69.4	72.7 33.3	53.7	87.0 42.9	79.7 17.9	53.3 17.6	61.3 13.1
真剣に授業を受けた	88.2 25.0	83.9 40.3	54.5 0.0	66.7 21.7	88.9 14.3	63.5 10.3	66.7 11.8	56.5 8.2
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった	40.8 6.7		36.4 0.0				40.0 0.0	
話合いを大事にした								
レポートにまとめることを重視した	54.0 20.0		45.5 0.0		73.6 39.3		43.7	
資料などの補助的手段が充実していた	17.6 6.7	5.7	10.0	13.9	60.4 39.3	53.1 15.4	64.3 6.3	60.3 26.2
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった		97.7 56.3	81.8 33.3	93.3 51.7	98.1 51.9	94.7 57.9	93.3 53.3	96.8 55.7
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた		93.0 62.5	90.9 33.3		92.5 53.6	93.2 60.5		93.5 54.1
教育者として自覚をもってほしい		39.5 73.9	27.3 66.7				35.7 87.5	
講義を工夫して欲しい								
【学生への伝達的影響】								
興味や関心にあう		98.8 66.7		97.8 61.7			93.3 56.3	98.4 63.9
将来に役立つ		98.8 53.2	72.7 33.3	96.7 50.0	92.5 59.3		60.0 25.0	90.3 45.9
自分のあり方を振り返るきっかけになった	92.0 60.0	89.2 39.6	81.8 33.3	82.6 43.3	86.8 42.9	81.1 25.6	53.3 18.8	79.0 24.6
研究のおもしろさにふれた		94.2 48.9	63.6 33.3	84.6 48.3	98.1 57.1	95.9 50.0	86.7 26.7	91.9 39.3
満 足 群 (N=)	51	87	11	93	54	74	15	62
不満足群 (N=)	16	49	9	60	28	39	17	61

(注1) 上段は満足群の該当率(%), 下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

Table8 自然における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した	95.8 33.3	87.2 55.9	90.9 50.0	89.3	78.8 28.9	76.6 10.2	69.2 35.0	70.0 20.0
真剣に授業を受けた	79.2 13.9	84.6 23.9	100.0 37.5	87.8 40.5	57.6 11.1	57.4 3.4	53.8 20.0	70.0 17.1
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった			54.5 0.0				53.8 11.1	
話合いを大事にした								
レポートにまとめることを重視した			72.7 25.0	29.8			61.1	58.5
資料などの補助的手段が充実していた	18.7	10.3	40.0		60.6 30.2	61.7 28.8	75.0 31.6	
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった	87.5 48.6	100.0 52.3	90.9 50.0	94.7 56.1	93.9 45.5	93.8 56.9	92.3 50.0	
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた	95.8 51.4	91.9 56.9		87.6 46.3	87.9 40.0	89.6 46.6	92.3 44.4	84.0 53.6
教育者として自覚をもってほしい			37.5	36.6 73.8	42.4 74.4		33.3 84.2	
講義を工夫して欲しい	60.9 91.2							
【学生への伝達的影響】								
興味や関心にあう	95.8 52.8	100.0 43.9			100.0 42.2	93.6 49.2	100.0 63.2	100.0 55.7
将来に役立つ	85.7 47.2	97.4 30.8	100.0 62.5		81.8 20.5	63.7 23.7	69.2	96.0 62.9
自分のあり方を振り返るきっかけになった	73.9 34.3	83.8 25.8	90.9 37.5		60.6 13.3	42.6	46.2 0.0	54.0 22.9
研究のおもしろさにふれた	79.2 48.6	89.7 33.8	81.8 37.5	87.6 45.2	93.9 31.1	93.6 27.6	92.3 38.9	82.0 34.8
満 足 群 (N=)	24	39	11	115	33	47	13	50
不満足群 (N=)	36	67	8	42	45	59	20	70

(注1) 上段は満足群の該当率(%), 下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

Table9 専門講義における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した	97.1 53.8	92.5 56.3	80.0		95.5 64.3	85.7 40.0	70.6 20.0	93.0 56.0
真剣に授業を受けた	100.0 69.2	93.9 62.5	90.9 60.0	89.5	93.9 46.4	89.0 33.3	94.1 40.0	92.2 50.0
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった	76.9 46.2							
話し合いを大事にした							46.7 13.3	
レポートにまとめることを重視した	81.8 46.2			41.2			73.3 26.7	84.0
資料などの補助的手段が充実していた	7.7		80.0 40.0	31.0	43.1		71.4	64.0
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった	100.0 69.2							
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた			100.0		95.5 59.3		86.7 53.3	
教育者として自覚をもってほしい	21.9 53.8			40.5 72.2		37.5 75.9		
講義を工夫して欲しい	50.8 100.0							
【学生への伝達的影響】								
興味や関心にあう								
将来に役立つ	95.2 38.5				96.9 61.5			
自分のあり方を振り返るきっかけになった	86.2 53.8	81.3	83.6 40.0		83.3 42.3	50.0	62.5 26.7	
研究のおもしろさにふれた	100.0 46.2		100.0 60.0	96.4 63.2	77.3	98.9 66.7	86.7 53.3	
満 足 群 (N=)	68	147	56	195	66	91	17	115
不満足群 (N=)	13	16	5	19	28	30	15	25

(注1) 上段は満足群の該当率(%)、下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

Table10 専門演習における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した		91.9 50.0				85.7		99.2 68.8
真剣に授業を受けた		96.0 40.7	100.0	81.3	100.0 64.7		87.0 55.0	93.2 37.5
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった	95.5 63.6	93.9 53.8		71.6 37.5		86.4 50.0		70.3 25.0
話合いを大事にした	78.1 36.4	79.8 30.8	61.2 0.0			87.4 57.1	59.1 22.2	
レポートにまとめることを重視した		65.0 34.6	67.3 33.3				90.9 55.6	
資料などの補助的手段が充実していた	0.0		70.2 0.0		52.9		95.7 50.0	66.7 25.0
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった	95.5 63.6		100.0	95.2 62.5			95.5 55.0	91.5 50.0
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた	98.5 63.6		100.0	92.3 56.3			86.4 55.0	
教育者として自覚をもってほしい			54.2 100.0		20.0 68.8			44.1 75.0
講義を工夫して欲しい	44.6 100.0	34.7 68.0			58.0 93.8			
【学生への伝達的影響】								
興味や関心にあう		100.0 61.5		98.8 68.8		96.6 64.3		96.6 43.8
将来に役立つ		97.9 55.6	100.0			92.4 61.5	66.7	
自分のあり方を振り返るきっかけになった	84.6 54.5	91.6 55.6	66.7	50.3		72.3 28.6	56.5 11.1	63.6 25.0
研究のおもしろさにふれた	95.5 54.5	95.8 52.0	97.9 66.7	91.1 50.0			90.9 33.3	92.4 37.5
満 足 群 (N=)	68	101	49	169	71	120	23	118
不満足群 (N=)	11	27	3	17	17	14	9	16

(注1) 上段は満足群の該当率(%)、下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

Table11 専門実験における授業要因のまとめ

	戦 後				現 代			
	文学部	法学部	医学部	工学部	文学部	法学部	医学部	工学部
【授業行動】								
授業によく出席した	— —	— —			— —	— —		
真剣に授業を受けた	— —	— —	100.0 73.9		— —	— —	91.3 50.0	91.3 41.7
【授業の活動形態】								
少数でのきめ細かな指導だった	— —	— —	50.0 26.3	84.9 26.3	— —	— —	90.5 10.7	86.2 56.2
話し合いを大事にした	— —	— —		66.7 10.5	— —	— —		43.5
レポートにまとめることを重視した	— —	— —			— —	— —	95.2 58.3	
資料などの補助的手段が充実していた	— —	— —	61.7 0.0	47.8 10.5	— —	— —		68.7 37.5
【学生からみた教官の個人要因】								
教官の熱意が伝わった	— —	— —	98.0 50.0	90.4 52.6	— —	— —	100.0 41.7	89.7 52.2
教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた	— —	— —	100.0 42.1	89.2 42.1	— —	— —	85.7 50.0	82.8 43.5
教育者として自覚をもってほしい	— —	— —	49.0 100.0	31.0	— —	— —		36.2 66.7
講義を工夫して欲しい	— —	— —			— —	— —		
【学生への伝達の影響】								
興味や関心にあう	— —	— —	100.0 63.4	63.4	— —	— —	98.5 53.3	96.5 37.5
将来に役立つ	— —	— —	100.0		— —	— —	66.7	96.5 54.2
自分のあり方を振り返るきっかけになった	— —	— —	83.3 0.0	75.9 33.3	— —	— —	50.0 8.3	
研究のおもしろさにふれた	— —	— —	95.9 50.0	92.4 36.8	— —	— —	95.2 25.0	92.2 43.5
満 足 群 (N=)	—	—	50	160	—	—	22	116
不満足群 (N=)	—	—	2	19	—	—	12	24

(注1) 上段は満足群の該当率(%)、下段は不満足群の該当率(%)を示す

(注2) 白抜き字は、戦後と現代で差がみられた項目における該当率(%)を示す

【まとめ】

Table5～11に、英語や英語以外から専門実験までの各コースにおいて差がみられた項目をまとめる。そして以下、次の2方向からまとめる。一つは、英語や英語以外から専門実験までの各コースにおける大幅な傾向、もう一つは授業要因としてあげた授業行動や授業の活動形態などの中で一般的に重要だった要因は何であったかということである。その際、前者では4学部中3学部以上において差がみられた場合、あるいは重要項目であった場合を基準とし、後者では英語から専門実験までの7コース中5コース以上の該当がみられた場合を基準とした。

1. 各コースにおける大幅な傾向

英語 戦後、現代を問わず、「真剣に授業を受けた」、「教官の熱意が伝わった」、「教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた」、「興味や関心にあう」、「将来に役立つ」、「研究のおもしろさにふれた」が授業の満足度を規定していた。「自分のあり方を振り返るきっかけになった」は戦後のみで授業満足度を規定していた。

「授業によく出席した」は、戦後、現代を問わず重要項目であり、現代のみで「講義を工夫してほしい」も重要項目であった。

英語以外 戦後、現代を問わず、「真剣に授業を受けた」、「教官の熱意が伝わった」、「教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた」、「興味や関心にあう」、「将来に役立つ」、「研究のおもしろさにふれた」が授業の満足度を規定していた。「自分のあり方を振り返るきっかけになった」は戦後のみで授業満足度を規定しており、「教育者として自覚をもってほしい」は現代のみで授業満足度を規定していた。

「授業によく出席した」は、戦後、現代を問わず重要項目であり、現代のみで「講義を工夫してほしい」も重要項目であった。

人文社会 戦後、現代を問わず、「真剣に授業を受けた」、「教官の熱意が伝わった」、「将来に役立つ」、「研究のおもしろさにふれた」が授業の満足度を規定していた。「自分のあり方を振り返るきっかけになった」は戦後のみで授業満足度を規定しており、「授業によく出席した」、「資料などの補助的手段が充実していた」、「教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた」は現代のみで授業満足度を規定していた。

現代のみで「講義を工夫して欲しい」が重要項目であった。

自然 戦後、現代を問わず、「授業によく出席した」、「真剣に授業を受けた」、「教官の熱意が伝わった」、「教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた」、「将来に役立つ」、「自分のあり方を振り返るきっかけになった」、「研究のおもしろさにふれた」が授業の満足度を規定していた。「資料などの補助的手段が充実していた」、「興味や関心にあう」は現代のみで授業満足度を規定していた。

現代のみで「講義を工夫して欲しい」が重要項目であった。

専門講義 戦後、現代を問わず、「真剣に授業を受けた」のみが授業の満足度を規定していた。「研究のおもしろさにふれた」は戦後のみで授業満足度を規定しており、「授業によく出席した」は現代のみで授業満足度を規定していた。

戦後、現代を問わず、「教官の熱意が伝わった」「講義を工夫してほしい」、「興味や関心にあう」、「将来に役立つ」が重要項目であった。また、「教官の学問に対する姿勢や人柄にひかれた」は戦後のみの重要項目であった。

専門演習 「話し合いを大事にした」、「研究のおもしろさにふれた」は戦後のみで授業満足度を規定しており、「真剣に授業を受けた」、「自分のあり方を振り返るきっかけになった」は現代のみで授業満足度を規定していた。

「授業によく出席した」は戦後、現代を問わず重要項目であり、「真剣に授業を受けた」は戦後のみで重要項目であった。

専門実験 戦後、現代を問わず、「教官の熱意が伝わった」、「研究のおもしろさにふれた」は授業満足度を規定していた。また、「資料などの補助的手段が充実していた」、「自分のあり方を振り返るきっかけになった」は戦後のみで授業満足度を規定しており、「真剣に授業を受けた」、「興味や関心にあう」は現代のみで授業満足度を規定していた。

戦後、現代を問わず、「授業によく出席した」は重要項目であり、「真剣に授業を受けた」、「将来に役に立つ」は戦後のみで重要項目であった。

2. 一般的に重要な授業要因項目

授業満足度の規定要因 戦後、現代を問わず上記の基準を満たしたのは、「真剣に授業を受けた」、「教官の熱意が伝わった」、「研究のおもしろさにふれた」の3項目であった。戦後のみで上記の基準を満たしたのは、「自分のあり方を振り返るきっかけになった」の1項目であった。現代のみでは全くみられなかった。

重要項目 現代のみで、「講義を工夫して欲しい」がみられた。

全体的まとめ

卒業した学部・学科に対する満足度は全体的に高く、それは文科系よりも理科系で顕著であった。文科系では、満足理由として、授業の質や自由な学風にあるようである。医学部、工学部では職業的色彩が強いせいか、「将来の職業や生活に役立つ」が顕著であった。文科系でも法学部では同様の傾向を示すところがあり、司法職に進まない者であってもリーガル・マインドの有効性をあげる者が多かった。それが「将来の職業や生活に役立つ」「学ぶものが多い」との高い表出率につながっていたようである。工学部では、技術革新のめざましい時代の流れの中、直接役に立たないまでも工学の専門的基礎知識を学べたのは有り難かったとする記述が多く、それも「学ぶものが多い」との高い表出率につながっていた。それに比べて、医学部ではこうした質問を受けること自体に疑問を感じたようであり、「医者になるためには医学部に行かなければならなかったから」といった医者という職業専門コースとしての満足さに重きを置いているようであった。

それに対して不満足の理由は、授業に関するもの（講義やカリキュラム等）がほとんどであった。法学部ではマスプロ講義が多く大手の私学と変わらない、教官と個人的に接触できるような体制が欲しかったという不満が目立った。医学部や工学部といった理科系では、基礎と実践との絡みが問題にされることが多く、例えば医学部では臨床場面の講義や具体例が少ないとか、工学部では実務の側面がほとんど扱われていなかった等が挙げられていた。

ところが授業そのものに焦点をあてると、様相は随分変わる。学部への満足度については70～80%以上を示しながらも、授業そのものについては高い場合でも50～60%程度の満足度である。また、大学4年間（6年間）の満足度については文科系と理科系で大きな違いがみられた。文科系は63年度以降過半数の満足度を保っており、時代が変わっても満足度の比率はさほど変わらないのに対して、理科系は時代の推移とともに満足度は大きな変化を見せている。医学部では、73年度以降満足度が大きく下がり、83年度で過去最低を示した。しかし、93年度では低いながらも73年度のラインまで満足度が回復している。工学部では、53年度で4学部中最高の満足度を示しながらも、63年度以降満足度が過半数まで下がる。83年度までは過半数のラインを保っていたが、93年度でさらに満足度は下がり、その値は4学部中最低の値であった。93年度で満足度を上昇させた医学部に対して、工学部はさらに下がりつつある。さらに、最高の満足度から最低の満足度へ下がっていることも工学部の大きな特徴であった。

もう少し細かく見てみると、一般教養課程の満足度は全体的に30～40%以下であり、時代とともに下がる傾向にある。中でも理科系の医学部・工学部はその傾向が顕著で、93年度には両学部とも約15%まで満足度が下がっている。専門課程では、文科系の文学部・法学部は全体的に60%前後の満足度を保っており、時代が変わっても満足度の比率はさほど変わっていない。それに対して、医学部は73年度以降満足度が大きく低下し、83年度には4学部中最低の満足度となる。しかし、93年度には過半数まで回復している。工学部は、医学部ほどの大きな変動はないが、63年度から83年度にかけて維持していた70%前後の満足度が、93年度では50%近くまで下がっている。それでも全体的には、医学部の73年度、83年度の満足度をのぞき、過半数を下回ることはないといえる。

以上を簡単にまとめてみると、まず第一に、学部に対する満足はそのまま京都大学在籍に対する満足とも置き換えられるが、それは授業以外の様々な活動を含めてのものであることがわかった。それに対して不満だという場合には、授業に関するもの（授業のあり方やカリキュラム等）が多かった。第二に、第一の満足の観点は、京都大学の授業そのものに焦点をあて評価を求めた結果からも明らかとなる。何故なら、一般教養課程や専門課程を含む在籍4年間（6年間）の授業満足度は、過半数以上を保ちながらも、それは学部への満足の値よりは大きく下まわる値であったからである。

授業においては、具体的には何が問題となっていたのだろうか。一般教養課程では、文科系における“英語”と“自然”において満足度が低かったのが特徴的であったが、理科系では大きな特徴はみられない。専門課程では、少人数制で意見などと言いやすい演習形態が、一方通行の講義形態よりも満足度は高いようであった。

また先に学部に対する満足は、授業だけでなく、授業以外の様々な活動にも支えられていたことを述べた。それは例えば「自由な学風が良かった」という表現としてあらわれ、自由に干渉されないほど好きな活動（クラブやサークル活動など）に打ち込めたといったことを意味していた。しかしながら、大学4年間の授業満足度と学生時代に主におこなっていた活動（例えば「遊んでばかりいた」や「クラブ活動ばかりしていた」等）との関連をみた結果、学生

時代の活動が大学4年間の授業満足度を規定するものではなかったことが確認された。つまり、例えばクラブ活動ばかりしていたから授業には満足していないという意味ではないということである。

それを裏付けるのが、授業満足度の構造として検討された様々な授業要因との関連結果である。本研究では、各学部の固有な問題には触れず、一般的な教授法として問題とされる大きな要因だけを取り扱った。その要因だけを取り上げるだけでも、授業の満足度を規定する要因が、いかに授業そのものの中にあるかがわかった。戦後、現代を問わず、そして一般教養課程や専門課程を問わず、授業満足度を大きく規定する要因は3つ確認された。それは「真剣に授業を受けた」とする学生の授業行動であり、「教官の熱意が伝わった」とする学生から見た教官要因、「研究のおもしろさにふれた」とする学生への伝達の影響であった。いずれも当然すぎるものであるかもしれないが、これらはいくつかのことを示唆している。つまり、授業を満足するもしないもまず学生が授業を真剣に受けようとする態度からはじまるということである。いくら教官が熱心に授業をおこなっても、学生がそれに応えないのでは、教官の熱心な講義はその学生には伝わらない。逆に学生が熱心に授業を受けようとしても、教官の熱意やおもしろさがなければ学生は授業に満足しない。教官がいくら熱心に授業をしていると思っていても、それが学生に伝わらないのでは教官の単なる自己満足で終わる。熱意だけでなく、それを「伝えられる」授業であることも重要である。単純な結果のようであるが、そうした学生と教官との相互作用がうまくいったときにはじめて授業は成功するということが、これらの結果から再認識できたように思う。

最後に、戦後の卒業者が京都大学の授業に非常に高い満足度を示しており、現代になるにつれ満足度はだんだん減少してくる。これを見ると、昔は余程立派な授業がなされていたのかと思ってしまう。また大学改革という標語が近年盛んに叫ばれることを念頭に置くと、この報告書で示された現代の授業満足度が下がってきている事実は、格好の材料ともなりやすい。しかしこの調査は、卒業してから40年以上たった人たちにまで在籍時を振り返って答えて頂いたものであり、記憶にあまり残っていない中を評価してもらった事実がある。それ故に、京都大学を卒業して良かったと思う者であれば、当然評価は甘くなるし、京都大学在籍時に良い印象のない者はどうしても厳しい評価となる。授業の満足度では時代の推移を追いかけたが、正直なところ、戦後卒業者のあまりに高い満足度には目を疑ったものでもある。しかし、授業も含めて大学の存在評価とは、年をとるにつれ再評価されるべき側面もある。在籍時には分からなかった良さも、卒業して20年、30年たつと、「あの時期〇〇を教えてもらったのは有り難かった」などとして思い起こすことは決して珍しくない。また事実多くの卒業者に、そのような記述を確認することができた。以上、こうした事実まで含めて本調査の結果を読んでいただければ幸いである。

引用文献

- 梶田勲一 1995 大学生は講義・演習等の何に満足し、何が不満なのか、京都大学高等教育研究、創刊号、54-58.
- 金子元久・山内乾史・小方直幸 1994 卒業生からみた広島大学の教育～1993年卒業生調査から 広島大学教育研究センター
- 黒羽亮一 1992 1960年代以降の大学政策～その体験的整理と検討 大学研究(筑波大学大学研究センター)、第10号.
- 京都大学総合人間学部 1994 学生を対象とした全学共通科目の実施状況に関するアンケート調査結果報告書(未公開)
- 野辺地正之 1983 大学生と適応障害～スチューデント・アパシー 関峯一・返田健編『大学生の心理～自立とモラトリアムの間にゆれる』有斐閣選書(Pp.200-205)
- 織田揮準 1995 学生からのフィードバック情報を取り入れた授業実践 放送教育開発センター研究報告、83、5-17.
- 桜井哲夫 1985 ことばを失った若者たち 講談社現代新書
- 杉山憲司・斉藤里美・石垣貴千代 1995 大学生の自己評価と大学イメージ、キャンパスライフ等の大学評価との関係～日本人学生と留学生を比較して(予備調査の報告) 日本発達心理学会第7回大会発表論文集、221p.
- 東京大学工学部・工学系研究科調査室 1996 アンケート「工学部の教育・研究に対する評価と提言」まとめ(未公開)
- 内田毅 1979 大学生～その状況と選択 鷹書房

第 3 部

京都大学卒業者の人生観をめぐって

§ 生き方意識のあり方

梶田（1990）による生き方意識インベントリーを用いて、京都大学卒業者の人生観を、世代および学部の違いを念頭に置きつつ検討する。

生き方意識インベントリーは、A. 自己の存在意義・自己受容、B. 脱自己中心性、C. 自己の可能性・目的、D. 努力への意志・向上心、E. ニヒリズム、の5領域から構成されている。具体的な項目は、表1を参照していただきたい。

表1 生き方意識インベントリーの構成（梶田、1990）

A. 自己の存在意義や自己受容に関わる感覚・意識

1. わたしは、いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分でいい、と思っています。
6. わたしは、細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。
11. わたしは、この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。
16. わたしは、毎日の生活がどうしてこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろうと嫌になることがあります。*
21. わたしは、周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに住んでいけるのだと思うことがあります。
26. わたしは、大自然の力（あるいは神様・仏様など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばよい、と思っています。

B. 脱自己中心性に関わる感覚・意識

2. わたしは、自分のことをいつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろうと思うことがよくあります。*?
7. わたしは、人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしなない利己的な存在だという気がします。*?
12. わたしは、自分の意見に反対されたり、自分の考えと違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。*?
17. わたしは、自分自身のことは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないものだという気がします。
22. わたしは、できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたいと思っています。
27. わたしは、結局は「自分」などというものはなく、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだという気がしています。

C. 自己の可能性や目的に関わる感覚・意識

3. わたしは、自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がしています。
8. わたしは、自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろうという気がしています。
13. わたしは、今までと違う新しいことにチャレンジし、自己の可能性を広げていきたいと考えています。
18. わたしは、どんなささやかなことでもいいから、ほかの人に役立つことを見つけ、責任を持ってやっ

ていかなくはと考えています。

23. わたしは、この人をお手本に生きていきたいと思う人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人もよい）を持っています。

28. わたしは、自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人もよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。

D. 努力への意志や向上心に関わる感覚・意識

4. わたしは、何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくてはと考えています。

9. わたしは、その時その時で自分なりに精一杯の努力をしていけば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いないと考えています。

14. わたしは、世間的な意味で成功するかどうかより、その時その時で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だと考えています。

19. わたしは、どんなに小さいことでもいいから、これは自分がやったことだと言えるものを持ちたいと思っています。

24. わたしは、あまり無理をしなくて、自分自身と上手につき合いながらマイペースで少しずつやっていくしかないと考えています。*?

29. わたしは、自分がどんなに頑張って努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろうという気がします。*?

E. ニヒリズムに関わる感覚・意識

5. わたしは、人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局は無駄だという気がします。

10. わたしは、頑張って節約して財産ができたとしても、結局は元気な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えなくて、楽しめる時に精一杯楽しんでおかななくては損だと思っています。

15. わたしは、世間の人はすぐにキレゴトを言いたがるけれど、結局はだれもお金と快楽と名誉を求めているだけだと思っています。

20. わたしは、人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思っています。

25. わたしは、自分が存在し生きていることには全くの何の目的も意味もないという気がしています。

30. わたしは、自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。*

* 逆転項目 *? 両義的（アンビバレント）な項目

■ 学部別にみる生き方意識のあり方

まず、文学部、法学部、医学部、工学部の4学部について、各項目の「はい」「いいえ」の比率から全体の傾向をみてみたい。

文学部において80%以上が「はい」と回答した項目は、「どんなに小さいことでもいいから、これは自分でやったことだといえるものを持ちたいと思っています（努力への意志や向上心に関わる感覚・意識）」だけである。逆に、80%以上が「いいえ」と回答した項目は、「人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局無駄だという気がします（ニヒリズムに関わる感覚・意識）」と「自分が存在し生きていることには全くの何の目的も意味もないという気がします（ニヒリズムに関わる感覚・意識）」の2項目である。これらの回答から、文学部卒業者の意識として、「自分が生きている」ということを何かしら証を持ちたいということが現れているように思われる。

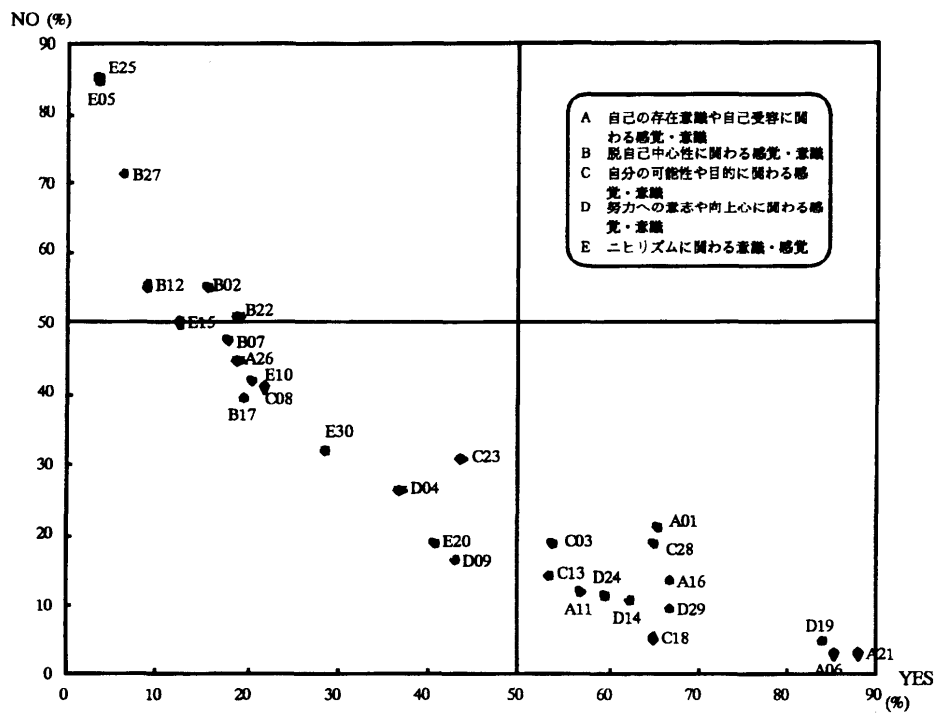


図1 項目別回答率（文学部）

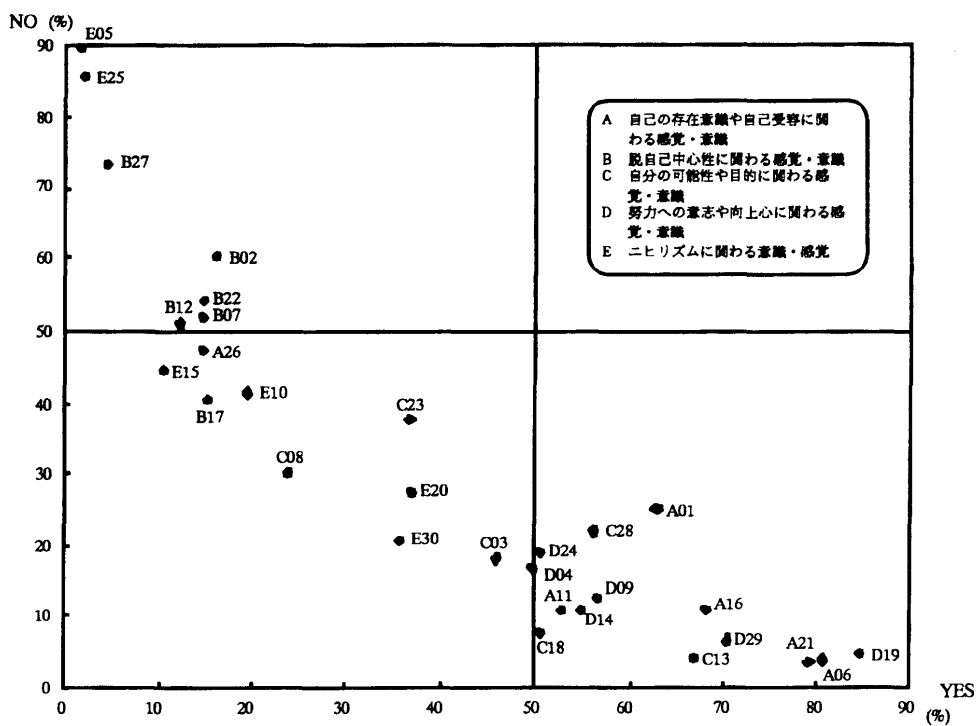


図2 項目別回答率（法学部）

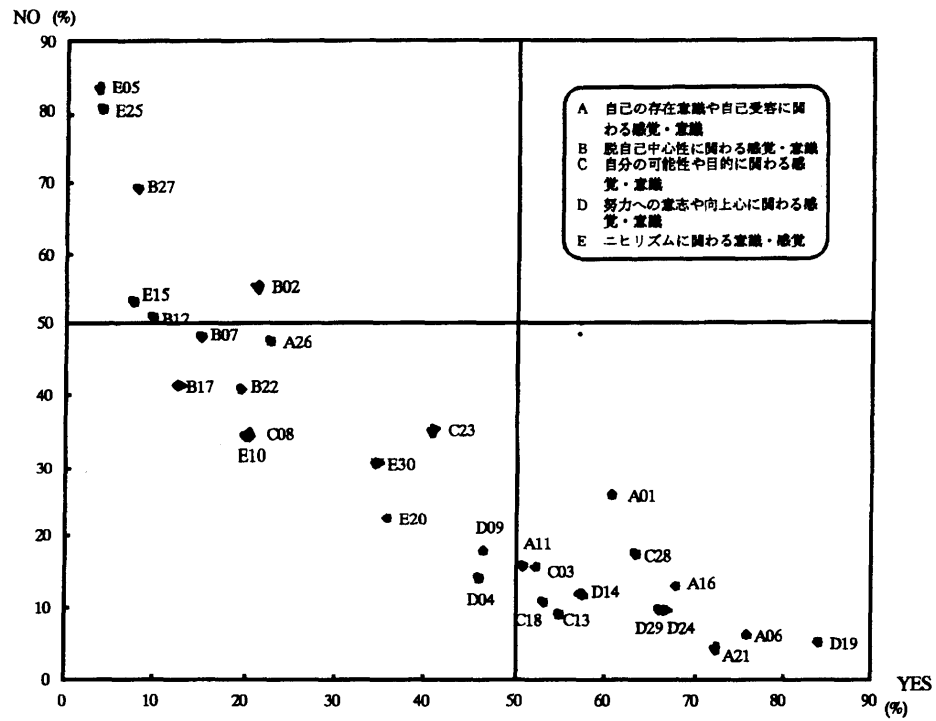


図3 項目別回答率 (医学部)

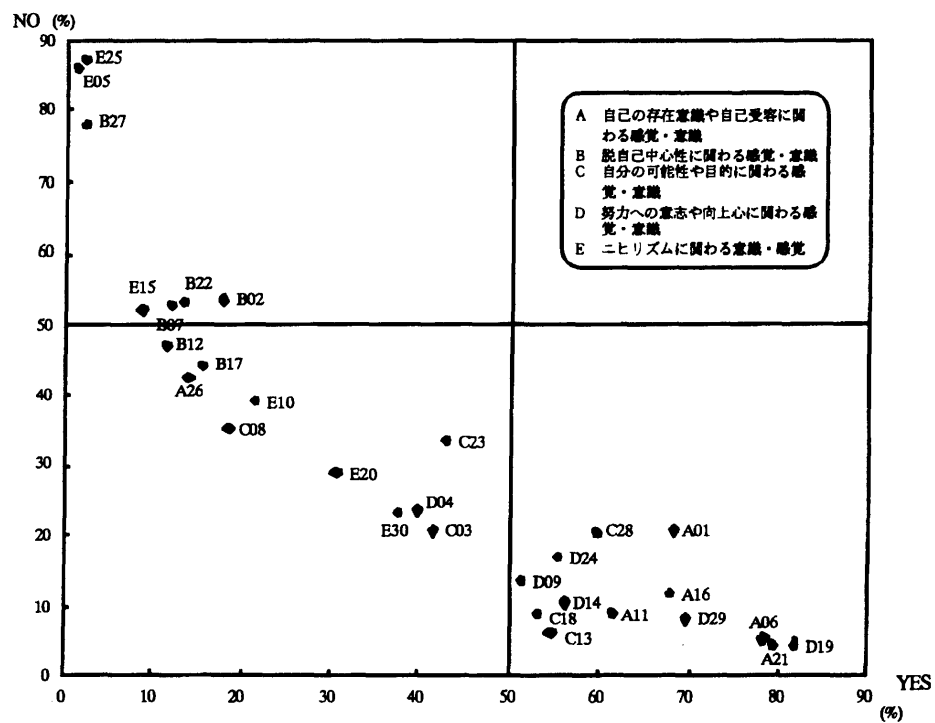


図4 項目別回答率 (工学部)

法学部では、文学部と同じ傾向であるが、それに加えて「細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件にめぐまれてきた幸せな人間だと思っています（自己の存在意識や自己受容に関わる感覚・意識）」と「周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだと思うことがあります（自己の存在意義や自己受容に関わる感覚・意識）」の2項目の「はい」の回答が高く、「結局は「自分」などというものはない、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだ」という気がしています（脱自己中心性の感覚・意識）」は「いいえ」の回答が高い。「自分が生きている」という意識とともに「生かされている」という意識も同時にみられるようである。

医学部および工学部は、法学部とほぼ同じ傾向がみられるが、脱自己中心性の感覚・意識の項目を考えると、医学部と工学部はよく似た傾向にあると言える。

個々の項目をみてみると、いくつかの項目に学部の特徴がみられる（資料1参照）。まず、「3. 自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がします。」では、医学部、文学部の「はい」の比率が高い。「8. 自分自身の将来には大きな可能性があり、そのうちに・・・」は、医学部の「いいえ」の比率が高くなっている。同様に「18. どんなにささいなことでもいいから、他の人に役立つことを見つけ、責任を持って・・・」も医学部の「はい」の比率が高い。

また、「13. 今までと違う新しいことにチャレンジし、自分の可能性を広げていきたい」は工学部の「はい」の比率が高く、医学部の「いいえ」の比率が高い。「24. あまり無理をしないで、自分自身と上手に付き合いながらマイペースで・・・」は文学部の「はい」の比率が高く、医学部も同様の傾向が窺える。

これらの個々の項目への回答は、1つには学部の持つ目的性を反映しているように思われる。医学部は、医師の養成を目的としたものであり、職業上の制約という意味から、自己の可能性については制約を受けているが、逆に医師の社会的役割としての使命感が窺える。また、文学部のマイペース型、工学部の自己の可能性への信頼も学部の特徴からうなずけることではないだろうか。

したがって、全体的には「努力志向」や「自己の業績」および「集団の中で生かされている自分」という意識が基底にあるために、学部間のちがいははっきりとはしないが、学部の目的性、あるいは卒業後の職業選択の幅などが、個々の生き方意識に影響をあたえていると考えられる。

■ 卒業年度別にみる生き方意識のあり方

学部別にみたように、卒業年度別に生き方意識の全体的傾向をみてみよう。

53年度は、80%以上が「はい」と回答した項目が「周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだと思うことがあります。（自己の存在意識や自己受容に関わる感覚・意識）」、「どんなに小さいことでもいいから、これは自分でやったことだといえるものを持ちたいと思っています。（努力への意志や向上心に関わる感覚・意識）」および「細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。（自己の存在意義や自己受容に関わる感覚・意識）」であり、逆に80%以上が「いいえ」と回答した項目が「人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局無駄だ」という気がします。（ニヒリズムに関わる感覚・意識）」と「自分が存在し生きていくいることには全く何の目的も意味もない」という気がします。（ニヒリズムに関わる感覚・意識）」の2項目である。

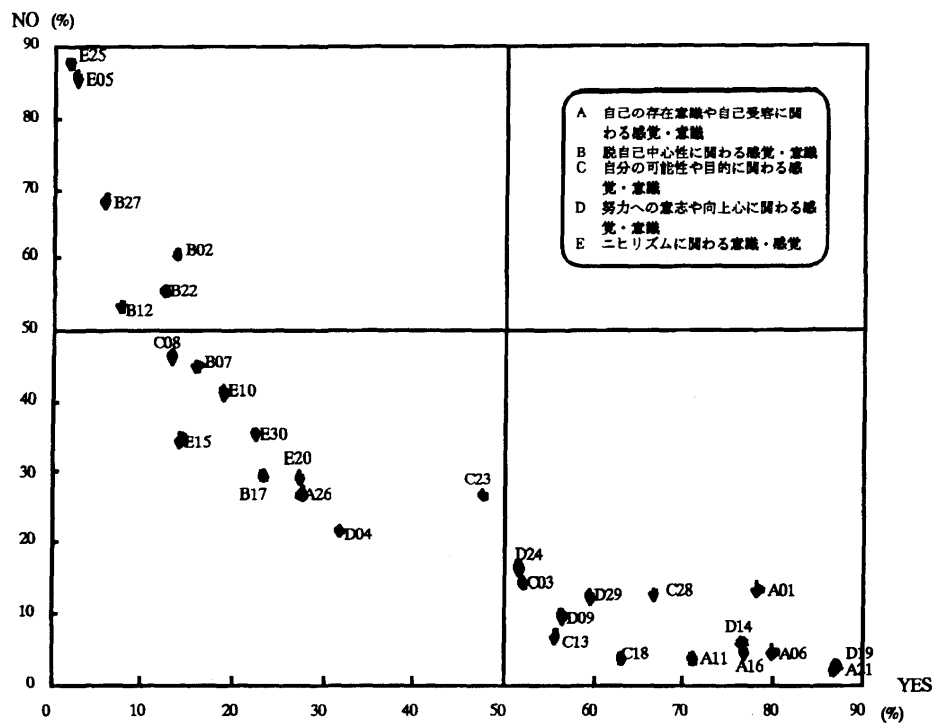


図5 項目別回答率 (53年度)

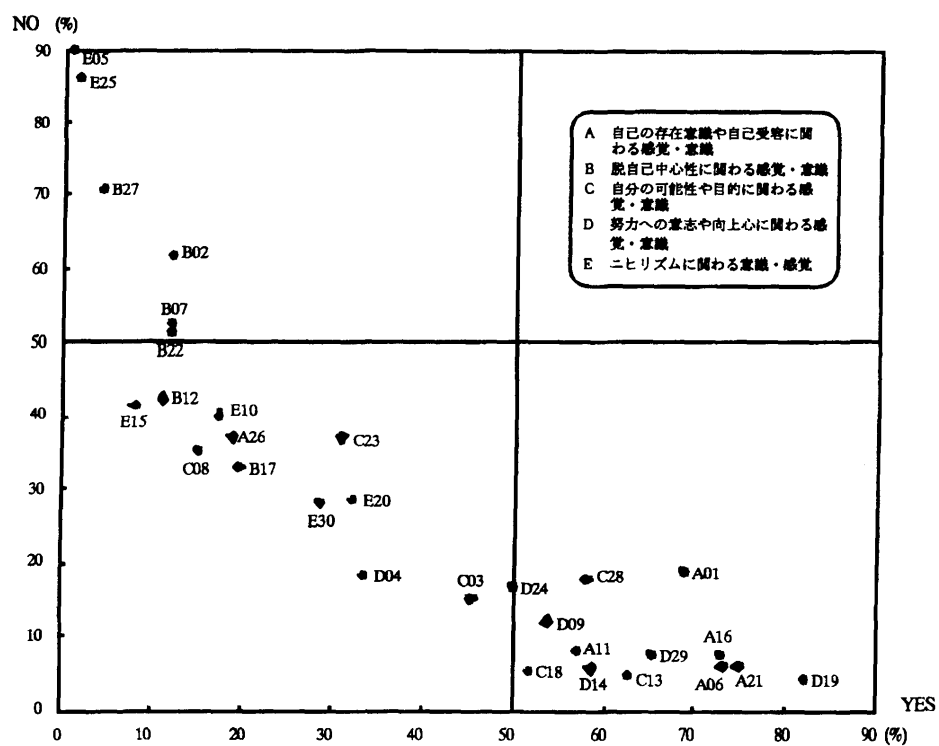


図6 項目別回答率 (63年度)

63年度も53年度とほぼ同傾向であるが、「どんなに小さいことでもいいから・・・」という努力・向上心に関わる項目のみが80%以上「はい」と回答し、自己の存在意義や自己受容に関わる「はい」の回答の比率が53年に比べて低くなっている。73年度もほぼ同じ回答の傾向がみられるが、「結局は「自分」などというものは無い、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだ・・・」という脱自己中心性に関わる回答の「いいえ」の比率が高くなっている。

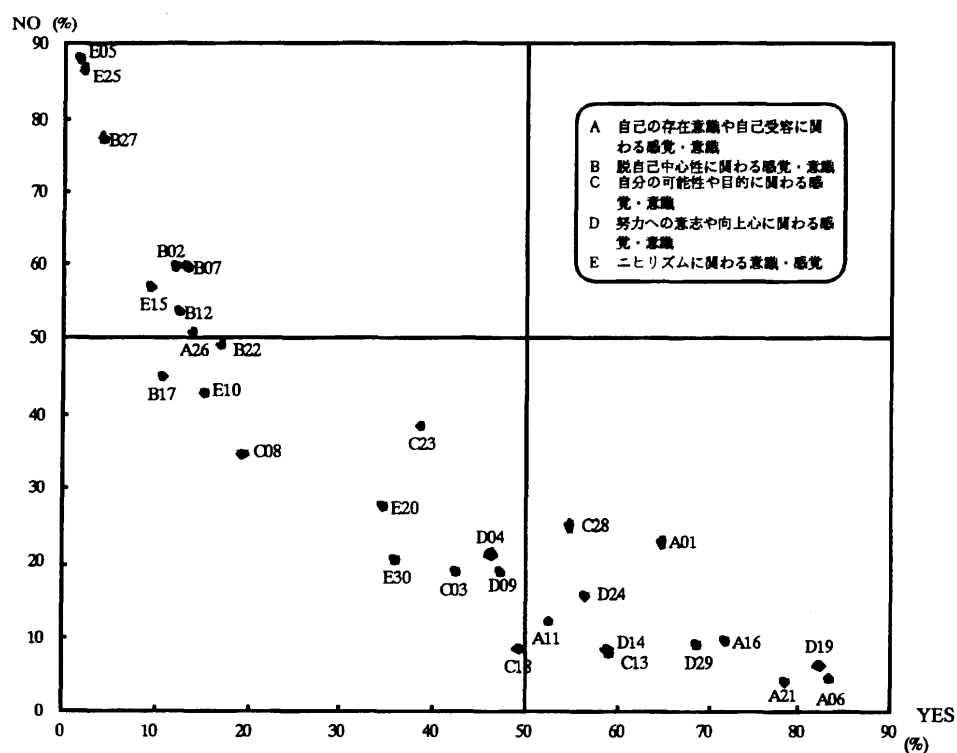


図7 項目別回答率（73年度）

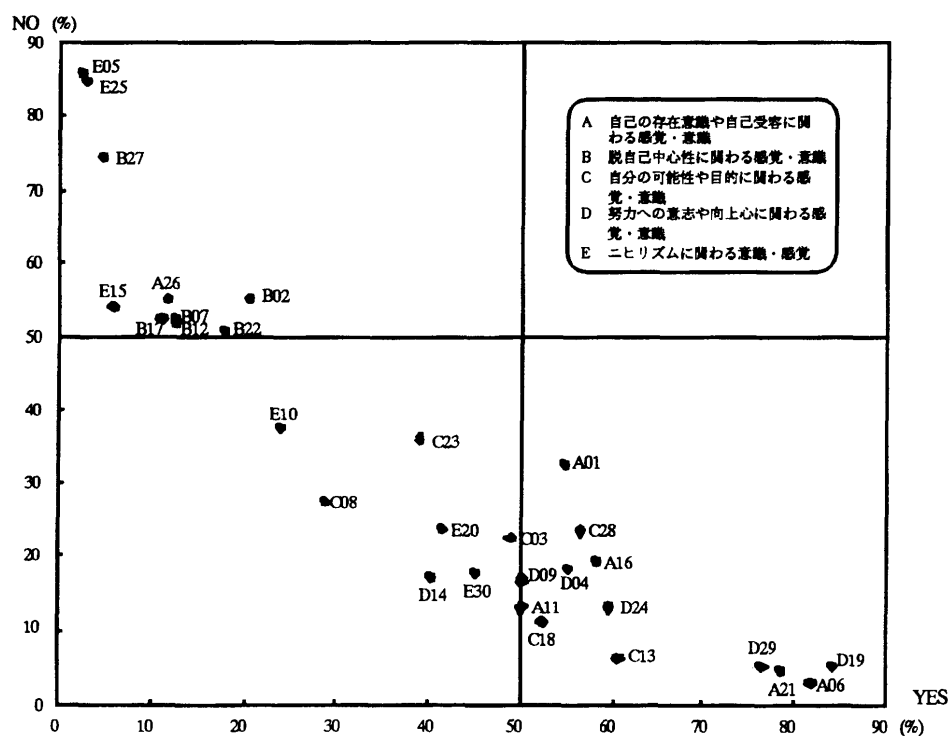


図8 項目別回答率（83年度）

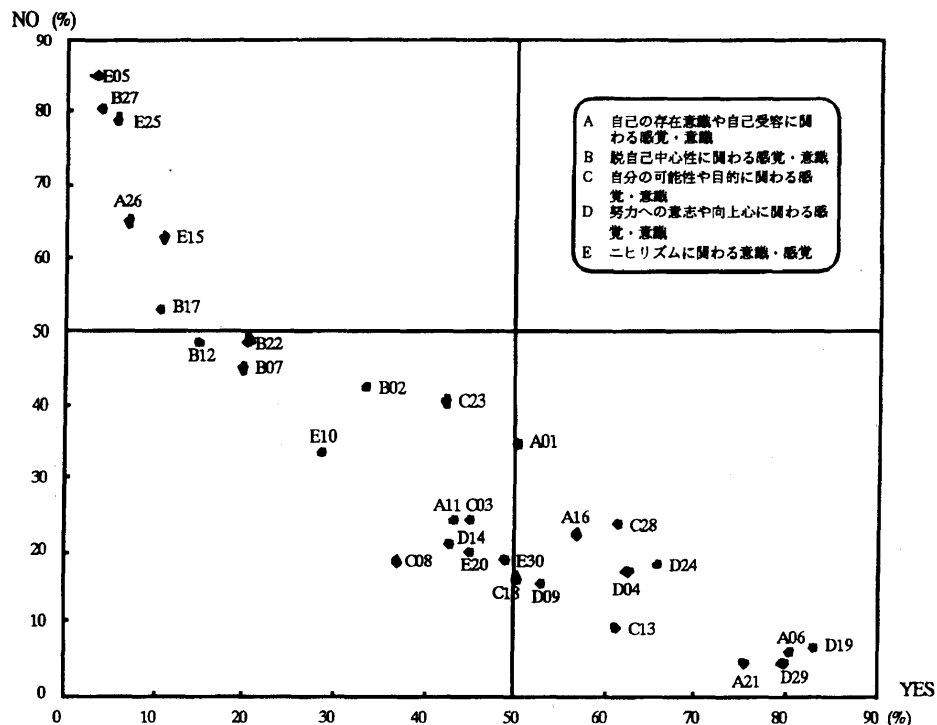


図9 項目別回答率（93年度）

83年度は、73年度と同じ傾向を示しながら、「自分がどんなに頑張っても、結局のところ、結果にそう大きな違いはないだろう・・・」の「いいえ」の回答が高くなっている。

93年度は、83年度と同じ傾向であり、脱自己中心性や努力・向上心に関わる感覚についての回答が「はい」「いいえ」いずれかに80%以上になっている。

各コホート間に大きな違いがあるとはいえないが、若い世代ほど「自分ということ」あるいは「自分は人と違う」という意識が強いことを窺わせる。つまり、個人主義ということが意識化されてきつつあることを全体的な回答パターンは示しているのではないだろうか。

そこで、より具体的に各項目の違いをみてみよう（資料2参照）。

まず、世代が若くなるにつれて「はい」の回答率が低くなる項目は、「1. いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分でもいい、と思っています」、「11. この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちで満たされることがあります」、「14. 世間的な意味で成功するかどうかより、その時その時で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だと考えています」、「26. 大自然の力によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心してまかせておけばよい・・・」、「30. 自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません」などである。全体的には、自己の存在意義と自己受容にかかわる感覚・意識が世代が若くなるにつれて弱くなっている。

逆に、「2. 自分のことをいつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろう・・・」、「4. 何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その現実に向かって努力し、大きく花を咲かせなくては・・・」、「8. 自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろう・・・」、「16. 毎日の生活がどうしてこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろうと嫌になることがあります。」、「20. 人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思っています。」、「24. あまり無理をしないで、自分自身と上手に付合ながらマイペースで少しずつやっていくしかない・・・」などの項目は、世代が若くなるにつれて「はい」の回

答率が高くなっている。内容的には、自己の可能性に関わる意識と現状を変えることができない諦観的な見方、さらにマイペース的な志向と混在した生き方意識を若い世代ほどいだいていてと考えられる。

学部別、卒業年度別にみる生き方意識は、全体として大きなちがいはないと言えるのではないだろうか。敢えて言うならば、大学教育が生き方意識をかえるというよりも、世代間の差と卒業した学部と密接に関係する職種の影響が大きいと思われる。

§ 生き方意識の内部構造

生き方意識の内部構造をみるために、「はい」に2点、「どちらでもない」に1点、「いいえ」に0点を与え、主因子法による因子分析を行なった結果、4因子を抽出した。Varimax 回転後の結果が表2である。

第Ⅰ因子で負荷量の高い項目は、「人生の偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思います (.530)」や「世間の人はすぐキレイゴトを言いたがるけれど、結局はだれもお金と快楽と名誉を求めているだけだと思います (.505)」などであり、**シニシズム（冷笑主義）・無力感**と命名した。第Ⅱ因子は、「自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人でも、また日本の人でも他の国の人でもよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています (.621)」や「周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだと思うことがあります (.574)」などの項目の負荷量が高く、**自己の存在意義・目的感覚**と命名した。第Ⅲ因子で負荷量の高い項目は、「何とかして可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくてはと考えています (.735)」や「自分自身の人生において、どうしてもやりとげなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がしています (.657)」などであり、**自己の可能性**と命名した。第Ⅳ因子は、「いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今の自分のままでいい、と思っています (.585)」や「細かいことでは今まで色々あったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。 (.546)」などの項目の負荷量が高く、**自己受容にかかわる感覚**と命名した。

この抽出された4因子に基づいて、平均が0、分散が1.0である正規分布にしたがうように因子得点を算出し、以下の分析においては、この得点を用いることにする。

表2 生き方意識因子分析結果 (n=1436)

項 目	I	II	III	IV	共通性
20. 人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思っています。	0.530	0.031	0.005	-0.013	0.282
15. 世間の人はずぐにキレイゴトを言いたがるけれど、結局はだれもがお金と快楽と名誉を求めているだけだと思います。	0.505	-0.037	0.019	0.046	0.259
22. できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたいと思っています。	0.487	0.132	-0.033	0.008	0.255
7. 人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしなない利己的な存在だという気がします。	0.478	-0.137	0.075	0.050	0.256
12. 自分の意見に反対されたり、自分の考えとは違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。	0.440	0.046	0.083	-0.053	0.206
2. 自分のことをいつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろうと思うことがあります。	0.392	0.012	0.089	-0.088	0.170
10. 頑張って節約して財産ができたとしても、結局は元氣な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えないで、楽しめる時に精一杯楽しんでおかなければ損だと思います。	0.378	0.012	0.076	0.149	0.171
24. あまり無理しないで、自分自身と上手につき合いながらマイペースで少しずつやっていくしかないと考えています。	0.339	0.146	-0.284	0.099	0.227
16. 毎日の生活がどうしてもこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろうと嫌になることがあります。	0.333	0.125	0.004	0.131	0.143
30. 自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。	0.332	0.051	0.034	0.235	0.169
17. 自分自身のことは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないものだという気がします。	0.327	0.054	0.031	0.198	0.150
26. 大自然の力（あるいは神様・仏様など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばよい、と思っています。	0.296	0.041	0.083	0.290	0.181
28. 自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人でも、また日本の人も他の国の人でもよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。	0.165	0.621	0.031	-0.147	0.436
21. 周囲の人たちに支えていただいてるからこそこんなふうに住生活していけるのだと思うことがあります。	-0.005	0.574	-0.035	0.181	0.363
11. この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。	-0.027	0.572	0.051	0.218	0.378
23. この人をお手本に生きていきたいと思う人（今の人も昔の人でも、また日本の人も他の国の人でもよい）を持っています。	0.257	0.549	0.117	-0.155	0.405
18. どんなにささやかなことでもいいから、ほかの人に役立つことを見つけ、責任を持ってやっていかなくてはと考えています。	0.044	0.544	0.157	0.108	0.334
19. どんなに小さいことでもいいから、これは自分がやったことだと言えるものを持ちたいと思っています。	-0.052	0.380	0.195	0.101	0.195
4. 何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくてはと考えています。	0.151	0.041	0.735	0.058	0.568
3. 自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がしています。	0.019	0.110	0.657	0.050	0.446
13. 今までと違う新しいことにチャレンジし、自分の可能性を広げていきたいと考えています。	0.008	0.170	0.538	0.071	0.324
8. 自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろうという気がしています。	0.242	0.024	0.461	0.096	0.281
1. いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分でもいい、と思っています。	-0.011	0.013	-0.162	0.585	0.369
6. 細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。	-0.201	0.132	0.003	0.546	0.316
9. その時その時で自分なりに精一杯の努力をしていけば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いないと考えています。	-0.035	0.127	0.367	0.397	0.310
25. 自分が存在し生きていることには全く何の目的も意味もないという気がしています。	0.115	0.120	0.207	0.374	0.210
27. 結局は「自分」などというものはなく、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだという気がしています。	0.290	-0.014	0.090	0.363	0.224
14. 世間的な意味で成功するかどうかより、その時その時で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だと考えています。	0.010	0.320	-0.089	0.324	0.216
5. 人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局は無駄だという気がします。	0.103	0.013	0.231	0.309	0.160
29. 自分がどんなに頑張って努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろうという気がします。	0.265	0.012	0.073	0.304	0.169
固 有 値 因子寄与率	3.415 11.40%	1.830 6.10%	1.580 5.30%	1.347 4.50%	説明率 27.20%

■ 学部別にみる生き方意識のちがい

梶田（1990）の生き方意識の調査結果によれば、性差がみられる。そこで、学部間のちがいを検討する場合も、性差を考え、学部×性別による2元配置分散分析を用いて、学部別の生き方意識のあり方の特徴をみることにした。

シニシズム・無力感については、性差に有意な主効果がみられるが、学部および学部と性差の交互作用はみられない。調査対象の学部が、文学部、法学部、医学部、工学部であり、男女の人数差がかなり大きいので、はっきりとは言えないかもしれないが、女性が男性に比べて、世の中をあざけりわらい、またそのことと関連して、精神的に生きようとはしていないことが窺える。

表3 生き方意識ANOVAの結果（シニシズム・無力感）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
学部	2.93	3	0.98	0.98	n.s.
性別	7.59	1	7.59	7.62	p<0.01
学部×性別	0.14	3	0.05	0.47	n.s.
残差	1396.28	1429			
全体	1428.00	1436			

次に、**自己の存在意義・目的感覚**については、学部有意な主効果がみられ、性差および交互作用には有意な差はみられない。因子得点は、医学部（0.19）が最も高く、法学部（0.06）、文学部（-0.04）、工学部（-0.08）の順である。これは、大学教育における目的性や卒業後につく職業の特性を反映しているのかもしれない。特に医学部にこのことはあてはまるであろう。

表4 生き方意識ANOVAの結果（自己の存在意義・目的感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
学部	11.65	3	3.88	3.90	p<0.01
性別	0.83	1	0.83	0.83	n.s.
学部×性別	1.80	3	0.60	0.60	n.s.
残差	1424.46	1429			
全体	1438.98	1436			

第Ⅲ因子である**自己の可能性**については、学部および交互作用に有意な差がみられ、性差には有意差はみられない。学部別では、医学部（0.12）、文学部（-0.03）、工学部（-0.06）、法学部（-0.12）という得点の順である。これは、自己の存在意義・目的感覚と同じく、医学部だけが突出している。このことは、医学部への進学動機などと関係することであろうが、中学校・高校における進路選択・指導、職業選択指導などのあり方も踏まえた今後の研究と関連することである。しかしながら、学部間にこのような意識の差があることは大学教育における職業選択指導などを考える必要があることを示唆しているのではないだろうか。

また、自己の可能性については交互作用がみられるが、医学部（0.45）および工学部（0.70）の女子の得点が極めて高い。文学部のみが男子（0.05）は女子（-0.24）よりも得点が高い。女子の法学部、医学部、工学部への進学については、目的意識や自己の可能性を追求しようとする意識が働き、現在に至っていることが窺える。

表5 生き方意識ANOVAの結果(自己の可能性)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
学部	14.77	3	4.92	5.00	p<0.01
性別	0.02	1	0.02	0.02	n.s.
学部×性別	9.57	3	3.19	3.24	p<0.05
残差	1407.57	1429			
全体	1432.63	1436			

最後に、自己受容にかかわる感覚については、性差に主効果がみられ、学部および交互作用はみられない。これは、第I因子と同様、人数差が大きいためはっきりとは言えないが、女子(-0.17)は男子(0.01)にくらべて現状を受け容れがたいようである。このことは、会社における女性の待遇など、日本社会の風土を反映しているとも考えられる。

表6 生き方意識ANOVAの結果(自己受容にかかわる感覚)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
学部	1.19	3	0.40	0.39	n.s.
性別	3.19	1	3.19	3.17	p<0.1
学部×性別	0.54	3	0.18	1.77	n.s.
残差	1437.99	1429			
全体	1443.80	1436			

以上から、自己の存在意義や目的感覚については、職業要因が影響していると考えられる。また、自己の可能性において、医学部および工学部における女子の得点の高さは、明確にはいえないが、偏差値の高低が女子にとっては自己の可能性を追求することと関係していること、また男子学生が大勢を占める工学部への進学ということが同様に自己の可能性の追求と関連することが窺われる。したがって、大学教育の中身よりも学部に対するラベリングや学部と職業との関連性などが、生き方意識に影響を与えていると思われる。

■ 卒業年度別にみる生き方意識のちがい

次に、1953年度から10年ごとのコホート間の生き方意識のちがいをみてみる。分析は(1)と同様である。

その結果、シニシズム・無力感については、卒業年度に主効果が見られるが、性差の主効果および交互作用はみられない。卒業年度別のコホートの因子得点は、93年度(0.38)、83年度(0.12)、73年度(0.03)、63年度(-0.20)、53年度(-0.21)の順に低くなっている。すなわち、若い世代ほど、世の中あるいは自分の生き方に対し、冷笑的であり、無力感を感じている。

表7 生き方意識ANOVAの結果(シニシズム・無力感)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
卒業年度	55.06	4	13.77	14.34	p<0.01
性別	0.10	1	0.10	0.10	n.s.
学部×性別	1.51	4	0.38	0.39	n.s.
残差	1378.81	1436			
全体	1443.72	1445			

次に、自己の存在意義・目的感覚については、卒業年度には有意に主効果がみられ、性差の主効果も有意な傾向

がみられる。有意な交互作用もみられる。因子得点をみてみると、53年度(0.27)だけがプラス得点であり、他のコホートはマイナス得点である。また、卒業年度別の得点の男女差は、世代が若くなるにつれて小さくなっている。すなわち、男子に比べて、女子は自らの生き方の目標とする人物を持ち、生かされている自己という感覚を強く持っていたが、その差がなくなりつつあることを示している。女子については、50代の大学進学状況から現在の大学進学状況への変化のあらわれととらえることができる。

表8 生き方意識ANOVAの結果(自己の存在意義・目的感覚)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
卒業年度	36.45	4	9.11	9.40	p<0.01
性別	3.23	1	3.23	3.33	p<0.1
学部×性別	15.51	4	3.88	4.00	p<0.01
残差	1392.46	1436			
全体	1445.58	1445			

自己の可能性については、卒業年度と性差の主効果がみられ、交互作用はみられない。因子得点をみてみると、53年度(-0.20)、63年度(-0.10)、73年度(-0.03)、83年度(0.20)、93年度(0.22)と世代が若くなるにつれて、得点は高くなっている。30代までは自分の可能性を追求しようとするチャレンジ精神が窺えるが、40代以降では自己の可能性を追求しようとする意識はみられなくなる。生涯学習の時代と言われながらも、自らの可能性を追求するという意味でのサクセスフル・エイジングということはまだまだということなのだろうか。また、男子の得点が女子よりも高く、世代間の差と同様のことが、女子により強くみられる。

表9 生き方意識ANOVAの結果(自己の可能性)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
卒業年度	45.51	4	11.38	11.69	p<0.01
性別	7.27	1	7.27	7.47	p<0.01
学部×性別	3.44	4	0.86	0.88	n.s.
残差	1397.67	1436			
全体	1447.28	1445			

最後に、自己受容にかかわる感覚については、卒業年度別にのみ主効果がみられ、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、53年度(0.21)、63年度(0.02)、73年度(0.02)、83年度(-0.14)、93年度(-0.19)と世代が若くなるにつれて低くなっている。若い世代ほど、現状に満足せず、さらに自分を生かすことのできる場合があるという感覚を持っているようである。

表10 生き方意識ANOVAの結果(自己受容に関わる感覚)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
卒業年度	25.41	4	6.46	6.54	p<0.01
性別	0.21	1	0.21	0.22	n.s.
学部×性別	1.73	4	0.43	0.44	n.s.
残差	1417.73	1436			
全体	1448.87	1445			

以上の結果は、項目別にみた生き方意識のあり方とほぼ同じ結果を示していると言える。注目されることは、自己の存在意義にかかわることや自己の可能性について、性差がみられることである。自己の存在意義に関しては交互作用もみられる。いまさら改めて言うことでもないが、女性の社会進出という時代の流れを受けて、若い世代は

ど自己の可能性の追求や自己の存在意義についての意識の違いは小さくなりつつある。見方を変えれば、50代以上には性差はあり、ある意味では日本人の生き方意識は変化の過渡期にあると言えるのかもしれない。

§ 大学教育への満足度と生き方意識

最後に、大学教育への満足度と生き方意識との関係を見る。大学教育への満足度の指標として、次の4つを用いた。

- ① 卒業した学部・学科に対する満足度
- ② 大学4年間を振り返っての全体的に授業（講義・演習など）に対する満足度
- ③ 一般教養課程の授業（講義・演習など）に対する満足度
- ④ 専門課程の授業（講義・演習など）に対する満足度

この4つの指標に対する、満足（非常に満足とまあまあ満足）、何ともいえない（以後中間と称す）、不満足（あまり満足していないと全く満足していない）の3段階の満足度によって調査対象者をグルーピングし、性差との2元配置分散分析を行なった。

■ 卒業した学部・学科に対する満足度

シニシズム・無力感について、学部・学科への満足度と性差の有意な主効果がみられ、交互作用はみられない。因子得点をみると、不満足(0.36)、中間(-0.03)、満足(-0.03)であり、不満足グループは冷笑的な態度をとる傾向や無力感が高いようである。

表11 生き方意識ANOVAの結果（シニシズム・無力感）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F値	
卒業した学部・学科に対する満足度	15.01	2	7.51	7.60	$p < 0.01$
性別	6.27	1	6.27	6.35	$p < 0.05$
満足度×性別	0.30	2	0.15	0.15	n.s.
残差	1417.20	1435			
全体	1440.40	1440			

次に、自己の存在意義・目的感覚は、学部・学科への満足度の主効果がみられ、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、中間(-0.19)、不満足(-0.01)、満足(0.02)であり、中間グループの得点が高他のグループに比べて低くなっている。

表12 生き方意識ANOVAの結果（自己の存在意義・目的感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F値	
卒業した学部・学科に対する満足度	6.72	2	3.36	3.38	$p < 0.05$
性別	1.82	1	1.82	1.83	n.s.
満足度×性別	1.08	2	0.54	0.54	n.s.
残差	1428.91	1435			
全体	1438.10	1440			

自己の可能性については、学部・学科への満足度の主効果がみられ、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、不満足(0.21)、満足(0.01)、中間(-0.19)であり、不満足グループが自己の可能性を追求しようとす

る意識が高いようである。

表13 生き方意識ANOVA の結果（自己の可能性）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
卒業した学部・学科に対する満足度	11.04	2	5.52	5.55	p<0.01
性別	0.60	1	0.60	0.60	n.s.
満足度×性別	0.49	2	0.24	0.24	n.s.
残差	1427.96	1435			
全体	1440.03	1440			

最後に、自己受容にかかわる感覚では、学部・学科への満足度の有意な主効果、性差も主効果の有意な傾向がみられるが、交互作用はみられない。因子得点をみると、満足(0.06)、不満足(-0.11)、中間(-0.32)であり、満足グループに比べて現実を受容しているように考えられる。

表14 生き方意識ANOVA の結果（自己受容に関わる感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
卒業した学部・学科に対する満足度	19.95	2	9.98	10.14	p<0.01
性別	2.82	1	2.82	2.86	p<0.1
満足度×性別	1.78	2	0.89	0.91	n.a.
残差	1412.17	1435			
全体	1439.12	1440			

以上の結果から、大学教育の1つの問題点を指摘することができるのではないだろうか。卒業した学部・学科に満足しているグループは、現状を受け容れ、また自分が生かされているという現実を肯定的にとらえているのに対し、不満足グループは自分の可能性を追求しようとする意識が高く、しかし世間に対して冷笑的な態度をもつ傾向がみられる。このことは、大学教育が必ずしも個々の学生の可能性を伸ばすようには機能していないこと、また、結果として何事にも無力感におそわれる卒業者は大学教育に満足はしていないということを意味するのではないだろうか。すなわち、学部教育が必ずしも実践性を伴っていないということと個々の学生のニーズや欲求も必ずしも満足していないということが考えられる。

言うまでもなく、卒業者が現状から判断して大学教育への満足・不満足という評価を下していることは十分に考えられる。現状が満足いくものではない場合、その要因としての大学教育が不十分と理由づけられ、その結果として不満足グループが冷笑的であり、その裏返しとして可能性を追い求めているということである。本データからは、どちらかの判断はつけかねるが、少なくとも大学教育が個々のニーズにどの程度対応できていたか、あるいは学問の実践性という点を疎かにしていなかったか、などは大学改革を考えるうえで検討すべき要件であろう。

■ 大学4年間を振り返っての全体的に授業（講義・演習など）に対する満足度

(1)を踏まえて、具体的に授業（講義・演習など）に対する満足度と生き方意識との関係をみてみよう。まず、シニシズム・無力感について、全体の授業への満足度と性差に有意な主効果がみられ、交互作用はみられない。因子得点をみると、不満足(0.22)、中間(0.01)、満足(-0.06)であり、不満足グループは冷笑的な態度をとる傾向や無力感が高いようである。

表15 生き方意識ANOVA の結果（シニシズム・無力感）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
授業全体に対する満足度	12.98	2	6.49	6.59	$p<0.01$
性別	6.45	1	6.45	6.55	$p<0.05$
満足度×性別	1.93	2	0.97	0.98	n.a.
残差	1403.16	1424			
全体	1425.84	1429			

次に、**自己の存在意義・目的感覚**は、全体の授業への満足度に主効果がみられ、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、中間(-0.16)、不満足(-0.03)、満足(0.06)であり、中間グループの得点が他のグループに比べて低くなっている。

表16 生き方意識ANOVA の結果（自己の存在意義・目的感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
授業全体に対する満足度	11.52	2	5.76	5.79	$p<0.01$
性別	1.46	1	1.46	1.47	n.s.
満足度×性別	0.00	2	0.00	0.00	n.s.
残差	1415.07	1424			
全体	1427.99	1429			

自己の可能性については、全体の授業への満足度の主効果に有意傾向がみられ、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、不満足(0.13)、満足(-0.02)、中間(-0.05)であり、不満足グループが自己の可能性を追求しようとする意識が高いようである。

表17 生き方意識ANOVA の結果（自己の可能性）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
授業全体に対する満足度	5.37	2	2.69	2.70	$p<0.1$
性別	0.77	1	0.77	0.77	n.s.
満足度×性別	0.02	2	0.01	0.01	n.s.
残差	1418.85	1424			
全体	1424.76	1429			

最後に、**自己受容にかかわる感覚**では、全体の授業への満足度に有意な主効果、性差の主効果に有意な傾向がみられるが、交互作用はみられない。因子得点をみると、満足(0.06)、中間(-0.05)、不満足(-0.15)、であり、満足グループが他のグループに比べて現実を受容しているように考えられる。

表18 生き方意識ANOVA の結果（自己受容にかかわる感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
授業全体に対する満足度	8.50	2	2.25	4.26	p<0.05
性別	3.49	1	3.49	3.50	p<0.1
満足度×性別	1.67	2	0.83	0.84	n.a.
残差	1420.81	1424			
全体	1435.11	1429			

以上の結果は、卒業した学部・学科への満足度の違いによる生き方意識のあり方とほとんど同じであると言える。このことは、1つには学部・学科への満足ということは授業（講義・演習など）に満足しているということとほぼ同義であるために、授業への満足度を規準にみた生き方意識のあり方は卒業した学部・学科への満足度による違いとほぼ同じであると考えられる。そこで次節以後、一般教養課程、専門課程に分け、それぞれの課程での授業の満足度と生き方意識との関連をみてみよう。

■ 一般教養課程の授業（講義・演習など）に対する満足度

まず、一般教養課程についての満足度による生き方意識の違いをみてみる。

シニシズム・無力感について、一般教養課程の授業への満足度の主効果に有意傾向、性差な有意な主効果が見られ、交互作用はみられない。因子得点をみると、不満足(0.09)、中間(-0.07)、満足(-0.01)であり、不満足グループは他のグループに比べて、冷笑的な態度をとる傾向や無力感が高いようである。このことは、学部・学科への満足度および全体的な授業への満足度の結果と一致するところである。

表19 生き方意識ANOVA の結果（シニシズム・無力感）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
一般教養の授業に対する満足度	5.37	2	2.68	2.74	p<0.1
性別	7.67	1	7.67	7.82	p<0.01
満足度×性別	0.79	2	0.40	0.40	n.s.
残差	1334.01	1359			
全体	1347.96	1364			

次に、自己の存在意義・目的感覚は、一般教養課程の授業への満足度の主効果がみられ、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、中間(-0.09)、不満足(-0.05)、満足(0.06)であり、中間グループの得点が他のグループに比べて低くなっている。

表20 生き方意識ANOVA の結果（自己の存在意識・目的感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
一般教養の授業に対する満足度	5.78	2	2.89	2.87	p<0.1
性別	2.21	1	2.21	2.20	n.s.
満足度×性別	0.83	2	0.14	0.41	n.s.
残差	1367.20	1359			
全体	1375.79	1364			

自己の可能性については、一般教養課程の授業への満足度の主効果、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点は、不満足(0.08)、満足(0.00)、中間(-0.05)であり、不満足グループが自己の可能性を追求しようとする意識が高いようである。この点は、今までの結果とは食い違うところである。

表21 生き方意識ANOVA の結果 (自己の可能性)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
一般教養の授業に対する満足度	4.22	2	2.11	2.10	n.s.
性別	0.96	1	0.96	0.96	n.s.
満足度×性別	1.94	2	0.97	0.96	n.s.
残差	1367.44	1359			
全体	1367.51	1364			

最後に、自己受容にかかわる感覚では、性差の主効果に有意な傾向が見られるが、一般教養課程の授業への満足度の主効果および交互作用はみられない。因子得点をみると、満足(0.06)、不満足(-0.04)、中間(-0.07)、であり、満足グループが他のグループに比べて現実を受容しているように考えられる。

表22 生き方意識ANOVA の結果 (自己受容に関わる感覚)

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
一般教養の授業に対する満足度	4.05	2	2.02	2.01	n.s.
性別	3.17	1	3.17	3.14	p<0.1
満足度×性別	1.37	2	0.68	0.68	n.s.
残差	1369.15	1359			
全体	1377.98	1364			

以上の結果から、注目すべき点は自己の可能性に関して、満足度に関する違いがみられないことである。一般教養課程での授業の満足度は、必ずしも生き方意識、特に自己の可能性と結び付いたものではないということである。また、自己受容にかかわる感覚も一般教養課程での授業の満足度とは関連がない。これらの点は、一般教育の果たす役割を問われているように思われる。

■ 専門課程の授業（講義・演習など）に対する満足度

シニシズム・無力感について、専門課程の授業への満足度と性差に有意な主効果がみられ、交互作用はみられない。因子得点をみると、不満足(0.25)、中間(0.12)、満足(-0.08)であり、不満足グループと中間グループは冷笑的な態度をとる傾向や無力感が高いようである。また、女子(0.23)は男子(-0.02)より冷笑的態度をとる傾向がみられるようである。

表23 生き方意識ANOVA の結果（シニシズム・無力感）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
専門課程の授業に対する満足度	22.70 2	11.35	11.63	p<0.01	
性別	6.36	1	6.36	6.52	p<0.05
満足度×性別	1.52	2	0.76	0.78	n.s.
残差	1396.28	1430			
全体	1428.00	1435			

次に、**自己の存在意義・目的感覚**は、専門課程の授業への満足度に主効果、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点をみると、中間(-0.09)、不満足(-0.08)、満足(0.03)であり、満足グループの得点が他のグループに比べて高くなっている。

表24 生き方意識ANOVA の結果（自己の存在意義・目的感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
専門課程の授業に対する満足度	4.29	2	2.14	2.14	n.s.
性別	1.52	1	1.52	1.52	n.s.
満足度×性別	2.57	2	1.29	1.29	n.s.
残差	1430.14	1430			
全体	1438.36	1435			

自己の可能性については、専門課程の授業への満足度の主効果、性差の主効果および交互作用はみられない。因子得点をみると、不満足(0.11)、満足(0.00)、中間(-0.09)であり、不満足グループが自己の可能性を追求しようとする意識が高いようである。

表25 生き方意識ANOVA の結果（自己の可能性）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
専門課程の授業に対する満足度	4.51	2	2.26	2.26	n.s.
性別	0.67	1	0.67	0.67	n.s.
満足度×性別	0.09	2	0.04	0.04	n.s.
残差	1429.61	1430			
全体	1434.74	1435			

最後に、**自己受容にかかわる感覚**では、性差の主効果に有意差がみられるが、専門課程の授業への満足度の主効果および交互作用はみられない。因子得点をみると、満足(0.04)、不満足(-0.07)、中間(-0.08)、であり、満足グループが他のグループに比べて現実を受容しているように考えられる。また、女子(-0.17)は男子(0.02)に比べて現状を受容れないようである。

表26 生き方意識ANOVAの結果（自己受容にかかわる感覚）

変和要因	平方和	自由度	平均平方	F 値	
専門課程の授業に対する満足度	3.89	2	1.95	1.95	n.s.
性別	3.88	1	3.88	3.88	p<0.05
満足度×性別	0.08	2	0.04	0.04	n.s.
残差	1429.49	1430			
全体	1437.61	1435			

以上の結果から、専門課程の授業への満足度の違いは、生き方意識とほとんど関連していない。専門課程での学習経験、特に満足－不満足という次元でのとらえは、生き方と結び付いてはいないようである。確かに、各学部での教育の結果、個々の卒業者が獲得したであろう技能や知識は膨大なものがあるにちがいないが、現在の職業上、それがどの程度役に立っているかは定かではない。むしろ、役立っていないことが多く、その結果として専門課程の授業への満足－不満足は生き方意識と関連していないと考えられる。専門性がより明確である専門課程の授業が生き方意識に関連していないことは、今後検討していく必要があるだろう。

生き方意識のあり方をみてみると、時代を反映しているところはあるが、基本的には努力志向、自己の業績重視、あるいは集団のなかでの自己のあり様などは基底として、学部、卒業年度にかかわらず、調査から窺える生き方意識である。また、世代の違いとしては、若い世代ほど個人主義的な傾向がみられること、同時に性差が小さくなりつつあることが示唆されている。

しかしながら、大学教育への満足－不満足という次元と生き方意識との関連をみてみると、驚くほど関連が小さいと言える。むしろ、職業など、大学教育と間接的にかわる要因が生き方意識には影響を与えているように思われる。このことは、言い換えれば、各学部・学科の教育目標あるいは目的性が問われているのである。またそのことは、学生の進学動機にも影響を与えることである。

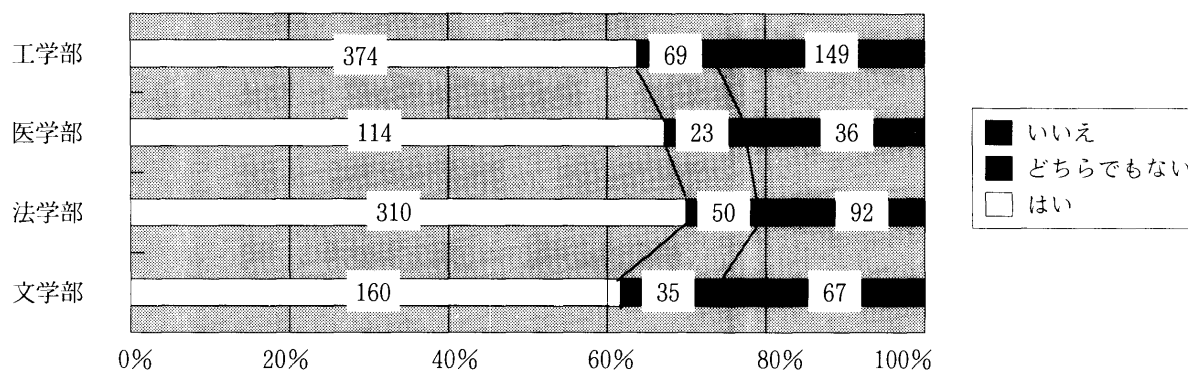
したがって、大学教育が人間の生き方のなかにどう位置づけられるかを今後は考えていく必要があるように思われる。確かに、学問の実践性という点も現実の大学教育では欠落しがちなことであったが、専門的スキルだけを習得させることが大学教育の目的とすれば、大学の専門学校化ということになりかねない。実学ということも組み入れながら、ひとり一人が自分の人生を歩むという観点から、大学教育を見直す必要があることを本研究の結果は分析が不十分であるけれども、示唆しているのではないだろうか。

参 考 文 献

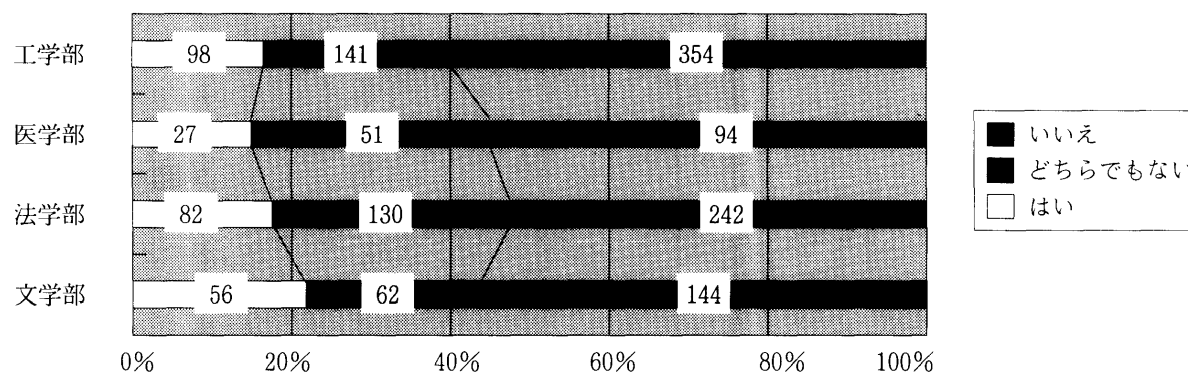
梶田勲一 1990 生き方の心理学 有斐閣選書

資料1 生き方意識について学部別回答率

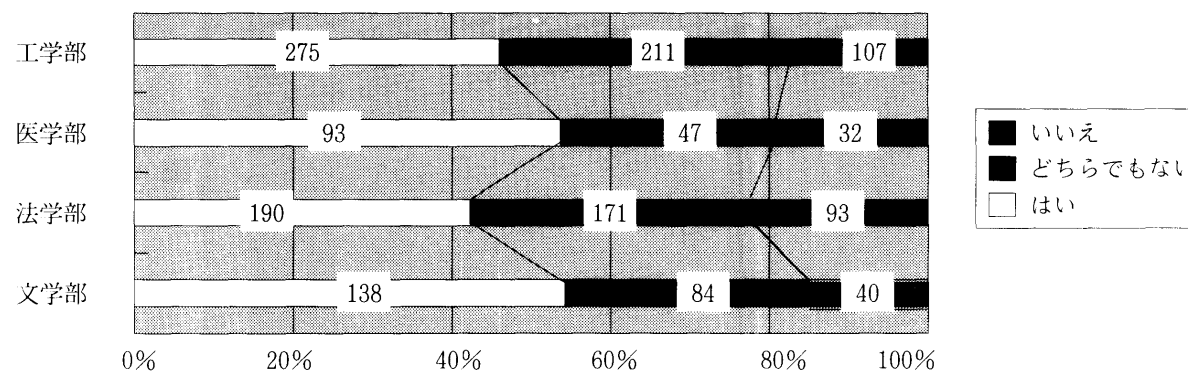
1. わたしは、いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分でいい、と思っています。(n=1,479)



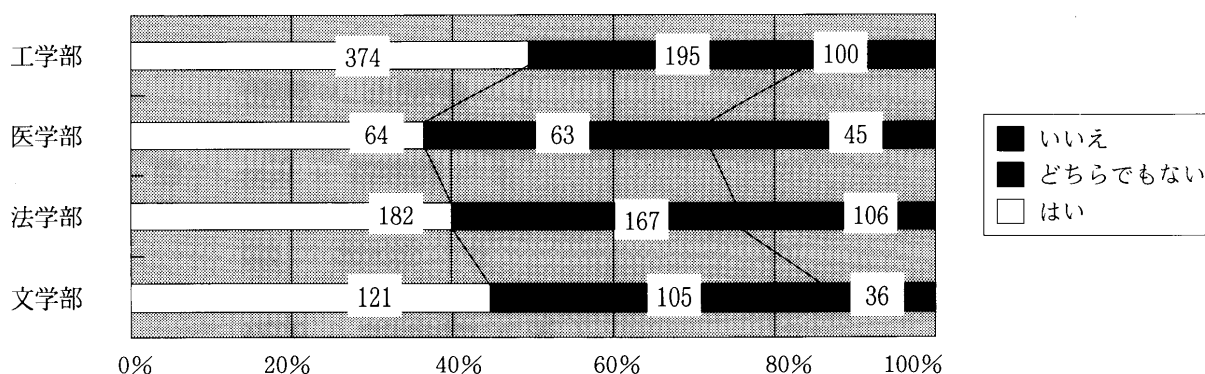
2. わたしは、自分のことをいつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろうと思うことがよくあります。(n=1,481)



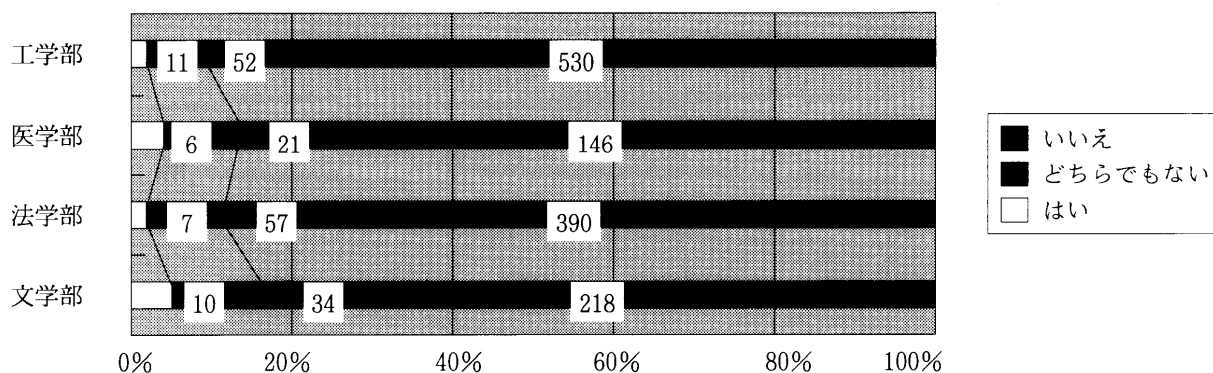
3. わたしは、自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がしています。(n=1,481)



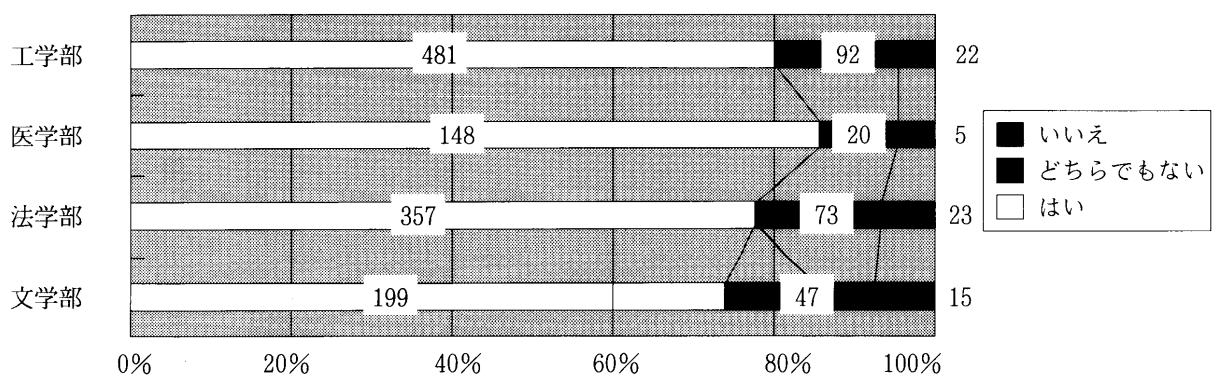
4. わたしは、何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくてはと考えています。(n=1,482)



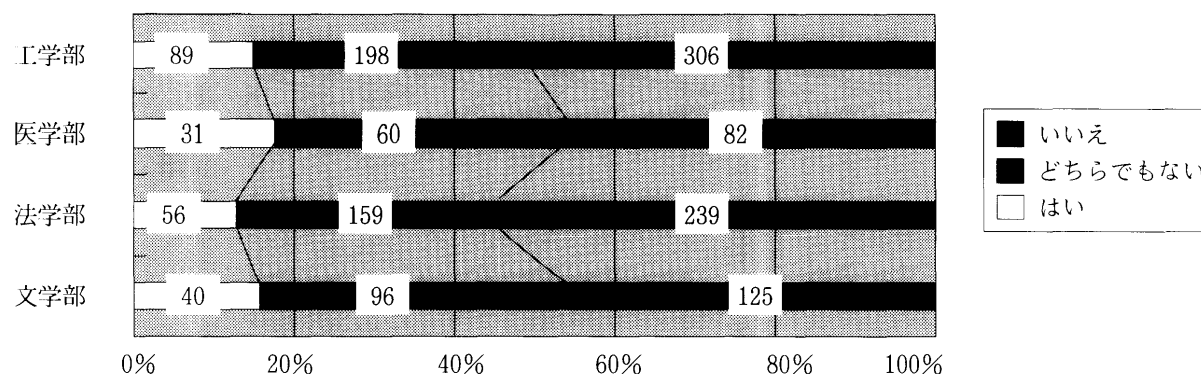
5. わたしは、人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局は無駄だという気がします。(n=1,482)



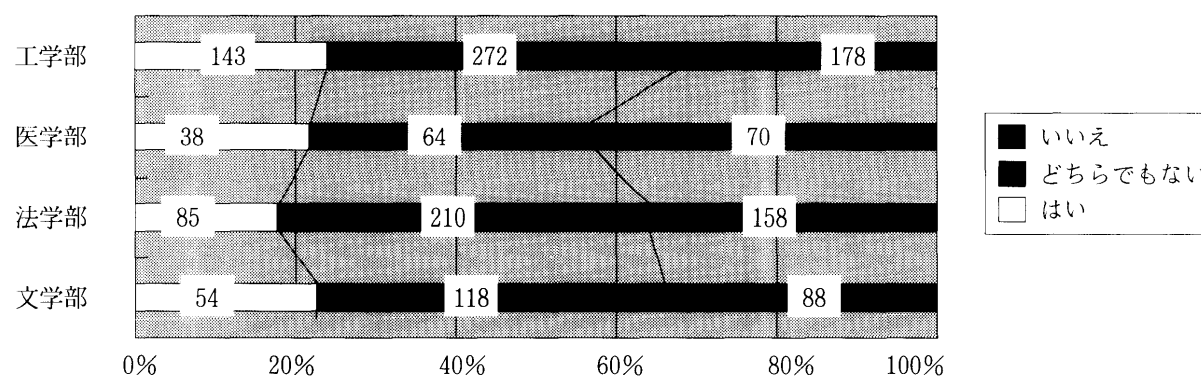
6. わたしは、細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。(n=1,482)



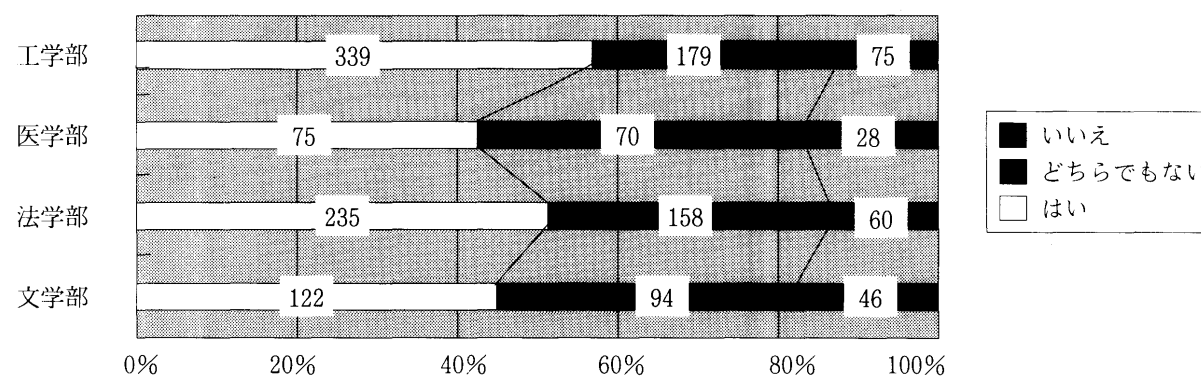
7. わたしは、人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしない利己的な存在だという気がします。
(n=1,481)



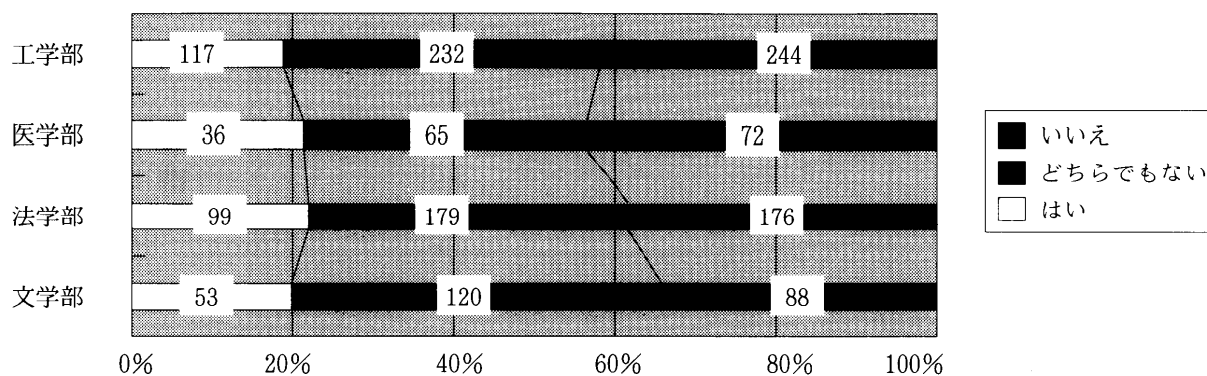
8. わたしは、自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろうという気がしています。(n=1,478)



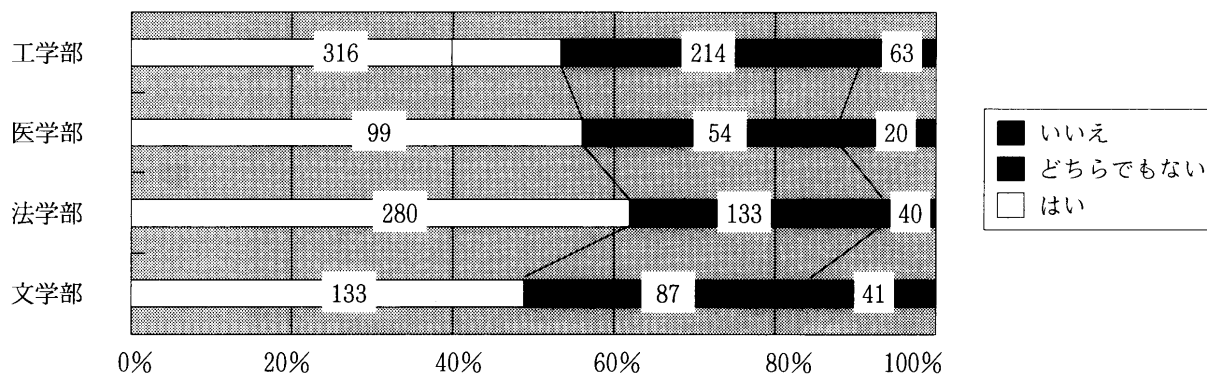
9. わたしは、その時その時で自分なりに精一杯の努力をしていれば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いないと考えています。(n=1,481)



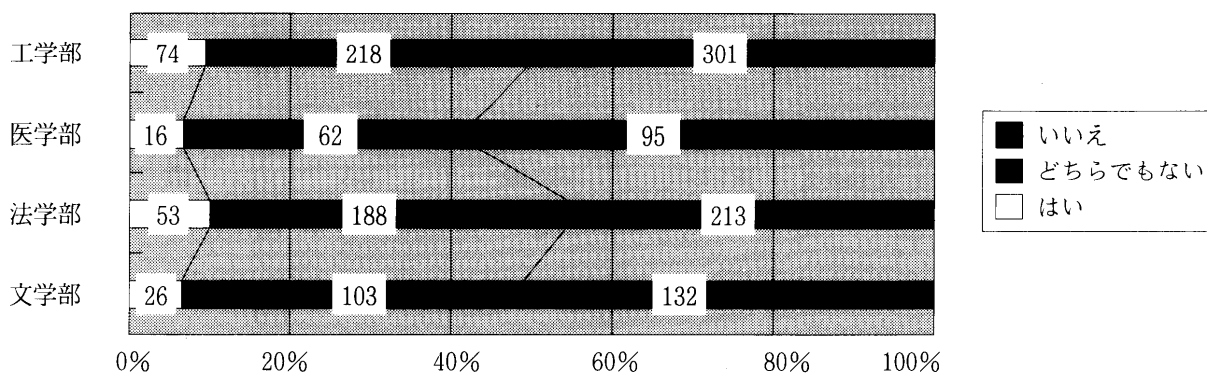
10. わたしは、頑張って節約して財産ができたとしても、結局は元気な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えないで、楽しめる時に精一杯楽しんでおかななくては損だと思います。(n=1,481)



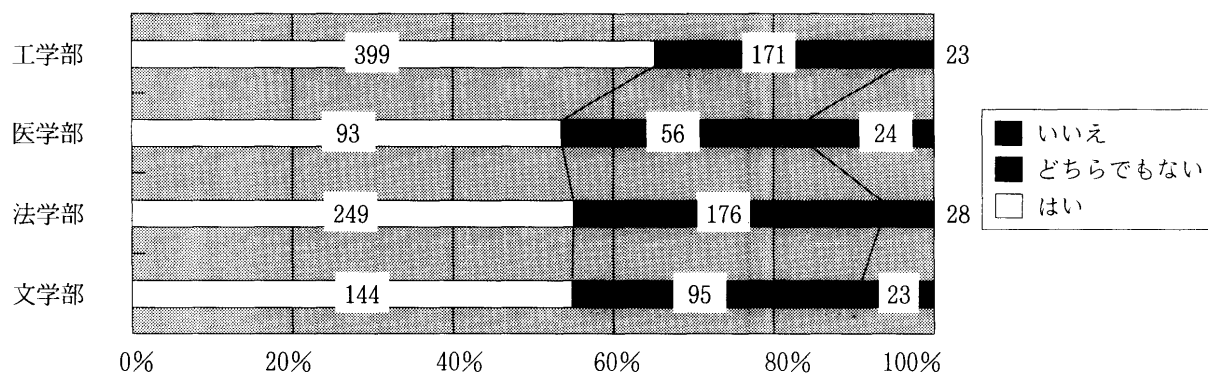
11. わたしは、この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。(n=1,481)



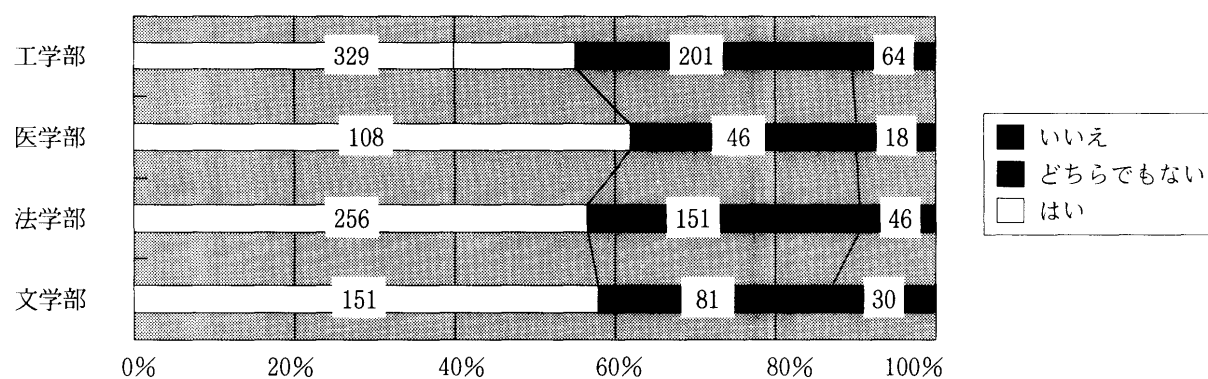
12. わたしは、自分の意見に反対されたり、自分の考えと違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。(n=1,481)



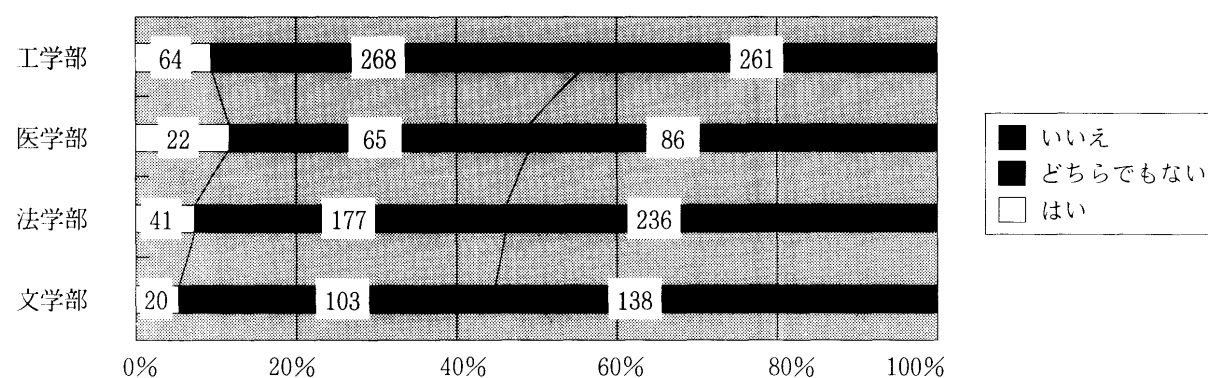
13. わたしは、今までと違う新しいことにチャレンジし、自分の可能性を広げていきたいと考えています。(n = 1,481)



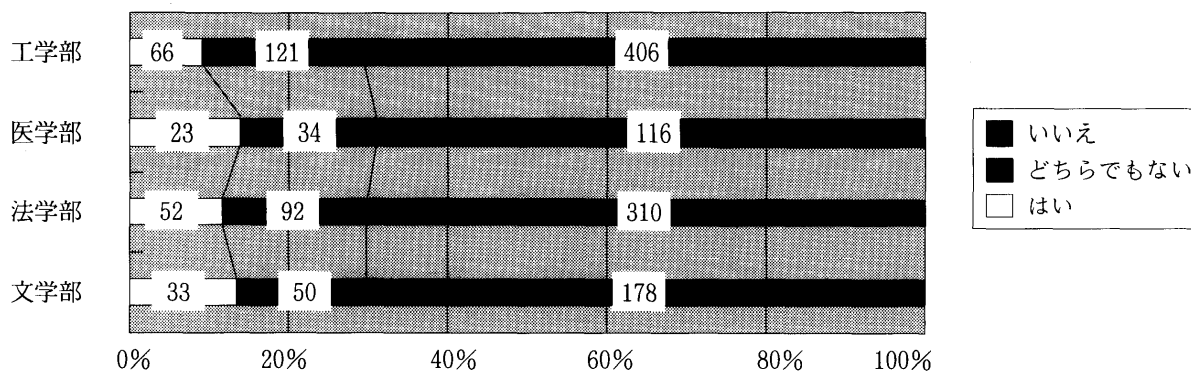
14. わたしは、世間的な意味で成功するかどうかより、その時その時で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だと考えています。(n = 1,481)



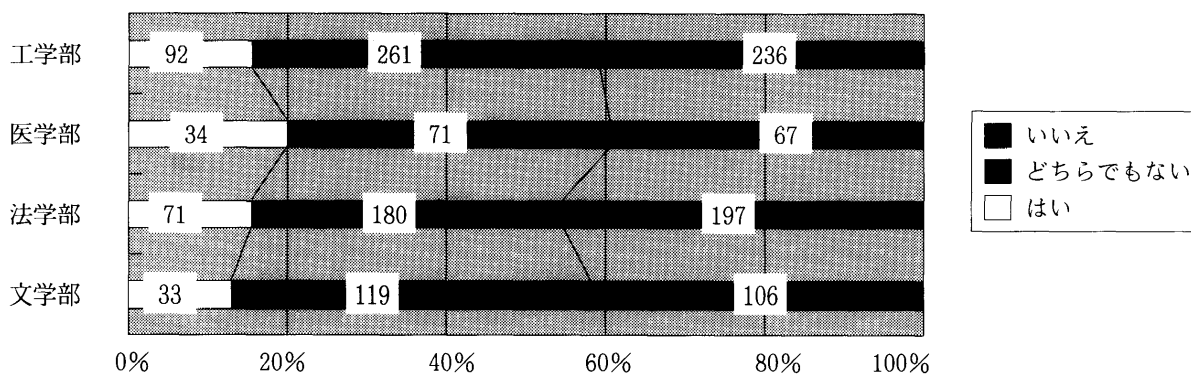
15. わたしは、世間の人はすぐにキレイゴトを言いたがるけれど、結局はだれもお金と快楽と名誉を求めているだけだと思います。(n = 1,481)



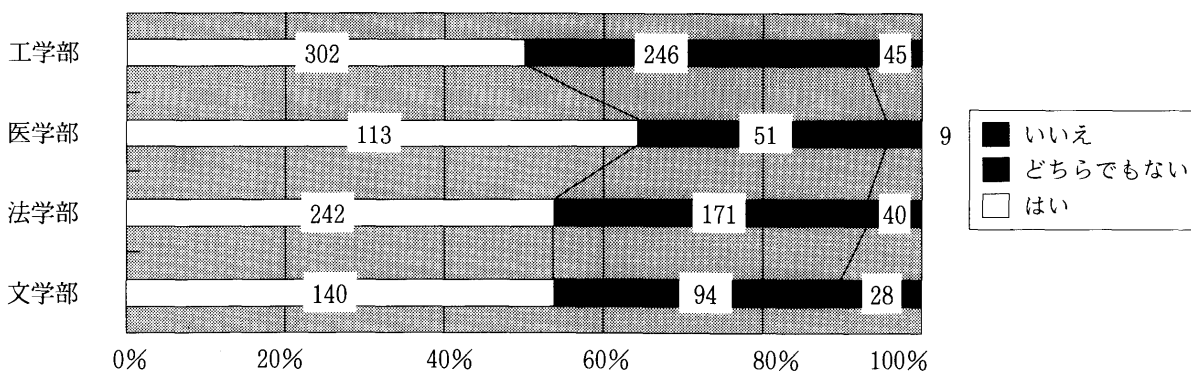
16. わたしは、毎日の生活がどうしてこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろうと嫌になることがあります。(n=1,481)



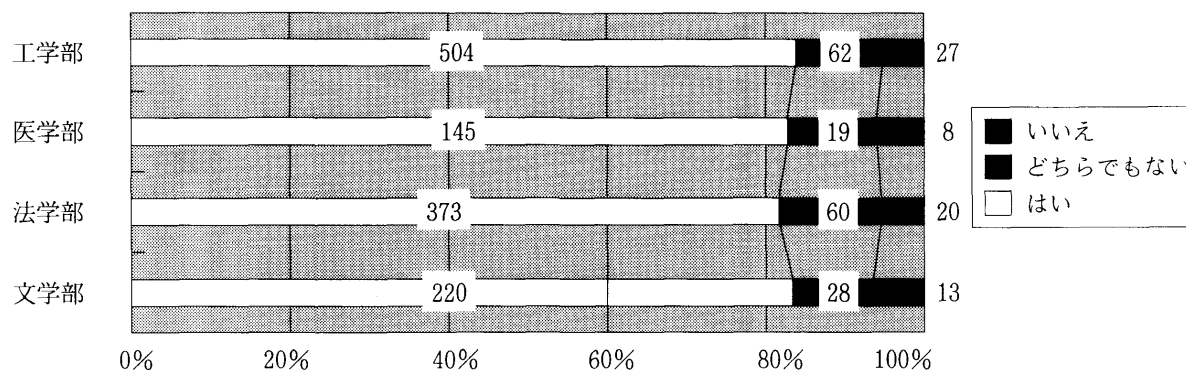
17. わたしは、自分自身のことは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないものだという気がします。(n=1,467)



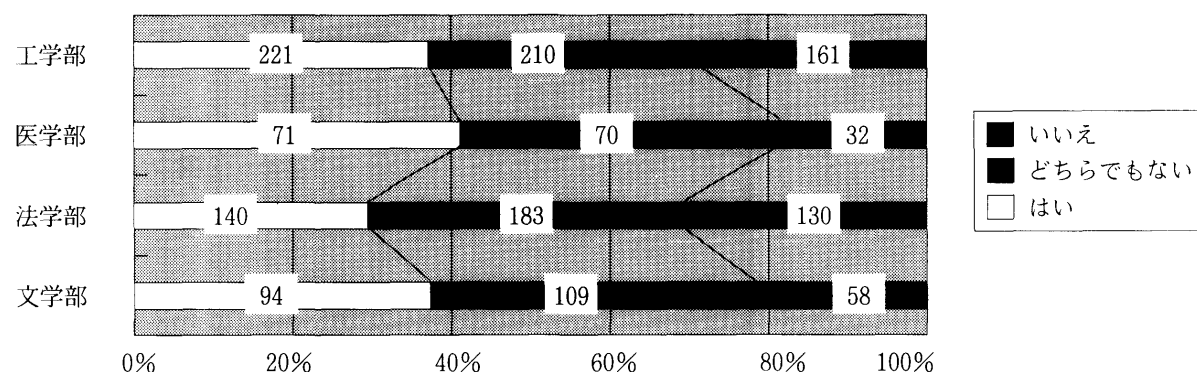
18. わたしは、どんなにささやかなことでもいいから、ほかの人に役立つことを見つけ、責任を持ってやっていかなくてはと考えています。(n=1,481)



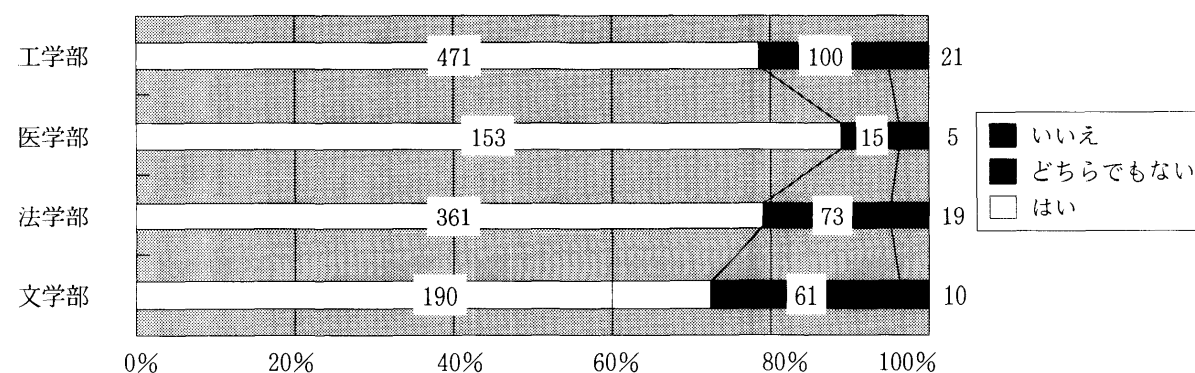
19. わたしは、どんなに小さいことでもいいから、これは自分がやったことだと言えるものを持ちたいと思っています。(n=1,479)



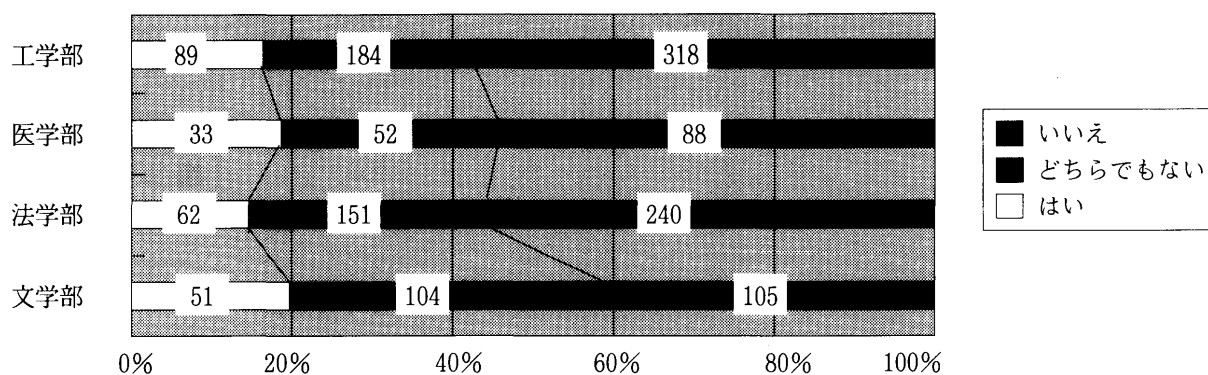
20. わたしは、人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思っています。(n=1,479)



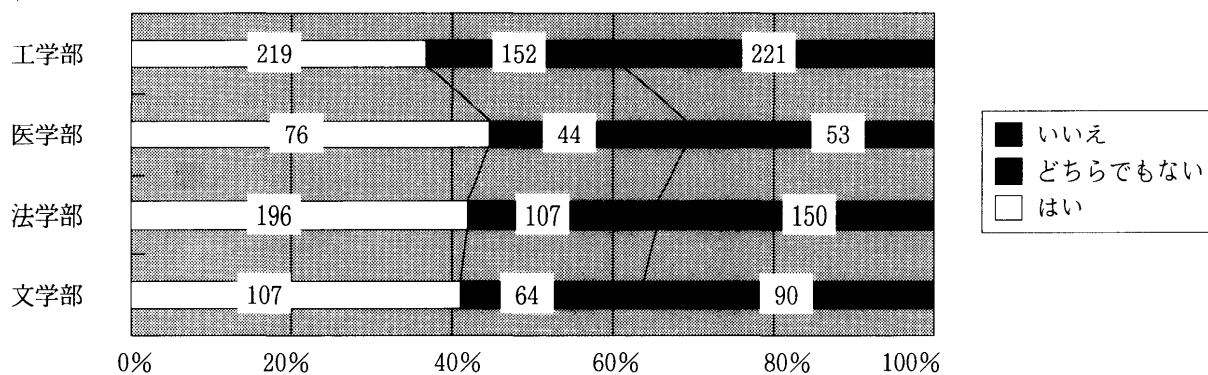
21. わたしは、周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだと思うことがあります。(n=1,479)



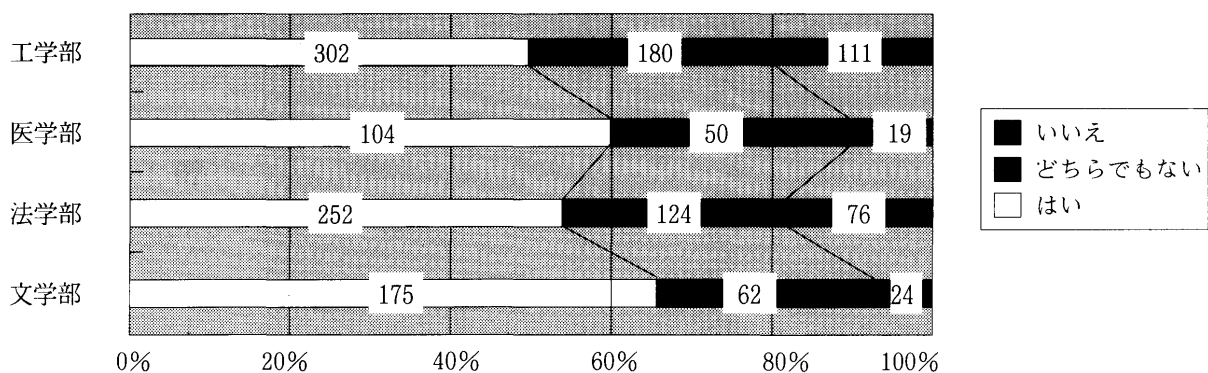
22. わたしは、できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたいと思っています。(n=1,477)



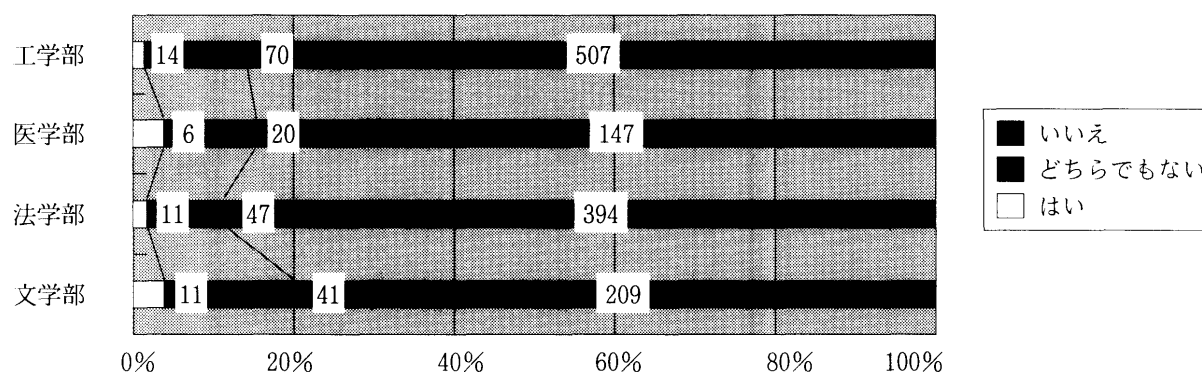
23. わたしは、この人をお手本に生きていきたいと思う人（今の人も昔の人でも、また日本の人でも他の国の人でもよい）を持っています。(n=1,479)



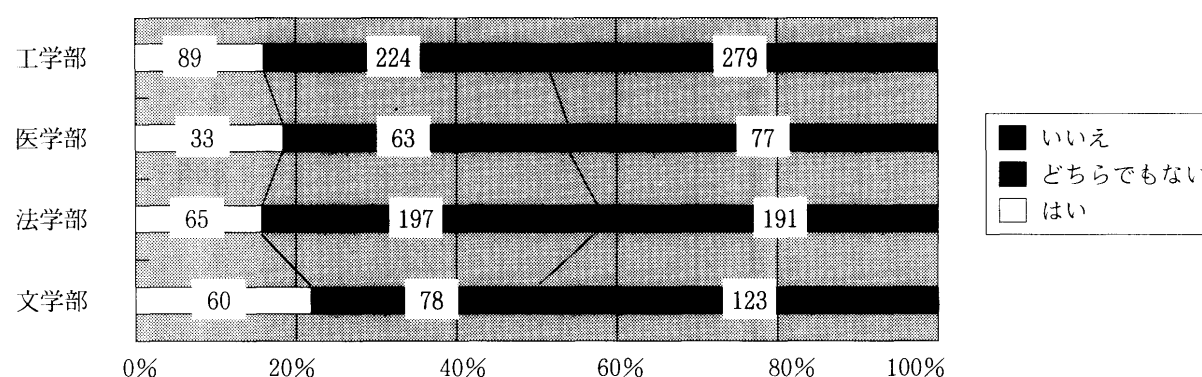
24. わたしは、あまり無理をしないで、自分自身と上手につき合いながらマイペースで少しずつやっていくしかないと考えています。(n=1,479)



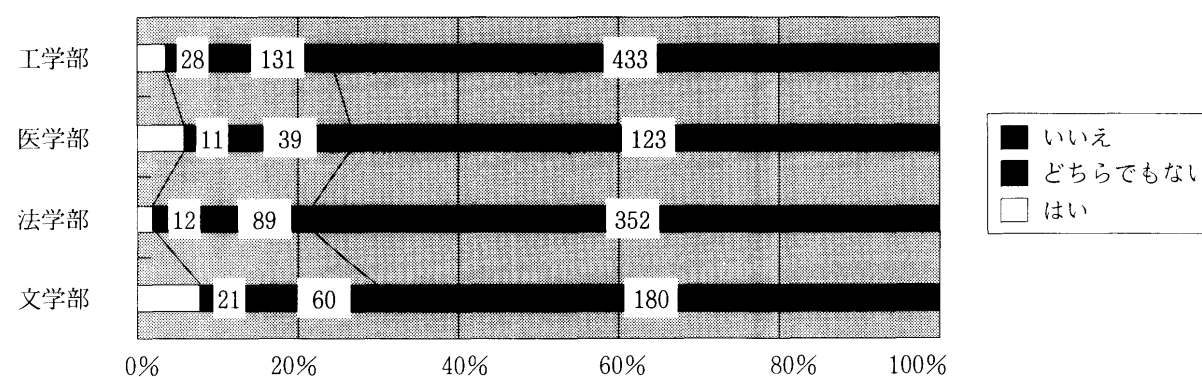
25. わたしは、自分が存在し生きていることには全く何の目的も意味もないという気がしています。(n=1,477)



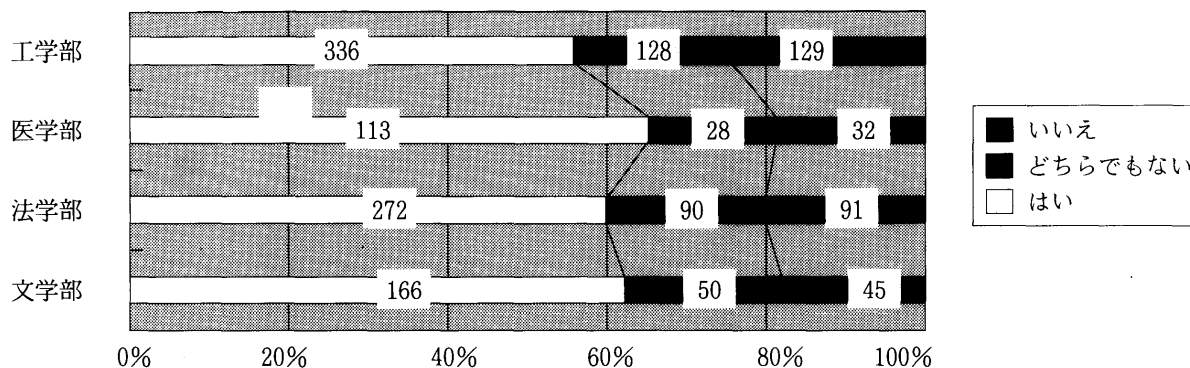
26. わたしは、大自然の力（あるいは神様・仏様など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばいい、と思っています。(n=1,479)



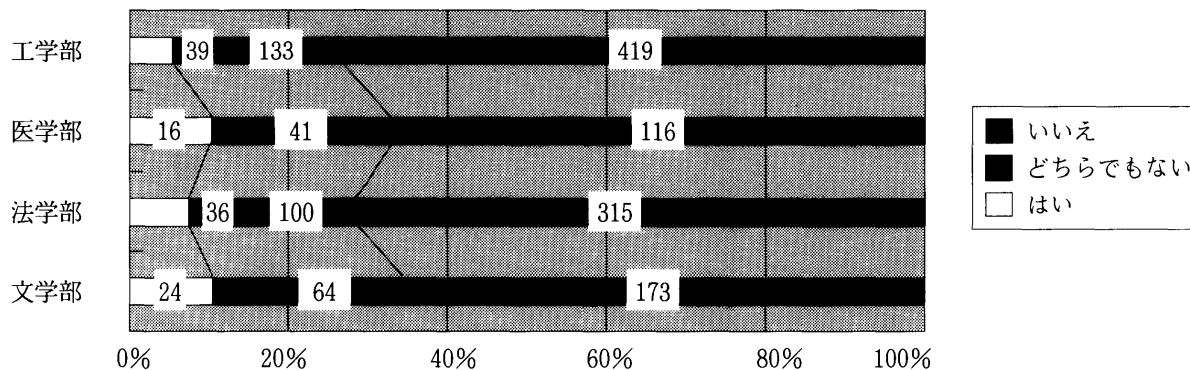
27. わたしは、結局は「自分」などというものは無い、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだという気がしています。(n=1,479)



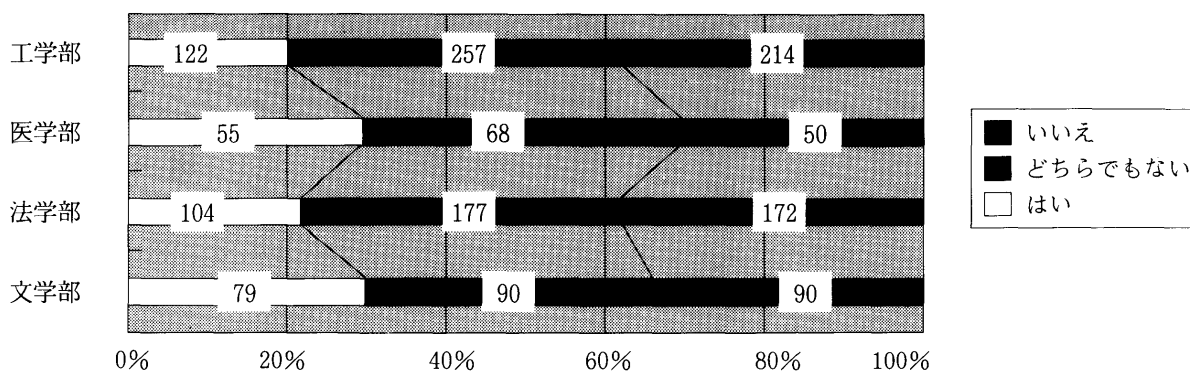
28. わたしは、自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人でも、また日本の人でも他の国の人でもよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。（n=1,480）



29. わたしは、自分がどんなに頑張って努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろうという気がします。（n=1,476）

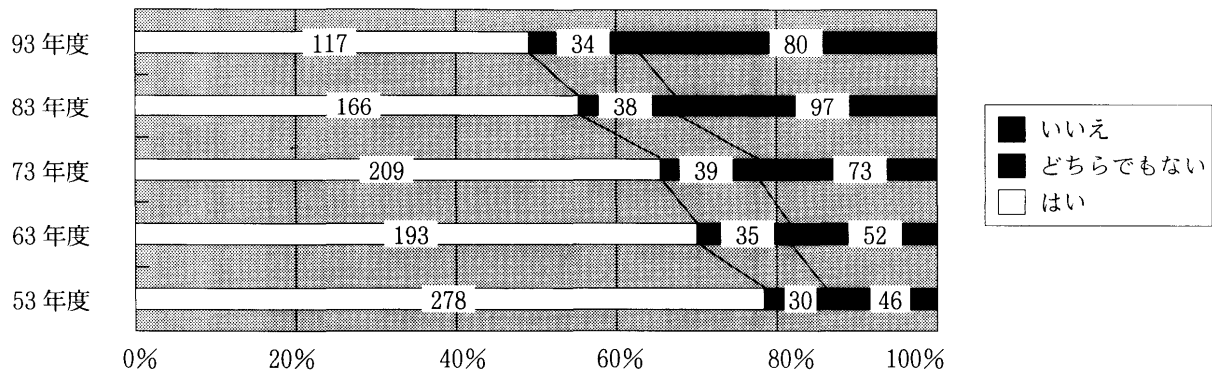


30. わたしは、自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。（n=1,478）

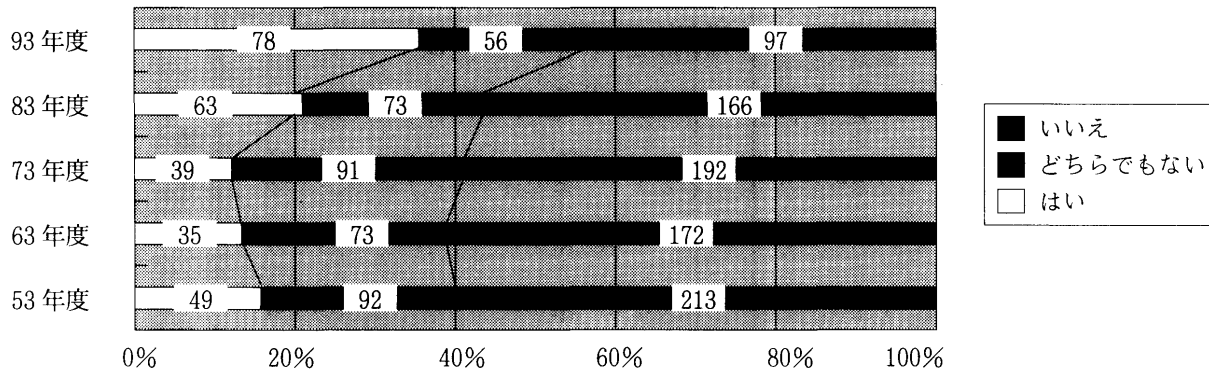


資料2 生き方意識について卒業年度別回答率

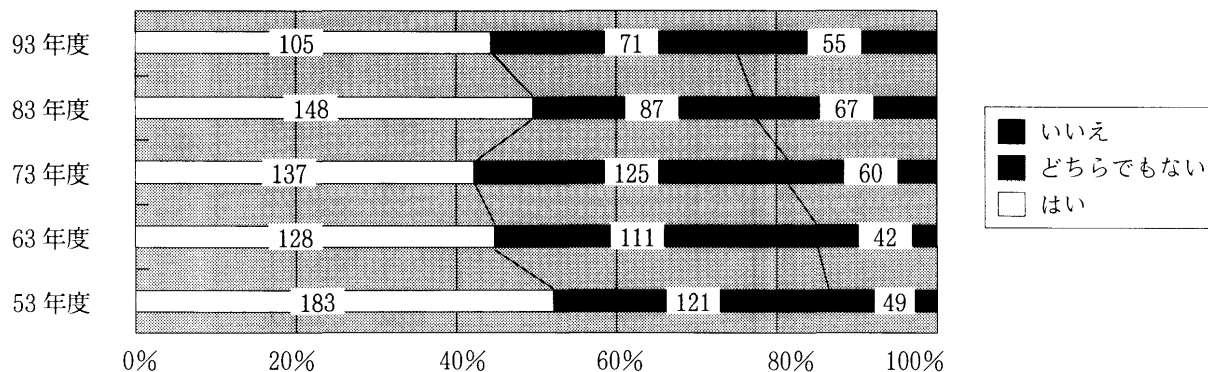
1. わたしは、いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分がいい、と思っています。(n=1,478)



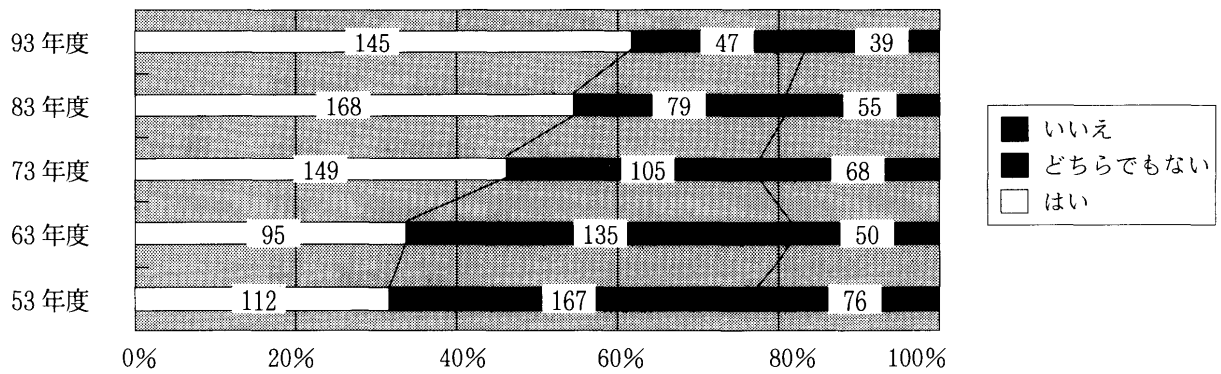
2. わたしは、自分のことをいつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろうと思うことがよくあります。(n=1,489)



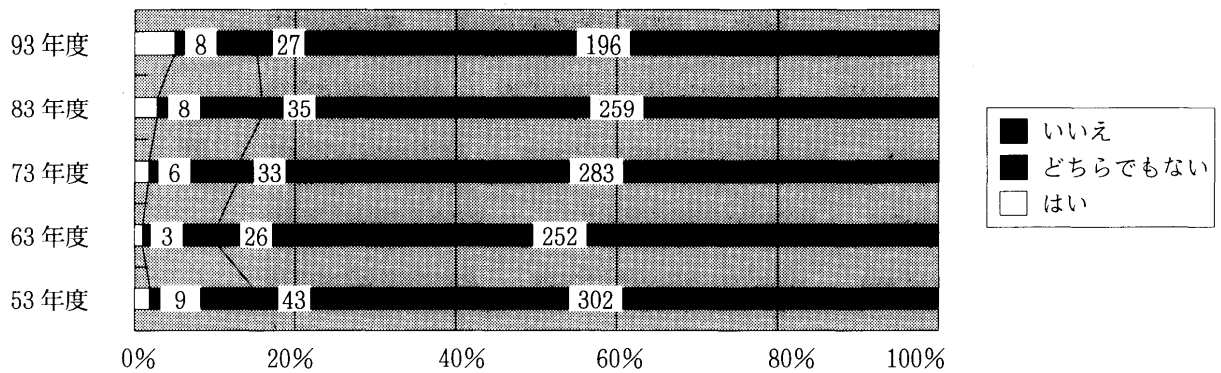
3. わたしは、自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がしています。(n=1,489)



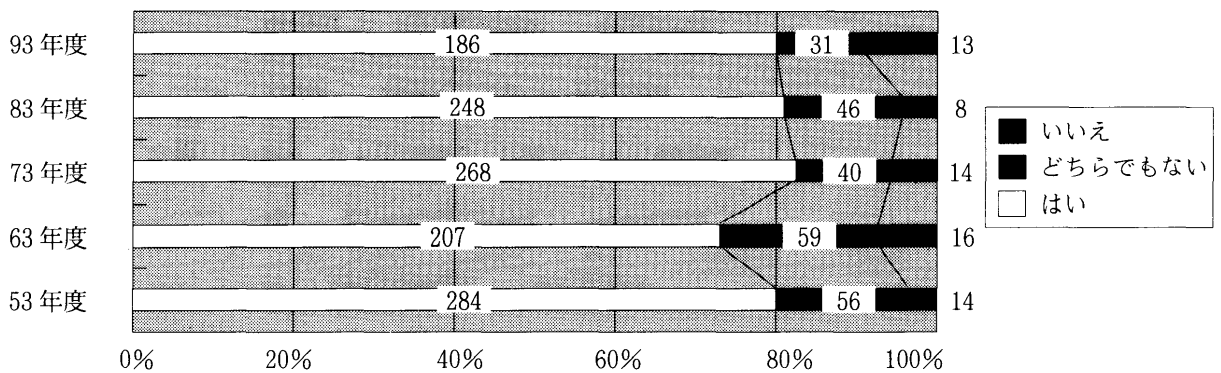
4. わたしは、何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくてはと考えています。(n=1,490)



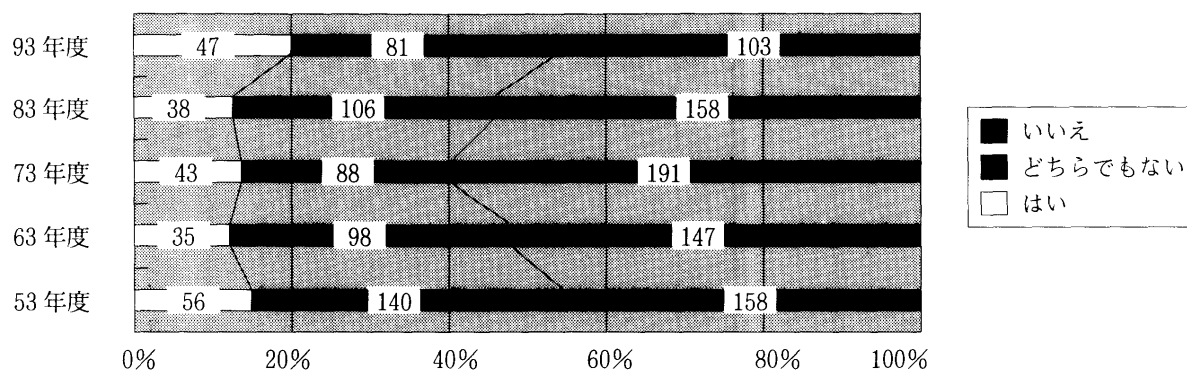
5. わたしは、人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局は無駄だという気がします。(n=1,490)



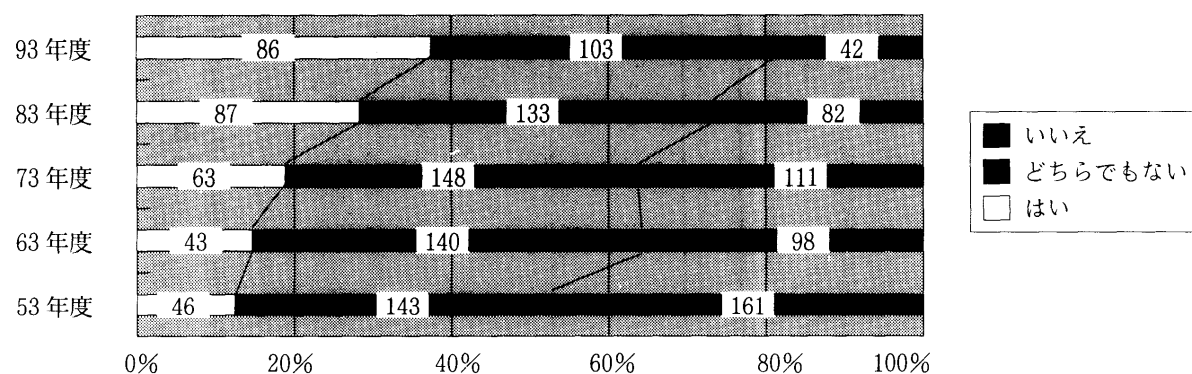
6. わたしは、細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。(n=1,490)



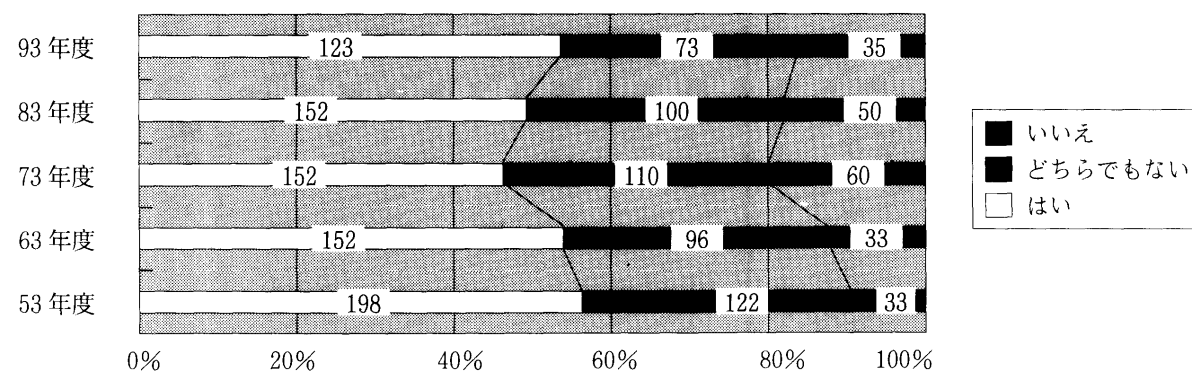
7. わたしは、人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしない利己的な存在だという気がします。
(n=1,489)



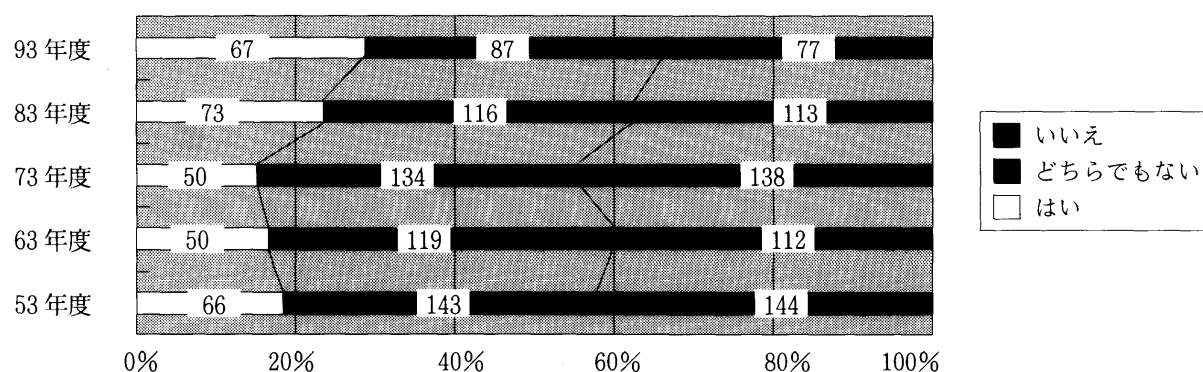
8. わたしは、自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろうという気がしています。(n=1,486)



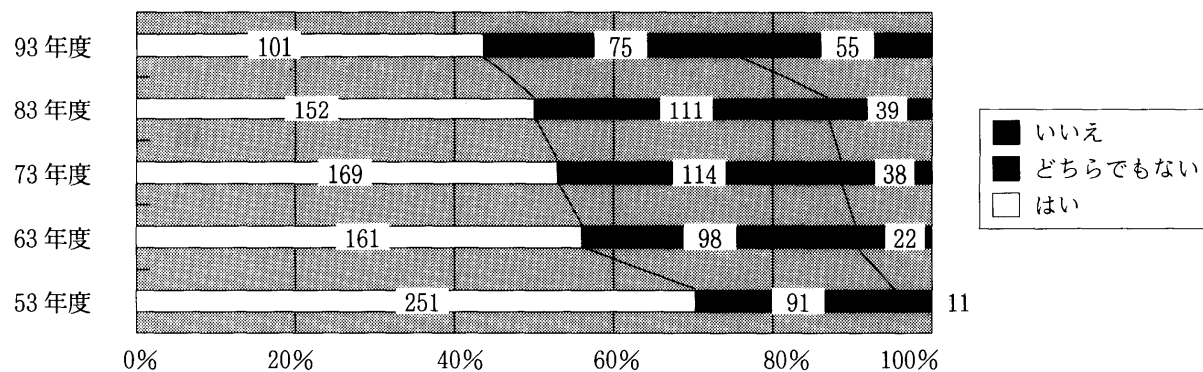
9. わたしは、その時その時で自分なりに精一杯の努力をしていけば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いないと考えています。(n=1,489)



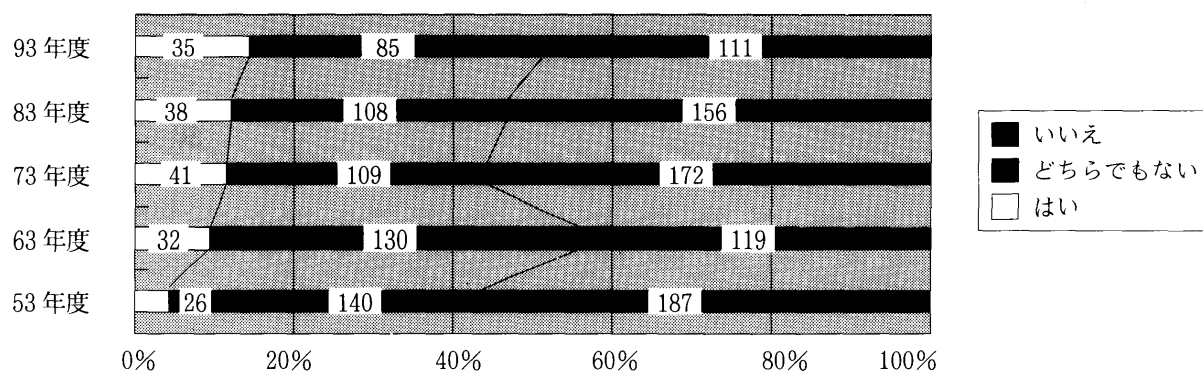
10. わたしは、頑張って節約して財産ができたとしても、結局は元気な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えないで、楽しめる時に精一杯楽しんでおかなくては損だと思います。(n=1,489)



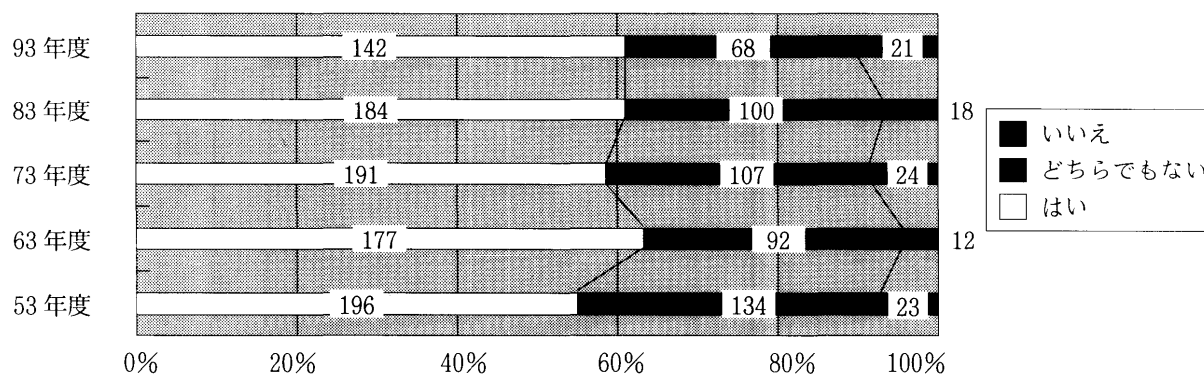
11. わたしは、この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。(n=1,488)



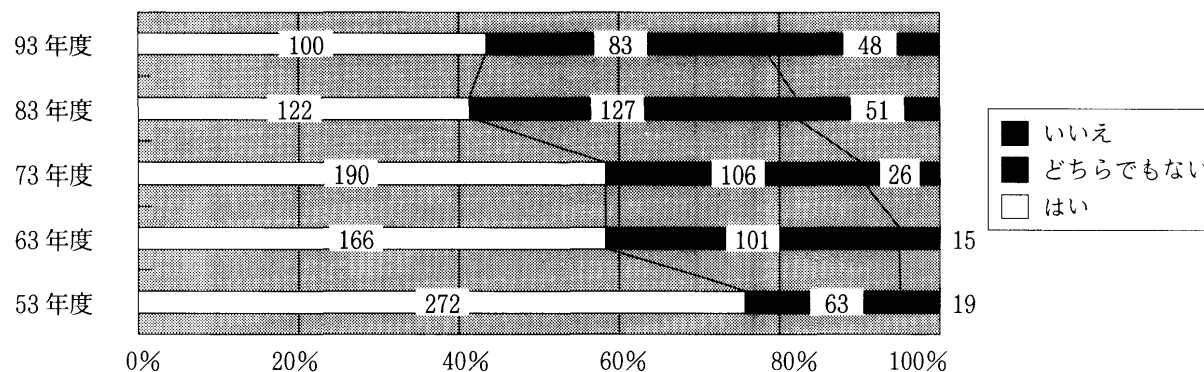
12. わたしは、自分の意見に反対されたり、自分の考えと違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。(n=1,489)



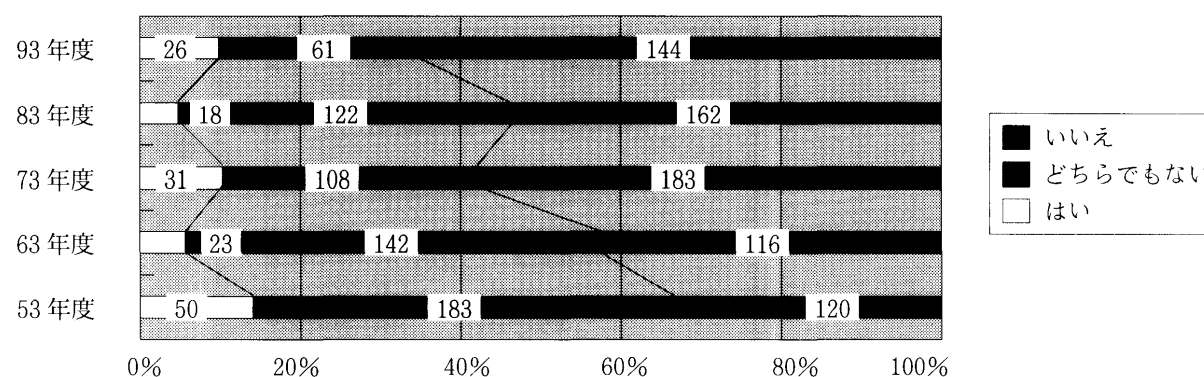
13. わたしは、今までと違う新しいことにチャレンジし、自分の可能性を広げていきたいと考えています。(n = 1,489)



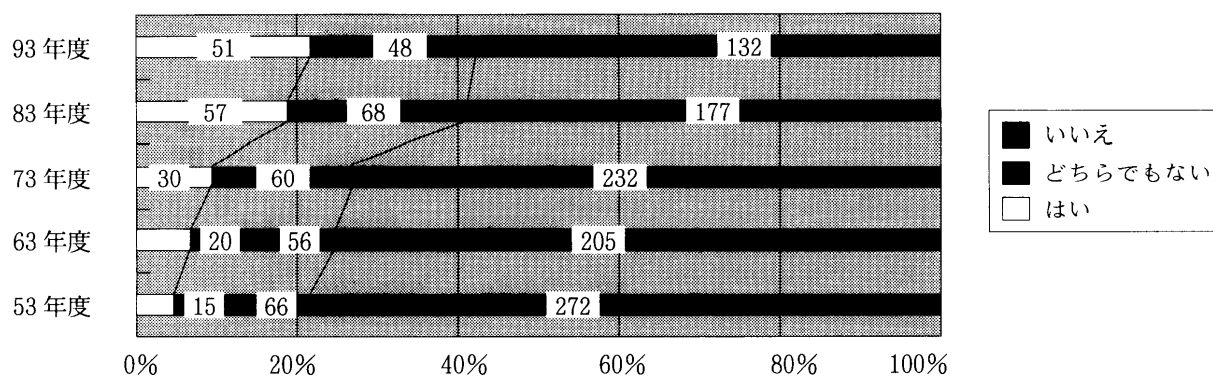
14. わたしは、世間的な意味で成功するかどうかより、その時その時で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だと考えています。(n = 1,489)



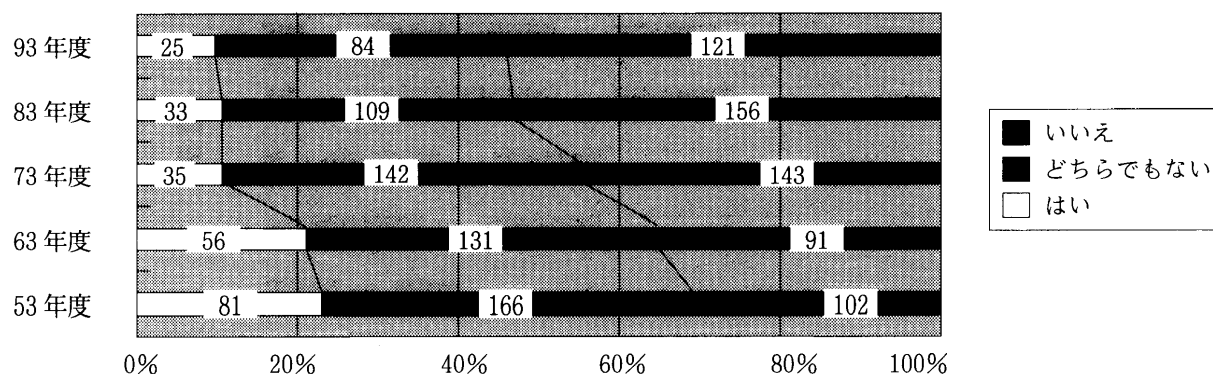
15. わたしは、世間の人はすぐにキレイゴトを言いたがるけれど、結局はだれもお金と快楽と名誉を求めているだけだと思います。(n = 1,489)



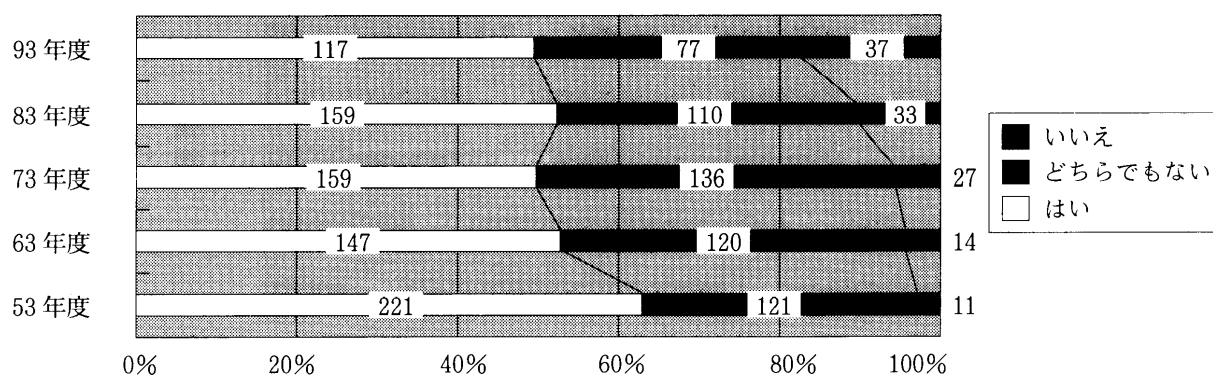
16. わたしは、毎日の生活がどうしてこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろうと嫌になることがあります。(n=1,489)



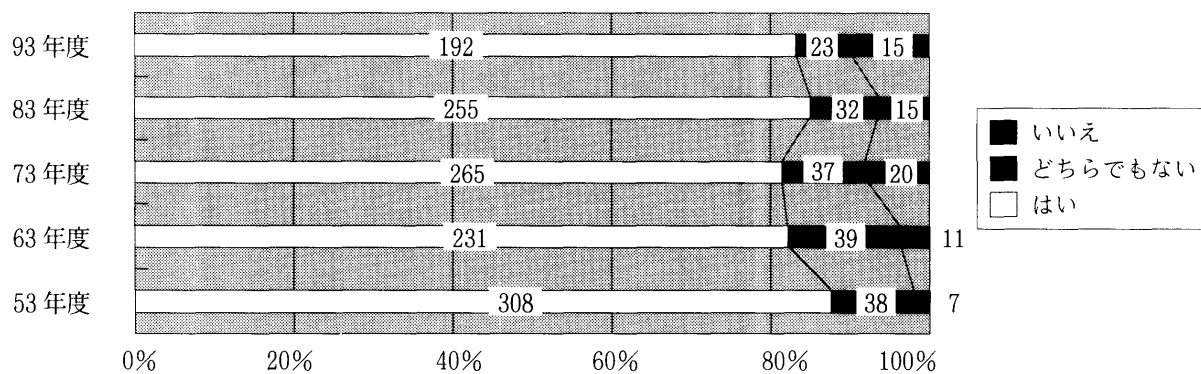
17. わたしは、自分自身のところは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないものだという気がします。(n=1,475)



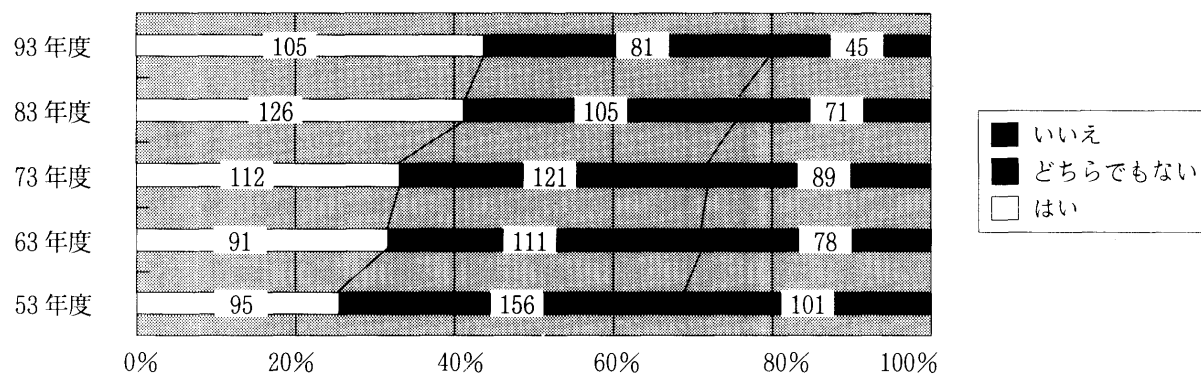
18. わたしは、どんなにささやかなことでもいいから、ほかの人に役立つことを見つけ、責任をもってやっていなくてとは考えています。(n=1,489)



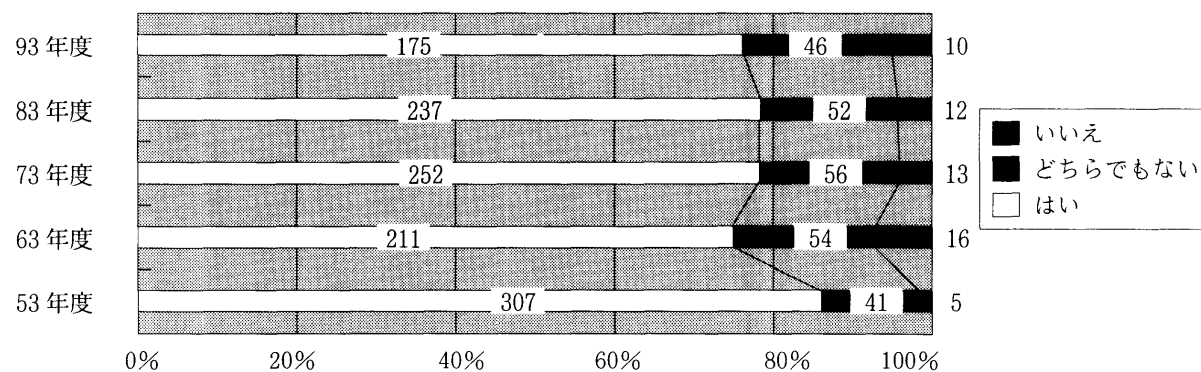
19. わたしは、どんなに小さいことでもいいから、これは自分がやったことだと言えるものを持ちたいと思っています。(n=1,488)



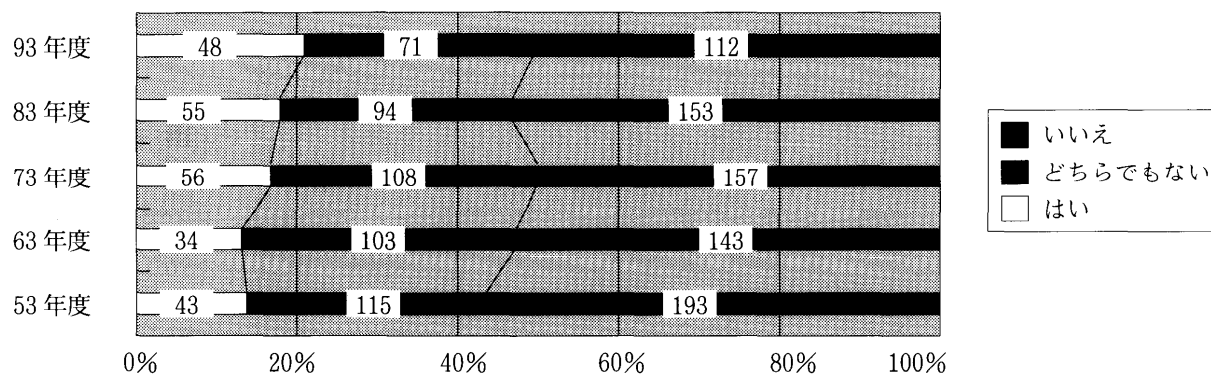
20. わたしは、人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思っています。(n=1,487)



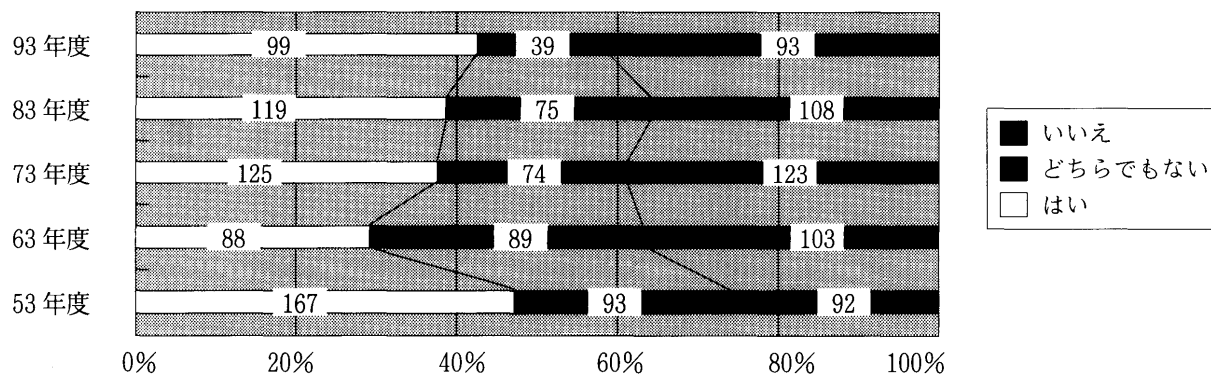
21. わたしは、周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだと思うことがあります。(n=1,487)



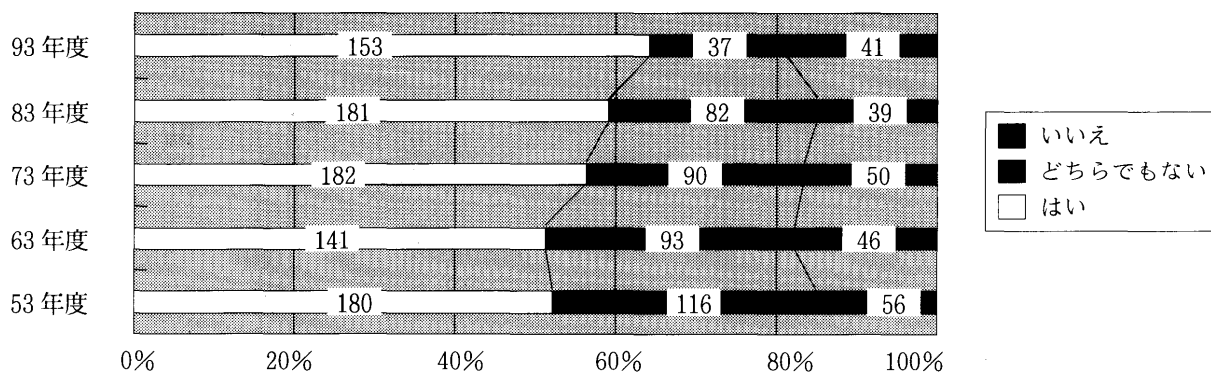
22. わたしは、できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたいと思っています。(n=1,485)



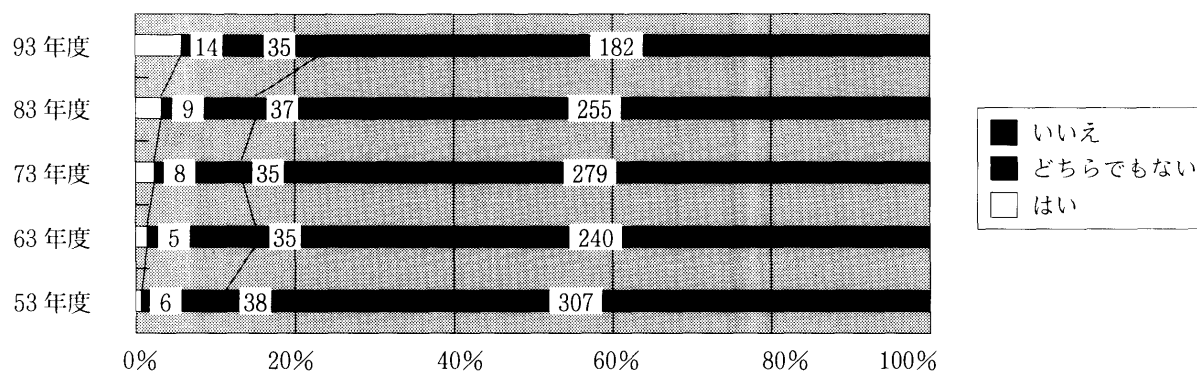
23. わたしは、この人をお手本に生きていきたいと思う人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人もよい）を持っています。(n=1,487)



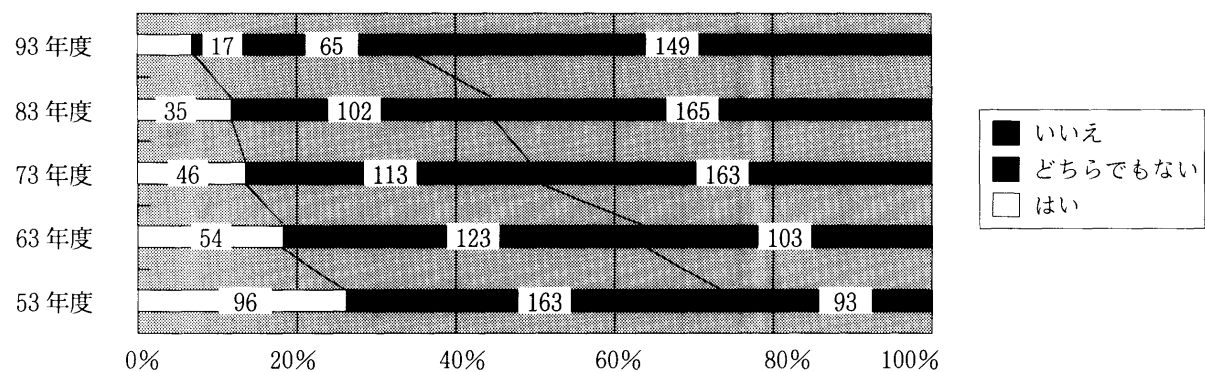
24. わたしは、あまり無理をしないで、自分自身と上手につき合いながらマイペースで少しずつやっていくしかないと考えています。(n=1,487)



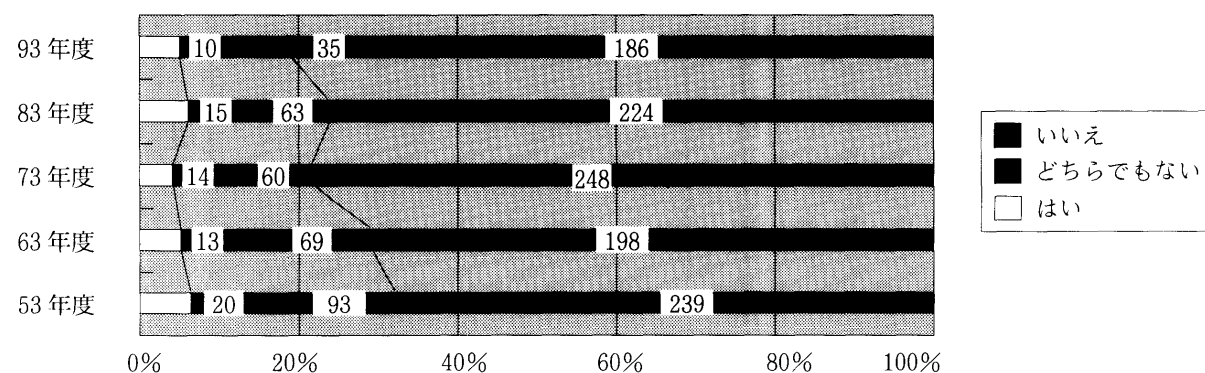
25. わたしは、自分が存在し生きていることには全く何の目的も意味もないという気がしています。(n=1,485)



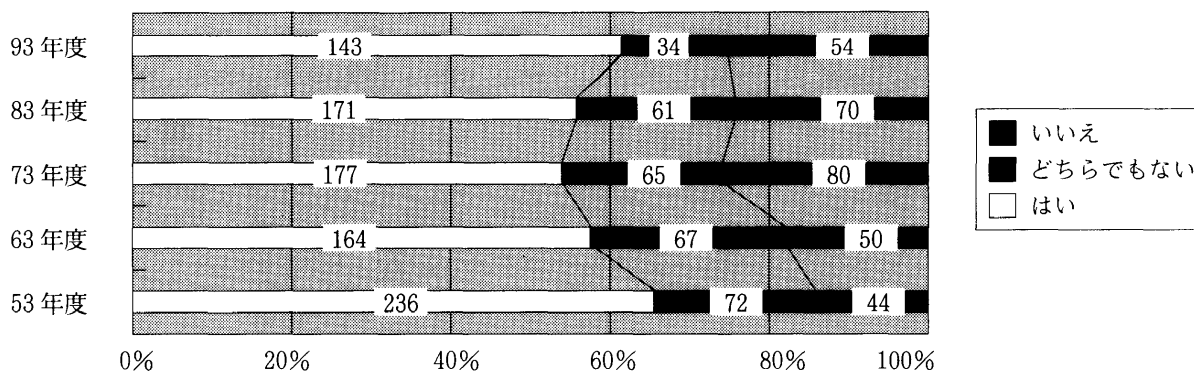
26. わたしは、大自然の力（あるいは神様・仏様など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばいい、と思っています。(n=1,487)



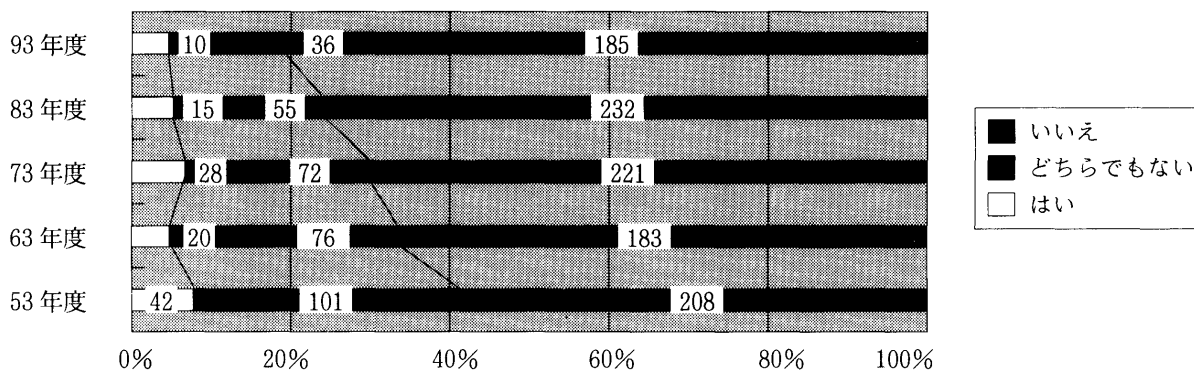
27. わたしは、結局は「自分」などというものは無い、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだという気がしています。(n=1,487)



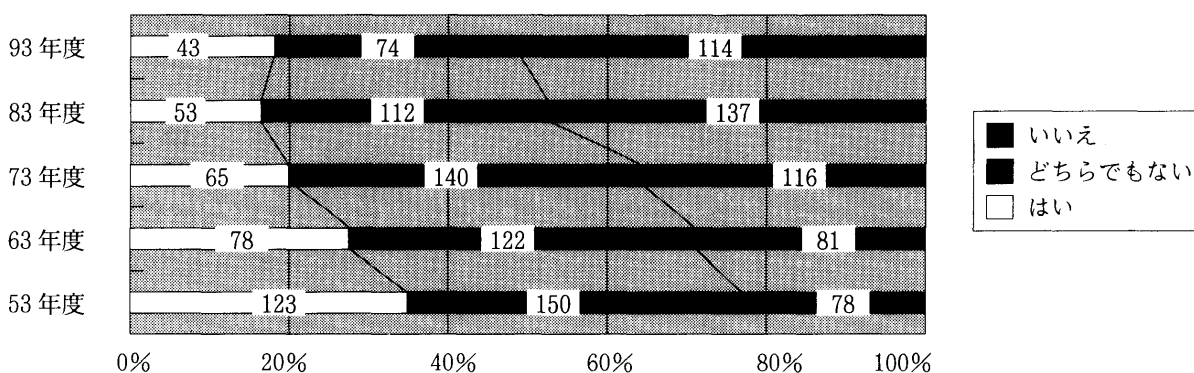
28. わたしは、自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人も、また日本の人でも他の国の人でもよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。（n=1,488）



29. わたしは、自分がどんなに頑張って努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろうという気がします。（n=1,484）

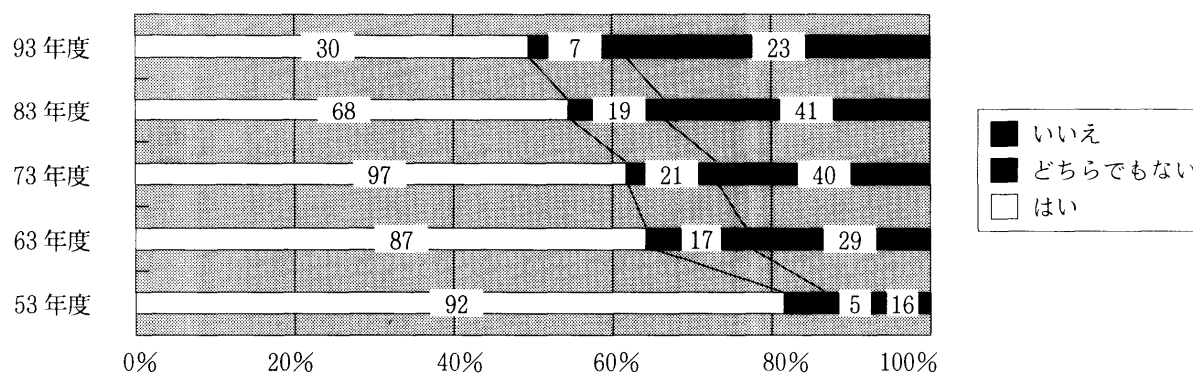


30. わたしは、自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。（n=1,486）

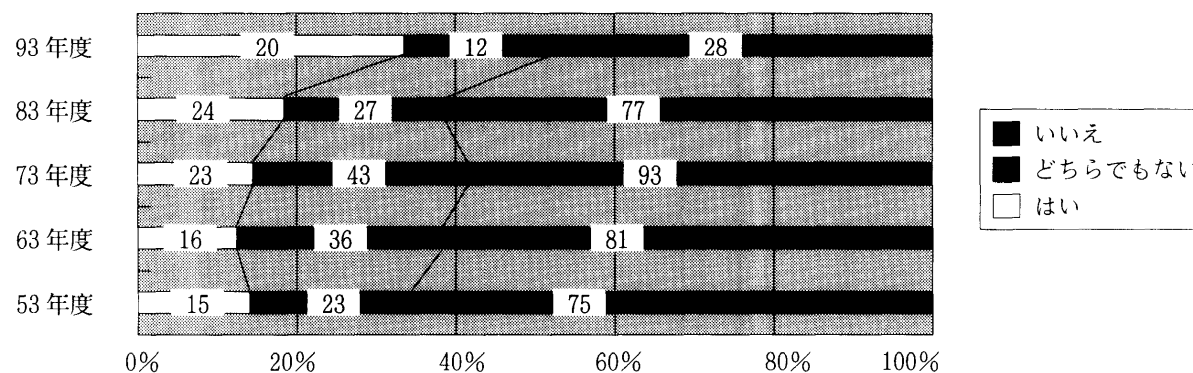


資料3 生き方意識について工学部卒業年度別回答率

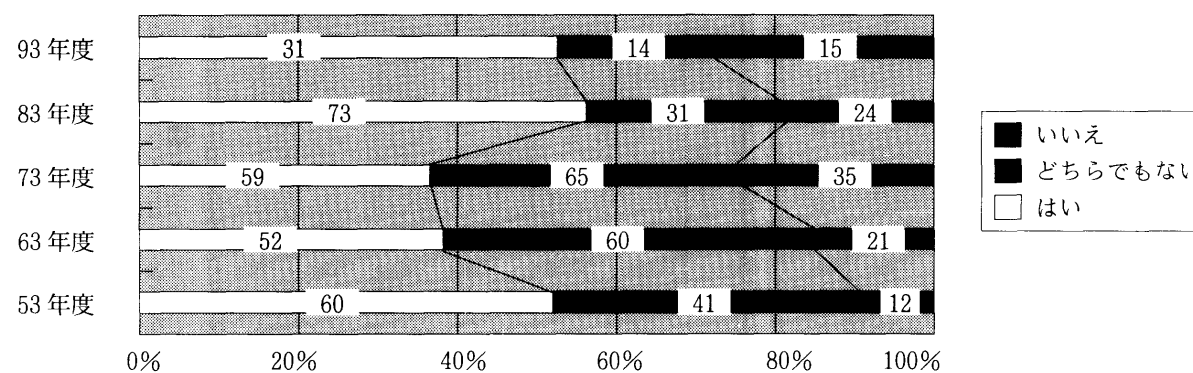
1. わたしは、いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分でいい、と思っています。(n=592)



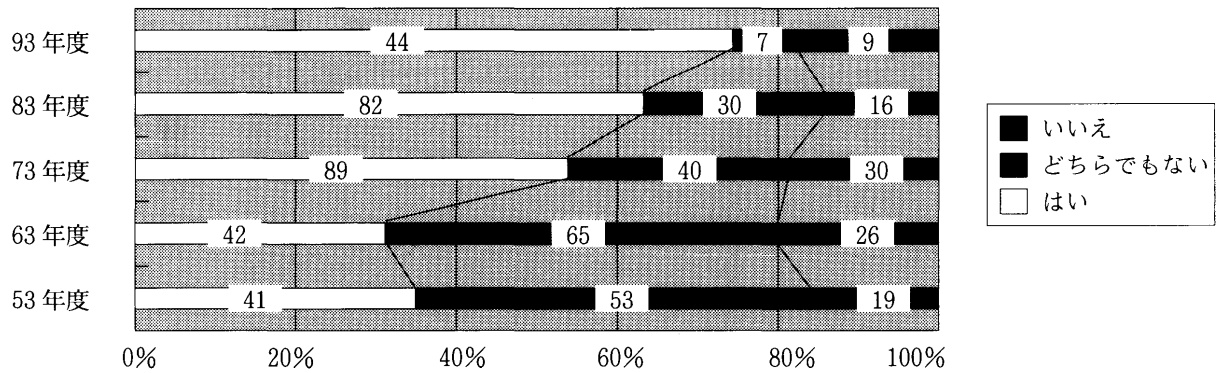
2. わたしは、自分のことをいつでも自分勝手なことばかり考える何て自分本位の人間なんだろうと思うことがよくあります。(n=593)



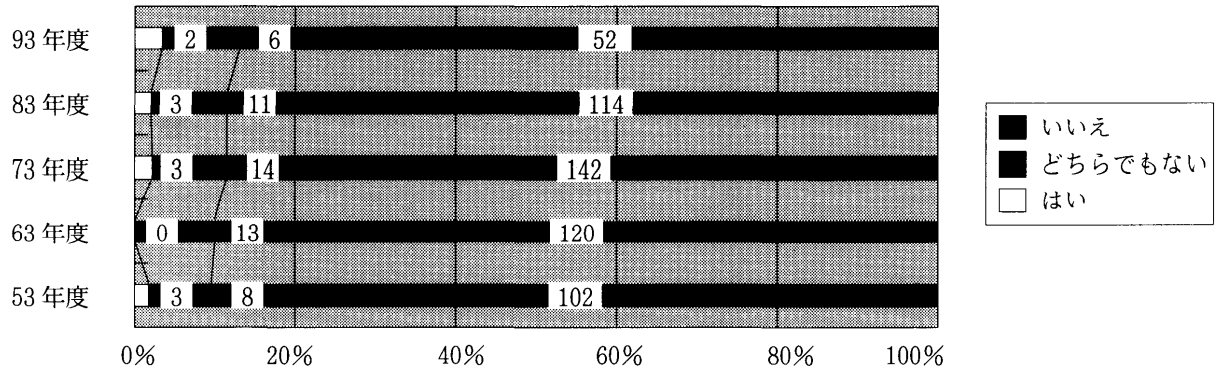
3. わたしは、自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命があるという気がしています。(n=593)



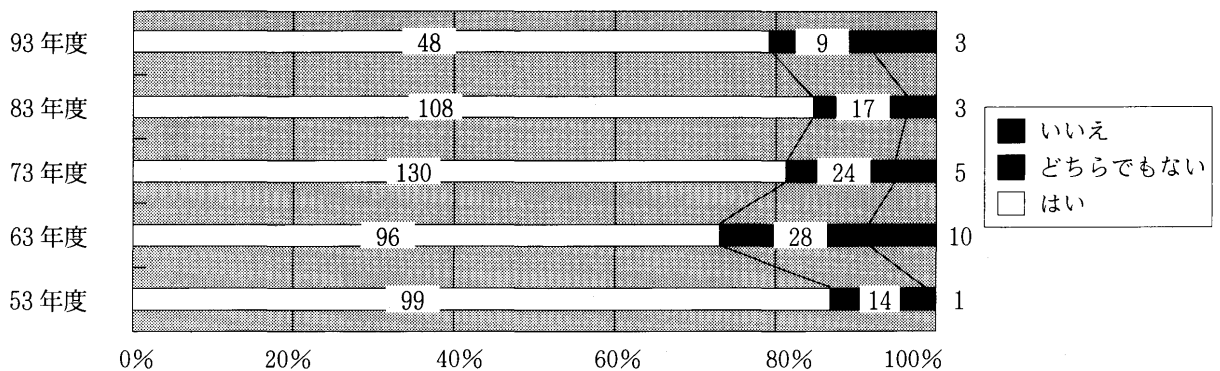
4. わたしは、何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくてはと考えています。(n=593)



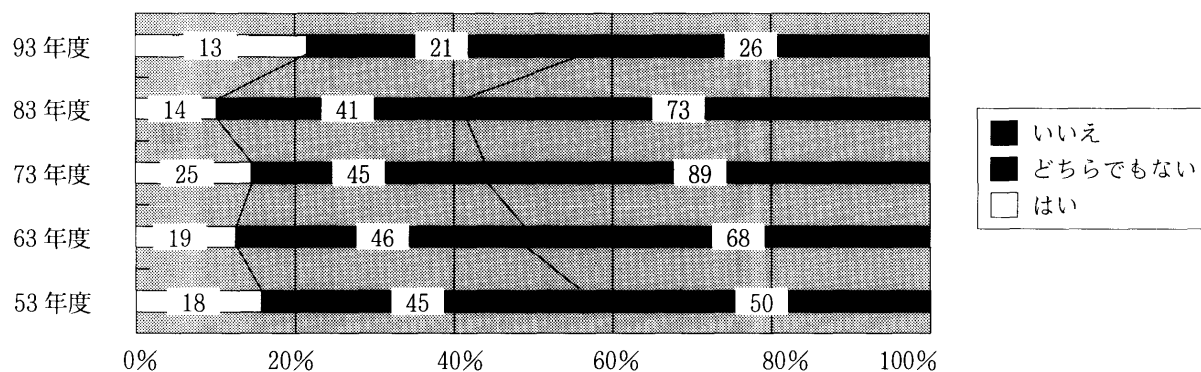
5. わたしは、人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局は無駄だという気がします。(n=593)



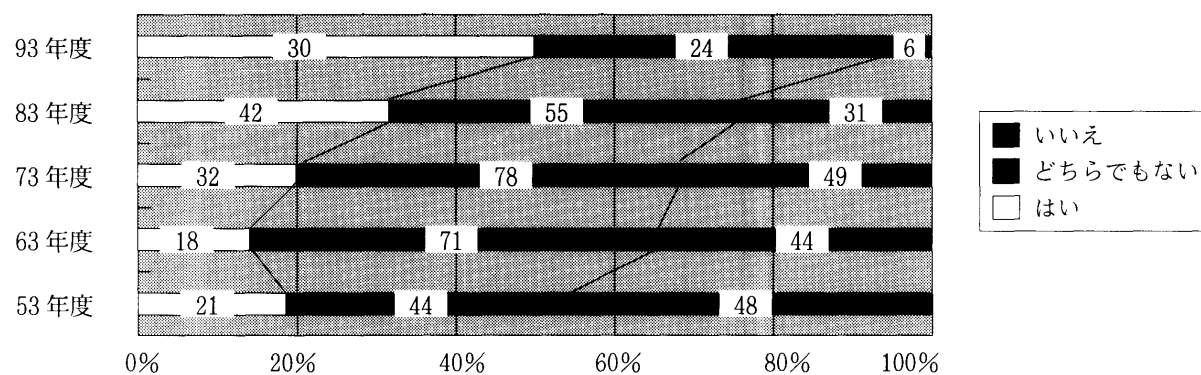
6. わたしは、細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、よい機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だと思っています。(n=595)



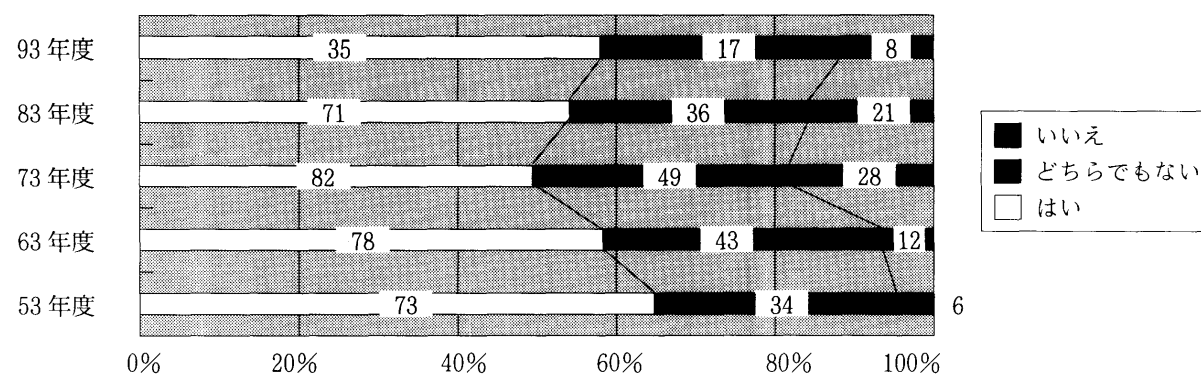
7. わたしは、人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしない利己的な存在だという気がします。
(n=593)



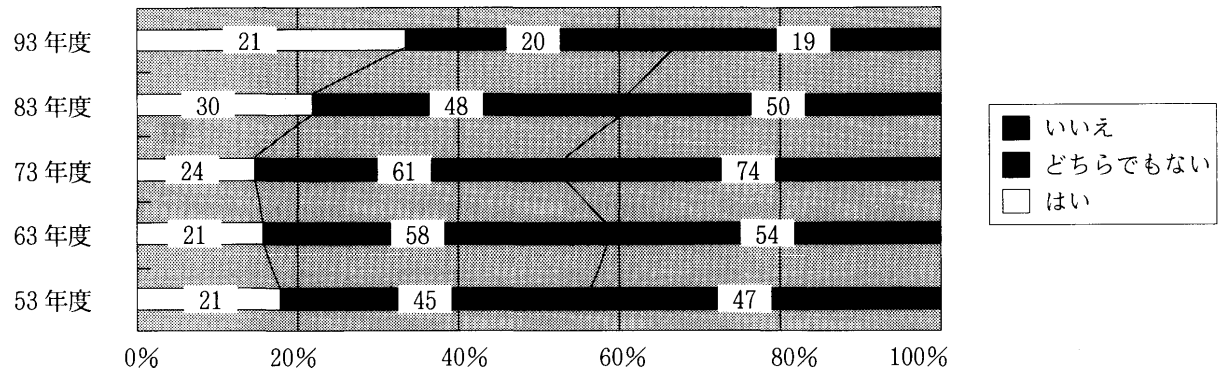
8. わたしは、自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろうという気がしています。(n=593)



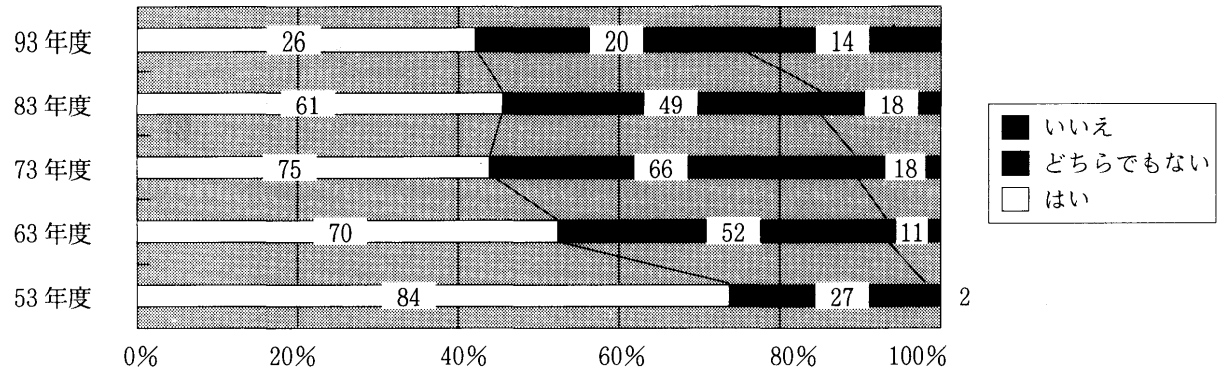
9. わたしは、その時その時で自分なりに精一杯の努力をしていけば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いないと考えています。(n=593)



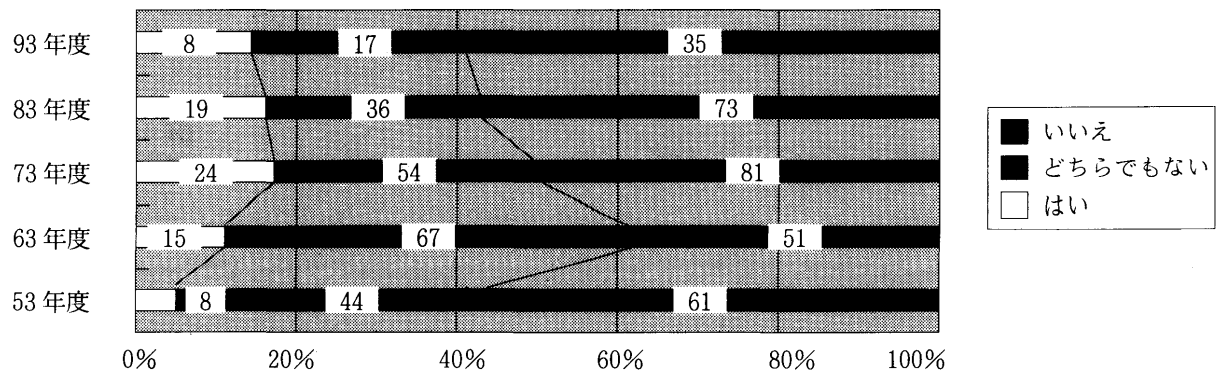
10. わたしは、頑張って節約して財産ができたとしても、結局は元気な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えないで、楽しめる時に精一杯楽しんでおかななくては損だと思います。(n=593)



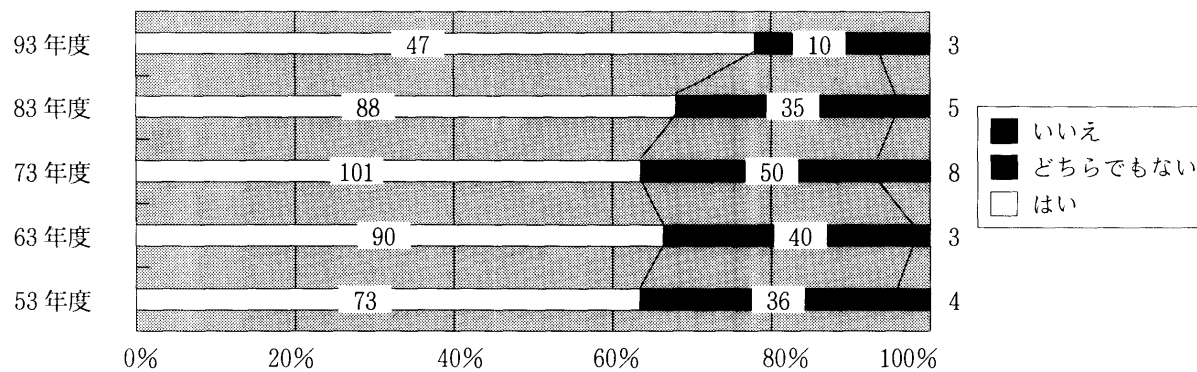
11. わたしは、この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。(n=593)



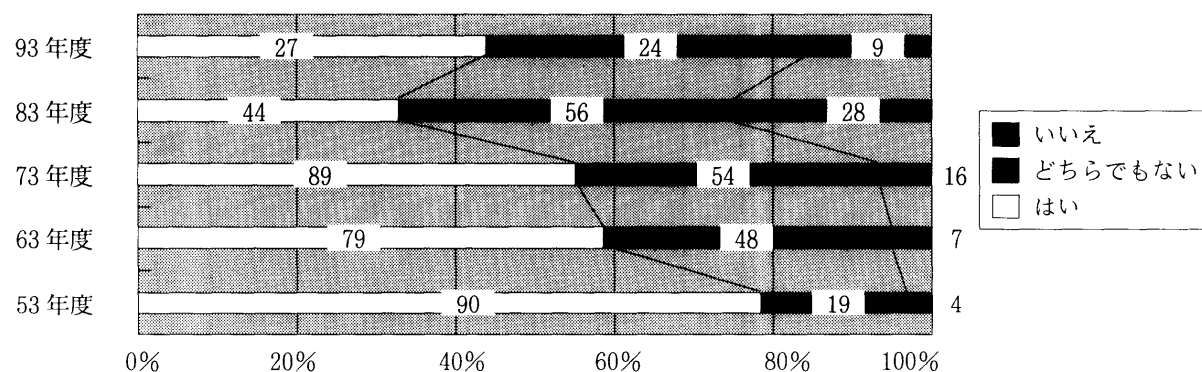
12. わたしは、自分の意見に反対されたり、自分の考えと違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。(n=593)



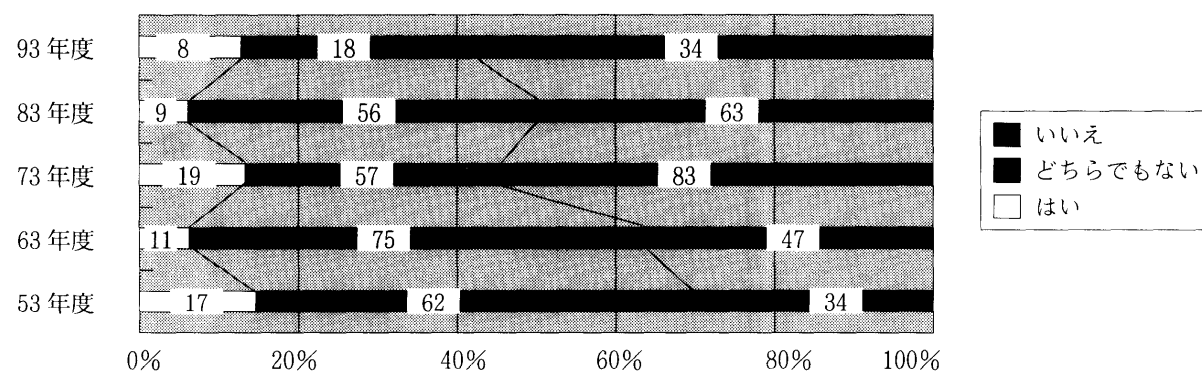
13. わたしは、今までと違う新しいことにチャレンジし、自分の可能性を広げていきたいと考えています。(n=593)



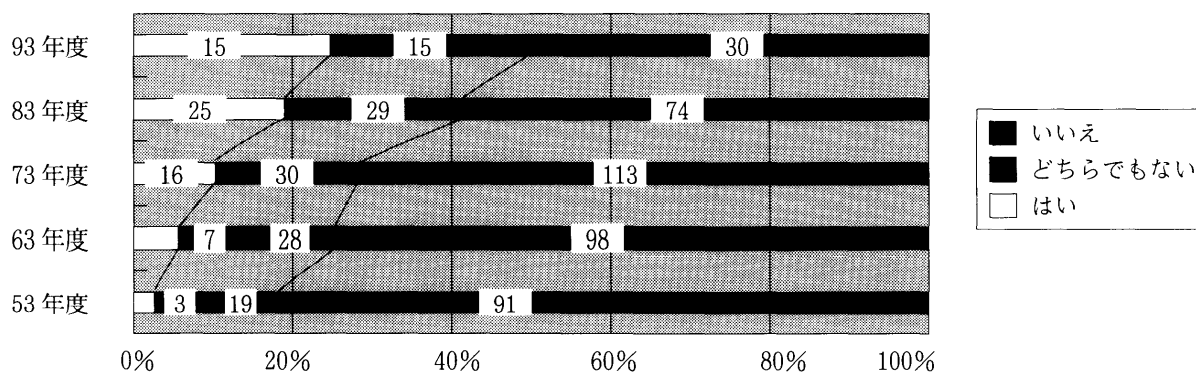
14. わたしは、世間的な意味で成功するかどうかより、その時その時で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だと考えています。(n=594)



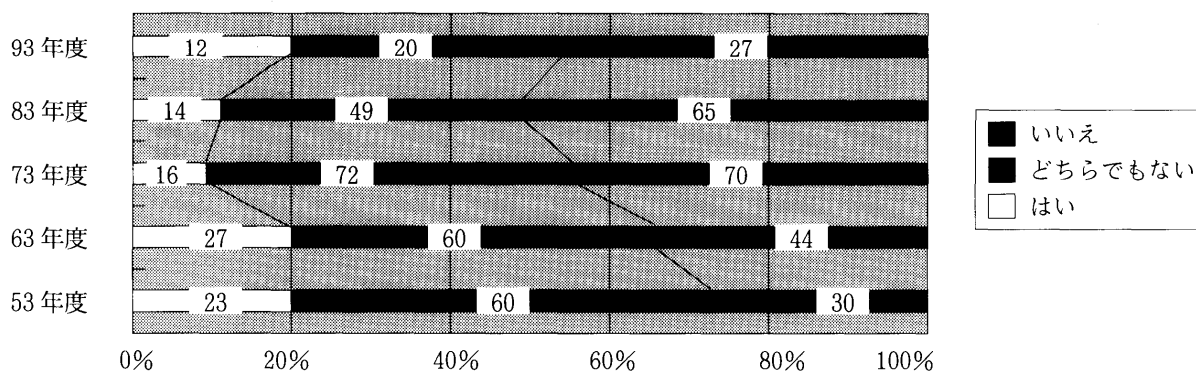
15. わたしは、世間の人はすぐにキレイゴトを言いたがるけれど、結局はだれもお金と快楽と名誉を求めているだけだと思います。(n=593)



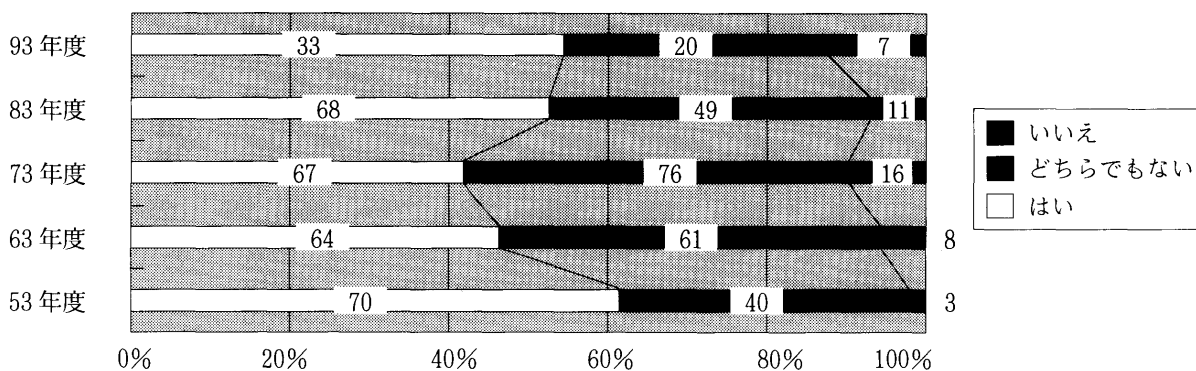
16. わたしは、毎日の生活がどうしてこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろうと嫌になることがあります。(n=593)



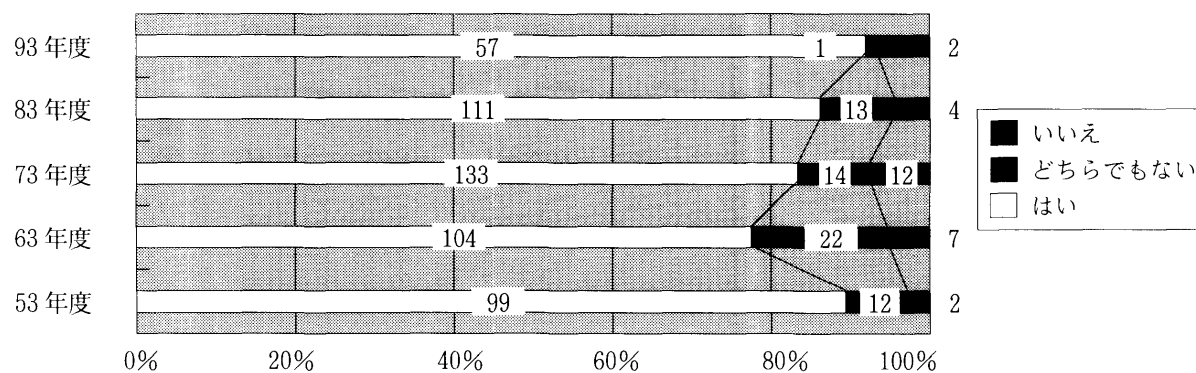
17. わたしは、自分自身のところは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないものだという気がします。(n=589)



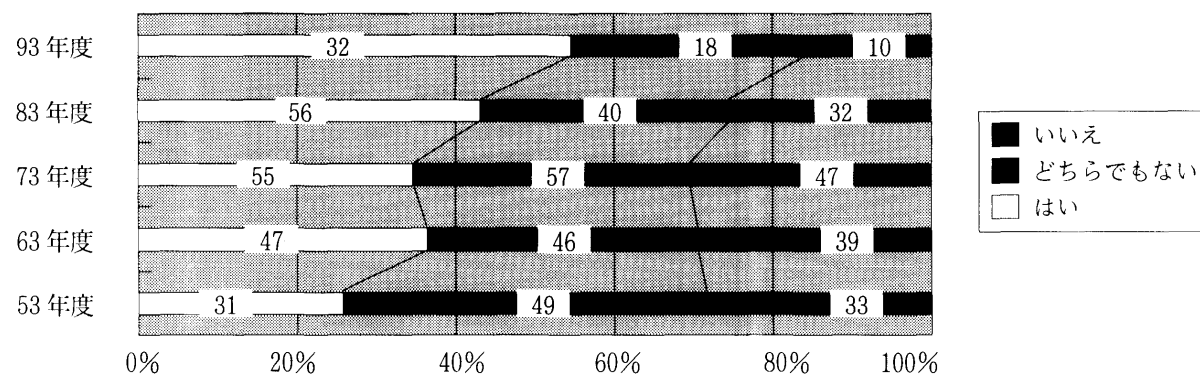
18. わたしは、どんなにささやかなことでもいいから、ほかの人に役立つことを見つけ、責任をもってやっていかなくてはと考えています。(n=593)



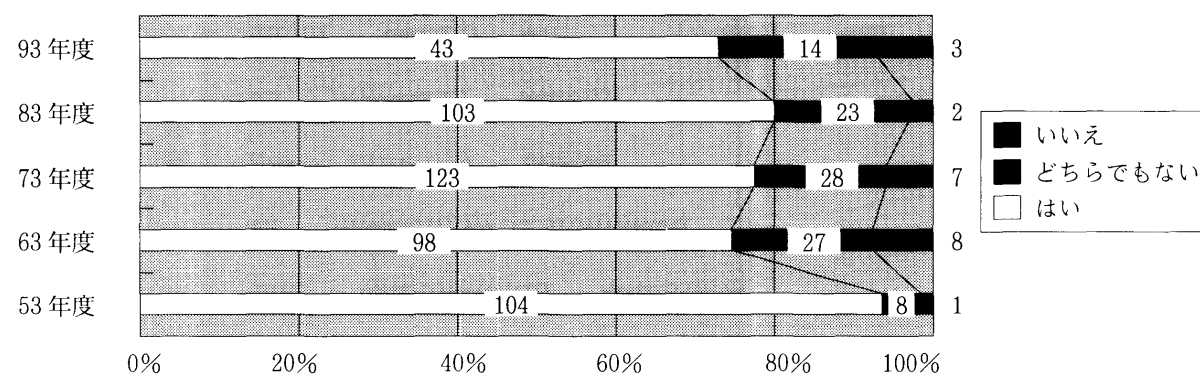
19. わたしは、どんなに小さいことでもいいから、これは自分がやったことだと言えるものを持ちたいと思っています。(n=593)



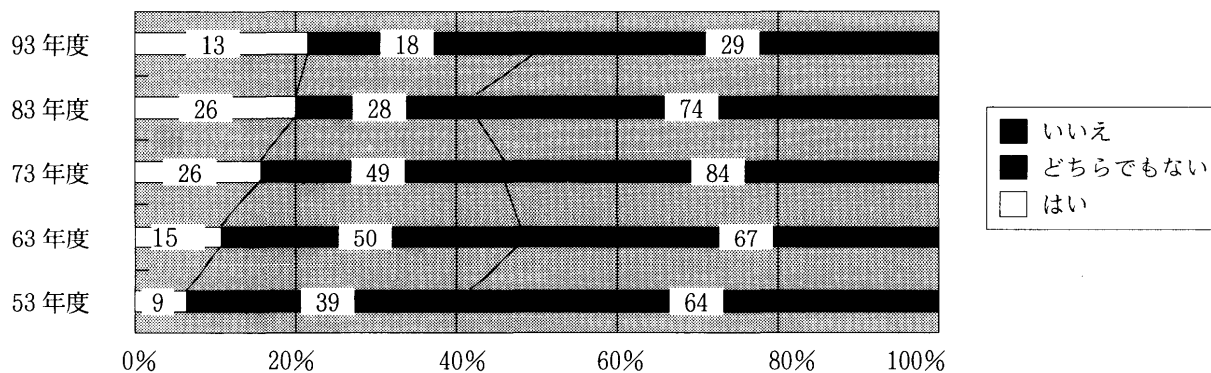
20. わたしは、人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きを見たり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議はないと思っています。(n=592)



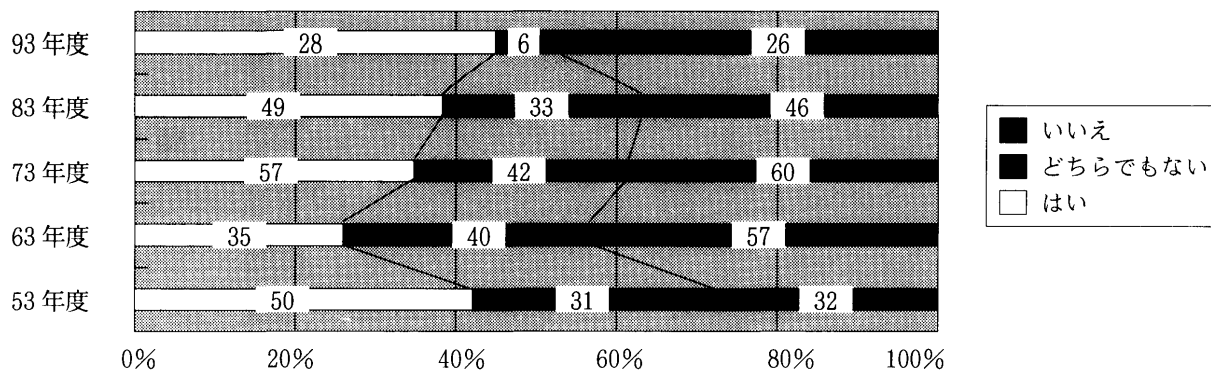
21. わたしは、周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだと思うことがあります。(n=592)



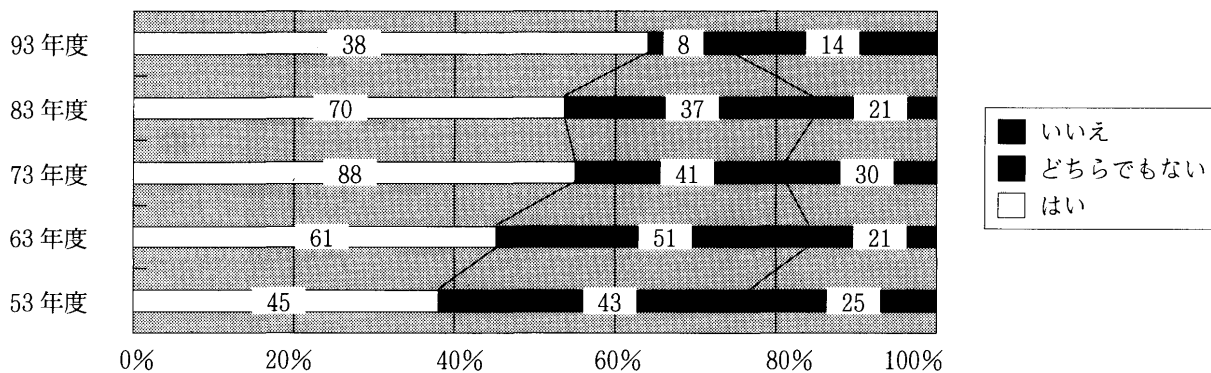
22. わたしは、できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたいと思っています。(n=591)



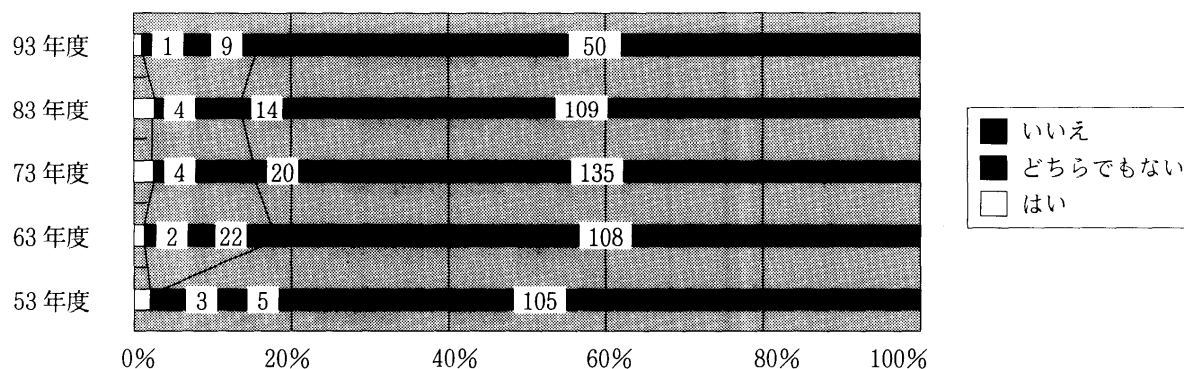
23. わたしは、この人をお手本に生きていきたいと思う人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人もよい）を持っています。(n=592)



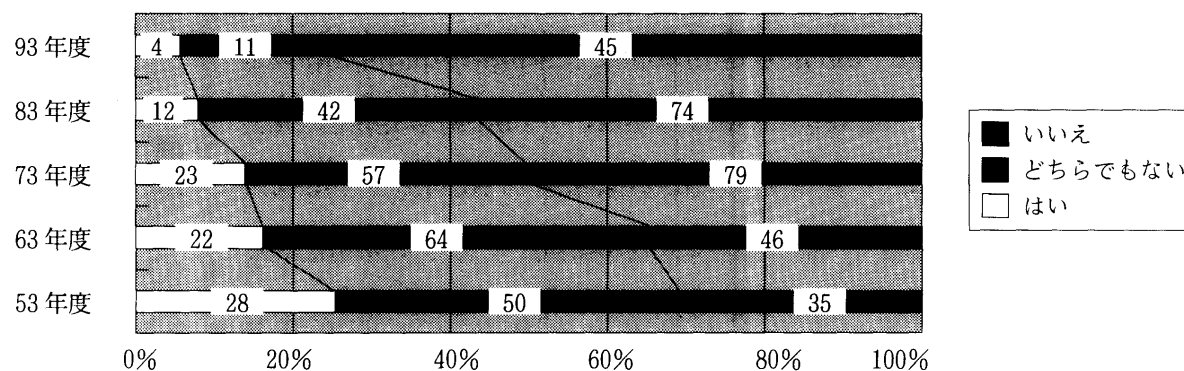
24. わたしは、あまり無理をしないで、自分自身と上手につき合いながらマイペースで少しずつやっていくしかないと考えています。(n=593)



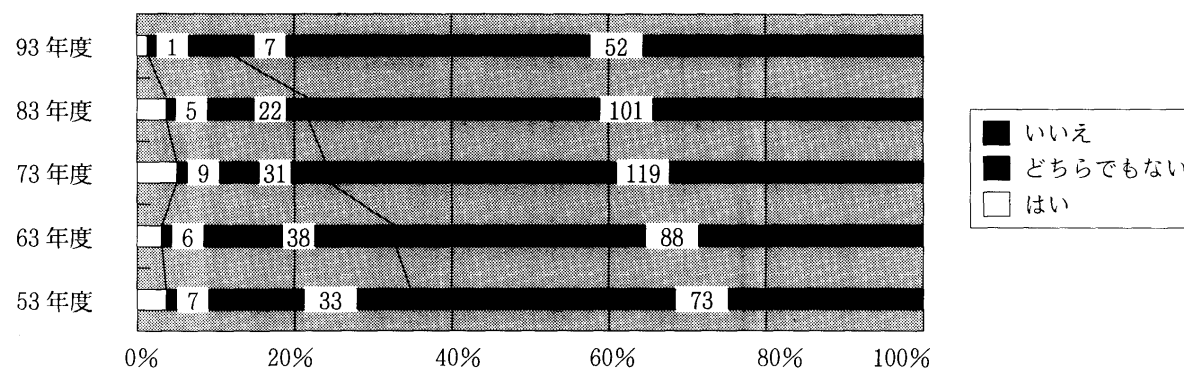
25. わたしは、自分が存在し生きていることには全く何の目的も意味もないという気がしています。(n=591)



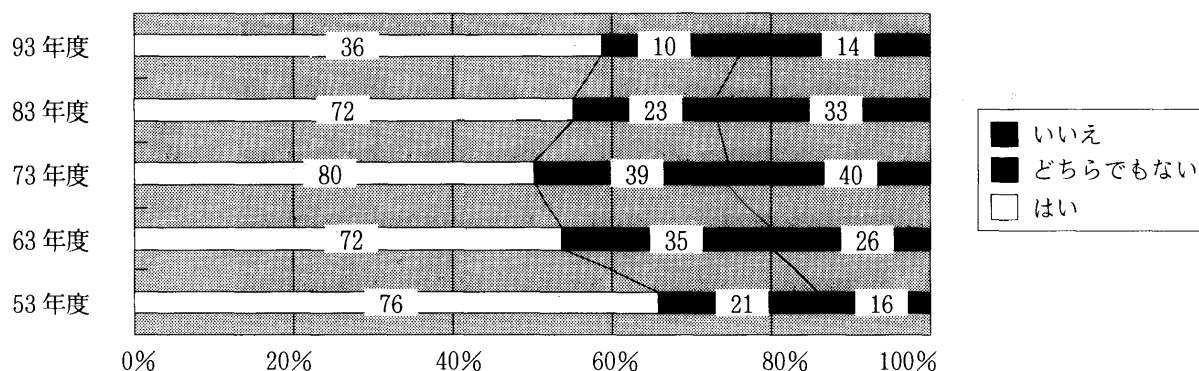
26. わたしは、大自然の力（あるいは神様・仏様など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばいい、と思っています。(n=592)



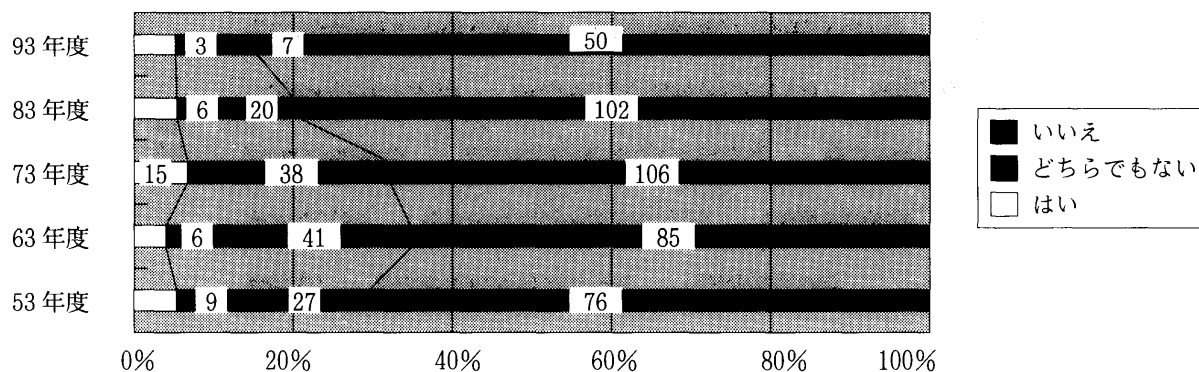
27. わたしは、結局は「自分」などというものは無い、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだという気がしています。(n=592)



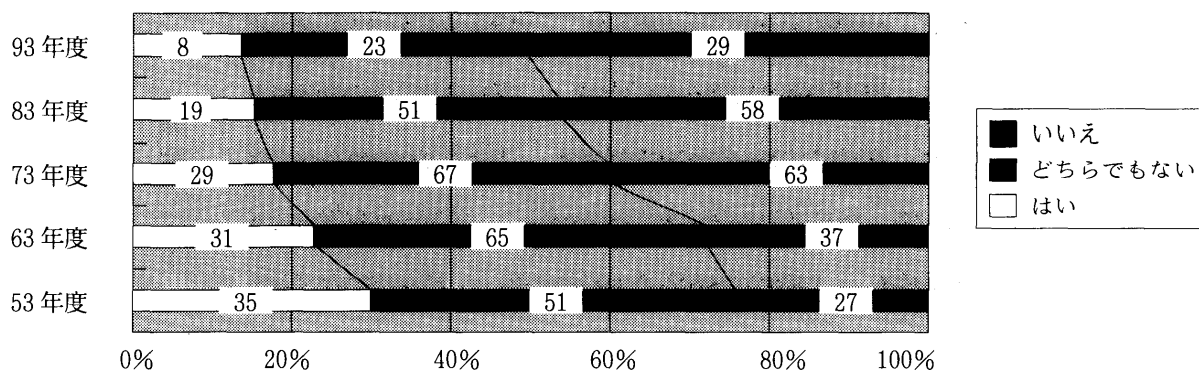
28. わたしは、自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人も、また日本の人も他の国の人もよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。（n=593）



29. わたしは、自分がどんなに頑張って努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろうという気がします。（n=591）



30. わたしは、自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。（n=593）



あ と が き

ここに報告した調査研究では、梶田叡一が企画と総合調整を担当し、溝上慎一が調査実施を担当した。結果の分析と執筆にあたっては、「京都大学で受けた教育」（第2部）を溝上慎一が、「京都大学卒業者の人生観」（第3部）を浅田匡が担当した。

従来の卒業生調査は、在学中の様々な事から（例えば、授業、クラブ、アルバイト、生活など）をオールラウンドに尋ねる形式のものが多かった。しかし、今回の調査は教育のなかでの授業の側面と生き方における人生観に主な焦点をあてている。それは、我々が大学教育のあり方を考えていくときに問題としていかなばならない最も具体的な要因ともいえるからである。それ故に、例えば授業にはあまり出なかったが大学4年間は充実していた、というような人たちにとっては、こんな調査で何がわかるのか、という疑問を抱かれたに違いない。事実そういう感想の記述も少なからず見られたし、なかには厳しい叱責もなかったわけではない。

言うまでもなく、大学は授業を受け、勉強をするだけの場ではない。我々も、それが大学生生活のすべてであるとは考えていない。実際に、大学生生活が満足すべきものであったとする者が過去を振り返って何が良かったかをあげる問いにおいては、授業よりも大学生生活そのもの、あるいはクラブや友人を通して得たキャンパスライフとでもいうべきものがあげられた。しかし、それに対して、不満足だったとする者が3の理由をあげる問いにおいては、そのほとんどが授業あるいはカリキュラムなど大学のもつ教育の意味を問うものであったのである。我々は、この意味を非常に重く受けとめている。

なお本研究は、文部省科学研究費基盤研究 (A) (1) (課題番号07301035、「大学教授法の総合的研究」代表：梶田叡一) の助成を受けておこなわれたものである。

最後ではあるが、このような調査結果を報告できるのは、御多忙なか回答を寄せて頂いた多くの卒業生諸氏のおかげである。深く感謝の意を表したい。

1997年1月31日

溝 上 慎 一

添付資料
(調査票)

京都大学卒業生調査 アンケート

この度はお忙しい中、調査に御協力頂きまして、誠に有り難うございます。

京都大学における教育や授業を少しでもより良きものにしていく為、皆様卒業生の率直な御意見をたまわりたいと存じます。

なお、調査の結果は統計的に処理されますので、個人のプライバシーがおかされることは決してありません。どうぞ安心して御回答の程よろしくお願い致します。

京都大学高等教育教授システム開発センター

アンケートに入る前に、あなたのことについて、いくつかご記入下さい。

1. 性別 男・女
2. 年令 () 歳 (1996年4月1日現在で)
3. 在籍時の所属学部・学科 () 学部 () 学科
4. 入学年次 (19) 年 卒業年次 (19) 年
5. 今の身分は(○をして下さい)
() 社会人 () 学生 () 専業主婦 () その他()
6. 社会人の人にお尋ねします。その業種は次のどれですか？あてはまるもの全てに○をして下さい。
() 農・林・水産業 () 個人経営・自営業(商店主・工場経営など)
() 管理職の会社員・団体職員(課長以上) () 会社員・団体職員(研究開発等の研究職)
() 会社員・団体職員(営業等の職) () 会社員・団体職員(事務職)
() 上記以外の会社員・団体職員(販売員・運転手・工場勤務など)
() 専門職(医師・弁護士・公認会計士など) () 教師(小・中・高校・専門学校など)
() 国家公務員 () 大学・短大教員
() 地方公務員 () その他()
7. 学生の人にお尋ねします。その身分は次のどれですか？
() 大学院生 () 大学生 () 専門学校生 () その他()
8. 社会人・学生の人にお尋ねします。あなたの今の業種・身分は、卒業学部・学科等とどのくらい関連のあるものですか？(○をつけて下さい)
() 非常に関連が深い () まあまあ関連がある () 何ともいえない
() ほとんど関連がない () 全く関連がない

9. あなたの大学時代の生活はどういうものだったでしょうか。次にあげる事柄のそれぞれについて、最もあてはまる番号を（ ）に記入して下さい。

- | | | |
|----------------|---------------|-------------|
| (5) 非常にあてはまる | (4) まあまああてはまる | (3) どちらでもない |
| (2) あまりあてはまらない | (1) 全くあてはまらない | |

- () a. 体育系のクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した
- () b. 文科系のクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した
- () c. 社会的・政治的なクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した
- () d. 宗教的なクラブ・サークル等の活動に積極的に参加した
- () e. 自分の趣味の活動にうちこんだ
- () f. 自分の専門の勉強をよくした
- () g. 先生と親しくつきあった
- () h. 授業やゼミにはよく出席した
- () i. コンパや酒を飲みにいく機会がよくあった
- () j. 遊んでばかりいた
- () k. 将来つこうとする職業を常に考えていた
- () l. アルバイトばかりしていた
- () m. 大学の研究室によくいていた
- () n. 大学の図書館・図書室によくいていた

10. あなたは、卒業した学部・学科にどのくらい満足していますか。(1つ○をつけて下さい)

- () 非常に満足 () まあまあ満足 () 何ともいえない
- () あまり満足していない () 全く満足していない

どういう点で満足あるいは不満足ですか？ ごく簡単にお書き下さい。

《京都大学での授業を振り返って》

1. 大学4年間を振り返って、全体的に授業（講義・演習など）はどのくらい満足できるものでしたか。
- ☐ 非常に満足 ☐ まあまあ満足 ☐ 何ともいえない
☐ あまり満足していない ☐ 全く満足していない
2. 一般教養課程を振り返って、全体的に授業（講義・演習など）はどのくらい満足できるものでしたか。
- ☐ 非常に満足 ☐ まあまあ満足 ☐ 何ともいえない
☐ あまり満足していない ☐ 全く満足していない
3. 専門課程を振り返って、全体的に授業（講義・演習など）はどのくらい満足できるものでしたか。
- ☐ 非常に満足 ☐ まあまあ満足 ☐ 何ともいえない
☐ あまり満足していない ☐ 全く満足していない

～もう少し細かく尋ねます～

4. 次のような授業を振り返って、全体的にどのくらい満足できるものでしたか。最もあてはまる番号を
☐ に記入して下さい。

<input type="checkbox"/> (5) 非常に満足	<input type="checkbox"/> (4) まあまあ満足	<input type="checkbox"/> (3) 何ともいえない
<input type="checkbox"/> (2) あまり満足していない	<input type="checkbox"/> (1) 全く満足していない	

- ☐ a. 一般教養課程での英語の授業
☐ b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
☐ c. 一般教養科目（人文・社会系）
☐ d. 一般教養科目（自然系）
☐ e. 専門科目の講義
☐ f. 専門科目の演習
☐ g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

5. 次のような授業を振り返って、今でも良かったと思えるほど印象に残っている授業はありますか

<input type="checkbox"/> (4) たくさんある	<input type="checkbox"/> (3) いくつかある	<input type="checkbox"/> (2) 1, 2 個ある	<input type="checkbox"/> (1) 全くない
-------------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------------	-----------------------------------

- ☐ a. 一般教養課程での英語の授業
☐ b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
☐ c. 一般教養科目（人文・社会系）
☐ d. 一般教養科目（自然系）
☐ e. 専門科目の講義
☐ f. 専門科目の演習
☐ g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

6. 次のような授業を振り返って、あなたは全体的にどのくらい出席しましたか。

- | | |
|----------------|---------------|
| (4) よく出席した | (3) まあまあ出席した |
| (2) あまり出席しなかった | (1) 全く出席しなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目 (人文・社会系)
- () d. 一般教養科目 (自然系)
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験 (履修のした方のみ)

7. 次のような授業を振り返って、あなたは全体的にどのくらい真剣に受けていましたか。

- | | |
|-----------------|----------------|
| (4) 非常に真剣だった | (3) まあまあ真剣だった |
| (2) けっこういい加減だった | (1) 非常にいい加減だった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目 (人文・社会系)
- () d. 一般教養科目 (自然系)
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験 (履修のした方のみ)

8. 次のような授業を振り返って、あなたの今の仕事・業種・身分に必要な知識・技能にとって、どの程度プラスになっていますか。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| (4) 非常にプラスになっている | (3) まあまあプラスになっている |
| (2) ほとんどプラスになっていない | (1) 全くプラスになっていない |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目 (人文・社会系)
- () d. 一般教養科目 (自然系)
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験 (履修のした方のみ)

9. 次のような授業を振り返って、自分の興味や知的関心にあう授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目(人文・社会系)
- () d. 一般教養科目(自然系)
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験(履修のした方のみ)

10. 次のような授業を振り返って、自分の将来に役立つと思える授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目(人文・社会系)
- () d. 一般教養科目(自然系)
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験(履修のした方のみ)

11. 次のような授業を振り返って、授業を受けた結果、自分のあり方を振り返ったり考えるきっかけになったりした授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目(人文・社会系)
- () d. 一般教養科目(自然系)
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験(履修のした方のみ)

12. 次のような授業を振り返って、学問や研究の世界のおもしろさに触れたと思えるような授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目（人文・社会系）
- () d. 一般教養科目（自然系）
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

13. 次のような授業を振り返って、教官の熱意が伝わってくるような授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目（人文・社会系）
- () d. 一般教養科目（自然系）
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

14. 次のような授業を振り返って、教官の学問に対する態度や人柄にひかれるような授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目（人文・社会系）
- () d. 一般教養科目（自然系）
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

15. 次のような授業を振り返って、少人数できめ細かな指導のある授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目（人文・社会系）
- () d. 一般教養科目（自然系）
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

16. 次のような授業を振り返って、話し合いを大事にした授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目（人文・社会系）
- () d. 一般教養科目（自然系）
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

17. 次のような授業を振り返って、レポートにまとめることを大事にした授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
- () b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
- () c. 一般教養科目（人文・社会系）
- () d. 一般教養科目（自然系）
- () e. 専門科目の講義
- () f. 専門科目の演習
- () g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

18. 次のような授業を振り返って、ビデオやスライド、図表その他の資料など理解を助ける補助的手段の充実した授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
() b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
() c. 一般教養科目（人文・社会系）
() d. 一般教養科目（自然系）
() e. 専門科目の講義
() f. 専門科目の演習
() g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

19. 次のような授業を振り返って、教育者としての自覚をもってほしいと思われる教官の授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
() b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
() c. 一般教養科目（人文・社会系）
() d. 一般教養科目（自然系）
() e. 専門科目の講義
() f. 専門科目の演習
() g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

20. 次のような授業を振り返って、もう少し工夫して講義をしてほしいと思う授業はありましたか。

- | | |
|------------------|--------------|
| (4) すべての授業がそうだった | (3) いくつかあった |
| (2) 少なくとも1個はあった | (1) まったくなかった |

- () a. 一般教養課程での英語の授業
() b. 一般教養課程での英語以外の外国語の授業
() c. 一般教養科目（人文・社会系）
() d. 一般教養科目（自然系）
() e. 専門科目の講義
() f. 専門科目の演習
() g. 専門科目の実験（履修のした方のみ）

次の30項目について、もっともあてはまる箇所に○をつけて下さい。

	はい い え
1. わたしは、いろいろ不満なところや反省すべきところがないわけではないが、基本的には今のままの自分でいい、と思っています。	3・2・1
2. わたしは、自分のことを、いつでも自分勝手なことばかり考える何て自己本位の人間なんだろう、と思うことがよくあります。	3・2・1
3. わたしは、自分自身の人生において、どうしてもやり遂げなくてはならない自分なりの仕事なり使命がある、という気がしています。	3・2・1
4. わたしは、何とかして自分の大きな可能性を見つけ、その実現に向かって努力をし、大きく花を咲かせなくては、と考えています。	3・2・1
5. わたしは、人間はだれもいつかは死んでしまうのだから、頑張って努力してみても結局は無駄だ、という気がしています。	3・2・1
6. わたしは、細かいことでは今までいろいろあったにせよ、基本的には、良い機会や条件に恵まれてきた幸せな人間だ、と思っています。	3・2・1
7. わたしは、人間はだれも、結局のところは自分のことしか考えようとしない利己的な存在だ、という気がしています。	3・2・1
8. わたしは、自分自身の将来には大きな可能性が潜んでおり、そのうちに思いがけないチャンスに恵まれて、それが現実のものになるだろう、という気がしています。	3・2・1
9. わたしは、その時その時で自分なりに精一杯の努力をしていけば、最後には必ず大きな成果が得られるに違いない、と考えています。	3・2・1
10. わたしは、頑張って節約して財産ができたとしても、結局は元気な間しかそれを使って楽しめないのだから、あまり先のことばかり考えないで、楽しめる時に精一杯楽しんでおかななくては損だ、と思います。	3・2・1
11. わたしは、この世に一人の人間として生まれてきたことを有難く思い、感謝の気持ちに満たされることがあります。	3・2・1
12. わたしは、自分の意見に反対されたり、自分の考えと違う主張をぶつけられたりすると、我慢できなくて、感情的になってしまいます。	3・2・1
13. わたしは、今までと違う新しいことに、いつでもチャレンジし、自分の可能性を広げていきたい、と考えています。	3・2・1
14. わたしは、世間的な意味で成功するかどうかより、その時その場で精一杯頑張ったかどうかの方がずっと大事だ、と考えています。	3・2・1
15. わたしは、世間の人はすぐにキレイゴトを言いたがるけど、結局はだれもが、お金と快楽と名誉を求めているだけだ、と思います。	3・2・1
16. わたしは、毎日の生活が、どうしてこんなにかわりばえも新鮮さもない灰色のつまらないものなんだろう、と嫌になることがあります。	3・2・1

	は い い え ど ち が よ い
17. わたしは、自分自身のことは考えに入れないで計画したり行動したりしないと、結局はうまくいかないものだ、という気がします。	3・2・1
18. わたしは、どんなにささやかなことでもいいから、他の人に役立つことを見つけ、責任をもってやっていかなくては、と考えています。	3・2・1
19. わたしは、どんなに小さなことでもいいから、これは自分がやったことだ、と言えるものを持ちたい、と思っています。	3・2・1
20. わたしは、人生は偶然の積み重ねであって、努力した善人が泣きをみたり、自分勝手な悪人が幸せになっても不思議ではない、と思っています。	3・2・1
21. わたしは、周囲の人たちに支えていただいているからこそこんなふうに生活していけるのだ、と思うことがあります。	3・2・1
22. わたしは、できることなら、義理や体面など一切考えないで、自分が木や石になったつもりでやっていきたい、と思っています。	3・2・1
23. わたしは、この人をお手本に生きていきたいと思う人（今の人も昔の人でも、また日本人の人でも他の国の人でもよい）を持っています。	3・2・1
24. わたしは、あまり無理をしないで、自分自身と上手につき合いながら、マイペースで少しずつやっていくしかない、と考えています。	3・2・1
25. わたしは、自分が存在し生きていることには、全く何の目的も意味もない、という気がしています。	3・2・1
26. わたしは、大自然の力（あるいは神様・仏様など）によって支えられ生かされているのだから、つまらぬことで一喜一憂しないで、安心しておまかせしておけばよい、と思っています。	3・2・1
27. わたしは、結局は「自分」などというものはない、幻影のような「自分」にこだわるのはくだらないことだ、という気がしています。	3・2・1
28. わたしは、自分にはとても真似できないが、人間として非常に優れたすばらしい人（今の人も昔の人でも、また日本人の人でも他の国の人でもよい）を知っており、尊敬の気持ちを持っています。	3・2・1
29. わたしは、自分がどんなに頑張っても努力をしていったとしても、結局のところ結果にそう大きな違いはないだろう、という気がしています。	3・2・1
30. わたしは、自分自身に遅かれはやかれ訪れる「死」に対して、心の準備が一応できており、そう恐ろしいとは思っていません。	3・2・1

目 次

はじめに

第1部 調査の目的・方法・対象

問題と目的	1
方法	
■ 調査対象者	3
■ 発送および回収について	3
回答者の属性	
■ 性別	4
■ 社会的身分	6
■ 社会人業種	7
■ 現在の業種・身分と卒業学部・学科等との関連	14

第2部 京都大学卒業者は在学中に受けた教育をどう評価しているか

学部・学科への満足	17
■ 学部・学科への満足度	17
■ 学部・学科への満足・不満足の原因	19
授業満足度	
■ 大学4年間（6年間）	21
■ 一般教養課程	23
■ 専門課程	25
■ 英語・英語以外・人文社会・自然	27
■ 専門講義・専門演習・専門実験	32
大学4年間の授業満足度と一般教養課程・専門課程との関連	36
大学4年間の授業満足度と大学生活との関連	40
一般教養課程・専門課程の授業構造	
【授業行動】	58
【授業の活動形態】	81
【学生からみた教官の個人要因】	120
【学生への伝達的影響】	159
【まとめ】	204
全体的まとめ	206
引用文献	208

第3部 京都大学卒業者の人生観をめぐって

生き方意識のあり方	209
■ 学部別にみる生き方意識のあり方	210
■ 卒業年度別にみる生き方意識のあり方	213
生き方意識の内部構造	217
■ 学部別にみる生き方意識のちがい	219
■ 卒業年度別にみる生き方意識のちがい	220
大学教育への満足度と生き方意識	222
■ 卒業した学部・学科に対する満足度	222
■ 大学4年間を振り返っての全体的に授業（講義・演習など）に対する満足度	223
■ 一般教養課程の授業（講義・演習など）に対する満足度	225
■ 専門課程の授業（講義・演習など）に対する満足度	226
あとがき	259
添付資料（調査票）	261

最後に

京都大学の今後のあるべき姿について、また日本の大学教育の今後のあるべき姿について、お考えになっていることがあればお書き下さい。

お忙しい中御協力どうも有難うございました。

執筆者紹介

梶 田 勲 一 (京都大学教授／高等教育教授システム開発センター)
溝 上 慎 一 (京都大学助手／高等教育教授システム開発センター)
浅 田 匡 (神戸大学助教授／発達科学部人間科学研究センター)

平成9年3月31日 印刷

非売品

平成9年3月31日 発行

発 行 京都大学高等教育教授システム開発センター

京都市左京区吉田本町(〒606-01)

TEL 075-753-3087

FAX 075-751-7075

印 刷 誠 友 社

京都市右京区太秦小手角町20-5

TEL 075-872-3977



Kyoto University's Library of Higher Education Research
RESEARCH CENTER FOR HIGHER EDUCATION